

記憶の壊れた刃

なよ竹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目を覚ましたら真っ白な常闇の砂漠。宿なし、職なし、そして記憶なしの三拍子揃った少女の虚は、なんとなくといった理由で、破面にジョブチェンジして弱肉強食の世界を生きていく。襲い掛かってくる相手がいようと、優しくしてくれる相手がいようと、なんとなく。記憶が戻る、その日までー。

目次

ウルキオラ・オフアー	1
破面に出世です	5
逃走かつ闘争	11
暴走紳士と親切な九番さん	20
老人と同世代って思うと複雑だよ	32
社畜への道	45
殺す理由「ついカツとなってやった」	63
ピカピカの新十刃	78
断れない性格なので	90
動き出す関係	103
止めどなく	116
嘘と舌	130
少しだけ頑張ろうと思います	143
なんでもするから！	156
願いはエクスプロージョン	171
トランスフォームと主従たち	186
閉幕を下ろすのは	203
血心ラプソディ	219
それでも話は独歩する	230
私の戦闘能力は53万を跳び越した	242
思考の迷路	255
LIKE or LOVE	268
思惑なんて黒いもの	284
重さと価値は比例しないらしいよ	297

インベーダーゲーム	312
リカバリーとデストロイ、あるいはただの暴虐	328
とりあえずやってみた	347
あなたが好きだから	363
間話 寝物語	374
間話 ハロウィン・オブ・マスク	381
アレはアレな風に見えて凄いアレなんですよ	386
軍VS神速	405
逆鱗は何処にあるか	420
霧中殺陣	438
十人十色	460
防衛ではなく殲滅ですよ	473
第七十刃の従属官	492
舞台開始の五秒前	506
紅従者のむかしばなし	525
瓦解する現実	538
あ、リバイヴなんて必要ないから	560
万雷の喝采がなくとも幕は上がる	577
真実の愛ってなに？	592
ブレイク・ハート	606
終わる者、立ち上がる者	626
愚者の従者は剣を手に	644
十番の主従	660
狂嵐の前の静けさ	672
無貌姫	687

超弩級自然災害少女

少女救出戦線

事ここに至ろうと、我々の辞書に諦めの文字はない

開戦

705

721

739

758

ウルキオラ・オフアー

気付けば、仰向けのまま夜空を見上げていた。

星はなく、黒一色の空には、唯一の光源といってもいい月が浮かんでいる。

「んにゃ？」

パチクリと目を瞬かせた『彼女』は、上半身を起こす。

白い砂漠がどこまでも広がり、夜空との対比でその穢れのない色が際立っている。それを馬鹿にするように、あちこちに大量の血の池がへばりついていた。砂の地面も吸いきれないほどだ。

『彼女』はゆっくりと立ち上がる。

あまり視点の変化がなかったのは、彼女が小柄な体躯だったからか。

周囲を見回せば、『彼女』を中心として赤いカーペットが広がっているのがわかる。なにかの残骸や肉も含まれ、乾いているはずの風がむせるような血の匂いを運んできた。

「……おなか、すいた」

鈴が転がるような声音が物寂しい世界に響き、そして消えていく。殺風景を敷きつめたような常闇の場所で、『彼女』は茫洋とした大きな眼を漂わせた。遠巻きに見ているなにか巨大な、そして不気味な仮面を付けた生物がいる。それが『彼女』の目には脅威には映らず、近寄ろうかと足をそちらに踏み出すも、仮面の生物はそれを視た途端に蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

『彼女』は首をかしげる。なぜ、逃げるのかと。

口元に違和感を感じ、それこそ春風に吹かれただけで折れそうな細腕で拭ってみる。

腕は血で汚れた。『彼女』の血ではなく、返り血か、はたまた……

喰べたからか。

「おなか、すいた……？ あれ、すいてない？」

腹をぽんぽん叩いてみても膨らんだ感触はないが、ひどい飢餓は感じなかった。

お腹が空いたと口から出たのは、おそらく言いなれていたための口癖なのだろう。自分はどれほど食いしん坊なのかと『彼女』は思い出そうとし、しかし柳眉をひそめる。

「んー？ いつこはん食べたっけ？」

記憶を辿ろうとしても行き当たらない。

『彼女』の記憶は、ついさっき目を覚ましたところから始まり、それ以前は真っ黒だ。……いや、もやがかかっているだけだ。

「虚？ …… お菓子、バラガン、おやつ？ あっ、私の名前は覚えてる！」

嬉しそうに『彼女』は笑った。ただそれだけで当たり前の情報も、『彼女』にとつては万金にも値する。

ここにこととして、『彼女』は歩き出す。赤い水溜りに足が入っても気にせず、とりあえずといったように移動を開始した。

視線の先には、塵ほどにしか見えないが、たしかに建造物が存在した。

ーどれほど、歩いただろうか。

『彼女』は途中から飽きが来始めて、けれどももう眼前に迫った巨大な城を前にしてやめようとは思えなくなった。遠近感が狂いそうなほど巨大な城だ。その無機質さに『彼女』は引いた。

「うわー、ムダにでつかーい」

見たところ、入り口はない。この周辺には仮面を被った怪生物ー知識からは虚ホロウと呼ばれるらしい生物が近寄らないようだ。デカイ凶体をして意外と繊細だと『彼女』は思った。

ぶらぶらと周辺を歩いて、そして誰かが見ていることも気づいている。

「だれ？」

「気づいていたか」

『彼女』の背後には、角が生えた仮面の名残を左頭部に被った、瘦身で真っ白な肌をした黒髪の男。

左胸に『4』の刻印がある。『彼女』はかろうじて、過去の知識からその数字は野球のトップバッターのナンバーだと思った。

「貴方はだれ？^{ホロウ} 虚？」

「いや、違う。破^{アランカル}面だ」

ひどく無機質な雰囲気の人だ。無邪気と無垢を兼ね備える『彼女』と対比してみれば、それが自然と際立つ。

「アランカルさんの家がここなのかな」

「この城の主は藍染様だ。俺の名はウルキオラ・シファー。藍染様からの命令で、お前に付いてきてもらいたい」

「断ったらどうするのか？」

「それならば仕方ない。——力づくで愛染様の御前に連れていくだけだ」

「うわーお」

本気と書いてマジな目だ。そもそも固そうな雰囲気から、嘘などは言わないだろう。

試しに逃げるそぶりをして霊圧を足に集め（呼吸をするように自然にできた）、脚を曲げる。

ウルキオラは無言のまま直立体勢で臨戦態勢に移行した。

——強いなあ、この人。

彼我の戦闘能力の差をかんがみて、逃げることはやめた。勝率は五分もない。

「でもさ、なんで私なの？ 強そうな人？ は、けっこう一杯いたよ」

「最下級大虚や中級大虚を、お前のような最上級大虚と一緒にするな。警戒することは仕方ないが、お前にも悪い話ではない。この虚^{ラス・ノーチェス}夜宮にいる多くの破^{アランカル}面でも、お前のような存在は至極稀だ」

「……頭がついていかないよ」

「俺に付いて来れば悪いことにはならない。それは保証しよう。それもお前の態度次第になるが」

石像を相手に行っているような錯覚を受けながら、『彼女』は頭を悩ませる。

「さつきから出てくる破^{アランカル}面って、なんのこと」

「虚^{ホロウ}としての種族の限界を突破した者だ」

「……この調子になると、私もそれになれってことかな」

「藍染様はそれについては仰られていなかったが、俺の予想ではそうなる。今以上の力をお前が得ることにもつながるぞ」

「別にそういうのは欲しくないんだけどなー」

とはいえ、ここを去ろうとすればアテのない旅になる。さらにウルキオラも逃がしてはくれないだろうし、現段階であまり知識もない『彼女』には領くことへのメリツトのほうが多い。

警戒している。けれどウルキオラは嘘など言っていないと分かる。その藍染某とはわからないが、この城を見た時からなにかピンとくるものがあるのだ。記憶がないのでそそられる。

それになんとなく自意識が緩い。死ぬことに対してあまり恐怖を感じないのだ。敵の本陣営で袋叩きに会うのも、それもまた運命の一つなのだと思うた。

敵としているより、とりあえず味方からのほうがいいだろう。

これからどうなるかは、まだわからないが。

「まあ、いいや。ウルキオラさんも私を連れてこないと怒られるんだよね。それに、キミの物言いからだど、私はひどい目にあうために連れていくわけじゃないんでしょ？」

「敵対者ならこの場ですぐさま残滅している」

「ふうん、そう。わかった、付いてく」

「そうか…………… 名前は？」

「え？」

「お前の名だ。知っておかなければ、これから不便になる」

ああ、と領き、『彼女』がはにかむ。

唯一、鮮明に残っていた記憶に刻まれた名を、口にした。

「ニルフィネス・リーセグリンガー！ ニルフィって呼んでね、ウルキオラさん！」

破面に出世です

ニルフィはきよろきよろと周囲を見回しながら、さっさと先に行つてしまうウルキオラの背を追っていた。いくら興味深い場所でも、こんな巨大な場所ではぐれたら大変だ。

床は黒く、壁は異様に白い。ロクな光源がないはずなのに外よりも明るいとはどういうことか。

途中で牛のような骨を被つた破^{アランカル}面が、大量の髑髏頭を引き連れて通り過ぎた。それでも霊圧を探れば一人のようで、牛頭が本体みたいなのだろう。面白そうな能力だった。今度頼めば無限分裂でもしてくれるだろうか。

「うろちよろするな。これ以上藍染様の命令の妨げをするのなら、勝手に連れていくぞ」

「だつてすごいんだよね。まったく現実味がないっていうかさ。というか、無駄に大きすぎないかな？　ここつくった人は、家が大きすぎれば逆に不便だつていうことを知らなかったのかもしれないけどさ。勿体ないねー」

「……騒々しい奴だ」

「ウルキオラさんは何か思わないの？」

「特にはな」

「ずんずんと先に進んでいくウルキオラを見て、ニルフィは小さくため息を吐くと、黒髪をなびかせながらトコトコ付いていく。

「あまりにも無感情すぎるとニルフィは思った。もしこの城があばら家のような場所でも、彼は不満一つ漏らさないだろう。もし破^{アランカル}面になる弊害としてウルキオラのような機械じみた性格になるのなら、ニルフィは遠慮したい。

「道を何度も曲がって上つて下つて、どれほど歩いたのだろう。ここに住人達はちゃんと地図なしで歩けるのかと心配になる。

「私たちはその藍染さんのトコに向かつてるんでしょ？」

「ああ、そうだ」

「どういう人なのかな」

ウルキオラは表情を変えずに口だけを別の生き物のように動かす。

「この虚夜宮の頂点であり、さらに死神でもある方だ」

「死神……？ なにそれ」

「そこから説明が必要か」

馬鹿にされたような気がして、ニルフィはむっとしながらウルキオラに詰め寄る。ウルキオラは鬱陶しそうにニルフィの顔を掴んで引きはがした。

「虚を狩ることを前提とした存在だ」

「え、でもそれって」

「もちろん、俺たちの敵になる。だが藍染様は違う。今は反旗を翻し、近々死神たちとは大規模な戦いを起こすつもりだ」

「それって……二股してた悪女役みたいだね」

「例えは分らんが、お前の語彙力が少ないことだけは理解できた」

いつの間にか足は止まっていた。ニルフィの目の前にある扉が、目的地であることを主張している。

一拍置き、ウルキオラが足を踏み出した。彼の白い死覇装のすそをニルフィが握った。

「なんだ」

「一応聞いておくけど、その藍染って人、強いのか？ えっと、たとえばこの人たちを総動員して立ち向かわせてみたりとかしたら」

ウルキオラは躊躇なく答える。

「藍染様が勝つだろう」

絶対的な自信に裏付けされた言葉に、ニルフィは反論しなかった。自分よりも先に藍染と出会っている人物の言葉に間違いはないと悟ったからだ。

ウルキオラがニルフィの目をのぞき込む。

「ニルフィネス、わかっていると思うが、お前は……」

「ニルフィ」

「……なんだと？」

「私のことはニルフィって呼んでって言ったよね。それにニルフィネスって仰々しいし長いと思わない？ 効率重視したら愛称のほうが

よっぽどいいと思うんだ。だからさ、ハイ、復唱」
「……」

深淵のようなウルキオラの黒い目は、しばらく金色の目を見返していたが、彼は目を一度閉じて言った。

「リーセグリンガー、わかっていると思うが……」

「なんか離れた!？」

「うるさい奴だな。とにかく聞け。藍染様の前では粗相がないようにしろ。あの方はそれほど甘くはない。少なくとも、いま俺と接しているような態度はやめろ」

「それってウルキオラさんが甘いってこと?？」

「なにも思わないだけだ」

話はこれで終わりとばかりにウルキオラが扉を潜る。

ふむ、と扉の前で一瞬立ち止まったニルファイも、すぐに入った。

ラス・ノーチェス
虚夜宮のトップにして、死神を敵に回した人物。

顔の想像は出来ない。ベタに強面かもしれないし、聖人のような顔して中身は獣同然かもしれない。

ヴァストローデ
最上級大虚らしいニルファイをわざわざ招いたのは、ウルキオラの物言いから部下になれるなことを言うためだろう。そんな雇い人になる人物がアレな人だったら、いくら暇つぶしが目的とはいえ、隙を見て逃げる腹積もりだ。

そんな不安なものは、すぐに吹き飛んだのだが。

室内に入った瞬間から重圧が、ニルファイの矮軀を押し潰そうと襲い掛かって来た。

発生源は三つ。

広大な室内の奥、その右側に立つ糸目の男だ。立ち方からして飄々とした雰囲気醸し出し、蛇を連想させるような気配もする。張り付いたような笑みがこれ以上ないほどに嘘くさい。

左側に立つのは褐色の肌とドレッドヘアーが特徴の男だった。目隠しをしており、凜とした佇まいが薄暗闇の中で浮かび上がる。実直かつ生真面目な性格だと思う。

そして問題が、中央の柱のはるか高みに座っている男だ。

一目で、ニルフィは彼が藍染という人物だと悟る。

うしろに髪を流して流麗な風貌なのが遠くからでもわかった。穏やかな海を連想させてくれるようだ。

特徴的なのはその双眸だ。目は人格を表すとも言われているが、この男に至ってはそれゆえに何を考えているのか分からなくさせる。光沢のない黒が凝縮したようで、見つめ続けると深みにはまってしまいそうだ。そして、そこに自分が映っているのかと疑問に思う。

得体のしれないものだけで体を構築され、運よく人の形に収まっただけにしか見えなかった。

「件の最上級大虚ヴァストローデを連れてきました」

ウルキオラの声でニルフィはハッと我に返る。どれほど藍染を見ていたのだろう。ほとんど一瞬とはいえ、あの呆けていた時間に襲われればひとまりもなかった。

あの目は変だ。ウルキオラの感情がないことに起因するわけでもなく、無価値で無感動に風景も生き物も一緒くたに観察する目だ。揺れ動くことなく、驚愕という感情すら浮かばないのではないのだろうか。

「ご苦労、ウルキオラ。——さて、よく来てくれたね、ニルフィネス・リーセグリンガー」

「あははは、どうも、改めましてニルフィネス・リーセグリンガーです。名を呼ぶときは、どうかニルフィ、と。以後お見知りおきを」

礼節なんて記憶から薄れているので、かなり緩い挨拶になってしまった。けれど藍染からはお咎めもなく、目隠し男は口元にかすかな満足げな笑みを浮かべている。セーフらしい。

まだ未定ではあるが、一応上司になる相手だ。粗相を働いて外にほっぽりだされるならまだいいが、堪忍袋の緒をぶちぎって消されそうになるのは勘弁である。いくら最上級大虚ヴァストローデでも、魂の限界を超えた破アランカル面相手にどれだけ持つかも心配だった。

「ごちらこそよろしく、ニルフィ。さて、君はもう予想しているかもしれないが、私から提案があるんだ」

涼やかな声が続く。

「君には私の陣営に入ってもらいたいんだ。もちろん、タダとは言わない」

表面上はお願いでありながら、威圧感が言葉の端々に増していった。

「これを受けてくれるのなら、君は破^{アランカル}面になれることを保証しよう。今の力さえかすむほど、新たな力を得られる。このまま時を過ごしても君はこれ以上の成長は望めない壁に当たっているんだ。それを取り払い、新たな高みにまで上り詰めることだって可能だ」

そこらへんにはニルフィはあまり欲を見いだせなかった。力を得ても、結局のところ兵器扱いなのは変わらない。

「ありがたき幸せ」

「浮薄な嘘はやめたまえ。骨まで透けて見えてしまう」

おどけるように一礼したニルフィに向かって声が投げかけられた。上げられたニルフィの顔には苦笑が張り付いている。

「ま、そうですね。私としては力云々とかは、あつて困るものではないですけど、なくてもいいんです。むしろ、記憶の方が大事ですね。思い出せないんですよ」

「ほおっ。」

はじめて藍染の目に興味らしい光が宿った。

しかし錯覚のようにニルフィが見返すうちに消え去る。

「ここに来たのも、このお城になにかピンと来たからなの……なんです」

「ふむ、なら空腹は耐えられるようになったのかい？」

「ええ、そうですね…… 貴方は私の過去を知っているんですか？」

「さあ、どうだろうね。私はこの目で数多^{ホロウ}の虚を見てきた。君のような仮面^{ホロウ}の虚

も記憶に残っているかもしれない」

嘘だ。そう言及しても、おそらく藍染は答えてくれない。

いろいろ考えてみればおかしな点もある。ウルキオラを遣わせるような準備のよさや、そもそもタイミングを見計らったようにニルフィの目覚めと同時の出来事。

この場の会話すらも手の平の上だと覚悟しておいた方がいいかもしれない。

「そうですか」

「ここでは飢えに困ることはないと言っておこう。現世からも、君の希望のものがあれば取り寄せてもいい」

「…… 新人に好待遇ですね」

「君を引き入れられるのなら代えがたい値がつく」

「そこまで買いかぶられてもニルファイには困る。」

彼女は記憶がないのだ。実力にはいまだにピンと来ていない。

ニルファイが無言のままうつむきがちになる。

「それでいい。これからゆっくり、自分を探して行けばいいさ」

ふらふらとニルファイが頷く。

藍染は立ち上がった。

「では、行こうか」

「行くって、どこに?」

「ああ、それは……君の破面化のためだ。その実力を、これからは存分に振るってくれ」

逃走かつ闘争

獲物が、馬鹿なエサがやって来た。

トレス・シフラス

フリバロン・エスパーダ

3ヶタの巢の住人達は皆そう思った。十刃落ちの集うこの場所には、下手な2ヶタを寄せ付けぬ実力者が多い。そういったものが己の力を糧とし、しのぎを削り合うのだ。

周囲のものを下し、切磋琢磨し、かつての栄光に返り咲かんことを夢見て。

逆に言えば、そんな肉体言語上等な場所に足を踏み入れれば、どうなっても保証しかねないということだ。

今しがた逃がっている、迷い猫のようにやって来た少女すらも。

「うひゃあつ!？」

寂れた廊下を駆ける少女の背後で爆砕音。さっきまで少女が立っていた床が、幅広の大剣クレイモアでごっそりと削り取られている。

住人達は遠巻きに、その逃走劇を観戦していた。

「…… 逃げるな」

「やだよ！ 死にたくないもん！」

「…… 平気だ。戦えば生き残れる」

「どこが平気なのか問い詰めたいね！」

住人達が知っているのは追跡者のほうだ。

破面・NO. 101、グリーゼ・ビスティー。いわお巖のような寡黙な大

男だ。巨軀といえば破面アラランカル・ディエス・NO. 10ヤミー・リヤルゴが思い浮かぶ

が、こちらは人としての範囲に収まるほどだった。

それでも、ワイヤーを束ねたような筋肉の鎧や、口元を隠した昆虫のアギトのような仮面が、彼の威圧感をこれ以上ないほどに引き立てている。

住人たちでさえおいそれと襲い掛かれない人物だった。

「ひうつ！ あ、あぶない。さっきのは危なかったよ！」

そしてひよいひよいとグリーゼの斬撃を避けていく獲物のほうは、住人達でも知らぬ小さな存在。その珍しい容姿が記憶にないことから、新人なのだろう。

腰辺りまで流れる鴉の濡れ羽色の髪は、彼女が一步床を蹴るたびに跳ねまわった。無垢と無邪気の光を凝縮させたような金色の双眸がせわしなく動く。柔らかそうな真珠色の肌や、細見に加えて華奢な体軀から、とても荒事に向いているようには見えない。

仮面の名残は、耳の上から髪を掻き分けて後頭部にまで沿うように伸びる大きな角だ。

細身の斬魄刀は柄が右上になるように腰の後ろにひっかけられていた。

これでも珍しい容姿なのだが、ここまではまだ、いい。

気になるのは、少女の姿が幼い少女のそれということだ。男型なら若くとも青年のような姿で、女型でも同じくらいなのが普通である。

しかし当の少女は、現世のものと比べれば、12、3歳ほどにしか見えない。

腹部で開いたパーカーのような死覇装が包み込む肢体は、まだ膨らみかけで、ひどく背徳的な色香を漂わせている。けれど破面アランカルにしては異様なほど幼い。

破面・No.1のコヨーテ・スタークのフラシオン従属官リリネット・ジンジャーバックと同じくらいの幼さではあるが、あれは特殊な例であるため参考にはならないだろう。

「うわっ、ヤバっ」

少女の脳天めがけて大剣が振り下ろされた。
ソニード
響転

小さな影が掻き消える。

一瞬のこととはいえ、住人達はその姿を見失った。けれど少女は少し前方に現れると、すぐに逃走を続行。グリーゼもそのままあとを追った。

そこでようやく、住人達は疑問を抱く。

なぜ、グリーゼが少女を追っているのかと。

怒らせたのかと思えば、グリーゼの表情は冷静だ。彼はこれといって同族に襲いかかる危険な性格ではなく、それが不思議に思う原因だった。

「なんで追ってくるの!? 私はニルフィネス・リーセグリンガー! きつと人違いだと思うな!」

「……本気で俺と戦え。そうすれば用は済む」

「やだよ、そんなの。勝てるワケないもん」

「……勝てたのなら、俺はお前の配下になろう」

「いらないよ! キミみたいな大きい人なんて養っていけない!」

たしかに、このニルフィネスという少女は客観的にグリーゼに勝てそうではない。容姿もそうだが、十刃エスパーダのような覇気もなく、纏う霊圧も煙のように不安定だ。

「……戦えば、すべて分かることだ」

「死にたくないから却下!」

「……あくまでしらばつくれるか」

グリーゼはふいに連撃を止めた。

怪訝そうに立ち止まった少女が見守る中、グリーゼが大剣を床に突き刺す。

そして紡ぐ。

「踏み躪にじれ『蟻殻將軍』オルミガ・ヘネラル」

霊圧の波が、崩れかかった柱を吹き飛ばした。

晴れて破面アランカルとなったニルフィは、思わせぶりな笑みを浮かべる藍染から、自由に行動していいという許可をもらった。

ならばとウルキオラの背を追ってニルフィが付いていくと、
「どうしてお前が来る」

彼の自宮の前でつまみだされる。首根っこを掴まれてひよいっと。

この虚夜宮ラス・ノーチエスには娯楽の類が少ないらしい。ニルフィとしても天蓋の青空を眺めているだけで楽しいのだが、事前に藍染から面白い遊び

場があると言われていたのを思い出す。

そうしてワクワクしながら入って行ったのだ。

そこが3ヶ^{トレス・シフラス}タの巣などとは知らずに。

いたのはやる気、じゃなくて殺る気満々な先輩方。出会ったびに彼らが襲い掛かって来たのには驚いた。情けない悲鳴を上げながら背を向けるほど驚いた。

——違う。たしかに遊びだろうけど、私はここに遊び心を見いだせないよ……………。

逃げまくっているうちに追跡者は一人となる。彼はグリーゼ・ビスティーと名乗り、ニルフィを追っていたほかの破面^{アランカル}を一蹴し、自身も加わったのだ。

「…………… 本気で俺と戦え。そうすれば用は済む」

「やだよ、そんなの。勝てるワケないもん」

「……………勝てたのなら、俺はお前の配下になろう」

「いらぬよ！ キミみたいな大きい人なんて養っていけない！」

ニルフィは見ていた。仮にも元十刃^{エスパレード}の数人が、グリーゼの一太刀で沈められたのを。自分もああはなりたくない。

「…………… 戦えば、すべて分かることだ」

「死にたくないから却下！」

そもそも自分の正確な実力をニルフィは量り兼ねている。この住人達と比べて霊圧が勝っているのは、探査回路^{ペスキス}によってわかってた。けれど当初の彼女の予定では、こまめに自分の力に慣れていき、あとは実力相応にのんびり生きていくつもりだったのだ。

「…………… あくまでしらばっくれるか」

なにやら勘違いしているらしいグリーゼが、ふいに斬撃を止め、得物を床に突き刺す。

——諦めてくれた？

ほのかな希望は、吹き荒れた霊圧によって砕かれた。

「踏み躪^{こじ}れ『蟻殻^{オルミカ・ヘネラル}將軍』」

「うわーッ!？」

霊圧の奔流で、ニルフィの死覇装がはためく。

「私なんかを使うのか……」

なにをしたのか分かる。だからニルフィのほおは引きつった。

レスレクシオン

帰刃。帰刃する事により破面としての肉体に虚本来の肉体と攻撃能力を回帰させ、破面の【真の姿】と【能力】を解放し、戦闘能力は数倍にまで引き上げられる。

「グリーゼさん、そのう……ぶっちゃけ、土下座何回で許してくれる？」

「……それよりもやる気になったか？」

「なってたら土下座なんてしないよ！」

視界が晴れ、ニルフィの探査回路にも巨大な霊圧が眼前で引つかかった。

そこにいたのは、おそらくグリーゼだ。

たとえ重騎士じみた装甲を纏ってしようと、目の前にいるだけで剣圧によって切り裂かれそうな圧力を放ってしようと、グリーゼなのだ。

彼の大虚の姿は、蟻をモチーフにしている。

これだけならばあまり脅威ではないかもしれない。誰があんな生物にやられるかと、鼻で笑うかもしれない。

しかし。しかしだ。人間も含め、すべての生物を同サイズにして戦わせた場合、その勝者に蟻という候補が必ず上がることも忘れてはいけない。

「それにしてもスゴいカッコいいね。こんな状況っていうか、私が相手じゃなければファンになっちゃいそうだよ。本当にそう思う」

「……光栄だ」

頭部すらも騎士じみた仮面に覆われているグリーゼがかすかに頭を下げた。

「だから、さ。見逃してほしいなあ〜って」

「……なぜだ？ お前ほどの強き存在が戦いを回避する理由が分からん。見たところ、お前は最上級大虚だな。新しい十刃ではないか？」

「それこそ買いかぶりだよ。だってさ、私って藍染様にまだ数字貰ってないんだよ」

「……なに？」

「戦力として期待されてないんじゃないかな。だからグリーゼさんの勘違いじゃないの？ たしかに私は最上級大虚だよ。でも自分が君や藍染様と思うように、強いなんて思えないんだ」

「……かつてのネリエルと違い、単純に戦いたくないだけか」

口では言いつつも、グリーゼは剣を降ろさない。

「……だが、俺が認めよう。お前は強いとな」

ニルファイが片眉を上げ、続きを待つ。

「現にこの住人の攻撃を一度も受けていないな？ 鋼皮イェロで受けることすらせず、一度もだ。先の響転ソニードの練度は、俺が見た中で最高だったと評そう」

「そんなの、ただの小手先だよ。だってー」

ニルファイの眼前に突如として肉厚の刃が迫る。

息を飲んでニルファイが背後に大きくトンボ返りした。

剣は床に叩き付けられる直前に停止し、切っ先をニルファイに向ける。先端に霊圧が集束。

虚弾バラ

霊圧の奔流がニルファイを襲う。少女はグリーゼを中心とするように時計回りで疾走していく。それを追うように虚弾バラが連続で放たれ、一瞬前までニルファイがいた場所を穿つ。流れ弾が遠くにいた住人達にも襲い掛かり、彼らは慌てて回避した。

ニルファイが半円ほど移動したとき、グリーゼが切っ先に霊圧を収束させながら、柄を握る手をひねる。

虚閃セロ

極太の閃光が空気を焦がす。

「問答無用かあ」

気の抜けた声をポツリと漏らし、ニルファイはそれも回避した。真っ直ぐに飛ぶと分かっていたので、避けるのは容易い。

が、

ソニード
響転

直後、ニルフィの背後にグリーゼが出現した。彼女の首筋めがけて剣が突き出される。ニルフィがその場で跳躍。その間に体を半回転させ、そつ……と大剣の腹の上に右足を乗せた。

そして左脚の先がグリーゼの顔面に向けられる。

虚閃^{セロ}

放たれた霊圧の塊がグリーゼを吹き飛ばし、ニルフィは羽のように床に着地した。しかし顔色はすぐれない。

「無傷って……」

「……やればできるな。久しぶりに傷がついた。」

グリーゼが煙の中からゆっくりと現れて悠々と剣を肩に担ぐ。彼の言う傷も、鎧の表面に髪の毛の先ほどの跡しか残っておらず、実質的に無傷だろう。

「……俺にはあまり派手な特殊能力が無くてな。ポテンシャルだけならそこそこあると自負している」

堅実ゆえに、崩すのが難しい。

「……そろそろ、戦い方というものを思い出してきたか？」

「まあ、そうだね。思ったよりグリーゼさんとは戦えそうだよ」

ニルフィは手を握ったり開いたりして、深く頷く。

凜とした表情になり、グリーゼを見つめた。

「……おお、そうか。これでやつと、本気の戦いができるというわけか。ここには戦いしか楽しみがなくなてな。より強者との戦闘が俺はなによりも好きだ」

嬉しそうに笑うとグリーゼは剣に霊圧を纏わせる。空気が鳴動し、塵がその場を引いていく。

先ほどまでは様子見。ここからだ、気を張っていく。

「……来い」

「わかった。行かせてもらうよ。これが私の本気の」

ニルフィが掲げた右手にまばゆいばかりの霊圧が込められ、

「——なんて言うわけないでしょッ!!」

振り下ろす。

攻撃ではない。音もしない。

しかし、無駄にキラツキラで気持ち悪くなるぐらい様々な色の光が乱舞し、周囲一帯を染め上げた。野次馬を含め、グリーゼの視界は完全に潰されるほど、その光量はすさまじい。

「人は言ったのさ。——逃げるが勝ちってね！」

捨て台詞を残し、ニルフィの気配が消える。

光の爆発はそれでもしばらくは続き、それが消えた後に残ったのは、あきれ顔のグリーゼだった。

グリーゼを出し抜いたニルフィは、ふらふらと崩れた廊下を進んでいく。

あの戦いは茶番に成り下がったが、それでいいと彼女は思う。食事でもない限り命を奪うのは面倒だからだ。

「あれ、これって傲慢かな」

ニルフィは頬を掻く。自分は今、面倒だから殺さないと思ったのだ。それは上からの強者の思考であり、忘れないようにしていた卑屈さは微塵もない。自然にそう考えてしまった己を恥じる。

「ん〜」

なんとなく、ニルフィは細くて脆そうな右手の人差し指を、壁に向けた。

虚閃^{セロ}

グリーゼが使ったような轟音はなく、無音のまま放たれる閃光。けれどその威力は巨大は壁に穴を開け、遠くに見える塔を根元から粉碎した。やつちまつたと思うものの、これでも抑えて撃つたのだ。

「ホント、中級大虚^{アージュカス}までの私って何してたんだろ」

なんとも、強い弱い的位置づけがあいまいになる。

「十刃^{エスパーダ}の人に会いに行こうかなあ」

探してみれば、記憶にしろ力にしろ、なにかが見つかるともいれない

い。

彼らはニルフィと同じように最上級大虚から破面ヴァアストローデ
アラシカルになった者もいるらしい。……いや、いるのだ。ウルキオラもそんなことを言っていた。先に彼から詳しく話を聴けば良かったかもしれない。

「そうなたら善は急げ。……つて、あれ？」

そこでニルフィは気づく。いまだに3ヶタトレス・シフラスの巢から脱出できていないことに。それと自分が極度の方向音痴だということが、知りたくもなかったけど思い出せた。

「……………」

グリーゼから逃げる時、来た方向とは逆に響転ソニードを連発して、さらに奥深くまで来てしまったことに思い至った。

疲れていたのだろう。主に精神面で。藍染と相對した時のプレツシャーは知らずにニルフィを緊張させ、彼の悪意のある助言でこんな場所に來てしまった。そしていきなり一方的に襲われ続け、止めてと言っても聞かれない。

気弱になつていたので。

その場でしゃがみこみ、体を自分の腕で抱くようにした。

しばらくフルフルと震えていたニルフィの大きな眼に、ぶわつと厚い涙の層ができる。

「——むおっ!? どうしたのかね、お嬢さんニーニヤよ。静けさを湛えた湖面に映る月のような貴女は、このような血なまぐさく見苦しい場所は似合いませんぞ。しかし、吾輩としても、可憐なる蕾つぼみが涙で濡れてしまうのは忍びない。繊細なる硝子ガラスの心を削った傷が軽くなるというならば、卑いやしい吾輩にでも、その苦しみを分けさせてはくれないだろうか」

そんなときだった。ニルフィがとある紳士と出会ったのは。

暴走紳士と親切な九番さん

ラテン系ダンサーのような男性で、額に仮面の名残があり、着ている装束の腕部にはエルビス・プレスリーやボン・ジョヴィのステージ衣装の如きネイティブ・アメリカン・ファッション風のフリンジがある。

彼はドルドーニ・アレックスサンドロ・デル・ソカッチオと名乗った。ニルフィはその長い名前のせいで、ドン・パニーニ・アレキサンダー・デブ・スコッチという、食べ物と別人の融合した驚異の名前として覚えてしまう。

そんなことを知らずにドルドーニは快くニルフィをエスコートし、外への出口へと案内していた。

ニルフィは涙をぬぐってつつかえながら、自分の成り行きをドルドーニに話す。

「ふむ、それでこの場所に。藍染殿も人が悪い」

「それは、大丈夫。私もよく知らずに入っただけ、だからさ。でも、いきなり色んな人に襲われて、逃げてたら、グリーゼさんがいたの」

「ほお、我が同志カマラーダではないか。忠義を大切にする男だ」

「そ、その人が…… えぐつ…… 大きなモノを振り回しながら、迫ってきて…… 強引に、(戦いを)シてきてっ」

「大きなモノを振り回しながら強引に!？」

「何度も、止めてって言ったのに、聞いてくれなくて……。でも、あの人が楽しんで、私は痛いのが嫌い、なのにつ。最後なんて、思いつきり突いてきて、ドパーツで、(虚弾パラとか虚閃セロ)何度も出してきて!」「何度も突いたり出したり……。だとう!？」

ニルフィは俯きがちに歩いているため、とんでもない衝撃を受けて固まるドルドーニに気づいていない。何か致命的な会話の齟齬そごが二人の間にあるが、それを指摘できる者はいなかった。

「それで、怖くて逃げてたら迷ってたの。オジさんに会ってなかったらって思うと……。」

ほっとしたようにニルフィが顔を上げ、ドルドーニに笑いかける。

ドルドーニからしてみれば、そのなんのことはない笑顔でさえも、無理をして弱弱しく作っているように見えた。……あくまで彼の主観だが。

「お嬢さん^{ニヤ}、とても辛かったんではないかね？」

「平気だよ。命があるのなら儲けものだしね。でも、助けてくれたのがオジさんでよかった！ キミみたいな紳士さんじゃなかったら、私、また襲われてたかもしれないし」

「くう！ その無垢なる微笑みを見ていると、なぜか目頭が熱い……！」

うんうんと頷くドルドーニに、そういえばとニルファイが訊いた。

「気を悪くしたら謝るけど、オジさんは十刃^{エスパーダ}だったんだよね？」

「む、そうだが、それがどうかしたのかね」

「強さって、なんだと思う？」

ふむ、と顎に右手を添えたドルドーニは、期待の込められた金色の瞳から視線を一度はずす。

「これは難しい質問だ」

「えつと、いきなりでごめんね。答えなんて決まってるじゃないんだって分かってるんだけど」

「それは様々な答えがあるからこそではないかね。吾輩としても嫌いじゃない。……では、吾輩が答えを言う前に、少し身の上話から始めよう」

ニルファイは緩やかな下り坂になった通路を歩きながら耳を傾けた。

「――吾輩は、今でさえ十刃^{エスパーダ}に戻りたいと思っている」

その告白に、ニルファイは僅かに目を見開く。

「失礼なこと言うけど、それってさ、藍染様は……」

「そう、藍染殿はきつとその十刃^{エスパーダ}でさえ、戦いの道具程度にも思っていないだろう。それが最も忠実な下僕だとしてもだ」

ドルドーニは廊下の奥の暗闇を見つめ、過去の記憶を辿っていた。

「解っていたことだ。崩玉が手に入れば、それ以前の十刃^{エスパーダ}は用済みになることは。しかしそれでも残った者もいた。それが吾輩ではな

かったことに、この3ヶ^{トレス・シフラス}タの巢にやって来てから、ようやく理解できるようになったのだ」

背の低いニルフィは、ドルドーニの拳が音を立てそうなほどに強く握られているのを、横目で見ている。けれどわざわざ口に出したりなどしない。ドルドーニこそ、それが一番よく理解しているだろうから。

「だが、一度高みに立った者は、その眺めを忘れられぬものなのだよ。あの場所はたまたまなく心地よかつた。形はなくとも、甘美なる蜜を舐めるような、そんな場所だ」

パチクリと目を瞬かせる少女に、ドルドーニが微かに笑う。

「お嬢さん^{ニヤ}には少し分かりずらかつたかね？」

「うくん、ちよつとだけ」

「では、ここで吾輩の答えだ。力とは、象徴ではないかと思つている。もしかしたら他にもつと当てはまる言葉があつただろう。だが、ここでは象徴と表そうではないか」

「象徴？」

「そうだ。吾輩の力は衰えた。それゆえにここにいる。しかし、それを大切にすることに意味があるのではないかね？ そのために、敵を斬ることを迷わず、止めを刺すことに躊躇つてはいけない。チョコラテのような甘さなど、どこかに置いていったほうがいいのだ」

所々で大袈裟なジエスチャーを挟みながら、ドルドーニが締めくくる。軽い態度ではあるが、彼はニルフィがこの虚^{ラス・ノーチエス}夜宮に来るだいたい前から、仮面を割つてここにいたのだろう。

味わつた苦渋や、舐めさせられた辛酸はニルフィには想像できない。

とても重い言葉だつた。

歩くうちに出口がニルフィの目に映る。真つ直ぐな道なのですぐに出られそうだが、二人の脚は自然とゆっくりになっていた。短い交流でもお互いに別れを惜しんでいるのかもしれない。

「吾輩の答えは、役に立つたかね？」

「うん、ありがとう。オジさんの言葉、身に刻んでおくよ」

広がるように流れる黒髪を揺らしながらニルファイが頭を下げる。

「お嬢さん、顔を上げたまえ。あくまでこれは一つの例だ。答えは、君が見つけるものなのだよ」

「…………… 見つけられるかな？」

「勿論だとも！ 吾輩の剣に懸けて、誓おうではないか！」

「優しいね、オジさんは」

「なんてことはない。吾輩は本心しか口にしないのだよ」

辿り着いた出口の前でニルファイは一度立ち止まり、そして軽い足取りで境目を潜り抜けた。

「オジさんは来ないの？」

「ああ、少し用事ができてしまっただけ」

「そっか、じゃあね、オジさん。きつとまた会うと思うけど！」

「吾輩もそんな気がするよ、帰りも気を付けたまえ、お嬢さん」

気障ったらしく大仰な仕草で一礼するドルドーニ。彼を面白そうに見つめたニルファイは、手を振って去って行った。

…………… しばらくそのままの体勢でいたドルドーニは、ポツリと呟く。

「…………… 行ったか」

特徴的な霊圧も探查回路には引つかからない。

それを確認したドルドーニは、片膝を付き、胸を押さえる。スポーツトライトでも浴びれば最高だろう。

「——くおおおおおおお！ なんと健気なのだ、あの小さな天使は！

幼き肢体を汚されながらも、吾輩にあのような可憐な微笑みを向けてくれるなど！ 華か？ 姫君か？ ああ、あのお嬢さんを今後どのようにお呼びすればいいのか……………！」

バツと手を差し延ばすも、そこにはもちろん誰もいない。一人劇場を続けるようにドルドーニは、さらに熱く、さらに激しくポーズングを迸らせる。

力の質問をしたのも、哀しき復讐のためなのだろう。彼の勘違いで、頭の中のニルファイは更に美化されるようだ。どの方向での勘違いかは、ドルドーニの名誉のために言及しないでおこう。

「斯くも心奪われるとはこのようなことか！ あのような無防備にすぎる姿を衆目に晒し続けていると思うと、この身が疼いて止まん！^{うず}ぐうツ！ 駄目だ吾輩！ 彼女をそのような目で見てしまつては、襲い掛かつたというケダモノと同じ……ッ！ む、忘れていた！」

当初の予定を思い出したドルドーニは、憤怒に顔を染めると、その場から響転^{ソニード}で姿を消す。あのような可憐な少女に復讐など似合わない。

行き先は決まっている。かつて良い盟友であつたはずの男へと制裁をするのだ。残念である。あの寡黙な男の趣味がアレであり、ムツツリな野郎だつたと思うのは。

——むむ、それにしても、不思議な少女だつた。

連続で響転^{ソニード}を使いながら、その移動中にドルドーニは思考を別に裂く。

思い浮かべれば、黒髪の少女の容姿はありありと描けた。

何よりも特徴的だつたのは、その霊圧だろう。それは本来、所有者の力量を表すものながら、ニルファイの持つ霊圧は言つてはなんだが不自然すぎる。絶えず質や形を変化させて、相手に力量を読み取らせないのだ。それだけ操作に優れているということだろうか。

ニルファイが虚閃^{セロ}を放つた場面を目撃していなければ、不自然なだけで済ませただろうに。

「力を知りたい、か」

そんな彼女の知りたがつていたことを思い出し、ドルドーニは口の端を吊り上げる。

「む、いたな、匹夫めが！」

大量の太い柱のある部屋でグリーゼを発見したドルドーニは、その背中に問答無用で仮面のライダーばりの蹴りを右足で放つ。

しかし直前で気付かれ、グリーゼは大剣の腹でそれを受け止めた。

「……ドルドーニか。何の用だ？」

「何の用、だど？ 貴様がそれを言うか！」

空中で受け止められたドルドーニは、回転しながら左足を振り下ろす。それに反応したグリーゼが大剣で迎え撃つた。

互いに弾かれるように飛びのき、各々が柱を足場として着地する。
「……だから、何の用だ？ お前らしくもない」

「ええい、しらばっくれる気か！ 同志、いや、犯罪者よ！」
カマラーダ

響転ソニードを併用した後ろ回し蹴りの二連撃。それらを弾くとグリーゼは切っ先をドルドーニに向けるも、強烈な蹴りが剣の腹を叩き、閃光を天井に放たせる。

少なくない瓦礫がれきが降ってくる中、ドルドーニがビシツと両手の人差し指をグリーゼに突き付けた。

「じ、か、く、あるのかね?! 貴様にはがっかりだ！ まさか盟友と信じて疑わなかった存在が、ただのムツツリー二だったとはね！」
「……待て、なぜそうなる」

「己を満たすためだけに、儂き蕾オムブレの中を蹂躪しつくすとは、同じ男の風上にも置けん」

「……蕾？ 本当になんのことだ」

グリーゼの状況は自業自得なのか、とぼちちりなのか判断に困るところだ。

あらゆる方向から襲い掛かってくる豪脚を、弾き、いなし、防ぐ。ドルドーニの攻撃は苛烈を極めていく。

「ニルフィネス嬢のことだ！ 忘れたとは言わさんよ！」

「……ああ、あの少女のことか。なかなか良かったぞ。逃がしてしまったが、もう少し時間を掛ければ、更に楽しめただろうに」

「——どうやら、貴様への贈り物レガトロは、説得の言葉よりも滅びがいいようだ」

目を細めたドルドーニが離脱し、少し離れた場所に突き立った柱に降り立つ。

左手を斬魄刀の柄に添え、わずかに刀身を覗かせた。

「旋れ『暴風男爵』」
まわヒラルダ

風が空気を切り裂きながら渦巻き、破裂するように消え去る。

ドルドーニには、脚部に竜巻を模った鎧と、肩の部分に猛獣の角の

ような鎧が形成された。

「ゆくぞ、暴風男爵」

ドルドーニの脚部の鎧の足首部分から伸びた煙突状の突起から、先端部が蛇のような形をした竜巻が生み出され、グリーゼへと鎌首をもたげる。

「……む、なにがなんだか分からんが、戦うのなら尚善し。踏み躪れ『蟻殻將軍』」

装甲を纏ったグリーゼに向けて、蹴撃と合わせて撃ちだされた竜巻が牙を剥く。

それがこの戦いの狼煙だった。

本日の破面アランカルによる虚夜宮ラス・ノーチエスの被害、3ヶタの巢トレス・シフラスの一部の崩壊を追加。

そんなことが起こっているとは露知らず、ニルフィはふらりふらりと階段を上っていく。

「……迷った」

彼女の頬を、一筋の汗が伝った。

「あれ？ ホントになんぞ？ ウルキオラさんのトコに行こうとしたのに、まったく見覚えのない場所に来ちゃったよ」

とりあえずこの長い長い階段を昇れば、高い所から見晴らし良く探せるだろう。そう当たりを付けて、ニルフィは足を動かし続けた。

「よしっ、とうちやーくー！」

飛び出たのは予想通り高い所だ。しかし出口から繋がるように、橋のような通路が一際高い建物へと続いている。その屋根はさらに高い所にまで伸びているようで、そこまで登ればさすがにウルキオラの場所も分かるだろう。そう思い、上空を見上げながらニルフィは通路を歩き始めた。

「——僕ラニ何力用カイ？」

「もしかしてキミは、エスパーダ十刃の誰かな」

背後に突如として現れた人物に驚くことなく、ニルフィは振り返って尋ねる。

八つの小さな穴が開いた縦長の仮面を着けており、ヒラヒラした貴族のような服を着ていた。

「オレに何か用かと訊いたんだが」

「訊コエナカッタカナ？」

「ああ、ごめん。私はニルフィネス・リーセグリンガー。どうかニルフィって呼んでね。それとキミに用って話だけど、そうじゃないの。ウルキオラさんの場所に行きたいんだけど迷っちゃって、この宮の屋根から見下ろして探そうと思ってさ」

「なるほど。あのガキの場所か。ここからだとかかなり遠いぞ」

「え、そうなの!?!」トレス・シフラス 3ヶタの巣からやつと出られたのに!」

「ソコマデ行ツタノカ。……マア、イイカ」

「オレの宮に古いが地図があったはずだ。それをやるから持っていけばいい。ついて来い」

仮面男は響ソニード転で宮の扉の前まで移動する。ニルフィもそれに倣うと、同時に扉が開かれた。

明かりはなく、とても暗い場所だ。

どこでも光のあつた虚夜宮ラス・ノーチエスの中で異様な光景に見える。

「ドウダイ? オカシク思ウダロウ?」

「オレはどうも陽の光つてのが苦手だな。陽が届かないように、この宮は閉鎖しているんだ。悪いな」

「大丈夫だよ、私は夜目が効くし」

「ソウ、ナラ良カッタ」

「ああ、そうだ、まだ名乗ってなかったな」

「仮面ヲ取ツテ、挨拶スルヨ」

部屋の中央に立った男はニルフィに見えるように仮面をはずす。

その姿を見て、ニルフィは絶句した。

アラシカル破面とは、個体差はあれど人の形を保っていると思っていたのだ。

しかし、彼はどうか。

首から上が薄紅色の液体で満たされた透明なカプセル状でその中に虚を思わせるボール大の頭が2つ浮いており、上側の顔は右目付近、下側の顔は左頬の近くに『9』の刻印がある。

「僕ラガ、第9十刃」
スベーン・エスパーダ

「アローニーロ・アルエリだ」

声が交互に聞こえるのは、声の主が二人いたからだだった。

「やっぱ驚いてやがるな」

「えつと、ごめんね」

「顔ノ事ナラ、黙ツテナヨ。僕ラコノ顔ノ感想ナラ」

「疾うの昔に聞き飽きてる」

「でもすごいカッコイイよね、その姿」

「ハアツ!？」

ニルフィの感想に二つのうち一つの球体が驚愕の声を上げる。声を出さないだけで、もう一つの球体も驚いているだろう。ニルフィが言ったような感想は初めてだ。

「俺は十刃で唯一の下級大虚だ。第一期刃の生き残りでもある。だがな、未完成の崩玉でさらに下級大虚のせいで完全な人間形態じゃない。醜いだろ?」

「——なんで? 私はカッコいいと思うよ。特にそのカプセルの形とか、キミたちの顔とか」

「馬鹿ニシテルノカイ?」

「どうして本人を前にして、それも十刃の人に面と向かって言わないといけないのさ。素直な称賛ってやつだよ。それにしても中身の赤い液体ってどうなってるの?」

興味深々といった様子で近づきながらまじまじとニルフィはアローニーロを見つめる。それにたじろぐようにアローニーロはわずかに身をのけぞらせた。

「なんだ、お前は」

「ニルフィだけど」

「……怖ガラナイノカ? 忌避シナイノカ?」

「全然」

即答したニルフィにアールローロはため息をつくように肩を落とすと、右手で左手にはめられた手袋を取り外す。

その下の左手は絡み合いながら手の形を形成した無数の触手であり、肉食植物のような口も蠢いている。

「これが、オレの能力の喰^{グロトネリア}虚だ。死した虚を喰^{ホロウ}らって、その能力と霊^{チカラ}圧を我がものとする能力。オレがここまで十刃^{エスパーダ}に残ったのは、オレが唯一無限に進化する破^{アランカル}面だからだーって、オイ」

「なーに？」

「ドウシテ勝手ニ僕ノ手を触ツテイル」

「結構弾力あるね。意外と滑り気はないんだ」

「……………」

アールローロが手の口でニルフィの細腕を噛みつく仕草をみると、彼女は楽しそうに腕を引く。

それがアールローロには不可解だった。

「なぜだ？」

「そうだね、それってキミの能力なんですよ。なんていうか、私には興味しかないんだ。それがキミの個性なんだって思ってるんだけど……………それに、キミには敵意なんかを感じられないから。それだけの説明じゃ、ダメ？」

左手に手袋を戻したアールローロは無言のまま壁際に移動し、そこに収容された紙を取り出す。

巻かれた分厚いそれをニルフィに投げ渡すと、追い払うように手を振った。

「ありがとう、アールローロさん。でも私たちって初対面だよね？
なんでここまで良くしてくれるの？」

「藍染サマカラハ君ニヨクシテオケツテ言ツテタカラ」

「あの人が？」

「珍しい奴だと言ってたが、まさにその通りだったな」

「えへへへ、ありがとう」

皮肉だとは思わずに照れくさそうにニルフィは頭を搔く。首をひねるようにしたあと、アールローロが言った。

「さっさと行け。この宮にいても面白いことはなにもないぞ」

「あ、それでさ、一つだけ質問したいの。答えを聞かせてくれたらすぐに出ていくから」

「……… 何カナ」

「キミにとつて、力ってどういう物なの？」

カプセルの中の二つの球体が互いに目を合わせる。

「どういうことだ」

「つまり、キミは十刃エスパーダなんだよね？ 下級大虚ギリアンだからっていつても、

その辺の人になんか負けないくらい強くて、それで力があるんでしょ？ それがどういうものなのか私は知りたいんだ」

「知ツテドウスル」

「私の正体を見つける手掛かりにする。それだけ」

アールローニーロはしばらくじっとしていたが、刀を抜き放つと言葉を紡ぐ。

「喰い尽くせ 『喰虚』ゾロトネリア」

メキリ、と音がして、ズルリ、と這うものがある。

質量を爆発的に増大させたアールローニーロは、その姿をニルフィに見せた。下半身が巨大な蛸のような姿に変わり、ホロウ虚であろう顔が苦しげに蠢いている。

「これは、今までオレが喰らった33650体にも及ぶ虚ホロウの能力を全て同時に発現できるようにする」

誇るかのように、アールローニーロは両腕を広げた。

「僕ニトツテ、チカラカトハ、歴史ダ」

「途中で果てることもなく、この力が強化されていく分だけ、オレがいたという証拠なんだ」

「コノ大軍勢ヲ見テホシイ。ココマデニナルノニ、ドレホドノ時間ヲ要シタカ解ルカ？」

「確かにこれはオレが研鑽した結果の技術でもなければ、努力などといった報酬じゃあないぜ。けどな、力を奪おうと、喰らおうと、オレ

がそこにいた。それだけは揺るぎない事実だ！」

吼える。アールロニー口の誇りが込められた叫びだ。

見上げていたニルファイは、その姿を見て、笑う。とても嬉しそうであり、待ち望んでいたようでもあった。

「そう……それがキミの答えなんだ」

元の姿に戻ったアールロニー口は深く頷く。

「うん、ありがとう。参考になったよ」

「ソレハ良カッタ」

「また遊びに来るね」

「もう来んじゃねえよ、貧乳のクソガキ」

「あ、ひどい！ ていうか、仕方ないじゃん、こんなに子供っぽい姿なんだから！ それに少しはあるよ！」

「エ？ ドコ？ ……アー」

「無きにしも非ず、か」

「覚えててよアールロニー口さん！ 絶対にここに戻ってきたときは、ナイスなバディになってくるんだからさ！」

「…… さっさと行け」

ニルファイが響ソニード転で姿を消す。その直前に舌を出していたのは愛嬌だろう。

「なんだったんだか、アイツは」

不可思議な少女のことを考え、アールロニー口はやれやれと首を振った。

特に悪い気がしていなかったのが腑に落ちないだけだが。

老人と同世代って思うと複雑だよね

アールロニーロから貰った地図を手に、ニルファイは空中を駆けている。地図の方向通りに彼女は従っていた。

この時のアールロニーロの間違ひは、彼がニルファイに付き添わなかったことだろう。もしくは、地図の正しい使い方を教えなかったことだ。

その手に持っている地図の持ち方が逆とも知らずに、ウルキオラの宮があるであろう方向に高速移動中だった。

「うんうん、なるほど……合ってるね、さすがアールロニーロさん」
いや合ってないから。そうツツコミを入れるものはこの場にはいない。

探査回路も普段ウルキオラは霊圧を抑えているので、あまり頼りにはならなかった。

巨大な誰かの宮が見えてきたとき、ニルファイは適当な塔の上に着地する。地図とにらめっこし、その方向にウルキオラはいないと思うことなく、目的地を見定めた。

虚閃

直後、閃光がニルファイめがけて放たれる。

「うわっ!?!」

何人かがあとを追ってきているのは知っていたが、まさか攻撃してくると思わなかった。避けなくともいい威力に惑わされ、ニルファイの回避行動はギリギリまで遅れる。

「待て、チビ助」

ニルファイと同じ高高度に浮かぶのは、虚ろな表情をした巨漢。顎に仮面の残骸がある。異様に長く大きな腕をしていた。

そちらには目も向けず、ニルファイはプルプルと体を震わせながら、手の中の物を見つめている。

巨漢がゆっくりとした口調で言った。ニルファイの手にある地図の成れの果てのことには気づいていないようだ。

「バラガン様がお前に会いたがテルヨ。早く来るイイネ」

「……が」

「うん？」

「アローニーロさんの地図が！」

巨漢が気づいたときには、ニルフィはその頭頂部の上に姿を現す。その男、破面・No. 25チーノン・ポウは訳も分からないまま目を見開くばかりだ。

「なにがーゴポオツ!？」

その頭頂部に、小さな拳が振り下ろされた。

虚弾^{バラ}

弾丸として放たなくとも拳に霊圧を纏わせた、虚閃^{セロ}の二十倍もの速度を持つ打撃。

ポウには一撃に思えたかもしれないが、実際には両手を使って八発は殴られている。

頭部が首に陥没させられながら、ポウが眼下の地面に墜落した。その衝撃で白砂が噴水のように吹き上がる。

それを冷たく見下ろしていたニルフィはハッと我に返った。

「……あ、やつちやつた！」

思わず殴り落としたことに少女は口元を手で覆う。その隙間から灰になった紙の欠片がこぼれた。

自分の致命的な方向音痴を自覚しているニルフィには死活問題であり、命綱である地図を燃やされるのは、殺されることと同意義なのだ。やりすぎかと思うかもしれないが、地図を持っていても迷う特性は筋金入りだった。

パンパンと、この場には不釣り合いな拍手。

「これは驚きだ！ まさかあそこまで躊躇いなく攻撃態勢に入るとは思わなかった」

顔の殆どを仮面の名残で覆われた長髪の男だ。

その余裕のある物言いにニルフィがむっとする。

「私を試したの?」

「正解! エサクタ バラガン陛下は君にご執心のようなのでね。今のは挨拶代わりさ」

「さつきの人って仲間なんですよ。殴り倒した私が言うのもんですけど、心配してあげたら？」

「平気だ。ポウはバラガン陛下フラシオンの従属官の中でも、腕力やタフネスは群を抜いている。ポウ！　いつまで寝ているつもりだ！　このお嬢さんを陛下の御前へと案内するぞ！　……ポウ？」

長髪男がいぶかしげに砂煙をあげる地面を見下ろす。

風が吹き、そういった煙幕は消え去った。

クレーターの中心で仰向けに倒れているポウは、潰れて息のあるカエルのように痙攣している。

「あ、そうだ。あの人の急所に一発ずつ拳を打ち込んで霊圧を乱したから、すぐには起き上がれないと思うよ。ダメージはそんなにかから治療すればすぐに治ると思うな」

「……ふむ、どうやら俺たちは君の実力を量り兼ねていたようだ」

「そういうキミもそんなに霊圧がないね。隠し玉？」

「まあ、そんなところさ」

右手に付いた刃を長髪男が吹くと、どこからか大型の虚ホロウが現れて、ポウを運んでいった。

「いや、なに。悪かったね。俺はバラガン陛下フラシオンの従属官、フィンドル・キヤリアスだ」

「さつきから陛下陛下下って、ここのラスボスって藍染様じゃないの？」

「我らにとってはあの男ではなく、バラガン様が主人であり神だ。そこを間違えないようにしてほしい」

「ふうん、そっか」

フィンドルと会話をしながら、先程から引つかかっているバラガンの名に考えを巡らす。

「もしかして、そのバラガンさんって私と知り合い？」

「面白いことを言う。陛下は君に何度も傘下に入るように仰られていたのに、それを無下にしてきたのはどこの誰なのだろう」

「そうなの？」

「その通りさ。今じゃ破面アラシカル・セグンダ・N.O. 2ではあるのだがね」

「……………」

「そういえばと、記憶の片隅に積もる埃のような手ごたえがあった。この虚夜宮ラス・ノーチエスには一度、ニルフィは来たことがあるのかもしれない。その時は天井なんてなかったし、多くのエサ……訂正して大虚メノスグランデがたくさんいたのだ。エサの保管庫みたいに思ってたかも。」

「流石の陛下も君のようなじゃじゃ馬は扱いきれないと、諦められたのだからね」

「質問、いいかな?」

「ああ、どうぞ」

「そのバラガンさんって、最上級大虚?」

「正解! 我ら陣営では、いや、あのような人に勝てる存在はいない」

「そっか。そんな偉大な人が、私みたいなニューピーに会いたがってると。断ればどうする?」

「力づくになっちゃおうな」

フィンドールは肩をすくめた。

「十刃エスパーダに会ういい機会かもしれない。同じアールローも藍染からはいいようにしてほしいと言われていたので、会いに行ってもさすがにひどいことはされないだろうという、計算からも来る。」

ニルフィの過去についても何か知っているかもしれない。

それに、十刃エスパーダで二番目の人に、あの質問をするのもいいだろう。

「分かった、付いてくよ」

「そうか、それはよかった」

「代わりにさ、さっきのポウって人が台無しにしてくれた地図の代わりがほしいんだけど」

「いいだろう。すぐに下の者に手配するよ。そうと決まれば行くか、陛下も首を長くして待ってるだろうしね」

頷くと、二人は響転ソニードを使ってその場から消えた。

バラガン・ルイゼンバーンは、大帝の二つ名を持つ豪胆な態度の老人である。『虚圏の神』を自称し、さらに、かつての『虚圏の王』であ

るため、フラシオン従属官達との間には絶対的な上下関係が存在し、陛下と呼ばれているのだ。

「意外と素直に來たのだな」

そんな彼は、自分の宮の玉座へと続く道をゆっくりと歩いて行く。藍染から面白そうに与えられた情報では、かつて傘下へと何度も勧誘しながら、しかしなびくことがなかった存在がアランカル破面になったというのだ。

あの狂犬のような存在がどうなったのか楽しみだ。

時にはかつてのラス・ノーチエス虚夜宮に現れてバラガンの配下を踊り食いし、時には勧誘の旨を伝えにいった配下が貪られた。さすがに会話も出来なければバラガンでも御せない。しばらくして、バラガンは勧誘をあきらめた。

ラス・ノーチエス藍染が虚夜宮を制圧してからはぱったりと姿を現すことがなくなり、バラガンは死んだものと思っていた。しかし違った。生きていたのだ。

それが単に、エサのあるラス・ノーチエス虚夜宮の場所が分からなくなり、延々と辺境を彷徨っていたなどとは思いもしないだろうが。

今さらどうしようなどという狭量はバラガンにはない。アランカル破面となり、その人と成りがどのようになったのかを見てみたくなったのだ。かつての意趣返しと戯れにポウを差し向けてみれば、返り討ちにされたらしい。しかしポウは死んでいなかった。かつてのあの化け物なら、ポウは消滅なりさせられていた。

「さて、楽しみだ」

そう言つて、配下の者に扉を開けさせると、玉座の間にバラガンが入る。

彼の玉座は一段と高い所に設置され、他のものを見下ろせるようになっていているのだ。

いつもここは配下が静かに控えている。しかし今回ばかりは違つたようだ。

「殴つてやる、蹴つてやる!! 殺つてやるぜええええ!!」

「殴つてやる、蹴つてやる!! 殺つてやるううううう!!」

何かいた。

小さな存在は腰だめにした腕をぶんぶん精いっぱい振りながら、バラガンの配下であるアビラマ・レッダーと張り合っている。アビラマが暑苦しいのに対し、少女の叫びは子犬の威嚇ほども怖くない。

「ハツハアツ！ それにしてもいい叫びじゃねえかチビ助！ ここまで昂ぶったのは久しぶりだ！」

「ふふん、肺活量は自慢なんだよ。私にチビなんて言うアビラマさんには負けないさ」

「オウ！ 言ってくれんじゃねえか！」

バラガンの見覚えのない小さすぎる影は、今度は別方向に駆けていく。

そこにいるのは頭部にカチューシャ状の仮面の残骸を残し、紫色のエキゾチックな髪をした、厳つい容姿をしたオカマ。バラガンでさえ、実力を知っていないかったら絶対に拾っていない濃い存在だ。

「どうだった、シャルロツテさん！」

「あ、らあくん、ニルフィちゃん。女の子があんなにはしたなく叫んじゃ、ダ・メ・ヨ」

バチコーン！ という擬音がしそうな凄まじいウインクをかましながら、むさいオカマもとい、シャルロツテ・クールホーンが屈みこむ。少女と目線を合わせるにはそうしないといけない。

「シャルロツテさんみたいに優雅にしてないといけないってこと？」

「そうよ、分かっているじゃない！ 最近の男どもなんて、私の美しさを一片も理解できなくてねえ。ホント、ニルフィちゃんのことを見習ってほしいものだわあ」

「顔が悪くなっちゃうから、そんな顔しないで」

「もう！ 優しいんだからー！」

「あははは〜」

このニルフィという少女は一言も、シャルロツテのことを『可愛い』顔とは言っていない。無垢な表情ながらえぐい一面を笑顔のまま見せている。

シャルロツテもやんやと担がれて悪い気はしていないようだ。

「…… どういうことだ、これは」

「へ、陛下！ 申し訳御座いません！」

玉座のそばにいつも控えさせている二人の側近は、慌てて膝をついた。

「ニルフィネス・リーセグリンガーを確かに連れてきました。ですが、ここに連れて来た時、ポウを倒したという報告からアビラマが突っかかりまして。そして彼の叫ぶ儀式（笑）にあの少女が初めて付き合ったことから意気投合。擁護していたシャルロッテも、ニルフィネスが煽りに煽って、こちらも意気投合し……」

「お前たちでは収束が付かなくなったということか」

「誠に、誠に申し訳ございません！」

二人の側近たちの服はボロボロで、止める努力はしたのだろう。

それには言及せずに、バラガンが大きく咳払いをした。

騒ぎまくっていたアビラマとシャルロッテは一瞬だけ固まり、すぐに自分の持ち場に響転ソニードを使ってまで移動。その直前に少女の耳元で何かを囁く。おそらく助言だろう。

ドカリと玉座に座り込んだバラガンは、ぽけつと突っ立つ少女を見下ろす。

「貴様が、あの化け物だとはな。とても信じられん」

「お初にお目にかかります、バラガンヘーか。ニルフィネス・リーセグリンガーです」

「初めて会うわけでもないだろう」

「いえいえ、私には最上級大虚ヴァーストローデになるまでの記憶がなくなっているのです。そしてこうやってキミに会うことも初めてだと思うの」

ほおにかかった濡れ羽色の髪を後ろに流すように礼をしながら、ニルフィが言った。

その言葉にバラガンの従属官達フラシオンは様々な反応を見せる。

驚愕、好奇、興味、恐怖。最上級大虚ヴァーストローデから破面アラシカルになったことに反応を見せた。

「新しい十刃エスパーダか？」

「ちがうよ。だって数字もまだもらってないし」

外周はいぶかしげにニルファイを見るも、バラガンはあえて無視する。

「そうか、しかし儂わしの勧誘は受けなかったというのに、ボスのは受けたとはもう」

「さあ、どうだろうね？ 中級大虚アジュールカスまでの私には理性がなかっただけかもしれない。最上級大虚ヴァストローデになってからなのさ、ハッキリ自我を認識できるのは。それについて何か？」

「貴様は昔、我が配下を何体も喰らっているのだ」

「それは、えっと」

気まずそうにニルファイは目を逸らし、過去を辿った。少しだけ思い出せそう。バラガンならと言っていた虚ホロウをお菓子感覚でパクつき、バラガンのことはお菓子をくれる人と認識していたようだ。

これをそのまま言っはダメだ。

「……おいしかったです？」

言ってから、ニルファイは逃げ出したくなった。バラガンだって自分の配下をお菓子代わりに喰われ、さらに感想まで聞かされてはたまつたものではないだろう。

しかし予想に反し、呆れたため息が返って来た。

「やはり、その姿になっても変わっておらん」

ニルファイは一步前に出た。

「バラガンさんは、私の過去を知ってるの？」

「ああ、知っておる。おそらく今の貴様よりはな」

「教えてくれるかな？」

「見返りもなくやれんのお。どうだ、ニルファイネス。この際、儂の傘下に入らんか？ 下につけとは言わん。必要なのは力だ」

「……私の間違いじゃなければ、それは藍染様を引き摺り下ろすつてことかな」

「頭の回転が早いな」

ニルファイは笑顔の奥で考える。

バラガンの重厚な自信は、おそらく彼の能力によるものだ。それでも藍染に勝つには心もとないだろう。ニルファイが入ったからと

いって変わるとも思えないが、バラガンは見たこともない今の彼女の力に自信を見出している。

だが、

「ごめんね。それだと私は受けられないよ」

少しだけ悲しげにニルファイが呟く。

「あの人には勝てない。それだけは確かさ」

「お前が儂からの頼みを断るには、それ以上の相応の理由があるのであろうな？」

バラガンが肘掛に乗せた指で先端を叩くと、はめられていた髑髏が割れる。この玉座の間に集まっていた彼の配下が霊圧を高め、空気が鳴動していく。アビラマとシャルロットは乗り気ではないようだが、この二人がいようがいまいが数の上では大差ない。

ニルファイは本当のことを言おうかと思うものの、それでバラガンは納得するか微妙だ。

適当に流そうと思う。

ポツと白い頬を染め、ニルファイがもじもじしながら答えた。

「だって、私の体は全部、藍染様の物なんだ。こうして破面化アランカルをするときに、その、いろんなところを弄いじられて、さ。まさか藍染様がある趣味でーー言わせないでよ、もう」

『なに!? なにがあったの!?!』

「散々弄もてあそばれて、あの東仙つて人がいないと、壊れそうだったの。私つてほら、未熟な体でしょ? 一杯乱暴されるとーーもう、なに言わせてるのさ」

『なに!? 本当にナニがあったの!?!』

外野が騒ぎ立てるのを手で制してバラガンは厳かに口を開く。

「つまり、断ると」

「そうだね。さっきのは悪ふざけだよ……半分」

『半分、だと?! 藍染様はこんな小さな子にないを!』

「ええい、黙つとれ馬鹿ども! 騒ぐ奴はここから出ていけ!」

やはり、このニルファイといるとどうもバラガンの調子は狂う。今も、昔も、変わらない。

勧誘の件はもしくは、といったぐらいの提案だ。断られるのも見越していた。

「儂からはこれ以上ないぞ」

「そっか、じゃあ一つ訊いてもいいかな」

「昔話なぞ話すこともないわ」

「ううん、違うの。これはアローロニーロさんとか、強い人に会ったら訊こうと思ってるんだけどね」

パーカーのような死覇装のフードを揺らめかせ、ニルファイがバラガンの前に現れる。

それにバラガンの側近二人は動きかけるも、主の静止でしぶしぶ腰を落とした。

少女は笑う。

「バラガンさんにとって、力ってなに？」

それをバラガンが哄笑する。

「ハッ！ 小娘、それを儂に問うか。決まっておるわ。力とは儂の『老い』こそが、この世界で絶対唯一よ」

「…… 無駄に歳くってるってこと？」

「違うわ馬鹿者」

嗤った。それを見たニルファイは背筋が凍るのを感じ、姿をその場からかき消す。

「ほお、今のを避けたか」

「なに、さっきの」

ニルファイがバラガンのいる玉座より少し低い位置から見た。さつきまでニルファイがいた床が、塵へと還る。

バラガンは『老い』と言った。ならばこれは、時間が経ち風化してそうなったのだと分かる。

あれをまともに食らっていれば、ニルファイは骨と化し、さらに消え失せるだろう。改めて、昔の自分はよくこんな化け物にちよつかいを出せたと、変なところで感心する。

「ああ、小さい小さい。死神も人間も虚も破面もそれぞれの違いも諍いさかいも！ 意志も自由も鳥獣も草木も月も星も太陽も！ この力の前

にはすべて取るに足らぬことよ」

自らの力を部下に改めて宣言するように、バラガンは声高らかに謳った。

「だからこそ、この力以外の事柄は、すべて等しく小さきこと」

バラガンがゆつくりと指をニルファイへと向ける。彼は破面アランカルとなり、人と姿は変わらない。それでもニルファイはその指を骨だけのような節くれた姿として幻視した。

「拮抗する力の中に、平等は生まれぬ。儂のこの窩めには、貴様の命も蟻の命も、等しく同じに映っているぞ。それを努々ゆめゆめ忘れることでない」

どこかでこの人物のことを侮っていたかもしれないとニルファイは思い、自分を戒めるいまし。それで足元をすくわれて命を刈り取られればおしまいだ。

ようやくニルファイはハッキリとバラガンを思い出す。

あの骸骨の大帝の姿を。

「そう、ありがとう。キミの答えはよくわかったよ」

「下々の望みを叶えるのも王の仕事だ」

「それだったら過去のこと教えてくれても……」

「なにか言ったか?」

「なーんでも」

フィンドールがニルファイのそばにやってくる。頃合いを見計らっていた彼は、ニルファイの手に新しい新品の地図を握らせた。

礼を言うと、ニルファイはバラガンに背を向ける。

「行くがよい、小娘。縁があればまた会うだろう」

「縁なんて誰にでもあるよ。会はずのない人にだって繋がってるんだからさ。私の記憶はないけどさ、こうしてキミと会うのは、なんか懐かしい気がする」

「言いよるわ、小娘が」

あと一つ、と響転ソニードを使う直前に、肩越しにニルファイは振り返った。

「その絶対の『力』に、キミ自身は逆らえるのかな?」

「どうであろうな」

王としての姿を崩さないバラガンを見て、ニルファイは小さく笑う

と、今度こそ姿を消す。

失礼だと分かりつつも、フィンドールがバラガンの前で小さく零した。

「それにしても、不思議な少女でしたね」

「不思議、か。それだけで済めばよいがの」

バラガンは集まった配下たちを見下ろす。かつてバラガンの配下として早くから仕えていたものほど、ニルファイが去ってから荒い呼吸を繰り返して、普段は見せることもない動揺を表に出していた。中には気絶しているものもあり、ニルファイが過去に残した傷跡は深い。

ニルファイの正体が『アレ』だと理解したことで、ただそれだけでこのザマだ。

「ーしかし、ああして言葉を交わらせると、冗談も言えるとはな。昔はあのような可愛げがあるなど、思いもしなかったわ」

「……僭越ながら、陛下。あの少女にここまで力がおありでしょうか？ 見たところ霊圧もかなり不安定。とても戦いに向いているとは思えません。俺ごときでもその気になれば」

「逆に喰われるだろうな」

「それは」

「馬鹿者。あれは見かけだけだ。それで舐めてかかった痴れ者の末路を、そこで気絶しておる者にでも聞け。儂には分かる。見間違うはずもない。間違いなく『アレ』だ。こうしているが、最後に我が配下に引き入れられなかったのは痛いぞ」

ここまでバラガンが評価するのは珍しい。

フィンドールは興味が湧くものの、バラガンが直々にニルファイへの観察以上の干渉を禁じるとの命令を下した手前だ。諦めるしかないだろう。

配下たちを戻し、一人玉座に座るバラガンは、誰もいなくなった空間を見つめた。

「さて、はて。今度は誰が『アレ』の犠牲になるのやら」

記憶がないと言った、黙っていれば深窓の令嬢のような少女。

彼女の記憶が戻った時にどうなるのかを想像し、バラガン呵々と

嗤った。

もしかしたら、この『古い』の力で、消滅させてやる未来を想像して。

道中、ニルファイは背中に寒いものを感じたとかいないとか。

社畜への道

あまりにも巨大すぎる構造物である虚夜宮^{ラス・ノーチエス}、その中にはこれもまた巨大な構造物がいくつも存在し、影では藍染でさえすべて把握しているのか怪しいと囁かれているほどだ。

偽りの青空の下、それぞれの十刃^{エスパーダ}は与えられた宮殿でその日々を過ごす。

力に磨きを掛ける者。怠惰を貪る者。趣味嗜好に没頭する者。

個性豊かであることが自然となった十刃^{エスパーダ}であるため、その過ごし方も十通りとなる。

その中の一つ、第3宮^{トレス・バラシオ}。その名前のとおり、第3十刃^{トレス・エスパーダ}を主とする宮殿だ。

宮の中ほどから外に飛び出した、広場といって差し支えない場所に人影があった。

現在の破面^{アラソカル・トレス}・N0.3であるティア・ハリベルは、宮の屋上で腕組みをしながら立っている。

金色の髪と褐色の肌が特徴的な女性^{アラソカル}の破面だ。腹部から胸の下までもが露わになった白い死覇装から覗く腰や腹部はすらりと引き締まり、顔の下半分がフアスナーで隠れてはいるが、真っ直ぐに前を見つめるその翡翠色の両眼には強靱な意志が宿っている。

気高く、美しい女性だった。

「気まぐれで風に当たってこようと思い、ハリベルは外に出てきている。特に変わり映え無い風景。それは理解しており、この城に来てから何度も見ている光景だ。」

「つまらない、とは思わない。彼女自身気にしていないだけでもあるがまだまだと認識しているし、ハリベルにとって生きているうえで最も重要なことは他にあるのだ。」

「なので、こうして外に出ているのは物思いにふけているからかもしれない。」

「……これは」

「探査回路^{ベスキス}に引っかけなかった霊圧にハリベルが意識を浮上させた。」

覚えのない霊圧だ。それが凄まじい速さで一直線に、螺旋状に回転しながら宮に迫ってくる。どこかの十刃エスパーダの襲撃かと思ったが、この時期に来るような馬鹿はさすがにいないはずだ。それに十刃エスパーダ同士で会うのも藍染の召集以外ではあまりない。

そうしている間に謎の物体はハリベルに向かってきた。

しかし、すぐに様子がおかしくなる。

物体は途中で力尽きたようにひゆるひゆると情けなく、空気を吐き出し終わりそうな風船のように飛んできた。ハリベルが右手を伸ばしてガシツと軽く掴めたほどだ。

少女だった。跳ねまわった鴉の羽のような髪が目に入り、次にその小柄な体躯がぶらりと垂れ下がる。腹部で開いたパーカーのような珍しい死覇装を着ていた。

アイアンクローをする形で少女を掴んだハリベルは首をかしげる。

「どうした。藍染様からの遣いか何かか？」

そう問うも、少女は答えない。

そこでようやくハリベルは少女がぐるぐると目をまわしていることに気づいて床に降ろす。座ることも出来ずに少女は倒れ、手から新品の地図がこぼれ落ちた。

「……………」

蚊の鳴くような声だ。

ハリベルは膝をついて耳を少女の口元に寄せた。

「おなかすいたよお……………」

非常にひもじそうな声音がなんとか聞き取れる。

どうすればいいか迷うものの、ハリベルはこの少女が藍染の言っていた新人だと思い至った。まさかこの広大な虚夜宮ラス・ノーチエスで、教えられたその日に出会うとは不思議なものだ。

藍染からは良くしてくれと言われている。

こうして空腹で目をまわさせてしまっている以上、そして同じ女型の破面アランカルとして見捨てられない。

仕方なく少女をお姫様抱っこで抱えたハリベルは、自分の宮へと入っていった。

「おいしい、おいしいよおー！」

「泣くほど喜ぶとは思っていなかった」

少女が持てば一抱えはあるパンにかじりつく姿を、ハリベルは膝の上に乗せながら眺めている。

宮にあるハリベルの私室で、小さなテーブルを二人は前にしていた。ハリベル個人の部屋なので、椅子は一つしかなく、持つてこさせるほどでもないニルフィを膝にのせている。

少女はニルフィネス・リーセグリンガーと名乗った。是非とも、と言うので、ハリベルは少女のことをニルフィと呼んでいる。

そのニルフィは、ハリベルが下に用意させた現世の食物を口にしていた。虚^{ホロウ}を食べることを忌避するハリベルはもしかしたらそれを用意しないと慌てたが、ニルフィは腹が膨らめばなんでもいいらしい。ペットを初めて飼ったような姿だと、ハリベルの部下は密かに思った。

「食うのは構わないが、口を拭け」

「モフツモフツ」

「どうせならこれも食え。余るようにあるからな」

「ハムツハムツ」

「酒というのもある。私の従属官^{フラシオン}もこれは好物なんだ」

「コクツコクツ」

食べる速度はそれほど速くない。小さな口に詰め込める量は限りがあり、リスのように膨らませてもさして変わりなかった。テーブルの上の皿にはまだ菓子類などが山ほど残っている。

「ーンクツ……ふう、ありがとうハリベルさん。死ぬかと思っ
たよ」

「構わない。それにしても、これくらいでいいのか？」

ニルフィはとてもおいしそうに食べていた。同じものを口にしたハリベルでさえ、ニルフィの食べているものだけが特別に作られたの

ではないかと思うほど。それでもさして広くないテーブルに乗せられた食べ物だけで、ニルフィは満足したようだ。

自分の従属官達フランチオンが食べるとしたら何枚も皿が積み重なる様子を見ているので、ハリベルはニルフィのどこか体調が悪いのかと心配した。

「うん、もう平気。この体になると、直接食べる量が少なくても大丈夫みたい。とりあえず、これで十分満足なんだ。それにスゴクおいしかったしね」

照れくさそうにニルフィが笑う。

「こんなにおいしいのって初めて食べたから、私には新鮮だった。初めて破面アランカルになってよかったって思うよ。虚ホロウを食べるより、こっちのほうが好きかもしれない」

一段落したところで、ハリベルがニルフィの落とした地図を差し出す。

「これはお前の物で間違いないな？」

「うん。最初はアーロニーロさんの所で貰ったんだけどさ、いろいろあつて燃えちゃってね。少し前にバラガンさんの所でコレを用意してもらったんだ」

「あの二人の所に行ったのか」

「そうだよ。私って方向音痴でね。ウルキオラさんの所に行きたいんだけど、地図を見ても別の所に辿り着くの」

「……それは、逆に持っていたからかじゃないか？」

「え、嘘?! って、ああ! ホントだ!」

今頃気付いたらしいニルフィに、ハリベルが珍しく呆れのため息を吐いた。

なんとというか、拍子抜けなのだ。あの藍染が注目している割には。

同じ女型の破面アランカルということでも最初はどんな人物かと考えたものだ。良い方向にも、悪い方向にも。ネリエルのような人物だったら好ましいとまで思っただけで出会ってみれば、コレなのだ。反りの合わない破面・No.8ザエルアポロのような性格ではないだけマシだが、空振りもいいところだった。

「どうしたの、ハリベルさん？」

「いや、考え事をしていただけだ」

小首を傾げながらクツキーを頬張るニルフィに、ハリベルは安心させるように目を合わせる。

「私、分かるよ。ハリベルさんがなに考えてるのか。全然さ、私って強そうじゃないでしょ？」

「ああ、正直に言えばそうなる。探査回路で感じ取れる霊圧も不安定で、強さには連想しない。お前と戦うのならばその不自然な霊圧にか、誰だって注意しないだろう」

「だよー。最上級大虚から破面ヴァーストロージェになってアランカルもこんなモンだよ」
「最上級大虚だと？」

「そうだよ。昨日の今日で藍染様からスカウトされてね、私でもよく分かんないけど番号も貰わないまま自由行動をしてるの」

事もなげに言っているが、ハリベルはニルフィのことを警戒しなければならぬ。

最上級大虚から破面になるものは、例によって強力な個体となる。ヴァーストロージェバラガン然り、ハリベル自身でさえ元は最上級大虚だった。

そもそも容姿は強さに起因しないのだ。ハリベルだって格下の巨漢を殴り倒せる自信もある。

霊圧の不安定ささえ戦闘能力として意味があるように思えてしまった。ニルフィを構成しているものが、よく考えれば出来すぎているのだ。相手の油断を知らずのうちに誘うような、そんな疑似餌のよう。

「バラガンさんが言うにはさ、昔の私ってもう悪鬼羅刹みたいだったんだって。嘘を言ってるようには見えないけど、今の私を考えると、ね」

暗い影が落とされるように、事実を受け止める。

「それに……」

ニルフィは体を前後に揺らして、柔らかさとポリウムのある二つのたわわなそれに頭をうずめた。

そしてニルフィはカップをソーサーに置くと、さわさわと自分の胸

辺りを撫でまわし、ガクツとうなだれる。

「こんな姿にはなりたくなかったよ」

なんと行っていいか分からず、ハリベルは微妙な顔をして黙ったままだ。

ニルファイは溜まった鬱憤を晴らすように、見かけに比例した幼い様子でブンブンと腕を振り回す。

「だいたいさ、私だってもう少し威圧感のある姿が良かったんだよね。もしくはハリベルさんみたいに凛々しくて、綺麗で、グラマラスでさ！ アーロニーロさんには貧乳って言われるし、ウルキオラさんなんて絶対に私のことネコか何かだって勘違いしてるよ！」

聞けば、ウルキオラに宮を追い出されて3ヶ^{トレス・シフラス}タの巢に向かったそう^{エスパーダ}だ。そこから二人の十刃と出会い、こうしてハリベルと会っているという。

ハリベル自身はあまり話す方ではない。

小さな破^{アラシカル}面の冒険譚を聞きながら、ゆつくりと時間が流れていく。退屈しないのはニルファイの懸命な説明が微笑ましいからか。

「でね、その紳士のオジさん、えと、ドン・パニーニって人でね、すつごく優しい人だったの」

「ドン・パニーニ……？ そんな名の十刃^{エスパーダ}がいたのか」

おいしそうな名前の人物だと、かつて同僚でもあった男を別人に置き換えて、ハリベルは思い浮かべた。

「うん、それでね。その人に訊いて……。あ、そういえばハリベルさんにはまだ訊いてなかった」

とても重要なことだ。知っておきたい、そんな焦燥も交えて。

「これは私が出会った強い人たちに訊いてるんだけどね。ハリベルさんにとって、力ってなにかな」

「どうしてそれを知ろうとする」

「…… 私はさ、自分で弱い弱いって言いながら、分かっているんだ。ホントは力を持っているって。でも記憶がないから今までどうやってこの力を使ってたか知らないし、ふとした拍子で思わず暴力を振るうことだってあったの」

「お前が言うのなら、それは不可抗力ではないのか？」

「そうかもしれない。だけどき、ポウって人がちよっかい掛けてきたとき、無意識でその人を殴って、それで昏倒させた。……無意識にだよ。襲われたことにビククリするんじゃないやなくて、怖がったり怒ったりする前に、無意識で襲い掛かったの。それで分かっちゃったんだ。ああ、私はバケモノなんだなって」

ハリベルはニルフィの小さな体が震えていることに気が付いた。

「気にしないようにしてただけ、私は何人も同じヒトだった存在を、食べて、食べて、食べて！……最上級大虚ヴァーストロデーになつたの。それで力を付けて、前の私はそんなこと気にしないでまた食べてた。それで強くなつていったの」

虚ホロウには栄養ともなりえない、ただの趣味嗜好である先の食事を、ニルフィは好きだと言った。つけ加えるならば、ただそれだけで生きていきたいと渴望するほどに。

それに、記憶がない。

それならばこの少女は、突然凶悪な暴力を手に入れてしまい、どうしていいか不安になつているのだろう。

「3ヶタの巣にいる時も、グリーゼさんとかオジさんはともかく、他の襲つて来た人たちのことを殺そうとしちゃったときもあるの。首を刎ねればいいとか、四肢をもげば面白そうとか、そういうのが頭に浮かんでくるから、怖くなつてずっと逃げてた」

少女は体を細腕で抱き、しかし震えはひどくなつていった。

「バラガンさんの所にいる時も、誰も私に危害を加えなかったのに、私の中の誰かさんはシャルロツテさんたちを殺せつてうるさかった」

おそろおそろ肩越しに、ニルフィは金色の目をハリベルの顔に向けた。

ちかちかとくすぶるように、その目の奥に欲求とも取れる光が瞬いている。

「今だって、ご飯を食べさせてくれたハリベルさんのこと、殺せつて言ってる」

吐息のように、切なさそうにニルフィは零す。

好印象を持った大切な人に限って、ニルファイの中の暴虐性は激しいのだ。

「ただ普通に生きようって思ってた。だけど、私はーホントは生きてちゃダメなの？」

ただの破面アランカルならば気にもしないことで、少女が押し潰されようとしていた。

そんなニルファイを、ハリベルはそっと抱きしめる。

震えが少しだけ、ほんの少しだけ収まったようにハリベルには思えた。

「強さというのは、犠牲という礎いしずえの上に成り立っている。少なくとも私はそう思う」

「ふえ？」

先に答えを出した三人とは毛色の違う言葉だ。ニルファイが首をかしげ、興味を持つ。

ハリベルは少女の頭を優しく、硝子細工を扱うように撫でながら、ゆつくりと続けた。

「最上級大虚へと至るためには、最下級大虚から中級大虚アジュエーカスに進化するよりもより多くの虚ホロウを喰わねばならない。いや、最上級大虚ヴァストローデに限らず、目に見える力を手に入れるには喰らうことしかないんだ。ここまではいいな？」

「……うん」

何を今さら、とでもいうような視線に、ハリベルはあるかなきかの微笑みを返す。

「たしかに、我々は元はヒトだ。その記憶が霧のように曖昧なものと同化しても、それは変わらぬ事実。そして虚ホロウとなり、進化を繰り返すごとに理性を取り戻した。そのせいでお前は悩んでいるのだな」

「そうなるかも」

「その過程の中で、私は他の大虚メノスグランデを喰らう犠牲を強いて自身が強化することを望まずにいた」

「どれくらい、そうしてた？」

「さあ、どうだろう。時間は曖昧だ。私の従属官フラシオンをしてくれている仲

間も、その時に出会ったことだけは覚えている」

自嘲が、空気に混ざる。

「あの時の私は慢心していた。見逃した相手が、破面アラソカルとなって私の命を奪いに来たんだ」

「…………… 最上級大虚ヴァーストローデでも？」

「そうだ。その時に藍染様に命を拾われた。力を得れば犠牲を生むこととは無い、そう仰ったあの方の下に私は付いたんだ」

「そっか」

「私はあまり口が上手くはない。これは受け売りとなるが、理性を得た者が戦うには理由が必要となる。いや、必要とせねばならない。本能のみで戦うのは戦士ではなくただの獣だということだ」

「それが、今の私なんだ。シヨックだよ」

「そうではない。我々は特に、犠牲がなければ強くなれない種族だ。この力は、背負っている命は、そのたびに重くなっていく。だからそれらが消えることがなくとも、犠牲の上で獲得した自らの力となる。だから——怖がるな」

らしくもなく長広舌になったことにハリベルは襟で顔を隠す。

前の第3十刃トレス・エスパーダならば、もっと上手く話せたはずであり、武芸一筋の自分をここまで呪ったことはない。

しかしニルフィは非難もせず、ただ微かに頷いていた。

「そう、そんな風に考えられるんだ……………」

だんだんと尻すぼみになっていく言葉が途切れると、糸の切れた人形のようにコトリとニルフィの体から力が抜けた…………… おそらく、空腹が満たされて、今さらながら疲労の波が緩やかに彼女の意識を覆っていったのだろう。

少しばかり困ったようにハリベルが肩をすくめると、彼女はニルフィを抱き上げながらそつと立ち上がった。

鍛錬、と呼べば聞こえはいいが、彼女らのしてきたことは過剰にす

ぎる内輪もめ以外の何物でもない。

ずかずかとあまり品のない歩き方で廊下を進む、オッドアイで左目の周りに隈模様があり、額に角のような仮面の名残が付いている女。エミルー・アパッチは、同僚にやられた左腕の傷をしきりにさする。「クソ、痛ってえ！ てめえはゴリラ並に馬鹿力が過ぎんだよ、ミラ・ローズ！」

「ああん？ こちとらお前の不意打ち虚閃^{セロ}で右足が痛いったら……」

不満たらたらに、高身長かつ筋肉質で、かなり露出の高い服を着ている女がギロリと獅子のようにアパッチを睨みつけた。アパッチと同じく、ハリベルの従属官^{フラシオン}の一人、フランチエスカ・ミラ・ローズである。

「あら、私の記憶ではお二人はそんな傷なんて翌日で治っているはずでしょ。まあ、同時に昨日のことなどさっぱり忘れてるでしょうけど」

「スンスン、てめえ！」

アパッチとミラ・ローズは残る一人の従属官^{フラシオン}、シィアン・スンスンに噛みついた。

長髪で、アオザイの様な袖の長い服を着ている女だ。彼女は口元を袖で隠しながらさらりと流す。ちなみに、彼女はわき腹にドロップキックを喰らっており不機嫌だ。

「それにしても、ハリベル様は何処に。この時間では珍しく私室におられるとか」

「そういう時だつてあるよ。なんせ、これから死神どもとやり合おうって時期だ。あたしらじゃ及ばないほど大変な仕事だつてあるさ」
「まあ、戦いとなつたらその分あたしらがちやっちやと片してやろうぜ」

「そうさね。今からでも腕が鳴る」

「…… 悲しきほどに脳筋、ですわね」

「聞こえてんで、スンスンおらあ！」

いがみ合いながらも彼女らが気ままに暴れようとしなのは、ひ

とえに主であるハリベルのためだ。

何よりも優先すべき事柄であり、それにためらいはない。ハリベルが侮辱されたらその侮辱した相手を潰すし、もし捨てられそうになってもどこまでも付いていく。

まだ彼女たちが中級大虚である時に拾われてから、ハリベルには尽きることがない恩義を受けているのだ。そうそう他の従属官フランシオンに忠誠心では負けはしない。

「おっ、着いたか。ハリベル様ー、アパッチです！」

「ああ、入ってくれ」

許可をもらい、三人はハリベルの部屋へと普段は見られないかしこまった態度で入っていく。

敬愛してやまない、主君がいるから。

そして三人が三人とも、絶句した。

「ハ、ハリベル様……？」

だれが、彼女の名を呼んだのだろうか。それすら分からぬほど三人は動揺していた。

ハリベルは寝台の上に頬づえをつきながら寝つ転がっていた。それはまだいい。ハリベルは主であり、そのままでも無礼ではないからだ。

ただ一つ、原因があるとすれば。

「その……少女は？」

「ああ、コレか。ニルフィネス・リーセグリンガー。最近、新しく入った破面アランカルだ。お前たちも仲良くしてやってくれ」

違う。そうではないのだ。

そのニルフィネスという小柄な少女は、ハリベルと一緒に寝台で寝ていた。

三人が訊きたいのは、なぜ新人の少女にハリベルが添寝をしているのかとか、それがかつて一度もしたことがない自分じやないのかとか。そんな由々しき事態に対してだ。ちなみに、少女は熟睡しながらハリベルに抱き着き、豊かな胸元に顔をうずめている。とても気持ちよさそうな可愛らしい寝息が漂う。

ギリイッ!!

三人の奥歯が砕けんばかりに噛み締められる。

「ハリベル様、そのガキを寄越してください。これからさっそく仲良くしてきますから」

「アパッチ、馬鹿言うんじゃないよ。ここはあたしが仲良くしてきますから」

「あらあら、お二人ともはしたない。こういう可愛らしい娘は愛でるに限るのに」

「――殺気!」

ただならぬ空気を感じてニルファイが飛び起きた。

それとなく至福な夢から醒めれば、眼前には凶悪そうな顔をした女が三人迫っている。小心者の彼女に驚くなどというほうが無理だ。

ささっとニルファイがハリベルの背後に隠れ、フルフルと震える。ヒシツとニルファイがハリベルの背中に抱き着くのを見て、獣たちは更に興奮するようにヒートアップしてきた。

「お前たち、ニルファイが怖がつているだろう」

ハリベルは起き上がると背中からニルファイを引きはがし、あぐらをかくようにした足の中に少女をぬいぐるみのように収めた。意識しているのか曖昧だが、優しく頭を撫でることも忘れていない。

ハリベルがこの場にいなかったら、ニルファイはたちまち襲われていただろう。

ほおを引くつかせたアパッチがずっと顔をニルファイに近づける。

「よお、おチビ。これからあたしらと楽しい楽しいお遊びをしねえか? 天にも昇りそうなほど楽しませてやつからよ」

「い、いやだ! それにハリベルさんとご飯食べたばっかだもん。しばらく運動したくないかなっ」

「ああ!? ハリベル様とご飯? てめえ今、一緒にご飯って言ったな、アア?」

「ひぐっ……。とつてもおいしかったよ。ハリベルさん、あくんしてくれまし」

「あはははは! やっぱあたしらと遊ぼうや。ガキつてのは外で遊ぶ

もんだって相場が決まってるんだよ」

「そんな相場の株価なんて急激に落ち込んだじゃえ！」

話すたびにドツボにはまっていた。殺気の濃度も窒息してしまいそうなほどだ。

逃げられない。そう悟ったニルフィは、礼儀に反すると分かりつつも、命惜しさにやることを決める。

「ハリベルさん、ありがと。ご飯おいしかったし、キミのおかげで心が軽くなったよ」

冷静な女性の、わずかに驚いた気配。

それに満足したニルフィが立ち上がると、ぎゅつとハリベルを抱きしめる。ぎこちなく、ハリベルも少女の細い胴へと腕をまわす。

外野から獣の咆哮のようなものが空気を震わすも、あえて無視。

困ったような顔をするハリベルにニルフィはいたずらっぽくウインクした。

そのまま右手を掲げ、振り下ろす。

ゼロ・エスベヒスモ
幻光閃

白い光が部屋を支配し、今度はなぜかファンファーレにも似た音が一緒に響いた。

「じゃあね！ 時間があつたらまた来るよ！」

声の流れ、気配は緩やかに消えていく。

同時に、光の幕がゆっくりと晴れていった。

「クソツ、あの餓鬼を逃がしちまっ、た……」

ミラ・ローズはしばしばする目をこすりながらニルフィの姿を探そうとした。しかし、眼前の光景に声を失う。それは残った誰しも同じだった。

部屋を覆うようにして、薄く小さな桃色の花卉が踊るように舞っている。品種は桜だろうか。それが際限なく降り注ぎ、けして下品とは感じさせないように優雅にくるくると回りながら落ちていく。頬に当たると柔らかく軽い感触が伝わり、これがただの映像なのではないと如実に伝えてくる。

粗野なところが目立つアパッチやミラ・ローズも毒気を抜かれたか

のように立ち尽くし、この光景に見入っていた。スンスンも軽く腕を広げ、花卉のシャワーを一身に受けている。

ハリベルが一枚をつまむと、花卉は彼女の手の中で霊子の光を散らしながら、儂く空気に溶けた。

ただの景色だ。そう割り切るには、この光景はあまりにも幻想的すぎた。

「これがせめてもの礼のつもりか……」

硝子の繊細な小道具が割れたような、シャンと澄んだ音と共に、花卉の群れは霊子となって散っていく。

ハリベルが可笑しげに目を細め、桜の仄かな香りの残滓を吸い込んだ。
だ。

「戦わずとも、道があるかもしれないな」

そこは虚夜宮ラス・ノーチエスの内部にしては異質な部屋だった。

光が入り込まない暗闇の中では、壁にいくつもの機械類が埋め込まれており、黒い空間の中でポツポツと光を浮かび上がらせる。

時折明滅を繰り返し、盤石にある丸い画面が切り替わっていた。

そこをのぞき込むように、二人。

「なんや、ここでも何も無いんかい」

そのうちの一人、市丸ギンが肩の力を抜く。表情は曖昧なものだ。彼の狐のような細目からは感情が伺えない、拍子抜けしているようであり、失望を含んでいるようであり、はたまた単純に楽しんでいるようだった。

ギンの胸の内に生まれた感情は、彼にしか分からない。

「二応は予期していたことだ。それに相手も分かっているのだろう。戦いとなれば厄介ということをな」

もう一人、東仙要は常時と変わらない声色で答えた。盲目の彼が視えているかは不明だが、東仙もまた画面に顔を向け、終始腕組みを解かずに静観していた。

「せやけどボク、もう何も無いんちゃう思うんやけど。あのコ、本気で戦う気イないみたいやし」

「内に秘める暴虐性は見えるのだが……。やはり、穏便な手段では駄目か」

画面の中では、ニルフィは響転ソニードを使いながらウルキオラのいる宮に移動中だ。

東仙たちの当初の予定より、あまりにも何もなさすぎた。

トレス・シフラス

3ヶタの巣ではほとんど戦闘らしい戦闘もせず切り抜け、出会った十刃エスパーダとは陰険どころかむしろ好印象寄りの評価で送り出された。

ラス・ノーチエス

荒くれ者の集う虚夜宮を舐めてるのかと思うほど、ニルフィは戦っていない。

「このままでいいんちやいます？ ニルフィちゃんはやる気もないし、無理に立てて噛みつかれるのは御免やで」

ホロウ

「だが本質は虚であることに変わりない。彼女も戦いの因果からは逃れられないさ。実力者と戦わせて失われた記憶を喚起させる。その方法が手荒になっても仕方がない」

エスパーダ

「ホントにこのコが十刃並なんて、思えへんなあ」

「戦闘方法は能力寄りだ。その力は藍染様と似た素養を得ている」

「うひゃあ、隊長とやなんて、悪質やねえ」

あさむ

ハリベルの宮で見せた桜の幻影。五感を見事に欺くそれは、戦いに応用されれば厄介極まりないだろう…… そうなればどんな戦闘となるのか見極めるためにこの二人がここにいるのだが。

アジュールカス

「…… あら、そういえば東仙サンは、ニルフィちゃんの中級大虚の姿、知ってはるん？」

「そういえばお前は見たことがなかったな。以前、藍染様と共に捕獲に乗り出したんだ。今でこそあの姿だが、初めは私も信じられなかった。狐につままれるとは、まさにあのようなことを言うのだな」

「はあ……？」

「彼女の本質はあの幻影ではない。アレはあくまで……」

そこまで言おうとしたところで、部屋の扉が音もなく横にスライド

した。

廊下の明かりが差し込み、扉を開けた人物の影が二人の足もとまで伸びる。

「準備が整いました」

「あら、ウルキオラクン……？」

与えられた宮にいるはずのウルキオラがさも当たり前のようにいた。

首をかしげたギンが画面を再度のぞき込んだ。ニルフィは嬉々として空中を駆けており、ウルキオラがいないと分かればどのような切ない顔をするのだろう。部外者のギンでさえ気の毒に思う。

「ニルフィちゃん、君のこと探してるみたいやけど。宮にいないかいん？」

「リーセグリンガーが目指しているのは第4宮じゃない」

「なんやて？」

では、どこにニルフィは向かっているのか。

画面の中では、知識のある者ならばすぐに理解できる場所が映った。

セブティマ・バラシオ 第7宮

アラシカル・セブティマ
破面・No.7ゾマリ・ルルーを主とする宮殿だ。

これだけならばニルフィの方向音痴が再発したと思えるが、しかし地図の通りに彼女は進んでいる。

ウルキオラがギンの疑問を解いた。

「藍染様は当初、リーセグリンガーを第0十刃に据えようとした。し

かし予定していたものと違いー記憶を失っていたんだ。俺たちにとつて記憶とは経験。どこまで奴が戦えるかを見極めるのが、今までの期間だ」

マシンガンを携えた一般人と、ナイフを手にした歴戦の兵士が戦えばどうなるか。

状況にもよるが、運の要素も作用するだろう。

力の使い方を忘れているかもしれないニルフィがまさに前者であり、本気のヤミーと戦えば偶然の一撃で命を落とすかもしれない。た。

マシンガンを使える兵士に戻るのが目的なのだ。

「しかしリーセグリンガーを相手にするには、ブリバロン・エスパーダ フラシオン十刃落ちや従属官ではそもそも足止めすら望めない。妥協策として、釣り合っているような実力者を当ててやることしか、戦いを実現できない。生かさず殺さず。強引に記憶を呼び覚ます方法に刺激は必要だろう」

「なんや、君、あのコと仲良かったみたいやけど」

「アレが勝手にまとわりつくだけだ。俺には塵にしか見えん」

「その割には今もあのコ、子犬みたいに付いて行こうとしてはるけどね」

「……………」

何も言わずに背を向けたウルキオラをギンが呼び止めた。

「なら、一緒に見ていかへん？ 心配やる？」

「俺には関係のないことだ。アレが死んだのならば、ただの塵だったというだけだ」

それ以上は話さず、報告だけを済ましてウルキオラは去ってしまった。う。

面白そうな玩具が無くなってしまったかのようにギンは落胆し、宮を目前にしたニルフィの映る画面を見た。心にもないことを、あからさまに吐き出す。

「まったく、そないな熱血みたいな方法でニルフィちゃんの記憶が戻るんか、心配やわあ」

他者へ力を振るう怪物ならば、最も慣れ親しんだ行動で目を覚ますかもしれない。

転機となるか、終点となるか、はたまた茶番へとなり下げるか。全て、少女の出す手によって、決まる。

「あれ？　なんか寒気がするよ？」
ぶるっと、ニルフィは身を震わせたらしい。

殺す理由「ついカツとなつてやった」

「………… あれ？」

ニルフィは地図と眼前の巨大な建造物へと交互に視線を上下させ、可愛らしく小首を傾げた。

第4宮に辿り着いているはずなのに、最後に見た時とは全貌が大きく違っていた。

「はめられた、かな」

しらけた顔をしてニルフィは地図を背後に放り投げた。直後にポイ捨てはダメだと思い、虚閃^{セロ}で消し飛ばす。偽物に価値などはない。フィンドールの嫌がらせかと思つたがバラガンが許すはずもなく、おそらく合意の上なのだろう。アローニールも最初から一枚は噛んでいたかもしれない。自分の方向音痴を利用されるのはいい気分ではなかつた。

「まったくさ、いい歳した大人がこんなちっちゃな女の子を揃つていじめるものなのかな。あとで宮の壁に落書きしてやる」

小心者ゆえのしよぼい仕返しだ。

「………… はあ、入ろうか。これだけ前フリされちゃったら、ね」

宮の扉は鍵が掛かつておらず、特に出迎えもなく足を踏み入れた。壁の取り払われた広すぎるホールには何もなく、中央付近では四本の極太な柱が天井を支えていた。

カツン………… と、軽いはずの足音が木霊^{こだま}する。

「だれかいませんかー？」

呼びかけも反響するだけでニルフィに返つて来た。

「留守かな」

十刃^{エスパーダ}は自由人が多い。そのため、予定があつても宮の外をぶらついていることも。

従属官一人いない空間の中央にニルフィがたどり着いた。何も無い無音の世界。瞑想などには最適かもしれない…………… ニルフィは神など信じない主義であり、祈つてる暇があれば楽しいことをしている。

四方の柱に誰かが隠れている気配は——あった。

「そこにいるよね。勝手に入って来たのは謝るけど、仕方なかったの。話くらいなら聞いてくれるかな」

「気づきましたか。ただの日和見ひよりみな破面アランカルではない様子だ」

「日和見で悪かったね」

音もなく静かにニルファイの前に男が現れた。坊主で頭部には棘のような仮面の名残があり、首には首飾り、耳には仮面が変化した髑髏のピアスをしている黒人風の男だ。

敵かな雰囲気を纏う彼は、うしろで手を組みながらニルファイを無遠慮に観察する。

ニルファイにはあまり好きではない目をしていた。

「おっと、失礼。私は第7十刃セブティマ・エスパーダ、ゾマリ・ルルー。さあ、貴女も名乗りなさい」

「……ニルファイネス・リーセグリングァー」

ゾマリの言葉遣いは破面アランカルにしては丁寧だが、言葉の端々からどことなくニルファイを見下しているように思える。自らの実力からの自信なのだろうか。あまり仲良くなれそうにない。

その直感、ゾマリが斬魄刀の柄に手をやったことで確信に変わる。

「おや、どうされました。そのように警戒して」

「キミがどうしたのさ。出合い頭でいきなり殺気を向けられたら誰だって警戒するのは当たり前。そんなこともわからずに柄に手をかけたのかな？ 口調と頭は比例しないね」

「挑発のおつもりですか。しかし貴女のような舌足らずな甘声では、幼稚きわまる甘言ですよ」

「その割には今、一瞬だけ霊圧が乱れたね。なに？ こんな子供の指摘すら聞き流せないのかな、ゾマリさんは？」

相手の隙を作ろうと舌に毒を含ませながらニルファイは喋った。一応とはいえ効果はある。このまま我を忘れて激昂してくれれば楽に逃げおおせられるが、ゾマリは静かに殺気を隠さずにしてくるだけだ。

「……ま、この際には些事だったね。それよりゾマリさんが私に刀を向ける理由は？」

「とぼけないでいただきたい。既に藍染様からは承^{うけたまわ}っている。今日^{アランカル}破^{ヴァーストローデ}面となった最上級大虚、つまり貴女が私の後任になると」

「ナニソレ知ラナイヨ」

「ウルキオラ・シファア、アールロニーロ・アルルエリ、バラガン・ルイゼンバーン。他の三人の十刃^{エスパーダ}からの確認も取れている。そしてご存じだろうか。こ^{ラス・ノーチエス}こでは、数字と命は奪う物であると」

後半はニルフィの耳には届いていなかった。ウルキオラたちの株価がニルフィの中で大暴落だ。少しでもいい人と思ってしまうことを人生の恥とするしかない。

「とはいえ、私もみすみすこの座を明け渡すつもりはない」

「言っておくけど、私は数字なんて興味ないよ。だって私はこのままのんびり人生を生きて……」

「藍染様からの言伝だ。十刃^{エスパーダ}とならなければ君に帰る場所はない、とな」

「ちくしょー！」

このまま知らん顔で逃げたら、あのオサレ隊長に何をされるか分かったものではない。

穩便に済ませたいとニルフィはこの時切実に願った。

「何にせよ、私には一つ分かったことがある」

「……？」

ニルフィは疑問を胸に、かすかに息を吸った時、

「——貴女はいささか、戦いというものを舐めておいでのようだ」

「ッ！」

背後から振り下ろされた斬魄刀にニルフィが気づく。ゾマリは眼前にいるのに、なぜ？ そう思うよりも前に振り返りながら背後へと跳躍。濡れたような黒髪が少しだけ削られた。シャルロットならば即座にキレていた。惜しむ気持ちを抑え、ニルフィは右手を貫手に。

虚弾^{パラ}

咄嗟にゾマリが斬魄刀を盾にしようと持ち上げる。しかし間に合

われない。手の形をした瞬速の槍がゾマリの胸に吸い込まれ、鋼皮を食い破り、背に穴を開けた。

仕留めた。ニルフィは殺しをしたことを嘆く前に、そう連想する。そして彼女の横顔に蹴りが叩き込まれたのは同時だった。小さな体が弾丸のように吹き飛び、一つの柱にめり込むように激突した。

ニルフィは瓦礫から這い出し、何事もなかったかのように立ち上がる。金色の目には興味と、燦る荒々しい光が強まってきた濁りが混在していた。

「なんだろう、さっきの。ゾマリさんが二人もいたみたいだけど」

そんなことはない。現にニルフィが視界に収めるゾマリは一人だし、探査回路にも乱入者のような存在は引つかからなかった。ゾマリの服にはニルフィの貫手のあとも彼自身の血も付着していない。

「双児響転」

ゾマリの姿がぶれると、その輪郭が消えないうちのもう一人のゾマリが別方向に立っている。

「私の響転は十刃最速でして。それに少しばかりステップを加えて仕上げた、擬似的な分身のようなもの。まあ、手品の類のお遊びです」
「へえ、双児かあ」

「手品とは相手を驚かせるためのものですから、目で追えず驚いたからといって、そう羞じることはありませんよ」

感心するニルフィの両脇に、斬魄刀を振り抜こうとする二人のゾマリが立っていた。軽くホラーだ。ニルフィは右のゾマリの斬撃を限界まで硬くした鋼皮の右手で防ぐ。左のゾマリを虚閃で消し飛ばすと、手刀の形にした左手で裏拳を放った。

虚弾

その手刀はゾマリの首元へ。しかし背後からの殺気を感じ、追撃を断念しながら響転で躲す。標的を失った刀の切っ先はゾマリを貫いた。その刀を持つのもまたゾマリであり、ある種の異様な光景が出来上がった。

再び二振りの刀が死角からニルフィを襲う。首元と、右足のふくらはぎ。先に迫った首への斬撃を屈んで避け、もう一本を裏拳の手刀で

対抗。互いに触れ合った瞬間、霊圧が爆発する。そこを中心として衝撃波が巻き起こり、床がへこみながら砕かれた。

ニルファイが開いた右手を掲げ、振り下ろす。

ソロ・エスベヒスモ
幻光閃

様々な光が乱舞する空間から離脱して空中を飛び、ニルファイが眼下を見下ろした。

「気を抜くとは暢気なものだ」

ゾマリの大上段からの剣戟。空気を裂くような一撃。

ニルファイは腰の後ろに掛けてあった己の斬魄刀を逆手で抜き放ち、居合として放った。

ぶつかり合う霊圧で空気が悲鳴を上げた。しかし二人の剣舞はこれで終わらない。ゾマリが双児響転ヘメロス・ソニードを使用してあらゆる方向からニルファイを斬らんと剣を振るった。次々と現れる残像をニルファイが一切の停滞なく切り伏せていく。流れるように体を動かし、軽やかに跳ねる。そのたびにはじける火花や床のから顔を出す残骸が多くなっていた。

「守りに徹するだけでは勝てませんよ」

「……………」

「勝たせるつもりなど、毛頭ありませんが」

五人のゾマリが瞬時にニルファイを取り囲んだ。逃げようにも、逃げ場は潰されている。

予備動作なくゾマリの斬魄刀が少女の服を裂き、柔肌に埋め込まれ、貫通した。

「くあっ……………!?!」

心臓と内臓をかき回されたニルファイは苦悶に顔を歪ませ―消える。

ありえない出来事にゾマリは目を見開いた。

「だーいせーいこーう！……………なんてね」

無防備なゾマリの背中をトンと指先で押したのは、小悪魔のような表情のニルファイ。

ゾマリからの横なぎの剣を見て、ニルファイが背後にとんぼ返し

た。軽やかに空中で着地する。

「……今のは、いったいなんの技でしょうか」

「なんの技って、ゾマリさんがさんざん見せてくれたでしょ？ そんなことも見て分からなかった？ 私がちよつとマネしただけだね」

「これは十刃^{エスパーダ}最速である私にしか」

「さあ、どうだろうね。ゾマリさんの言うようにコレは手品みたいなものだよ。でもキミは手品師失格。どうして手品師が同じマジックをしないのかって理由は、単純にタネをわからせないため。その点、キミは目立ちたがり屋さんだ」

ニルファイが髪を背後に流しながら笑いを隠そうともしない。右手で逆手に持った彼女の斬魄刀の刀身は不思議な色合いをしている。光の反射によつて、さまざまな色に変化するように見えるのだ。

それを杖のように振りながら、茶化するように口を開いた。

「手品とは相手を驚かせるためのものですから、目で追えず驚いたからといって、そう羞^はじることはありませんよ」

不思議なことに、ニルファイの喉から出た声はゾマリのもので、先程話した言葉を違えずに抑揚も一緒であった。そこまではさすがにゾマリ本人は気付かなかつたが。

ゆるやかに変化が起こっているのには、少しだけ感じられたのは僥倖か。そうでなければ彼は十刃^{エスパーダ}ではない。

噛み合わせが悪くなった歯車のような音が、ニルファイの霊圧から漏れていく。

「何度も見せてくれたら私だつて理解できるよ。ステップのコツ、筋肉の動かし方、霊圧の操作方法。ゼーンぶ、見せてもらったからさ」

三人のニルファイがゾマリの周囲をくるくるとスキップをして回っていた。

ゾマリがそれを不快そうに剣を振るうことで追い払う。

見ただけでできた？ ありえない。双児^{ヘメロス・ソニード}響転は長い年数を掛けて、自分にしか扱えないようにした技術であり、それが観察のみで再現可能？ そんなこと、他の十刃^{エスパーダ}にだつて不可能である。

そしてニルファイが双児響転ヘメロス・ソニードを扱えるということ、彼女は十刃エスパーダに響転ソニードだけにしろ勝っているということだ。

「それでね、見ててよ。これが私が自分でアレンジを加えた双児響転ヘメロス・ソニード」

ゾマリより少し離れた場所にいたニルファイの姿がブレた。すると二人に。しかしブレは止まらず、四人、八人、十六人と増殖するように数を増していく。もはや双児響転ヘメロス・ソニードだとしても物理的に不可能な人数にまでなっていた。

もはや、群れだ。

オプスクロー・ソニード
虚楼響転

虚と幻の混じり合った姿。

「これは……！」

「だいたい私の幻影だから、ホントはここまでじゃないんだけどね」
数で囲んでいたはずのゾマリが、今度は群れに包囲されている。

「加減した幻影じゃあ、ゾマリさんを殺すことなんて出来やしないよ。
数の無駄ってやつかな」

「見せかけというわけですか。片腹痛い」

「そうかも。では、コレの怖さを知らないゾマリさんに問題です。デデン！ この三百人ちよつとの私の中に、ゾマリさんの首を刎はねられる私の本来の分身は何人いるでしょうか。私本人も含めてね」

ケラケラケラケラ。ニルファイたちが一斉に笑い出した。楽しげに、愉しげに。もはや狂気までも感じさせそうなのは、同じ少女が幾人もいるというだけではない。少女は口の端を裂けそうなほど吊り上げて笑っているからだ。

無垢な光は眼から失われた。

残った無邪気は別の色を持ち、澄んだ金色の双眸を濁りらせて少女の心を蝕み、噛み続ける。

凄惨。その一言に尽きた。

「五体、でしょうか」

「ぶぶー、はずれー。正解は十二人でしたー。この刀で手足を切り落とせるから、よく覚えといてね」

その数に驚くよりも先に、ゾマリはこの大群の意味を理解できた。出来てしまった。

殺傷能力のある分身が、同じ姿をした何人ものニルフィの中に紛れている。幻影にはさほど力がないとはいえ、気を抜けばその隙に即座に凶器が襲い掛かってくるだろう。精神的に責めたてるのだ。

そんなゾマリを見て、堪え切れないというようにニルフィたちが腹を抱えるほど大爆笑する。ここに来る前の彼女からは想像できないほどに不敵な態度だ。もはや別人にしか見えない。

「ク、クフツ、アツハハハハハハハハ！ なにその顔、さつきまでの自信はどこいったの？ もっと頑張ってくれないと私が楽しめないじゃん。遊ぼうよ、もつと、もつと、さあ。空腹にしてよ、エスパーダ十刃さん。斬って解体して食べやすくしてあげるうちに、ね」

ニルフィたちが笑いながらゾマリへと接近した。それを五人に増えたゾマリが迎撃し、時折虚閃セロを使って偽ニルフィたちを消し飛ばしていく。それでも少女の群れから楽しげな笑みを消すことは出来ない。気の弱いものならば狂いそうな光景だ。

少しずつ、ゾマリの分身が消えていく。性能は良くとも、単純な数の暴力には耐えられなかったようだ。

ゾマリの体をじわじわといたぶるように、変色する斬魄刀が振るわれ続けた。

「舐めるな！」

喝かつ。それは音でありながら物理的な密度があつた。ニルフィたちがひるむ。

ゾマリが立ち直るように斬魄刀を構えなおした。分身を最大まで増やし、再度のニルフィの強襲を迎撃しようとする。

「あはっ」

掛かった。そう、幼い笑い声には含まれていた。

数いる幻影たちの外に、空気からにじみ出るようにしてニルフィの分身たちが現れる。その数は十二。最初から、幻影の群れには決定打を持つ存在はいなかったのだ。

両手を銃の形にして、彼女らは幻影の包囲網の中心へと腕を向けて

現れ、霊圧を瞬時に溜めた。

刀で戦うような発言はブラフ。虚言に惑わされたほうが悪い。最初からニルフィの頭には、相手を殺すためのビジョンしかない。

重光虚閃軍^{セロインフラユニット}

頭の大きさほどまで圧縮した虚閃の弾丸。それが無数に、あらゆる方向からゾマリへと弾幕として殺到した。幻像も巻き込みながら逃げ場を作らない回避など望めない計算もされている。ゾマリの分身はもう最大数であり、新しく作れない。

顔を歪ませたゾマリを虚閃の光条が呑み込み、音もなく破壊をまき散らす。

その余波は百メートル規模の柱を徐々に朽ちさせていった。瓦礫になることも叶わずに、塵としてどこかへと流されたようだ。

「ああ、肉くらい残すの忘れちゃった」

斬魄刀を鞘に戻しながら残念そうにニルフィが零す。

心底つまらなさそうに、足もとに転がって来た小石を蹴り飛ばした。

「——舐めるなど、言っただはずだ」

その声は唐突に、石材が溶けたことで噴き出し続けている煙の中央から届いた。

「鎮まれ『呪眼僧伽』」^{ブルヘリア}

クレーターの中央に鎮座していたのは、白くて丸い球体だ。まんま南瓜のように見える。その頂点の部分からまず左手が突き出し、次に右手、そして頭部から胴体にかけて現れた。

これがゾマリの帰刃^{レスレクシオン}なのだろう。全身が白いスーツに包まれ、頭部が顔の正面以外髑髏の仮面で覆われている。目元にも仮面紋が浮かび上がり、下半身が幾つもの人面を持つ巨大な南瓜の様に変化していた。かなり気味の悪さが際立っている。

しかしタイミングが遅かったのか、所々肉が焦げているようだった。

あの集中砲火に耐えたことにニルファイが驚くよりも先に、嬉しそうに顔をほころばせた。

「ああ、よかった、生きてたんだね。せつかくのご飯がペアになるところだったよ」

「……………はっ、はっ……………ぐう、おのれ……………！」

「キミは傲おごってたんだよ。きつと、最初は私のことを同格に考えて振る舞ってるって思ってたかもしれないけど、それが上から目線の行動なのね。あ、でも今は私が上から見てるや」

「……………成程。貴女のそれ自体も、すでに傲りであるとは……………気付いていない、ようですね」

「また手品？」

「いえ、その傲岸不遜たる貴女の醜悪に尽きる内面を、直々にすり潰して差し上げましょう」

ゾマリの全身の目が黒くなっていった瞬間、ニルファイは咄嗟ソニードに響転ソニードでその場を離脱した。虚閃セロをゾマリが放ってきてきても相殺する心づもりが、本能に従ってねじ伏せられ、回避を選択したのだ。

なにかが、起こった。

とても静かな変化なのか、攻撃でもないそれはどこかに破壊痕を残すこともない。

ニルファイが探査回路ベスキスで探るも、その痕跡は見つからなかった。

そして、ニルファイの右手が別の生物のように彼女の首元へと突き出された。少しだけ目を見開いてニルファイが自分の首を絞める己の右手を見つめる。華のような文様が手の甲に浮かんでいた。

「その右手は、既に私の物となりました」

背後に現れたニルファイへとゾマリが振り返りながら、勝ち誇ったように告げた。

「なに、これ……………？」

「全てのものには『支配権』があります。部下は上官の支配下にあり、民衆は王の支配下にあり、雲は風の支配下にあり、月光は太陽に支配下にある」

「……………」

「我が『呪眼僧伽』の能力は、その目で見つめたものの『支配権』を奪う能力」

アモール
愛

「これが、私の力です」

「まさか」

「私は貴女をもうすでに見ている」

ゾマリの複数の目が黒く染まると同時に、ニルフィの体に同じ数だけ文様が刻まれる。

見るだけならば、光と同じ速度を実現する。つまり遮蔽物のない場所ですべてと実質回避不可能なのだ。

左太もも、わき腹、左肩、右足の甲、胸。そして、頭。体への指示を出す部位が掌握されると、肉体のすべての支配権を奪われるのが特徴だ。

ニルフィから表情が抜け落ち、だらりと体から力が抜ける。

「どうやら傲っていたのは貴女のようなのだ。たしかに力はある。しかしそれだけだった。内なる狂暴性に踊らされ、呆れるほどの隙を晒した」

語り掛ける間にゾマリは体の節々の痛みをしかめる。重光虚閃軍で受けた傷跡は見た目よりもひどい。振動も含まれおり、体を内面からも破壊して塵にする、凶悪に尽きる攻撃だった。

こうして支配権を握っても、苛立ちが募る。

「この傷の恨みは、貴女にむごい醜態と痴態を晒させることで消しましょう。そのあとは私直々に首を刎ね、死を与える」

歯をむき出しにして、ゾマリが宣告。

その視線の先でニルフィがゆっくりと右手を持ち上がり、自分の死覇装に手を掛け、肌を覗かせてた。白く、歳不相応に艶めかしいような肌が露わになる。服がはだけて小さな肩が見え、そこを濡れたような黒髪が流れた。人形のようなだとは、使い古された表現ではあるが、今の少女にはとても当てはまる。

そうして彼女は――消えた。

「ねえ、良い夢は見れたかな？」

ゾマリの耳元で、失望がにじみ出ている幼い声で囁かれた。
バツと振り返るも、声の主の姿はどこにもない。せわしなく首をまわしながらゾマリが叫ぶ。

「どこだー！」

「そんなのどこだっついていいじゃん」

愛がアモール無差別に放たれ、壁や床や天井に文様が浮かび上がる。しかしニルフィの姿を捕えることは出来なかった。恐慌をゾマリは覚えた。

「ぐ……くそオツ！ 私の愛をッ。受ける！ 受ける！ 受けるオオオオオ!!」

「ああ、まったくね。いい破面アランカルの大人なんて、ここにはハリベルさんしかないみたい」

ゾマリの声だけが虚しく反響し、ニルフィの声があらゆる方向から聞こえてくる。

「少しは思い出してきたかな、昔のこと。それにバラガンさんのいたころの虚夜宮ラス・ノーチエスの姿も思い出した。バラガンさんの部下さんは怒ってたね。うん、私は前に藍染様と、東仙さんにも会ってたみたいだね……ああ、これは使えるかな、実験には面白そう」

「なぜだ！ 貴様は愛をアモール一身に受けたはずだ！」

「あれつてもちろん偽物だよ。というか、気づかなかった？ キミが最初に私を蹴った瞬間から、もう偽物にすり替わってたんだよ」

その事実にはゾマリは何も言葉を返せないでいた。今までの戦いが人形相手の茶番とは、夢を見せられていたようで現実味などあるはずもない。

「ねえ、自称手品師さん。もうネタは切れたの？」

「ぐ……ううー！」

「そっか、残念。響転ソニードの応用ぐらいしか学べることはなかったよ。じゃあ今度はゾマリさんが実験体になってね。安心して、ただ耐えてくれればいいからさ」

「なんだ！ なにをするつもりだッ！」

「真似だよ。記憶通りなら、これも使えるはずだから」

からかうような口調から一変し、寂れた空間に流れるのは悲しげな

旋律。

聞く者が聞けば、その危険性で身がすくむほどの。
『にじ滲み出すこんだく混濁の紋章。不遜なる狂気の器。湧き上がり・否定し・痺れ・瞬き・眠りを妨げる。爬行する鉄の王女。絶えず自壊する泥の人形。結合せよ。反発せよ。地に満ち己の無力を知れ。――破道の九十』

黒棺

光さえ奪い取るような闇色の牢がゾマリを幽閉した。彼の叫びも、悲鳴も、重力の奔流によってかき消された。

「オサレだよね、この技」

ニルファイが指を鳴らす。黒棺は崩れるように溶け、中からは全身から血を噴き出すゾマリが吐き出される。

守胚姿勢エル・エンブリオンという下半身に入って行なう防御をする暇もなかった。もちろん、ニルファイが与えなかったからだ。過去の藍染も、そんなことはしなかったから。

いつの間にか、ニルファイがゾマリの眼前にいた。

恐怖で反射的に愛アモールを使おうとしたゾマリは悲鳴を上げる。両目も含めて全身の目がすべて切り刻まれたからだ。もはや愛アモールは使えない。

「アツハハハハハハ！ ホントに最初の威勢はどこいったのさ！ ねえ、答えてよ、十刃エスパーダさん」

「じ、慈悲を……」

「慈悲。慈悲かあ……。そっか」

苦しみ悶えるゾマリを見ているうちにニルファイは醒めていき、落ち着きを取り戻していく。

一度、手の平へと視線を落とし、そして傷つき死にかけたゾマリを見た。

光を取り戻したはずのニルファイの目に、悲哀がよぎる。やってしまった。これが自分の本性だ。獣。ハリベルの言っていた言葉が頭に浮かんだ。

乾いた笑いが、ニルフィの体を震わす。

「ダメだったよ……私、変わる事なんて、できないよ」
独り言だ。

「でも、壊したのがキミでよかった」

安心だ。何しろ、相手は出会ったばかりの他人なのだから。これからあるはずもないのだが、目の前にいたのがハリベルやウルキオラだったらニルフィには耐えられなかっただろうから。ゆえに、心を痛める必要はない。

「私が戦った理由なんて、高尚なものじゃない。ただ殺されるのが怖かったから、生きるためにキミを殺そうとする。保身のために刀を血で濡らすし、食べるために肉を食いちぎる」

悲しげにニルフィが斬魄刀を右の逆手で抜いて、ゆらりゆらりと身体を揺らしながらゾマリへと近づいていく。

隠すこともしない霊圧にゾマリは反応した。

「く、来るなア！ 我等は同志のはずだ！ 仮面を砕き、力を手に入れた眷属であるはずだ！ それに、貴様は私欲のために刃を向けるというのか!? 忌避も、躊躇も、悲壮もなく！ 私を殺すのならば貴様はケダモノと同意義なのだ！ 違う？ それはただ思いついていからに過ぎない！ 畜生へと身を墮としたくなくば——」

言葉は続かなかった。

ニルフィの斬魄刀がゆっくりとゾマリの首に添えられていた。口の端をわななかせながらゾマリが潰された目でニルフィを射殺さんばかりに睨む。

「貴様のことを、藍染様は許さぬぞ」

「そう？ 藍染様が関心を持つのはキミみたいな弱者なんかじゃないと思うよ」

「藍染様が、いや、神が我らを創造なされたのだ！ そのうちの一人である私を斬るだど？ このクズにも劣る売女めがなにを」

刀が薙ぐように頭部を斬り飛ばした。

「ごめんね。——うるさかったから斬っちゃった」

回転しながら落ちてくる物言わぬ首をニルフィが左手で掴んで抱

える。血が服に付くことも躊躇わず、そつと抱きしめた。聖女のようにニルファイが微笑みを浮かべた。

「キミは気にしなくていいんだよ。だって藍染様が関心を持つのは強い人だけ。だからこんなところで死ぬような弱者になんて見向きもしないからさ。失望も嘲笑もされる価値はキミにないから、安心して寝ててよ」

刀を仕舞い、崩壊していくゾマリの肉体を見る。

「さて、早く食べないとなくなっちゃう。十刃エスパーダになる人ほど美味しいものはないんじゃないかな？ クツキーよりはおいしくないだろうけど、さ」

気を紛らわすように呟いて、ニルファイは口を引き結ぶ。

そうしないと涎よだれが零れてしまいそうだったから。

ピカピカの新しい十刃

新しい十刃エスパーダが生まれた。

その藍染からの簡素な報せだけで十刃エスパーダたちはとある広大な広間へと集められ、野次馬などは自由に足を運び、かなりの人数がそこにはいた。彼らは中央を円を描くように囲み、端の闇に紛れるように存在している。

彼らは見ていた。その新しい十刃エスパーダの実力を……。正確には、見ようとしたのが正しいのだが。

ゼロ・エスベヒスモ
幻光閃

薄暗い黒を消し飛ばすように、やけにカラフルな光が景色を染め上げ、視覚という五感の一つを完全に潰す。

気に入らないから。自分のほうが十刃エスパーダに相応しいから。ただ殺したいから。

そういつた理由で挑戦した九人の破面アラシカルも、目を完全に使い物にならなくさせられた。戦いに特化した彼らが動揺から持ち直すには、一秒さえあれば十分すぎるほどの時間だ。

そして捕食者が命をからめとるのには、たったの一瞬さえあれば余裕でもある。

オンスクロ・ソニード
虚楼響転

九人の背後に、九人の小さな人影が生まれた。

それらの影は予備動作なしの貫手を右手でつくり、突き出す。

鋼皮イエロを食い破り、肉を裂き、骨を潰し、そしてその下の心臓を破裂させた。

光が噴き出したのは一瞬のこと。集まっていた破面アラシカルたちはすぐに平静を取り戻し、なにが起こったのかを見定める。

目で捉えられたのは、心臓があるであろう部位から血を噴水のように噴き出す九人の挑戦者たちの姿。彼らは足の力を失うように床に崩れ落ちた。

最後に立っていたのは一つの小さな存在だけ。己の手の内を晒さず、しかし結果を作り出している。

上段にある身の丈を越した椅子に座っていた藍染が微笑を浮かべる。

「他に『彼女』に挑戦する者はいるかな？ 私としても頻繁に十刃エスパーダの座が変動するのは好ましくないと思っっている。『彼女』が十刃エスパーダに相応しくないと考える者がいれば、自らの力でその座を奪ってほしい」

返ってくるのは沈黙のみ。これで認めただけではないものもいるだろう。しかし異議を唱えるものはいない。

十刃エスパーダたちも特に何も言わなかった。

この場にいるのは九人のみ。いないのは第7十刃セフティマ・エスパーダ……『元』第7十刃セフティマ・エスパーダゾマリ・ルルーだ。彼は『彼女』に挑み、そして返り討ちにされていた。その事に憤る者はいない。少しばかりの悲哀、脆弱さを嘲笑う空気、無感情。そういつた反応はしても、生き死にを掛けて命を失うのは当たり前である。

訂正するのなら、この場には新入りを含めて十刃エスパーダが揃ったということだ。

「では、ニルフィネス・リーセグリンガーセフティマ・エスパーダを第7十刃セフティマ・エスパーダとして認めよう」

「え？ あ、はいっ、頑張ります！」

「これで君は皆に認められたはずだ。新たな十刃エスパーダとして相應しいとね」

「藍染さまの期待に応えられるようにします！」

気持ち悪そうに手にべちやりと付着した血を払っていたニルフィが、慌てて一礼する。

破面アラシカルにしてはかなり幼い姿だ。春風が吹いただけで飛ばされそうなほど、小柄な少女は儂げで華奢な肩をしていた。水に濡れたような光沢を持つ腰までの流麗な髪が色香を漂わせ、伏目がちの黄金色の双眸が無邪気かつ無垢な光を宿しているのが分かる。

仮面の名残であろう大きな角が、耳の上から髪を掻き分けて後頭部にまで沿うように伸びていた。

腹部で開いたパーカーのようなフードから所々覗く真珠色の肌は、傷を付けることなどおこがましいにもほどがある。

だからこそ、今しがた死んだ破面たちは挑んだのだが。

彼らはニルファイがこの広間へとやって来た時から憤りを感じた者たちだ。

十刃エスパーダとなったのが、よりにもよってこんな少女？　なぜ自分ではない。今でさえ挑めば楽に縊り殺して自らが十刃エスパーダとして咲くことができるというのに、と。悔りと傲りが感情を支配し、あらゆる要素に惑わされて命が消えてしまったのだ。

戦いの結果を外から見届けたバラガンは、あの九人と一緒に挑もうとした配下の血気盛んな若い破面アランカルへと言葉を掛けた。

「言つたじやろう、あの馬鹿どもと一緒になりたくなくば、見ていろとな。我が配下であるのならば犬死は許さん。貴様のような愚者を儂はいくらでも見ておる」

その破面アランカルは悔しそうな顔を見ると、元いた場所へと戻っていく。その態度は本来ならば不敬であるが、バラガンが咎めることはしなかった。

あの少女を初見で警戒しろというのが無理な話だ。バラガンでさえ、最初は油断をして痛い目を見ていたのだから配下の若者に強くは言えない。油断は戦いの中で最も忌むべきものなのだ。それを無意識に相手に刻み込むことに関しては、ニルファイほどのものはいないだろう。

それにゾマリが掛かったのか、それとも単純な実力差か。

どちらもだろう、というのがバラガンの予想で、それはたしかに当たっている。

「えっと、その、よろしく願います！」

ペコリ、と少女が先ほどの虐殺などなかったかのようにお辞儀した。

「改めて、私はニルフィネス・リーセグリンガー。どうかニルファイと呼んでね。ここではのんびり暮らしたいから、みんな仲良くしてね」
天真爛漫な笑顔のまま、手にくっついた血を霊圧で弾いて汚れを落とす。

背中を虫が這いまわるような錯覚をニルファイの過去を知っている

ものたちは受けた。

ああ、コレは昔のまま、バケモノとして生きているのだと。

ニルファイが藍染に呼ばれてここに入って来た時から、覚えのある特徴的な霊圧に身を震わせた。

久方ぶりに思い出した感情だった。これは恐怖だ。忘れもしない、絶対的な畏怖。

なぜここにいる。あのバケモノが。ありえない。死にたくない。喰われたくない。

姿形がいくら可憐で小さな花だとしても、彼らはもう騙されることなどしない。運よく生き残り、そしてその惨状を眼前でありありと見せられ、心を砕かれたのだから。

彼女の容姿を前にして、挑戦者が九人だけなのはあまりにも少なすぎた。

少し前にウルキオラが第4十刃クアトロ・エスパーダになった時も同様に挑戦がありはした。結果はウルキオラがこの場にいることで推して知るべし。そのことに警戒もしていたが、それを忘れさせるほどの人畜無害な容姿に釣られてしまったのだ。怯えを周囲に悟らせないようにするものとは違い、ただ単純に『アレ』に対して無知だったから。

彼らが共通に思ったことは単純に「勝てない。それだけだ。」

「おめでとう、ニルファイ、これで第7宮セブンティム・パラスは君のものとなる。世話のための下官はすぐに手配するが、君はまだこの虚夜宮ラス・ノーチエスに来たばかりだ。分からないことも多いだろう」

「だ、大丈夫です……」

「遠慮する必要はない。君は十刃エスパーダとなったのだからね。従属官フラシオンを付けることを薦めるすすが、何人ほど必要かな？」

「二人、くらいは必要になると思います。いきなり多くても纏められないので」

「そうか。——では、この場に彼女の下に従属官フラシオンとして就く者はいるか」

「えっ？」

そんな酔狂な人物がいるのかとニルファイの口から声が漏れる。彼

女は自分の姿をよく理解していた。そのため、こんな弱そうなヤツの下になろうとする人物がいるはずもないと思っただのだ。

「……俺がなろう」

いた。それも見覚えのある巖のような大男だ。

破面・No. 101 グリーゼ・ビステイー。彼が影から踏み出すように現れたことで、周囲の従属官フラシオンや他の2ケタの破面アランカルたちは少なからず驚きの気配を出す。プライドの高い元十刃エスバードが従属官フラシオンとなること以外にも、どよめきには理由があつたようだが、新参のニルフィには知りえないことだ。

藍染がグリーゼに訊く。

「いいのかい、グリーゼ？」

「……名を覚えて頂けていたことに至極恐縮」

「君のような人材が彼女の従属官フラシオンとなるのは驚きだ。しかし決めたのなら仕方がない。彼女の元で力を振るってくれ」

言葉ほど驚いているようには見えない藍染が頷く。それを許可と取ったグリーゼがニルフィの元へと歩み寄った。ビクリ、とニルフィが体を強張らせるも、グリーゼは目礼をするだけで特になにかするとはなかった。

「他に望む者はいるかな？」

藍染が目を眼下に奔らせた。

そこに、一人の紳士が足を踏み出す。整えられた髭ひげをしごきながら、おろおろしているニルフィを見据える。

「ふむ、これも何かの縁であろう。驚きもある。しかし！ 麗しきお嬢さんニーニョの騎士ヒネーテとなるのも、吾輩、やぶさかではなくー」

「はいはい、どいて！ アタシ、アタシがその子の従属官フラシオンになります！」

「へぶらっし？」

意気揚々と前口上を述べていたドルドーニは、背後からの突然の蹴りで吹き飛ばされた。

ドルドーニが床に倒れ込んだまま必死の形相をし、その人物へと向けて指を突き付ける。

「き、君い！ なにかね！ 吾輩の高貴かつ優雅なる登場を蹴り一つで潰すとは！」

「これは早い者勝ちですよ？ 競争相手は蹴落としたっていいんじゃないかしら。それを言うなら、あなたは蹴り一つで蹴落とされたってことになるわよ」

「むぐうっ！」

「それにレディーファーストが紳士の心情ですよ。あれ？ ここにいる紳士さんは、私に従属官フランチオンになる権利さえ譲ってくれないのかなあ？」

「ぐ、うおおおうつ、久しぶりの再会ながら、君はまったく変わっておらんようだ」

「お互い様、でしょ？」

クスリ、と笑って、その女が肩ほどまで伸ばした朱色の髪をかき上げる。

彼女を見て、広間にさらに動揺が生まれた。

破面・N.O. 110 アネット・クラヴェラ。伶俐れいりな美貌をした女型の破面フランカルだ。お淑やかな容貌に似合うような、ロングタイプのワンピースじみた死覇装を着ており、腰あたりまでの大胆なスリットからは妖しい色香の漂う太ももが覗く。

その中の秘境を一目見ようとドルドーニが首を伸ばし、その顔面がアネットの鋭い蹴りが炸裂した。

「ぶぐおっ!? は、鼻が！ 花のように散る！」

「ま、いいですよ。どうせどつちも十刃フリバロン・エスパード落ちなんですし、男と女だったら彼女にとっても女のほうがお得ですよ。ねえ？」

「う、うむ……。それでいいだろう。だからこのまま頭を踏みつけないでほしい。幼さへの誘惑を振りきったと思ったら、別の性癖に目覚めそうなのだ……。！」

「決まりね」

アネットがニルファイへと向き直り、少女へと歩み寄る。

二人のやりとりに引いていたニルファイは体を固まらせるも、彼女の前へとやって来たアネットはそっと視線を合わせ、優しい表情となっ

た。

「アタシはアネット・クラヴェラ。よろしくね、ニルファイちゃん」

「う、うん。よろしく」

「十刃落ちなんだけど、それでも従属官として認めてくれる？」
フリバロン・エスパルダ フラシオン

「地位とかそんなの、私はよくわかんないからさ。アネットさんも敬語なんて使わなくてもいいんだよ？」

「ありがとう！ 優しいわね！」

警戒を解いたニルファイはアネットに抱きしめられた。熾烈なのはあくまでもアネットの一面だけなのだろう。とても優しく、大切なものを抱くような抱擁だ。

ただし他の実力者以外たちの顔色は優れない。十刃落ちの変り種であるアネットは、唯一自分から十刃の座を降りた存在なのだ。エスパルダ トレス・シフラス
3ヶタの巢でもあまり目撃されない彼女がどうして表に現れたのかと、一様に猜疑的な視線を送り、そして考察する。

「スーハースーハー、きゃーっ、髪もすごい良い匂い！ お肌もこんなにすべすべでプニプニ、これは天国のもち肌か！ 涙目の顔も可愛くて、もうベッドの中で可愛がりたいよお！ ク、クツヘヘヘ、たまらんなあ、たまらんねえ、この慎ましやかな胸もさあ。こんな小っちゃくて可愛い娘と一緒にいるなんてもうー役得」

鼻息荒くだらしない笑顔のまま抱きしめている幼女をまさぐつている姿を見ると、すぐにでも考えることをやめてしまいたくなるのだが。

ニルファイは泣くのを堪えながらドルドーニへと視線を送るが、紳士は胸を押さええながら何かを抑えるのに必死のようだ。内なる衝動とかそういういったものと。これをアウトかセーフで表すならば、チェンジ！ と声高に叫ぶところなのに。

フラシオン
もう従属官にすると宣言した手前、撤回するのもはばかられた。その時にアネットに何されるか分かったもんじやない。純粹に身の危険で怖いのだ。

「決まったようだね」

言葉を失うような光景を前にしても、藍染のスルースキルは高かつ

たらしい。

「グリーゼ・ビスティー、アネット・クラヴェラ。両者を従属官として、ニルフィは第7十刃となる。これでいいかな？」

「い、嫌……………いえ、いいです。はい」

「それはよかった。では、ここで解散しよう。集まってくれてありがとう。あとは自由に戻ってくれて構わないよ」

愛染が去り、破面たちも各々に広間を出ていった。

眼帯を付けた非常に長身の男が去り際にニルフィを睨んだが、件の少女はいまだにアネットに弄ばれており、気付いてすらいないようだ。

グリーゼがそれを見かねてアネットを引きはがす。

「なによ、グリーゼ！ まだ可愛がつている途中なのに！」

「……………主も困っているようだ。それにまだ、正式な自己紹介すらしていないだろう」

「あ、そうでしたね。では改めて、と」

アネットは名残惜しそうに立ち上がった。ニルフィとしては解放されて万々歳である。

キワモノ二人の従属官がニルフィへと向き直った。

その立ち振る舞いは、さすがは元十刃といったところか。風格の漂う霊圧が、ただの無意識で空気を振動させるようだ。

「……………グリーゼ・ビスティーだ」

「えっと、その、さ。グリーゼさんはなんで私の従属官なんか立候補したの？ 私は主としても、あんまり褒められた性格じゃないんだよ。それに前にキミは私の配下になるとか訳わかんないこと言ってたけど、それもキミに勝ってからでしょ？」

「……………先の戦いを見た。見事な手際と評そう。本気とはほど遠いだろうが、あれで十分だ」

「そっか」

「……………時間があれば手合せ願いたい」

「初めての命令が『襲い掛かってこないで』になりそうだね」

戦いに独自の固執があるだけで、グリーゼの人柄は真つ当な部類に

入るのだろうか。

まともな部下を思わぬところから手に入れられて、ニルフィは付いていたかもしれない。

そしてニルフィは、どう考えても真つ当ではなさそうなほうのフラシオン従属官へと顔を向けた。嬉々として、アネットが胸を張る。

「もう一度言うけど、アタシはアネット・クラヴェラ。好きなものは可愛いもの。嫌いなものは筋肉ダルマよ」

じろり、とアネットが隣の筋骨隆々な大男を見た。

美人の怖い顔は迫力のあるものだが、グリーゼは熊のようにつそりどどこ吹く風だ。

「え、それじゃあ、なんで私のフラシオン従属官に？」

「もちろんニルフィ、貴女が可愛いからに決まってるでしょ！」

「わわっ!!」

「アタシはね、地位とかそういうのには無頓着なんですよ。それで自由でここで生きてきたワケなんです。貴女の下に付こうと思つたのも、言いようによつては暇つぶしみたいな。あ、でも忠誠はちゃんと誓うわよ。それを骨の髄まで教えてアゲル！」

「だ、ダメだって！ ひうつ、ふ、服の中に手があ……！」

「一目惚れよ一目惚れ。こんな可愛い子になら、身を尽くしてもいいかなつて。あ、信用してない？ なら教えてあげますよ、どれだけ本気かつてのを！ 貴女のカラダに、ね」

「や、やめてえ！ そこダメ、あうつ、ダメだって！ グリーゼさん助けてえ！」

「…… 承知」

「ちいつ、この筋肉ダルマ！ いまイイとこなのに！」

早くも騒がしい第7十刃の主従たち。セブティマ・エスパーダ

それを見ていたバラガンはやれやれと首を振り、せつかくなのだからと祝い事の一つでも言つてやろうと足を踏み出した。

『む……』

同じタイミングで、同じ動作をした者が他にもおり、彼らは眼を細める。

バラガンの右側のハリベルも、左側のアールニーロも、ニルフィの元へと歩いて行こうとしたところだった。

ならば一緒に行けばいいのだが、プライドの高いエスパー十刃である彼らはそれを許さなかった。

なんか小つ恥ずかしいとか、らしくないという意識がそうさせたのか。何気なく話しかけて思い出したように褒めてやるつもりが、それが三人ともなれば褒めるために意図的に近づいたように見られるかもしれない。

難儀なものだ。

どっか行け。

貴様こそ。

邪魔。

類見ない視線の牽制だった。霊圧が剣のように尖り、彼らのフラシオン従属官たちが身をすくませたほどだ。

彼らは先にニルフィへと近づこうとさらに足を踏み出し、

「リーセグリンガー、どうやら無事に終わったようだな」

思わぬ伏兵に撃沈された。

「あつ、ウルキオラさん」

「聞いたぞ。俺の宮に来るはずが、まったく別の所に辿り着いたらしいな」

「白々しいね。知ってるんだよ、キミも加担してたってことくらいさ。そのせいでこんなエスパー十刃にまでなっちゃって……」

「藍染様の計画だ。不満を言うな」

ニルフィたちの背後ではアネットとグリーゼが言い争っており、これからは心配になる。

「でも、いいのかな」

「なにがだ？」

「私なんかエスパー十刃になっちゃってさ。別に7の番号にはこだわりなんてないし、もしかしたらあの二人のことを率いることもおこがましいかもしれないんだよ」

「決めたのは奴らだろう。それを疑うこと自体が奴らへの裏切りだ。

それを知っておけ」

「…… そうなの？」

「喋りすぎだな。あとは自分で考えろ。お前の頭では理解までには及ばないだろうが」

「むつか、今度ウルキオラさんの宮の壁に落書きしてやるからね！」

「哀れなほど小さいな」

背を向けたウルキオラは一度も振り返らず、入り口の扉を潜っていった。

それに続いてバラガン、ハリベル、アールローロと、ニルフィも話しておきたかった人物たちがなぜか悔しげな空気を纏わせて出ていった。あとで挨拶参りに行こうと決心する。

「だいたいね、可愛い存在がなんでこの世にいてくれるか分かる？」

愛でるためよ！ 触りまくった手の感触思い出しながらご飯十杯はいけます！」

「…… 俺には理解できない性癖だ」

「性癖言うな！ 志向と言え！」

「…… 葬討部隊エクスエキアスに犯罪取り締まりの業務があれば、即座に捕まるな」

「ハッ、バレないようにやるからいいのよ」

「…… いつそ清々しいな」

なぜか新参の自分のためになってくれたフラシオン従属官二人の騒ぎをBG Mに、ニルフィが自分の両手を見下ろした。

「エスパード十刃、かあ」

虚夜宮ラス・ノーチエスに来たばかりの時には関係のない話だと思っていた。

けれど、エスパード十刃となった。手を血で汚して。命を喰らって。そうして犠牲の上に成り立つ。

それ以前だって、生きるための力を手に入れるために数えるのもバカらしい魂を喰らってきた。

「ぼちぼち、やってこっかな」

死なないように。楽しんで生きるために。時間はまだある。

自分の中で答えを見つけてるのは、のんびりやっていけばいいだろ

う。

断れない性格なので

「ーこうして少年は、数々の困難を掻い潜り、無事に少女の元へと万病を治す薬を持ち帰ったのです。」

その時にはもう、少女の体はほとんどが石になっていました。

少年が少女の手を握ると、その冷たさが伝わります。

一縷いちるの希望をかけて、ほとんど動かない口にゆっくりと薬を流し込みました。

すると、なんとということでしょう。

少女の体は温かさを取り戻し、以前のように笑えるようになったではありませんか。

病は影もなく治りました。

二人はとても喜び、互いを抱きしめ合います。

めでたし、めでたし。

本が静かに閉じられる。

大団円のハッピーエンド。機転しりぞという名のご都合主義で危機を退け、食傷気味にありきたりな物語。なんのひねりもない、そんな他愛のないもの。

椅子に座ったアネットの膝の上で、現世から取り寄せた絵本を読み聞かせてもらっていたニルフィ。少女は従属官フランシオンに尋ねた。

「ねえ、アネット。この人たち、このあとどうなったの?」

従属官フランシオンだからという理由で、アネットはさん付けされるのを拒んだ。グリーゼも同様で、他の十刃エスパーダの知り合いもバラガンを除けばOKが出ている。まあ、バラガンに関してはニルフィがさんを付けないといけない気がしたからだが。

「そこまでは書いてないわね。幸せに暮らしたとかじゃないですか」アネットが答える。

登場人物の中で、主人公はただ『少年』とだけしか呼ばれていない。

これも名前を呼ばれず『少女』とだけ書かれた女の子が体が石になる病に罹り、『少年』がそれを治すための薬を手に入れる物語だ。

ドラゴンを出し抜いたとか、鬼を斬ったとか、そういう部分にニルフィの関心はない。

「どうして、この男の子は自分から危機に飛び込んでいったの？」

「そうしないと女の子を助けられないからですよ。大切な人のために命張るって、ロマンでしょ」

「大切って、どんなふうによ？」

「ええっと、それは……」

視線を逸らしながらアネットが言いよどむ。

『少女』はただ『少女』としか呼ばれず、『少年』にとって恋人だったのか肉親だったかのかまでは、この絵本には記されていない。

恋愛。友愛。親愛。そのほかのどれのために『少年』が動いたのか、はつきりしていないのだ。夢のない言い方では、報酬として大金を貰えるからだとか、そういった理由でもあるかもしれない。

さすがにそこまでアネットはストレートに言わず、多少ぼかす。

「きつと、失いたくないぐらい大切だと思います」

アネットは仮面の名残である、朱色の髪が流れる頭の横から目立たないように見え隠れする羽飾りをいじった。本当は別のことを言うとうとした。けれどそれを言っても何も変わらないと、無難と思える受け答えをしたのだ。

「大切、かあ」

そこまで、『少女』は『少年』にとって、自分の命よりも重い価値があったということか。

ニルフィとしてはありえないと考える。命があつてのもうけものだし、自らの能力も確実に生存するためのものに特化しているからだ。理解は出来ないはずだ。それでも胸にもやもやとする、しつくりこないものが居座った。

「さて、次はどの本を読みますか？」

「んーっとね」

ニルフィは自分の部屋に届けられた巨大な箱の中を漁っていく。

すべて現世のものだ。中には小説やおもちゃなどが雑多に詰められていた。

娯楽がないなら取り寄せればいいじゃない。そんな考えから、ニルファイは現世のものを藍染から貰っていた。普通の破面アランカルならばこういった道徳を学ぶものなど邪道以外の何物でもないが、ことニルファイに関してはそれが当てはまらない。

便利だし、楽しめる。それだけあれば彼女にとっては十分だった。

「この本はさつき読んじゃったし、あ、この『人生ゲーム』揺りかごから墓場まで』って面白そう……あれ？　こんなの頼んだっけ？」
ニルファイが箱の中から服を取り出した。

サイズは小さく、ニルファイにはぴったりだろう。黒のワンピース、フリルの付いた白いエプロンを組み合わせたエプロンドレスに、同じく白いフリルの付いた猫の耳を模したカチューシャ。

堪え切れないと言った様子のイイ笑顔でアネットが言った。

「それは現世では『猫耳メイド』なる服ですよ、アタシが頼んだの。かしくかせてあげるのもそるわね。ささ、着ちゃって着ちゃって」

「……この薄くて体にフィットしそうなのは？」

「それも現世の、『スク水』なるものですよ。その背徳感で今からでも興奮しているわ。オプションでランドセルなるものもあります。ささ、着なさいな」

「……着たらどうするの？」

「それはもう舐めまわすようにというか実際に舐めまくって可愛がってあげた後にベッドに抱えていって布団にもぐりこんでたつぷりドツプリ他人水入らずなほどにあーんなことやこーんなこととして足腰立たなくさせるわね。それがなにか？」

エマーゼンシーコール。緊急事態ともいう。ニルファイの頭の中で警報を壊れそうなほどに鳴らす。

アネットの言っていることは少しも理解できない。けれど身の危険を、あろうことかなぜか自分の従属官フランオンからびしばしと伝わってくる。

即座にニルファイは部屋を埋め尽くす数に増えた。文字通りの人海戦術で、アネットを押し流すように大量の実体を持った幻影が、勢いよく地面に投げつけたスーパーボールのごとく部屋中を飛び回る。そつ……と、ニルファイが姿を消したまま部屋を出た。

「わっふ!? さてはアタシをかわい死にさせるつもりだな! 柔らかいお腹、マシユマロほっぺ、くりくりの大きな眼! ああもう、抱きしめ心地も最高。アタシの天使が天国に連れて来てくれたみたい!」半狂乱のアネットの声がニルファイの背中に届く。いまだに、あの従属官がなにを考えているのかニルファイにはわからない。少女が可愛かったから。それだけしか理由を言わないが、他にも隠し事をしてるらしいのはなんとなく察している。

決まってそんなとき、アネットのいつもの天真爛漫な笑顔に悲哀が含まれるのだ。

自分に執着している理由もそれが関係しているのかもしれない。といっても、あの状態のアネットが素に戻るまで時間を潰そうと、ニルファイは自分の宮を飛び出した。

ラス・ノーチエス
虚夜宮のどことも知れぬ廊下をてってけと歩く小さな影。

終わりの見えない廊下に徒労感を募らせながら、ニルファイは不安そうに周囲を見回していた。

アランカル
端的に、迷った。
他の破面も見当たらず、ニルファイの軽い足音だけが寂しい通路に反響する。

「だれか〜」

呼んでも返事があるはずがない。
どうして宮を飛び出してきてしまったのか。アネットのセクハラから逃げるためとはいえ、セフティマ・パラシオ第7宮の中でも隠れる場所はいっぱいある。

アネットの温かい優しさが、すぐに恋しくなった。あの従属官も暴

走さえしなければ、ニルファイにとっては良き姉のような存在なのだ。グリーゼも寡黙で怖かったが、話してみるとただ口下手なだけで、必要なことを言う前に口を閉ざすから誤解されやすいだけで。

「……………」

ニルファイがふいに立ち止まった。

心細さと寂しきで、目に厚い涙の層ができる。すぐにでもこぼれてしまいそうだ。

強さなどではどうにもできないことだつてある。

カツン……………」

背後からの靴音に、アネットかグリーゼが迎えにきてくれたのかと、それはもうパアツと顔を輝かせてニルファイが振り返る。

そして凍結させられたように固まった。

そこにいたのは全くの別人で、さらには危険な雰囲気を纏わせていたからだ。

襟の後ろが大きく丸く伸びている長身で長い黒髪の男。左目の眼帯の隣には、ぎらつく眼光を宿した三白眼。見た目からして凶悪そうな人相をしている。

そんな男が目を細めながら威圧的にニルファイを見下ろしているのだ。ビビるなというほうがどうかしている。

「アア？ うぜえガキかと思えば、新しい十刃サマ^{エスパーダ}じやねえかよ」

霊圧を高圧的に発散しながら、男はニルファイへと顔を近づけた。怯えながらニルファイは壁際まで追い詰められ、男が壁に右手を突いて彼女が逃げられないようにしたことで、小さな体を震わせる。

男の背後にいた右目に眼帯を付けた従属官^{フランゾン}が見かね、男をいさめた。

「ノイトラ様、絵面的に完全に犯罪者です」

「テメエは黙ってる！ テスラ！」

テスラを一蹴したノイトラと呼ばれた男は、蛇を思わせる一睨みでニルファイの顔を舐めまわすように眺める。

「ゾマリの野郎を殺ったつてのが、テメエみてえなヤツだとわよ。笑わせてくれんじやねえかよ、オイ。貧相な体で精いっぱいの色仕掛け

して、油断したトコをチョイ、か？」

「……………」

「ハッ、だんまりかよ」

怯えたまま活路を見出そうとするニルフィ。

ノイトラを見るのは初めてだが、その視線に含まれた棘は、以前の

第7十刃セブティマ・エスパーダに正式に認められた際に感じたものだ。友好的ではない。

隙さえあれば、容赦なく潰す算段を持った視線。

「わ、私に、なにか用なの？」

「丁度いいから顔を拝もうと思っただけだ。別に取って食いやしねえよ。それともなんだ？ 襲われるとでも思っただか？」

「…………… うん。そう言うなら、殺気を抑えてよ、ノイトラさん」

「つれねエやつだな」

斬魄刀らしいものをノイトラは所持していない。隠している気配も同じくなかった。けれど油断したら、目の前の男から虚閃セロなり拳なりが、ニルフィの顔めがけて飛んできそうさ。

「気に入らなかつた？ 私エスパーダが十刃になつたこと」

「気に入らねえ、だと？ そりやそうだろうな。ゾマリの野郎が死んだことには何も言わねえ。けどな…………… メスが調子に乗るなよ」

「乗つてないよ」

「それが調子こいてんだって言つてんだ。まア、藍染サマからはやんちゃは止められてるからな。ここぞなにかしようってわけじゃねえ。けどなー背中には気を付けとけよ。どっかのバカみてえに、頭がパカッとイツちまいたくなけりやあ、なア」

「…………… ツ！」

いままでの威嚇のようなものとは段違いの霊圧が、ニルフィの矮軀に叩き付けるように生まれた。

思わず攻撃をしそうになる。しかしニルフィが先手を取れば、ノイトラはそれを理由に嬉々として殺しに掛かってくるだろう。

何も出来ず、ただプレッシャーに晒されるのかとニルフィが身を強張らせた。

そんな時だった。通路の奥から誰かが歩いてやって来たのは。

「なんだノイトラ。てめえにガキをいたぶって喜ぶ趣味があったなんて、初耳だぜ」

馬鹿にするような物言いに、ノイトラが顔の不快さを隠そうともせず、にそちらを見やる。

ニルファイも、やって来た人物の顔を、涙のにじむ視界に収めた。

右顎を象った仮面の名残を着けた、端正な顔立ちに水浅葱色のリゼント風の髪をした不良風の男。ショートジャケット風の死覇装を着ており、腹部にある孔が覗いていた。

「アア？ 随分上からな物言いだなア、グリムジョー」

「知るかよ。それより俺は、ガキをいたぶって楽しいのかって訊いてんだ。こんな辛気臭え場所で雑魚みてえに振る舞ってんのが目障りなんだよ」

「チツ、王子サマ気取りってか？」

どうやらこの二人は仲がひどく悪いようで、顔を合わせただけで殺気を飛ばした。

ノイトラが興醒めというように舌打ちし、ニルファイから離れた。最後に一度だけ見下ろすと、弧を描く笑みをさらに深めるように顔を歪ませる。

「せいぜい、気を付けろよ」

「……………」

押し黙るニルファイを鼻で笑うと、ノイトラが興味をなくしたかのよう、に足を踏み出した。

「戻るぞ、テスラ」

「ハッ」

背を向けて通路を行ってしまったノイトラをテスラが追っていた。

重圧から解放されたことにニルファイはほっとするものの、新しくやって来たのがグリムジョーというまさにヤンキーな男であることに、恐る恐る彼の顔を見上げる。

ニルファイが十刃^{エスパーダ}であることに多少の警戒はあれど、グリムジョーの目には敵意などはなかった。

思わず、口をついて言葉が出た。

「あ、あの！ ありがとうございます、助けてくれて」

「勘違いすんなよ。俺はあの野郎が気に入らなかつたからやっただけだ。お前のことはどうでもいい」

「でもつ、あのままだったらノイトラさんに何されてたか……」

「お前も十刃エスパーダなんだろう。気に入らねえなら気に入らねえって、ちゃんと言葉で言いやがれ。でないと、アイツを付け上がらせるだけだ」

無愛想な物言いながら、ちゃんと忠告をしてくれた。根はいいというか、曲げたりはしない性根なのだろう。グリムジョーの言葉に偽りはない。

「私、ニルフィネス・リーセグリンガー。最近、第7十刃セブティマ・エスパーダになったの。よろしくね、グリムジョーさん」

グリムジョーはしばらく何とも言えない様子で顔をしかめていた。邪気のないニルフィの笑顔。それがなにか調子を狂わせてくるようだ。なぜ自分になんの警戒もなくそんな表情ができるのかと訊きたいくらいなの、それほど無邪気な、グリムジョーが初めて向けられた笑顔だ。

しかし、ついに口を開く。

「……グリムジョー。グリムジョー・ジャガージャック。第6十刃セスタ・エスパーダだ」

なぜ、自分も名乗り返したのか。それはグリムジョーにもわからな
いことだ。

金色の双眸を、この時だけは直視できなかつた。

「第6十刃セスタ? キミとお隣なんだ。すごい偶然だね」

「かもな。それよりニルフィネス。てめえはこんなトコで何してや
がつた? ガギが来る場所じゃねえぞ」

「……今度から私のことはニルフィって呼んでね。ま、それはとも
かく、迷っちゃったの。適当にぶらぶらしてたらノイトラさんに捕
まって、それでグリムジョーさんが来てくれた」

「帰れんのか?」

「んー、無理かも。オジさん、あ、トレス・シフラス3ケタの巣にいる人とか、ハリベ

ルさんの所で道を教えてもらおうと思っただけど、そもそもそこに辿り着けるかどうかもわかんなくなっちゃったの。遭難だね」

グリムジョーにはなぜニルファイが楽しそうに話すのか理解できない。頭の中に花畑でもあるのだろうか。いや、そうに違いない。でなければ、自分の目を見ながら真つ直ぐに話しかけてくるなど、とても正気とは思えないからだ。

アランカル 破面たちに恐れられているのはグリムジョーも理解している。

それは十刃エスパーダ全員にいえることであり、彼らが顔を突き合わせれば殺伐な空気を醸し出すことになるだけだ。

ニルファイのようにここまで無警戒に笑顔を向けてくるものなどいない。

だからこそ、グリムジョーは戸惑っていた。それを押し殺すように、少女に背を向ける。

「……チツ、付いて来い」

「えっ？」

きよとんとしたニルファイの顔に苛立ちが生まれた。それは単にムカついたとかではなく、わざわざ自分の口から言うことへのらしくなさを隠すためのものだったのかもしれない。

それをグリムジョーが素直に認めるはずもないのだが。

「いいか？ 俺は第6宮セスタ・パランソに戻るつもりだ。このまま知らねえフリして、ここでうろちよろされてんのは目覚めが悪い。ついでだ、ついで」
呆けたような表情のままニルファイが遠ざかっていくグリムジョーの背中を見つめていた。

「さっさとしろ」

「う、うんっ」

怖い人かと思えば、さっきのノイトラとはまったく違う。

歩幅の違うニルファイが懸命に小走りに追ってきているのを見て、グリムジョーが少し歩を緩めてくれたりした。ぶっきらぼうな言葉で勘違いしてしまうが、ニルファイに対しては悪意などがなく分かる。

「……………」

「……………」

廊下に響くのは無機質な靴の音だけ。

手の寂しさからニルファイがそつとグリムジョーの死覇装の袖を軽く掴んでも、彼は何も言わなかった。

愛想がないように振る舞う背の高い青年。俯きがちに健気にそのあとを追う少女。

なにも知らない第三者がこの光景を見れば、兄弟か、はたまた親子にでも見えてしまうかもしれない。

グリムジョーのやっていることを見れば、彼を知るものなら『ありえない』と口を揃えるはずだ。言われなくとも、グリムジョーだって理解している。柄にもないことをしていると。

ニルファイの目には、純粹な好意。子供特有の、少しとはいえ優しくされたからといった理由で生まれた穢れのない感情は、ねじまがった根性の持ち主でなければ拒みがたい。

何を言いたいかといえば。

かなり直情的な性格のグリムジョーでは邪険にできなかった。それだけである。

グリムジョーの隣を歩きながらニルファイが彼の顔を見上げた。そのことに気づいているはずだが、グリムジョーは何も言わなかった。

開けた場所に出ると、ニルファイの探査回路エスキスに覚えのある霊圧が引つかかる。

「ニルファイ、大丈夫でしたか!？」

響ソニード転で移動していたアネットがすぐにニルファイの前に現れた。伶俐な美貌を焦燥に染め、そつと主を抱きしめる。いつものいやらしさなどはない、ただ優しさだけの抱擁だった。

「ああ、たしかに本物の匂いがする」

変態的な言葉は口から出たが。

「霊圧が大きく揺らいだのを感じたから、ホントに心配したわよ」

「ごめんね、アネット。勝手に外に出ちゃダメだって約束破っちゃった」

「……………いいんですよ、アタシも大人げなかったので。ただ貴女が無

事でいてくれたことが、なによりも安心できますから」

ホツとした微笑を浮かべるアネットが顔を上げ、隣にいるグリムジョーを見た。

顔見知りなのか、口を開く様子に戸惑いはない。

「ありがたい、グリムジョー。まさか貴方がこの子を連れてくるなんて。見ての通りすごい無防備だね。襲われたりしてないか、まあ普通なら襲った馬鹿が死ぬでしょうけど、なにかあったりとかって思ったら心配でした。もしかして貴方、ロリコンじゃないの？」

「さて、最後おかしいだろ！ 礼のためにやったわけじゃねえけどな。繋がってねえだろ、それまでの言葉とよ！」

顔をしかめながらグリムジョーがアネットを睨みつけた。

「でも、珍しいわね、グリムジョーがわざわざ連れて来てくれたなんて」

「それがどうした。何しようが俺の勝手だ」

「ニルファイ、変なことされなかつた？ 言うなって釘刺されてるだけで、怪しいイタズラとか身におぼえない？」

「俺をなんだと思つてやがる」

「だつてホントに珍しいからよ。ていうか、この子の霊圧乱れた時になんかされてたのは事実なんですよ。ニルファイはね、イヤなことされてもイヤな顔できないイイ娘なのよ。そんなことも分からずにむやみにセクハラする輩は、この世に存在する価値なんてないわ」

「その理論でいきやあ、真っ先に死ぬのはめえだな」

その苦い顔は、苦手な相手を前にしたようなものだ。しかしこれが彼らの挨拶のようなものなのだろう。どちらかといえば短気なグリムジョーは呆れたように受け答えしている。

長い付き合いなのだろうか。

そのことを考えると、ニルファイはなにか面白くない感情が胸の中に渦巻いた。その名前を彼女はまだ知らない。

「アネットは、グリムジョーさんの知り合い？」

「ええ、そうですよ。アタシが十刃エスパーダにいた最後の期間に、同僚として知り合つてました。面白い人ですよ」

「てめえにとつてな」

「ふうん」

「ニルファイ？ どうしたのよ、拗ねちゃって」

「なんでもないよー」

「ならこの膨らんだ頬はなんですかー？」

風船のようになっていた頬が、アネットに挟まれてしぼんでいく。

観念したかのように、消え入りそうな声で呟いた。

「…… 私より、二人とも仲良さそうだから」

アネットはその答えに微妙に目を見開いた。

子供っぽいニルファイの仕草に苦笑し、優しく頭を撫でる。硝子細工でも扱うような手つきだ。

言い聞かせるように感情を染み込ませていく。

「心配しなくても、貴女のことを邪険になんてしませんよ。それに、一人になんてさせませんしね。一人は、悲しいものですから」

静かに紡がれた言葉にグリムジョーは舌打ちし、さっさとこの場を去るために響転ソニードを使おうとした。

咄嗟に声を大きくしてニルファイが呼び止める。

「グリムジョーさんー！」

「……… なんだ、チビ」

「ーありがとうね」

喉に骨がつつかえたような顔をしたグリムジョー。苛立たしげに頭を掻き、深いため息。

「今度から迷うな」

それだけ言い残して響転ソニードを使った。

ニルファイはしばらく青年のいた場所を見つめていたが、一度領くってくるりと体を反転させた。静かに死覇装の裾が舞い、落ち着く。

「私たちも帰ろっか」

「ええ、そうしましょう」

「……………」

「今度第6セスタ・バラシオ宮に遊びに行きましようか」

「ホント!?!」

「ええ、きつと（主にアタシが）楽しめると思うわ」

グリムジヨアの知らぬところでは、とても小規模で派手さのない、しかし彼にとつて面倒極まりない計画が進んでいた。

——そういえば、訊きそびれちゃったなあ。

強い存在と会えば必ずしようと思っっている質問。それを今さらながら思い出し、しかしニルフィはまた会う時に訊けばいいかと考え直す。

グリムジヨアならば、きつと何かを掴ませてくれる気がした。

それだけの予感を胸に、ニルフィは手の中に残る温もりを忘れぬように握りしめる。

動き出す関係

セスタ・バラシオ
第6宮。

その宮の主、グリムジョー・ジャガージャックの姿はその最上階にあつた。

長短さまざまな太い柱が乱立する広間だ。そのうちの一本の上に腰掛けていたグリムジョーは、階下からの振動に舌打ちをする。

別の柱の上に佇むたたずのは、左目から頭部にかけて横長の鎧のような仮面の名残を着けた辮髪で長身の男性。グリムジョーのフランシオン従属官、アラシオンアラシオン・カール・ウンデシーモ破面・No. 11 シャウロン・クーファンが口を開いた。

「どうやら、デイ・ロイとナキームが抜かれたようだな。霊圧が弱まった」

「わざわざ言わなくて分かってる」

噛みつくようにグリムジョーが返す。苛立ちを隠さないその顔は、元が整っているだけにだいぶ迫力があつた。

慇懃無礼なフランシオン従属官はそれを見て、自身も呆れの色を隠さない。

「グリムジョー、それほどまでに嫌ならば、この宮を離れて別の所を散策してきたらどうだ」

「俺に逃げろだと？ 知った口を利くんじゃねえ」

「なにも逃げろとまでは言っていないだろう。あくまで彼女らは客人だ。貴様が会うのが嫌というのなら、こちらで普通に迎えるものを」

「俺が気に入らねえのは、アイツらが我が物顔で俺の宮に入つて来ることだ」

「とてもそうは見えんがな」

「なんだと？」

そこまで言ったとき、階下のさらに激しい振動でグリムジョーが口をつぐんだ。

霊圧の高まりが物理的な力をもって宮を微動させている。

「熾おきろ『火山獣』」

「突き砕け『蒼角王子』」

全力で追い返すように言っている、破面・No.13エドワード・リオネスと、破面・No.15イールフオルト・グランツが、斬魄刀を解放しようだ。

そして数合の爆碎音。

結果は、彼ら二人の霊圧が急激にしぼんでいくことで、見なくとも察せる。

盛大な舌打ちを聴き、シャウロンは肩をすくめた。

「お転婆な姫君に会うのがそんなに苦手か」

「ああ？ 俺がどこのどいつのなにを苦手だって……」

「姫君を前にした貴様はなかなかの見物だったぞ。それを分かって、先程から我々は気の抜けた防衛をしているというワケだ。彼女らに本気で掛かっていったわけがないだろう」

「てめえら、覚えてろよ」

「だが、彼女の純粋な好意は本物だ。ひとえに貴様のお人よしが招いた結果。悔いるのならば、少し前の自分の行動を悔いろ」

「――クソッ」

だんだんと近づいてくる霊圧が二つ。

どちらもグリムジョーにとっては苦手な存在だ。

昔から知っている方は……認めたくはないが、たしかに相對したくはない。害という存在ではないのだ。けれども、あのペースに乗せられるとすぐには抜け出せなくなる。

そしてもう一つの、最近知り合った小さな霊圧。

グリムジョーですらよく分からないが、とにかく相手をするのが苦手なのだ。どう接すればいいのか知らないし、あの感情豊かな表情に自分がどう反応したらいいのか戸惑う。

あの時、関わらなければよかったかもしれない。迷っていたのなら、そのままほっとけばよかったかもしれない。

けれども同じ時間を十回繰り返せたのなら、グリムジョーはその十回とも『彼女』を助けただろう。

それを自分で確かめるあたり、もう末期かもしれない。

「だからそこまで嫌がるのなら、あとは我々に任せればいいと前から言っていたはずだ。貴様のいない間、我々が適当にもてなして、適当に帰らせると」

「何度も言ってるだろうが。んなこと出来るか。この俺がネズミみてえにコソコソと」

「……もしやと思うが、あの姫君がいるからかな？ アネット嬢だけならば、以前は問答無用に姿をくらましていたくせにな。我々としても、姫君の悲哀で涙に濡れる顔を見なくて、とても助かつてるが」
「くだらねえ勘違いすんな！ そんなんじゃねえ！」

今の表情こそが何よりの証拠だと指摘しようとしたシャウロンが、ふいに扉のほうへと顔を向けた。

重厚な造りであるはずのそれが、遠慮のなく開け放たれる。

隙間からは二人分の人影が見えた。

「来ましたよー、グリムジヨー」

「えと、ごめんください……」

元気がいいのは、ここまでグリムジヨーのフラシオン従属官たちをなぎ倒してきたアネット。曲がりなりにも元エスパーダ十刃の実力は伊達ではないらしい。

愉しくて仕方がないといった表情のアネットが、自分の主であるニルフィを抱えながら部屋へと入ってきた。

「帰りやがれ」

「ちよつとくらしいじゃない。アタシたちと貴方の仲でしよう？」

「どんな仲だ。てめえらと仲良しこよしするつもりなんざ、こっちはハナからねえんだよ」

「ご、ごめんね、グリムジヨーさん。私、アネットに何度もやめようって言ったんだけど」

「……そう思うなら、自分の下のヤツの手綱くらい握ってやがれ」
非常に申し訳なさそうな顔のニルフィから視線を逸らしながらグリムジヨーが言った。

悪意があるのなら、グリムジヨーもそれ相応の態度で臨むことが出

来る。

しかし今はどうだ。悪意がないと分かっていたら、本気で怒ることさえできない。

「そういうの、まだ勝手が分からなくて」

「あら、この際ですし、グリムジヨールからアタシの手綱の握り方を教えてもらえばいいんじゃないですか？ 仮にも先輩だからね」

「俺には未だにためえの扱い方すら分からねえよ。取扱説明書よこせ」

「ないわよ、そんなイージーモードを強要するブツなんて。ま、手取り足取り相手してあげて。ニルフィも、アタシやグリーゼとだけしか交流を持たないのはかわいそうだし」

「まて、なんで俺が……！」

「グリムジヨールさんは……イヤ？」

「……………」

どうすればいいのか分からなくなり、硬直してしまっているグリムジヨールを置いて、アネットはシャウロンの隣へとやって来た。

「デイ・ロイたちも大根役者ね。呆気なくここまで辿り着きましたよ」

「至極、恐縮。こちらとしても、なにも無い日々を退屈していたところですから。グリムジヨールにもいい刺激となるでしょう」

うやうや
「恭しい動作でシャウロンが答えた。」

「なんにせよ、あの姫君の存在は希少だ」

年長者二人が見守る先で、少女と青年のぎこちなく、それでどこことなく微笑ましいやりとりをしていた。

エスパーダ
「とても十刃同士の交流とは思えない。」

「こちらの主はそれとなく焦りを持っていたのでね」

「アタシは彼の『王』になるって思想は否定しませんよ」

「グリムジヨールにとっては思想に過ぎないわけがない。決戦の時も近い。かつてこの地で無為に過ごした日々と比べれば、まさに矢の如し。それでも時が我々には足りないのだ」

グリムジヨールの力を得る理由は、『王』になるため。

それもバラガンのような王の在り方ではない。孤高の王だ。

アネットも成り行きでグリムジョーとシャウロンたちが出会った時のことを耳にしており、少しばかりは理解しているつもりだ。

まだグリムジョーが『王』であろうとしていることを。そしてそれが達成される前に、すべての決着がつくかもしれないことを。

「焦燥により足もとを掬すくわれることを危惧していたが、あのように姫君が彼の肩の力を抜いていただければ、少なからずは安心できる」

「ガツチガチに固まってるけど」

「見間違いでしよう」

「それもそうね」

ニルフィを無碍むげにもできずに、無愛想を装いながらも話を聞いているグリムジョー。

従者二人はそのやり取りを見て、口の端を吊り上げた。

これは愉悦だ。内心困り果てているグリムジョーを、麻婆豆腐でも食いながら見ていたい。

「それでねっ、今日はグリーゼに剣術を教えてもらってたの!」

「てめえの戦い方は闇討ち奇襲だろうが。いずれ怪我するぞ」

「真つ当な戦い方ってやってみたくなくてね。でもやっぱり途中でやめちゃった」

「だろうな」

「そもそも刀で大剣の剣術を習おうとしたことが間違いつて気付いたから」

「そっからか」

ニルフィたちの会話を聞きながら、アネットがシャウロンに顔を向ける。

「そっちにも情報来てるでしょ?」

「ええ、なんでも現世の死神の実力調査でしたか」

「ウルキオラだけが行くはずだったみたいですけど、ヤミーの筋肉達磨もセットでニルフィも行くことになりました」

「おや、こう言うってはなんですけど、調査だけならば第4クアトロ・エスパーダ十刃一人でも十分だと思うのですが。いくら注目枠だとしても、十刃三人とは過

剰では?」

「ヤミーは単に暇だから。ニルファイが行くのはもう一つ、彼女の戦闘経験の向上が目的みたい」

新しい第7十刃セフティマ・エスパーダに不足しているのは、記憶が失われたことによる戦闘経験の欠落だ。ゾマリとの戦闘はほとんど本能的なものだったが、今のままでは力に不安があった。

アネットやグリーゼが模擬戦をしているが、従属官フラシオンに甘さを残しているために、ニルファイは彼らと本気を出して戦うことを拒んでいた。

適当な2ケタや十刃プリバロン・エスパーダ落ちでも、ニルファイの実力を引き出せない。かといって今の時期に十刃エスパーダと戦わせるわけにもいかず、結果的に外部の敵対勢力にぶつけるのが効率としていいわけだ。

「……ふむ、私としては、貴女は反対するかと思っただのですが」

「リスクとリターンを考えたの結果よ。主を危険な目になんてホントは合わせたくないわ。大切なものが傷つけられるなんて、もう懲り懲りだし」

「難儀なものだ」

姫君に髪の毛一つでも傷をつけて帰ってくれば、ウルキオラもただではおかないだろう。

隣の女性の霊圧が炎のように揺らめくのをあえて無視し、シャウロンが肩をすくめる。

「しかし現世には、戦えるほどの霊圧を持つ人間がおよそ三人ほどだけ。たしか『黒崎一護』でしたか。三人のうち彼だけが脅威でしょう」
「さあね。藍染さまはそう言ったけど、アタシの勘がそれだけじゃないって囁いてる」

「……………ああ、女の勘というものですね」

「いまアンタ、アタシの性別忘れかけてた？」

「コホン、ともかく、貴女が言うのならその通りでしょうな」

おそらく今の十刃エスパーダとも渡り合える実力を持つであろう女の言葉に、シャウロンはたしかに同意した。グリムジョーの陣営で唯一頭脳の役割を果たす彼も、それとなく予期していたことだ。

「身分からしてみれば私は貴女よりも下だ。しかし従属官フラシオンとして長い間、主の傍にいた者からの言葉です」

だからといって、なにかが変わる訳では無く、

「ローロが主をあともう少しだけ、信頼なさってはいかががでしょうか」
プライドの高い十刃^{エスパーダ}たちは、過去にも今にも下の存在から心配されることを嫌う。

それは自らが絶対だと思っている力を侮辱されかねない行為。だからこそ従属官^{フラシオン}は必要以上に言わずに後ろを付けてくる。

ニルファイは決して、下からの言葉を無碍にはしないだろう。信頼しているからだ。

けれど今のアネットでは、その信頼関係が絶対のものとは言えないだろう。

「ご忠告、ありがとうございます。なにせ従属官^{フラシオン}になるのは初めてですしね。今まで無茶する側にいたものですから」

頭の横に付いた羽飾りのような仮面を弄り、バツが悪そうにアネットがそつぽを向く。

そうすぐに踏ん切りは付かないが、他者の言葉でもややもやる気持ちを納得することが出来たかもしれない。

「大切だからこそ、ね」

グリムジョーと話し続けていたニルファイの視線が、少し離れた場所にいるアネットに投げかけられた。

それにアネットは、自然に笑い返すことができたはずだ。

時間は少し経って、ニルファイは別の場所に移動していた。
第10宮^{ディエス・パランオ}のとある広間。

現在のその宮の主がいるには相応しくない、活気に満ち溢れた声が響いた。

「ほら、いけっ！」

「アン…」

ニルファイが投げたfrisbee^{ホロウ}を追って、小さな犬のような虚^{ホロウ}が駆け出す。

ほどなくして見事なジャンプでのキャッチ。

千切れそうなほど尻尾を振りながら戻り、転がるようにニルフィの胸に飛び込んだ。

「あははっ、イイ子イイ子」

「キャン、キャンッ！」

舌で少女の頬を舐める子犬。くすつぐたそうにニルフィは身じろぎし、けれどそれ以上に嬉しそうに子犬を撫でまわす。とても微笑ましい光景だろう。

子犬の名は、クツカプーロ。破面・No. 35にして従属官フラシオンという立場を与えられてここにいるが、戦闘能力は皆無であり、小さい虚のように霊子に満ちた虚ウエコムント圏では呼吸だけで栄養を賄え、食事を必要としない。

そんなか弱い存在が、この虚ラス・ノーチエス夜宮で生きていけるのか。

答えはイエスだ。クツカプーロの主の存在が最もな理由である。

「ぐはああく、食った食った」

ニルフィではとても抱えられないような大きさのどんぶりが、重厚な音と共に床に置かれた。その振動が少し離れていたニルフィにも伝わった。中身が入っていたらどれほどの重量だったのだろうか。

「うわ、早いね。ちゃんと味わって食べたの？」

「こういうのは腹が膨れりやいいんだよ。味なんざ不味くなきゃあ、それでいい。グズグズ言ってるヒマあんなら、そのクソ犬と遊んでやがれ」

下顎骨を象った仮面の名残を着け、辮髪をしている色黒の巨漢で濁赤色の眉をしており、頭部には角のように突き出た部分がある。そして何よりも特徴的なのは、その巨軀。ヒトとしてならばありえないほど、彼は巨大だった。

破面・No. 10 ヤミー・リヤルゴ。アール・ノーロと同じ、第一期エスパーダ十刃の生き残りである。

ヤミーは新しい皿を下官から受け取り、乗せられたこれもまた巨大な料理を口に運びながら、ニルフィが自分の従属官フラシオンと戯たわむれる光景をつまらなさそうに見ていた。

「…… 驚いたな。お前が人を招き入れるなど」

「あのクソ犬の相手を黙ってしてくれんなら、願ったり叶ったりだ」

「…… 変わらん」

「変わってどうする。こちとら、テメエのせいでもまだ本調子じゃねえんだぞ」

壁際にいるヤミーの隣には、腕組みをしながら少女と子犬の戯れを静観しているグリーゼの姿。

子犬がいるということでニルファイが挨拶がてら、デイエス・バラシオ第10宮に突撃したのが事のはじまりだ。

幸いにも、グリーゼはヤミーと面識がある。いくら粗野かつ粗暴な性格でも、機嫌さえ損ねなければ理由なく力を振るわないことも知っていた。邪魔さえしなければ爆発しない爆弾のようなものである。

その点、アネットのようなタイプとは相性が悪い。あえなく彼女は留守番だ。

「てめえがあのガキの下にいるなんてな」

「…… 十分な力があると判断した。それだけで、我が主となるのに理由ともなる。気付かないものが多いだろうがな」

「硬えなあ。俺にとつちやあ、ありやゴミだぞ」

「…… 主の侮辱をするな。そして探査回路を鍛えろと他の者に言われぬか？ あの霊圧の操作能力は、おそらく歴代の十刃にも同じことは出来まい」エスパーダ

「強ささえありやあ、俺には関係ねえよ」

男たちがそんな会話をしているとは知らず、ニルファイはひとしきりクツカプーロをモフった。毛並みがよく整っており、触るだけでも至福。小さな命があるという微かな温かさが心を和ませてくれた。

子犬は遊び疲れたのか、ニルファイの腕の中でうとうとし始める。

それを見ているとニルファイも意識が飛びそうだったが、辛うじてそれに耐えた。

「そういえばヤミーさくくん」

「あん？」

空になった皿をその辺に投げ捨てたヤミーが、じろりとニルファイを

見下ろした。

少女は立っているというのに、座っている大男の方がまだ高い。

「突然だけどさ、キミにとって強さってなに？」

「強さだあ？　んなもん、決まってるだろ。最強かどうかってことだ」
「最強かどうか？」

「俺が最強だ。それだけあれば、それでいいんだよ。てめえも含めて、俺以外の十刃エスパーダは全部ゴミだ」

当たり前前エスパーダのことを話すかのように、新しい食料を手でつかんだ大男は言った。

第10十刃デイエス・エスパーダであるはずのヤミーがここまで豪語できるのは、第10十刃デイエス・エスパーダであると同時に第0十刃ゼロ・エスパーダの称号を得ているからである。

十刃エスパーダは、1から10までの数字で出来ているのではない。
0から9だ。

その点で言うと、ヤミーは十刃エスパーダの中で最も強いということになる。ニルフィとしてはあのバラガンの『老い』こそが滅茶苦茶だと思うのだが、ヤミーはそれ以上の能力でもあるのかと考えてしまう。見たところ直接攻撃系。相性が最悪だ。

まあ、十刃エスパーダの順位は戦闘能力ではなく、殺戮能力という点で評価されるものだ。

あくまでその点で、ヤミーはバラガンを凌駕しているのだろう。

「俺が最強系なのか？」

「なんだよ、チビ。文句でもあんのか？」

「ううん、なんにも。私は訊いただけだから、口を挟むのは失礼だしね。……でも、今のヤミーさんって、もしかして本調子じゃない？」
「ああ、そうだ。そこらのゴミの頭を潰せば、いつもなら股まで裂けるんだがなあ。今じゃただ頭を叩き潰すだけだ」

実際に試したことがあるのだろうか。

訊こうとして、やめた。答えなんて分かりきっているからだ。

「それじゃ、準備もあるし私はこれで行くね。クツカプー口と遊ぶためにまた来るよ」

「ああ、来い来い。このクソ犬が俺にまわりつかねえように、ガキら

しくたつぷり遊んでやがれ。俺の居ねえところでな」

追い出すような仕草して、ヤミーはまた食事に没頭した。

ニルフィは彼の体にほんの少しずつ霊力が戻ってきているのを感じながら宮を出る。ヤミーとは現世に向かう時に一緒に行く同胞だ。人となりはわかったし、情報としては十分かもしれない。

デイエス・パラシオ
第10宮を背後に自分の宮へと戻る。

空中を進みつつ、ニルフィは寡黙な従属官に、なんとなく訊いた。

「グリーゼさんにとってさ、力つてなに？　今まで聞いてなかったんだけど」

「……力、か」

フ……と、グリーゼが微妙に笑ったような気がした。

「……無ければよかったもの、だろうな」

「無ければよかった？」

ニルフィは金色の目を瞬かせた。今までのどの答えとも違う、前提からして別であるグリーゼの言葉に興味が湧く。

「私が言っても説得力ないだろうけど、グリーゼさんはすごく強いよ？　3ヶタの巢で初めて会った時だって、戦えって言いながら全然本気なんか出してなかったくらいだし」

フリバロン・エスパーダ
その状態のまま他の十刃落ちを一蹴したのだ。

本能的に理解していたからこそ、ニルフィはほとんど反撃せずに逃げに徹していた。

「……称賛の言葉は素直に嬉しい。だがしかし、俺は長いこと見てきた。こころざし志半ばで散る者、無様に命を乞う者、生にしがみつこうとする者たちを」

きつと、バラガンがこの虚夜宮を藍染に明け渡してから続く、そういった負の連鎖をグリーゼは目にしてきたのだろう。

「……血で血を洗い、さらに血で化粧をする。それを愚かしいと思っただけではないが、我々アランカルに力がなければ、もしかしたら必要のない命まで果てることはなかったはずだと考えてしまう」

「でもグリーゼは今まで生きてきたんでしょ？」

「……そうだ。なまじ力があつたためにな。エスパーダ十刃の座を奪われた

ときも、命が助かってしまった。——ようやく死ねると、思ったのにな」

「後悔してるの?」

「……直球だな。だが認めよう。悔いを残していると」

グリーゼはニルフィの頭を包めそうなほど大きな手で拳を作った。軋きしみの音が、ニルフィの耳に届く。

「……疲れていたんだ、このまま生きることには。お前ならば俺を殺せるんじゃないかと思っていたんだがな」

「そんなの、最初から今まで思ったことないよ。それにこれからもキミの命を私は奪おうとしない」

「……わざわざ言うあたり、面白い奴だ」

「そうかな」

「……ああ、そうだ。だからこそアネットはお前を選び、そして俺も同じだ」

言葉を切り、息を吸う。

「……主よ、覚えておけ。我々は常に孤独だ。それを受け入れてくれる存在を欲す、小さな弱者でもある。力があるがゆえにな。死神も、ただの魂魄でさえも、元来の虚しさを抱えている我々にはないものを持っている。それが俺には、ひどく羨ましく思う」

今でこそ虚ホロウは破アランカル面として群れているが、それも藍染の統合の結果でしかない。普通ならば、出会い頭に命を奪う関係であり、今は単なる偽りの馴れ合いだ。

ニルフィはしばらく無言で飛んでいた。

ふいに、笑顔になる。いい名案を思い付いたような、そんな顔。

「——じゃあ安心してよー! 私がいる限り、キミを一人になんかしなだよ。ゼツタイに孤独なんて思わせないし、それに一人でいたってつままないでしょ。それが主として、私ができる報酬だから」

本心からの純粋な光を持った言葉だ。

幾度の考察を重ねた結論でもなければ、神からの助言でもない。

ただ少女の言葉であることに意味があるのだ。

「……そうか。なら、俺も安心できる」

ニルファイを主として悔いはない。それだけを思い、グリーンゼが深く頷いた。

「…… アネットの奴にも聞かせてやれ。泣いて喜ぶぞ」

「うんつ、仲間外れなんかにしないよー!」

セブティマ・バラシオ
第7 宮を目指しながら、二人の主従は偽りの青空の下を飛んでいく。

しかし、交わす言葉に決して嘘など含まれない。

—————

その数時間後、クアトロ・エスパード 第4 十刃ウルキオラ・シフアー、デイエス・エスパード 第10 十刃ヤミー・リヤルゴ、ならびにセブティマ・エスパード 第7 十刃ニルファイネス・リーセグリーンガー。

その三名が虚圏ウエコムンドに開いた黒腔ガルガンダへと足を踏み入れ、姿を消した。

止めどなく

暗くて、昏い。そんな場所。

そこは霊子の乱気流が荒れ狂い、落ちればどこか人知の至らぬ場所に飛ばされる。

黒を凝縮させたようなその最奥からにじみ出るように白が三つ。ウルキオラ、ヤミー、そしてニルファイという十刃^{エスパーダ}たちだ。

先頭を歩くのはウルキオラ。それ自体が発光するような、そして彼の性格を表すような無駄のない整いすぎた霊子の足場を進んでいく。霊圧の操作が雑なヤミーは、足場を作らずにその後ろを歩いていく。

そしてニルファイといえば、一見なにも無い場所に立っているように見えるだろう。しかし本当は拳一つ分の丸い足場を次々と作っている。その上を野兎のように跳ねながら移動していた。コストはほとんど掛からない、しかし緻密な操作が必要な業である。

「ねえ、ウルキオラさん」

「なんだ」

「おなかすいたー」

ウルキオラは懐から小さな包みを取り出す。包装からして高級そうな、そしてそれ相応の飴玉が入っている。アネットから無理やり渡されたものであり、曰く『ニルファイに持たせると勝手に食べるから』と、ウルキオラに管理を投げ出したのだ。

一つ取り出し、ニルファイに向けて放り投げた。

「わ、ブドウ味」

「現世にはもうすぐ着く。あとはそれで我慢しておけ」

口に飴玉を放り込んだニルファイは、その言葉で少し眉を下げた。

「でも、ホントに行くの？ 噂で聞いたんだよ。現世って怖いところだって。それに私たちの行く日本って、頭があんぱんの未来から来たサイボーグとか、次元の空間を超越した青いタヌキがいるんだってや」

「問題ない」

「そうなの？」

「問題があるのはお前の頭だけだ」

「あ、ひどい」

サイボーグとかが本当にいれば藍染も何かしら言ってくるはずだ。
ヤミーがくだらなさそうに鼻を鳴らす。

「そんなくだらねえ野郎共も一緒くたに潰しちまえばいいだろうが。
暇も一緒に潰せられんなら、俺は文句ねえけどな」

「じゃあ最初から最後までヤミーさんの影に隠れてよっか」

「リーセグリンガー、忘れたのならもう一度言う。お前をわざわざ現
世に連れていく目的は……」

「うー、はいはい、分かっているって。ウルキオラさんは私のお母さんか
何かなの？ 私、説教は嫌いっ」

「それが嫌ならもう少し、いや、もつとちゃんとしている」

ちゃんとしていると言われても、ニルフィの精神は外見に比例して
いるため、十と少しを数えたくらいの少女らしい考えをしている。子
供に大人の真似をしると言うほうが無理なのだ。

無理やり話題を逸らそうとする。

「でもさ、私たちっていきなり三人で現世に行くんでしょ？ 何者
だって言われたら、なんとかトリオって答えておく？」

「勝手にしろ」

「じゃあ三バカでいいっか」

「数あるチョイスの中からなぜそれを選んだ」

言いあっているうちに空間内に光が差す。ガルフンダ黒腔の口が開いた。

その明るさは闇に住んでいた身としては染みるものだ。ラス・ノーチエス虚夜宮
にも青空があるとはいえ、あれはどこまでいっても偽物。自然の温か
さが隙間から漏れるようで、ニルフィは引き寄せられるようにそこへ
近づく。

「日の光って、こんなにあったかいんだね」

澄み切った青天に掛かる薄い雲の筋の向こうに、白い光をさんさん
と巡らせる太陽がそびえていた。

無機質でしかない虚ウエコムンド圏ではまず目にするのがない命が、ただそ
れだけで感じられる。流れ込む空気に、土や、木や、水や、生物の匂

いが混ざり合っていた。生きている。その実感が、アランカレ破面となつてから初めて感じられたのだ。

記憶は長い時の流れに晒された。そして今でさえ虫食いの状態。だからこそ、初めて見る光景すべてにニルフィの心が惜しげもなく歓喜の声を上げる。

ガルガンダ黒腔から飛び出した。かなりの上空らしい。しかし吹きすさぶ風はニルフィにはなんの障害にもならなかった。

緑が彼方まで広がっていた。小さな鳥が群れとなり、少女の遙か足元を通り過ぎる。聡い獣の視線がおぼろげに感じられる。

「来て、よかった……かな？」

乱れる黒髪を抑えながら、ニルフィが呟いた。

なぜこうも嬉しいのだろう。かつてない景色を目に収めたからか？ 命の息吹を肌で感じられたからか？

どれにしろ、身を震わせるには十分な衝撃が込められている。

「かあ、面付いてた頃に何度か来たが、相変わらずこっちはつまんねえ処とこだなあ、オイ」

あくび交じりにのたまったヤミーの顔を、ニルフィは全力で殴りたくなった。ムキになって否定する。

「全然つまんなくはないよ」

「そうか？ あんま意味のない場所にしか思えねえけどな」

意味のない場所。その意味を考えようとして、ニルフィは眼下のある一部に目を止めた。

灰色の、もしくは鉄色の街。それだけ言えば無機質に聞こえるかもしれない。しかしそこに住む人間の静かな活気が、これほど遠くに居ても感じられる。

たしかに生きているだけなのは無意味なのかもしれない。しかし時折、満たされるような感情がそこかしこで、絶えることなく伝わってきた。あくまで虚ホロウの基準というだけで、人間たちは彼らにとって充実した生活を営んでいる者が多いのだろう。

——私も、あの中で暮らしたことがあるんだ。

そう思うと、一抹の寂しさ。

彼らの感じる『愛』や『繋がり』とは、どんなものなのだろうか。ニルフィは自分が破アランカル面であるからこそ知りえないことだと諦めた。

「さっさとしろ、お前たち。下りるぞ」

「……はい」

感傷に浸るのもこれつきりか。もしかしたらまた現世に来るかもしれない。今度、藍染にこちらへ来れるように頼んでみよう。

「ウルキオラさんは、こういう光景ってどう思う？」

「どういう意味だ」

「どうって……」

無感動かつ機械的。そんな返答にニルフィは口を閉ざす。

「俺にはこの光景のどこが綺麗で、どこが心に響き、どこが素晴らしいのかが分からない」

空虚に、そしてどこか諦観の念が含まれていたのかもしれない言葉。

おそらく、それはニルフィの気のせいだ。これ以上ウルキオラに尋ねても、今はまだ収穫は何もないだろう。

「行くぞ」

ウルキオラは霊子の足場を消失させ、地面へと落ちていった。スタイリツシユに直立体勢だ。ヤミーも自由落下を始めた。惜しむようにニルフィは周囲の光景を目に焼き付け、森の中へと飛び込んでいく。

地面が急速に近づいてきた。

その時のことを、ニルフィはこう評した。

「……爆発。えつと、そうだね。爆発。それが一番正しい表現だろうね。きつと少し全力を込めてたんだと思う。仮にも最上級大虚の私が、加減も知らずに超上空からブレーキもなしに落ちていったから。ましてや、破アランカル面になった私の霊圧って少ないワケないでしょ。けど臆病だった。地面に激突する寸前に、その私が思わずちよつと全力で叩きつけちゃったよ。

うん。木っ端微塵だったさ。何がって？

ウルキオラさんとヤミーさんがいた地面だよ」

ブレーキ代わりに圧縮して圧縮した虚閃^{セロ}を地面に放ち勢いを殺したニルフィ。

ちょうど、ウルキオラとヤミーがいた間をそれは通り抜けた。ただでさえ二人の落下で生まれていたクレーターが、さらに深くえぐられるようになっていいる。そこから生まれた暴風が上空へと巻き上がり、たまたまあった雲を散らした。もし最初に地面が器状になつていなかったら。きつと発生したインパクトが山をハゲにしていたはずだ。

「このチビ助エ!! いきなり何しやがる! 殺すつもりか!」
「むみやあ~~~~」

未だ冷めやまぬ土煙の中から巨大な何かが飛び出す。

自分が作つた衝撃波でぐるぐると目をまわしているニルフィを、ヤミーが掴み上げていた。ヤミーにしろ、怒るのさえもはや忘れていいる状況だ。到着してほっと一息ついたら虚閃^{セロ}である。

「そこまでにしておけ。これだけ騒げば、標的も情報通りならここにやってくるはずだ」

土埃を払いつつ、ウルキオラもクレーターの外へと上がつて来た。

霊子が薄くて息もしづらい。空気に混じつた不純物の存在が、虚閃^{ウエコムンド}にいたからこそありありと分かる。

しかしそこから命の存在を感じられ、整つた自然環境であることが伺えた。

「しっかしこのクソチビが…… あん?」

ヤミーが不満たらたらに周囲を見回した。三人の着地地点にちらほらと人間が集つており、顔に浮かべていいるのは好奇心や興味といった感情。

いきなり山頂付近ではじけ飛んだ地面に引き寄せられたのだろう。彼らは破面^{アランカル}たちの姿を視認できない。まあ、もし視認できても、クレーターから出てきたのが奇妙な服を着た青年と巨漢と幼女という、いまいち主旨の理解できない存在に首をかしげるだろうが。

「見せモンじゃねえぞ、てめえら」

「俺たちの姿を見ているワケじゃないだろう」

「それでもイラつくんだよ、アホ面を晒してしゃあしゃあと見られん

のはな。吸うぞオラ」

「さて、魂吸ゴンスイをするならリーセグリンガーにやらせろ」

「なんでだよ」

「コイツには些細なことでも経験させておいたほうがいい。藍染様からの指示でもある。現世にコイツを連れてきた目的を忘れたか？」

舌打ちをするも、ヤミーはニルフィの柔らかい頬を手加減して指でビシンツとひっぱたく。

「ふぶうッ!?!」

手加減しているとはいえ、彼女にとって大威力なものには変わりない。

頬を撫でさすりながら抗議の顔をするニルフィにウルキオラが視線を合わせる。

「ひ、ひどいよっ。なにをするのさ」

「リーセグリンガー、聞け。これからお前に魂吸ゴンスイをやってもらう。加減はしなくていい」

「魂吸ゴンスイ? 私が? 出来るかな、そんなの」

「ああ、やれ」

魂吸ゴンスイとは、虚ホロウが魂魄を食べることを指し、また上位の存在となればただ吸い込むだけで弱い魂魄を喰らうことができるものだ。

怪訝そうな顔のニルフィは、すっかり土煙の晴れた地面の上に降り立つ。

気配を探れば、この山に近づいてくる人間がそこそこ。周囲一帯の人間が騒がしく動いているのも分かる。ニルフィの好んだ日常の活気ではない。心の奥でつまらなく思う。

それを表に出さずに、ニルフィは一度息を吐き出し、そして軽く吸う動作をした。

魂吸ゴンスイ

空気が軋きしみと悲鳴を上げる。変化は静かに劇的に。目に見えるものでは、山頂付近にやって来た人間たちから半透明の物体が浮かび上がり、それが体から引きはがされる。

「ご、ア……!?!」

「げえッ！」

「ひヴいッ」

断末魔とも呼べないような声を漏らして命が刈り取られた。

周囲の数いた人間たちが一斉にかしづくように膝を突き、倒れ込む。彼らの魂魄はニルフィの小さな口の中に滑り込み、捕食を完了させていた。

しかし彼女の食事は未だに止まらない。いや、歯止めが効かないように思える。

上空には既に、数えるのもバカらしいほどの魂魄の群れ。町の一部を全滅させたことにも繋がる結果だ。数は優に千を超え、留まる事を知らずに母体から離れた魂魄が集結した。

空を覆い隠すようなそれらがニルフィへと向かっていき、彼女の口内に滑り込み、ガリガリと嫌な音を立てながら削られて腹に収まっていく。

不運だった。犠牲者となった人間はそれだけの要因で理不尽を突き付けられた。

ニルフィはたしかに人間の営みに興味があつたが、あくまで日常生活の中のことだ。好奇心や恐怖心に踊らされてしばらく冷めやまなくなつた魂には興味がない。

「けほっ」

全ての魂魄を食べきり、ニルフィが腹に手を添える。

なんの感慨もなく、犠牲者たちに慰めにもならない一言。

「うん、おいしくない！」

「当たり前だ。そんな薄い魂が美味いわげがないだろう」

口直しに一つ飴玉をニルフィに投げやってウルキオラが言った。そして視線を少しずらす。

「しかし驚いた。案外近くに、取りこぼしがあるようだな」

「え？」

目を瞬かせながらニルフィもそちらを見る。

一人の少女が木陰で倒れ込んでおり、今にも崩れ落ちそうな魂の脈動が彼女の命を繋いでいた。

ボーイツシユな風貌の、白い道着を着込んでいる。彼女の周囲には同じ道着を着た人間が転がっている。弱弱しい動きが際立っていた。表に出ているかどうかにしろ、魂魄の力が他の人間よりも強いのだろう。

「ご愁傷様としかニルファイは言えない。道着を着た少女の元へと、ヤミーが近づいて行ったからだ。

「ウルキオラー！ こいつか!？」

「馬鹿か。お前が近づいただけで魂が壊れかかっているだろう。ゴミの方だ」

「…… ちつ、んじやあ、生き残ったのはたまたまっか。くだらねえ。ニルファイ、もつとちやんと吸い上げろよ」

「そんな卑猥な……」

道着の少女は焦点の合わない目で、ヤミーがいるであろう場所を見つめている。

ニルファイの耳には虚ホロウと比べればおそろしく弱い魂が折れていく音が聞こえていた。苦しそうだ。これならば先の魂吸ゴンスイをもう少し手加減なくやっていたら、一思いに死ねただろうに。

「そっかよ」

興味を失くしたヤミーが左足を振り上げた。彼にとって、暇つぶしにもならない獲物はゴミでしかない。

空き缶を蹴アランカルとばすような気安さで、命をも蹴り潰す。搾取する側であるのは破アランカル面だから。

「…… この世に運があるのなら。あの少女には宿っていたのだらう。ニルファイの魂吸ゴンスイから生き残ったことが、命を長らえさせた。たった数分ではなく、これからの命を育むために。

「ラツキスエルテ、ってね」

静観していたニルファイが零す。

少女の命を奪うはずだったヤミーの蹴りが、漆黒の右腕によって止められた。

「ああ？ なんだあ？」

ヤミーが足をどけると、右腕を異形に変形させた浅黒い肌の体格の

良い男が見える。

「おおい、ウルキオラ！　もしかしてコイツかあ？」

「ヤミー、お前、もうちよつと探査回路を鍛えて自分で判断できるようになれ。そいつも、塵ゴミだ」

「ハッ、そうかい！」

二人がそんなやりとりをしている間に、新手の茶髪で巨乳の少女が取りこぼしの少女を抱えて離脱しようとしていた。

「……　井上、話した通り、有沢を連れて下がってくれ」

「うん、無理しないでね……　茶渡くん」

黒い右腕を持つ人間が、破面ブレンカたちの視界から二人の少女を隠すように立ち塞がる。ウルキオラは何もせずに見ているだけ。ヤミーは歯をむき出しにして異能者と相対。

「ねえねえ、どこ行くの？」

そしてニルフィは、去ろうとする二人の少女の前に笑顔で姿を現した。人間には目で追えなかっただろう。道着の少女に肩を貸していた茶髪の少女が息を飲んで立ち止まる。

「井上！」

「おいおい、いきなり背中見せんのかよ」

「ッ！　茶渡くん！」

ヤミーが茶渡という異能者を足止め、いや、仕留めたようだ。黒い右腕は無残に破壊され、あれでは再生などとても望めそうにない。茶渡も気絶して地面の上に倒れ伏す。

井上と呼ばれた少女は囲まれたことを歯噛みした。

しかし、

「双天帰盾！」

ヘアピンから飛んだ二つの羽のような物が井上から離れた。攻撃かと、ニルフィは警戒する。しかし二つの物体は茶渡のほうへと飛んでいき、楕円形の盾で覆って内部を光で満たす。

見たところ治癒の効果だろう。しかしあの怪我では意味がないとニルフィが思った時、ありえない現象が発生した。

散り散りになった右腕が寄り集まって、元の形に戻ろうとしている

ではないか。

——模倣は……無理か。

いつもの癖で、面白そうな技ならば真似できるかとニルフィは解析をして、そしてすぐに諦める。アレはただの回復能力ではない。時間回帰や空間回帰の能力に似ているが、それも違う。ただただ異質で、井上特有の能力であることしか理解できなかった。

「ウルキオラさん！ コレ、凄い珍しい能力だよ！ 藍染様の所に連れてかない？」

「必要ない。それも塵^{コホ}だ」

にべもなくウルキオラが言い切った。

ニルフィは警戒を解いてない井上に好奇心で構成されたような金の双眸を向ける。

「初めましてお姉さん。私はニルフィネス・リーセグリンガー。ニルフィでいいよ。それでお姉さんの名前を教えてくださいるかな？」

「…… 井上、織姫」

「オリヒメさんかあ。いい名前だね」

「あなた達は何者なの？ どうして、こんなことをしたの？」

織姫は苦しげにニルフィに問いかけた。恐怖と苦悩。魂がそれらに覆われてきている。

それはそうだろう。いきなり同族である人間が予兆もなく魂を喰われ、その光景を目の前で見えてきたのだから。

ニルフィは形のいい顎に手を当て、

「どうして、どうしてかあ。うくん、そうだね。あ、一分くらい待ってよ。それっぽい理由を今から考えるからさ」

「…… ツー！」

「キミは命が失われる時、それにいちいち理由を付けるのかな？ 理由がないと死んだらダメなの？ 私はそうは思わないよ。だって、キミの背負ってるその、アリサワさんだっけ？ 彼女もたまたまここに居たから死にかけてるだけだし」

「そんなのって」

「それと私たちが何者かって質問に答えるのなら……」

「そこまでしておけ、リーセグリンガー」

静止の声に、ニルフィは分かりやすく頬を膨らませた。実質的に初めて見る人間と話をするのが興味深かったし、これから他にも訊きたいことを訊こうとしたところだ。織姫も答えておかないといけないと思っっているからそれに越したことはない。

しかしウルキオラには全て時間の無駄にしか見えなかったようだ。

「はあ、分かったよ。じゃあオリヒメさんに質問するね。——キミの知り合いに、この町に住んでいる死神はいるかな？」

「なんで、黒崎君を」

「あ、ビンゴみたいだね。それで続けて質問。そのクロサキさんって、今こつちに近づいてきている霊圧の持ち主のことなのかなあ？」

隠し事などに織姫は向いていないようだ。なんにも言わずとも、その表情だけで答えが分かってしまう。

そうと決まればニルフィはウルキオラに提案した。

「ウルキオラさん。これでクロサキさんは近づいてきてるってことでいいでしょ。オリヒメさんたちを解放しようよ、別にあとはいらないから」

「このくだらん騒ぎで釣れたのは驚きだが、まあいい。勝手にしろ」

「いいのかよ、ウルキオラ？」

「構わん、元から殺すのは一人で十分だったんだ。女、とつとこの場から消えろ。そしてリーセグリンガーに感謝しておけ」

何を言われたか分からないように織姫は口元を震わせ、辛うじて言葉を絞り出すことが出来た。

「あなた達は、黒崎君をどうするつもりなの？」

「殺すに決まってるだろうが」

ヤミーが当たり前のように答え、歯をむき出しにして笑う。力を振るうことに快感を持つ、そんな醜悪な内面が表に出たかのようだ。

織姫は身を強張らせた。

「期待しているところ悪いがヤミー。黒崎一護の相手をするのはお前じゃなく、リーセグリンガーだぞ」

「なんだと!? 訊いてねえぞ!」

「藍染様もこつちに来る前に仰られていただろう。主だった戦闘は全てリーセグリンガーに任せるとな」

「私に全てって、他にも戦う人がいるってことだよね……………ま、その時にはヤミーさんに譲るよ」

肩をすくめたニルファイは、織姫が構えをいまだに解かないことに気が付いた。

むしろ、力を解放する寸前のように霊圧の高まりが感じられる。先にニルファイが釘を刺す。

「止めておいた方がいいよ。せつかくキミは、自分の命と大切な友人を助けられるんだよ。それにサドさんも連れてつてくれて構わない。ね？」

普通に考えて、ここは退くのが賢明な判断だ。なにも危険に身を晒さなくても良い。ニルファイたちは本気で見逃すつもりだし、それを織姫も分かっているはずがないのだ。

そこでふと、ニルファイの頭にとある絵本の一ページが浮かび上がる。

危険を省みず^{かえり}に危険を冒し、『少女』を救った『少年』の姿。

「あたしは、黒崎くん^{くんに}頼らずに、少しでも黒崎くんを安心させなくちゃいけない」

自らに言い聞かせるように織姫が深く息を吸う。

「あたしにできることは、きつとそれぐらいだから」

織姫の周囲で空気が渦巻き、積もっていた土クズが円を描くように周回し始める。

「守らないと、いけないから。私はー拒絶する！」

それは矢のように、丸い盾を帯びた弾丸がニルファイ目がけて放たれた。

物質の結合を解く、当たれば対象を真っ二つにする、織姫の唯一の攻撃手段。生身で防ぐことなど不可能だ。

……………条件として、当たらないと意味がないのだが。

「うわー、やられたよ……………なんてね」

胸元に孤天斬盾^{こてんざんしゆん}を受けたニルファイは悲鳴を上げた。織姫の背後で、

偽りの悲鳴を上げた。

孤天斬盾が仕留めたのは、ただの幻影でしかない。こういった直線的な攻撃はニルファイとは相性が悪いのだ。そもそも、あの程度の攻撃ならば避けなくてもよかつたとニルファイは思う。

そして掴み取っていた椿という黒い羽のようなソレを握り潰した。織姫の焦燥が濃くなり、ニルファイの霊圧を浴びてそれが恐怖へと変わる。

ギシリ、と歯車が狂ったような音が響いた。

「残念。そんな無駄なことしなければ、生き残ったはずなのにね。私には理解できない行動だったよ」

さて、と言いつつ、ニルファイは手刀を織姫の背中に、心臓があるであろう場所に狙いを付けた。

「じゃあね」

牙を剥いたなら、その牙を砕くだけに留まらず、心臓もことごとく奪い取る。それがニルファイのやり方だ。

こうして哀れにも、一人の少女の命が特に意味もなく散らされた。散らされた、はずだった。

「ん？」

ニルファイの手刀と織姫の背中の間に、巨大な斬魄刀が差し込まれていた。それが振るわれたことでニルファイは咄嗟に飛びのく。

「…………… 黒崎くん」

「悪い。遅くなった、井上」

違う、と否定して織姫が首を弱弱しく横に振る。

「ごめん、ごめんね、黒崎くん…………… あたしが、あたしがもっと強かったら……………」

「謝んねーでくれ、井上。心配すんな」

彼らの間にどんなつながりがあるのか、ニルファイは知らない。この場面をもっと見ていたいという欲求に駆られながらも気を緩めることなどしない。

黒崎一護の斬魄刀の切っ先が、自分に向けられているから。

霊圧が破裂した。そんな表現が当てはまるように、黒崎一護は斬魄

刀を解放する。

卍解

黒が閃いた。

「……………あれ？」

ニルフィの右肩から左わき腹にかけて生まれた斬線から、噴水のよ
うに面白いほど血が吹き出る。

ドバドバと、ドバドバと。止まることなど知らないように。

嘘と舌

とにかく無我夢中であった。

突然、多くの命が失われて人間が肉人形になった。異質で不可解な霊圧が肌で感じられた。

そうして黒崎一護の日常は崩れて落ちる。今までの虚ホロウの被害でさえここまで大規模なものではなく、記憶に新しい尸魂界ソウル・ソサエティでの戦いではここまで命が散ったことはなかった。

甘かったのだ。何もかもが。本当の戦場など、今の今まで経験したことはなかった。

命が奪われるのは当たり前のことなのだ。

目的地の山には、既にもう仲間であり友人である二人の霊圧が感じられる……。感じられていた。

今では中学時代からの親友のものが消え去り、もう一人の少女の霊圧は吹き消される直前の蠟燭のように不規則に揺らめいている。

失われる痛みは、一護本人は幾度も体験し、だからといって再びあの苦痛を味わうことなどしたくない。

自分が、守らなくてはいけないのだ。もう手放したくはなかったから。

焦燥が身を蝕み、得体の知れないものを相手にし、加減という言葉
を彼から奪い去っていった。

そして、斬った。

小さな体から溢れる血を見ながら少女は目を見開く。

「——え？」

呆けた表情は、次の瞬間には歪められた。

「……う、あああああああああああッ!? い、痛い!!
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い! いたいよお!」

地面へと身を投げ出し、必死に傷口を脆そうな手で押さえながらうずくまる。白い死覇装が赤い液体でじわじわと汚れていった。彼女の周囲に池が形成されるのに、それほど時間は必要なかった。

金色の綺麗な瞳からは涙がとめどなく溢れる。口元に手を寄せ、声が出ぬよう、痛みに耐えるように袖を噛んだ。

弱弱しく肢体を震わせ、あるいは痙攣させて。

「ッ！ う、くっ……………！ ああ……………ッ」

それでも苦痛は和らがないよう。

這うように一護から離れようとする様は、幼くあどけない容姿と合わさり、一層悲痛さを助長させた。

鈴の転がるような声は今涙に濡れている。落ちた雫が血に混ざり合う。

「やだ…………… やだよお……………。死にたく、ないよ……………ッ」

人間と変わらぬように思える錆び臭さが、そこから漂った。

「……………ッ！」

それを見て、一護が歯を噛み締める。

よくよく見れば、自分の妹たちとそれほど歳の離れていないような姿をしていた。そんな少女が苦痛に顔を歪ませて、抉られた傷口から血を垂れ流している。そんな少女を自分が斬った。

もしかしたら見ないようにはしてただけかもしれない。

斬ろうとした瞬間に、自己嫌悪で刀を振るう手を止めてしまいそうになったはずだから。

「斬ろうとした瞬間に躊躇ったな？ そのまま斬っていれば胴を真っ二つにしたものを。そのせいでソイツは死にかけの体を晒している」
こちららも白い死覇装を着た青年、ウルキオラが冷めた口調でそう言った。

隣の大男も冷めた目をしている。少女の醜態など興味がないように右肩を動かしていた。

そのどちららも、いま血を流している少女に対して何の反応も見せない。

「おい！ 助けなくていいのかよ！」

ウルキオラが首を傾げながら訊き返す。

「斬った本人が言うのは滑稽だな。それよりもなんだ。ソイツの容姿に惑わされて情けを掛けたつもりじゃないな？ だとすれば期待外

れも甚だしい」

「何言ってるんだ！ 仲間じゃねえのか!？」

「お前こそ何を言っている。元から——そこには何も転がっていないぞ」

突然のことだ。

むせるような血の匂いも。不規則に変質する特徴的な霊圧の気配も。荒れた細々しい息遣いも。

突然、消えた。

一護が目をそこに向ける。何もない。あの大量の血液も、這って擦れた地面の跡も。

なにより、あの小さな少女の姿がそこになかった。

「ああ、痛い痛い。もう死にそうなほど痛い。——笑いすぎて、お腹がよじれちゃうよ」

代わりに、抑えなど知らないような、それでいて品を下げない笑い声がからくろと広場に響いた。

ヤミーが鬱陶しそうに右肩に座っていた小さな少女を追い払う。

「おら、ニルフィ。さっさと降りやがれ。さっきから五月蠅くてかなわねえ」

「いやあ、だつてホントに面白かったからさ。見た？ あの呆然とした顔。ここまで簡単に引つかかってくれるなんて、もう、面白すぎだよ。ねえ、ヤミーさんもそう思うでしょ、ね？」

「あーあー、よく分かったぜ。てめえの性根がねじ曲がつてるってな」

軽やかに、ニルフィがヤミーの肩から降り立つ。その身に毛ほどの傷を負っていなければ、パーカーのような死覇装にもほつれ一つ見当たらない。彼女のどこにも赤色など存在しなかった。

クスクスと笑いを堪えながらニルフィは一護に尋ねる。

「ねえねえ、ホントに私が斬られたと思ったの？ あんな不意打ちでもない直情的な攻撃で？ もしかして、キミの渾身の演技でもなくって、本心から騙されてたとかじゃないよね」

小馬鹿にした様子もなく、かといつて嘲りや憐憫も含まれていない。ただ面白かったから大笑いしちゃっただけ。そんな子供らしい様子をニルフィはしていた。

それがとにかく不可解だ。

「お前、なんで……」

「なんで……なんで、か。もしかして、なんでこうしてピンピン立ってて、面白おかしい場面に笑って、普通に話しているのか？ って、訊きたいのかな。それとも心配してくれたの？ コレのことを、さ」

ニルフィが何かを抱えるようにすると、その抱擁の中にもう一人の少女が現れた。

体の前面に痛々しい裂傷を負っているニルフィだ。血が垂れ流されたまま、死にかけた様子を見せている。人形は泣き喚く力も失っていた。しばらくして、光の粒子となって空気に溶ける。

そこでようやく、一護は気づいたのだろう。

すべてが嘘の事象に自分が踊らされていたのだと。血も、肉も、匂いも、斬った感触も。全てが幻想に過ぎなかったのだと。

「私がケガしちゃうとアネットさんが凄く怒るんだ。それはもう、この街なんて滅んじやうくらいに、ね。だからケガするわけにはいかなかったの」

「よく言うな。ましてや感謝してもらおうと戯言を抜かすとは。相手が一人芝居をしている間に、ヤミーの肩で爆笑していたというのにな」

「あ、それは言わない約束だよ」

ウルキオラの指摘にニルフィは肩をすくめる。

「でも、そうだね。あえて言うなら」

幻影は、あくまで小手先。前任の第7十刃の言を借りるならば、

セブティマ・エスパーダ

手品の類の誇るほどのないものである。たかだかそれに引つかかって動揺するなど底が知れた。

「キミは、誰も守れないほど弱いね」

「なんだと?」

「え、しらばっくれるの?　そこで転がってるサドさんも重傷なんだよ。それに、オリヒメさんを助けられたのはタイミングが良かったからだって思ってるの?　あれって、わざと私が待っててあげたのにな。本当なら二人は今頃、私が殺してるよ」

「てめえ……!」

分かったような口を利く少女に対して、怒りという感情を持った。既に術中に嵌っているとは認識すらしていないだろう。

先手を取ったことでニルファイに対する若干の侮り。彼女の儂げな容姿と不安定な霊圧から未だに強さを見誤る。そしてよく回り始める口から流れる、小馬鹿にでもしたような言葉への憤怒。

何もかもが太刀筋を鈍らせ、ニルファイの有利にしか働かない一連の劇だ。

一護が黒い刀を構える。

「一つだけ、訊きたい」

「なにかな」

「この町の人たちを殺したのも、それに茶渡の腕をやったのも、全部お前なのか?」

「ん、そうだよ」

事もなげにニルファイが答えた。

少なくとも茶渡をやったのは自分だと、その権利を主張しようとしたヤミーをウルキオラが手で制す。

「黙って見ている。全て、アイツの挑発だ」

「俺まで挑発されてやがるが」

「探査回路の他に忍耐も鍛えておけ」

ニルファイは言われなくとも一護と戦うつもりになっていいるらしい。それは普段の臆病な態度ではあまり考えられないこと。常にある卑屈さが鳴りを潜めているとウルキオラはいち早く気づいていた。

——遊ぶ目になっているな。

歯車の噛み合わせりが悪くなったような霊圧の軋みがニルファイから発せられた。

金の双眸は無邪気な光を残しながら濁っていき、ギロチンを思わせる色合いが強くなる。口の端が吊り上がり、あどけない顔が凄惨なものとなった。

「リーセグリンガー、お前がやる気になったのは構わん。だが、『オレンジ色の髪』と『黒い卍解』から、そいつが黒崎一護であることに疑いはない。俺たちの第一任務はその死神の調査だ」

「うん、はいはい、できるだけ殺さないように甚振るんだよね」

「…… ああ、それだけ守って勝手にしろ」

「はい、らじやー」

道化のようにおどけた態度で敬礼し、ニルファイは一護と向き合う。

「じゃあよろつか、クロサキさん。この三人の中で最弱な私を倒せないと、これからの戦いだと言殺されちゃうよ」

「なら、俺はお前に勝てばいいだけだ」

「そう、勝てばいい。勝てれば、ね」

ニルファイが、とん……と、その場で軽くジャンプする。瞬間、その姿が掻き消えた。これ見よがしに大きくなった霊圧。その発生源は——少し離れた場所にいた、織姫の背後。先の続きをするように手刀が織姫の心臓に狙いを付けていた。

「——てめえー！」

一護がそれに追いつき、霊圧を纏わせた刀を振り下ろす。

しかし、

「黒崎、くん……」

「…… ツー！」

ニルファイが織姫を引き寄せて盾にしたことで、織姫の顔の前で刃が止められた。

「残念。オリヒメさんごと斬ってれば、私の本体も斬れたのにね」

拍子抜けしたように。ニルファイは織姫を抱えたまま響転ソニードを使い、かなり離れた場所に姿を現した。有沢という少女も一緒だ。まだ木々

が生えているのを見ると、山の下のほうなのかもしれない。

「さて、オリヒメさんはもう逃げていいよ」

「どういうこと?」

「いやあ、クロサキさんの甘さがどれくらいか分かったからさ。キミがいると彼は本気を出せないんだ。なんていうか、キミはクロサキさんに必要とされたいんだよね?」

「……あたしは」

「うん、わかっている。だからこそ言っておくよ。——キミはクロサキさんの邪魔になってる」

織姫は苦しげな顔をして俯いた。力が足りない。それは元から分かっていることだ。それでも自分は何か役に立てるのではないかと考え、そして今の状況に繋がっている。

ニルフィは響転ソニードを使って一瞬姿を消すと、茶渡を引きずるように再び織姫の前に現れた。

幼い容姿の破アラシカル面は急速に接近してくる粗い霊圧を感じ取る。あまり時間がないことを理解し、早口で話す。

「それでも、私が見た限りだとキミの能力は伸びるよ」

「え?」

「必要とされたいなら、もっと力を付けてからにしてね。焦っていると死んじやうよ」

なぜ助言をしたのか、ニルフィにも分からない。このまま戦いの余波で織姫が死んでも赤の他人であるニルフィには関係ないからだ。せめて言うならば、面白そうだったから。ニルフィの興味がそそられるモノを織姫が持っていたからこそ、ここで死なせるには惜しいと思っただのだ。

「じゃあね、またいつかお話ししよ」

ニルフィはその場を響転ソニードで後にし、移動途中だった一護の前に現れた。

彼はこの山の至る所に現れた、ニルフィの作った偽りの織姫の霊圧を辿って飛び回っていたところだ。

「ッ！ お前か、井上たちをどこにやった」

「どこに？ んー、そうだね。もしかしたら天国とか？」

リアクションは斬撃で返された。荒々しい、力任せの刃だ。

破面アランカルは元から高い基本ポテンシャルを持っており、死神と違って技術を磨いていくような存在は珍しい。己の身体能力に物を言わせた戦い方が主である。その点、この一護も同じだ。

ニルフィには筋力という点で難があるものの、高い身体能力を持ち合わせている。

彼女が欲しいのは技術だ。それを見て、理解して、己がモノとする。一護の戦い方は、ニルフィにとつてなんの価値もない。

「……ウルキオラさんの命令だし、ね」

意味がないからといって、無意味に殺すのも憚はばかられる。

絶え間なく放たれる斬撃を掻い潜りながら、少女が呟いた。

ニルフィの誘導によって、戦闘区域は再び禿げた山頂付近へと戻る。移動に邪魔な木が生えておらず見通しのいい場所だ。

そこではある種の異様な光景が出来上がっていた。

血の海だ。一対一の戦いでは決して見られないような量の血があらゆるところに飛び散り、水たまりが池となり、さらには海と化そうとしている。むせかえるような鉄錆び臭さが風だけではなくならず留まっていた。

一步踏み込むたびに血の雫が跳ねる。刀を振り回すたびに黒い死覇装に血がしみこむ。

それらは全て、幻影にして幻覚。あつてないようなものなのだ。

しかし。しかしだ。そんなことは一護の慰めにもならなかった。

「アツハハハハハハ、いまのは残念でしーガッ!？」

「うわあ、派手にやっちゃったアグツ!!」

「とりやく……ギイツ!？」

それもこれもすべて、こうやって全方位から向かってくるニルフィの精巧な分身のためだ。

あえて一護でも目で追える速度で彼女らは突撃してきて、わざと一護に斬らせるようにしている。避けるのは悪手だ。一度攻撃を回避しようとして、分身とは思えぬ機動力で左腕を切り裂かれた。

一護の選択肢は二つ。斬り続けるか、死ぬかだ。

「クソツ、なんだよ……！ なんなんだよ！」

もうやめろ！ 口にしないだけで心の中で叫ぶ。

ニルフィの作り出した幻影は、あまりにもリアリティがありすぎた。斬れば血を噴き出すし断末魔を上げる。そのたびに顔は悲痛なものとなり、一護の網膜に焼き付いた。

容姿は幼い少女そのもの。一護の生来の性格や、妹の存在が頭を離れず、太刀筋は鈍る一方である。

割り切ることの出来ない一護の精神は、分身を斬るたびに同じだけの傷を残す。

攻めているように見えて、追い詰められているのは一護のほうだ。そう長い時間を掛けないうちに、彼の心は折れるだろう。

「うん、甘い甘い。もし私がオジさんだったら、チョコラテのように甘いのだよ！ って言うね」

分身だけしかけて姿を現さないニルフィの声。

無限に湧き出しているのではないかと思うほどの幻影の群れを斬り続けながら、一護が叫ぶ。

「こんなことして何の意味があるんだよ！」

「ないよ、そんなの。逆にキミにはあると思うけど？ サドさんたちの仇とかあ、命が惜しくて私を切り刻もうとかあ」

舌足らずな声から、本人が首をかしげているのまで頭に浮かぶ。何も考えていないのも連想させられた。どんな言葉を掛けても、一護ではその心に届けられるはずもないのだから。

何人かのニルフィの分身が銃の形にした手を一護に向けた。

「ばーん」

バラインフライント
重光虚弾軍

視界を覆い尽くすような弾丸の群れが、死神を困った。逃げ場はない。歯を噛み締めて、一護は刀を横なぎに振るう。

黒が弾けた。

月牙天衝

自らの霊力を刀に喰わせて、刃先から超高密度の霊圧を放出し、斬撃を巨大化させて飛ばす斬月の能力であり唯一の技。

それは虚弾^{バラ}の壁を食いちぎって散らす。霊子の欠片が空中で消えぬうちに、特徴的な霊圧へと向けて再度の月牙天衝。あまり時間は掛けられなかった。短期決戦を元から望んでいたが、この戦いをすぐにも終わらせるために全力を以て放つ。

手ごたえからして、黒い斬撃は間違いなく不安定な霊圧を捉えたはずだ。

「残念、はずれ」

それらも、すべて偽りの結果。

ニルフィはずっと一護の傍にいた。彼女はピースサインを右手で作り、指先を一護の目の先に添える。

セロ、エスベヒスモ
幻光閃

視覚や眼球という器官を焼き切るような光量が一護に襲い掛かった。その痛覚とは関係のない苦痛によって、一護は咆哮を上げる。

技ともいえないような足払いで死神は地面に転がされた。

ニルフィは確信している。もう一護の目はこれから一生使い物にならないと。

——まあ、オリヒメさんに治してもらえらるだろうけど。

少なくともこの戦いでは回復しないということだ。

「ク、クソ、眼が……！」

「むしろ感謝してほしいくらいだけだね。キミは私の見た目に、さっきまで油断してたんだよ」

ならば見えないようにすれば、もっと力を引き出してくれるのではないか。

ニルフィとしては一護に本気を出すように促しているつもりなのだ。

「それよりも失望したよ。なんで命がけで戦わないの？ ううん、命は懸けてるんだろうけど、全力じゃない。むしろオリヒメさんのほう

が頑張ってた」

虚言を交えてあえて挑発したし、全力を出し切れるようにお膳立てまでしてやった。霊圧の振れ幅が尋常ではないが、高ければ十刃エスパーダにも匹敵しそうなのだ。ニルフィのような無意識の操作ではないので、わざわざ引き出させなければならぬ。

それでも、一護はニルフィの望んだ結果を出してくれなかった。

以前に読んだ、『少年』と『少女』の本について何かを知るきっかけを作ってくれるかと思っただが、期待外れもいとこだ。

一護にとって、織姫や茶渡たちはその程度でしかなかったのだろうか。

答えを欲しているのに見つからない。その苛立ちが燻り、ニルフィの手を腰の後ろの斬魄刀に掛けさせようとしている。

「ねえ、目の前に仇がいるんだから、殺すつもりで掛かって来てよ。あ、今は目が見えないんだったね」

「うるせえッー」

荒削りの斬撃が上段から振り下ろされて空気を裂く。ニルフィは手の平で柄をかちあげる。同時に肘を腹部へと突き刺した。

崩れ落ちる一護を見ながら、静観していたウルキオラに尋ねた。

「どうするの？ もう私もクロサキさんから知りたいことはなにもないよ」

「藍染様が目を付けたというが、まさかこの程度とはな」

「ヤミーさんは代わる？」

「そんなゴミみてえなヤツ潰して、なにがおもしろえんだよ」

「そっか」

一護に足りないのは、実力ではなく覚悟だ。

今ならば霊圧がかなり高まっているというのに、なにかを抑えるために集中力を欠いている。勝つためにはどんな手段でも使えばいいのに。そうニルフィは思う。

今のままではどんな幸運が起きても勝利など掴むことは叶わないのに。

そこでふと、覚えのある霊圧が近づいてきた。

「黒崎くん！」

「井上……？ 井上なのか!？」

織姫だ。一護は光を映さなくなった目をそちらに向ける。

息を切らして、それでも足を止めることはなく、来るなど叫ばれてもついいには一護の元へとたどり着く。

「ん、ちょうどいいね。クロサキさんにとって、オリヒメさんはとっても大切な人みたいだし」

不穏な空気がニルファイから発せられた。それは猫がネズミを甚振るようなものとは違い、無邪気であるがゆえに残忍な子供特有の雰囲気であった。

感動の再会。大切な存在。

それらをぶち壊したら、一護は答えを教えてくださいのだろうか？

「…… 偽善的かつ独善的で結構だよ」

一度ならず二度逃がした織姫を、今ここで消すのに躊躇いはない。惜しいとは思っても、掛け金はもう払っている。

このシチュエーションを悲劇に変えるならば、いったいどうすれば上手くいくだろうか。

「ま、過程はどうでもいいか」

虚閃^{セロ}を弱い威力に設定し、一護も織姫も巻き込むようにし、さらに一護だけが生き残るようにする。

期待を胸に、ニルファイは無造作に二人へと手を向けた。

虚閃^{セロ}

霊子の奔流が音もなくすべてを巻き込んだ。

…… 巻き込んだはずだ。土煙も巻き起こっている。それにしては手ごたえがない。そのことにニルファイは小首を傾げ、すぐに理解する。

ニルファイと人間の間、いつの間にか血のような色合いの盾が出現していた。

紡がれる言葉は、静かでそれとなく気怠げ。

「――啼^なけ」

紅姫

その盾から噴き出すのはこれもまた朱色の幾本もの槍。溢れだすような槍の速度を見誤り、ニルファイは一つの槍を腕で防いだ。死覇装と鋼皮イエロを切り裂いて、繊細な白い肌に一本の赤い線が生まれた。赤い槍はたしかにニルファイに傷をつけた。

ウルキオラたちのいる場所へと宙返りをしながら飛びのく。

目を細めるニルファイの視線の先で、盾は硝子ガラスのように砕け散った。

「どおーもおー、黒崎サン、井上サン。遅くなっちゃってスイマセーーン」

ここが命のやりとりをする場とは理解していないような、呑気な間延びした声だ。目深に被った帽子と下駄、さらには甚平という現代において胡散臭さ全開の格好。しかしその立ち振る舞いに隙は見いだせない。

隣には褐色の肌をしたネコ科の動物を連想させるような美しい女性。視線だけで破面アランカルたちを牽制している。

そんな二人が、死神と異能者の少女を護るようになっていた。

少しだけ頑張ろうと思います

二人の闖入者相手の登場に、不服そうな顔でニルファイが唇を尖らせる。

「邪魔、しないでほしかったな」

「いやあ、スミマセンねえ。アタシらもこの人たちに死なれるのは困るんですよ。ですから、お引き取りなさってくれやしませんかね？」

飄々とした態度を崩さず、帽子の男がへらへら笑いながら言った。

なんとなく釈然としない気持ちのままニルファイは右手で指を鳴らす。そうすると周囲に溢れていた血の海や肉片がなくなり、あとに残ったのは破壊痕の痛々しい、かつては林のあった山頂だった。

どうするか確認するために、ニルファイがウルキオラに目を向ける。

「ウルキオラさん、指示は？」

「情報通りならこいつらは浦原喜助うらはらきすけと四楓院夜一しほういんよるいちだ。本当ならお前の相手をさせる奴らなんだが……」

「ここでまたお預けつてことはねえよな？ 止められても俺は行くぜ」

人間の頭よりも大きい拳を鳴らしながら、ヤミーが一步踏み出す。荒々しい霊圧が彼から発せられた。爆発する直前の爆弾を連想させ、無理にでも止めればそれこそ歯止めが効かなくなるだろう。

「そう言うと思った。ならリーセグリンガーも混ぜてやれ。それで妥協しろ」

「ああ？ あんな奴ら、俺一人で十分だぞ」

「あの二人の危険度は黒崎一護よりも上だ。ともかく、お前の邪魔だけはさせない。出来るな？ リーセグリンガー」

「合わせることならね。よろしく、ヤミーさん」

「チツ」

不承不承といった雰囲気です。ヤミーが視線を逸らす。口ではウルキオラに勝てないと分かっているのに、これ以上の駄々はこねない。

戦えるのなら、それで良かったから。

ニルファイはヤミーとの共闘の難易度の高さに内心ため息を吐きつ

つも、熱くなっている体を冷ますためにもう少し戦いに付き合おうとする。一護との戦いは拍子抜けもいいほどの不完全燃焼。渋々とはいえ、嫌とは思わない。

「……ん」

左腕の刺すような痛みに眉をひそめた。浦原の紅姫から貰った槍で、二の腕の部分の死覇装が切り裂かれて、そこから血の流れる赤い線が見える。骨に届いてないとはいえ、決して浅くはない。

ニルフィは傷口にそつと可憐な小さな舌を這わせた。ぴちやりと背徳的にも感じられる水音が響くと、傷はたちまち塞がっていく。乾いた血も舐めとれば、怪我の証拠は破れた死覇装だけとなった。

その光景を浦原は興味深そうに見ている。

「自己回復能力…… おつかしいですねえ、破面は^{アランカル}大^{メノスグランデ}虚の時に持っていた超速再生の能力を失っているはずですが」

「超速再生ならこんな面倒な真似はしないよ。それに、あくまで応急処置程度だしね」

生き残るために特化した能力。それがニルフィの元来の力である。殺傷能力はほとんど後付けのようなもので、自身の生存確率を少しでも上げるために進化していたのだ。その方法は他の破面^{アランカル}たちとは異なった部類に入る。

「喜助、そうまじまじと見てやるな。おぬしが変態に見えてしまう」

「あつれえ？ 夜一サンはアタシの味方っすよね？」

「よせ、近寄るな。わしはあ奴らに、おぬしのような変態の仲間と思われとうない」

「ひ、ひどい……」

浦原から貰った薬で一護たちを治療していた夜一が戻ってきた。

二人のやりとりは日常風景でありがちなものだが、しかしここは戦場だ。軽口を叩きあいながらも一瞬の気のゆるみもしていない。

単純な強さだけでなく、巧さや技量という点で目ばしい。そうニルフィはあたりを付けた。

特に夜一という女性。彼女は浦原とは違って刀を持っておらず、暗器の類も使いそうにない。ならばおのずと、夜一の戦闘方法は徒手空

拳であろう。

それは技の塊だ。特殊な異能も、圧倒的な霊力も必要ない。ニルファイにとつてそのすべてが模倣の対象となる。

今でさえ、夜一の重心の取り方や、何気ない足運びを目で追っていた。

「長つたらしい話は俺の性に合わねえんだよな。とつとをやつちまうぞ、チビ」

「ん、お先にどうぞ」

「おうよ」

ヤミーが無造作に、浦原と夜一の元へと歩み寄っていく。

間合いに入るのに数秒とかからない。

「現世にいるのは次から次へとジャマくせえ連中だと思つてたトコだ。割つて入るつてことは…… てめえらから殺してくれつて意味で、良いんだよなア!」

叫びと共に、頭上で掴みあつた両腕がハンマーのように闖入者たちへと振り下ろされた。

前に出たのは夜一。腕の形をした鉄槌が当たる直前、ヤミーの木の幹のような二の腕に手を添える。その瞬間、手品のようにヤミーの巨体を半ば回転させながら宙に浮きあがらせた。

しかし最後までさせず、ニルファイが夜一の背後に響転^{ソニード}で姿を現す。

その気配に夜一が舌打ち。ヤミーを転がそうとするのを断念し、左足で後ろ回し蹴りを小さな破面^{アランカル}に叩き付ける。その脚をニルファイは絡め取るように抱く。はずされるのに一瞬の隙。その隙のあいだにヤミーが空中で地面に手を叩き付けることで体勢を整えた。

「ーらあッー」

起き上がりざまの裏拳がニルファイごと夜一を襲った。

そこへ裏拳を防ぐように赤い盾が展開される。浦原だ。腕と盾が接触した直後、衝撃によって地面がへこむ。土の欠片が跳ねあがり、生き残っていた雑草がはじけ飛んだ。

ニルファイは右手の指を夜一の眼前に突き付ける。

セロ・エスベヒスモ
幻光閃

ニルファイの技の中で最速のものだ。文字通りの光の速度。放った瞬間ならば避けるのは不可能である。

放てれば、の条件が大切だが。

夜一はニルファイに防がれていた左足を軸に体を回転させ、右足を今度こそ少女の鳩尾に食らわせる。ニルファイは躲しきれずに弾丸のように吹き飛んだ。

空中にありながら、ニルファイの体からあらゆる光を孕む色が爆発した。

オプスクロー・ソニード
虚楼響転

光の乱舞が一瞬で終われば、浦原と夜一を囲むように無数のニルファイが出現している。

「これは……」

夜一が面倒そうに周囲を睥睨した。けらけらと笑う同じ容姿をした少女たち。ある意味で趣味の悪いことだ。

「よそ見してんじゃ、ねえよッ！」

巨大な手でヤミーが夜一に掴みかかった。

その手の上に、いつの間にか夜一の姿がある。彼女は飛び跳ねるとヤミーの横面に、左足で回し蹴りを叩き付けた。

「ぶ……ッ!?」

衝撃で空気が震える。ヤミーが倒れ込まないうちに死角からニルファイが接近。地面に降り立った夜一の無防備な背中に襲い掛かった。「アタシを忘れちゃ困りますよ」

紅の斬撃が分身を切り裂く。数多あまたにいるニルファイの幻影が二人に突撃していき、地響きを立てて倒れたヤミーに追撃を許さない。

「ヤミーさん、生きてる?」

「クソッ、クソッ、あいつら! 殺してやる!」

タフさは見かけどおりのようだ。すぐさま立ち上がり、ニルファイの分身たちと大立ち回りを繰り返している二人を射殺さんばかりに睨みつける。

「相性が悪いんだよ。ヤミーさんは怪獣みたいに暴れるのが本業なのに、さ。私が最後までやろつか?」

「黙ってる、ニルファイ！ あいつらは俺がやる！」

「そう？ でもごめんね。獲物は私が奪おうと思うの」

にこにこ笑いながらニルファイは指を鳴らした。

途端、浦原たちを取り囲んでいたニルファイの幻影たちが霊子をまき散らしながら爆発する。余波だけで遠くに合った木々をなぎ倒すような威力だ。

「てめえ！」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。まだあの人たち、生きてるからさ」

土煙が晴れた。未だに立っている二つの人影がある。

浦原が帽子を押さええながら刀を突きつけており、後ろの夜一も無事なようだ。ただの虚閃セロならば完璧に防げただろうが、全方位からの攻撃で多少の手傷を負っている。

しかし、ニルファイの予想よりもまったくダメージを与えられていない。

「いやあ、すごいっスね。正直焦りましたよ」

「その割には服がちよつと焦げてくるくらいだけだね」

「まさか。これは続ければきついっスよ」

言葉ほど動揺しているようには見えなかった。のらりくらり。そうやってニルファイの探りから躲していつてる。

浦原の手札が見定められないことに警戒した。夜一は格闘術のよいうなものとシンプルだが、この浦原という男の戦い方が考えられないのだ。

ふらふらと実態を掴ませず、相手の隙に滑り込むような。ニルファイの戦い方と共通点が多い。まさか相対するところまでやり辛いとは思えなかった。

爆発から、一旦仕切りなおす空気となる。

「やり辛いことかな適わん」

「そうかなあ？」

「そのデカブツだけならば、軽くあしらえたんじやがな。破面アランカルにして、元が虚ホロカである存在が共闘のような真似ごとをすることは」

「真似が私の専売特許だからね。特保は誰にも渡さないよ」

夜一が嘆息し、服に付いた埃ほこりを払った。ニルファイとしてもヤミーがやられるのはまずいと分かっている。

彼が簡単に殺されるとは思っていない。ただ、彼に斬魄刀を解放されると、ここら一帯が荒野になりそうな気がするのだ。そんな戦いで学べることも学べなくなる。

ちらりとニルファイがウルキオラを見やった。

彼はまだこの戦いを止めるつもりはないようで、傍観に徹していた。ウルキオラのことだ。戦力調査の一環として、この戦闘を気の済むまで眺めているのだろう。

「じゃあ、ヤミーさんはあの下駄の人ね。私はあの女の人と戦うよ」

「オイ、ニルファイ。てめえ調子乗ってんじゃねえぞ。勝手に仕切りやがって」

「ヤミーさん。自分でも分かっているんでしょ？ キミはいま本調子の半分以下の力しかないし、その体で相性の悪い相手と当たったら踵落とし食らっちゃうよ」

今はまだ時期が悪い。そう伝えようとしても、ニルファイの幼い知識のボキャブラリーでは駄目なようだ。

ヤミーは一層低い声で怒鳴り散らす。それにニルファイは微かに眉を寄せながら対応した。

「だからって納得できるワケねえだろうが！」

「キミが納得するしないの問題じゃないの。ここで戦うには、何もかも足りないのさ」

「俺に大人しく見てろだあ？ なら勝手に乱入しても文句はねえよな？」

「もう私一人で戦うよ」

「てめえ、いい加減に……」

浦原たちと戦う前に、ニルファイを潰そうとヤミーが拳に力を込めた。

仲間割れならば結構と浦原は事態を見守る。

殺気に晒されているであろうニルファイは、首をかしげさせながらヤミーの顔を、怒りに染まった両目を見据えた。

たったの一言。

「ヤミー」

「……ッ！」

さんを付けずに、ニルファイが巨漢の名を呼んだ。それだけでヤミーは押し黙る。

「これは余興だよ？ ホントの戦いはこれからあるの。ここで潰されて、それに参加できなかつたらもつと鬱憤が溜まるでしょ？ だから、さ。ここは私に任せてよ」

口調も、抑揚も。身に纏う霊圧も変化がない。今までの話し方とはなんら変わることのない。

凄惨な表情がどこにいったのか穏やかな表情をするだけで、怒りの権化の言葉を奪う。なにを言い返しても無駄なような、すべてを無意味に思わせる微笑み。

「…… あーあー、分かった、分かった。クソツ、見てりやあいんだろ、見てりやあよ」

「うん、ありがと」

「今度こそてめえの戦いを俺に譲れ。それで手打ちだ」

「あははは、それでいいよ」

興が削がれたようにヤミーは舌打ちと共に頭を掻き、ウルキオラのいる場所へと戻っていった。

浦原と夜一にニルファイが向き直る。成人の姿をした二人と相対すると、少女の幼さが一層際立った。

「一人とは、随分と大きく出たの」

「ヤミーさんはこつちにとつても大切な戦力だからね。こんな余興で降りられたら、もし腕を失くされたりでもしただけで大損害なの」

それより、とニルファイが夜一を見据える。

「キミの使ってたあの格闘術。なんて名前？」

「はくだ白打じゃ。それを知ってどうする」

「だってさ、不便でしょ？ ——これから自分が覚える技術の名前を知らないなんて」

十刃^{エスパーダ}最速による響^{ソニート}転での踏み込み。その速度が乗った手刀が夜一

の首に噛みつかうとする。

しかし『瞬神』夜一にとつては甘い攻撃。難なくいなし、カウンターで肘をわき腹に、腹部へ手刀をねじ込んだ。

防御に靈力をまわしていたニルファイは腕を交差して耐えきる。ドン、と鈍くて重い音が響いた。

ニルファイが跳ぶと、夜一の肩を狙って左回し蹴り。

夜一がそれを受け止め、反撃に転じようとしたとき、

「ちいっ！」

接触していた左足を軸にしてニルファイが右足を夜一の鳩尾へと突き込む。威力はあまりない。それを弾いて夜一は少し距離を取った。

夜一が驚いたのは今ニルファイが使った技が、この戦いで夜一が最初に少女に使用した技だからだ。

長い年月を掛けて研鑽した技が、一度の体験だけで完全に模倣された。

「あ、はずしちやったか。まあ、どういう技か知ってるもんね」

結果には頓着せずにニルファイが苦笑紛れに首を振る。

……そして突拍子もなく、再度の響転ソニードで夜一の眼前に現れた。

「技はこれだけってことはないでしょ？」

「ほざけ」

容赦のない蹴りが少女の肩に入った。

しかしそれは幻影で、本体は夜一のすぐ背後に。ヤミーを蹴り飛ばした時と同じような、左回し蹴りが瞬神の頭部を襲った。当たれば首がもげる、死神鎌のような蹴りだった。

夜一は咄嗟に屈んで避ける。その上を華奢な足が風を抉った。夜一は両手を地面に突き、全身のバネを引き絞って後方へとドロップキック。両足はニルファイのわき腹に突き刺さり、彼女を地へ落とした。

それすらも痛打に感じていないかのようにニルファイがすぐさま飛び起きる。

そしてほぼ一方的にニルファイがなぶ翻られる状況が再開された。

殴打の余波で土が剥がれ、蹴りの風が唸りを上げる。

何もしなければ倒される。夜一は迎え撃つしかない。全身を凶器として、腕を、脚を、叩き込む。

これは格闘の間合いであり、浦原も加勢するに出来ない状況だった。

少女がすぐに倒れないのは他にも理由がある。

ニルフィは現在、ほとんどの霊力を鋼皮イエロに注ぎ込んでいるのだ。どちらかといえば耐久力が見かけどおりの脆弱なニルフィだが、その霊力は最上級大虚ヴァストローデのもの。そこからの全力防御は簡単には崩せない。

攻撃力が極端に弱くなるのがダメだが、相手に手傷を負わせるだけならば十分だ。

「とりゃあー」

可愛らしい掛け声と一緒に、夜一の使った技を真似て使う。裏拳から、その勢いを殺さずに回し蹴りに繋げる技。それに夜一は対処する。

ここでも悪循環が働いていた。なにが来るのか分かっている夜一は、最善の対処法でニルフィの攻撃を防ぐ。それは相手に夜一の攻撃の攻略法を教えているのと同義で、時間を掛ければ掛けるほど追いつめられるのは夜一だ。

夜一はそれを嫌って突き放そうとするも、ニルフィに元来の回避能力に硬い防御が合わさったことで上手くいかない。

とにかく、しつこいのだ。

腹をくくり、夜一が空気を裂くような裂帛の声を響かせる。

突き。掌底。熊手。半月蹴り。踵落とし。足払い。吊柿。投げ技。

あらゆる技を一連の動作に昇華させ、夜一はこの戦いにケリを付けようとした。

「喜助ッ!!」

投げ飛ばされて宙に体を晒したニルフィへと紅の斬撃が飛ばされる。その数、四。

ニルフィは空中で回転しながら足に霊圧を込め、それらを叩き落とす。

皮肉にも、その技は夜一がニルフィに対して使った技だ。

「うん、なるほど。使いやすいね。というより、使う人が巧いからなのかな？」

ニルファイは満足そうに深く頷く。

尸魂界ソウルソサエティを探しても、この夜一ほどの白打の使い手はいない。これもまた皮肉だ。ニルファイは最高の使い手から白打を学んだようなものなのだから。

「あちゃー、夜一サン。さつきの方と違って、今度はもの凄い相性の悪い方に当たりましたねえ」

「なにを呑気にしておる！ さつきと片を付けるぞ！」

「これが呑気に見えますか？」

夜一とニルファイが戦っている間に、浦原は何もしていなかったわけではない。

ただ、恐ろしいまでに数の多いニルファイの幻影に手を焼いていたのだ。下手に刺激すれば爆発するような地雷まで混ざっている。夜一に被害が行かないよう、それらの処理に追われていた。

二人は未だに本気を出してはいない。理由は戦闘区域に織姫たちが居て、巻き込む可能性があるからだ。

このままではジリ貧だと、冷静さの中に焦りが紛れ込む。

「ヨルイチさん、だよな？ まだやるの？」

「抜かせ。おぬしに見せた技は初歩の初歩。底など見せたつもりはない」

「でも、手足は限界でしょ？ 一杯私のこと殴ったり蹴ったりしたからね。硬かったでしょ」

夜一の奥の手には最高戦闘技術として、高濃度に圧縮した鬼道を身に纏い戦う瞬間しんくわんというものがある。これは白打と鬼道の合わせ技と言えるものだ。

まともな使い手は夜一しかないとはいえ、織姫や茶渡の能力とは違い、どこまでいっても極めれば誰にでも可能な技術。それをニルファイに盗まれることへの懸念があった。そして周囲を巻き込まないためにも、手札を出すのを渋った結果だ。

瞬間しんくわんなしの生身で鋼鉄よりも硬い物体を殴り続けられ、衝撃は骨

に響き、皮や筋肉は千切れかかる。

物事を観察するのに優れたニルフィの目はそれらを見通していた。「まだ出し渋ってる技がいっぱいあるよね？ それもとびっきりのが！ それを私に見せてよ！」

「はて、なんのことやら」

どうにかしてニルフィは夜一から技を引き出そうとする。けれど戦いの最中でも流されており、上手くはいかない。

理由は、今の状況だけでは夜一たちは本気を出さないからだ。

それならば、どうすればもつと力を見せてくれるのだろうか。

無邪気な笑顔のままニルフィは頭の中で計算し、そして単純な答えに辿り着く。

——もつと危機的な状況にしちやえばいいんだ！

これは名案だ。

「よしっ、決めた！ ヨルイチさんが本気になれるように、私、頑張るからさ」

ただでさえ不可解な霊圧の質がさらに変化していくことに、夜一は眼を細める。全ての分身を片付けた浦原はその隣に立ち、なにがあっても対応できるように構えた。

ニルフィはパーカー風の死覇装に付いたフードを目深に被る。アネットの趣味で長い垂れ耳……可愛らしいウサギの耳を模した布地が背中まで垂れ流されるように縫い付けられていたが、今はそんなことなど些事だ。

「いくよ」

楽しいな金色の目が、ちろちろと覗いた。前かがみとなって、その目元もすぐに隠れてしまう。

そして、発動する。

カーラ・ナーダ
無貌姫

何かを、しようとした。

それが何かを浦原と夜一は予想できなかつたし、それを知る前にこの戦いは止められてしまったからだ。

「まて、そいつまでございろう」

ひどく淡々とした無機質な声で、先程まで傍観者だった破面が制止させる。

「……ウルキオラさん。まだあの人たち、力を隠してるんだよ。見ておかなくていいの？」

「俺はそこまでにしろと言ったはずだ。聞こえなかったわけではないだろう」

「そ、それはそうだけどさつ。こっからでしょ!？」

「お前はこの侵攻の目的を忘れているな。まず一つは『現世にいる死神の実力の調査』。そしてもう一つは『ニルフィネス・リーセグリンガーの実戦経験の向上』だ。いまお前が使おうとした技は、それを度外視した遊戯でしかない。これで二つの目的を果たしたと判断した」

「えっ……と。これから真面目にやるからって言えば?」

「無駄だ。任務は完了した。退くぞ」

有無を言わせぬ口調でウルキオラは言った。

ウルキオラは指をなにも無い空間に添え、するとそれだけで黒腔ガルガンダが開く。

「そっか」

潮時であると判断し、ニルフィは呆気なく思うものの、納得をする。狂暴性を表すような光は消えていき、無邪気で無垢な色が代わりに金色の瞳に取り戻された。

フードを外すと、小さな口を精いっぱい開いて息を吸った。

魂吸ゴズイではない。周囲に漂っている霊子を根こそぎ奪い取っていき、

山にはほとんど霊子が残らなくなった。

「しよーこいんめつ」

ニルフィは霊子を飲み込むと、開いた空間へと歩いて行く。これでニルフィたちの戦った痕跡である霊子は無くなり、そう簡単に今後の対策を取らせないようにする。

「……逃げる気か?」

夜一からの挑発にニルフィは肩をすくめながら答えた。

「そうだよー、逃げるよー。ま、このままキミたち二人がかりで、足手まといの人たち二人のお守りをしながら私と戦うなんて、どっちに利

があるか判ってないはずないよね」

無然としながら夜一は答えない。

代わりに、感情の荒れ方が表に出たような声がニルフィの耳に届く。

「オイ、待て！」

「ん、なにかな、クロサキさん。って言っても、なにが言いたいか分かるんだけどね」

この結果では納得できるはずもないだろう。ならばここでニルフィが暴れまわってしまえば明確な勝敗が付くだろうが、それすらも一護を納得させることは出来ない。

勝たなければ、倒さなければ意味がないのだ。

口を開きかけたニルフィを遮るように、ウルキオラが言った。

「——黙れ」

空気が鉛のような重さを得る。

「貴様に関しての任務は接触の瞬間から済んでいた。最初にリーセグリンガーの幻影を見抜けなかったな？ それだけで底が知れるというのに、終始遊ばれたまま退場するとは、醜態極まる」

針のように現実を突きつけた。

「差し当たっての任務は終わった。藍染様には報告しておく。貴方が目をつけた死神もどきは——殺すに足りぬ、塵コミでしたとな」

言い返す言葉が見つからないのか、一護は膝を突いたまま俯いていた。

気の毒に思いながらもニルフィは視線をはずし、黒腔ガルガンダの中へと足を踏み入れる。

「バイバイ」

いずれまた会うかもしれないと思い、手を振った。そこに悔恨も愉ガ悦もなく、空気のように軽い気持ちしか入っていない。

黒腔ガルガンダが口を閉じた。

なんでもするから！

大浴場の片隅でニルフィは縮こまりながら湯に浸かっていた。

ラス・フーチエス

虚夜宮に帰還してあとは報告を残すのみなのだが、他の十刃や

アランカル

破面の召集を待つために、少しだけ自由な時間が出来たのだ。

エスパーダ

セブティマ・バラシオ

浴場は第七宮に元からあったものなのか、それともアネットがニルフィのために作らせたものかは定かではない。

濡れた流麗な黒髪は頭の上で纏められ、仄かに朱の差すうなじが幼い見かけ不相応に色っぽい。死覇装を脱いで露わになった肢体は乳白色の湯に隠れてしまっているが、それがどこか見る者に倒錯的な欲情を煽る。

そんな少女が小動物を彷彿させるように震えているのにはワケがあつた。

「……………」

「……………」

ニルフィを腕の中に抱きながら、アネットが朱色の髪を後頭部で結って湯に浸かっている。

普段の澆刺はつらつとした雰囲気は無く、ただほんの少し、憂いを帯びた表情を浮かべるだけで、男を狂わせるような蠱惑的な妖しさを纏う。ニルフィとは違い、成熟した女としての肢体を持て余しているような様は、同性だとしても頬を染めてしまう。ニルフィが、そうだったのだから。

いつもは非常に残念な美人だが、それが鳴りを潜めただけで別人のようだ。

だから、いつもとは違うのだと暗に告げているだろう。

あるじ

主の体を洗ってやる時ただ優しく、慈しむような手つきで終始接した。

これが普段であれば、

『うへへへっ、観念するんだな。オレをケダモノと知ってて誘ったお前が悪いんだぜ！』

みたいなことをのたまいながら、四の五の言葉もなくニルフィを

襲っているはずだ。そうされるよりも、なすがままにされていたニル
フイは恐怖を感じていた。

今だってそうだ。腕の中のほっそりとした存在をいやらしく撫で
まわすでもなく、無言のままそつと抱いている。一度盗み見たアネツ
トの顔を思い出すと、尋ねようにも躊躇われた。

こうなつた理由は、極めて単純な理由。

第 7 宮セプティマ・バラシオに戻らなくとも、出口となつた黒腔ガルガンダの前でアネツトは従
者のように、居るべきものとして佇んでいた。そこまではにこやか
だったのをニルフイは覚えている。

しかし、ニルフイの姿を見た途端、顔に暗雲を立ち込めさせた。

死覇装の状態を確認したからだ。

紅姫の槍で裂けた腕は完治しているし、夜一の通らせた打撃による
痣あざも見えていない。しかし土埃で汚れた死覇装の傷み具合を見れば
おのずと察せるのだ。傷の完治は出来ても、死覇装の大きな裂傷まで
は隠せない。

ウルキオラとの会話もそこそこに、二人は体の汚れを落とすために
宮に戻った。

死覇装を脱げば真珠色の肌に痣あざも残っていたため、さらにアネツト
は目を細めることになるが。

ここまで、事務的な会話しかしてないのだ。

ニルフイにはそれが一番不安で、なにより心細かった。もしかした
ら失望されたのかもしれない。主人であるというのに、任務は成功し
てもこんな情けない姿で帰って来たのだから。

「……アタシは、怒ってなんかないですよ」

ざわついた心を察したかのようにアネツトが口を開く。

「もしかしたら怪我をして帰ってくるかもしれないなあ、とか、泣きな
がら帰ってくるかもしれないなあ、なんて。そんなこと考えてまし
たし」

「泣きながらなんて、しないよ」

「でも、怪我をして帰って来た」

あれほど怪我をしない約束をしたのに、返す言葉もない。

アネットが深くため息を吐く。ニルファイは胴に回された腕に、少し力が入ったのを感じた。

「ああ、もう。これだとどつちが大人げないのかって。分かってたわよ、貴女がただで戻ってこないってのは」

「私だつて気を付けてたんだよ。でも相手の人が強くつて、模倣コピイするの自分で体感しておかないとって思って、さ。仕方なかったの」「ええ、そうね。貴女の判断が一番だったのよね。でもそれで納得しきれないアタシもいるの」

「大丈夫だよ。帰レスレクシオン刃だつてあるし、ウルキオラさんだつていたんだよ。それにこれからも、アネットも、グリーゼもいるから、私は安心できるしさ」

「……そうね。そうよね」

黒髪に指を絡めるようにアネットがニルファイの頭を撫でる。
ラス・ノーチエス
虚夜宮に帰還してから初めて撫でられた。そのことが嬉しく、ニルファイは気持ちよさそうに目を細めた。

ニルファイはいまの日常が楽しい。だから、こうでなくてはいけなの
のだ。

日常を壊す要素など、彼女にとって恐怖の対象でしかない。遠からず始まる戦いが終わっても、こうして生きていきたかった。

思い出した数少ない記憶には、必ず孤独があつたから。

「ふふ、懐かしいですね。そういう、アタシがいるから安心できるって言葉を聞くなんて」

「破面アラソカルのほとんどの人は自分の力だけを信じてるからね。誰が言つてたの？」

「アタシの、従属官フラシオンだった子です」

「その人は……」

名を訊こうとしてニルファイは口をつぐむ。アネットの声音に、時折含まれる悲哀が滲にじんでいたからだ。

例えば、一緒にいたいと言いながら、ニルファイはアネットたちのことを何も知らない。

元から寡黙なグリーゼも、このアネットも、過去のことには自分か

ら口にしないのだ。

ニルフィの髪から小さな水滴が垂れた。それは水面に小規模な波紋を作り、胸元に当たる。その揺れでさえ、踏み込むかどうかの心を震わせた。

「ま、暗い話はなしなしつ。こんなあつたかいお風呂に入ってるんだし、もう少し堪能しないとね」

葛藤しているうちに見えたかもしれない本心が影をひそめる。

いつも通りに明るくなった声と一緒に、無理矢理流された。

それを止めるための勇気は、まだニルフィにはない。臆病だつていい。それでも、この日々が続くならば、どんなことでもしよう。

アネットがいつもの調子を取り戻してしまったため、それから盛大にセクハラをされまくったニルフィ。

体の火照りは風呂上りだけが理由ではない。

「顔が赤いな。体の調子でも悪いのか？」

「な、なんでもないよっ……」

戦い方がアレなくせして、嘘はとても下手なようだ。

ウルキオラはそうか、とだけ頷いて言及はしなかった。

長い耳の布地が縫い付けられたフードを弄りながら、ニルフィは新しい死覇装の調子確かめる。壊れる前と同じものなので違和感はなかった。いきなりイメチェンするほどニルフィは剛毅ではない。

そうしているうちに扉が開かれ、まずウルキオラが、次にヤミーが入っていき、最後にニルフィが玉座の間に足を踏み入れた。

それを知っているかのように扉がひとりでに廊下の光を閉ざす。

薄暗い空間だ。以前来た時と変わらず、そこに立つだけで気味の悪さを肌で感じる。

影に潜むようにひっそりと、あるいは豪胆に。先に来ていた破面アランカルの気配が漂ってきた。

それ以上に、高みにある玉座に腰をおろした藍染が、彼らの存在を

塗りつぶしていくようだ。

ウルキオラが藍染を見上げる。その後ろでニルフィとヤミーは膝を突いた。そうしなくてはいけない。本能が体を地に近づけさせる。

「――只今、ただいま戻りました。藍染様」

平坦な、判の押されたような声。

「おかえり、ウルキオラ、ヤミー、ニルフィ」

返されるのは夜明けの前の海のような鷹揚さを持つ。

「さあ、成果を聞かせてくれ。我等、同胞の前で――」

少しの緊張の糸が引き伸ばされる。少なくとも、藍染だけは平静な雰囲気崩さない。それが彼の内心の表れでもあるからだ。

「さあ、見せてくれ、ウルキオラ。君が現世で見たもの、感じたことの――」

一息。

「すべてを」

応えは、肯定。

「……はい」

色素がないようなウルキオラの左手が、己の左の眼球を無造作に掴み取る。目の中に指を滑り込ませ、抉り出したのだ。

パーツのごとく目玉が指の中に納まっている。そして空洞となった眼窩に繋がる細い粘性の糸が尾を引いた。球体の臓器は躊躇いなく、体から離れる。

そのことに対する驚きは、ない。藍染はもとより、ヤミーも、集まった破面たちも、そしてニルフィも。こうなることが分かっていたかのように動揺の色など見せなかった。

――うわあ、痛そう……。

動揺はなくとも、見てるだけで左目が幻痛を感じるようだ。ニルフィは思う。

ウルキオラは左手を真っ直ぐに前方へ伸ばした。眼球が握られており、衆目が丸い物体に集まる。

握る手に力が込められた。普通ならそれはやってはいけない行為だ。万が一にしろ、奇跡のような出来事があればその抉り取った目を

戻して左目の視力が回復するだろうから。そのまま力を入れてしまつては、戻すためのパーツがこの世から消える。

しかしやはり、これもなんの躊躇もなく行われた。

眼球がウルキオラ自身によって握りつぶされたのだ。

肉の潰れた生々しい音ではなく、なぜか鈴の鳴るような音がしたかと思うと、先程まで生体器官であつたはずの物体が砕け散る。

眼球は無数の欠片となって霧散した。それは広間を覆うように広がり、ウルキオラの『記憶』が共有されることとなる。

すべて現世での出来事であり、それらが破アランカル面たちの脳裏に鮮明に浮かび上がった。より明確にするために、彼らは眼を閉じた。藍染も軽く頬杖をつくようにこめかみに手を当て、しばらく広間には本当の意味での沈黙が支配する。

「――成程なるほど」

最後に、負傷しながら己の無力さに頭こうぶを垂れた死神の姿が映り、『記憶』は途切れた。

藍染は軽く頷くと、ゆっくりと目を開けた。ウルキオラの報告が終わり、それを咎めるような雰囲気でもない。ただ納得がいった。それだけである。

「それで、彼を『この程度では殺す価値なし』と判断したという訳か」「はい。『我々の妨げになるようなら殺せ』との御命令でしたので、それに――」

自らの考察を交えながら続けようとしたウルキオラは、嘲笑が含まれた声で遮られる。

「ハッ、微温ぬりいな」

ニルファイがそちらに目をやると、グリムジョーが少し離れた石材の上で胡坐あぐらをかいていた。彼の従属官フレーションたちも一緒であり、もちろんニルファイは全員と面識がある。

予想できたことだ。ニルファイは彼らの性格を知っており、この燃えきらない結果は不快であろう。

「こんな奴等、俺なら最初の一撃で殺してるぜ」

「……グリムジョー」

「理屈がどうだろうが、『殺せ』って一言が命令に入ってるなら、殺したほうがいいに決まってるだろうが！ あ!？」

傍らに立っていたシャウロンも頷く。

「……同感だな。いずれにしろ敵だ。殺す価値はなくとも、生かす価値など更に無い」

ニルファイは『なんだかシャウロンの言い方のほうが賢そうだなあ』と頭の中で考えていたが、突如、グリムジョーの矛先が彼女に向いた。思考を読んだわけではなさそうだが。

「大体、ニルファイ！」

「ふえ？」

青年の視線に今まで見たことのない色が浮かんでいるのを見て、ニルファイが情けない声を出す。

「テメー、なんで最後は殺そうとしなかった？」

言われた意味が分からずに小首を傾げる。それを苛立たしげにグリムジョーが見た。

「俺なら最初の一撃で殺してるぜ。訓練だか経験だか分かんねえが、すぐに相手を殺さなかったのは、まだいい。けどな、もう一度言うぜ？ どうして最後は仕留めようとしなかった。人間の女も、死神も、増援の奴等も。テメーはわざと殺さなかったな？」

むしろ、蒲原喜助と四楓院夜一相手には、最後は狩猟かなにかと勘違いしていたような節さえある。

それが、グリムジョーには気に入らない。

彼は非常に好戦的で、障害となる（もしくはその可能性のある）者は、強弱を問わず抹殺すべきとの考えの持ち主である。

彼にとって戦いとは命のやりとりであり、結果は死んだか死んでいないか、敗者が勝者かが決定づけられていなければならないのだ。

グリムジョーの剣幕に身をすくませながらニルファイが答える。

「それは、さ。クロサキさんならともかく、増援のウラハラさんとヨルイチさんは強かったんだよ。それに、まだお互い本気じゃなかったし、仕留められる距離が掴めなかった。だから……」

「無貌姫カール・ナーダを使おうとしてそのセリフが口から出るなんてな。元から

殺るつもりはなかったってハッキリ言いやがれ。反吐が出る」

「あ……うう」

鋭い眼光に射すくめられてニルフィは俯いた。それなりに仲が良
いと思っていた青年からの辛辣な言葉に、目尻に涙が溜まり始めた。

「離せ筋肉達磨！ もう頭にきた！ あの子を泣かせやがったネコ科
野郎の顔面に、マタタビを投げつけてやるだけだから！」

「…… 止せ。俺の視力が一時的に落ちただけかもしれないが、手に
持っているのが斬魄刀にしか見えない」

騒がしい外野も視界に入らない。

反論は出来なかった。たしかにグリムジョーの言う通り、あの時の
自分はネズミを甚振る猫のような立場にいると思っていたし、その通
りの行動をしていたのだ。浦原たちは分からないが、一護と織姫を殺
す機会などいくらでもあった。

今まではたまたまグリムジョーの気に入らない行動をしてなかつ
ただけで、一步外ればここまで脆い。

嫌われた？ それは嫌だ。離れたくない。もし今からでも現世に
行って殺しなおせば、グリムジョーは許してくれるだろうか。

それならばすぐにでも行きたい。もはや重要ではない対象を消し
ても問題にはならないはずだから。

幼さとは別の昏い光が心に渦巻いていく。

グリムジョーはヤミーにも目を向ける。

「大体、ヤミー！ テメーはボコボコにやられてんじゃねえか！ そ
れで『殺す価値なし』とか言っても、『殺せませんでした』にしか聞こ
えねーよ！」

「…… てめえ、グリムジョー。今の視てなかったのかよ。俺がやら
れたのは黒い女だけだ。このガキじゃねえ」

「わかんねえ奴だな。ニルフィに尻拭いされてたようにしか見えねえ
ぞ。俺ならその女も一撃で殺すつつつてんだよ！」

「なんだと？」

ヤミーがその巨体を起き上がらせ、霊圧を大きく揺らがせた。

それに対して、挑発的にグリムジョーも抑えていた霊圧を漏れさせ

る。

エスパーダ

十刃同士の戦いがあるうことがこの場で勃発するのかと、報告の一瞬前とは違う緊張が空気を包んだ。

その空気を断つように、ウルキオラが間に割って入る。

「グリムジョー。我々にとって問題なのは、今のこいつじゃないってことはわかるか？」

「……あ？」

苛立ちを隠さずにグリムジョーは訊き返す。冷静というよりも無機質な態度のウルキオラのが気に入らないのだ。

「藍染様が警戒されているのは現在のこいつではなく、こいつの成長率だ。確かに、こいつの潜在能力は相当なものだった」

一度言葉を切り、時間を置く。グリムジョーがなにも言わないことを確認したウルキオラは、すぐに話し出した。

「だが、それはその大きさに不釣り合いなほど不安定で、このまま放っておけば自滅する可能性も、こちらの手駒にできる可能性もあると俺は踏んだ。だから、殺さずに帰って来たんだ」

落ちくぼんだ眼窩がグリムジョーを捉える。

グリムジョーは顔を少し俯かせ、しかし次に顔を上げた時には苦々しく、怒りを抑えるような表情であった。

「……それが微温イって言ってたんだよ！」

圧力だけで、空気が押し返される。

「そいつが、てめえの予想以上にデカくなって、俺らに盾突いたらてめえはどうするってんだよ!？」

「その時は俺が始末するさ」

間髪置かずに返された『答え』に、今度こそグリムジョーは押し黙った。

たしかにウルキオラは言葉通りに、もしあの死神が刃を向けてきたのなら、躊躇いなく殺そうとするだろう。嘘でもなく、有言実行を体現でもするように。ウルキオラの発言で、グリムジョーの提示した問題はあっさりと解決したようなものだ。

納得は出来ない。しかしそれを形にするだけの材料はなかった。

「それで文句はないだろう？」

いや、ないはずがない。しかし否定するのはこの場では難しい。ウルキオラが片付けるといふのなら、それこそが最も効率のいいことなのだから。

ついでというように、ウルキオラはいじけるように俯いたままのニルフィの頭に手を乗せた。

「そして、リーセグリンガーはあくまで俺の指示に終始従っていただけだ。最後こそ『遊戯』をしようとしたが、それも俺が任務をすべて完了したと考えるからだ。こいつに非はない。その責任も、俺が取ろう」

それでいいな？

これでこの話は終わりだと、言外に告げる。

「そうだな、それで構わないよ。君の好きにするといい、ウルキオラ」
「有難うありがとございます」

藍染が認めた。ただそれだけのことで、ラス・ノーチエス虚夜宮において異議を唱える者はいなくなった。

納得するしないの話ではなく、決まってしまうエスパレード十刃であろうと覆せない。

それが藍染の言葉の重みである。

一礼をするウルキオラを睨みつけながら、グリムジョーは心の中で煙を上げてくるくすぶ燻りをどうしようかと考えた。

宮殿の廊下を走りながら、ニルフィは複数の人影を追いかける。

「まってよっ、グリムジョーさん！」

「あの子、まってつてば！ お願いだから！」

「ね、ねえ……ま、つてよ……グリムジョーさん……」

足音がだんだんと弱くなっていき、しまいには声は水が満杯になっ

たコップを揺らすようなものだった。

視線を送らなくとも、しゅん……とうな垂れるニルフィの姿が、
第6十刃セスタ・エスパーダの主従たちの脳裏にありありと映ってしまう。なんともい
たたまれない。従属官たちの中には後ろ髪を引かれるように、一瞬に
しろ立ち止まってしまふ者もいたほどだ。

呆れた表情のシャウロンがグリムジョーに尋ねる。

「いいのか？ 姫君が泣いてしまう五秒前のように思えるが」

「勝手に泣かせとけ。だからあいつはいつまで経ってもガキなんだ
よ」

「アネット嬢にあとで何を言われるか分かったものでもないだろう。
それに、これは分かっているはずだ。こんなことはくだらない意地だ
と、な」

グリムジョーは奥歯を噛み締めた。ウルキオラが言った通り、ニル
フィは現世で指示に従って行動したに過ぎない。指揮官的な役割は
ウルキオラが担っており、少女は間違った行動などしていないのだ。
さつきも、とぼつちりを受けてしまっただけにすぎない。

それを謝れとは言わない。しかし話をするぐらいなら別にいいだ
ろう。このままでは豆腐メンタルなニルフィが泣き出し、面倒な大事
に発展してしまう。

「……チツ」

あえて聞かせるように舌打ちして、グリムジョーは振り返った。

「ーあ」

たったそれだけの行動で、涙は散り、小さな少女の顔に喜色が広が
る。ありきたりな表現で向日葵ひまわりのようなという言葉があるが、それも
さして誇張というほどでもなかった。

見る物にブンブンと尻尾を振っている子犬のようなビジョンを思
い浮かばせながら、ニルフィがグリムジョーの元へと駆け寄った。

「グリムジョーさん！」

「聞こえてるから、もう名前呼ぶなよ。それと面倒だから、もう『さん』
なんて付けんな」

まだ涙の雫が見えるものの、ニルフィの表情は晴れ晴れとしてい

る。切り替えの速さは子供ゆえか。グリムジョーとしては、さっきまでの泣きそうな表情をしてほしかった。

言葉の刃を受けても、ニルフィの顔に一切の影はないのだから。グリムジョーの苦手な表情だ。むしろ、さらに苦手となった笑顔である。

敵意など無い、ただ純粹な好意の塊。辛辣なことを言った相手に対しては浮かべるはずもないものだ。だが、ニルフィは声を掛けられただけで嬉しそうにして、曇りのない金色の双眸を輝かせる。

それが居心地悪く、しかしどうしてか満更でもないように思っている自分がいた。

「えっとね、その……」

慌てて後を追って来たためか、自分の中で言葉のまとまりがつかないようだ。

催促することもなく、グリムジョーは黙ったまま続きを待つ。

「グリムジョー……は、私のこと、嫌いになったの？」

「ああ？」

何が言いたいのかとグリムジョーが首をかしげる。十中八九、さっきの広間での出来事に関してだと思っており、的の外れた質問に疑問を抱いた。

ニルフィはグリムジョーの反応を勘違いしたように立て続けに言った。

「私、今度……もしあつたらなんだけど、ちゃんと相手の人をゼツタイに殺すからさっ。戦いで遊んだりなんてしないよ。今からでも現世に行つてちゃんと後片付けもする。ちゃんとグリムジョーの言うことだつて聞くし、それに私、なんでもする！」

「おい？」

「だからー」

相変わらず、笑顔だ。

しかしその笑みが焦燥に駆られたものであることに、グリムジョーはやっとな気が付く。

「ー行かないでよ」

ニルフィは怖がっているのだ。グリムジョーが離れていってしまふことに。

声の震えは怯えが見え隠れしているから。目に溜まる涙は失うことへの恐怖から。

子供としての価値観はニルフィの中にある。信頼している人物がいなくなってしまうことが不安でしかないのだ。グリムジョーが広場で言い放った言葉で、ニルフィは嫌われてしまったと考えた。

心細さが少女の体を削っていき、遂には心まで蝕もうとしている。
「……………」

グリムジョーはしばらく何も言わずにニルフィを見下ろし、少女もそれ以上は口を開かなかつた。彼の従属官フレーションは黙って二人のやりとりを見ている。自分たちが口を挟むことではない。それを理解していたから。

深いため息がグリムジョーから漏れた。

「くだらねえ」

その一言で、ニルフィは肩を震わせる。

「てめえがそんなことしなくても、俺はハナから嫌ってなんかねえよ」
「……………え？」

下げようとしていた視線を無理やり持ち上げて青年の顔を見上げた。それは呆れているような、手のかかる妹でも相手にするような、そんな表情。剣呑さは無く、ただただ言葉通りにくだらなさそうだった。

「てめえのやったことが気に入らなかつた。さっきのはそれだけだ。元から俺は他の奴らが気に入らねえんだ。最初から、てめえのこともな」

硬くてごつごつした手がニルフィの頭に置かれた。ぎこちなく、乱暴に黒い髪をかき混ぜるように撫でる。

「だからな。何も変わってねえんだよ。気に入らなかつただけで、好きも嫌いもねえ。元からてめえとの距離なんて、なんも変わっちゃいないんだ」

染み込ませるようにグリムジョーは言い切った。目を横に逸らし

たのは、らしくなさを自覚したからか。

呆けたようにニルフィは細く息を吸い込み、そして浅く吐く。途端、目にぶわっと再度の涙が溜まったことにグリムジョーがぎよつとする。

「うおッ!? どうした、俺の言い方が悪かったのか!?」

「だって、だって…… ホントに嫌われちゃったと思ってたからあ
!」

「泣くなよ、おい! ならいいじゃねえか!」

「うっ…… うええええええええええええええええんっ!!」

「ッ!? おいシャウロン! なんとかしろ!」

「一発芸を見せてはどうか」

「んなこと出来るかッ!」

泣き止めと言うグリムジョーの言葉も虚しく、ニルフィはわき目も振らずにぼろぼろと大粒の涙を頬に伝わせる。

通路に響く泣き声はよく通り、それに連られてやってくる者たちが影から姿を現した。

まずアネットとグリーゼが駆け寄る。

「ああつ、やつぱりグリムジョーが泣かせてる。しかも怪しい男どもに囲まれてるこの構図! きつと集団痴漢なんてされたんですよ!」

「失せろ煩惱女! これ以上ややこしくすんな!」

「…… そうして事態をうやむやにするつもりか」

「だからやってねえんだよ!」

面倒くさい面々の登場にグリムジョーがキレ気味に叫んだ。

しかしニルフィの泣き声は疑似餌のごとく、普通なら集まらないものたちを引き寄せているようだった。

「コレハヒドイ。オ姫様ヲ泣カセテシマウダナンテ」

「セスタ・エスパルダ第6十刃でも子守りは無理らしいな」

アローニーロが肩をすくめながら靴音を響かせて現れた。

「ニルフィ、なぜそこまで泣く。お前を悲しませる元凶は私が斬って捨ててやるぞ」

ハリベルが三人のフランシオン従属官を伴って、目に静かな怒りを秘めながら歩

み寄る。

「なんじゃ、小娘がはしたなく泣きおつてからに、五月蠅くてかなわん。お前たち、どうにかして泣き止ませろ」

バラガンが慥然としたまま配下に指示して、流れ続ける涙を止めようとした。

集まったのはそうそうたる面々。

三人寄れば文殊の知恵という諺ことわざもある。だが子守りスキルなどほとんどのメンバーが皆無であり、泣き続けるニルフィを前にあたふたとし始めた。泣き止ませようにも、どうしたらいいのか分からないのだ。

さながら戦争のように、大人の破面アランカルたちはあれやこれやと様々な手を使う。十刃エスパーダだろうが従属官フランオンだろうが関係なく、ある意味で珍しすぎる光景が通路で展開された。

ニルフィの鈴が転がるような泣き声は、それからしばらく響き続けたらしい。

願いはエクスポロージョン

自分は、たった三つの色しか見たことがなかった。

墨を落としたかのような夜空。色素など抜けきったような白い生物と、どこまでも果てなく続く白砂の砂漠。そして白い生物の断面から流れる血だ。

それらを見ることを繰り返すサイクルの中で、どれほど命を散らしたか。

虚の残骸を踏みつぶし、新しい獲物を探し回る。エサが一杯いた場所は忘れた。ずっと変わり映えのない景色を眺めながら、辺境を彷徨って殺した獲物をかじっていた。

ずっと、食べることしか考えていなかった気がする。

言葉を話す存在のことも、なにを言っているか頭で理解できてもそれに答えるくらいならと、時間も惜しくて食らいつく。

いつからか獲物は自分の姿を見るだけで逃げていった。

そうなれば場所を変え、自分の容姿すらも疑似餌に、新しい獲物がやってくるのを待つ毎日。

単純で、機械にでもなったかのようにだ。

遊びと称して獲物を甚振ったことがあった。しかし心の底から楽しめない。弱者を統率したこともあった。しかし本当は謀反を企てていたらしく、自分も未練はなかったので不意打ちで残滅した。

楽しみなど、なかった。

これからもないと思っていた。

凝り固まったような日々を過ごすうちに、肥大しきった孤独が胸の中に居座る。

はじめて信じてもいなかった神に祈った。

この退屈が晴れますように、と。

ゆっくりと意識が浮上する。

しかし肌触りのよい毛布に宿ったほのかな温かさに、まぶた瞼が再び閉じてしまいそうになった。

「ん、にゅ……」

特に意味のない言葉が口から漏れる。

ふかふかで、もふもふな枕。日光の下で干したばかりのようなクツシヨンが憎い。

おいでおいでと招いてくる誘惑の睡魔の手を振り払うように、ニルファイは体を起こし、眼をこすりながら欠伸あくびを噛み殺した。そうすると鴉の濡れ羽色の髪が、肩から小川のせせらぎのように流れ落ちる。

広いが薄暗い室内だ。第7宮セラティマ・パラスオの一室にある、ニルファイの寝所である。

アランカル破面は睡眠をほとんど必要としない。理由というのも、手段はどうであれ、霊子の吸収のみで肉体を構成することができ、人間のような欲求は生きる上で必要ないからだ。一部の十刃エスパーダはニルファイも含めて現世の食べ物を口にするが、それもあくまで例外なのだ。

それでもニルファイは定期的な睡眠を取る。

では、なぜ寝所などというものが、あるいは睡眠というものがニルファイに必要なのか。

ウルキオラの考察では記憶の整理のためらしい。

というのも、ニルファイは普段の生活の中でその観察眼が災いし、とりたてて意味のないものまで記憶してしまう。それを続けていくと次第に脳の処理能力が追い付かなくなり、オーバーヒートしてしまうからだ。ここからは人間と変わらないだろう。記憶の容量ははるかに多いとはいえ、限界はもちろん存在する。

その記憶の整理は睡眠を取る時が一番効率が良く、本人の意思に関わらず体は強制的に睡眠を欲するのだ。

「……………」

寝ぼけ眼のまま周囲をおもむろに見渡した。

天蓋付のベッドの脇に置かれたイスには、朱色の髪の従属官フラッシュオンは座っていない。扉の近くの定位置にいつも背を預けている巨漢もいなかった。

ちよつとだけ心細さを感じつつ、ニルフィはベッドから飛び降りた。

その姿はいつもの死覇装ではなく、ほっそりとした肢体を浮き上がらせるような淡青色のネグリジェ。もちろんアネットの見繕ったものだ。初めてニルフィがこれを着た時、なぜかアネットは鼻頭を押さえながら上を向いていたが。

裸足のまま床を歩いて行き、ひんやりとした石材の感触で次第に目が覚めていく。

たしか、ニルフィが大泣きしてしまい、それをあやすために一か所に十刃エスパーダの半分が集まったのだ。長いこと泣いていたと思う。ゆつくりとニルフィは泣き疲れ、アネットの胸の中で穏やかな寝息を立てはじめた。

ニルフィはおぼろげにしか覚えていないが、それまでの様は苛烈を極め、三つの通路がなぜか消滅したらしい。東仙は大層ご立腹だとか。

探査回路ベスキスを使って宮中の霊圧を探る。下官の霊圧が料理のためかせわしなく動いており、ちよつどいいタイミングで起きたと思った。

従属官フラシオンは二人とも宮にいるようだ。

ニルフィは近い場所にあるアネットの部屋に行こうと、ふらふら廊下を歩き出した。

「嫌われて、ないよね？」

思い出すのはグリムジョーの言葉。もしかしたら寝る前の出来事のいい部分がすべて夢だったのではないかと嫌な予感として、無意識のうちに奥歯を噛み締めた。もちろん、そんなはずはない。夢と現実の区別はできる。だから、怖がる必要もないのだ。

ふと、前方から探していた女性破面アランカルがやって来た。

「ニルフィ？ 珍しいわね、もう目が覚めてるだなんて。起きてたのなら呼び鈴を使ってくれたらいいのに」

「今日はなんだか自分で起きれてね。それに、わざわざキミたちを呼ぶほどじゃないと思ったから」

アネットが困った顔で息を吐き出す。おそらく、ニルフィの主人と

しての自覚に対してだろう。呼び鈴を使わずに自分から従者を探しに行く王様などいないのだ。

だがニルファイは、アネットやグリーゼと完全な主従関係になりたいわけではない。

こんな自分と一緒にいてくれるだけで、彼女にとって十分なことだったから。寂しくなければそれでいいのだ。

アネットはひよいとニルファイを抱き上げ、鼻先が触れ合いそうなほど顔を近づけた。

「…… うん、もう涙は止まったみたいですね」

少し赤みの残るニルファイの目が瞬かれる。

「心配掛けちゃった」

「いいわよ、謝らなくて。もう泣かないって約束してくれたらね」

「んー、また泣きそう」

「ニルファイが泣いちゃったら、アタシも悲しいんですからね」

「…… そっか。じゃあゼツタイに泣かないよ。私はアネットに悲しんでほしくなんかないもん」

「よく出来ました」

互いの額と額が軽く触れ合う。それがくすぐったくて、ニルファイはかすかに笑いながら身じろぎした。アネットは少女を包み込むように抱いたまま、しばらく腕に力を込めて、その温かさがニルファイに伝わった。

「…… アネット?」

突然、パツとアネットが顔を離す。

「それじゃ、もう少しでご飯も出来ますし、お風呂に入りましょうか。グリーゼを待たせるのも悪いですね」

「うん」

身を預けられる温かさを名残惜しいと思いつつながら、ニルファイは頷いた。

泣くのはもう十分かもしれない。アネットが悲しむと、自分も更に悲しくなるだろうから。

なんとなく。そう、なんとなくだ。立ち上る湯気のとを追って遙か高い場所にある天井を見上げた時、ふいにニルフィの頭の中に思い浮かんだことだ。

最近、色々な人と交流を重ねたことで、分かったことがある。

自分への扱いが、完全に子供に対してのものなのだ。

たしかにすぐ泣きそうになるし道に迷う。もちろん、お菓子を貰えるのは嬉しいし、頭を撫でてもらえるのは気持ちよくて好きである。しかし子供だから。

そんな理由で一線を引かれているような気がするのだ。

破面アランカルの容姿に年齢はそれほど関係ないとはいえ、誰もニルフィのことを『大人』とは評さないだろう。……だからといって、納得するかどうかは別の問題である。

思い出すのはアネットとグリムジョーのやりとり。彼らは互いの気心が知れたように会話をし、むしろそれが挨拶のように接する、他人から見てもかなり親しい部類に入る関係だ。

しかし二人がニルフィと接すると、会話一つ取ってもささやかな気遣いを察せられる。

それが面白くない。言葉に上手くできないが、面白くないのだ。

そんな背伸びしたい盛りの考えが子供である証拠なのだが、ニルフィは割と本気で考えているため、まあ、いいだろう。

先に洗ってもらったニルフィは大浴場の端に浸かりながら、体を洗っているアネットを待っていた。

ふいに、平皿のような己の胸を見下ろしたあと、アネットに再び目をやる。

「……………」

裏返したお椀のような……。いや、大きさからいえばどんぶりだろうか。アネットが髪に手を入れるその都度、胸は二の腕に押し付けられて、むゆんと形状を変える。湯を流そうと手桶を持った彼女が肘を曲げれば、前腕に乗って下から持ち上げられ、重たそうに揺れ動く。

今また胸に散った泡を落とそうと爪の先でしただけ、彼女の指の間から、弾けそうな水気を纏ってまろびでる。

ニルファイが同じように二の腕を寄せ合ってみるも、なぜか胸には虚しさだけが集まった。

視線に気づいたのだろう。アネットが振り返った。そんな些細な動作でも、揺れた。

「……？ どうしました？」

ジト目になっていたかもしれない。ニルファイは口元まで湯に浸かった。

「ポポフゴバポポー」

おそらく、なんでもないよー、などと言ったのだろう。不服にまみれた声は泡となり、形を作らなかつた。

その間にも、アネットのすらりと伸びた肢体や、折れそうなほどに細い腰を、自分自身でも気付かぬ羨望の眼差しで見ていた。

子供扱いされるのは、自分の容姿が子供のそれだからだとニルファイは決めつけた。

グリムジョーがアネットと気軽に話しているのは、彼女が容姿の年齢的にそう離れたものではないから。

考えてみれば、第5十刃クイント・エスパーダのノイトラだって、メスがオスの上に立つのが気に入らないと言いながら、第3十刃トレス・エスパーダであるハリベルには露骨なちよっかいを出していないではないか。ハリベルは間違いなく美人の部類に入るだろう。

だからきつと、アネットの言葉を借りるならば、ノイトラはむつつりさんなのだ。自分も大人の容姿になれば変に絡まれることもないかもしれない。

ノイトラが聞けば激昂しそうなことを考えながら、そうかそうかとニルファイは納得する。

大人というものになれば問題はすべて解決するのだ。

死覇装に着替えてから食事を済ませ、ニルファイはグリーゼの部屋を訪ねた。

「でね、どうすればアネットやハリベルみたいに、ボンツキュツボンツ

てなれるの？　もしかして、お菓子ばかり食べてたのが間違ってたのかな？」

「……少なくとも、その相談に俺を選んだことが、人選ミスと言う名の間違いに思えるが」

手入れをしていた大剣を壁に立てかけながら、グリーゼはため息を吐く。

「……そもそもなぜ俺だ？　そういったことはアネットのほうに向いているだろう。もしくは邪道にしろ、バラガン殿フラシオンの従属官であるシャルロッテ・クールホーンもだ」

男であるグリーゼよりも、ニルフィの望む『大人の女性になりたい』ということでアドバイス出来そうな人物はいる。だからこそ、なぜ武芸一辺倒のグリーゼに尋ねに来たのかが分からない。

部屋に置いてある最低限の家具のから一抱えもある丸いクツシヨンを取り出し、ニルフィに放る。危なげなくそれを抱きかかえたニルフィは床において腰掛け、グリーゼも互いに向き合うように床に座った。

かすかに俯きながら、ニルフィは囁く。

「だって、さ。こんな話をマジメに聞いてくれる人って、グリーゼしか居ないんだもん」

子供だから。この場合もそんな理由で流されてしまうだろう。一時の気持ちの高ぶりと断じ、あとはうやむやにされてしまうはずだ。

グリーゼはそれができるほど器用ではなかった。ただそれだけだ。そのことを伝えようとし、ニルフィの表情を見て口を閉ざす。少し悲しげな顔をされただけで止めてしまうのは、やはり彼が主人に対して甘いからか、はたまたこれが不器用の所以ゆえんか。

「私ね、大人になれば、みんなに子供扱いされないうって思ったの。それに……」

初めて声に心の羨望を混ぜ、

「みんなと同じ場所に立てると思ったから」

誰に言われるまでもない彼女への気遣いは安寧と一緒に、その節、痛みを与えていたのかもしれない。

しかしそれは、ニルファイが大人になったとして解決する問題なのか。グリーゼはそう思うものの、やはり彼は不器用ゆえに押し黙るしかなかった。

「普通の人間みたいな方法じゃ、ダメなのは知ってる」

ホロウ 虚は肉体は霊子で構成させており、人間のようにカルシウムやタンパク質を摂取したところで成長は望めない。これが破面アランカルの一部が道楽にしか現世の食物を口にしない理由だ。そんなヒマがあれば、アラス 整や他の虚ホロウや破面アランカルを喰らっている。

「……俺は破面アランカルになってからかなり長い年月を過ごしてきた。だがこの姿からほとんど変化したことはないぞ」

破面アランカルは仮面を割った時点で容姿が確定していた。魂魄や死神のように、数百年の時が経ってもそれほど変化しないのだ。これから時間を掛けて、ニルファイの容姿が幼女から少女に、あるいは女性のもとと成長する保証はない。

「……藍染様でも無理かもしれないな」

むしろ、出来たのならばたしかに神だ。それに彼も忙しいだろう。藍染の元へ鬼道を習いに行くこともあるニルファイだが、願いが願いなだけに難しいのではと思ってしまう。

確かめるだけ、不可能という文字が鮮明になってきたかのようだ。

グリーゼは再度、ため息を吐いた。

「……その姿でも需要はあるんじゃないか？」

「私のニーズかなに適かなってない需要なんかヤダー！」

一刀両断された。

普通の成長が無理となると、あとはーとあるエスパーダ十刃の顔が二人の頭に思い浮かんだ。

「大人になれる薬？ 無いよ、そんなもの」

その男は肩をすくめながら言い切った。

第8 十刃ザエルアポロ・グランツ。仮面の名残である眼鏡を掛

けた。ピンク色の髪の男性で、ウエコムンド虚圏内では、「最高の研究者」や、「あらゆる霊性兵器開発のスペシャリスト」として知られているマツドサイエンティスト。その技術力は非常に高く、彼のフラシオン従属官だけ彼の手によって改造された多数の実験体をベースとしているほどだ。

クツカプーロと遊ぶために第10宮デイエス・バラシオに行く。アネットにはそう伝え、しかし別の場所にある第8宮オクターバ・バラシオへとニルフィとグリーゼは向かったのだ。

「そ、そんなあ……」

情けない表情でニルフィがうなだれる。壁に寄りかかっていたグリーゼは無表情に二人のやりとりを見ていた。

ホールのような大きさの研究室には実験器具がひしめいている。駆動音がBGMとなり、壁を覆うような試験管やフラスコに入ったあらゆる色の薬剤が、部屋にらしさを与えていた。

この宮の持ち主にしてみたらまだ軽いほうらしい。しかし子供感覚では、これほどの物が取り揃えられているのなら、『大人になれる』という夢の薬もありそうだと思っただのだ。

「僕は忙しいんだ。子供の遊びに付き合っただけであげられる他の奴等ほど時間はないんでね。その貴重な時間を僕から奪おうというのかい？」

その分だけ科学の発展が遅れるんだよ」

ザエルアポロはスポイトから一滴、水色の液体の入っているフラスコに落とす。すると液体は黄色を経て、なぜか漆黒に変わった。いつもならニルフィが目を輝かせる光景も、落胆している彼女にとっては何事ともならない。

「そもそも、動物の成長がなぜゆっくりか分かるかい？ 急速成長では肉体が耐えられないからだ。クローンとして一日で人間をホムンクルスのように作っても、せいぜい寿命は一年もない」

「でも、レスレクシオン帰刃だと、大きくなるよ……」

「ああ、お姫様。あれは変化であって成長ではない。強いて言うなら、メノスグランデ大虚からザアストローデ最上級大虚に至るまでの道のりも、進化であって成長ではない。そんなことも分からないのかな？」

馬鹿にした物言いながら、間違った認識をしているのが気に入らな

いからか、とても丁寧に分かりやすい説明をしてくれた。

ザエルアポロの手はその間も止まらず、作業が終わった時にはフラスコの中身が、なぜか小指ほどの球体に代わっている。保存も終え、冷めた目でザエルアポロはニルファイを見下ろす。

「あとは君を改造するという手もあるが、それだと他の十刃^{エスパーダ}の連中になんて言われるか分かったものでもない。こっちから願い下げさ。悪くも思わないが、帰りましたまえ」

それでも諦めきれず、ニルファイは必死に手を握りしめて訴えた。明日だけでもいい。体だけでも大人になって、皆と同じ視点になりたい、と。面倒くさそうなザエルアポロとのにらめっこはしばらく続いたが、彼はうるさいハエを追い払うかのようにシツシツと手を振っただけだった。

「粘ってもムダだ、さっさと帰りましたまえ」

「そっか……」

ニルファイは桜色の唇を尖らせて、肩を落とす。

「ザエルアポロさんなら作れると思っただけど、やっぱり不可能もあるんだね」

背を向けた男の目元が、一瞬だけ引きつった。

「藍染様でも無理そうだから、もしかしたら、って思っただけど。やっぱり破^{アランカル}面が成長するのって、科学の力でも無理だったんだね」

ザエルアポロの目には面倒くさそうな色は既になく、傍目には何を考えているのか分からない。

「ごめんなさい、いきなり押しかけちゃって。ついでに無理難題も押し付けちゃったみたいだね」

「まして」

部屋を出ていこうとしたニルファイに声が投げかけられた。

「それは、僕に対する挑発行為か何かかな？」

「え？ ううん、違うよ」

ただの無意識な高レベル煽りスキルだ。

ニルファイの顔には純粹な落胆があり、それを怒るに怒れなくさせる。きつと、ザエルアポロなら可能だと、心の底から信じていたのだ。

ろう。彼女の言葉は、いたずらにザエルアポロの科学者としての自尊心に刃で切りつけたようなものだ。

ザエルアポロの実験は、今まで畏怖と蔑視に晒されたものである。しかし少女が寄せたのは期待。彼女に応えられなかったからといって思う所はない。けれど、期待されていながら『出来ない』と思われるのは、彼にとってプライドに唾を飛ばされるようなものだった。努めて冷静な声で、ザエルアポロは自分の道具を呼ぶ。

「ーロカ。2番格納庫の奥にある、瓶詰の黄色いアレを持って来い」
なにがなんだか分からずに立ち尽くしているニルフィの前にザエルアポロが来る。

「君は勘違いしてるんじゃないかな。肉体を大人にさせる？ 生命の研究をしている僕にとっては初歩に過ぎないことだ」

その程度など簡単にできる。暗に、そう伝えた。

「これから君に与えるのは、ある研究の失敗作だ…… おっと、そんな顔をしないでくれ。君の望む最低限のことを満たしているし、なによりソレは、僕自身のために作ったものだからね」

気に入らなかった。よく理解もせずに、自分の研究能力が肉体の成長すら不可能だと思われるのは。

リスクとリターンを鑑みて、丁度いいものがある。

ニルフィの目に少しだけ希望が宿った。

「僕はね、かなり以前、自分の肉体を半分に分けるといいう行為をした。しかし実験は失敗だ。片割れはカスだったし、器を半分に分けただけでも力は一割も残らなかったからさ。なぜか分かるかい？」

「えっと…… 器の中身が全部こぼれちゃったから？」

「はっ、頭はそこらの愚図よりも回るようだ。たしかにそうさ。最も重要な中身も流れ出ていってしまった」

「それとどう関係あるの？」

「そう急かさないでくれ。話はこれからだ。器は半分に割れたが、傾ければある程度の中身は受け止められるだろう？ しかしそれでも高が知れている。ここで君に与えるものについてだ」

研究者が右顔半分が髑髏の仮面で覆われた女性が持つてきた瓶を

受けとる。

中には黄色い飴玉のようなものが敷き詰められていた。ザエルアポロはその中から一つ取り出すと、ニルフィに与える。

「僕は器が半分に割れたなら、補完すればいいじゃないかと単純に考えたわけだ。元は僕だったからね。しかし失敗して、この駄作を僕は薬と呼びたくなかった。それだけだ」

頭に『?』マークを浮かべるニルフィに朗々と語った。

「これを食べれば確かに肉体は全盛期に戻った。しかし器が戻っただけで、中身は空っぽさ。おまけにその効果も半日というくだらなさ。破面^{アラシカル}で散々実験しても、肉体の年齢が全盛期になるだけの、張りぼてだよ。そうだね……君にとってはシンデレラの魔法のようなものさ」

「すごい！」

「駄作で喜ばれても嬉しくないよ」

「でもすごいよ！ 私、失礼なこと言っちゃった！」

「これで分かっただろう？ こんなことは僕にとって訳ないと」

そこまで喋り倒したザエルアポロは眼鏡のような仮面の名残を指で押し上げる。彼が気づいているか分からないが、その顔はどことなく満足げだった。

しかしそばにやって来たグリーゼを見て不愉快そうになる。

「なにか文句でもあるのかい？」

「……毒や、危険な物は含まれていないのか？」

「あるわけないだろう。これは元は、僕が自分のために作った薬なんだ。毒は毒で、薬は薬だ。どっちも混ぜては効果が現れるはずもない」

「……危険では、ないんだな」

「当たり前だろう。本当ならこんな舐めた口を効いてくれたお姫様は毒りんごで眠ってもらうべきだが、そのままこの程度のもを作れないと思われては不快だ。いつもなら蟲でも入れるが、それもしていないと誓おう」

嘘は言っていないのだろう。ニルフィの認識を改めさせるためだ

けに、ザエルアポロは最低ランクの物を与えて、それでもこの程度は可能だと教えてやりたいのだ。

いつもは冷静沈着なはずだが、どうやらニルフィの煽りが心の底から気に入らなかつたようだ。

「ほら、これで話は終わりだ。さっさと帰ってくれ。まったく、無駄な時間を取られた」

半日しか持たないけれど、大人になれる薬丸。ニルフィは金色の目を見開いて、手に持った黄色い飴玉を見つめた。

「ありがとうございます！ ザエルアポロさん！」

「…… フン、出来るなら、二度と来ないでくれ」

ニルフィは飴玉を大切そうに握りながら、グリーゼと一緒に宮を出た。

そして移動し、グリムジョーのいる第6宮セスタ・パランスオの前までたどり着く。

「…… 主よ。まさか本当にそれを使うんじゃないだろうな？」

「使う！ 早く大人になってみたい！」

「…… やはり駄目だ。さすがに怪しげなものを、俺の目の前で見ながら食べられてはたまらない」

「あっ！」

グリーゼは恨まれてもいいと、飴玉をむしり取って握りつぶした。

細かな欠片となって黄色い破片は砂漠に散っていく。

名残惜しそうに見ていたニルフィは嘆息した。

「つまらない」

「…… ザエルアポロには悪いが、他の奴等も食べるなどお前に忠告したはずだ」

ザエルアポロからお菓子を貰っても食べるな。ニルフィは理由をあまり知らなかつたが、口酸っぱく言われていたのだ。禁止されてしまふのではないかと予想していただけに、ニルフィは唇を尖らせる。

いじけたようにニルフィは宮に入っていく、グリーゼは嘆息しながらそのあとを追う。

待っていたかのようにシャウロンが扉の前に立っていた。

「おや、姫君と…… グリーゼ殿ですか」

「……押しかけてすまない」

「いえいえ。それよりも貴方にお話しておきたいことが……。あ、グリムジヨールは上の階にいますよ。ニルフィネス様は先に行かれてください」

「うん、わかった!」

すぐにニルフィは駆け出して行き、階段を上って行った。

まるで、グリーゼとこのまま一緒に居ては、気付かれてしまうからとでも言いたげに。

……ここで、グリーゼは疑問を抱くべきだった。あれほど大人になろうとしていたニルフィが、魔法のような飴玉をあれほどあっさりと諦めたのか、と。

そして気づくべきだった。

ニルフィのポケットにもう一つ、ザエルアポロの所から勝手に拝借した黄色い飴玉が入っていたと。

子供は得てして頑固であり、一つのこと集中したら視野が狭くなる。それが今の彼女の状態だ。なまじ行動力があるだけに手に負えない。

コレは奪われると予想していた。だから何個かの予防策を張っていたのだ。

無邪気に、無垢に。貪欲に、強欲に。子供特有の感情で。

てってけと階段を上りきり、グリムジヨールの元へと走っていく。

「グリムジヨール!」

「……てめえか。昨日の今日で何の用だ?」

「見て、コレ!」

「飴、か? はっ、てめえみてエなガキにはお似合いだな」

「ん、今からでもそんなセリフを言えないようにするからね」

「ああ? 出来るもんならやってみるよ」

こうして、ニルフィは躊躇いなく飴玉を口に放り込んだ。

「この、ザエルアポロサンの作った飴玉で!」

「……あ?」

グリムジヨールが止めようとしたときには既に遅かった。

コクン、とニルファイが球体上のナニカを飲み込み、ドヤ顔となつて
グリムジョーを見る。

「……………」

「……………」

「あれ？ おつかしいなあ。これで私も大人になれるはずー」

バゴオオオオオオオオオオツ!!

グリムジョーの眼前で、ニルファイが閃光と共に爆発した。

トランスフォームと主従たち

これは、のちにザエルアポロが語ったことだ。

「そうだね、あの薬とも呼べない代物に名を付けるとしたら、『完成促進薬』なんて安易なもので十分だ」

彼は眼鏡を中指で押し上げながら、肩をすくめる。

「不完全なものを形だけ完全にする。それだけに終始してしまう駄作。まア、もちろんそうなるだろう、魂にまで影響を及ぼすのはただの薬に無理だつてことさ。…… どういう意味かって？ 言っただろう、不完全を形だけでも完全にする、と。聞こえてなかったのかい？」

だからそれがどういう意味なのかと問えば、ザエルアポロはそんなことも分からないのかとも言いたげに、鼻で笑う。

「つまりね、完全であるものには元から作用しないのさ。あの飴玉をそこらの奴の口に入れてみるといい。そうすると、なにも起こらないからね。不完全である者が服用した時にだけ効果を表すのさ。そうすると、ソイツの完全な、つまり全盛期であつたはずの姿へと強制的に引き戻す」

つまり不完全であることが変化に必要な条件ということらしい。

そして割れた器をもともとあつた形に戻す。けれども肝心な『中身』は満たされないため、言葉通りの形だけになるのだろう。

破面は仮面を割つた時点でほとんどが完成体であり、該当するものはごくわずかだ。該当者は非常に珍しいようだった。

それだけのいわゆる被験体をなぜ簡単に帰したのかと訊けば、

「僕は一目見た時から『彼女』が未だに不完全な体だと思つた。だからもっと別の薬じゃなくて、研究成果の一つにでも加えられるのならと思ひ、あの飴玉を与えただけだ。クソツ、あの時の僕はどうかしていい。貴重なサンプルが目の前にあつたというのに、いつもなら聞き流す戯言を真に受け、蟲なり毒なり入れていたものを、ね。今でも悔やむよ。あの白い腹にメスを入れて『ピー（自主規制音）』を引きずり出して、『ピー』して『ピー』した後は、刺激に対してどのような反応を

するのか『ピー』に『ピー』をブチ込んで『ピー』から『ピー』を弄りまわし、『ピー』『ピー』『ピー』してやったはずなのに!! バラガン様が目に掛けてやってなければ、藍染様の許可さえ下りていたら! まったく、『ピー』にいろんな管を『ピー』して『ピー』してやれば僕の研究がはかどって、なによりあの可愛らしい顔が歪んで『ピー』すればさぞ『ピー』『ピー』『ピー』ー」

以下、自主規制用語のオンパレードの為、削除しました。

グリムジョーは立ち尽くしていた。

セスタ・バラシオ
第6宮を揺らすには十分な爆発が眼前で、それも顔見知り……それ以上に親しくはないと自分に言い聞かせている少女から生まれたのだ。

「なん……だど……!？」

靈子の煙によつて視界が遮られ、さつきまで話していた少女、ニルフィの安否は分からない。

「おい、ニルフィー!」

彼にしては珍しく戦いでもないのに焦った声が喉から出た。それに気づくこともなく、呼びかけ続ける。

いきなり顔見知りが発した。それだけで常人ならば声も出ないまま呆然としていただろう。しかしグリムジョーは煙の奥を睨みつけ、叫ぶように少女の名を呼んだ。

ザエルアポロ印のキャンディ。ただそれだけでこの突発的な出来事が説明できるような、狂気の産物だ。

なぜそれをニルフィが持っていたのか。あれほど口酸っぱく、耳にタコができるほど十刃エスパーダの連中が忠告したのに、なぜ食べたのか。そんなのはあとだ。

グリーゼフラシオンや従属官たちはもうすぐこの部屋に来る。

今はニルフィの無事を確認しなければならない。

「チツ、くだらねエことしやがって!」

グリムジョーは煙の中に足を踏み入れた。

しかし足もとに違和感。視線を下げれば、なにか薄いものを踏んだようだ。

「……………」

白い死覇装の切れ端だった。それが誰のものかなど、教えられなくとも分かる。

煙を掻き分けながら前に進もうとするグリムジョーだが、すぐに鬱陶しくなり、霊圧を放出して煙幕を吹き飛ばす。

その何気ない行動を彼はすぐに後悔することとなった。

視界を遮るものがなくなり、景色はクリアになる。そしてモロにグリムジョーの視覚にその光景は飛び込んできた。

「……………」

煙の最中に居たのは、床にへたり込むようにして不思議そうに小首を傾げた、女性。いや、もしかしたら少女かもしれない。外見的な区別からはそのように判断が困るような、大人にも子供にも成りきれていない存在だった。

涼やかな白い体には丸みを帯び、しかしそれが華奢な体軀を一層儂げにさせている。鴉の濡れ羽のような腰までありそうな髪と対比するように、金色の双眸は無垢な光を放つ。さらに形の良さげな双丘が腕に挟まれて、これ以上ないほど自己主張していた。

幼さと女性らしさが合わさったアンバランスな色香が倒錯的だった。

なぜこうもグリムジョーがわかるかと言えば、それはひとえに、女が一糸まとわぬ裸体を晒していたからだろう。

グリムジョーはまず顔を天井に向けて目頭を押さえる。そうすること十秒。そしてまず右を見て、左を見て、正面に。よく見知った少女の姿はなく、代わりにその幼女が成長したかのような容姿の女が目の前にいた。

『これで私も大人になれるはずー』

ニルファイが爆発する直前に言ったセリフが頭に思い浮かんだ。

ザエルアポロ印の怪しげな飴玉。ニルファイの言葉。そこから得ら

れる答えは言わずもがな。

「てめえ、ニルファイ……か？」

特徴的な耳の上から生え、髪を掻き分けるように後頭部にまで沿って伸びた角のような仮面の名残。それが何よりも証拠として機能する。

しかしニルファイと思われる少女は目をパチクリとするだけで、不思議そうにグリムジョーを見つめていた。

裸体の美しい少女がいるからとグリムジョーに劣情の類は湧かない。その要因は、もしかしたら少女の正体を知っているからかもしれないが。

聞こえていなかったのかとグリムジョーが顔を寄せる。

「いいか？ てめえは、ニルファイか？」

「？」

区切りながら、再度の質問。けれど少女は可愛らしく小首をかしげるだけだ。

そこに違和感を感じるが、今の少女の姿を思い出し、グリムジョーは気まずげに己の一張羅である上着を脱いで彼女に被せた。

少女はされるがままといったように受け取った上着を肩に掛けられる。好奇心の旺盛な犬のように、スンスンと死覇装の匂いを嗅いだ。

ここまで一言も喋っていない。

「おい、声は聞こえてるな。なら何か喋ってみろ」

「――」

反応はない。グリムジョーの声は確かに聞こえているようだが、その意味を理解できていないかのようだ。

深く考えることは苦手だ。そうしている暇があれば殴りに行く。だからこうしてくだらない問答するのは性に合わない。

これはあの馬鹿だ。直感でそう結論付ける。

なぜ馬鹿が馬鹿馬鹿しいことをしたのか疑問だが、それはやはり馬鹿だからだ。

「何やってんだよ、お前は」

これは何故、自分からハプニングを起こすのかと白い額を指で小突く。

「——ッ！」

「うおアッ!？」

するとなぜか少女はパツと顔を輝かせ、飛び掛かるようにグリムジョーに抱き着いた。——彼の頭に。程よく膨らんだ二つのたわわな果実がぶち当たった。あの平皿がどうすればこうなるのかと場違いにも思ってしまう。

しかし体重は、とても軽い。羽でも受け止めたのかと錯覚する。

間が悪かった。それが誰にとつてかというところ、グリムジョーに他ならない。

部屋の扉が蹴破られるように開かれた。

「おい、なにがあつた!？」

シャウロンが先頭に立ち、そして次にグリーゼ、奥にはグリムジョーの従属官フラシオンたちが集っていた。

あの爆発だ。グリムジョーの心配はしてないが、ニルフィの身に何かあればアネットから制裁を受けるのは自分たちである。男として情けない？ そう思うのなら激昂したアネットの前に放り出してやろうではないか。熾烈で苛烈で激烈。その怒りを一身に受ければ、灰が残れば運がいいほうだ。

だからこうして急いでやって来た。

しかしどうだろう。冗談でもなく死神の……ここで例に出すのは黒いフードを被り大鎌を振りかぶる髑髏面の方だが、その死神のキスを感じていたのに。

それを退けるために来てみれば、なんのことはない。

グリムジョーが裸体の女に抱き着かれているという、痴話もいい場面だったのだ。

「……遅かった、か」

一目見て事情を理解したグリーゼが小さく呟く。そして右手で顔を覆い、あらぬ方向を向いた。

しかし何も知らぬ第6十刃セスタ・エスパーダの従属官フラシオンたちがすぐに割り切れるはず

もない。気まづげにシャウロンが視線を逸らしながら言った。

「グリムジョー……。貴様の趣味にとやかく言うつもりは無い。しかし姫君と仲が良いからといって、流石に容姿的に似たような者を侍らせるのは、いかがなものか」

「なに勘違いしてやがる！ 早くコイツを引つpegせ！」

お母さん悲しいとでも言いたげに首を振るシャウロンにグリムジョーが叫ぶ。

少女はグリムジョーに抱き着いたまま離れない。彼が少女の頭を掴んで押し返そうとする。接着剤が二人の間にあるように、あるいは磁石のように引きはがせないようだ。

「そう隠すこともないだろう。しかし今は姫君が来訪している手前。情緒教育に良くないことは、アネット嬢が許さぬと思うが。それより姫君はどこだ。ここに向かったはずだが」

「馬鹿かてめえ！ こいつがニルファイなんだよ！」

「……………」

フランシオン 従属官たちは何か可哀想なものを見る目になった。

「そこまで錯乱しているのか……………」

「ぶっ殺すぞてめえらッ！ そのムカつく顔やめやがれエツ」

殺気が形となったような霊圧が吹き荒れた。自分はこの部下たちにどう思われているのかと。

グリーゼが頭痛を堪えて仲介していなければ、宮の一角とフランシオン従属官の何人かが消滅させられていたかもしれない。

「…………… どうする？ お前にも選択権があると判断するが」

「どうもこうもねエだろ。この馬鹿を今すぐ戻せ」

この宮に応接間といった場所はない。適当な広い部屋を選んで一同は会していた。

苛立ちが燻り止まぬといった様子のグリムジョー。彼は対面にいる石材に腰掛けたグリーゼを睨んだ…………… その威圧の様子も、いまだに抱き着いてくるニルファイのせいで半減どころの騒ぎではない。

彼女はローブのようなものを纏っている。男所帯に女物の服などあるはずもなく、下官に適当なものを用意させたのだ。これを着せる

ためにグリムジョーとニルフィを引きはがすのは重労働であった。

「……それは俺には無理な話だ」

「あア？」

「……お前の言う通りなら、主が食したのはザエルアポロから貰った飴玉だろう。奴が言うには、効き目は半日で切れるらしい」

「あの野郎の言ったことを信じろってか」

「……それ以外に方法もあるまい。さすがにこの状態の主を連れまわすのも気が引ける」

グリーゼはニルフィに目をやった。彼女は不思議そうに見返す。一度もその小さな口からは言葉を聞くことができないでいた。

「……副作用については何も言っていなかったんだがな」

声が出ない。様子を見る限り、自分が誰なのかもわかっていないかもしれない。

体は大人になったというのに、精神はもしかしたら更に幼くなってしまうのか。こうしてグリムジョーにくっついていられるのも、生まれたての雛のように刷り込みとして、最初に目にした彼を親か何かと思っているからだろう。

もしかしたらこれがザエルアポロの意趣返しなのかもしれない。

この状態のニルフィをアネットの前に持って行ったら、確実にあの朱色の髪フラシオンの従属官は怒り狂う。もしかしたらザエルアポロの宮に突撃をするだろう。女とは恐ろしい生き物なのだ。なぜノイトラがそこまで正面切って女に反目できるのか、いまこの場に集まった男たちには理解に苦しむものだった。

アネットの実力と性格を知っているだけに、下手に動けない。

「頭の足りない奴だと思ってたぜ。けどな、どうしてコイツはこんなバカなことをしやがった。理由が、くだらねエ理由があるだろ」

「……たしかに、くだらないかもしれない。が、主にとっては重要なことだった。どうにもできないと思っただからこそ俺は付き合った」

「コイツはなんて言ってたんだ？」

「……大人になりたい、と」

グリムジョーがニルフィを見下ろす。たしかに肉体は成長し、柔ら

かさが服越しにも伝わるほどだ。二の腕に絡めば双丘が感じられ、肩に乗つかるようにすれば心地よい温かさがある。無垢で、さらに無防備。仮に襲われてもされるがままだろう。

グリムジョーにとつてはうっとおしいだけだが。

しかしそれだけである。今のニルフィは精神が同じくらい退行してしまったようだ。

だから、なにを言っても伝わらない。猫のようにじやれつく少女を呆れの眼差しで見るしかなかった。

「こうなりやあ、ザマネエだろうがよ」

背伸びしたがりな様子は普段から気づいていた。

それがまさか、ここまでやるとは思いもしなかったが。

「……主は自らと他者の距離が開くことを嫌う。それは知っているな？」

現世での調査から帰ってからの報告が気に入らなかったグリムジョー。その辛辣な言葉を聞いてニルフィは傷ついた。そして必死に追いかけて、嫌わないでほしいと懇願した、傷以上に痛ましい姿。

あの言動はいつそ異常だった。ニルフィの表情は普段とも、戦いの時のような表情とも違う。切羽詰まり崖に立たされたような表情をしていた。

嫌わないでほしい。何でもする。

もし藍染を倒せなどと無茶な要求をしても、躊躇いなく実行しようとしただろう。それだけの焦燥があった。

「……俺たちのやり取りを見て、主は自分が距離を置かれていると思っただろうだ。その理由を自分の容姿に結び付けた。俺たちのような成体の姿になれば、それを解消できると考えたようだな」

どちらともなく、ため息。

体が大人になったからといって精神がそれに引つ張られていかなければ、ニルフィが変わったことにはならない。

そこまで彼女は考えただろうか。おそらく、答えは否だ。

手のかかる妹、あるいは娘。知り合いの破面アラシカルからしたらニルフィはそんな存在だ。

破壊衝動の多い存在である彼らにしてみれば滑稽極まりない感情だろう。個であることを定める彼らが、親愛などという、あるいはそれに類した感情を持つなど。

幼く無垢な心を持つからこそその関係。もしニルファイが破面アランカルとして完全な心を持つてしまつたら……、すべてが脆く崩れ去るかもしれない。

そう考えれば、むしろこの状態になつて良かったのか。

「……」

そんなことも気付かずに、ニルファイはグリムジョーの背に抱き着きながら、興味深そうに二人のやりとりを見ていた。

ただ肉体が成長したからといって、他の十刃エスパーダたちの接し方が変わるはずもない。

幼いままでいいのだ。葛藤も、苦悩も。この少女には似合わない。偽りの姿ではなくありのままであることこそ、一番必要なのだらう。

子供ゆえに。

「てめえは、無理に変わろうとしなくていいんだよ」

「……？」

理解できないと分かっている、つい言葉を投げかけた。

普通ならば最初から見捨てている。それでもグリムジョーが、他の破面アランカルたちがないがしろにしなかったのは、ニルファイだからだ。それ以上でもそれ以下でもなく、彼女だからこそその繋がり。

そこに理由なんて必要ない。意義を求めて彼らが出会つたわけではないからだ。

「話はこれでいいだろ。さつきとこいつをどつかの部屋に押し込むぞ」

「…… ザエルアポロの所には行かないのか」

「今のコイツを連れて行くつてのはどう考えても危険だろうが。それよりだったら下手に動かねえように、アネットが気付かない内に縛つてあと半日を待つてやる。それで戻らねえなら……」

「……へえ。さつきから押し込むとか、縛るとか、変な言葉が聞こえた

のは気のせいですかあ？」

空気が凍った。ここにいるはずのない人物の聲が、よく響いた。全員がゆっくりと扉の方へ首をまわす。目に入ったのは朱色の髪。そして笑顔。それも特大の、目が笑っていない恐怖を煽るものだ。いつの間にか佇んでいるアネット。彼女は片手にバスケツトを下げながら、口調だけはほがらかに言った。

「探したわよ、グリーンゼ」

「……そうか。ご苦労だったな」

「ええ、ホントに苦労したわよ。ニルファイがクツカプーロにあげるお菓子を忘れたから、第10宮デイエス・パラシオに届けに行ったら、なぜかヤミーしかいなくってね。問い詰めても知らぬ存ぜぬ。探査回路ベスキスもあなた達が霊圧を抑えてたせいで役に立たなかつたわ」

ついさつきまでは、ね。アネットは口の端を吊り上げた。耳元まで裂けてしまいそうな凶悪な笑みだ。

「驚きましたよ。なぜかいきなりニルファイの霊圧が、この宮の方向から感じられたんですから」

ニルファイが飴を飲み込んだ瞬間の爆発のことだ。あの爆発は彼女の霊圧が暴走したことで、被害を大きくしたのだろう。

「それで急いで来てみれば……」

顔をもたげ、アネットがグリムジョーの背にくっついている少女を見やる。

ただ見るだけで、その少女がニルファイだと一目で見抜いた。霊圧の質も同じであり、なによりアネットが気付かないはずもない。敬愛する主人の存在を。

「その子に何してやがるんですか、野郎ども」

ドスの効いた、殺気の混じる低い声。纏う霊圧は陽炎のように揺れ動く。

男たちの恐れていたことが起きた。もしかしなくとも、アネットは凄まじく怒っている。即座に殺りに来ないのはニルファイがいるから

だろう。

弁のたつシャウロンが怒りを抑えようと試みる。

「アネット嬢。我々は無実だ。姫君の姿は一時的なものに過ぎない。そのため、心配は無用だ」

「心配するなと？ ニルファイがそんな状態なのに？」

「このようになったのは我々の責任ではないことを先に言っておく。怪しげな薬を飲んだために、彼女は…… まあ、少しばかり成長してしまった」

「少しどころか結構いろいろと成長してますよね」

アネットの姿を見れば普段ならばニルファイがなにかしら反応する。しかし今は新しい顔ぶれに首をかしげているだけだ。普通ではなくなっているのは理解できた。呼びかけにも、一切の返事をしないのだから。

そのニルファイがくつついている男にアネットの視線が行くのは因果である。

「グリムジヨー？」

「なんだ」

「なに侍らせてるのよ。もしかしてアレ？ YESロリータNOタツチの戒律を守らなくて良くなったから、その子が大きくなったのを良いことに体にベタベタ触ってるんじゃないの？ アンタみたいなのがいるから、愛でるだけのアタシたちが肩身狭い思いをしなくちゃいけないのよ!!」

「知るかよ！ 代わりたきや代わりやがれ！」

勝手にキレたアネットにグリムジヨーがキレ気味に返す。

「ふん、アタシはですね、貴方たちが羨まーけしからー代わってほしいけども！」

「…… アネット。この場面でも欲望に忠実なお前に、敬意を示したいぐらいだ」

「うるさい！ いかかわしいこととしてた野郎どもが！ ニルファイが抵抗できないのを良いことに、部屋に監禁していかかわしいことに励もうとした癖に！」

「……話は最後まで聞け」

怒りとピンク色な欲望の占めている頭に、グリーゼの言葉など届いていないだろう。

「それにどうして貴方が付いていながら、こんな不祥事を起こしてるんですか。何のためにアタシたちが保護者として同伴してるのか忘れた訳じゃありませんよね？ 拾い食いさせない、悪い大人に付いて行かせない、迷わないように、って」

「……これ以上言い訳をしても見苦しいだけだな」

「グリーゼ殿。我々のために気を強く持つてほしい。とばつちりを受けるのは御免なのでね」

かなり潔く首を差し出したグリーゼをシャウロンが止めようとした。この巨漢は気づいてるだろうか。差し出す首の隣に、セスタ・エスパーダ第6十刃主従のものまであるのを。

しかし次のアネットの質問で、退路が断たれた。

「一つ、教えて頂戴」

「なんででしょうか」

「いかがわしいことしてないって言うのなら、ニルフィの死覇装はどうしたのよ？ ねえ、もしかして見たの？ それと誰が着替えさせたんですか、そのローブに」

誰が最初というワケでもなく、アネットから視線が逸らされた。アネットの殺気が倍に増しているのだけが理由ではないのは確かだ。

なるほど、へえ……とアネットは深く頷き、

「いい？ これからアタシはアンタ達を殴る。けど、アタシはアンタ達が憎くて殴るわけじゃない！ ——殴りたいから殴るのよ!!」

それからしばらく、二人のエスパーダ十刃の主従たちがいる部屋では爆砕音が響いた。そしてそれ以上に、無数の鈍くて重い打撃音が下官たちの耳に届いたという。

煙が噴き出す部屋から出てきたのは、猫のように丸まるニルフィを抱きかかえたほくほく顔のアネットで、どちらも無傷だったらしい。

幸運にも、ザエルアポロの予測通り、ニルフィの姿は半日で戻った。成長している姿の間の記憶は無くなっていたようだ。正気に戻っ

たニルフィは、なぜかアネットの肌がつやつやしているのが気になった。身体が火照ること以外には、特に後遺症などはないようだ。

元に戻ったニルフィは、アネットからありがたい説教を聞かせられて懲りたらしい。

ただ、それよりも、

「無理に変わろうとしなくても、いいかな、って」

ニルフィは気恥ずかしそうにはにかんだ。

グリムジョーは鈍く痛むわき腹に舌打ちを零した。

「クソッ、あの煩惱女が……ッ」

あの細身の体のどこから出るのか、凄まじく重いボディブローを一発喰らってしまった。それなりの力で回避をしようとした。けれどこのザマだ。朱色の髪の女に、そして自分の力量を疑ってしまうのが苛立たしい。

「……………チッ」

再度の舌打ち。今度は大きく。

そもそもアネットは自分から十刃エスパーダを降りていなければ、今でもその座に居たであろう実力を持っている。あれが十刃フリバロン・エスパーダ落ちで従属官という立場なのだから、笑い話もいいところだ。

その身分に甘んじる姿を見た時の苛立ちは今でも覚えている。お前はそんな所に収まっていい器じゃないはずだ。何度、この言葉が喉元から出かかったか。

それにさつきまで宮にいたグリーゼも。

並の破面アランカルならば一発でノックアウトしそうな殴打を甘んじて無数に受けながら、二秒ぐらい床に倒れていただけで、ニルフィが自分の宮に戻ると知ると平然としながら立ち去って行った。タフとかそういう次元ではない。彼も彼で従属官フラシオンとしては規格外である。

グリーゼは自分の座を明け渡すとき、本気で戦ったのか？ ふと、そんな疑問が時折あり、くだらないと答えを出すことはない。

けれどあの二人とはそれなりに面識がある。だからもどかしい。なぜ、お前たちみたいな実力を持った奴が、下にいるのか。

そしてどうして、時々満たされているような表情を浮かべるのか。ニルフィのことをグリムジョーが苦手とするのは、彼女の主人としての在り方がよく分からないというのもある。

退化したからとはいえ、元が下級大虚であるグリムジョーの従属官たちは、やっと回復したところだ。

——これでいけるのか？

もう少しで自分がやろうとしていることに、疑問が付きまとう。

グリムジョーの従属官たちは数の上ではアネットたちより多いが、いざ戦えば確実に負ける。力がない。その事実が、これからの選択肢でどう動くのか。

これは成功するしないの話ではない。ただグリムジョーの個人的な感情で、いわゆる独断の行動だ。

それに自分をここまで慕ってきた者たちを巻き込んでいいのだろうか？ 普段なら、そもそもシャウロンたちは勝手に付いてきて、そしてグリムジョーも勝手にしろと何も言わない。

そのまま死ぬのなら自業自得だ。そう割り切ったし、従属官たちも心得ている。

けれど、

——これでいいのか？

甘ったれた考えが浮かんでは消える。

それなりに長い時間をシャウロンたちと共に過ごした。それが欠ければどうなるのだろう。

「くだらねエ」

グリムジョーは『王』だ。それを疑ったことはない。藍染には形だけ従っているつもりである。

自分はバラガンとは違う『王』だ。

孤高となるのならば、甘んじて受けよう。

それでも心のどこかで、ニルフィたちのような関係が築けたのではないかと……。

「ここにいたのか」

思考が中断された。むしろそれでよかったと、グリムジョーは思う。

宮の屋上で仰向けに寝っ転がり、偽りの青空を眺めていたグリムジョーは視線をずらす。

「なんだ、シャウロン。もう寝てなくていいのかよ」

「これでも誇りはある身だ。さすがに女に殴られて昏倒したままでは、恰好が付かないだろう」

アネットは手加減していたのか、とにかく痛めつけるだけに制裁を終えた。

特に後遺症もなくシャウロンたちは動けるまでに回復したようだ。あと少しすれば戦闘も全力で可能になるだろう。……ボッコボコにされた痣が痛々しいのは気のせいだ。

「貴様らしくもなく、気付くのが遅かったな。らしくも無く黄昏ていたか？」

「てめえは茶化しに来たのかよ」

「それでも良かったのだがな。とにかく、我々は回復した。さほど時間もなく出発できるだろう。アネット嬢が居なくとも、予定調和ではあったが」

グリムジョーの横まで来たシャウロンは、立ったまま砂漠の地平線を眺める。

「姫君への挨拶はしなかったようだが、良かったのか」

「ああ、アイツは関係ない。それをするだけ義理もねエだろ。むしろ俺が義理立てしてもらおうぐらいだ」

「……そうか」

「なんだよ」

「もう一度確認するが、良いんだな？ 一気に立場が危うくなる可能性がある。不測の事態が起こるかもしれない。つまりぬ……いや、他者から見ては無意味な行為だぞ」

「それに着いて来るてめえらも大概だろうが。他の奴等に見られるよなへまはするんじゃないぞ」

「…… ああ、見られはしないさ」

含みを持たせてシャウロンが肯定する。

現世への独断進軍。これからグリムジョーが行おうとしていることだ。もちろん藍染のためを思っているのではない。ただ気に入らなかつたからだ。あの死神の少年が生きているのも、先に現世に行った面々が誰も仕留めなかったのも。

彼の気質が、認めようとはしなかったのだ。

「デイ・ロイも連れていくことにした。アネット嬢からの拳でダメー
ジが最も大きかったのは奴だが、懇願する始末でな」

「…… そうかよ。勝手にしろ。それと、わざわざ俺に言わなくていい」

「ところで、いまからでも時間はある。姫君へ何か伝えておけばどうだ？ そうすればいじけることもしないだろう」

「お前なあ」

グリムジョーは半身を起こし、不機嫌そうな顔をシャウロンに向ける。

「今まで思ってたんだけどよ、どうして何度も何度もニルフィのことを言葉に混ぜやがる」

皮肉屋な気質のあるシャウロンだが、ここ最近はよくニルフィのことを口にしていた。それもグリムジョーに絡ませるように。それが不可解だ。

何のことはない、シャウロンが肩をすくめる。

「貴様は不器用極まるからな。彼女を気に掛けても行動に移せないだろう。それをけしかけてるだけだ」

「てめえ……ッ」

「私としては嬉しいことだ。貴様が他人を気に掛ける姿を、見ることが
できるからな」

静かな口調でシャウロンが言った。それは諦観を含んでいるようであり、もしかしたら羨望があるかもしれなかった。前者は主人に、後者は少女に。手に入れられなかったものを見た。そんな表情だ。
「この世に完全なものは存在しない。藍染様も例外ではないだろう」

そして、と続けて、

「貴様が『王』となっても、例に漏れることはない」

ここに来て初めてシャウロンがグリムジョーと目を合わせた。グリムジョーにはその内心を知ることが出来ない。

先に視線をはずしたのはシャウロンだ。認めたくはないが、あと少しそれが遅ければ、先に目を逸らしたのはグリムジョーだったかもしれない。

「我々は従者だ。精々、使い潰せばいい。その時の後悔が、貴様が本当の『王』になった姿を見れなかったこと、などとならなければいいが」
らしくもないのは、どちらだろう。

グリムジョーが獰猛に笑う。虚勢ではない。心の揺らぎが収まり、さつきまで弱さを吹き飛ばすように。

「言ってやがれ。てめえの言葉が戯言だって証明してやる」

シャウロンは深く、噛み締めるように頷くだけで、なにも言わなかった。

迷いは断った。グリムジョーは立ち上がる。

それから少し経ち、セスタ・エスパード第6十刃の主従たちはラス・ノーチエス虚夜宮から姿を消した。

閉幕を下ろすのは

限定解除。

それをした途端、シャウロンは相対していた死神、護廷十三隊十番隊長である日番谷冬獅郎の霊圧が跳ねあがったのを感じた。日番谷だけではない。他の場所からも二つ、先程までとは比べ物にならない霊圧が空へと吹き上がる。

光の帯が夜闇を切り裂いた。

レスレクシオン テイヘレタ

帰刃『五鋏蟲』を発動させていたシャウロンは、唐突に己の右腕

に違和感を感じる。

「な……何だと!？」

鋭く伸びた爪を持つ手が凍り付かされ、砕け散っている。

先ほどまでの日番谷の全力では傷つかなかった強靱な爪が破壊されたことに目を見開く。

「なぜだ？」

現世に侵攻した第6十刃主従。セスタ・エスパイダ先のニルフィたちの出現を危惧したことによる尸魂界の援軍もろとも、空座町にいる霊圧保持者を皆殺しにするつもりだった。

デイ・ロイとエドワードは返り討ちにされたようだが、シャウロンは日番谷を、イールフォルトとナキームはそれぞれの副隊長相手によく立ち回っていたはずなのに。

「——限定解除」

霊圧の上昇により濃くなった冷気を振り払いながら、小柄な少年のような外見の死神は言った。

「俺たち護廷十三隊の隊長・副隊長は、現世の霊なるものに不要な影響を及ぼさぬよう、現世に来る際はそれぞれの隊章を模した限定霊印を体の一部に打ち込む。そうすると、霊圧を極端に制限される」

ここまでの説明でシャウロンは理解した。

つまり、隊長格相手に勝率のある戦いをできていたのは、相手が本来の力を抑えていたからで。

「その限定率は80パーセント。つまり限定解除した俺たちの力

は——五倍だ」

「……成程」

タネが割れるとシャウロンは屈辱を味わう。それと同時に納得もした。

所詮、自分たちは最下級大虚ギリファン。そんな自分たちで護廷十三隊の隊長格を殺せるのなら、藍染はそもそも十刃エスパーダなど作らなかつただろう。だから、これは危惧していながらも予想できたこと。

相手の霊圧が二倍までなら良かった。しかし五倍となれば、今度は逆にシャウロンが追い詰められる側だ。

「終わりだぜ。シャウロン・クーフアン」

日番谷が刀を構える。限定解除前から卍解『大紅蓮氷輪丸だいぐれんひょうりんまる』を解放していた。霊圧が膨れ上がったその一撃を、さつきまでの前哨戦のように受け止められる自信は、シャウロンにはない。

シャウロンは奥歯を噛み締めた。視界の端ではナキームが、十番隊の副隊長である女の死神に背を斬られている。イールフオルトの霊圧も大きく乱れた。もはや、彼らでは勝利を掴むことすら叶わない。

「それでも、私は死ぬわけにいかない」

噛み締めるように呟く。

そしてシャウロンは声の限りに叫んだ。

「——退け!! 一時撤退だ!!」

けれど心のどこかで分かっている。この場で、自分たちは死ぬのだと。

手負いとなった最下級大虚ギリファンでは力を吹き返した死神から逃げられない。

それでも、シャウロンは空へと逃げる。

——ただだツ。ここで、ここでは! 死ぬわけにはいかない!

たとえ叶わないとしても、己を奮い立たせる。

「逃がすかよ」

気づけば、全力で逃げていると思ったのに、すぐ背後に日番谷の斬魄刀が迫っていた。死があと一メートルもしないうちに届く。

振り返りながらシャウロンは諦めた。もう、生き長らえないと。

シャウロンは生に固執しているのではない。自分たちの王が、『王』であることを見るために生きるのだ。そのためにも何もかも捧げた。だから死に対しての恐怖はない。悔しさだけが残る。

「……グリムジョーは……生きるか。」

「たとい自分たちが死んでも、主であるグリムジョーは生きて
ラス・ノーチエス
虚夜宮に戻るだろう。」

「――保険は掛けておきましたか。」

この侵攻を、ニルフィの成長事件の際に第6宮セスタ・パランソにやって来たグリムジョーにだけ教えている。それを伝ってニルフィにも届くだろう。グリムジョーは望まないはずだと思いつながら、できれば彼女にグリムジョーが『処分』などされないよう、そんな旨を託してきた。

「だから、あとのことは心配ない。」

「……無念」

斬魄刀が喉元に届く直前、シャウロンは眼を閉じた。死を受け入れるように。

「まったく、男ってこういうのかツチヨイイ、なんて思ってるんですかね?」

覚悟とか、信念とか。そんなものをぶち壊すかのように女の声が割って入る。

シャウロンは眼を見開く。それは日番谷も同じだった。日番谷の斬魄刀がシャウロンの喉元の前で止められている。

いくつもの薄く細い板を重ね合わせたような扇だった。鉄扇という武器にカテゴライズされるその特徴的な斬魄刀の持ち主を、シャウロンは知っている。すぐ右前の空中に立つように、女は左手に持つ鉄扇で必殺の刃を受け止めていた。

朱色の髪が夜風になびいている。アネットだ。

シャウロンが疑問を口にする前にアネットが鉄扇をひねる。

「遠慮はいらないかしら？」

そこを起点として紅蓮が吹きすさぶ。

ラ・ブルーマ
炎翼舞

その熱気に押されてか、日番谷が死神の高速移動法『瞬歩』を使つてまで距離を取る。

アネットはちらりと別方向を見やった。ナキームが死神の斬魄刀の能力であろう灰に身を包まれそうになっている。その様子に目を細め、身に纏う炎を凄まじい速さで灰に叩き付け、押し返す。その隙にナキームは離脱する。

警戒した死神の二人が合流し、アネットの出方を伺う。

「なぜ、ここまでやって来た」

かすれた声でシャウロンが問うた。アネットは火炎をコートのように纏いながら肩をすくめる。

「どうしても何も、アタシのご主人さまからの命令よ。あ、お願いかしら？ まあどっちでもいいけど、あの馬グリムジョー鹿を連れ戻しに東仙の代わりにやって来たんです。どうせ負けてるだろうし救助も兼ねて、ソツコーで」

「……. そこまでは、頼まなかったはずだ」

「前にあなた、言いましたよね？ 自分の主人を少しは信頼しろって。じゃあ他人の主人にまで目を向けなくてもいいってわけじゃないでしょう」

「まさか」

「アタシの主人を見くびってたみたいです。あなたたちを見捨てるなんて選択肢を取るような娘じゃないわよ」

アネットの主人にとって、今までの交流はたかが馴れ合いだと割り切れるものではなかった。

すべてを知ったうえで必要最低限の行動だけをするはずがないと、なぜ気付かなかった？

「ならば……. アネット嬢。貴女の他にも来ているのは」

「そう。グリーゼも来てるし、もちろん自分も行くってきかなかった子も、ね」

イールフォルトがいたであろう方向に閃光が奔った。

阿散井恋次は護廷十三隊六番隊副隊長である。赤髪で眉毛から額、首から上半身にかけて大仰な刺青を入れている強面の男だった。限定解除によって本来の力を取り戻し、対戦相手のイールフォルト・グランツにとどめを刺そうとしていた。

彼の卍解は『狒狒王蛇尾丸』ひひおうぎびまる。斬魄刀が巨大な蛇の骨の様な形状に変化し、恋次自身は狒狒の骨と毛皮を身に纏うものだ。

撤退の合図を待っていたかのようにイールフォルトが後退する。しかし、無駄だ。

狒狒王蛇尾丸の口元に霊圧を集中させる。

狒骨大砲ひこつたいほう

遠ざかる破面アランカルの背へと、狒狒王蛇尾丸の口からレーザーのように

巨大な霊圧の砲弾が発射された。

その光線はイールフォルトを消し飛ばそうとした……が。

インモルタル
甲霊剣

突如として間に割って入って来た人物に光線が蹴散らされる。

「なに!？」

思わず恋次は声を上げた。消耗しているとはいえ、己の全力の霊子を叩き込んだ一撃だった。それをいともたやすく、あろうことが剣で切り裂くなんて芸当を見せられるとは思ってもいなかった。

霧散した狒骨大砲のあとに残ったのは、それを真正面から叩ききつた人物のみ。

「……無駄のありすぎる攻撃だな」

鋼鉄のワイヤーを束ねたような筋肉が白い死覇装越しからわかる偉丈夫。蟲の顎のような仮面を持つ破面アランカルだ。彼は己の斬魄刀である幅広の大剣を持ち直す。刀身に纏わせていた霊子が儂く散った。

イールフォルトがその男に訊く。

「どういうつもりだ、兄弟? どうしてお前がここにいる?」

「………… 主の『お願い』だ。説明はそれだけでいいな？」

「なるほど、あのお姫様か。情報を流したのはシャウロンあたりだが………… 助かった。礼を言うよ」

「………… 主に言ってみてやれ。俺だけならば、お前たちを見殺しにしていたところだ」

大剣の持ち主が恋次を見る。

——クソツ、あいつ強えぞ…………！

イールフォルトがかすむような霊圧はもちろん、その所作だけでも隙が無い。

「………… 死神、名は？ いや、自分から名乗るのが礼儀だったな。俺はグリーゼ・ビスティーだ」

「答える必要なんかねえな。それより、てめえが十刃^{エスパーダ}か？ このタイミングで仲間のピンチに急いで駆け付けたってわけかよ」

「………… 俺はただの一従属^{フラシオン}官だ。このイールフォルトと同じな」

「てめえが従属^{フラシオン}官、だと？」

同じ格だと言われても、イールフォルトとグリーゼでは天と地ほどの霊圧に差がある。

「………… 憶測などは勝手にそちらでやってくれ…………… 赤カブよ」

「名乗らなかったからって勝手に命名するんじゃないやねえよ！」

「………… ム、すまない…………… 紅のパイナップルよ」

「赤カブがダサかったから抗議したんじゃないやねえ！ むしろさらにダサくなってるだろうが！」

「………… そうか、ならー」

「俺は阿散井恋次だ！」

恋次はさらにこのグリーゼという男がわからなくなった。のっそりした熊のようであり、どこかとぼけた様子がある。グリーゼは恋次の名を聞いて頷くと、背を翻した。

「………… 夜分、こちらのが失礼したな阿散井恋次。これで俺たちは帰らせてもらう」

「なに？ 待てよー」

何事もなかったかのように去ろうとするグリーゼを見て、恋次は叫んだ。恋次の消耗は激しく、このまま戦闘が始まらないことがなによりも重要なのである。しかし呼び止める。

自分の存在が無視されたような、そんな憤りを感じて。

「……なんだ」

「ここまでしやがって何もしねえで帰るだど？ こちとらハイそうですかって見逃すわけにはいかねえんだよ。せめてそいつだけは仕留めさせてもらうぜ」

「……止めておけ。霊圧が不安定だ。今のお前は……そう、水分を失ったパイナップル同様だ」

「その例えがムカツクが、人の戦いに割って入るヤツには分からねえだろ」

「……分かってる上での行動だ。それに、こちらもスケジューリングがみっちりだな。主の睡眠時間をこのようになつたらぬことで削りたくない」

グリーゼが威圧的に霊圧を解放する。空気が密度を持ったように恋次の体を潰し、ちよつとの衝撃でたたらを踏みそうになる。

だが、恋次は好戦的な目をグリーゼに向けた。恋次の戦いをつまらぬことだとグリーゼは言ったからだ。

それは許せるものではない。

「てめえの後ろにいるヤツのせいで腹貫かれたやつがいるんだよ」

「……そうか。謝罪しよう。それはこちらの総意ではないと知ってくれ」

狒狒王蛇尾丸を操り、グリーゼへと突進させる。重量と速度の乗った一撃。イールフオルトの帰刃した姿をも倒せると自負できる。

しかしそれは相手が格上でなければの話だ。

巨大な蛇の頭部を大剣の腹で受け止めたグリーゼが首をゴキリと鳴らす。

「……なにか失礼でもあったか？ 何をすれば貴様は納得してくれるんだ。菓子折りが目的か？」

「戦いだよー」

狒狒王蛇尾丸による重い連撃を受け止めながら、グリーゼはため息を吐く。それは心底困った人間がするものと同じだった。

「……あまり殺すなど言われていたが、仕方ない。あまりだ。必要と判断した」

眩くと、大剣で蛇の頭部を大きく上へと弾いた。その衝撃は凄まじく、数多の狒狒王蛇尾丸の関節がはずれる。

「……阿散井恋次。斬撃というのは極めればどうなるか、知っているか？」

「鉄をも斬れるんじゃないのか」

「……そうだな」

死神にも鉄を斬れそうな人材はいる。グリーゼが言ったことはさして珍しいことではない。

会話をしながらも恋次は次の一撃にすべてを賭けた。

狒牙絶咬ひがぜつこう

節の途切れた蛇尾丸の刀身を一齐に相手に突き立てる、刀身を折られた時の非常用の技。非常用とはいえ、切り札の一つである。

グリーゼに数十の骨のような巨大な刀身が迫る。

それさえも些事であるかのようにグリーゼは大剣を肩に担ぐようにして構えた。距離は二十メートル以上。そこから移動し、恋次に直接斬撃を叩き込むよりも先に、全方位からの狒牙絶咬ひがぜつこうが当たる。いかに強かろうが鋼皮イェロを貫ける威力があった。

しかしなぜか、もうすでにグリーゼは大剣を振り抜いた体勢になっている。

「……だが、それも過程の一つだ。そこから先の斬撃というのは――」

あまりにもその剣戟は、速すぎた。

「――翔とぶ」
ウオラーレ
駆霊剣

骨の刀身を掻い潜った不可視の斬撃が、恋次の左肩を斬り飛ばした。

十番隊副隊長にして、胸元を大きく開いた死覇装に身を包む美女。彼女の名は松本乱菊。

隊長である日番谷と共に、彼女は一人の女型の破面アランカルと対峙していた。

「ちよつと、隊長」

「なんだよ」

「あの炎、なんかめっちゃヤバイですよ。総隊長とは別方向でなんか危ないです」

「どういう意味だ？」

乱菊は自分の斬魄刀を日番谷に見せる。刀身の至る所が黒く欠けており、ボロボロになった斬魄刀だ。ナキームという肥満体の破面アランカルを仕留める寸前で始解の『灰猫』が炎に邪魔され、ぶつけあっていたら違和感を感じて慌てて通常の状態に戻したのだ。

そうしたら、こうなっていた。

どうやら灰猫が本物の灰にされてしまったようだ。今それができるのは護廷十三隊の総隊長だけであるが、灰猫とぶつかりあった炎はそこまでの火力はなかったように思える。あの女の破面アランカルが操る炎には裏があるはずだ。

このままではせつかく倒せそうだった最初にいた破面アランカルたちに手を出せない。シャウロンとナキームは女の後ろにいる。

「何者だ？」

日番谷の問いに、女が嬉しそうに答えた。

「アタシは現第7十刃セブティマ・エスパーダ、第一の従者であるアネット・クラヴェル。よろしく、死神の隊長さん」

「アネット嬢。たしか最初に従属官フランゾンになったのはグリーゼ殿のほずでは」

「はいそこー、黙ってないとアタシも無言のまま殴りますよー？ こういうのはノリが肝心なんですよ」

アネットと名乗った女は、なんとというか、とても残念そうな人柄だ。

艶やかに月光を反射する朱色の髪。スタイルの良い体を包むチャイナ服のような白い死覇装の右側には腰辺りまでの深いスリットが入っており、そこから清楚なはずの白が妖しい色香を湛える美脚を晒している。ここまでの美女はそういない。けれど口を開けば残念さがひどい。

「その靈圧で十刃エスパーダじゃないのか」

「アタシが？ まさか。自己紹介したように、ただの従者よ。だからここにいないんだけどね、うしろの二人を殺させないために」

「それは出来ない相談だな。そいつらを仕留めてお前たちの戦力を裂くチャンスだ。みすみす逃すわけねえだろ」

「フフツ、戦力を裂くチャンス、ね」

思わせぶりに微笑むアネット。その表情には全力の隊長・副隊長の二人と相対してなお、余裕がある。

——といつても、まずいわね。

乱菊はちらりと日番谷の『大紅蓮氷輪丸だいくれんひょうりんまる』を見る。まだ若い日番谷では卍解を完璧に使いこなせず、制限時間が付いている。それを表す十二枚の氷の花弁は、あと二枚もない。

やるならば短期決戦。あるいは見逃すしかない。

乱菊が口を開いた。

「あんたの言った通りなら、あたし達がうしろの奴等を斬りに掛かれば手負いの二人を守りながら戦うわけでしょ。けど見たところ——この近くにその主人の靈圧なんか感じない。強いといつても同じフラシオン従属官つてやつでしょ？ あたし達二人を相手にするんじゃない、あんたの目的なんて潰せるわよ」

至極当たり前のことである。乱菊と日番谷は手負いとはいえ、まだ全力で戦える。数の上でも総力的にも、また状況的にも乱菊は勝っていると思つた。

そんな乱菊の言葉に対し、アネットはすぐに答えた。

「アタシの主人がここにいない理由は簡単よ。ちよつと馬鹿を連れ戻しに行つてるだけだから。それにあなたたちを侮つてるワケじゃないですよ」

理には適っている。侮っていないというのも、あながちウソではないのだろう。

しかし。

むこうがこちらの力量を正確に見切っているのなら、ますます腑に落ちない。

アネットが自分の主人を待たずに一人で姿を現し、立ち塞がった理由。

乱菊はまっすぐに視線の先の女性——アネットを見つめる。

理知的なその表情が、一瞬、思慮遠謀を企む策略家のようにさえ思えた。

「じゃあどうして——」

乱菊は尋ねた。

その、変わらぬ微笑みを浮かべる女の破面アランカルに向かつて。

「どうして、あんたはわざわざあたし達の前に姿を現したの?」

「それはもう、察しておられるでしょう?」

アネットの浮かべていた微笑が、ほんのわずかに喜色を増した。

乱菊の心の中で警告音が鳴り響く。日番谷も同様に構えを取る。

——まさか、この破面アランカル……!」

そんな乱菊の警戒を涼しい顔で真正面から受け止めて。

そして、アネットが言った。

「主人なんか頼らずにアタシが一人で出てきた理由はただ一つ……一人で二人の死神を相手にし、アタシの主人にむんむんに褒めてもらうためよ!」

「……………」

「……………」

「……………?」

一瞬。

相手がなにを言ったのか理解できなかった。

アネットの後ろの破面アランカルたちが重いため息を吐いたのが印象的だった。

「…………ごめん、今、なんて?」

「聞こえませんでしたか?」

と、アネットは変わらざるの毅然とした態度で繰り返す。
キリツ、という擬音が聞こえたような気がした。

「あなたたち二人を一人で相手にし、アタシの主人にむんむんにお褒めの言葉を貰うため。そしてナデナデしてもらうためよ!」

近くに熱源があるというのに、夜風がひどく寒々しい。

「ぞ、そう…… ナデナデ、ね……」

もしかしたらその『褒め』とか『ナデナデ』とかは、アランカル破面特有の隠語で、アネットの将来とか出世とかに多大な影響を及ぼす事柄なのかもしれない。

そう思わなければ、なにもかも投げ出したくなってしまふからだ。

「…… 何をしている、アネット。こつちが時間オーバーで怒鳴られると思っただがな」

アネットのすぐそばに一人の巨漢が現れる。その隣には手負いのアランカル破面。おそらく、恋次と戦っていた敵だ。

——つて、いつの間にか恋次の霊圧が消えてる!?

そして敵の戦力が増えた。あの巨漢もアネットと同等の力があるように思える。このまま戦えば負けるのは死神のほうだ。

「あらら、ちよつと時間が経つてますね。さつさとグリムジョーを回収して帰りましょうか」

「…… どうやら向こうも終わりそうだ。虚ウエコムン圏で合流するぞ」

「アタシたちが『説得』に行かなくてもいいみたいね」

巨漢が空中に指を添える。すると空間が口を開き、黒腔ガルガンダが姿を現した。

日番谷が挑発する。

「逃げんのか?」

「安い挑発には乗りませんよ。それに、買ったたかれるのはあなたのほうですし…… まあ、今夜はお騒がせしたわね。でもヤンキー連中ってそんなもんだから、大目に見っていて」

炎を消したアネットはもう興味が無いというように黒腔内へと入っていった。他の破面アランカルたちも同様だ。

その背が消えていくことを、乱菊は最後まで止められなかった。

空座町住宅街上空。ここでは衝突音が絶えることなく響いていた。グリムジョーは四肢を武器に、卍解を解放した黒崎一護と激突を繰り返している。そこから撒き散らされる衝撃波が空気を鳴動させるようだ。

しかしグリムジョーの顔色は優れない。それは自身が劣勢になっているからではなく、むしろ一護に対して手ごたえを感じないことの方が大きい。

踵落として一護を上空から叩き落としたグリムジョーは、アスファルトにできたクレーターに向けて叫ぶ。

「……ちっ、こんなモンが卍解かよ。ガツカリさせんじゃねえよ死神！ 卍解になってマトモになったのはスピードだけか！ あア!?」あまりにも気に入らない。軽すぎる斬撃ではグリムジョーの鋼皮イェロを貫通できず、防御もおろそか。これが本当に脅威にまで成長するのかと疑問を持つほどだ。

しかし霊圧の高まりを感じ、グリムジョーは眼下の土煙を見やる。土気色の煙の中に黒が混じり、その比率を大きくしていく。終いには霊圧だけで濃い煙幕が晴れた。

そこにいたのはやはり一護。しかし彼の『天鎖斬月』には、漆黒の霊圧がまわりついていていた。

——なんだ？ ニルフィに使ってたヤツと同じだが……違うな。

霊圧の密度が先ほどと段違いだ。面白い。そう思い、グリムジョーはあえて避けずに防御に移行する。

一護が刀を振り上げた。

月牙天衝

黒い斬撃だ。それがグリムジョーに向かって放たれ、両腕を交差したグリムジョーと衝突。ズン、と腹に来る衝撃音と共に爆発する。

「なんだ、今のは？」

軽い口調でグリムジョーが言った。

しかし、その左肩から右わき腹にかけて大きな裂傷を負い、この戦いで初めて血を流す。

笑みが口元にできるのを自覚した。

「そんな技使えんなら最初から使えよ」

「ガツカリせずに済みそうか？」 アランカル 破面

一護は息を乱しながらも虚勢を張る。

「ははははははははははははっ!! 上等じゃねえか死神！ これでようやく、殺し甲斐が出てくるってモンだぜ！」

気持ちの高ぶりを抑えられない。

だがどういいうわけか一護は顔を抑えたままその場から動こうとはしなかった。それに業を煮やしたグリムジョーは己の斬魄刀を引き抜こうとする。

「オイ、ボサツとしてんなよ死神。次はこっちの番だぜ」

いざグリムジョーが斬魄刀を引き抜こうとしたとき、その右手を小さな手が抑えた。

「ここままだよ、グリムジョー」

「…… 何の用だ、ニルファイ」

ここまで接近されていたのにまったく気が付かなかった。グリムジョーの睨むような視線をニルファイは流し、その金色の眼で彼の傷跡を見る。

「それやったの、クロサキさんかな？」

ギチリ、とニルファイの霊圧が軋みを上げる。表情に変化はない。むしろ穏やかであり、それは凍るような殺気とは無縁のようであった。

グリムジョーが呆れのため息を吐く。

「お前が来たってことは、俺たちのことを止めるためだろ。てめえが暴れちゃ意味ねえだろうが。それとこんなモンはかすり傷だ」

「グリムジョーがそう言うのなら、別にいいんだけどさ」

「納得したぜ。シャウロンがてめえらにチクリやがったな」

「怒らないであげて。東仙さんの代わりに私がここに来たのは自分の

勝手だから。シャウロンは、助けてほしいなんて一言も言っていなかったよ。それに他のみんなも。私が無理言って自分で来たの」

それに、とニルフィは続け、

「藍染様は怒ってるんじゃないかな」

急速に熱がさめるような感覚を覚えながらグリムジョーが舌打ちする。

「デイ・ロイとエドワードは死んじゃったよ？　こんなの、もういいじゃん。帰ろうよグリムジョー」

ニルフィが黒腔ガルガンダを開く。グリムジョーがそれに従わなかったとしても、アネットやグリーゼの霊圧も感じる今、ニルフィは有無も言わずにグリムジョーを連れ帰させるだろう。

勝手な行動をしたニルフィにそれほど怒りはない。

彼女ならば、自分のやろうとしたことを止めると確信していた。だから言わなかったし、当たり前のことをしてただけだと思える。

それにデイ・ロイとエドワードの死。それをなぜニルフィは、主であるグリムジョーよりも悲しむことができるのか。彼らの名を呼んだ時の彼女は無表情に近かった。

グリムジョーが背を向けた時、下から声が聴こえた。

「ま、待て！　どこ行くんだよ！」

「ウルセーな、帰んだよ虚圏ウエコムンドへな」

「ふざけんな！　勝手に攻めて来といて勝手に帰るだ！　冗談じゃねえぞ！　下りてこいよ！　まだ勝負は、ついてねえだろー！」

「……　まだ勝負は、ついてねえだど？　ふざけんな。勝負がつかなくて命拾ったのは、てめえのほうだぜ死神」

一護は力量差を理解できないまで無能なのか。それが苛立ちを煽らせる。

「さっきの技はテメーの体にもダメージを与えるってことは、今のテメーを見りゃわかる。撃ててあと2・3発ってところだろう」

仮にあの黒い斬撃を無限に撃てようとも、解放状態のグリムジョーは倒せない。

「俺の名を、忘れんじやねえぞ。そして二度と聞かねえことを祈れ」

歯をむき出しにして獰猛に笑う。

「グリムジョー・ジャガージャック。この名を次に聞く時が、てめえの
最後だ、死神」

ガルガンダ
黒腔がその口を閉じた。

血心ラプソディ

ニルファイたちは玉座のある間へとやってきている。そこで、今回のグリムジョーの無断侵攻の裁量を決める。

中央にはグリムジョーとその従属官たち^{フラシオン}。そして東仙要がいた。壁際にニルファイがおり、その少し後ろの両脇にアネットとグリーゼが控えている。

上方に据えられた玉座に腰掛ける藍染が言った。

「——おかえり、グリムジョー」

ここまで不安になるおかえりは世界を探してもそうないだろうとニルファイは思う。誰の目から見てもそわそわと落着きない様子で事の成り行きを見ていた。

グリムジョーは何も言わない。それを見かねた東仙が口を開く。

「…… どうした。謝罪の言葉があるだろう、グリムジョー」

「別に」

「貴様……」

眉をしかめた東仙に藍染が声を掛ける。

「いいんだ、要。私は何も怒ってなどいないよ」

「藍染様？」

「グリムジョーの今回の行動は、御しがたいほどの忠誠心の表れだと私は思っている。違うかい？ グリムジョー」

グリムジョーは一息間を置き、

「そうです」

彼の襟首を東仙が乱暴に掴んだことで、ニルファイは不穏な空気を感じ取る。

そして疑問を抱く。なぜ、藍染はわざわざ東仙を挑発するような言葉を選ぶのだろうか、と。

ニルファイは横合いから口を出した。

「でもさ、東仙さん。結果論になっちやうけど、グリムジョーは現世にいる死神の数人に傷を与えたよ？ 副隊長格が二人、それに隊長格が一人。それなりの打撃だったんじゃないかな」

「ニルフィネス、貴様も分かっているはずだ。最低でも瀕死の傷を与えなければ死神には回道という鬼道がある。時が多少なりとも経てば、相手には何の痛みもない」

「じゃあ、今からでも行く？ この短時間だと向こうもみすみす尸^{ソウルソサエティ}魂界に帰ってないだろうし、確実に仕留められるよ」

「それは許可できない」「どうして？」

「藍染様の意志に反するからだ」

ニルフィは藍染を見上げる。彼は内心を伺い知れない微笑を湛えたまま、肯定も否定もしなかった。

東仙が声を張り上げるように進言する。

「藍染様！ この者の処刑の許可を！」

その言葉にニルフィは柳眉をひそめた。ほんのかすかに感じられるだけだった不穏な空気が、形あるものとして目の前に現れたような、そんな感覚だ。シャウロンたちもそれに警戒する。

「東仙さん、本気なの？ 大切な時期なのにグリムジョーにそんなことしたら、せつかく埋ま^{エスパーダ}った十刃^{ラス・ノーチエス}の席に穴が開いちやうよ。今の十刃が虚夜宮での最高戦力だと思っけど」

「だからこそだ。今後このようないことが無いよう、見せしめにしなければならぬ」

逆に平然としているのはグリムジョーで、口の端を吊り上げながら東仙を横目で見た。

「私情だな。てめえが俺を気に喰わねえだけじゃねえか。統括官様がそんなことでもいいのかよ？」

「私は調和を乱す者を許すべきではないと考える。それだけだ」

「組織のためか？」

「藍染様のためだ」

グリムジョーは鼻で笑う。

^{ホロウ}虚に規則など必要ない。それを無理やり矯正して調和を乱しているのは、お前だともいうように。

「はっ、大義を掲げるのが上手なこった」

「そうだ、大義だ。貴様の行いにはそれが無い」

東仙が己の斬魄刀の柄を握りこむ。その様子がニルフィにもはっきりと見えた。

——まさか。

いや、そんなはずはないとニルフィは考える。東仙は自分で許可を求めているながら、それを待つことなく柄に手を掛けた。そんなものは大義ではなく独善に堕ちている行為。藍染は許可を出していないのだから。

東仙の独白が続く。

「大義無き正義は殺戮に過ぎない。だが、大義の下の殺戮は——」

東仙が刀を引き抜き、一閃した。

グリムジョーの左腕が肩の辺りから斬り飛ばされる。

「——正義だ」

「アああああああああああ!!」

「グリムジョー!」

油断していた。まさか本当に東仙が刀を引き抜くとは、ニルフィも、そしてグリムジョーも思っていなかった。

ニルフィから見た東仙要という男は、この虚夜宮でも理性的な性格をしている人物であり、藍染への忠誠心も折り紙付き。しかし本当は違う。忠誠も、忠義も、藍染に対して向けられるそれらが欠落していた。

「破道の五十四」

廃炎

東仙から放たれた霊子の塊が、床に落ちたグリムジョーの左腕を灰にする。

残っていたのなら、くつつければ治っていたかもしれないのに。

「そして従者も同じだ。主人を止めることもせず、正義無き殺戮に手を染めようなど、万死に値する」

東仙が刀を閃かせる。

力量ゆえに警戒心というものを持っていたシャウロンたちだが、グリムジョーが腕を斬られたことに動揺し、その凶刃を避けられなかつ

た。

イールフオルトとナキームが胴体から血を吹き出し、膝から崩れ落ちる。

唯一シャウロンだけ、急所を斬られながらも意地とでもいうように踏みとどまった。

「なんでッ……！」

我に返ったニルフィは霊圧を体に纏い、東仙を殺してでも止めようと動き出そうとする。

しかし背後から伸びた手によって両腕を後ろに回され、無理やり膝を突かされた。

「ッ!? どうして! アネット! グリーゼ!」

「……すまない、主よ。だがここで、東仙を殺しに掛かるな」

ニルフィの右腕を拘束していたグリーゼが押し殺したような声で言う。

最後の望みを掛けて、ニルフィは震えながら左を後ろ眼で見る。アネットは顔を合わせてくれなかった。

膂力という点で勝っている二人に拘束されたニルフィは、ただ見ていることしか出来ない。それでも、なぜ、仲間をみすみす見殺しにしなければならぬのか。

肩がはずれてもいい。あの光景を止められるなら、どうなっても良かった。

しかし。

「う、あ……」

シャウロンと目が合う。仮面に覆われていない右目が、真つ直ぐにニルフィを見据えていた。だから、分かってしまった。

『来るな』

言葉は無くともそう言っていることに。

一瞬あとにシャウロンは心臓を貫かれ、床へ倒れ伏す。

「シャウ、ロン」

「——くそッ!! くそッ! くそッ! くそッ!!」

殺意の眼光をぎらつかせるグリムジョーの叫びにニルフィの声は

かき消された。グリムジョーはシャウロンたちを見て、ギシリと歯を食いしばる。

「てめえ……！——殺す!!」

グリムジョーは残った右腕で斬魄刀に手を添えようとした。

「止めろ、グリムジョー」

上から降ってきた藍染の声に、まるで体に超重量のおもりを付けたように身動きを取れなくなった。

「ニルファイも同じだ」

霊圧を軋ませていたニルファイは力なく藍染を見上げる。

藍染は少しばかりの厳しさを含んだ表情で言った。

「君たちがそこで要を攻撃すれば、——私は君たちを許すわけにはいかなくなる」

逆らえば待っているのは死だ。それを明確に二人の十刃エスパーダに刻み付ける。ここでは感情を押し殺すしかなかった。

肩を上下させるグリムジョーは、シャウロンたちの死体を一瞥する。斬魄刀で斬られたことにより死体は霊子へと戻っていき、彼らの存在を示すものは残らなかった。グリムジョーが何を思ったかなどニルファイには知りえない。しかし彼は奥歯を碎けんばかりに噛み締めると、舌打ちを残して部屋を出ていった。

「グリムジョー！」

拘束が弱まったのを機に、従属官フラシオンの腕を振り払ったニルファイは、その背を追う。

「アネットとグリーゼはこの場に残ってくれ。話しておきたいことがある」

藍染のそんな言葉を聞くこともなく、床に点々と残る血の跡を辿って行った。

どんな道順だったのかニルファイは覚えていない。気づいたらその場にいたし、疑問を持つこともなかった。

砂漠の上に建てられた適当な塔の上にいる。

ニルフィは塔の端に腰掛けたグリムジョーに呼びかける。彼女が泣いた、あの日のように。

「グリムジョー」

けれどグリムジョーは振り返らず、彼に付き従うフランオン従属官の背中も見えなくて。たった一つの背にニルフィが近寄った。

「――失せろ」

拒絶の意志に足がすくむ。このまま近づけば、押し固められたような声が怒りに荒れ狂うだろうか。それは当たり前のように怖い。背が凍りそうだ。

グリムジョーの左腕があつた場所からは、ぽたぽたと血が垂れ落ち、水たまりを作っていた。痛々しい傷を見たくはない。

それでも、

「ねえ、グリムジョー」

足を踏み出す。肌を痺れさせるような霊圧の威嚇が強まった。

「…………ごめんね」

少しして、肩越しにグリムジョーが振り返る。

「なんて顔してやがる」

「え？」

ニルフィは頬に手をやった。流れる涙は無いし、視界もぐちゃぐちゃになっていない。いつもこんなに悲しい時は目に溜まる涙が、今日に限って出て来なかった。

強張っていた頬を無理やり動かして、笑う。

「私、だいじょうぶだよ。泣いてなんかないもん。泣かないって、約束してるから」

「泣かねえのか？」

「………… うん。でも、悲しいよ？ けどなんだか涙が出ないの。それで………… わかんない」

「俺も分かんねえよ」

グリムジョーが前を見た。飾り気のない巨大なだけの塔が白い砂漠に乱立している。塔の壁まで白いものだから無機質極まりない。

「けどな、言っておくが、『自分のせいでこんな結果になった』なんてくだらねえことは考えるな」

「どうして?」

「どうせお前らが来なけりゃ、あいつらは現世で死んでた。遅いか早いかの違いでしかなかったんだ」

「でも……」

「てめえは関係ない。言ったのはてめえのはずだ。シャウロンは命欲しさに教えたわけじゃねえってな。他のやつらも同じだ」

たしかに、そうだ。しかし屁理屈のようにも聞こえる。グリムジョーが言ったことも、そして自分の考えることも。もしかしたら他
に選択肢があったのではないか? そんな気がしてならない。

「あいつらは俺に勝手に付いてきた。最初から、ずっとな。生きよう
が死のうが勝手にしてろって言ってやったぜ」

最下級大虚であるシャウロンたちが今まで一人も欠けてこなかったのは、奇跡に近いことだろう。常に決まっていたのはグリムジョー
だけが生き残ることだけ。そしてついに――独りとなった。

孤高の王だ。民も、臣下も、何も無い『王』になった。変わったと
いえばそれだけのこと。

しかしグリムジョーの言葉の端々に苦々しさがあると思ったのは、
ニルフィの気のせいだろうか。

「私は悲しいよ」

「なんでだよ。てめえの部下でもねえってのに、どうしてお前は悲し
いって言える」

「いっぱい遊んでくれたし、根が良い人たちだったから」

「嫌々やってたかもしれないねえぞ」

「……じゃあ、時々見せてくれた笑顔も。あれも全部嘘だったの
?」

「そうだと言ったらどうする」

「それこそ嘘だっと思う」

一歩一歩、ニルフィがグリムジョーに近づく。

年単位の日々を感じる破アランカル面にしてみれば、ニルフィとシャウロン

たちとの交流の時間など、ごく微々たるものだ。それでも他人という括りにすることはできない。

「みんな、乱暴なところはあったけど、私のことを傷つけた人なんて、いなかったから」

反論の言葉は飛んでこなかった。くだらない判断要素かもしれないが、ニルファイにとってはそれだけで十分である。

少しばかり疲れたような声で、グリムジョーが言った。

「……俺にどうしろってんだよ」

馬鹿馬鹿しいとでもいうようにグリムジョーが立ち上がろうとする。それをニルファイが押しとどめた。

「まってよ、傷が」

「黙ってりゃあ治る」

「すぐじゃないでしょ。こんなに血を流して……じつとして」

グリムジョーの右腕。肩の近くから無くなり、血を滴らせながら滑らかな断面をさらしている。

腕が残っていれば無理やりくつつけられたかもしれないが、東仙に灰にされてしまったためにそれも出来ない。超速再生を失った破面^{アランカル}では新しく腕を生やすことは出来ないのだ。

だからニルファイができるのは血を止める応急処置だけ。

ニルファイは四つん這いになり、傷口に顔を寄せる。床に広がっていた血が彼女の死覇装を汚す。しかしそんなことには頓着せず、ニルファイは傷口に小さな赤い舌をそつと這わせた。

「——ッ!? なにしやがるッ」

「止血、かな。傷を塞ぐことくらいは私にもできるから、ね」

伏目がちなニルファイがそう言うと、グリムジョーはそれ以上なにも言わなかった。彼の死覇装の裾を掴んでいた細い手など、いつでも振り払えただろうに。

ニルファイが傷口をなぞるように舐める。

「ん……ふ、あ……」

必死に舌を動かし続けた。口の中に血が溜まれば白い喉を上下させ飲み下す。ぴちやり、ぴちやり。その気はなくとも淫猥な水音や、

懸命に奉仕するような姿から、ニルファイの姿はいつもに増して背徳的な色香を漂わせる。

いつしか流れる血は止まっていた。

ニルファイは唇についた血の玉を舌で掬い取ると、自分の死覇装の袖でグリムジョーの腕の断面を拭う。

すると傷口は嘘のように消えていた。

「どう、かな？　まだ痛む？」

「いや」

「よかった」

顔をほころばせるニルファイ。彼女の表情を気まぐれに見返したグリムジョーは顔を逸らす。

気にした様子もなく、ニルファイは身軽な動作でグリムジョーと背中を合わせるように座った。

「二つだけ、お願いしてもいいかな。あとちよつとだけでいいから、そばに居てほしいの。なんだか………眠くなつてきちゃって」

今日は色々とありすぎた。もう限界だった。

たとえば表向きは気丈にしていようと、少女の頭には、いや、心にはすぐに受け止められるだけの強さは無いようだ。見かけ相応の脆さで崩れかかっている。

グリムジョーが何か言ったようだが、急にノイズが掛かったように聞き取れない。

——ああ、全部夢だったらいいのに………。

意識が闇に落ちるのに、そう時間は掛からなかった。

——これは、記憶だ。

大勢の虚ホロウに囲まれていた。それはまさに大群にして大軍と称していい。

最近やって来た『自分』の暴虐に対して、ここら周辺ホロウの虚たちが決起したようだ。普段は群れないはずの虚たちが共通の敵を前にして

協力しあうとは、なかなか皮肉が効いている。

しかし『自分』に焦りはない。腹を満たせるエサがやってきたことに対する万来の喜び、そして……一抹の寂しさがあるだけだ。

向けられる視線は敵意に満ちており、友好的なものなどあるはずもない。

それがなぜか悲しい。

『自分』は、自分から彼らを攻撃したことなど、一度もないというのに。

『自分』の容姿を甘く見て襲い掛かって来た虚は容赦なく捕食する。その強さを見て力試しにやって来た虚も食いちぎる。敵意を持って傷つけにくる相手は殺し続けた。だからエサに困ることはない。

しかし。

『自分』は仲間というものが欲しかった。

髑髏の大帝はそれを与えてくれそうだったが、上下関係があることで『自分』の望んだことではないと無視することになる。『自分』はただ、対等に接してくれる存在が欲しかっただけだ。とにかく飢えていたのだろう。腹が満たされるだけではさらに空腹がひどくなるばかりだ。

しかしそんな存在は現れない。

話しかければ逆に襲い掛かれ、仲間にしてほしいと申し出てもメスということで狙われることとなる。

もしこの時、3の数字を冠することになる女の最上級大虚と出会っていたら、『自分』の運命は変わっていたかもしれない。それもないものねだりでしかないが。

一時期は自分から強引に虚を仲間に取り入れたこともある。しかしある程度数が増えると反旗を翻そうとしていた。それに絶望し、はじめて虚を泣きながら殺し尽くした。

そこで諦めたのなら、司る死の形に“孤独”を持つ男と同じ道を進んでいただろう。

しかし諦めない。

どれだけ裏切られようと、命を奪われかけようと、仲間を得られる

まで生き続ける。

そしてこの日も、『自分』は虚を喰らう。

それでも話は独歩する

天蓋付きのベッドの下でニルファイが目を覚ます。

「ん……………」

薄暗い室内を見回し、いまだにぼーつとする頭を働かせる。

「そっか、夢じゃないんだ」

忘れたい出来事は眠ったことにより、更に鮮明に記憶に焼き付いた。シャウロンたちはもういない。あの後にあつたグリムジョーとのやりとりも、舌先に残る血の味が現実だったと教えてくれる。

意識が落ちたあとにどうなったのだろうか。

服は寝巻き用のネグリジエに変わっており、場所も第7セブティマ・パラシオ宮だ。きつとアネットが連れて来てくれたのだろう。

——気まずい、かな。

シャウロンたちが斬られた時、ニルファイの従属官フラシオンは主人を強引に止めた。それは間違っていない行為だ。もしニルファイが東仙に本気で襲い掛かっていたら、藍染からは何らかのペナルティを与えられていただろう。アネットとグリーゼは従者として何も間違ったことはない。

しかし理論と感情は別物である。それにニルファイを拘束していた時のアネットの表情は、ひどく苦渋に満ちていた。アネットの内心を理解しているからこそ今は顔を合わせたくない。臆病かもしれないが、このもやもやした気持ちをどうしたらいいか、ニルファイにもわからないのだ。

「気分転換でもしよっかな」

寝台を降りたニルファイはネグリジエを脱ぎ捨てると、そばに置かれていた死覇装に着替える。

宮の霊圧を探知。アネットたちはそれぞれの部屋にいるようだ。

ニルファイはその近くを通らないように厨房に行く。リングを何個かくすねると下官に一言伝え、砂漠へと足を踏み出した。

迷いたくはないので宮が必ず視界に入る場所にまでしか行かない。

「……………」

何も考えることもなくトコトコ進んでいく。

思い出したようにリンゴを一口、そのままかじる。シャキツと小気味いい音がした。ちょうどいい酸味のある甘さが口の中で広がり、果汁が喉を潤したことで頬が緩む。

固まっていた顔がいつも通りになった気がした。

「ん、おいしい」

リスが食べるような様子でリンゴを頬張りながら、適当な塔の上まで駆け上がる。それなりに広い屋上の中央にやってくると糸が切れたように座り込んだ。

胸の中で虚しさが込み上げてきた。

喪失というものはここまでのものかと自分でも驚く。

でも、涙は出ない。虚夜宮ラス・ノーチエスにやって来た頃はよく目に涙が溜まつたというのに、枯れてしまったように出てこないのだ。シャウロンたちの死がとても悲しいのになぜだろう。それは自分が薄情だからではないのかと思うと、ニルファイはやるせない気持ちになった。

「——おつとオ、先客つてのは珍しいな」

背後からの声に振り返る。

そこにいたのは下顎骨のような仮面の名残を首飾りのように着けた黒髪の男。思考にふけていたとはいえ、ニルファイはこの男が屋上にたどり着くまでに気配を感じなかった。

警戒心が湧かなかつたのは、男の漂わせる気怠さと、それとない哀愁のせいだろうか。

「お兄さんは？」

「お兄さん、ね。嬉しいこと言ってくれるじゃない」

欠伸交じりに答える男はニルファイの近くへと歩いてくる。

「スターク。コヨーテ・スタークだ」

「私はニルファイネス・リーセグリンガー。よろしくね、スタークさん」
「ああ、こつちこそな」

スタークの名はニルファイも知っている。

プリメーラ・エスパーダ
第1十刃コヨーテ・スターク。

ニルファイは初めてこの男の姿を目にした。

平時時では実質的に十刃エスパーダの中で最も強い存在である。見かけでそのは見えないが、ならば幼女の姿のニルファイが十刃エスパーダということもおかしな話になってしまっただろう。

「先客つて……もしかしてここつてスタークさんの場所だった？

ごめんね、知らなかったよ」

「いいき。別に名前書いてたわけじゃないしな。たまに外に出れば、よくここに来るんだよ……あ、隣いいか？ いつもここで昼寝しててな」

了承したニルファイの隣にスタークは仰向けに寝っ転がる。

「たしかに、良い場所だね」

「そうだろ」

それだけ言うと、スタークは目を閉じる。

無防備極まりない姿だが、彼をどうしようなどとニルファイは考えていない。

ニルファイは静かに風景を眺めていた。

とても静かである。こんな辺鄙な場所には普通なら破面アランカルは近寄らない。だから余計なしがらみもなく昼寝などできる。

ささやかな風が頬を撫でた。偽りの晴天から注がれる日光がやさしい。

会話もなく、無言の時間がゆつくりと流れる。

——私私が変、なのかな？

この世界では命は散るためにあると言っても過言ではない。しかしニルファイは、アネットたちのようにドライになれる気がしなかった。なんの面識もない破面アランカルを殺すことにためらいがないのは、十刃エスパーダの就任の時に証明して見せている。

——ああ、これつてエゴなんだ。

ニルファイの今の気持ちは、大切なおもちやが壊れた時に感じるものと同じ。子供の感情。

みつともなく未練たらたらと引きずっていく。

フードに入れていたリングゴを取り出して食べ、それが三個に増え、芯はまとめて虚閃セロで燃やし尽くす。そしてしばらくぽーつと空を見

つめてから、ニルファイが口を開いた。

「起きてる？ スタークさん？」

「…… ああ」

眠ったわけではないようだ。適当な話題をふっかけてみる。

「スタークさんのこと、ラス・ノーチエス虚夜宮だとあんまり見ないけど、ずっと自分の宮にいるの？」

「ああ。外に出ても、大体はここに来るな」

「任務とかは？」

「ここ最近はあるま無いな。ウルキオラって奴が来てからだと特に」

「そうなんだ…… あ、そういえばアネットが言ってた。仕事勤めの人を『社畜』なんて呼ぶみたいだけど、家に引きこもってる人は『家畜』って呼ぶのはホントなの？」

「…… 嬢ちゃん。その言葉は、不特定多数の大人の心を粗いナイフで抉るようなモンだ。誰にも言っちゃだめだぞ」

「はーい」

胸を押さえながらかろうじて言い切るスターク。彼のトラウマを刺激したことにニルファイは気づいていない。なんとも末恐ろしい幼女だ。無意識に相手を再起不能にさせようとしている。

強引にスタークが話題を変える。

「それより、嬢ちゃんはこんな辺鄙なトコに何の用だ？ なんの面白みもないトコだぞ」

「ちよつと、ね。顔合わせるのが気まずいから逃げてきちゃった」

「俺もだ。ウチの宮にもうるさい奴がいてな」

「似た者同士だね」

「…… 嬢ちゃんよりはちよつとばかしランクが下がるかな」

内情的に重いのはニルファイのほうだ。無職の男が言われるようなことを、ニルファイと容姿的な幼さが近い少女から言われて逃げてきたとは、なんとも情けない。

彼らが出会ったのは偶然か、はたまた必然か。

「でも、スタークさんはそのフランオン従属官さんのこと、嫌ってないでしょ」「どうしてそう思う？」

「ホントに疎んでたらもつと嫌な顔するから」

「生憎、俺って低血圧なもんでね。表情に出すのも億劫なんだわ」

しかし口で言うほどスタークの雰囲気は悪くない。本心では大切な存在なのだろう。

「嬢ちゃんは……」

「え？」

「嬢ちゃんは、どうしたんだよ。さつきから物憂げな顔しちやって」

「顔に出てた、かな？」

「ああ」

スタークが言うからには、そうなのだろう。グリムジョーがそばに居れば湿気た顔をするなどでも言うだろうか。同じように、彼のフラシオン従属官たちも。そこまで考えたところでニルファイは、現実を思い出すと内心でため息を吐く。

今度は、自分でも情けない表情をしていると感じられた。

「これって独り言なんだけど、ね。うるさくて寝られなかったら言うてね」

「俺でいいなら愚痴でも聞いてやるさ」

ほとんど会話もしたことのない相手。けれど今はだれでもいいから、聞いてみたいことがあった。

「仲間が殺されて悲しいって思うのは、おかしいのかな？」

相手からしてみればなに言ってるんだと思われる質問かもしれない。死神ならともかく、破壊衝動に身を任せる虚ホロウから進化した破面アラシカルが、そもそも『悲しみ』なんて感情を持つのがおかしい。それを自覚した上での質問だった。

スタークは薄く目を開く。しばらく青空を眺めていたと思うと、ゆっくりと視線をニルファイへと移した。

「いや……、どうだろうな。少なくとも俺は、嬢ちゃんの言ったことが変だとは思わないぜ」

「どうして？」

「どう、つっても。あれだ。俺にもなんとなく。ああ、なんとなくだ。理解できるからな」

「なんとなく?」

「……いや、違うな。ちゃんと知ってる感情だ」

要領を得ないスタークという言葉にニルフィは安堵の息を漏らす。

「変だつて言われちゃったら、こんな感情、捨てなくちゃいけないかったかも」

「大げさだな」

「ううん、大げさでもなんでもないよ」

それを聞いてスタークが難しい顔となる。

「嬢ちゃんは難しく考えすぎじゃないか?」

「そうかな。でも、私が変わらないと、私のまわりから全部なくなっちゃいそうなの」

「死んじまうつてのは仕方ないことだろ。どんなに嫌がっても、覆せない。それよりだったらそばに死ににくいやつを置いといたほうが、まだいいと思うんだがな」

「死んじやう人は見捨てろつてこと? そんなのは私が嫌だ。だったらもつと力をつけて、頭もよくなつて、解決できるようになんだつてする。見てるだけなんて、耐えられない」

「それは……」

スタークは言葉を切ると、しばらく黙り込む。虚空をにらむような目は遠くを、記憶を探るように見ていた。おそらく、否定の言葉を探しているのだろう。

しかしスタークは、ため息と共に別の言葉を口にした。

「――俺は、見てるだけだったな」

声には寂寥が含まれる。『孤独』エスパーダを死の形に司る十刃。彼は力なく首を横に振る。

「嬢ちゃんにはなんか偉そうに言っちゃったな。そうだ。俺は嬢ちゃんみたいに頑張ろうなんて、思ったこともなかったよ。妥協に走っただけで満足した野郎だ」

スタークが身を起こす。手袋に包まれた手で顔を覆いながら、その隙間からニルフィの瞳を見据える。どこか眩しそうに目を細めていた。

「嬢ちゃんは幸せ者だよ。ようやく得られた仲間ってやつに満足するんじゃない、価値を見出してる」

「どうかな。私はスタークさんが昔、なにがあつたのかなんて知らない。勝手なこと言つて困らせちゃつた？」

「いいや。けど言えるのは、感情つてモンが俺らの中にあるつてことだ。寝たいから寝る。食いたいから食う。ただの虚と違つてくだらない動作ひとつ取つても、感情つてやつが纏わりつく。何をどう思うが、そりや自分の勝手だ」

問題なのは自分がどう思うかで、他人の言葉など判断材料にしないほうがいい。

ニルファイが大切だと思えば、それは大切なものなのだ。だからおかしくとも何ともない。自分の考えたことに従おうとするのは当たり前のことなのだ。

「なんか説教臭くなつちまつたな」

「ううん、なんとなく整理はつきそう」

あとはこの感情をどの方向に持つていくかだ。そしてもう決めた。

もう何も失わなくらいに強くなる。

他人のためではない。自分のためだ。守るために強くなることと同意義で、プライドの高い破面たちからしてみればうつつとおしいものだろう。

それでもだ。

元からエゴでしかない動機であるならば、そのエゴを貫き通そうと思う。

「さて、と。俺はそろそろ戻るよ」

「ありがとね、話に付き合つてくれて」

「そう大層なコトしたつもりないさ。…… ああ、時間があればいつでも俺の宮に来ていいぞ。嬢ちゃんに興味のあるやつがいるんでね」
立ち上がったスタークは伸びをすると、響転ソニードだろう、それを音もなく使つてその場から姿を消した。

性急すぎやしないかと思つたニルファイだが、すぐにその理由に気づ

く。

入れ替わるようにアネットが塔の上に姿を現す。表情からは焦りが見て取れた。

「——ニルファイ」

「あう…… あ、アネット」

気付けば、宮を飛び出してかなりの時間が経っていた。いつまで経っても戻らないニルファイを心配して探しに来たのだろう。アネットの髪は少しばかり乱れていた。

しかしアネットはニルファイの少し手前で立ち止まり、悔いるような、言葉にしがたいといった表情となる。

見つけた方がいいが、どう話しかけていいかわからないのだろう。昨日の今日だ。咄嗟のことだったとはいえ、ニルファイにとって最善のことではない。

けれど、

「アネット」

「…… ええつと、その」

「大丈夫だよ」

嫌いになるつもりはない。こうして探しに来てくれたのも、アネットにとってニルファイは大切な存在だからだ。

アネットの目の前まで来たニルファイは、フラシオン従属官に目線を合わせてもらえるように膝を突かせる。アネットの背に腕をまわして抱きしめた。

「大丈夫だよ。私、強くなるから。だから、そんな顔しないで」

自分からアネットを抱きしめたのは、はじめてだったかもしれない。

市丸ギンはとある破面アラシカルのもとへと足を運んでいた。

「こんなトコまでわざわざ何の用かなあ？ 死神さんは？」

「いい報せを持ってきたんや。そう警戒せんといて、ルピくん」

破面アランカルの名はルピ・アンテノール。左側頭部に仮面の名残が付いている、中性的な容姿の小柄な少年のような風貌をしていた。

そんな彼は警戒心を隠そうともせず、さつきまで座っていたというのにわざわざ立ち上がって構えるなど、ギンを信用していないことがわかる。

むしろそれでもいいと、ギンは飄々とした態度を崩すこともない。「ボクに？ 君がそう言うとなんか不吉な気がしてならないんだけど」

「まあまあ、そうツンケンせんといて。ルピくんも聞いてはるやろ？」

グリムジョーくんが十刃落とされたって話」

「……まあね」

グリムジョー・ジャガージャックエスパーダの十刃落ちの話は、瞬く間に虚夜宮ラス・ノーチエスに広がっていた。現世に独断専行で侵攻したことの罰則が理由となっている。実際には東仙がグリムジョーの腕を斬ったことで戦闘能力が激減したためだ。

それはともかく、十刃エスパーダの座が空いたことが虚夜宮ラス・ノーチエスの空気をざわめかせていた。

宮殿のあちこちで破面アランカルたちが情報を交換し、たまに私闘を繰り広げながら、この話題を知らぬものはいなくなった。

元第7十刃セプティマ・エスパーダゾマリ・ルルーが、ニルフィネス・リーセグリンガーエスパーダに返り討ちにされてからさほど時間も経っていない。ニルフィの十刃就任の際に藍染が容易く十刃エスパーダの更新をしないと公言しており、そのこともあって次に誰が据えられるか話が広がっていた。

「隊長から伝言や。次の第6十刃セスタ・エスパーダは君みたいやで」
その言葉にルピは目の色を変えた。

「そうか！ あの人もついにボクの力を認めてくれたって訳だね！」
「そうみたいやね。数字はあとで渡されるみたいやし、ボクがここに来たのはこれを伝えるためだけや」

ギンの言葉をもはやルピは聞いていないようだ。

それもそうだろう。この場では十刃エスパーダとはそれだけの価値のある称号だ。自らの力が証明された証あかし。力を何よりも重んずる破面アランカルにとつ

て、これほどらしい地位は無い。中にはホントは興味ないという少女もいるが、あくまでごく一部の意見でしかない。

「喜んでるトコ悪いんやけど、君にひとつ忠告せなあかん」

水を差されてルピは眉をひそめる。早く言えとでも言うようにギンを睨んだ。

これから十刃エスパーダとなる存在を前にしてもギンは飄々とした笑みを崩さず、カパリと口を開けた。

「ニルファイ……、ニルちゃんにちよっかい掛けるのは止めとき」

「はあ？」

訳が分からないとでもいうように、ルピの表情の不快の度合いが大きくなる。

「なんでボクがあの子供に遠慮しないといけないんだよ。あいつはセブテイマ NO. 7。ボクは NO. 6。格が上のはずだろ？」

「遠慮じゃあらへん。ただ、ちよっかい掛けるのは止めとき言うてんの。あの娘とキミは、相性悪う思うんや」

「ハッ、そんなことか。何度か見たことあるけど、ただのガキだったよ。他の十刃エスパーダに取り入って媚びてる雑魚だ。ゾマリが死んだのも油断してただけだろ？」

ギンは内心でため息を吐く。

——ああ、アカンわ。

——この子、ニルちゃんのこと完全に舐めきつとる。

ルピの気性から穿った見方しか出来ないのが原因だろう。彼の言ったことには多大な語弊がある。

十刃エスパーダとの交流はただ仲良くしたいだけ。道に迷ったとき以外、ニルファイは一度も彼らに庇護を求めたことなどない。むしろ他の十刃エスパーダのほうから構いに行っている節があるのは、ギンでも驚いていることだ。

そしてゾマリが死んだこと。たしかにゾマリは油断していただろう。しかしその油断を突いたからといって、仮にも十刃エスパーダを無傷で倒すのは難しい。しかしニルファイはそれを成し遂げている。

——まア、実際にあの娘が戦ってるトコ見ても信じられへんよ

なあ。

——いや、もしかしたら見たからこそ信じたくないやろうな。現実を見ないようにしているのかもしれない。あの脆弱にしか見えない存在に自分が負けていることが許せないから。

ニルフィの十刃^{エスパーダ}就任後、耐えきれなくなり襲い掛かった破面^{アラソカ}もいた。……まあ、その輩はアネットとグリーゼによって影で消されており、それをニルフィは知らないのだが。

「キミがそう思うんなら別にいいんやけど」

「なんだよ、その言い方」

「なんでもあらへん。ボクもはなから忠告聞いてくれる思うてへんし」

ルピの十刃^{エスパーダ}入りは、おそらく一時的なものになるであろう。

これからの任務の内容と少しの事情さえ知っていれば、おのずと未来は推し量れる。それを知っているギンからしてみれば、ルピは道化にしか見えなかった。

あくまでのらりくらりと、ギンは必要以上のことは言わない。

「あ、もしかして君もあの子にほだされてるクチ？ 心配してわざわざ言いに来たの？」

「あんな可愛いコからのお願いなら喜んで引き受けたんやけどね。生憎、お願いしてきたのは隊長なんや」

「そ。でも君の警告ってあれだろ。そのニルフィネスってやつに変なことしたら、いま^{フラッシュオン}従属官やってる二人が黙ってないから、とか？ やっぱりアイツは強い奴の影に隠れてるだけだろ」

ギンは静かに首を横に振る。

「一番危ないんはニルちゃんや」

「なんでだよ」

「あの娘は優しすぎるんや。だからキミとは相性が悪い言うてんの」
「ますます訳わかんないんだけど？」

口で言ったところでルピには理解できないことだろう。

ニルフィには地雷がある。あるいは逆鱗と呼べるものが。

それに触れてしまった東仙は、あの時、藍染が止めていなければタ

ダでは済まなかったことが察せられる。

ギンにとって共感できる感情であった。だからこそ分かるのだ。ひとたび抑えを失えば、どんなことでも決行すると。

——ま、忠告なんて元から無理やったな。

ルピは必ず地雷を踏み抜くだろう確信がギンにはあった。

「ふん、これでくだらない話は終わり？」

「そうやな。思ったより立ち話しすぎてもうた。あと、宮のほうはもう空いてはるから、要望とかは無理なモンでもない限り下官に言うといて」

「せっかくのいい気分が台無しだよ」

歩き去っていくルピの背を見ながら、ギンは一瞬だけその笑みを濃くした。

——さてはて、どうなるやろうね。

彼も身をひるがえし、人知れず邂逅の場となった空間に静寂が戻った。

私の戦闘能力は53万を跳び越した

セグンダ・バラシオ
第二宮前の砂漠に無数の激突音が響く。

それは四対一という、現実には無謀にすぎた戦いでもある。しかしそれは五人の力量が拮抗していた場合のみ。一の存在はたしかに四倍の人数と渡り合っていた。

ひとときわ激しい爆発に煙幕が立上った。

ニルファイは探査回路ベスキスを使って周囲の気配を探る。

煙幕の向こうから叫び声が聞こえたのはその時だ。

「ズエアアアアアアアアアアア!!」

跳躍の気配。

「必殺！ ビューティフル・シャルロット・クールホーン、 s・ラブリー・キューティール・パラディック・アクアティック・ダイナミック・ダメンディック・ロマンティック・サンダー・パンチ!!」

クソ長い技名とともに、上方から砂煙を吹き飛ばし現れたのは——オカマ。

帰刃レスレクシオン『宮廷薔薇園ノ美女王』を発動させているシャルロットが、その筋骨隆々な肉体を前面に押し出すようなバレリーナのような姿に変わっている。

股間に意味深すぎる膨らみを持つシャルロット。彼は両手を槌かなづちのように組んで、縦に回転しながら降ってきた。

さながら回転鉄球の一撃をニルファイは冷静に受け流す。彼女の細かい四肢を包むのは霊子の鎧インモルタル。甲霊剣イエロの応用で、鋼皮とはまた別の攻性結界のように、それは剣の形を取っている。

シャルロットは技が避けられると見るや、空中で身をひねり、強引に拳の軌道を変える。

それをニルファイはあえて真正面から受けた。

わざとシャルロットの一撃に乗り、ニルファイが煙幕を離脱する。

空中にいるニルファイへと向かう影が一つ。

ジオルヴェガ。拳法着のような服を着ており、髪を三つ編みにした中性的な顔立ちの少年。彼もまた帰刃レスレクシオン『虎牙迅風』を発動させてい

た。

「ガキだからって容赦しねエぞ！」

ジオⅡヴエガが両手首に生えた刃で連撃を繰り返す。それをニルファイは空中に足場を創り、迎え撃った。

靈子の剣と牙のような刃がぶつかるたびに衝撃波がまき散らされる。すくいあげるような一撃はジオⅡヴエガの胴を狙った。だが、外れた。かわされたのだ。ジオⅡヴエガが、全身から靈圧を放ちながら下がる。その靈圧が、インモルタル甲靈劍の靈子を弾き飛ばすのだ。

振り上げきったところで、ジオⅡヴエガが今度は踏み込んでくる。狙いは、ニルファイの顔。左の牙が重圧を備えて迫ってくる。ニルファイはそれを見る。こちらの左手が動く。ジオⅡヴエガの拳を掴もうとする。わずかに間に合わない。だが、腕を掴んだ。牙はニルファイの頬を浅く裂く。

しかし、拳は止まった。

だが、そこまでだ。じっとしていれば今度は膝が襲ってくる。ニルファイは離れ、ジオⅡヴエガも離れた。

足が砂漠に着く。それと同時にニルファイたちは並行して砂漠の上を駆ける。

ニルファイが左手を風いだ。

ウオラレ駆靈劍

直進した斬撃は、無為の空を裂いて駆け抜けていく。

気配は上にあった。

ジオⅡヴエガが空中で身をひねる。膝を立て、落下してくる。

「……ッ！」

迎撃……ではなくニルファイは回避を選んだ。最速の響転。ソニードこの響転ソニードに関する改良が必要と思いつながら、辛うじて避ける。

直後、ニルファイのいた空間を高圧水流のカッターが切り裂いた。あのままでは胴体を断ち切られる。ジオⅡヴエガの追撃をいなしながらニルファイは横目で下手人を確認する。

フィンドールだ。レスレクシオン帰刃『ピンサグーダ蟄刀流断』を発動させた彼も追撃に参

加。左右非対称のハサミでニルファイを追い立てる。

「ちいッ！ こいつ、ちよこまかと！」

「焦るなジオルヴエガ。その隙に付け込まれるぞ」

「冷静に、だろ!?」

「正解^{エサクダ}！ そう、冷静さが大切だ！ そのままエサクリまくってくれ！」

「なんかお前のほうが焦ってねえか!?!」

実力派の従属官^{フラスシオン}の猛攻を、ニルフィは躲す、いなす、受け止める。時折、死覇装が切り裂かれるが、ほとんどの攻撃を紙一重で回避している。

フィンドールたちは最初は帰^{レスレクシオン}刃を使っていなかった。しかし一撃も当てられないことに業を煮やし、今ではなんとか切っ先をかすめるほどとなっている。

「ここだ！」

ついにフィンドールが大きく踏み込む。巨大なハサミを開いて、その範囲にニルフィを収めた。

少女の背後にジオルヴエガが回り込み、両の刃を小さな背に突き立てる。

「クソツまたか!」

切っ先が触れるや否や、突如としてニルフィの体が光と化し、爆発した。いつの間にか偽物と入れ替わっていたようだ。

「見つけたわよニルちゃんッ！」

すこし離れた場所で、シャルロットが爆走しながら、砂漠の上を滑るように駆けるニルフィへと突っ込んでいく。

それを見たニルフィが虚弾^{バブラ}を乱射。シャルロットがカツと目を見開く。

「必殺！・ビューティフル・シャルロット・クールホーン、s・ファイナル・ホーリー・ワンダフル・プリティ・スーパ・マグナム・セクシー・セクシー・グラマラスー」

シャルロットが迫りくる霊子の弾丸を見ながら、左胸の前に両手でハートマークを作り、

「――虚閃^{セロ}！」

「ただの虚閃^{セロ}じゃん!？」

律儀にツツコミを入れた少女へとピンクの奔流を放たれた。

爆発が交差する。

次の瞬間、爆煙を裂いてニルファイが躍りかかった。金色の瞳がシャルロッテを突き刺す。

左拳。

シャルロッテがすんでで避ける。彼の体を突風が揺する。ひるむことなく彼は拳を振り上げる。だが、ニルファイは突進の勢いのままにシャルロッテの横を抜ける。撫でるように筋肉質な足に手を添えた。すると手品のようにシャルロッテの体が反転し、砂へと頭から突っ込んだ。

そのままニルファイはフィンドールたちと肉薄。

フィンドールが右のハサミを突き出す。重力を無視したように舞ったニルファイがフィンドールの右手首に乗り、掴む。そこを支点に横に回転。回し蹴りを彼の頭部へと叩き込んだ。

そこへすかさずジオルヴェエガが襲い掛かり、刃と手刀が衝突する。拮抗。鏝迫り合いとなった時、上空から雄叫びが降りかかった。

「どいてろジオルヴェエガ！」

鋼鉄のような硬度の巨大な羽根と共に。

デボラル・ブルー・マ
餓翼連砲

ジオルヴェエガがギリギリまでニルファイをその場に押しとどめ、ついに離脱する。

羽根の雨が広範囲に降りかかり砂を吹きあげた。

レスレクシオン
帰 刃 『空戦驚』。ガルーダを思わせる鳥人の姿に変わったアピラ

マが、晴天をバツクに空中に浮かんでいる。

アピラマは白い煙を見ながら叫ぶ。

「やったか!？」

「おい馬鹿! そのセリフは……!」

「——ふう、ビックリした」

霊圧によって煙が吹き飛ばされる。砂漠に突き刺さった羽根の間から無傷のニルファイがゆつくりと出てきた。自分に降りかかるもの

だけの軌道を、素手でずらしている。

アビラマとジオⅡヴェガが頬を引きつらせた。

「マジかよ、オイ」

「つーかアビラマ。てめえ奇襲のクセに攻撃前に大声出すなよ」

「ああん!? んなこと卑怯じゃねえかよ!」

「知るか! そもそも四対一の時点で卑怯だろうが。それとてめえは空から一方的に攻撃するだけだろ」

「んだとオラア! その挑発乗ってやるよ! 羽根飛ばすだけが俺の能じゃねえんだよオ!」

「あ、ちよつ待て、行くな馬鹿アツ!!」

逆ギレして制空権という優位を捨てたアビラマが滑空体勢に入る。

そして奇声を上げながら幼女に襲い掛かった男が、首と腹に肘を入れられ、無様に砂漠に突っ込んだ。

「……………」

「来ないのかな、ジオⅡヴェガさん」

一人となつたジオⅡヴェガは無表情のまま周囲を見渡す。フィンドールとシャルロットは起き上がってきている。アビラマ? そんなの知らん。しかし二人が来るまで、単独でこの少女と戦うしかない。

もはや当初あつたニルファイに対しての侮りは微塵もない。

「くそおおおおおッ!」

どこか悲哀を感じさせる雄叫びを上げ、ジオⅡヴェガがニルファイに特攻した。

これは鍛錬だ。

少なくとも命のやりとりが行われようと、ニルファイにとっては鍛錬であつた。

それも実戦に勝る訓練はないという言葉^{エスパーダ}を体現している。もしニルファイを倒せたらもれなく十刃にしてやるぜ、などと冗談か本気か

分からない褒美を据え、両者ともに頑張っていた。

空中に投げ飛ばされたジオルヴエガを見ながらアネットが嘆息。最初、ニルフィは押されているかと思っただが、早くも相手の動きに慣れてきたようだ。

「あらら、ジオルヴエガもやられましたねえ」

「この負けもあ奴らにとって刺激になるじやろうなあ」

宮の屋上に置かれた玉座に座るバラガンが言った。

下でのニルフィとバラガンのフラシオン従属官たちの戦いは、双方の同意を得たものだ。ニルフィは修練として、フラシオン従属官たちはバラガンに、最近平和ボケしているだろうとけしかけられた。

バラガンのことだから門前払いされるだろうと思っていたが、予想以上にとんとん拍子で進んだことで拍子抜けだ。

玉座の隣に立つアネットは肩をすくめる。

「あなたから許可が出るとは思ってたけど、ただの道楽のつもりかしら？ どういう風の吹き回しよ」

「余興としては十分じゃあないか？ これが現実だ。あ奴らが儂に捧げるのは、敵の血で染めた道だけがいい。それを身に染みさせるにはいい機会だ」

「身に染みるほど痛い思いさせても？」

「当たり前じゃろうて」

フィンドールとシャルロッテがセロ・エスベヒスモ光閃とオプスクーロ・ソニード虚楼響転に攪乱されているのを眺めながら、話は続く。

「しっかし、あの小娘。最初会った時とはちつとばかり変わったように見えるんだがのう」

「まさか。バストもウエストもヒップも、最初と同じく絶妙な口り体型を維持してるわよ。まさに芸術！」

「…… たとえ十刃エスパーダを降りても貴様は変わらん」

呆れが消え、金剛石のごとく重くなる。

「なあー元NO.1？」

頬杖を突きながらバラガンがギロリとアネットを見上げる。大帝の覇気のある視線に晒されながら、アネットの表情は微塵も動かな

い。最初に出会ってからもそうだ。彼女に畏怖を求めるのが間違っていた。

妖しげな色香を漂わせる微笑を浮かべたまま、アネットは口を開く。

「ご生憎様だけど、今のアタシはただの従属官フランゾンよ。それに過去の栄光にしがみつくつもりなんかないわ」

「そうかのう。儂には貴様が栄光じゃなく、遺恨にしがみついているように見えるんじゃないが」

「そりやそうよ。だってアタシたちは亡霊なんだし」

「答えんか」

「必要性なんか感じませんね」

バラガンの背後に控えるポウとニルゲの二人は、いつ主人が怒りださないかとハラハラしていた。アネットの遠慮のない物言いは無礼そのもの。いくらフリバロン・エスパーダ刃落ちであるとはいえ、あまりにも言葉が過ぎる。

しかしバラガンは慣れたやり取りとでもいうように、気にした様子もない。

「まあいい。いずれ答えは表に出る」

右目付近や左頬などにある傷をなぞりながら、バラガンが予言めいたことを口にした。

「あとは小娘がどう進むかだ。それを認めこそすれ、妨げるつもりなんか毛頭ないわ。どう化けたところで今さら驚きはせん」

「端的に言うとう？」

「あの小娘にも興味が湧いた」

「あら陛下。ご自分のお歳を考えたらどうですか？ たしかにあそこまで可愛いコはそういないけど、体に興味があるなんて……」

「貴様の頭は一から変わってほしいのう」

「それだともうアタシの形をした別の生物ですな」

ここまでのいくとむしろ清々しい。アネットの人間時代の死因が煩惱関係だと言われても納得してしまう。むしろそれ以外ありえないのではないのだろうか。

「くだらん話はもういい。しかしなんじゃ。ここ最近、小娘はハリベルの宮に行ったらしいじゃないか。影で何かやっておるのか？」

「裏なんてないわ。ただ実戦経験を積ませておきたいみたい。これもニルファイが言い出したことだし、ハリベルのトコの前は3ヶタトレス・シフラスの巢に入り浸ってたわよ」

グリムジョーエスバードの十刃落ちが決まった時から、ニルファイはこういったことを続けるようになった。

自身の模倣能力を最大限まで生かし、貪欲に力を付けていく。アールニーロの喰グロトネリア虚ほど即効性のない。しかし徐々に膨大な技術の取捨選択をして最適化し、あらゆる技を飲み込んでいく。

特に十刃落ちプリバロン・エスバードたちとの戦いはニルファイにとってかなり有意義なものだった。後代の破面アランカルと違って基本スペックが劣っていること多い彼らは、それを埋め合わせるように技術という点を特化させていることもままある。

そういった者は格好の模倣対象エサだ。

「貴様は鍛えてやらんのか？」

「無理ね、そもそもあのコ相手だと無意識に手を抜いちやうから。大体はグリーゼがなんとかしてくれるけど、彼だけだとパターンに限界もあるし」

アネットではニルファイに甘すぎて訓練にならない。一番身近なのにかかりの弊害だ。しかし鉄扇などというピーキーな斬魄刀や能力型という点から、たとえ本気でやってもニルファイが学べることはあまりなかっただろう。

強敵と戦うことではなく技術を磨くことを優先するならなおさらだ。

「ま、あの子が変わったっていうのなら、何がとは言わないけどたしかに変わったんじゃないかしら」

「その割には喜色のない表情を浮かべとるのう」

「……戦いなんて、させないほうがいいですし。あんなに嫌ってたのに、あの子が自分から進んでそういった道を歩いていくのは、正直複雑なのよ」

「カツ、従者はただ主の背を追うだけでよい。止めようなどという愚行は侮蔑でしかないわ。くだらんことを考えとる暇があるのなら、たとえ一匙ひとすくいでも身を捧げている。それがあるべき姿だ」

グリムジョーとはまた違う、すべてを束ねようとする『王』の言葉にアネットは苦笑した。

「重いわね」

「軽い言葉なぞ吐かんわ」

戦闘音が止んだ。

見てみると、どうやらフィンドールたちはリタイアしたようだ。

『あ、アビラマが襲い掛かった』と思えば、ニルフィのドルドーニ直伝である足技がアビラマの首に叩き込まれ、今度こそ沈黙する。もはや帰レスレクシオン刃も解けており、勝敗は決した。

ニルフィはそそくさと彼らを介抱していく。

彼女の体には、さほど深い傷を負っていなかった。

分身による多方面の同時制圧。

瞬速と格闘技を組み合わせたトリツキーな戦闘スタイル。

鬼道などを含めた手数多さ。

ニルフィの長所を挙げればこのようになるだろう。しかし、それでもまだ完ペキではない。スタークが使う無数の虚閃セロ・メトラジエッタによる集中砲火『無限装弾虚閃』などの一点突破に特化した技を許せば、意外にも脆い。

——といっても戦い方しただし。

——それに前に現世で見た小さな隊長さんくらいなら、問題ないかしら？

——さすがに藍染クラスは分が悪すぎだけど。

ひいき目もなく客観的に分析するアネット。その時の彼女の表情はひどく冷めきっており、それが怜悧な美貌を最大限にまで冴えさせていた。いつもそんな顔していればいいのにとバラガンが思ったのを、アネットは知らない。

「やはりあ奴ら、なまっておるな。もうちつとばかし粘れば及第点は与えられたんじやが」

「数が有利だっただけでいきなり連携なんて取れないわよ。アビラマがもうちよつと頑張ってくれば、もつとニルフィに有効打を与えられたはずね」

「やはりアビラマか」

「そうね」

ボロクソに言われているアビラマがかわいそうだ。目指せ十刃^{エスパーダ}はまだ遠い。

そういえば、とアネットが思い出したように話題を変える。

「新しい第6十刃^{セスタ・エスパーダ}のこと、知ってますか？」

「ああ、あの小童^{こわっば}のことか。ボスも人が悪い。実力が多少なりともある者を選ぶのなら、十刃^{プリバロン・エスパーダ}落ちや埋もれた刃がいるじやろうに。十中八九、遠くないうちに何かしでかすんじゃないか」

ルピ・アンテノール。記憶を探ってみれば、該当する少年のような破面^{アランカル}が思い浮かぶ。

アネットからして特に思う所のない存在だ。

しかしニルフィからはどう見えるのだろうか。ルピのひねくれた性格を知っているだけに、ニルフィと合わせるとロクなことが無さそうだと勘が告げる。

アネットの主人は敵と見なした相手をとことん嫌うのだ。それはもう、関係修復など見込めないほど。

少し前の出来事だ。

ヤミーのところから借り受けてきたクツカプーロとニルフィが、^{セフティマ・パラシオ}第7宮でたわむれていた。それを少し離れていたところから微笑ましくアネットが見守る。

黒い髪をなびかせながら、ニルフィは楽しげに子犬とじゃれあう。そんなとき東仙がなんらかの報せを持ってニルフィの宮を訪れたことがある。

「ニルフィネス。藍染様からの伝言だ」

「……………なに？」

話しかけられた途端、あんなにも輝いていた金色の瞳に影が差し、

それに留まらず腐敗した泥沼のように濁った。さらに盛大な舌打ちが響く。舌打ちだ。あのニルファイが、下品にも舌打ちをしたのだ。

もはやグレまくりなニルファイが軽蔑の視線を東仙に向ける。遠くから見ていたアネットはその視線に……なぜかいつも以上に興奮したが、まあそれはともかくとして、これがまだ序の口だと悟る。

「何の用かな？ 許可どころかデリカシーの欠片もなく私の宮に入ってきて、さ」

棘を隠そうともせず言葉を投げかける。

「最初に言ったはずだ。藍染様からの伝言だと」
「そう」

無言。何も話すことがないとでもいうように、ニルファイはクツカプーロとのたわむれを再開する。話すのならさっさと話せ。小さな背はそう物語っていた。

これほど取り付く島もない態度を取るのはおそらく初めてだ。ドライな幼女というのもなかなか趣があるとアネットは思った。

普段の温和さが鳴りを潜め、氷のような空気を纏う。なぜかその冷徹な表情にもアネットは胸がキュンと鳴るが、またもやそれはともかくとして、傍観に徹する。

——余計なことしたらアタシも怒られちゃうかもしれないし……。

しかしここで余計なことをしたのは東仙だった。さっさと報告を済ませて、速急にこの宮を出ていくのが正解だったのに。

「ニルファイネス」

東仙が呼びかける。

「私は間違ったことをしたとは思っていない」

その言葉を聞いたとき、ニルファイの手が止まった。彼女の表情は黒髪に隠れてうかがえない。しかし腕の中のクツカプーロがガタガタブルブルと震えはじめた。

「間違ったこと？」

「グリムジョーたちはこの虚夜宮ラス・ノーチエスの調和を乱す存在だと考えた。規律を全うするために私は刀を抜いたに過ぎない」

「……へえ、そつかあ。調和、規律、ねえ」

「言いたいことでもあるのか？」

「当たり前じゃん。そもそも私たちは破面アランカルである以前に虚ホロウだよ？

自分勝手にしか生きられない存在なのさ。それを無理やり暴力で並べ立てるのが調和っていうのなら……今ここでキミの人格とプライドをへし折って、床を舐めてもらっても、それも調和ってことになるのかなあ？」

ぐるん、と擬音がつきそうな動作でニルファイが東仙を見る。盲目の死神は苦々しい顔をしていた。

「東仙さんは、グリムジョーのどこが気に入らないの？」

「以前からその兆候があったが、決まり付けは藍染様の意志に反し、許可なく現世へ侵攻したことだ」

「あははは、藍染様の許可も待たずに刀を抜いた人の言葉はやっぱ違うなあ。あれだね。飼い主から『待て』って言われても、いきなり目の前のエサにがつつく躰しっけのない犬と同じだよ」

けらけらけら。

ここまで楽しそうでない笑い方もないだろう。

「減らず口を叩けるようになったのは結構だ。だが、貴様も現状を揺るがすような行動をしたのなら、断罪対象となるのを忘れるな」

「キミが？」
虚ホロウだった私に始解すずむしの『清虫』どころか、正解すずむしついでしきの『清虫終式』

閻魔蟋蟀えんまごおろぎ』を使っても仕留めてくれなかった、キミが？」

「……ッ！ 貴様、記憶が……」

「今はどうでもいいよ、そんなの。でも言っておくよ。私を断罪するなら精いっぱい抵抗してー殺してやる。私から大切なものを奪った報いを受けさせるよ」

もはやニルファイは東仙のことなど赦しはしない。相手が赦してもらおうと考えていなくとも、ニルファイから歩み寄ることはなくなつた。たとえどれほどのお菓子をくれようが、成り行きで優しくされようが、心を開く前に相手の首を闇から狙う。

今でさえ、東仙に藍染という後ろ盾がなければ、ブレーキなどなくなつたような殺気が形となって暴威を振るうだろう。

アネットが腕で身を抱きながら震える。

「ああ、なんだかイイ意味でゾクゾクしてきちゃった！」

「ーもうよい。小娘のところに行つてやれ。まったく、貴様がなぜそう考えたか、推し量れるようになったのが複雑じゃのう……」

「フツ、それだけ長い付き合いってことですよ」

「腐れ縁の間違いだろう。儂は中へ戻る。これは小娘に渡しておけ。退屈をしのがせてもらった礼じゃ」

「ありがとう。ニルファイも喜ぶわ」

諦めの境地に差し掛かったバラガン。彼は懐から最高級のお菓子の小袋を取り出すと、アネットに放り投げる。仰々しく受け取ったアネットは、一礼するとすぐさま宮の屋上を飛び下りた。

どれほど歪んでいこうと、愛してやまない主人の元へと行くために。

グリムジョーの現世侵攻から半月ほど経った、とある日の出来事。

思考の迷路

そこは、ラス・ノーチエス虚夜宮のどことも知れぬ、ただ広い空間であった。その中央で高速の手陣を切り始めたニルファイが、霊圧を複雑に編み込む。

矮躯から放たれる霊圧が彼女の艶やかな黒髪を持ち上げた。紡ぐ。

「縛道の六十二」

さじょうさばく鎖条鎖縛

空中から出現した霊子の鎖が、模擬相手となる人形へと襲いかかり、生きた蛇のように相手の全身を幾重にも締め付ける。人形は至って特徴もない関節がむき出しのものだが、なぜか顔には東仙の絵が貼り付けてあった。

ニルファイの歌うような詠唱は終わらない。

「鉄砂の壁 僧形の塔 灼鉄熒熒 湛然として終に音無し。——縛

道の七十五」

ごちゆうてつかん五柱鉄貫

詠唱の終了とともに地面に腕を叩き付けると、地面が五ヶ所割れ砕け、人形の真上に光り輝く紋章が浮かび上がる。そこから地面に向けて五本の光柱が延び、人形の体を突き刺すような形で全身の動きを封じ込めた。

それに重ねるように、詠唱破棄で縛道の六十一、『六杖光牢』りくじようこうろうを放ち、人形の体をさらに鬼道で締め付ける。

ここままで、三重の封印が施された。

ニルファイは床に突いていた手を前面に差し出し、短く、そして気の籠った言葉を吐き出す。

「——縛道の八十一」

だんくう断空

ただの詠唱破棄ではない。扱いが難しい八十番台の鬼道を、都合六回詠唱したのと同じ効果を発揮させる。

八十九番以下の破道を完全に防ぐ、特殊な壁を生み出す縛道、『断

空』。その壁を六枚生み出すことで、ニルフィは眼前の人形の周りに立方体の結界を造り出したのだ。

本来は防御に使う『断空』を、疑似詠唱という形で封印に使うという裏技。

東仙人形は微動だにすることもできずに拘束させられた。

「ふう……これでヨシツ、と」

しばらく経っても崩壊したり不安定にならないことを確認してから、鬼道をすべて解く。

ザエルアポロ作のめちやくちや頑丈なだけの人形が絶妙なバランスで床に足をつける。東仙人形に近づいたニルフィがその股間を蹴りあげた。推定100キロは下らない人形が、ズンツ、と腹に来る音と一緒にわずかに浮き上がり、ついに人形は床にぶつ倒れた。ドルドーニあたりが見たら顔面蒼白になりそうな光景だ。

思わず見とれそうなほど晴れ晴れとした表情のニルフィが、壁際で見っていた市丸に近寄った。

「市丸さん！ さっきのも上手くいったよー」

「いやあ、凄いわあ。ボク、もう鬼道の腕じゃニルちゃんに敵わんわ。もし死神だったらすぐにでも副隊長になれるで」

監督役を務めていた市丸ギンが肩をすくめてみせる。

その顔は感心しているようであり、あるいは呆れているようにも見える。

視認しただけで模倣できる構築力。本来ならば死神が百年単位で研鑽する技を、ニルフィは一度の経験だけで八割を成功させ、二度目で十全に扱えるようになるのだ。修行舐めてんのかと言いたくなる能力であった。

さつきまで居た藍染も自分の仕事に戻っている。彼がいくつかの鬼道をニルフィに見せ、彼女はここで確認も兼ねて真似する。以前は市丸か東仙のどちらかが監督役を務めていた。しかしニルフィは東仙といざこざを起こしそうだという理由の為、鬼道の鍛錬の際は市丸が見ていることになるのだ。

「ん、でも私のはズルしてるようなものだからね。それに藍染様ほど

使える人ってそういうないだろうし、そんなに誇れることでもないよ」「過程よりも結果やろ。死神にも鬼道がてんで駄目ってのもおるし、でもキミは出来とる。十年経ってないのにこんなに使えるんなら、胸張るとき」

「……張るほど胸、ないんだけどね」

「そないな悲壮な顔せんといて。きつと成長するやろうし、うん」

ニルフィはぺたぺたと胸回りに触れた。大きくなっていくような実感はない。武芸の実力が成長しているのに悲しいまでに無反応である。

俯きがちのニルフィの顔の近くに、ヒョイと何か差し出された。それを見て少女が顔を輝かせた。

「干し柿！」

「食ベとき。キミに悲しい顔なんて似合わんよ」

嬉しそうに受け取ったニルフィがおいしそうに干し柿を口に運ぶ。その様はまるでリスのよう。尻尾があればブンブンと元気よく振られていただろう。

そしてちやつかりニルフィの餌付けを成功させている市丸であった。

「市丸さんは干し柿大好きなんだよね？」

「ギンでええよ。キミみたいなめんこい娘から他人行儀なんて辛いわあ。……まあ、そうやな。子供の頃からよく食べてたわ。

ソウル・ソサエティ 尸魂界から出てきても、こればかりは捨てられへんかった」

「市……ギンはなにか後悔でもあるの？」

「なんでそう思ったんや？」

「他にも捨てたものがあるんでしょ？もしかしたら、仕方なく捨ててきちゃったものがあるんじゃないかなって」

「ボクはそないなこと何も言つてへんよ」

「……うくん、なんていうか。——雰囲気で？」

コテン、と首をかしげるニルフィ。彼女もよくわかっていないように、少しだけ眉を寄せていた。

市丸は表情を変えることもなく、いつもの飄々とした笑みのまま右

手で額を叩く。

「やっぱりニルちゃんには敵わんわ。キミに隠し事なんて出来へんわな」

「あつ、ゴメンね。私ってよくズカズカ言っちゃうから」

「責めてへんよ。ただ、置いてきたモンがあるだけやから」

冗談かどうかニルフィは答えを知らない。しかし嘘ではないのだろうと思った。

そういつた考えをうやむやにするかのように、飄々としたままの口調が語る。

「あらら、ボクの悪い癖やな。可愛いコの前だどついつい口が滑る滑る」

「お世辞上手だね」

「本心をお世辞とは言わへんよ」

二人は小さく笑いあつた。

なんとも、齒が浮くようなセリフを恥ずかしげもなく言えるようだ。それが彼の飄々とした態度を作る石組みなのだろう。相手を決して不快にさせることはしない。護廷十三隊にいた時もこんな様子なら、さぞ好青年として女性隊士にモテたはずだ。

だから、聞いてみる。

「ねえ、ギン。ギンはさ、好きな人っているの？」

「どうしたんや急に？」

「あのねっ、私ね、このまえクツカプーロと廊下で遊んでたら藍染様と会つたの。それで突然さ、『君はその破面アランカルのことが好きか？』って聞かれて、『うん』って答えたの。それから……」

「それから？」

「今度はアネットのことが好きか？ とか、グリムジョーのことが好きか？ って訊かれて。それで全部『うん』って言ったんだけど。最後にね、『君が一番好きな相手は誰かな？』って訊かれて……。それがわかんなくて、ずっと悩んでる」

ニルフィは大抵の相手を好ましいと思つている。嫌なことをされない限り、さらにお菓子をくれたり頭を撫でてくれる相手は特に好き

だ。東仙は嫌いで、ノイトラは怖い人と認識しているが、それもごく少数の例である。

多くの相手のことを『好き』と思っているが、その違いや大きさが量り兼ねていた。

「もちろんグリーゼのことも大好きだし、シャウロンたちのことも好きだったんだよ。だけど一番は誰かって言われたら、頭の中がごちゃごちゃってなってる」

ニルファイにとって今までの世界は、『好き』な相手か『嫌い』な相手だけで出来ていた。しかしそれをさらに細かくするようになると、途端、自分のことなのに整理がつかなくなる。

「誰かに相談したん？」

「ううん。ギンが初めて。でも現世の雑誌でそういうことを書いてるのがあったから見てみたんだけど」

ニルファイが懐からその雑誌を取り出した。何度もページをめくっていたからか、最近発行されたばかりなのにくたびれている。『LIKE or LOVE』。そんな題名が表紙を飾っていた。

この本に書いてある『好き』とは、親愛か恋愛の二つだった。

親愛についてはなんとなく理解できた。シャウロンたちに向けていたのはおそらくコレだからだ。

しかし、恋愛。それがよく分からない。誰にでも向けていい親愛とは違い、恋愛とは主に異性間（例外含む）で交わされる物らしい。しかしアネットは普段の言動から同性オツケー（ニルファイの主観含む）な感じだ。めっちゃ複雑なのだ。

言葉では理解できない。そして虚夜宮に例となる破面アランカルはいない。

だから可能性のある死神として市丸を選んだ。藍染と東仙という選択肢はニルファイの頭にはたから存在していなかったが。

「なるほど。ニルちゃんもそういうお年頃なんやね」

「私が知りたいのはこの恋愛の『好き』についてなの。この場所じゃ、ギン以外に知ってそうな人がいないから」

「案外、アネットちゃんも知ってるかもしれないよ？ それにクールホーンくんとか、ボクみたいな胡散臭い男よりもっとタメになりそ

うな人がおりそうなんやけど」

「そうすると一晩で虚夜宮ラス・ノーチエスに広がっちゃうから」

「…… ああ、なるほど」

女とは、得てして噂好きである。

「そうやねえ……。ボクもあんまり分かつとらんよ。仲良い女の口はそれなりに居たんやけど、それ以上なるゆうとなあ……。」

「ウソっぽーい！」

「アハハハ、ホントや、ホント」

確かめる術はニルフィにない。だからいともたやすく市丸にあしらわれてしまった。

ぶーたれるニルフィに視線を合わせるように、市丸が膝を突く。

「ニルちゃん。キミが一番当てはまる思う人は誰や？」

その質問にニルフィは頭を悩ませる。

なんというか、それっぽい人があまり思い浮かばない。

アネットは姉のようで、グリーゼはなんというか、母親とか父親のような存在である。バラガンはお祖父ちゃん、クツカプー口はペツト。誰もかれも、親愛と思える存在ばかりだ。

グリムジヨは…… なんだろうか？ 他のみんなももしかしたら違うかもしれない。これは、きつと……。

——ポフンツ!!

混乱しすぎたニルフィの頭から煙が噴き出す。市丸が彼女の頬を叩いて現実に戻していなければオーバーヒートしていただろう。

ニルフィの頭を撫でながら、たしかな苦笑を口の端に刻んだ市丸が言った。

「隊長に他に何言われたんかわからんけど、キミにとって大切なのは、そないな位置づけやあらへんやろ？」

「あ……。」

「一番大切なのは、キミがただ、他の皆を『好き』って思うことや。その相手が危なくなれば、誰だろうとキミは助けようとする。それでいいんや。今までキミは、『好き』にランクなんてつけておらへんかったしね」

やっと、しつくりこなかった理由がわかった。

ニルフィは藍染の言葉で無理やり好意のレベルを考えていたのだ。そんなのは性に合わないというのに。

市丸が言った通り、『好き』という感情については無理やり考えなくてもいいのかもしれない。むしろ大切にして育はぐんでいく方が何倍もマシだ。

胸のもやもやが取れ、心なしかすつきりした。

「そっか！　ありがとね、ギン！」

「ええよええよ、ただテキストに言っただけやし」

金色の眼を輝かせながらニルフィは拳を握る。

「私、もっと頑張つて強くなって、皆を守れるようになるよっ。もちろん、ギンのこともね！」

「あらら、イケメンやな。女のコに守ってもらおうボクは情けないわあ。……まあ、悩みが取れたつちゆうなら、ボクでも相談に乗った甲斐があったってモンや」

そこでニルフィは気配を感じて扉の方を見る。向かえとしてグリーゼが来たらしい。キリのいいところで終わったようだ。

「ーもう行くね。相談に乗ってくれてありがとう」

「氣イ付けてや。最近は物騒になつとるからなあ」

『おもしろいコト聞いてもうた』。去り際の市丸の言葉はニルフィには届かなかった。

ニルフィはさして『好き』について考えることなく、今後を思つて嬉しそうに顔をほころばせる。

この場でもつとその『好き』について理解を深めていたのなら、これからしばらくしての出来事もちよつとは進路が変わっていたかもしれない。ニルフィは普通とは違う。あまりにも愚直すぎたことが今後の災いとなるのを、まだ誰も知らない。

そんなとき、一時的に話題に上がっていたグリムジョーは。

トレス・シフラス
3ヶタの巢のとある通路を歩いていった。

特にアテがあるわけでもなく、ただ単にほつつき歩いていただけである。

目的などはなかった。しかしある人物の姿を見かけたことで、気まぐれのように話しかけた。

「ーおい、オッサン」

「吾輩はオッサンなどという名ではない！…… っと、おやおや、誰かと思えば青年ホーベンではないかね。噂はかねがね聞いておるよ」

ドルドーニは髭をしごきながら一度だけグリムジョーの左腕を見る。正確には左腕があつた場所を、だ。

その隻腕ゆえに十刃エスパーダからグリムジョーが落とされたのは周知の事実だ。

「しかし珍しいこともあるものだ。君から吾輩に声を掛けて来るとは……。吾輩が十刃エスパーダであつたころは、いくら吾輩が話しかけても礼儀ともども無視されていたが。フム、こうして建前だけとはいえ同じ立場に立つたからこそ言えるものが……」

「別にくだらねえ話をしに来たんじゃねえよ」

「分かつておる。分かつておるとも。十刃エスパーダであつたころの吾輩の輝きは、まさしく太陽のごとき。直視することすら難しかっただろう。貶すつもりなどないが、自身どころか青年ホーベンも堕ちた今、吾輩たちはこうして腹を割って話せるようになった。ー違うかね？」

——ウゼエ……！

グリムジョーは必死に拳の形を作りそうな右手の力を抜く。今にもドルドーニに殴り掛かつてしまいそうだった。ドルドーニの戦士としての在り方は認めているが、普段のこの言動が気に食わない。

無視していたのも、単に構うのが面倒だったただけだ。

「そんなのはどうでもいいんだよ。聞きたいことがある」

「フム、なにかね？」

「この近くで、てめえらとニルファイが戦っていたのは本当か？」

もう一度フム、と鼻で息を吐いたドルドーニが、髭をしごくのを止めた。

おもむろに息を吸い、

「――事実だ」

グリムジョーは自分が苦い顔となるのを自覚した。それは正面にいるドルドーニが一番分かっているだろう。おそらく、その理由もわかっていながらドルドーニがわざわざ尋ねる。

「しかし青年ホーベンの訊き方も遠回しなものだ。久しく会っていないなかった吾輩に訊くよりも、お嬢さんニヤの元へ行つたほうが早かつただろうに」

「あいつは関係ねえよ」

「そうかね。ならばなぜ質問などした」

「……………」

「こうした問答をするのは無意味だったかな。それよりだったら早く、お嬢さんニヤに会いに行きたまえ。聞けば、ある日を境にぱつたりと会わなくなっているらしいではないか。心配しておつたぞ」

たしかに会うのが正解なのだろう。

こんな馬鹿げたことなんて止めると、直接言わなければならぬ。他の誰でもないグリムジョーが。

あの時ニルファイは、『自分の存在がシャウロンたちを殺した』ということを否定した。しかし本心からそう思っていたのなら、こうして実力を付けるための行動など起こさなかつたはずだ。

火種は払う。しかし自分から火は付けない。それがニルファイの信条だ。

しかしグリムジョーが起こした現世への無断侵攻を機会に、ニルファイは自分から争いに身を投じる腹積もりでいる。

そのせいで一人の少女を変質させてしまったのだ。

自分自身のことがかここまで気に入らなくなったのはいつぶりだろう。

「あいつは、オッサンたちと戦つたんだろ？ それも自分から？」

「だからオッサンではないと…………… まあよい。青年ホーベンの問いに答えるのならすべて肯定を返そう。」

ニルファイネス嬢は自分からここへとやってきて、鍛えてほしいと我々に頼んだのだ」

「全員が全員、領いたワケじゃねえだろ」
「そうだとも。しかしそういつた輩をお嬢さんニーニヤはことごとく挑発し、強引に自分に攻撃を仕掛けさせた。十刃プリバロン・エスパーダ落ち数名を同時に相手取り、虚夜宮ラス・ノイチエスの壁に穴が開いてしまったよ」
落ちた存在とはいえ、個々の実力は数字ヌメロスも持ちはもとより、従属官フランシオンたちをしのぐ。

だが、

「結果として我々は敗北した。最初こそお嬢さんニーニヤを追い詰めていたのだがね。時間を掛ければ掛けるほど、刃は届くことが無く、終いには翻弄され続けた。…… 刀剣解放すら使わずにだ」

聞けば、ドルドーニたちは全員が帰レスレクシオン刃を使つたらしい。破面・N o. 105、チルツチ・サンダーウィッチは『車輪鉄燕ゴロンドリーナ』を。破面・N o. 107、ガンテンバイン・モスケータは『龍拳ドラグラ』を。他の者たちも例に漏れない。

かくいうドルドーニも『暴風男爵ヒラルダ』を解放し、即席の連携をこなしていた。

「いくらアイツでもそんなコト出来んのかよ?」

「出来たのだ。吾輩たちは現に、それを見ている」

戦士としての貌を覗かせたドルドーニに、グリムジョーはそれ以上なにも言えなくなった。

「たしかに吾輩たちはアネット嬢たちやピカロのような、十刃プリバロン・エスパーダ落ちでの規格外ほどの力はない。しかしだ。再び己の無力さを噛み締めさせられたよ」

「そうか」

いつもに増してこの場所がピリピリしていると思えば、ニルフィが原因だったらしい。十刃プリバロン・エスパーダ落ちたちは思い思いに自身の修練に力を入れていた。

ドルドーニが肩をすくめさせながらため息を吐く。

「しかし、困ったものだ」

「なにがだよ」

苦痛にさいなまされるドルドーニを疑問に思い、グリムジョーが尋

ねた。

しかしすぐにそれを後悔することになる。

「此度の戦いにより、ニルフィネス嬢は吾輩のハートをさらに射止めたのだ！ 普段は見せられない戦女神のごとき凛々しい表情はかくも宝石のようだった。動くたびに見え隠れするうなじや肌の白さが、なんともいえぬ色香を漂わせていたのだよ」

「もうその口を閉じろ」

「そうっ、口だ！ 正確に言えばあの柔らかくも可憐な唇なのだ！

鬼道だったか？ 言葉を紡ぐ際の動きがなんとも艶めかしい。そして時折チロリと覗く舌先がまたなんとも吾輩のリピドーを刺激する！ しかし吾輩が一番興奮したのは脚だった！ あの精巧なガラス細工のような脚から繰り出される蹴りが、このいやしい身を揺する時、吾輩の中のケダモノが一気に「—————！」

「……おい、アネットがいるぞ」

「——むおう!? ち、違うのだ！ 吾輩は別にいやらしい意味合いで話していたのではなく!!」

「嘘だよ。あいつはいねエから、そんなみじめな姿見せんじゃねえよ」
大袈裟なジエスチャーで長々と語ったかと思えば、アネットの影がちらつくと猟師に狙われた小鹿のごとく怯えはじめた変態紳士。手の施しようがないとはこのことだろう。普段から戦闘時のような雰囲気があれば、^{エスパーダ}十刃時代に失敗した、^{アランカル}女破面の^{フラシオン}従属官を引き入れることも出来ただろうに。

ドルドーニを見ていると何もかも馬鹿馬鹿しくなる。グリムジョーは意気を削がれたように頭を乱暴に搔く。

「もういい。知りたいことは聞けたからよ。壁相手にいくらでも言うてろ」

「それだと吾輩が単なる不審者ではないかね？」

「そうなんだよ」

グリムジョーはさっさとこの場を離れようと体の向きを変えようとする。

それを引きとめるようにドルドーニが声を掛けた。

「青年ホーベンはこれからどうするつもりかね？」

「…… どうもこうもねエよ。あいつがこれから何しようが、俺には関係ねえことだ」

「吾輩が聞いたのは他の誰でもない青年ホーベンのことだ」

「俺の？」

「然しかり。お嬢ニヤさんと青年ホーベンの間で何があったかなど吾輩の存じぬところだ。されど、ここで大切なのは青年ホーベンがなにをしたいかだ」

自分が何をしたいのか。

そう訊かれると、グリムジョーはとつさに答えることができなかった。

ドルドーニはそれ以上追及する訳でもなく、今度は自分から身ひるがえを翻す。

「先達者として助言するならば、理由を考えてから行動するといい。時間は有限だ。しかしまったく無いというわけではない。青年ホーベンがその答えに辿り着くよう、祈っておるよ」

去つていく背を見ながらグリムジョーが悪態を突く。

「喋りたいだけ喋つて、最後にはワケ分かんねえのを残していくんじゃないねえよ」

ドルドーニの言葉で余計分からなくなる。苛立ちに反応して靈圧が揺らめく。

しかし時間は多少なりともあるとドルドーニは言った。

「くそ…… ツ！」

あの変態紳士の言葉に従うのは癪だが、今回ばかりは素直ホーベンに聞き入れよう。

グリムジョーは無人の通路を歩きながら、自分の中でごつちやになつていた感情を整理しはじめた。

最後に見た少女の顔が頭の隅でちらつく。

ひとつ分かったことといえば、あんな顔は二度と見たくないということだ。

なら、自分はどうするべきか。

「——青年ホーベンよー！」

「まだ何かあんのかよ」

「絶対にだ！ 絶対にさっきの吾輩の変た…… ちょっと本能全開にしすぎた言葉をアネット嬢にチクるのではないぞ！ いいか？ これは振りではない！」

「いいからさつきと失せやがれ！」

…… 本来に、こんな変態紳士の言葉に従うのは癪だった。

LIKE or LOVE

プリメーラ・バラシオ
第一 宮のとある一室。

そわそわと落着きなく同じ場所を行き来する少女を見かね、スタークがクツションの上に寝つ転がりながら声を掛ける。

「おい、ちよつと落着いたらどうだ？」

「お、落着いてるし！ あたしつてばいつも通りだし！」

言葉とは裏腹に少女はせわしくなく身じろぎする。

彼女の名はリリネット・ジンジャーバツク。スタークの従属官フラシオンにして、頭部と顔の左半分を覆うように仮面の名残がある少女だ。

「そんな事してても、あちらさんが来る時間が早くなるわけじゃないだろ」

「…… だつてさー」

「言いたいことは分かる。だからとりあえず落着け。その元気はあとに回した方がいいだろ」

スタークの言葉にリリネットがバツが悪そうに俯く。

最近友達となった少女と会うのが待ち遠しいのだろう。邂逅してからすでに何度か会っているが、いつの間にか楽しみとなっている。

虚夜宮ラス・ノーチエスでは娯楽が極端に少なく、そこで溜まったストレスを発散する方法も限られてくる。戦闘で鬱憤を晴らす輩もいた。しかし虚閃セロも満足に撃てないリリネットでは逆に殺されてしまう。今まで作りたくとも作れなかった友人とも呼べる存在が、リリネットにとつてはかせないものとなっていた。

「遊ぶのが楽しいっていうか、一緒にいられるだけであたしは嬉しいんだよね。今まであいつみたいなのがヤツつていなかったじゃん？ ただ同じところにいるよりも近いって感じられるのが、なんていうか、新鮮だから」

リリネットはただの従属官フラシオンではない。厳密には、その括りに当てはまらないだろう。

通常なら斬魄刀となるべき虚の破面化現象において、あえて刀ではなく人型をとっているため、正確には第1十刃プリメーラ・エスパルダである。どちらも同

じで、半身としての存在なのだ。よって、スタークの抱える死の形である『孤独』も、リリネットは胸に秘めていた。

だからこそだろう。とある十刃^{エスパーダ}の少女の存在は、長い時の中で待ち望んだものであるのは。

「ま、否定はしないけどな」

「でしょ」

得心がいったようにリリネットが口の端を吊り上げる。

「なんていうかな、同族意識？ あいつとあたしたちって、なんだか似てるような気もして、それが一番気になるんだよね」

「似てるだけでホントは違うさ」

「どうしてそう思うの？」

「俺たちと同じだったら、俺たちと同じようになつてただろ」

スタークは、あるいはリリネットは、^{ホロウ}虚時代、孤独ゆえに自らの体を半分に分けた。

しかしあの少女はそれをしなかった。別の方法を見つけたのか、あるいは孤独を紛らわせることが出来たのか。

——感謝こそするが、踏み込みはしないけどな。

欠伸を噛み殺しながらスタークは頭の隅で考えた。

言つてはなんだが、幸運だった。もしスタークたちと同じようになつていたら、こんな交流など自分からしに来ないだろう。いくらスタークが最初に言ったからといってまだ。

「——つと、おいでなすつたか」

「ホント!?!」

探査回路^{ペスキス}に反応が出たことでふいに言葉が漏れ出る。それを聴きつけたリリネットが顔を輝かせた。

「もう部屋の前だ」

「はあ!?! なんて宮に入った瞬間から教えてくれなかったのさ!?!」

「いいじゃねえかよ。俺が教える前に自分で気付いてくれ」

扉がノックされる。スタークに文句を言う暇さえ惜しむように、リリネットが返事をしながら扉へと駆けていく。壁を隔てて待つていた人物に早く会いたいがために。

そして扉が開かれ、

「ニルラー」

「ロリータモンスター。略してロリモン！　ちやつちやと調教しっけしてお持ち帰りゲツトだぜ！」

「ぎゃー!?!」

隙間から飛び出るようにして現れた朱色の髪の女に拘束された。

「ちよつ、やめっ！　なんでグリーゼじゃなくてあんたが来てるのさ!?!」

「あらあら、元はといえはこの宮はアタシのものよ？　売物件がどうなってるか気まぐれに見に来るのは当たり前でしょ。それに代金なんて貰ってないし、お代はあなたの体でいいですよ？」

「服に手え入れんな！　それにあたしは売り物じゃない！」

「あ、そうでした。公共の品ですし優しく扱ってあげますよ」

「その優しくのニュアンスがおかしく聞こえるのはあたしがおかしいから!?!」

アネットがフッフと妖しく笑いながら流す。

ずっと昔、はじめて会った瞬間から彼女はリリネットの天敵となっていた。何しろ目の前にいるだけで身の危険がビシバシ伝わるのだ。気を抜けば、色々な意味で食べられてしまうだろう。

あわや魔の手に染められそうだったリリネットを救うような声が後方から届く。

「ねえアネット。リリネットが困ってるでしょ？」

「あらら、ちよつとからかいすぎたわね」

拘束を解かれたリリネットにとってその少女は菩薩かなにかに見えるだろう。

会うのを待ちわびていた少女、ニルファイが少しだけ申し訳なさそうに笑った。

「ごめんねリリネット。アネットったら久しぶりにキミに会えるって興奮してたんだ」

「興奮の仕方が乗る路線からして間違ってる気がするけど……。ありがとう、ニルファイ」

自分より少しだけ身長の低い少女に、リリネットが礼を言う。

華奢で儂げな容姿に、よく自慢しているらしい艶やかな濡れ羽色の黒髪。無垢と無邪気の光が詰まったような金色の瞳が優しげに細められた。このような姿でも十刃の一人だ。^{エスパーダ}しかし彼女たちの関係に、そんな肩書など必要ない。

これから何をして遊ぶか相談し始めた少女たちをスタークが眺める。

いつの間にか横にやって来たアネットがクッションを一つ置き、断つてから腰をおろした。

「あんたも相変わらずだな」

「表に出てきてからよく言われますよ、それ。まったく、一度隠居しただけで人格が変わるとでも思ってるんですかね」

「そうだったらそうだったで不気味だ。変わらんほうがいい時もあるってことか」

「そういうことよ」

スタークはだらけきつた姿勢のままアネットを横目で見る。

「懐かしいからってココに来たわけじゃあないんだろ？」

「そう、ね。ちよつと忘れ物をしたからそれを取りに。だけでもっと重要な事案がアタシにはあるのよ」

「なんだ？」

「この目で幼女二人がいちやいちゃする光景を脳内に保管するためよ！」

「……言いたいことはなんとなくわかるが、それだとあんたが幼女を付け狙う犯罪者の発言だよな」

アネットは豊かな胸を張って、

「そっちの意味もあるからまったく問題なし！」

言い切った。

スタークは小さくため息を吐いて、

「グリーゼの旦那が代わりにいければ、頭を痛めないで済むんだがな」

「あんな堅物と一緒にしないでほしいわね。この前ニルフィに襲い掛かったらめっちゃ痛いデコピンで撃退してきたのよ。バゴーンツ!!」

ってね。そのあと10時間も延々と小言小言。あのとときの床の冷たさは忘れられないわ!」

「……なあ、グリーゼの旦那の行動がまったく間違っていないように思えんのは、気のせいかな?」

「常識すらもアタシの敵になったみたいですね」

悔しそうに歯噛みするアネット。彼女には自業自得という言葉を贈りたい。

というよりも、アネットが日の下を歩けるのは、何気のブレーキ役のグリーゼのおかげだったりする。存在がもはやアウトゾーンにいるアネットが大切な一線を踏み越えないのはまぐれではない。

そうでなければ今頃アネットは、目に横線どころか、全身にモザイク加工処理をされて生きているだろう。

さつそく追いかけっこを始めた少女たちを見ながらも会話は続く。

「あいつらもああいう風に可愛いところがあるのは認めるぜ。でも聞けば、他の奴等に食指は動いてないみたいだな」

「アタシが可愛いと感じる条件はまずアタシより体が小さいことからよ。デカイ男が可愛い真似してもキモいだけでしょ」

「ブレないな、あんた」

「自慢じゃないけど、この世界にいない大勢からもよく言われてる気がするわ」

「たしかに自慢にならない。人としてほぼ終わってるんじゃないかな?」

そう言ってスタークは再び正面に視線を戻す。相変わらずリリネットは必死にニルフィを追いつ、どことなく晴れやかな表情をしていた。

それを向けている少女を見る。

特に深い意味もなく思ったことを口にした。

「まあ、あんたの主人の可愛らしさってのは否定しないな。時々背伸びする態度がいいのかな?」

そう言うとアネットは鼻で笑い、

「わかってませんね、あなたは。あの娘の良さはあの穢れを知らぬ幼

い瞳ですよ。あれが大人の階段を一步一步上がっていく過程を、アタシは余すことなく眺め続けていたいわ」

「あんたはすこし親父臭い思考が強すぎんじゃないか？ あいつはあのままが良いんだろ。あんたの言ったみたいな淫らな意味で無理に大人になる必要はない」

スタークがそう断じると、アネットが即座に反論する。

「あなたこそ自分の趣味を押し付けているだけでしょ。少年だろうと少女だろうと、いずれは大人になっていくものよ。アタシはなぜか口リコンだと周囲に誤解されがちだけど、それは違います。ハリベルの凜とした風貌と時々天然発言だけでアタシは十分に身悶えることができるから。子供だろうと大人だろうと、その者に合った相応の可愛らしさがあればそれでいいのよ。つまりなにが言いたいかというトーー」

言葉を切り、アネットはきつぱりと言った。

「あの娘は可愛いつてことね」

「まあ否定しないが」

複雑な軌道を描きながら会話は本来の着陸点に落ちた。

ちようど一段落したときに、リリネットたちが部屋を出ていこうとする。追いかけてこをもつと広い場所でするためだろう。

「ちよつと遠くに行つてくるね」

「転ばないように気を付けなさいよ。それと外に出ないでね」

「うん。いこ、リリネット」

「響ソニード転はなしだから！」

騒がしく部屋を去る二人を微笑ましく見送るアネットにスタークが尋ねる。

この女破アランカル面は現世のパパラッチもかくやというしつこきで付いていきそうな気がしたからだ。

その問いにアネットは苦笑気味に返す。

「いまはあの娘たちの時間だからですよ。アタシが入っていくのは野暮つてものでしょう？ ホントは楽しんでくれればいいだけだから」

変態的な行動が目立つが、彼女も彼女なりに二人を大切に思ってい

るのだろうか。

「それに、友達ができて嬉しいのはリリネットだけじゃないわ」

「そう言ってもらえると助かる。おたくの嬢ちゃんに色々構ってもらってるだけって思わなくても済むからな。……. そういや見えて思ってたんだが、仲良くなる早さってあれが普通なのか？」

まだリリネットとニルフィは出会って数日でしかない。それから数度ほど顔を合わせ、人間のよ様な表現で今では親友のような間柄だ。子供ならば普通と言えはそこまでののだが。

「純粋な相手ならとにかく懐くんですよ。それにリリネットほどそういう破面アランカルって、ここにはいないでしょ」

「ああ、成程」

「その点、グリムジョーもなにげに満たしてますから。真っ直ぐって言うところだけは、ね」

純粋なものは同じ、あるいは似たようなものに惹かれる。似た境遇であるがゆえに、二人は誰よりも似通っているのだ。

さつきまでスタークとリリネットが話していたことが、ここでも当てはまった。

——ただなあ。

——純粹すぎつてのもどうなんだか。

たとえるなら真っ白な紙だ。どんな色にも染まるし、手順を踏めば形すら変わる。

それが裏目に出なければいいとスタークは思った。

「ハッ……. ハッ……. ! お、追い詰めた……. !」

追走劇はそろそろ終わりを迎えようとしていた。

リリネットは一つの部屋の前で膝に手を突き、少しでも疲労を回復させようとする。

「——うん、よっし！」

破面アランカルとしての体力の多さのおかげですぐに息は整った。裏を返せ

ば弱小とはいえ破アランカル面級の体力を一時的に使い切るような激しい鬼ごっこであることを示している。

どこまでも追い掛け回し、ついに鬼役のリリネットは、ニルフィをとある部屋に押し込めることができたのだ。

もう相手に逃げ場はない。今は少しでも体調を整え、万全を喫したほうがいい。

「なんかすごい遠くに来ちゃったなあ」

周囲を見回せば下官一人通らない閑散とした廊下が延びている。もといた部屋からもだいぶ離れていた。

遊びを邪魔されないからそれでいいのだが。

「早く捕まえてやらないと」

扉に手を掛けながら、ふと思う。

もうすぐこんな楽しい時間が消えてしまうのだと、その事実が胸を冷ました。

死神との大規模な戦争になるらしい。いかに死にそうにないエスパーダ十刃といえども、何人かが欠けることは決して低い確率ではなかった。その中にニルフィがいたらと思うと途端にやるせない。

それは嫌だ。けれど好転させるほど、リリネットに力はなかった。

ニルフィが背負っているものは、こんなちっほけな自分では支えられそうにないほど重い。

「……なに暗いこと考えてんだか」

どうしようもないなら、せめて、せめてリリネットでもできることをすればいいのだ。

寿命に比べてひどく短い交流の時間でも。

あまりにも足りなさ過ぎた時間でも。

楽しい思い出を残したい。

「ニルフィ……？　いるんでしょっ？」

踏ん切りを付かせるようにわざと大きな声を出す。

心が軽くなった……気がした。いまはそれくらいでいいだろう。

リリネットは今度こそ手に力を込め、扉を押す。

「あれ？」

覚えのない部屋だ。

面積だけは無駄に広い宮に似つかわしくないほどこじんまりとしている。明かりすらついていない。廊下から漏れる光がリリネットの影と共に室内に入る。

座るための椅子、二人だけが使えそうなテーブル、奥の方には休むためだけに置かれたであろうベッドだけが置いてあった。ほとんど埃もなく少し冷たい空気が肌を強張らせる。

しかし肝心のニルフィの姿がない。見間違いか？ しかしちゃんとしていくところは見たし、出ていったならいくら幻影が使えるようと扉の音で気が付く。

おそろおそろリリネットが部屋の中央へと歩いて行く。

「どこにいったの、ニルフィ？」

「——ここだよ」

「うわ!? ビックリしたッ」

いつのまにか背後にニルフィはいた。開かれた扉の前でニコニコ微笑みながら立っている。

問題は場所取りだろう。ニルフィはすぐにでも逃げられる位置だ。

「あーやられた。まだ遊ぶ？」

「ううん。これは私の負けでいいよ」

潔く白旗を上げたニルフィ。彼女は相変わらず天使のような表情で……扉を後ろ手で閉めた。

室内が闇に包まれる。

「ちよっ、なにしてんの!?!」

「扉を閉めたただけだよ」

「——ッ！」

気付けば顔が触れ合いそうな距離にニルフィが近づいている。

セロ・エスベヒスモ
幻光閃

ニルフィの手に淡い光が生まれた。目くらましに使えるそれは意図したものなのか、部屋の隅まで明るくするほどの光量もない。互いの姿を浮き上がらせるだけで空中に留まる。

「私ね、リリネットに訊きたいことがあるんだ」

「……なに？」

突然ニルファイが行動することは今までに何度かあった。それを思い出し平静を取り戻したりリリネットがニルファイの顔を見る。黒髪の少女は少しだけの怯えを目に宿している。

「リリネットは……リリネットは、私のこと、好きでいてくれる？」

かすかにリリネットは目を見開く。頭を掻きながら一度、目を逸らした。

答えは決まっていた。友人として、仲間として、ここまで好ましい相手を知らない。

だからこの行動はストレートすぎる質問に対する照れ隠しだ。けれどぼかしていても始まらないと思い、言った。

「好き、だけど」

「そっか」

あからさまにホツとしたようなニルファイが肩から力を抜いた。

「じゃあ私たちは両想いってコトだね！」

「そーろーろーんん？」

喜色に満ちたニルファイの言葉に違和感を覚える。

しかししっかりと認識する間もなく、ニルファイが再び距離を詰めた。思わずリリネットは後ずさる。もちろんニルファイが自分に危害を加えることはないと信じている。だが、爛々と光る金の双眸の力に、足が勝手に動いただけだ。

「わわっ!？」

リリネットは下がりすぎて足がベッドの縁にぶつかり、背中から布団の上へと倒れ込む。

仰向けの体勢からすぐに起き上がろうとした。そしてすぐに体が固まる。

互いの息遣いが感じられそうな距離にニルファイの顔があった。

「ニ、ニルファイ？」

「私ね、ギンと話してから色々考えたんだ。それでこう思ったの。」

順番を作るより、もつと皆と仲良くなったほうが有意義なんじゃないかって！」

「順番？　ちよつと、なに言ってるの」

「リリネットは気にしなくていいことだよ。本題はここからだからさ」

楽しいな笑顔のニルファイがリリネットにしな垂れかかるようにして身を任せる。柔らかな肌が触れ合う。そこから互いの体温が交わる感覚がある。ニルファイの体重が軽いせいか息苦しさはなかった。

——え？　え？

——ホントになんなの？

せつかく取り戻した冷静さがどこかに吹き飛んだ。そのせいでニルファイがリリネットの脚に己の脚を絡めるようにし、優しく逃げられないようにしているのにも気が付かないほど。

「それでね、どうやればもつと仲良くなれるのかなあって考えてね。自分だけだと思いつかないから、現世の雑誌で調べたの。『好き』ってことについて書いてるやつでさ。ーキスって行為をすればいいって書いてあったの」

「……………」

——はあ!?

心の中であらん限りに叫ぶ。なぜ心の中かというと、現実ではそれどころではないからだ。

ニルファイの熱い吐息が首筋に掛かるたびに背が痺れる。高鳴る心臓の鼓動が接している胸を通って伝わっていると思うと、えもいえぬ羞恥心が顔を赤くさせた。さきほどからリリネットは浅い呼吸を繰り返すだけだ。

そもそも、ニルファイは思い違いをしている。

彼女の言った行為は恋人同士でするようなものだど、リリネットでさえ知識にあるからだ。

だが、

「リリネットは私のこと好きなんですよ？　だからこういうのもしていいんじゃないの？　私、リリネットともつと仲良くなりたいたいから

さ」

ニルフィは何も区別がつかないのだ。そして理解すらできていない。

おそらく彼女の言う『好き』とは、アランカル破面になってから初めて得た感情である。あるいはそれがどういったものであるか深く考えていない。甘美であるがゆえに酔いしれていた。

だから何もかもがごちゃごちゃと形を成さずに凝り集まる。『好き』という形をした別のものになっているとすら気づいていない。

現に今でさえニルフィは顔を上気させることもなく、いつものように笑っている。

最初に出会ってから変わらない顔をしている。

「誰かに、もうしてんの……？」

「ううん、リリネットが初めてになるよ。なんだかね、リリネットの『好き』は他の誰よりも近い気がするの。もしかしたらキミのことが一番好きってことになるのかな？ だからもつともつと仲良くなつて、ずっと一緒にいたいのにさー」

ギシリ、とニルフィの霊圧が軋んだ。すぐそばで聴いたから分かる。

「……それはまるで、仮面が剥がれるかのような音だった。

だからさ、と、

「大好きだよ、リリネット」

本人の知らぬところで歪んだ愛情が表へと現れる。

互いの距離がゼロへと更に近づいた。

弱弱しくリリネットが言葉を漏らす。

「ダメ、だって……ニルフィ」

「大丈夫だよ。大丈夫だから……」

それはニルフィ自身に言い聞かせるようだった。

「ん……くちゅ……」

「んう……」

二人の薄桃色の唇が重なる。ニルフィの両手によって頭を固定され、いや、そんなことをされなくとも抵抗できなかったかもしれない。

ニルフィの舌が固く閉じられたリリネットの唇をこじ開ける。艶めかしく動き、リリネットの舌を絡ませるようになぞった。かと思えば上顎をくすぐり、リリネットが上ずった悲鳴を上げる。時折酸素を求めて口を開け、短く荒い呼吸を少しだけ繰り返して、何度も貪るように口づけを交わす。

零れ落ちる唾液が顎を伝い首筋をくすぐったが、もはやそれすら気にすることができなかった。

どれくらい経っただろうか。もしかしたら一分もなかったかもしれない。

満足したようにニルフィが顔を離す。淫靡な唾液の糸が二人を繋げた。

「これで、いいよね?」

期待に瞳を輝かせるニルフィ。

それにリリネットは何かを言おうとする。しかし頭は真っ白で、口の端から漏れるのもただの音でしかない。

現実を受け止められずにリリネットは自衛として気絶した。

パソコン! と小気味いい音が部屋に響く。

「? ? ?」

どうしてか分からずにニルフィがチョップされた頭を押さえる。

困惑はもつともだ。今までニルフィに痛いことをしなかったアネットが、ちよつとした体罰を食らわせたのだから。

珍しく頭痛を堪えるようにこめかみを押さえたアネットが腰に手を当てた。

「いい? そういうのは間違ってるのよ」

「なんで?」

「なんでって……そもそも同意さえ貰ってないでしょ」

アネットが視線を横にずらす。そこではリリネットが目まわしながら気絶しており、スタークもあきれ果てた顔で立っていた。

「そう怒んないでやってくれ。嬢ちゃんもよく分からずにやったんだろ?」

「ダメですね。こればかりはちゃんと教え込まないと。それにリリネットがどう思ったかが大切なのよ」

「いつになく厳しいな」

「そりやそうよ。この娘がキス魔にでもなったら堪らないわ」

「わ、私はキス魔になんてならないよ。好きな人たちにしかしないから」

「それがキス魔って言ってるんですよ」

もう一度、ニルフィの頭頂部にチョップが降って来た。ちよつと痛い。普段はあんなに優しかったアネットがやったと思うと、ニルフィは泣きそうになる。

主人のその様子を見てグツ……と堪えたアネットだが、いつものように流されずに鋼の意志を持って相對する。普段の彼女を知る者が見れば、『明日は王虚グラン・レイ・セロの閃光が降ってくるな……』と思うだろう。実際スタークもそんな失礼なことを考えていた。明日は宮に籠り続けよう。

いじけるニルフィの前にアネットが屈む。

「ねえ、ニルフィ」

「……………」

「アタシも頭ごなしに叱ってる訳じゃないの。グリムジョーとかにしたらそいつらをアタシがブツ飛ばせば解決するけど、問題はリリネットにしたってことよ」

「どうして? リリネットは、私のこと好きだって言ってくれたんだよ? それも嘘だったの?」

「そんなことはないません。ただね、嫌がっているお友達に無理やりするってのはどうかと思うの」

まだ頭に『?』を浮かべるニルフィの頭に優しく手を置く。

「あなたのしたことは、ホントはずつと深い意味があつて大切なことなの。嫌がっている相手にそれをして……奪うつてことと同意義なのよ」

自分の雲行きが怪しくなってきたことにニルファイが不安そうに眉をよせた。

「普通なら、嫌われるってこともあるのよ」

「え？」

ニルファイの顔が恐怖に染まる。とんでもないことを仕出かしたことに、やつと気づいたようだ。

心がしぼんでいくような錯覚を受ける。氷水が直接背に流されたのだろうか。

「ち、ちが、私、そんなつもりじゃ……！」

「分かっているわ。だからね、ちゃんと謝りなさい」

「謝って、済むことなの？」

大切なものを奪われる痛みはニルファイもよく知っている。つい最近、奪われたばかりだから。それをやった相手を今でさえ心底憎んでいく。

それを同じものをリリネットから向けられれば、耐えることすらできそうにない。

「だからよ。あなたと東仙の場合は平行線だから。どっちも自分から歩み寄ろうなんてしなかったでしょ？ だから今はニルファイが自分から距離を縮めて、謝りなさい」

「それで、ダメだったら？」

「その時はアタシがたっぷり慰めてあげるわ！ キスの相手にもね！」

「それ言いたかっただけじゃないか？」

「外野、シヤラツツ黙れ」

ニルファイは考える。

好きという感情に自分はあまりにも有頂天になりすぎていた。それがなんなのか深く考えることもせず、持て余すだけ持て余して、結果、爆発した。

もっと知ろうとしていればこんなことにはならなかったかもしれない。

しかし今はそういった後悔が必要なのではない。

もう少しでリリネットが目を覚ます。ニルフィの超感覚がそれを如実に伝えた。

正直、顔を合わせるのも気まずい。もう逃げたいくらいだ。けれど、まだニルフィにはリリネットと仲良しでいたいという思いが残っている。勝手すぎて笑ってしまう。どの口が言ってるのだろう。

それでもだ。

ニルフィはリリネットのことが好きだ。今はまだどういった種類のそれは分からないが、大ききくなら把握できる。捨てたくないほど大切に価値があることも。

薄くりリリネットが目を開けた。

ニルフィはおずおずと、しかし、しつかりした声で、

「

思惑なんて黒いもの

藍染からの招集を受けたニルフィが、集められる部屋を目指してトコトコ歩く。渦巻き模様の棒付きキャンディを片手に、廊下をちびちび進む。

その後ろをグリーゼが付き添い、主人が三回に二回は間違える道順を正す。

「やつと今日が来たよ。待ちくたびれちゃった」

「……………ひと月が長かったか？」

「ーうん。長かった。この日のために私は強くなろうとしてたからね」

渦巻きキャンディを舐めながらニルフィの目には待ち焦がれる色があった。その間だけ見せた表情は、恋にいじらしさを感じる乙女のようにであり、あるいは獯猛な猟犬のような鋭さを見せている。

少女が道を進みながらくると回る。艶やかな黒髪が祝福するように舞った。

「今日だけ。私は今日だけのために、ここ一か月ずっとみんなと戦ってたからね……………ま、軸のウルキオラは失敗しないから、私は私で頑張るけど」

「……………無理をして目的を見失うな」

「うん、わかってるさ。そういえばグリーゼってこの前、死神さんと戦ったんだよね。どうだった？」

クルリと振り返り、後ろ歩きしながら己の従者を見上げる。

グリーゼはフム、と息を吐き、自分の考察を交えながら話す。

「……………俺が戦ったのは副隊長格の死神だったらしい。しかし卍解を習得していたな。副隊長でも実力は上だろう。ーが、エスパーダ十刃に比肩するかと問うならば、否だ。隊長格とどの程度力量が開いているか不明だがな」

「グリーゼはその人を倒したの？」

「……………殺しはしなかった」

「ああ、ちゃんと約束守ってくれたんだ」

その時の報告は忙しくて聞いていなかったため、なるほどと納得する。

あまり殺傷をしないようにニルフィは従属官フラシオンに言い含めてあった。彼らが暴れればシャウロンの起こした被害などつむじ風もいいところになる。救援係が火種を大きくしてどうする、というのがニルフィの弁だった。

「他には？」

「…… 残留した霊子からの推測だ。エドラドを倒した相手も、おそらく卍解を使ったはずだ。だがアネットのほうにも姿を見せなかったのを考えると、よくて相討ち。あの時現世にいた死神で卍解を習得していたのが少なくとも三人いた。だが脅威に成りえるのは隊長格だったという一人だろう」

「あー、たしかアネットもそんなこと言ってたね。『褒めて褒めてっ！』って抱き着いてきたから覚えてるよ」

「…… エスバーダエスバーダと比べての判断というだけで、従属官フラシオンならば倒せる力があるともみていい」

「ふうん。そう、なんだ」

ニルフィの中で大体の死神の強さが分かった気がした。藍染が警戒しているのは死神全体ではなく、おそらく特定のごく少数の死神だろう。その時に十刃エスバーダが必要になるのかもしれない。

相手が弱いとは思わない。

しかし従属官フラシオンを倒せるレベルならば、こちらの被害も覚悟しなければいけないだろう。

「…… なに、こちらもただで殺される奴などいない。主あるじはドンと構えておけ」

「そんなに威圧感のない容姿だけどね」

「…… 俺たちが後ろから盛大に殺気を振りまくさ。主あるじが『怖いかな？』と相手に聞けば、相手は否が応でも頷くだろう」

その光景を想像し、ニルフィは嘔き出した。たしかに自分がその相手なら即座に怖いと言う自信がある。

ただ、その冗談のおかげで少し心が軽くなった。

「まあ、そうだね。こんな言い方ってヒドイけど、たしかにただで死んでくれる人って、ここにはいないよ」

「…… ああ」

ニルフィは小さくなってきた渦巻きキャンディを噛み砕く。口の中に甘さが広がるのを感じながら棒を虚弾バラで焼却する。力とは、使い次第で結構便利な代物だ。

——そういえば、皆はこの戦いが終わったら……。

——どうするんだろう？

藍染の計画が仮に成功した時、破面アランカルは今後、どうやって生きていくのだろうか。

そんな疑問が、ふとニルフィの頭に浮かんだ。

バラガンは虚ウエコムンド圏の王の位を返してもらえるだろうか。スタークたちはまた孤独にならないだろうか。ハリベルは忠誠心の高さゆえに藍染に付いて行くのだろうか。

他の面々のことが頭に思い浮かぶ。

そして結論は、その時になってみなければ分からないということだ。

「このままが、いいなあ」

自分の願いが口からこぼれる。

単なる我が儘。叶わないような願望。絶対に変わるというのに、今というものがいつまでも続くことを望むのは、果たして無意味なことなのか。

「…… 全ての戦いが終わっても、主は一人にはならないさ」

かすかに驚きを顔に滲ませ、ニルフィがグリーゼを見上げた。

一番怖かった未来を否定してくれたからだ。

「ほんとうに？」

「…… ああ、本当だ。勝とうが負けようが、その未来だけは保証する」

「キミも、アネットも、グリムジョーも、リリネットも、ハリベルも、アールローも、バラガンさんも、スタークさんも、えっと、他にも…… みんな一緒？」

「…… 願いというのは欲張るようなものじゃない」

「う、うん。分かってるよ、それくらい」

「…… だが欲張るからこそその夢だろう。自分の力でそれを掴むために、強くなつたんじゃないのか？」

たしかにグリーゼの言う通りだ。もう好きな人たちが死んで欲しくないから鍛錬に力を注いだ。時には盛大に血を流すようなこともあったし、新技を使おうとしてそばを歩いていた東仙に誤射したこともある。

ほんの少しの自信は付いた。

「ありがとうね、グリーゼ」

「…… 考えて結論を出したのは主だ。俺は適当なことをのたまっただけだ」

自分には出来すぎた従者だとニルファイは思う。

そうしているうちに目的の部屋に辿り着いた。天井ほどまででありそうな、無駄に高くて大きい扉だ。

「…… 俺はそこら辺を散策している。終わったなら呼んでくれ」

「うん、ありがとう」

扉がひとりでに道を開けた。

主従は頷くと、それぞれ進むべき方向に足を踏み出す。

ニルファイは入ってすぐの階段を下りながら、隣の相手の表情を見ることすら難しい暗闇に眼を凝らした。中央には藍染が立っており、人の形をしたような石像に結界を施している。

「来たね、ニルファイ」

「遅れちゃった？」

「少し早いくらいさ。もう少しだけ待っていてくれ」

藍染を囲むようにあらゆる形の四角に切り取られた石材が置かれていた。ニルファイはまず最初にグリムジョーを探すと、予想通り後ろの高い所を陣取っている。そこに行こうかと思っただが、ふと視線を感じてそちらを見る。

見覚えのない破面フランカルがいる。十刃エスパーダではない。その従属官フランオンもここへは入ってこれないから、そうでもないのだろう。

中性的な少年の容姿をしている。じろじろとニルフィのことを無遠慮に眺め回してくる。軽く会釈するとそれを無視してその男はそっぽ向いた。

その反応に若干傷つきながら、ニルフィは適当な高い位置にある石材を選んで腰かけた。

来ていないのはウルキオラとヤミーだ。

足をブラブラさせながら待っていると、近い所にいたハリベルが声を掛けてきた。

「久しいな」

「うん、そうだね。最後に会ったのって三週間くらい前だっけ？」

「噂は聞いているが……。遠慮せずとも、いつでも私の宮に来ていいんだぞ。修練にならばいくらでも付き合っただけや」

「えっと、この前だっけいきなり押しかけちゃったから」

「だから遠慮はいらない。私でいいのなら力になるさ」

なんだろう、このイケメン。

「あはは、ありがと。じゃあ今度行かせてもらおうね」

ハリベルが目元を緩ませる。

「最初は驚いた。いきなりアヨンと戦わせてほしいとはな」

アネット經由の情報で、ニルフィはアヨンの存在を知った。ハリベルの従属官フランチオンたちの左腕を使って現れる怪物は、それ単体で並の従属官フランチオンを凌ぎ、むしろペットと称されながら飼い主よりも強すぎた力があつた。それがアヨンだ。

技術もへつたくれもないバケモノだったが、あれはあれで圧倒的な力に対抗する術を学べたのだから有意義だっただろう。

「おかげで私も多少強くなれたかもしれないね」

「多少、か」

ハリベルが呆れた口調で続けようとした時、扉が再び開かれる。

ウルキオラとヤミーがそこに立っていた。

「……来たね、ウルキオラ、ヤミー。——今、終わるところだ」

そう言った藍染が目の前の結界の上に『崩玉』を置く。崩玉によつて破面アラシカルとなったニルフィだが、いつ見てもそれはうす気味悪い気配

を発していると思う。

まるで、この世にあつてはいけないような。

ウルキオラが階段を下りながら藍染に訊いた。

「崩玉の覚醒状態は？」

「五割だ。予定通りだよ。尸魂界にとつてはね」

突如として崩玉から超高密度の霊圧が立ち上る。

「当然だ。崩玉を直接手にした者でなければ判るはずもない。そして恐らく、崩玉を開発して直ぐに封印し、そのまま一度として封を解かなかつた蒲原喜助すらも知るまい」

「なんだか結構重要なことを口にした藍染だが、彼はあろうことが、崩玉へと己の指を寄せる。」

崩玉は黒い糸のようなものを藍染の指に触れさせる。

「封印から解かれて睡眠状態にある崩玉は、隊長格に倍する霊圧を持つ者と一時的に融合することです」

部屋を異常なまでに高められた霊圧が震わせた。

発生源は崩玉。十刃たちもわずかながら反応を見せるほど。

「——ほんの一瞬、完全覚醒状態と同等の能力を発揮するということをね」

結界が破裂する。

人型の石像は表面から崩れ、中から新たな破面を生み出した。服を着ていない、そばかすのある金髪の少年だ。

藍染がその少年の容姿をした破面に尋ねる。

「……名を、聞かせてくれるかい。新たなる同胞よ」

少年はたどたどしく、けれどもしっかりとした言葉を発した。

「……ワンダーワイス………ワンダーワイス………マルジェラ………」

見たところ、それほど強そうではない。そして破面となつてからの記憶も新しいニルフィは、ワンダーワイスの知能がさほど高くないことに気づく。

悪戯小僧、という破面がかつていた。バラガンが暇つぶしに傘下に収めた、群にして個、個にして群という異例な存在だ。そのピカロ

たちもかつて十刃^{エスパーダ}であつたらしいが、他の破面^{フランカル}以上に集團生活が出来ないため落とされたらしい。

知能が低すぎるとは十刃^{エスパーダ}にならないとしてもそういつた弊害がある。

目ぼしいのは霊圧が普通より高い所か。まあ、ニルフィのように相手を惑わしている可能性もあるため、実力は一概に言えないだろう。よく理解は出来ないが、満足そうな藍染の顔を見ると、儀式は成功のようだ。

ワンダーワイスは下官たちに連れていかれ、それを見送った藍染がウルキオラに言った。

「ー」か月前に話した指令を憶えているね、ウルキオラ?」

「…… はい」

「実行に移つてくれ。決定権を与えよう。好きな者を連れていくといい」

「…… 了解しました」

「ああ、それと」

いま思い出したかのように藍染が付け足す。それを聞き、ニルフィは自分の口の端に笑みが刻んだのを感じる。

「ニルフィ、君は行くだろうか?」

「うん」

「頑張つてほしい」

無駄な言葉など並べ立てない。ニルフィにとって必要なのは、藍染が許可を出した、それだけの事実だ。

藍染は続けて視線を別の方向へと向ける。

その先のグリムジョーはさっきのニルフィの反応に難しい顔をしていた。藍染は構わず、訊く。

「君も一緒に行くかい? グリムジョー」

グリムジョーは考えるように虚空を睨み、そしてさほど時間を掛けずに頷いた。

「…… ああ」

「そうか。君も、頑張つてくれ」

これで話は終わりともいいうように藍染は部屋を去る。
十刃^{エスパーダ}たちも各々動き出し、渦はゆつくりと大きく回りだすこととなる。

この一か月、ニルフィはグリムジョーの顔すら見ていなかった。少しでも話したい。あの声が聴きたい。そう思うものの、グリムジョーは話しかける間もなく部屋を出ていってしまう。彼のあとを追ってニルフィもすぐに扉を潜った。

しかし立ち塞がるようにして現れた破面^{アランカル}がいたことで、足を止める。

新しい第6十刃^{セスタ・エスパーダ}となったルピ・アンテノールがこの男だ。さきほど彼も自分から今回の任務に志願したので覚えている。

それに関しては何も思わない。ニルフィにとって大切なのはグリムジョー個人であり、称号などオマケでしかないからだ。新しく誰が据えられようと、さほど重要なことではなかった。

「ルピさん、だよ。私になにか用かな」

「それならキミがニルフィネス？」

「そうだよ。どうせならニルフィって呼んでよ」
「ふうん」

ルピはニルフィのことを無遠慮に観察してくる。少女は嫌な顔一つせず、ただ相手の意図を測り兼ねていた。

すこし視線をずらすとグリムジョーの姿はもう無い。まもなくして、口を開いたのはルピのほうだった。

「キミみたいな奴にグリーゼたちはゴマ擦ってるのかあ。昔の十刃^{エスパーダ}もいまじや乞食なみに惨めじゃん」

ニルフィは聞き間違いかと思って相手の顔を伺う。そしてルピの顔に張り付く嘲りは見間違いようもない。

少女はかすかに柳眉を寄せる。

「グリーゼやアネットはそんなんじゃないよ」

「どおかな。もしかしたらキミの『7』の数字だけにしか興味ないんじゃない？ あとで簡単に奪えるようになって。うわあ、そう考えると狡いなあ」

「そんなことないよ。だから、それ以上あの二人の顔に泥を塗るような言葉、言わないで」

「なあに必死になつてんのさ。もしかしてあいつらの庇護が無くなるのが怖いのか？ あいつらも同じくらい必死に媚びてたりしてね。……あ・ごめーん。キミも同じくらい他のエスパーに媚びてたねえ」

ニルフィは悟られないように奥歯を噛み締めた。アネットとグリーゼが侮辱されたことが我慢ならない。しかしここで怒ってはルピの思う壺だと、血が滲むのにも頓着せず両手を握りしめ、耐える。「私のことはいくらでも悪口言つて構わないよ。……でも、でも、あの二人をけな貶すことなんかしないで」

毅然としてルピを見上げた。

それを面白くなさそうにしたルピだが、すぐに口元に酷薄そうな笑みを浮かべ、どこまでも純粹な少女を傷つける。

「そういうえばグリムジョーとも仲良かっただろ。ひよつとしてさつきも追いかけてようとしてた？」

「……それがどうしたの？」

とうとうグリムジョーまで引き合いに出されたことで、ニルフィは目を細める。

途端、ルピが哄笑した。

「どうやって取り入ってるんだい。もしかしてその身体を売って、犬みたいに腰振ってるの？ それにアイツが食いついた？ アハハハハッ、もしそうなら傑作だ！ アイツつてば性格どころか頭も獣同然つてことだからね。だから何も考えずに現世に行つて、腕なんか斬られちゃうんだ。ああ、まったく。——馬鹿すぎて笑える」

腹の奥がだんだんと冷えていくようだ。今すぐにでも、こんなくならないことをたまう相手の口を引き裂きたい。大切な人を貶められるのが、ニルフィは悔しくて、そして悲しかった。自分から挑発し

ようとしても、その手合いに慣れた相手からはもつとひどい言葉を貰ってしまう。

今すぐここを離れようとニルフィは思った。

体を反転させ、グリーゼを探そうと一步踏み出そうとし、

「特にさあ、アイツの従属官フランオンだった奴らがひどいよ」

ニルフィの脚が止まった。

「ただでさえ最下級大虚ギリアンってだけでも他の奴等よりカスなのに、みつともなく獣君にくつつきまわってさあ。見苦しいのなんのって。けっこう前からいた奴等だけど、やっと死んでくれてー清々せいせいしたよ」

もう、限界だった。幼い精神ではもはや我慢などできない。

右手に霊子の剣を出現させ、相手の喉笛を狙った正確無比な一撃を放つ。その速度に驚いた様子のルピ。すぐに彼も右手を鉤爪のようにして伸ばす。

空気が弾けた。

肉を切断する、あるいは抉るような音は響かなかった。

それもそのはずだ。ニルフィの甲霊剣インモルタルは大剣の刃によって止められ、ルピの右手は横合いから掴まれたことで勢いを失っていた。

「……そこまでだ」

「グリーゼ?」

「……出過ぎた真似だったか?」

「ううん。……ごめんなさい」

一瞬にも満たない間に止めに入った従属官フランオン。その姿を見てニルフィの赤く染まっていた視界がもとに戻っていく。みつともないところを見せてしまったのが恥ずかしかった。

しかしルピは止めるつもりはないようだ。

それをグリーゼが咎める。

「……そこまでだと、言っただけだ?」

「ちっ、放せよ。ボクはNOセス6ダだぞ」

「……だからどうした」

「はあ?」

「…… 十刃^{エスパーダ}だから多少なりとも敬えなどと言うつもりか、ルピ・アンテノール。その台詞^{セリふ}は今の十刃^{エスパーダ}でも貴様しか口にしないことだ。そして俺が敬意を示すのは、俺より強い相手だけだぞ」

ルピの目元が引きつった。グリーゼが完全に格下^{かくげ}を相手にするよ
うな態度を取っているからだろう。

そんな相手のことなど気にせず、グリーゼは大剣を背に戻す。そこでニルフィは気づいたが、グリーゼは彼女を背に庇うような立ち位置を守っている。

「…… こちらの主^{あるじ}にくだらん戯言^{ぎげごと}を吹き込まないでもらおうか」

「昔と違って本当に従者^{じゆうしや}って感じだな」

「…… 従者が主人のように振る舞っては滑稽^{かじ}だろう」

「キミはその主人の座でも狙^{ねら}ってるのか？ そうでもなきや、
十刃^{エスパーダ}落ち^{フラシオン}が従属官^{じゆうじくわん}の真似事^{まねごと}なんて、ねえ」

ルピの言葉で疑心暗鬼^{ぎしんあんき}になりそうなニルフィは、怯えた目でグリーゼを見上げる。彼に裏切られたら立ち直れないかもしれない。怖い。けれど無意識にグリーゼの死覇装^{しはそう}の裾^{すそ}を握^{にぎ}っていた。

それにグリーゼは背中越しに振り返る。苦笑^{くせう}をわずかに滲^{にじ}ませるように肩をすくめた。

「…… つまらん上にくだらない問いだ。俺もアネットも十刃^{エスパーダ}の地位^{ちゐ}に未練^{みれん}はない。ただ従^{したが}うと決めただけだ」
そして、

「…… 仮に数字^{すうじ}を得るならば、もっと簡単な方法がある」

「なんだよ。それってどういう」

「…… ルピ・アンテノール。俺がいまここで貴様^{あなた}を叩^{たた}き潰^{つぶ}せば、
NO. 6^{セクス}の座^{たやす}は容易^{たやす}く手^てに入るということだ」

重力^{じゆうりき}が急激^{きゅうげき}に増した錯覚^{さくかく}。

グリーゼがどんな表情^{へいしやう}を浮かべているのか、背後^{せき}のニルフィでは知
りえない。しかし正面^{せうめん}に立つルピは冷や汗^{ひやあせ}を流し、懸命^{けんめい}に重圧^{じゆうあつ}に耐え
ていた。

数秒^{すうびょう}もすると空気がもとに戻った。とぼけたように、グリーゼはも
う一度肩^{かた}をすくめる。

「……冗談だ。普通に考えて従属官が十刃フランオン エスパーダに勝てる訳がないだろう。なあ？」

ルピに対して興味を失ったように、グリーゼがニルファイを見下ろす。

「……無駄話をし過ぎた。予定も押しているなら、一度宮に戻るか？」

「うん。そうだね。ばいばい、ルピさん」

去り際、ルピは忌々しそうにニルファイを睨んでいた。睨みたいのはこちらだとニルファイは心中で毒づく。思い出ただけでどす黒い感情が胸を支配する。

しばらく歩いた頃、ようやく落ち着いてきた。

それを見計らったかのようにグリーゼが新しい飴をくれる。チュツ○チャプスを口に放り込み、ゆっくりと息を吐く。カシス&レモン味だ。

「ごめん」

「……なぜ謝る？」

「だって、もう少しで私がルピさんのことを殺しかけたから。そうになったらキミたちにも迷惑が掛かるでしょ？」

「……事前に止めたからいいだろう。最初からあの場にはいなかったが、主がなにを言われたかは大体の想像がつく。仕方のないことだ」

「あはは、慰められちゃった。でも付いてきてくれたのがグリーゼで良かったよ」

「……アネットならキレて暴れていただろうな」

グリーゼと同じような止め方をして、アネットはそれに加えて掴んでいたルピの腕を灰にするぐらいはしていた気がする。冗談に思えないのが彼女の怖い所だった。

ひとしきり笑うと、ニルファイは俯いた。

「ねえ、グリーゼ」

「……なんだ？」

「——ううん。やっぱり、なんでもない」

訊こうとして、止めた。『キミは裏切らないよね?』、なんて。そんな質問をしてしまえば、今度はニルファイがグリーゼのことを侮辱する行為となる。

グリーゼだけでなく、他の知り合った面々も大切だから信じている。

これが揺るがないからこそこの一か月を過ごしてきた。

「でもね、キミのことは頼りにしてるよ」

「……………身に余る光栄だな」

少しばかりおどけた様子でグリーゼは仰々しく一礼する。

それを見て楽しげに笑うニルファイは「……………」どうやってルピを殺そうかと心の裏側で考えていた。

以前の現世の侵攻の時のように、それからしばらくして虚夜宮^{ラス・ノーチエス}から姿を消した破面^{アランカル}たちがいた。彼らは現世へと向けて歩を進める。

第6十刃ルピ・アンテノール。

プリハロン・エスパーダ
十刃 落ちグリムジョー・ジャガージャック。

ワンダーワイス・マルジエラ。

フランシオン
従属官グリーゼ・ビスティール。

そしてその主人、第7十刃ニルフィネス・リーセグリンガー。

思惑が交差する。されど止まることはない。

着実にあらゆる魔の手は伸びていた。

重さと価値は比例しないらしいよ

待ち合わせ場所となった広間にニルファイがグリーゼを引き連れてやって来た。

集合時間まではまだ時間はあるが、他の面々はすでに集合している。ルピ、ワンダーワイズ、グリムジョー。それにいまやって来た二人を含めた五人が、現世へと行くこととなっている。

「グリムジョー」

「なんだよ」

トテトテと駆け寄ってきたニルファイを呆れたようにグリムジョーが見下ろす。久しく会っていないとはいえ、その態度は今までと変わらないように見えた。

鋭さのある視線に堪えた様子もなく、ニルファイが胸の前で両手を握る。

「私、頑張るよ。ちゃんと戦ってちゃんと勝って、それで、負けたりなんかしない。殺せそうだったら殺すし、キミの満足できる結果を残すよ」

「……………そうか」

グリムジョーの顔の苦さが増した。それがどうしてかニルファイにはわからない。別に褒めてもらいたくてこの任務を成功させるわけではないが、グリムジョーの反応の意味がニルファイには察せなかった。

何気なく隻腕に目をやる。なにかを耐えるように握りしめられている。

自分はなにかの粗相をしたらだろうか？

青年の顔色を窺うように下からのぞき込んで、目を逸らされた。「集まったんなら早く行こうよお。どうせ五分も十分も変わらないだろ?」

痺れを切らしたルピが空間を叩き、ガルガンダ黒腔を出現させる。ウエコムンド虚圏にも劣らぬ霊子がそこから噴き出した。

待つことすら面倒とでもいうようにルピが空間の割れ目へと入っ

て行ってしまおう。ワンダーワイズも体を揺らしながら歩いて行き、危なっかしい彼を追ってニルフィに断ってからグリーゼも闇の奥へ消えた。もしかしたらグリーゼは気を遣ってくれたのかもしれない。

亀裂の前には少女と青年がいる。

いざ入ろうとする前に、グリムジョーが言った。

「なあ、てめえはどうして修練の真似事なんてやってたんだ？」

「え？」

「今まで……いや、あの時までそんなことやってなかっただろ。なんであんな事してたんだよ」

グリムジョーの言葉を噛み砕き、そしてニルフィは意味すら理解する。それに要した時間は一秒にも満たない。現実の時間では即座ともいえる速さで答えた。

影一つない笑顔で、言った。

「もちろん、キミのためだよ」

「……ッ！」

グリムジョーが奥歯を砕かんばかりに噛み締める。

それを見て、ニルフィが慌てて言い募った。

「だ、大丈夫だって！ ちゃんと私だって戦えるよ？ 何度も何度も何度も何度も、ずっと戦って経験積んだし、技術だって最初の頃よりもぐんと上手くなったから。たった一か月だっていつでも質に気を付けたし、ひどい怪我した時もあったけど、諦めたりなんてしなかった。殺せって言うなら殺しに行けるし、キミのためなら私はなんでもしてあげられるー」

焦燥によって止まらなくなりそうな言葉の羅列が押しとどめられた。

グリムジョーがニルフィの頭を乱暴に撫でる。それ以上、ニルフィは何も言えなかった。

「これが終わったんなら、もうそんなこと、言うんじゃねエよ」

「……？」

一言ずつ区切るように染み込ませるような声音。

どういう意味かを尋ねる前に、グリムジョーは足早に黒腔ガルガンダの中へ

と歩いて行ってしまう。

「……………」

なにがいけなかったのだろう。グリムジョーにとって悪い部分は無かったはずだ。話したことはすべて本心だし、心に仕舞う思いはそれ以上の強さを秘めている。グリムジョーのためになら何だつて捧げられるという意思を、彼が気付かなかつたはずがない。

「まだ足りないのかな？」

悩んでいるうちに亀裂が閉じようとする。

慌ててニルフィはその間に滑り込み、先に行つた面々を追いかけた。拳ほどの簡易すぎる足場を次々と造りだす。野兔のようにその上を飛び跳ねていき、幸いにもすぐに追いつく。

グリムジョーを問い詰めようかと思つたが彼の表情を見て止めておく。考えるような表情で歩いていたから。

そしてそうするよりも前に、最初に先頭を進んでいたルピがニルフィの隣にやって来た。

「なあに話してたの？ 愛の誓い？」

「べつに」

「うわ、つれないなあ。ほらほら、ボクに媚びてみなよ。それで今までこのことを水に流してあげるよ」

ルピが服に隠れた『6』の数字を見えるようにする。

隠す気もなくニルフィが軽蔑の視線をルピに投げかける。

「媚びてなんかないし、なによりキミとは仲良くなりたくない。私は、私の大切な人を馬鹿にする相手が嫌いだから」

「なにそれ。むしろその大切な人がキミのこと馬鹿にしてるかもよ？」

「それならそれでいいよ。私のことをいくら貶しても、それでみんなに害がないなら別にいいからさ」

とことん自分に無頓着なニルフィは頬に掛かつた黒髪を後ろに流す。

他人を優先するあまり、彼女はあまりにも空虚だった。自分の体すら価値を見いだせていないだろう。むしろただの有能な道具とし

て見ている節すらある。

だから気が付かない。普通なら見えることも、ニルファイには目の前にあるのに理解すら困難であることを。

「ああ、くっつからない」

「キミが勝手に価値を付けないでほしいな」

「いや、ホントにくっつからないよ。ゾマリも大概だったけど、キミの『愛』ってのも重すぎる。第7セブティマ・エスパルダ十刃ってこんなんばつかなのかなあ、まったく」

ルピが首を振りながら言った。

重い？ それはどういうことだろう。ニルファイはただみんなと仲良くなりたいだけだ。そこに差なんて無いし、相手が望むのなら自分の肢体ですら捧げるつもりだった。さっきのグリムジョーに言ったように。

自分から離れないでいてくれるのなら、文字通りなんでもするつもりだ。

それを聞くと、ルピが嘲りを込めて口の端を吊り上げる。

「それが重いつて言ってるんだよ馬鹿。でもなるほどねえ。グリムジョーが未練がましくキミを手放さないのは、そのなんでもするつて言葉に縋すがってるからなのかなあ？ もしそうならクソ変態じゃん。家畜小屋にいったほうがいいんじゃない？ そのほうが生産的だろ」

「…… 黙れ」

「ん？」

「もうそれ以上、くだらない言葉を吐かないで。耳障り」

「言わせてるのはキミだろ」

「言葉を並べてるのはキミだけどね」

太陽のような色でありながらどす黒く濁ったような瞳でルピを射抜く。

面白くなさそうに鼻を鳴らしたルピは、すぐに前に進んでいった。

ニルファイはドロドロとした心を落ち着けながら思考を巡らせる。

あのルピの余計な言葉のせいで、胸の中に棘が刺さったようなむずがゆい感覚がある。

望んだものを得られるのがなによりも大切なことではないのだろうか。

それをニルファイが与える側となり、どちらにも幸せになる……なにかその考えに違和感があつた気がするが、それを知る前に黒腔ガルガンダが再び裂けた。

記憶に鮮明に残っていた空気がニルファイの頬を撫でた。

その穴の前でニルファイはグリムジョーの隣に立ち、彼の顔を見上げる。目は合わせてくれない。どうやら答えを得るのは時間が掛かりそうだ。

「……死神か」

グリーゼが地上を見下ろしながら呟く。

そこでニルファイは気づいたが、どうやら以前出た時のような上空ではなく、すぐ下に森が広がっているようだった。

そして人間ではありえない霊圧の高い存在が数人。

どうやらドンピシャな場所に出てきたらしい。

「へえ、あれぐらいの霊圧の奴なんて虚夜宮ラス・ソーチエスにもいるけどねえ。けどアレが6番さんの言つてた『尸魂界ソウル・ソサエティからの援軍』じゃないの？ ね？」

確認するようにグリムジョーを見たルピだが、すぐに笑いながら言い直した。

「ア・ごめーん。『元』6番さんだっけ」

ニルファイがその物言いに眉をひそめた。

しかしグリムジョーが顔色ひとつ変えなかったため口を閉ざす。

「あの中には居ねえよ。俺が殺してえヤローはな」

「あつ、グリムジョー!?!」

言うが早いのか、グリムジョーは即座にある方角を目指して空気を蹴った。

追いかどうか迷ったニルファイだが、グリーゼが目で静止してきたためにかろうじて踏みとどまる。自分の目的のためにはここを離れる訳にはいかない。

名残惜しそうに幼い顔を悲しみに染める。

そして上げかけていた腕を下ろしかけたとき——凶刃がその細首に迫った。

黒腔ガルガンダが突如として虚空に現れたことに、現世にやってきていた死神たちは動揺を隠せなかった。

十一番隊第五席、綾瀬川弓親あやせがわゆみちかが目を見開く。

「破面アラシカル……!? そんな、早すぎないかいくらなんでも……!?」

藍染が本格的に動き出すのにはまだ時間があるはずだ。

日番谷は亀裂の中にいる人数を数え、そして考える。

——五人……。

——仮エスパーダに十刃でもまだ半分。

——斥候か？

考えていても始まらない。

「確かに早すぎるが……。理由を考えているヒマはなさそうだけ」

むこうは日番谷たちを認識すると、各々が反応を見せる。すぐに立ち去らない所を見るとここで交戦するつもりだろうか。しかしすぐに行動はせず、なにやら話している。

その隙に日番谷が周囲に指示を出す。

「松本は戸魂ソウル・ソサエティ界に連絡を入れろ。綾瀬川と班目は……」

「すぐに戦やるんでしよう？ 準備万端つすよ」

「ああ、それでいい」

死神の姿となった十一番隊第三席、班目まだらめいっかく一角が好戦的に三白眼をぎらつかせた。

同じく日番谷と弓親も死神としての姿を晒し、それぞれが始解を済ませる。

まだ破面アラシカルたちは戦闘態勢に入っていない。

右から、童女の姿をした破面アラシカル、そして不良風の青年と中性的な男となり、次には大剣を背に引っさげた少年と偉丈夫だ。

偉丈夫には覚えがある。なんだか残念さがひどい美女と一緒に、

シャウロンたちの討伐を邪魔されたのだ。しかしあの美女と同等、もしくは阿散井恋次を一撃で戦闘不能にした手腕から、実力的には上の存在かもしれない。

——つってもな……………。

日番谷は一番右へと視線を動かす。

黒崎一護と交戦したらしい少女がその先にいる。

幻影と光による攪乱かくらんで場を引つ掻き回すらしい。能力の厄介さでいえばこちらが上だ。相手の容姿に何も思わないわけではないが、一番最初に仕留めたほうがいいだろうと判断する。

ここまで一秒。

不良風の破面アランカルはどこかへと行ってしまった。それを止める余裕はない。これで数が同じになったことを先に喜ばねば。

手早くほかの面々に指示し、構える。

日番谷は飛び立ち、すぐさま肉薄。相手はこちらへ目を向けてすらない。

他の破面アランカルは一角たちが止めるだろう。

好機として斬魄刀を突き出す。射し込めれば、あとは凍らせてどうとでもできる自信があった。

その距離があと十センチになった時——壁が現れた。

正確には幅広の大剣の腹。

顔の下半分を蟲あぎとの罅を横した仮面に覆われた男が、少女の背から腕を回して日番谷の斬魄刀を受け止めていた。

その偉丈夫の足止めとして向かっていった一角。彼が下の地面に墜落した音が耳に届く。

「そう上手くいくとは思ってなかったけどな。——十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ」

「……………名乗るのなら斬りかかる前に名乗れ」

まるで枝きれのように大剣が振り回された。

弾かれるようにして日番谷は距離を取り、わずかな間のにらみ合いとなる。

グリーゼ、と以前呼ばれていた破面アランカルだ。先ほどまで少女とは反対

の方向にいたというのに、彼女が襲われたとみるや真っ先に動き、そして守った。まるで騎士のように少女の後ろで控えている。

従属官というのが本当ならーあの少女、ニルフィネスとグリーゼは主従関係になるのだろう。

幸い一角は斬魄刀越しに叩き落されただけのようで、すぐに戦線に復帰した。

「大丈夫かい、一角？」

「ああ、問題ないぜ」

藤孔雀ふじくじやくを手にした弓親に一角が頷く。

「どおする？ 一人に相手一人付けるの？」

「…… さあな。主あるじはどうする」

「適当でいいんじゃない？ あの人たちが自分から相手したい人いるみたいだし。危ないから、ワンダーワイズ、だよな？ 一緒に少し遠くで見てるよ。私の相手の人はグリーゼがやっちゃって」

「…… 承知」

破面アラランカルたちが空間の裂け目から出ると、黒腔ガルガンダがゆっくりと閉じた。

「おいで、ワンダーワイズ」

「マー…… アウー……」

「なんだよソイツ。ボクが話しかけても何も反応しなかったくせにさあ」

金髪の少年の姿をした破面アラランカルがニルフィネスの言うことを素直に訊いたことに、中性的な男は不服そうだった。

その鬱憤を晴らすためのように、自分の前に現れた一角と弓親を見据える。

弓親が尋ねた。

「君も、十刃エスパーダか？」

「そーだよ。名前はルピ。階級はNO.6セスタ」

破面アラランカル、ルピは腰辺りの服をずらし、『6』の数字を見せつける。

一方、日番谷と、合流した乱菊はうかつに動けなかった。大剣を携えた巨漢が背後の子供たちを守るようにして立ちはだかったからだ。

——俺たちが悪者みたいじゃねえかよ。

構図的には間違っていないだろう。

しかし、しばらく睨み合いが続いたまま事態は進展しない。グリーゼの背後で子供たちが飛んでいる蜻蛉とんぼを捕まえようと躍起になっているのが、なんとも戦場とは思えない空気を醸し出していた。

「攻めてこねえのかよ?」

「……その台詞をそのまま返そう。こちらは侵略者なんだろう?」

その排除に動かなくていいのか?」

「簡単に言うなよ。この前の奴らとお前の実力が一緒なんて思っただけからな」

「……だが、そちらが攻撃しない限り、こちらから攻撃する意味はないぞ」

「どういう意味だ」

「……言葉は銀。沈黙は金。俺からは特に言うことが無いな」

このまま睨み合いを続けてもいい。しかし少しでも相手の底を見極めるのがいいだろう。

己の副官に呼びかける。

「松本」

「なんですか?」

「援護しろ」

返事を聞く間もなく日番谷がグリーゼとの距離を縮めた。それを困ったような顔で見たグリーゼが、仕方なくともいうように大剣を動かす。

だが、

「唸れ『灰猫』」

突如として下方から襲い掛かって来た灰の奔流に片眉を上げる。

乱菊の始解である。あの灰に触れれば、その部位を切り裂くことができるのだ。

インモルタル
甲霊剣

霊子の刃を構成させた大剣が灰へと振り下ろされる。斬撃ではない。剣風が暴風のように荒れ狂い、灰を散らす。

その結果に日番谷は内心驚くものの、隙を晒した相手を待つつもり

もない。コンビネーションは完璧。相手が大剣を振り下ろしたタイミングを見計らい、今度は猛烈な冷気をグリーゼに放つ。

振り払おうとしたグリーゼだがもう遅い。

「……氷か」

秒刻みに氷の像と化し、遂には固まってしまった。直接攻撃系と『氷輪丸』はそれなりに相性がいいのだ。すでに限定解除も済ませている。正解ではないとはいえ、十分な威力を込めたと日番谷も思っている。

ワンダーワイスと蜻蛉の見せ合いっこをしているニルフィネス。彼女に対して日番谷が言った。

「どうする。お前も戦うのか？」

「——？ どうしてかな。私が戦う必要性なんて、これっぽっちも感じてないんだけどな」

「なんだと」

「私はね、キミたちの相手をグリーゼがするように言ったんだよ」

ビキリ、と音を立てて氷像にヒビが入る。それはだんだんと大きくなっていき、10センチほど厚みがあったはずの氷の層が剥がれていく。

半ば予想していた。しかしさすがに、フランゾン従属官レベルが無傷で出てくるとは思っていなかった。

「ねえ、なんですぐに抜け出さなかったの？」

「……空中に浮かぶ大男の氷像というのも、なかなかユーモアがあるように思わないか？」

「全然」

「………そうか」

素で返されたことで若干グリーゼが落ち込んだ。体を張った芸がウケないと堪えるのはどの世界でも一緒のようだ。

破裂音がしたことで日番谷はそちらを見た。

弓親がルピと戦っており、そしてどうやら押されているようだ。額から血を流している。

「だーからア、一対一じゃ勝ち目ナイって言ってんじやーん。わかん

ないの?」

「……うるさいッ」

ルピが傍観を決め込んでいる一角を促す。

「キミからも何か言ってるやんなよ。そろそろホントに殺しちゃおうよ?」

「二対一は趣味じゃねえ」

「あアッそー! めんどくさア」

彼にとって歯ごたえがないものはつまらないのだろう。

呆れた物言いのルピは、ある意味で拮抗となっている日番谷たちに目を付け、グリーゼに提案した。

「グリーゼ! そっちの子たちもボクに譲ってよ! こいつらウダウダめんどいからさ、一気に四対一でやろーよ。——ボクが解放して、まとめて相手してあげるからさ」

そうしてルピは、左わきに挟まれた鞘から、己の斬魄刀を引き抜く。グリーゼは主人に意見を伺い、是と返ってきたことで傍観に徹することにした。

それよりも、日番谷はルピの行動に頭の中の警報が大音量で鳴るのが感じられた。

斬魄刀解放。

かつて、シャウロン・クーフアンも使った奥の手である。ルピの動きからシャウロンのような最下級大虚ギリアンより上の存在だとわかる。なにより十刃エスパーダだ。それが解放をおこなったら、勝てる保証はあまり無い。

「させるか!」

覚悟を決め、解放させるのを止めようとする。

出し惜しみは無しだ。

「一―卍解」

だいぐれんひょうりんまる
大紅蓮氷輪丸

日番谷の体に氷で構成された、竜のような羽と尾が生まれた。速度が一気に加速する。

しかし間に合わない。

「縊れ『葛嬢』」

ルピから噴き出した霊子の奔流が日番谷の視界を遮った。攻撃方法を变えるために斬魄刀の構えを直そうとする。その時、煙幕を貫いて木の幹のような物体が現れる。

かろうじて、それを羽で防御する。すぐに勢いは止められずに背後へ強引に後退させられるが、止められないほどではない。

「……どうした、こんなもんか？ 解放状態のためえの攻撃ってのは」

「ハハッ！ よく防いだね！」

煙の奥のルピの声は挑発されたにも関わらず明るい。

「……でも正直止められるとは思ってなかったな。ちよつとショックだよ。意外とやるもんだね、隊長クラスってのは」

シルエツトが浮かび、そして晴れていく。

歪んだ口元がその隙間から覗いた。

「でもさ、もし今の攻撃がー八倍になったらどうかなア？」

そこにあつたルピの姿は、上半身が鎧のようなものに覆われ、背中に八本の触手が生えた円盤が形成されていた。

その異形とも呼べる姿に動揺を隠せなかった日番谷。殺到した残り七本もの触手が体を打ち据え、日番谷の体は森の中へと墜落していった。

「ほら、これが飴玉。あーんして」

「……うー」

素直に口を開けたワンダーワイズに飴を与え、自分も小袋から取り出したものを口に含む。蜜柑味だ。柑橘類の爽やかな香りが鼻を通り抜けるようだった。

「ちらりと、戦闘区域に目をやる。」

最初に自分に斬りかかって来た少年が落ちていくところだ。

「言ったろ？ 四対一でいこうよ……ア・ごめーん。四対

八、だっけ」

自らの力に悦に入つたルピが触手と共にそう言い放つた。

どうやらあの触手は限界はあれど伸び縮みし、しなやかな強靱さがあるようだ。けれどなんとというか。ニルフィはアローロニーロも同じような技が使えることを思い出す。たしか彼の場合は八本どころが数百は一度に操れると自慢していた。解放すれば三万の虚ホロウの力を使えるという宣伝文句は伊達ではない。

ニルフィはグリムジョーの行つてしまった方向を見やる。

情けないとは思ふものの、眉が下がつてしまうのは止められなかった。

グリムジョーは向こうで黒崎一護と交戦しているようだ。そして霊圧の揺れ方からして、戦闘での高揚と一緒にケガをしていることも知れる。一護の異常な霊圧の高まりの結果だろう。

「……大丈夫、かな？」

こんな心配をしてはグリムジョーに失礼だ。そう思つても、グリムジョーが傷ついていることがどうしようもなく悲しかった。

そしてそれをやった相手に、怨恨にも似た殺意を覚える。

「つと、冷静に冷静に」

ニルフィは首を振つて邪念を振り払う。ここは戦場だ。一時の気の乱れで、容易く首が飛んでしまうかもしれない。

……それもまあ、護衛者ボディーガード顔負けの完璧さで守ってくれるグリーゼがいるから大丈夫に思えるが。

「……主あるじ」

「うん、わかってる。自分の感情だけであつちに行つたりしないよ」

安心させるように微笑む。それを見て、グリーゼは言葉を連ねなかつた。

「マー」

「どうしたの、ワンダーワイス？」

ワンダーワイスの頭を撫でながらニルフィが優しく尋ねる。彼はニルフィに懐いてくれたようで、戦っている場所に入つていくなどか、そういつた忠告に頷いて素直に守つてくれていた。

「……ウゝ、ラー……」

「おー？ うー？」

「イアー……クウオー」

「みゅー、みゃゝ」

子供同士にしかわからない謎の会話をし始める。

事前に藍染から、ワンダーワイスは知能などそういったものが欠落していると教えられていた。どうすればそうなるのか分からないが、どうやらワンダーワイスは藍染からしてみればとっておきらしい。もしかしたら言動はこうでも最上級大虚ヴァーストローデかもしれない。

とはいえ、ニルファイにとって精神年齢が自分よりも下の存在と出会うのは初めてだった。

背伸びしたがりと笑われてもいい。ちよつとだけ姉の真似事をし、ワンダーワイスの世話をしていた。

それを片手間に戦況を確認する。

ルピが背中中の円盤を回転させて、触手を竜巻のように振り回していた。それによって残った三人の死神たちは押されているようだ。まだ戦えそうだが、その結果にニルファイはがっかりする。

「なんだ、話んなんないね。キミたちホントに護廷十三隊の席官？ つまーん、ないっ！」

そして一方的な甚振りが再開された……。ように見えて、それは違おうとニルファイは森の中へと目を向けた。

空気中の霊子がだんだんとある一点から塗り替えられていく。

それは奇しくも、否、必然的に日番谷が落とされた地点からだ。ルピは初撃で仕留めたと思っっているようだが、優秀な探査回路ペスキスを持つニルファイはまだ日番谷が行動可能だと分かる。

そしてやりたいことも、おそらく予想通りだ。

「あはっ」

ニルファイの口から楽しげな笑い声がひとつ漏れた。

それに気づいたグリーゼは黙認し、ワンダーワイスは不思議そうに少女の目をのぞき込む。

戦況はそこで急展開を迎えたようだ。

三人の死神が触手によってついに捕えられた。

ルピは乱菊という女の死神を目の前に持つてきて、まさに悦に入つたネコなで声で話しかける。

「おねーさんさア、やーらしい体してるよねえ。いーなあ、セクシいなあ。……ボクと同僚なんてあんなぺったんこなのに」

「余計なお世話だよっ」

「……たとえば成長の見込みが砂粒ほどなくとも、その言葉は失礼というものだぞ、ルピ・アンテノール」

「せ、成長するもん！ アネットやハリベルみたいになるもん！ グリーゼの馬鹿！」

泣き声に近い言葉を発する外野を無視し、ルピが乱菊を捕えている触手を思わせぶりに近づかせる。

「ああ、もう。死神さんのこと」

触手の先端から、万遍なく鋭い棘が生えた。

「穴だらけに、しちやおつかなあ~~~~」

待ったを掛ける暇もなく凶器が乱菊へと振るわれ~~~~その触手が紅の斬撃によって半ばから断ち切られた。

空気からにじみ出るようにして彼は現れる。

現れたのは着流しに下駄、目深に被った帽子と、それとなく胡散臭さを上長させるアイテムを身に着けた男。

「いやア~~~~、間に合った間に合った。危なかったっスねえ~~~~」

「~~~~。……誰だよ、キミ」

興が削がれたことでルピが不機嫌そうに男を睨む。

しかしニルフィはその男のことを知っていた。そしてその登場にかすかに笑みを零す。

飄々とした様子で、男が軽く頭を下げる。それとなくフレンドリー、しかし右手に斬魄刀を持っていなければなお良し。

「あ、こりやどーも。ご挨拶が遅れちゃいました。——うらはらきすけ蒲原喜助。浦

原商店ではない駄菓子屋の店主やっています。よろしければ以後、お見知りおきを」

インベーダーゲーム

浦原が名乗った時、その背後に右手を伸ばしたワンダーワイスが現れた。

それにいち早く気づいた浦原は紅姫を振るう。紅の衝撃が少年の右腕を弾き飛ばし、彼らの距離を開ける。

ワンダーワイスが楽しげに声を出す。

「アハ！」

「……へえ、随分変わったヒトがいるじゃないスカ」

「アーーーーー」

「ッ！」

左腕を引き絞ったワンダーワイス。それに警戒を示した浦原は斬魄刀を振るい、ギリギリで同じような威力の攻撃をして対処する。そう。もうすでに攻撃が行われたあとだ。初見で虚弾バラの速度を見切れるのはかなり困難なことである。

服のところどころにほつれを作った浦原が空中を掛ける。

今度は自分が距離を取ったことで浦原が冷や汗が首の裏を伝う。

「ふう〜、いやア、ビックリしー」

その首を狙うような手刀が音もなく空気を薙いだ。

帽子を被ったまま頭部が舞う。下手人のニルフィはその結果になんの反応も示さず、すぐに見当違いの方向に目をやった。

そこに、さつき首を飛ばしてやった浦原が立っている。

「それ、どんな手品？」

「いやいや、いきなりでビックリして心臓止まるかと思いましたよ。君みたいな可愛いお嬢さんとの久方ぶりの再会だから、嬉しいんすけどねえ。まさかいきなり首を狙われるとは……」

「ごめんなさい。不審者かと思っちゃった。ワンダーワイスに近づくから殺そうとしちゃったよ。それはともかく久しぶりだね、ウラハラさん」

「そうッスね。笑顔で言われても物騒さは変わらないんすけども」

ヘラヘラと軽薄な笑みを浮かべながら、浦原は内心でため息を吐

く。

まさか登場して秒読みで奥の手の一つを使うとは思っていなかった。保険程度の認識とはいえ、身代わりを作る『携帯用義骸』を見せたのは痛い。そうしなければ凌げなかった、という理由もあるが、慰めにはならないだろう。

予想以上に、少女は速くなりすぎている。

「私のパチモンみたいな能力だね」

「能力ってほどじゃないっすよ。それに真似が得意なあなたにパチモン呼ばわりされるなんて……」

「それもそっか」

にっこりと可憐に微笑む少女。ついさっき人を殺そうとしたとは思えない。

——これは困った困った。

それとはなしに、浦原は死神たちのほうを見やる。さきほどの自分の攻撃で触手からは抜け出せたようだ。しかしこれ以上の助太刀は、少女が許してくれないだろう。

とはいえ、ニルフィネスという少女を足止めできるのなら願ったり叶ったりだ。少年はもう自分から興味を失ったのか、鳥を追いかけている。偉丈夫の破面アランカルは待機と言われ、腕組みをしたまま目を瞑っている。

「ねえ、ウラハラさん。ヨルイチさんはいないの？」

「ご生憎、予定が立て込んでるんすよ」

「そう、残念。また稽古つけてもらいたかったんだけどなあ。この一か月間、ずっと私も遊んでたわけじゃないんだけどね」

「またまたあ、子供というのはそこまで訓練一辺倒にはなりませんよ」

「む、なんかウラハラさんが信じてない。グリーゼからも言っちゃってよ。今日まで私がどんなに頑張ってたかさ」

グリーゼと呼ばれた男が閉じていた目をゆっくりと開いた。

「……ああ、よく見てきたさ」

「ほら見てよ。頑張ってるって証拠、あるでしょ？」

「……我が主人の努力は並大抵ではなかったぞ。時には一日に牛乳を

一パック飲み干し、さらにタンパク質を取るためによく食べ、よく寝た。まさに健康優良児だ。たとえ目標であった豊満な体に一ミリたりとも近づけなくとも、我が主は一日たりとも欠かさずー」

「グリーゼ。グリーゼ？ そちの努力じゃないよ！ そ、それに、ちよつとは成長したもん！ せ、成長したんだからね！」

「あなたがたも、なんか大変そうっスね」

「そんな目で私を見ないでえッ」

若干、生暖かい視線を送ってしまった。

落ち込んで手足を空中の足場に突けていた少女は、ふいに起き上がる。

「……………まあ、ホントに私も遊んでたわけじゃ、ないんだよ？」

空気が変わった。気配を感じた遠くの鳥たちが飛び立つ。

どうやら、話での時間稼ぎはここまでらしい。

「私って、強い死神さんと戦ったことがないからさ。キミたちがどれだけ強いのか、よく分かんないんだよね。でもウラハラさんとヨルイチさんはその中でも強いほうでしょ？ これが通用すれば、私はほんどの死神に勝てるのかな？」

「買いかぶりっスよ」

本音を言えば、勘弁してもらいたい。最初に現世に現れたときの實力はよく分かっている。夜一の技術を完全に模倣し、それ以外にも厄介な技が盛り沢山。

その時に思ったことが一つ。

——底が見えない。

さつきだってそうだ。浦原が手刀に気づけたのはまぐれである。それを気取られないようにしなければ、こちらの打つ手が少なくなるだろう。

「あ、そういえば」

思い出したように少女が浦原に尋ねた。

「ウラハラさんは、この前の夜…………。私たちの誰かと交戦した？」

「…………？ いえ、してませんが」

「そう。ありがと。ウラハラさんじゃなくてよかった」

質問の意図は量り兼ねたが、これからの戦いにとっては雑念だ。

——さて、どう動くんスかね？

——白打？

——斬術？

——それとも……。

答えは、眼前に。

目の前の景色に別の映像を差し込まれたようだ。

一瞬あとには浦原の眼球に触れるか触れないかの位置に霊子の刃が迫っている。少女が予備動作なく、まさしく出現したかのように、そこにいた。

「……ッー」

辛うじて浦原が首を曲げる。こめかみあたりの髪が何本か持つてかれた。

風圧によって吹き飛ばされかけた帽子を手で押さえ、牽制の赤い斬撃を横なぎに振るう。そして少女も刃の軌道を変え、同じように腕を薙いだ。

かみそりべにひめ
剃刀紅姫

ウオラーレ
駆霊剣

結果は相殺。

煙が立ち込めるのも待たずして、浦原がその向こうへとそらに追撃をこなす。

きりさきべにひめ
切り裂き紅姫

浦原の斬魄刀から無数の刃が連続で発射され、煙幕を晴らす。

少女の姿は——ない。

横？ 上？ 下？

思考をねじ伏せ、浦原は直感的に背後に紅の刃を奔らせた。

「なんでわかったの？」

「勘ですよ」

浦原の耳に声が届いたときには、もう少女の姿は消えている。霊圧の探知も役に立たない。ついさつきまで眼前に居たというのに、少女は何の障害物もない空中で姿をくらましている。

厄介すぎる。なにより、確実に自分が後手に回されてしまう。一護のようなタイプでは終始翻弄されるだろう。

「さっきの身代わり人形使ったら？」

「いやア、けっこー扱い難しいんスよ、コレ。多分、アタシ以外の人に渡しても使いこなせないっス」

「動かせないの？」

「そこまではまだ改良してないんスよ」

「ふうん。じゃあザエルアポロさんに持つてこうと思うから、一つ頂戴？」

「お断りさせていただきますよ」

「ケチ」

ピツ、と音を立てて、浦原の羽織の端がちぎれ飛ぶ。彼が回避をしていなければ、内臓ごと持っていかれただろう。

上下すらも勘定に入れて、あらゆる方向から少女の攻撃が飛んでくる。

浦原は、今の準備だけでは少女を倒せないと気づいていた。

そしてまだ血があらさまに飛んでいないのは、少女が様子見のようにな……、あるいは、なにかを待っているかのように時間を稼いでいるからだ。

それこそ浦原の望んだことだ。しかしこのままではラチがあかない。

あえて大ぶりの技を放つ。隙を作り、誘い込む。相手もそれを理解しながら浦原の前に現れた。

細い手足に霊圧を纏わせて次々と白打の技を使ってくる。熾烈だ。とにかく速い。これは浦原にも覚えがある。夜一が好んで使う型と一緒に。刀と腕がぶつかり合うたびに、硬質な音がまき散らされる。

最後に来るのは下段からの突き上げ。

体がそう覚えていたからこそ、浦原は反応してしまった。

「シッー」

少女は膝を曲げた状態で、両手を足場に突く。型にはない動きに浦原の目測が誤った。そのまま少女は体の上下を逆にして回転し、跳ね

跳ぶ。まるでミキサーの刃のようだ。

予定していなかったことだが、これは想定内。予想外が来るのには警戒していた。

ちがすみ
血霞の盾

斬魄刀の鞘から血が噴き出して壁を創る。

そこに少女の脚がぶつかった。しかし少女はそれに頓着せず、白打にはない動きで蹴りを連続して叩き込んだ。

わざわざ破壊されるまで待つつもりもない。

きりさきべにひめ
切り裂き紅姫

盾から飛び出した血の槍の群れを前に、少女が飛びずさる。

「白打、じゃないっスね？」

「ピンポン。体術を使う人は虚圏ウエコムンドにもいるよ。これはオジさんの技だね」

ほがらかに笑いながら少女は肩をすくめた。

なるほど。やりにくい。型にはまらないのが良い方向に伸びているようだ。浦原にとつては面倒極まりないとしても、たしかに少女は以前会った時よりも格段に強くなっているのが、些細な動きから察せる。

相手が様子見をしているうちに、ここからはそろそろ本腰を入れな
いとといけないかもしれない。

そんな時、触手で死神たちを捕まえていた破面アランカルが少女に声を掛ける。

「おおい、ニルフィネス。まだソイツ殺せないの？ こっちはこつちで続きするけど？」

「勝手にやってればいいじゃん」

「そーお？ まっ、しょーがない。こっちはこつちで続きしよっか。おねーさん達！」

「いちいち言わないと何も出来ないの？」

男をすげなくあしらう少女は攻撃の手を止め、そちらを向いた。

その横顔に凄惨な笑みが張り付いていたと思うのは、浦原の気のせいだろうか。

視線の先で男は乱菊に卑屈そうな笑みを見せる。

「ホント、あいつ話んなんないよね。せっかく、あのゲタ男が助けてくれてもスーグ捕まっちゃうんだもんね。ま、しよーがないか。八対三じゃ逃げ場ないしねー」

男は余裕ありげだ。しかし浦原がそちらへ助けに入らなかつたのは、死神たちにも考えがあることを見通してだ。

——そうになると、こちらのお嬢さんは気づいていないはずじゃないんですが。

裏を執拗に読むほどがちようどいい。浦原はいつでも動けるように体勢を直し、事態を見守る。

触手に胴を捕えられながら、乱菊が冷たく言い放つ。

「……あんたさ。ずーっと思つてたけど、あつちの女の子の言う通り、随分お喋りなのね」

「それがなにさ？」

少女を引き合いに出されて男の機嫌が目に見えて悪くなる。

「あたし、お喋りな男つてキラいなよね。ーなんか、気持ち悪くつて」

怒りで白くなった半眼。堪え切れない、男の負の感情。

「…… おねーさんさ。キミ、いまボクに捕まつてるつてコト忘れてるでしょ？ キミがいま生きてるのはボクの気まぐれ」

死神を捕まえていない残り五本の触手が鎌首をもたげ、

「ボクの機嫌を損ねたら、すぐに串刺しにー」

凍り付いた。

動かさうともびくともしない。触手の長さはもはや十メートルを超えているが、そのすべてが分厚い氷におおわれて身動きできなくなっている。

余裕などどこぞへ吹き飛んだだろう。

「——な……なんだよ、これ!？」

ああ、と。浦原は納得する。あの男の破面アランカルは演技でもなく、このあからさまな仕掛けに気づいていなかったのだろう。いま浮かべている驚愕の表情までもが演技であればたいしたもののだが、その様子

もない。

日番谷冬獅郎が戦線に復帰した。冷気を引き連れ、すでに準備は済ませたようだ。

その間に捕まっていた死神たちは範囲から逃れる。

「一度攻撃を加えた相手に対して、気を抜きすぎなんだよお前は。『残心』て言葉、知らねえのか？」

「お前、まだ生きてたのか……」

「氷輪丸は氷雪系最強。砕かれても水さえあれば何度でも蘇るさ」

「くそ……ッ！」

「止せ」

即座に触手を切り離して新しいものを生やした男。それを日番谷が押しとどめる。

「もうお前に勝ち目はねえ。仕込む時間は山ほどあった。お前は、俺に時間を与えすぎたんだ。お前の武器が八本の腕なら、俺の武器は」

この大気に在る、すべての水。

男が絶句する。木の幹ほどもある太さの氷柱が、自らを取り囲むように突如として大量に現れているのを見て。

「なんだよコレ！ 十刃エスパーレダのボクがッ！ こんな奴に！」

「戦いでモノを言うのは、勝ったやつだけだ」

「——クソッ！ クソッ！ クソオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

背中の円盤を高速回転させ、迫りくる氷柱を半ばから折るようだ。それは最後の抵抗。窮鼠は猫をも噛む。

危機に陥ったからだろうか。男の慢心が取り払われ、先程まで見せていた速度を上回る回転数で迎撃しようとする。これならば、第二波ほどまでは凌げただろう。

しかし、

「…… なっ!？」

男の口から呆気ない声が漏れた。

回転に体が付いていかなかったのだろうか。浦原にはわからなかった。けれど男は突然、体勢をぐらりと崩し、氷の波へと飲み込まれることとなる。

千年氷牢せんねんひょうろう

最後の隙間に、男の目が見えた。

「クソがあああああああああ!!」

凄まじい憎悪が込められた叫びが、氷の牢獄の完成と共に途絶える。

明確な勝敗が決まった一瞬。誰もが、息を飲んだ……はずだった。

「——あくあ、ルピさんったら、やられちゃったよ。なんで獲物が目の前にいるのに、もつと甚振らないで焦らしてたのかな。それだったらもう三人殺せてたのに、ね。藍染様に怒られちゃうよ」

言葉通りならば呆れを浮かべているはずだ。

けれど少女の無表情に近い顔には、わずかな、ほんのわずかな喜色_{きしき}が込められているのに浦原は気づく。

目の前にいる少女ではない。死神たちのちょうど中央に、同じ姿の少女は立っていた。

——ッ!

——いつの間にか!?

目は離さなかったはずだ。男がやられる以前より、浦原は少女から視線を逸らさないように気を付けていた。それが今できる幻影対策だったから。

それなのに、少女は当たり前のように浦原の前に偽物を置く。

精緻な幻影が霊子の欠片となって散っていく向こうで、少女は大仰なしぐさで可愛らしく一礼。

「私は第7十刃セブティマ・エスパーダのニルフィネス・リーセグリンガー。ニルフィって呼んでね。さっきのルピさんより階級は一つだけ下だよ。キミたちならもつと早く私を倒せるかもしれないよ」

いつ現れたのかも分からない少女の存在に、死神たちが警戒し、すぐには攻撃を仕掛けない。

あの語りを終わらせてはいけない。そう本能が答えをはじき出し、浦原は追撃を開始しようとする。

「……すまん。こちらの主あるじからの命令だ」

「！」
今まで傍観に徹していた偉丈夫が立ちほだかる。浦原は歩を止めた。このまま抜けるには、拙い。

殺気立つ最中で、ニルファイが微笑みながら唄うように言った。

「私が今日現世に来たのは三つの目的があるから。一つはついさつき達成したの。それともう一つは、このままだと十割の確率で成功するよ。それでね、最後の目的の達成のためには、死神さんたちの協力が必要なんだ」

ギチギチギチギチギチギチギチギチ……！

ニルファイの霊圧が軋んでいく。それに比例するように、濁っていく黄金の眼光が死神を射抜く。

「デイ・ロイとエドワードと戦った人は、ここにいるかな？」
遊びの時間はもう終わり。

これからどうするかを考える日番谷は、それを頭の片隅に押し込めて、ニルファイの動きを注視する。

ニルファイは自分の質問に反応した死神が一人いることに気づく。

パチンコ玉みたいな坊主頭で菊池槍（穂先が片刃の短刀状の槍）を肩に担いだ男だ。彼に向き直る。

「キミは？」

「十一番隊第三席、まだらめいっかく班目一角だ。エドワードって奴となら、俺が戦ったぜ」

「勝ったの？」

「ああ、愉しかったよ」

全身から好戦的な空気を発している一角。ニルファイはぎつと一角を観察した。

「ねえ、イツカクさん。卍解使ってよ」

「ああ？」

「使えない訳じゃないでしょ？ 通常状態ならともかく、レスレクシオン帰刃の

『火山獣』を発動させたエドラドに勝っている要素が、始解状態のキミにはないんだもん。そんなんじやあの人は倒せないよ?」

「……俺がそんなの使えるワケねえじゃねえかよ」
「なんで?」

「そつちこそなんだよ。やりあうつてんならガキだからってこつちは容赦しねえけどよ、万が一にでも使えるなら使わねえうちにブツ殺しに来りやいいだろうがよ」

卍解の有無について気になるが、たしかに、一角の言っていることは正論だ。

しかしニルファイが望むのはそういうことじゃないようだ。

「倒した、——倒した相手に言い訳を許すの? 怪我がひどくて動けなかった。出血がひどかったから集中力が乱れた。自分の力を出し渋っていたから弱くなった。そしてそれは相手が悪かったからだって」

一歩、ニルファイが踏み出す。

「そんな、そんな言い訳なんてないよ。私はキミに言い訳なんかあげないで情けをあげる。言い訳無用に叩き潰して、再起不能か死の字を与えて、プライドをはずたずたに引き裂く。——そういう情けだよ」

一角が鼻で笑った。

「最初から言い訳なんてするつもりねえよ。戦って、楽しんで、死ねたらそれで本望だ」

「戦えたらキミは楽しいんだ」

「そうだよ……俺と戦るんだろ? 仇討ちだか何だか知らねえが、付き合つてやるよ」

じつと一角を見つめるニルファイ。

けれど少女はすぐに破顔し、両手を広げる。

「わかった。じゃあ、やろうか」

一角が斬魄刀を構え、飛び掛かろうとした。さつきまでニルファイは接近戦しかしてこなかったからだろう。そういった先入観、あるいは手札の底の視えなさから短期決戦を決め込んだのか。

わざわざニルファイがそれに乗ってやる理由もない。素早く両手で

手陣を切る。

「縛道の六十二」

鎖条鎖縛さじょうさばく

太い霊圧の鎖が蛇のように一角に絡みついた。

日番谷はそれに瞠目する。

「鬼道だ?!」

ニルフィはさらに縛道の六十一『六杖光牢りくじょうこうろう』を重ね掛けし、一角の動きを確実に封じ込めた。もがく一角だが、あの拘束は死神の腕力だけではどうにもならない。

援護をするしかないだろう。日番谷はルピが仕留められなかった場合に用意していた水を操る。

群鳥氷柱ぐんちようつちら

作り上げた大量の氷柱をニルフィへと放つ。

「邪魔」

重光虚閃軍セロインフライント

少女は面白くなさそうに腕を払う。すると虚閃セロの乱発によつてすぐさまそれらを一扫した。集中砲火の余波を喰らって日番谷を含めた死神たちは意図せず距離を置く。

無表情から笑顔に戻ったニルフィが、禿頭の死神へと近寄る。

「戦えないまま殺してあげるよ」

「グツ…… オオツ！」

叫ぶ一角を見て檻の中の珍獣を楽しむ子供のようにニルフィは顔を輝かせた。

「――破道の九十」

黒棺くろひつげ

拘束されたままの一角は黒い棺桶に飲み込まれていく。叫びも、その姿も、日番谷たちの意識では捉えられなくなった。あの棺桶の中では暴虐が荒れているのだろう。

「さて、とりあえず今はこれで終わり。戦いすらできずに再起不能だよ」

手を払いながら少女が言った背後で、解放された一角が糸の切れた

人形のように地面へと落下していく。血が尾を引いた。

「一角！」

「おい、待てー！」

それを追った弓親に日番谷が静止を掛けた。何が起こったのか目で追えなかったのもある。けれどそれ以上に、相手に隙を見せるようなことをしてしまえば……………。

日番谷の危惧通り、弓親のすぐ横にニルファイが現れる。咄嗟に藤孔雀で薙ぎ払う弓親。

ゆつくりと動かした小さな手をその刃に添えて軌道を逸らし、少女はまず顔に正拳を一発食らわせる。弓親の身体が強張るタイミングで次の攻撃。掌底。熊手。肘打ち。手刀。拳槌。膝蹴り。目潰し。回し蹴り。関節砕き。その他無数。

数秒にも満たない間に死神の身体をスクラップにする勢いでラッシュ。

とどめの蹴りが炸裂しようとする寸前、

「唸れ『灰猫』」

ニルファイの矮躯に灰が襲い掛かる。

「……………」

無言のままニルファイは気絶した弓親を盾にした。乱菊が舌打ちし、灰を二人から逸らす。

その瞬間、ニルファイが弓親の身体を乱菊に向かって思いっきり蹴り飛ばす。軌道的には上から下へ。このままでは弓親が地面に激突すると判断した乱菊が、攻撃を断念して受け止める。

そのまま二人は勢いのままもみくちゃになり、かろうじて木のすぐ上で止まった。

「なんでよそ見してるの?」

「!?」

そのすぐ横で、不思議そうにニルファイが乱菊を見上げている。細腕には霊子の剣が構成され、金色の眼は乱菊を見ているようで、本当はその喉元を狙っていた。

「さ、せるかア！」

冷気を纏いながら日番谷が飛来。あえて大声を出し注意を引き、そしてそれは成功した。

斬魄刀と霊子の剣が真正面からぶつかりあう。

「邪魔しないでって言うてるでしょ。あのイツカクさんを連れて帰って私は壊さないといけないの」

「みすみす渡すわけねえだろッ」

「こっちはもう五……二人も殺されてるんだよ？ 仲間が殺されないうって都合よすぎない？」

「ふざけんな！」

氷の尾がニルフィに迫る。それを彼女は脆そうな細指で側面を叩き、

「縛道の八」

斥せき

空気が軽く破裂するように霊圧が散る。すると尾は目標を失ってニルフィのすぐ横を通り、空気を削り取る。

その技量に舌を巻くしかない。

だがさつき、ニルフィは一角を連れ帰ると言った。ならば一角はまだ生きているのだろう。それがたとえ、生死の境目で彷徨っていいように。

——クソッ！

——コレがさつきのやつより弱いって嘘だろ！

今の戦力だけでは倒しきれない。

「敵が目の前にいるのに考え事なんて、すごい余裕だね」

気付けば、ニルフィは日番谷の間合いに堂々と足を踏み入れている。どころか、もう一メートルも距離がないほど接近を許していた。刀を振るうには適さない距離。そして氷を扱えば自分も巻き込む。そんな、微妙な間合いをニルフィは展開していた。

——これしかねえかッ。

予備の水分のほとんどを操る。ニルフィがそれに気づき、呆れた視線を投げかけた。

「捨て身の攻撃？ まだワンダーワイスに、グリーゼも残ってるのに

ね」

「いまはてめえを倒すのが先決だ」

「倒せたら、とか。そういう予想を出ないことを信じてるんだね」

「予想から現実にしてやるよ」

「無理だね。——もう終わったから」

いつの間にか、ニルフィは日番谷の背後に立っていた。音も気配もない。しかし日番谷は直感的に背後に居ると察し、千年氷牢せんねんひょうろうを形成させようとする。

……だが、体が動かない。振り返ってから体が思うように動かなくなった。拘束されているわけでもなければ疲労によるものでもない。一瞬の間だけ、日番谷の思考は停止した。

刹那、音が遅れてやってくる。発生源は己の四肢の骨。砕け散っていたからこそ、手

足はただの肉袋と化し、もはや動かすことさえできない。止めとばかりにニルフィの足が日番谷の腹に突き刺さる。比喩表現でもないのは、少女の足が槍のように日番谷の腹を突き破っているからだ。「ぐっ、が……!!」

靈子の足場に倒れ込んだ。

壊滅だ。先遣隊はすでにこの少女に勝てる戦力ではなくなっている。乱菊はまだ戦えるだろうが、返り討ちに遭うのは目に見えている。仮にもこの少女を倒せたとしても、まだ二人の破面アラシカルが残っていた。浦原も、グリーゼという男がこの戦闘区域への侵入を阻はばんでいるため、これ以上の援護は期待できそうにない。

「ねえ、どうして？ あっさり降参宣言なんてデイ・ロイとエドラドを殺したキミたち死神が言わないよね？ 刀を振る腕がなくなっただけでリタイアなの？ まだ手足は体にくっついたままにしてあげてるじゃん！ それがなくなったら噛み付いても戦いなよ！

ねえ！ 私はそういうつもりで今まで皆と戦ってきたんだよ。こんなに肩透かしを味わうなんて虚圏ウエコムンドでも早々そうそうなかつたのにさ!! ……………ルピさんじゃないけど、想像以上に想像以下だった

から、私、白けちゃった」

ニルファイが一気にまくしたてた。しかし最後は落胆にまみれた声だ。呟いた少女の身体は、だんだんと小さくなっていくようだ。

「これじゃあ、何のために強くなったのか、わからないよ」

その時、空が割れる。光がそこから降り注ぐ。

ネガシオン
「反膜……！」

アラシカル
破面以外の誰かが呻いた。

「あく、任務完了か〜」

光はニルファイ以外にも、他の破面^{アラシカル}たちを包んでいく。もはや浦原以外に興味がなくなつたようにニルファイがある一点を見つめた。

そこには光が降り注ぐ氷の牢獄がある。反膜^{ネガシオン}とは、対象が光に包まれたが最後、光の内と外は干渉不可能な完全に隔絶された世界となるものだ。それによって異物である氷は破片となつていき、崩れていった。

ルピが氷の中から姿を現す。生きている。こちらからは背しか見えないが、屈辱や憤怒といった黒すぎる感情が可視化されたようだった。

背中越しにルピが振り返る。下手人の日番谷に一瞬だけ目を止めるが、すぐに別の所へと視線を移した。

見ているのは――ニルファイだろうか？

件のニルファイは日番谷を見やる。

「ぼくはこ〜」

なにも込められていない言葉を残し、少女は現世から去つていった。

リカバリーとデストロイ、あるいはただの暴虐

この虚夜宮ラス・ノーチエスに初めて人間が足を踏み入れた。

名前は井上織姫。特異な能力と彼女の気質から、進んで数奇な人生のレールを歩むことになった少女だ。学生服のまま何も持たず、数人の破面アランカルに囲まれるようにして廊下を歩いて行く。無機質な廊下こそが彼女の進む道を示しているようだった。

織姫は俯きがちだった視線を周囲に奔らせる。

一番近くには織姫のまわりをぴよんぴよんと跳ねまわる幼女がいた。とても楽しげだ。敵意などは以前と違って感じられず、むしろ今は歓迎しているかのようである。

頭にとある絵本の一場面が思い浮かんだ。『おむすびころりん』。老人がある穴へと握り飯を落としてしまった。けれど穴の住人であったネズミたちはその握り飯を喜び、老人を歓迎する踊りをしたという。ニルフィネスという少女は踊ってはいないが、まさにそのネズミのような無垢な喜びを体現していた。

「ん？ どーしたの？」

織姫の視線に気づいた少女が立ち止まって見上げて来る。

答えあぐねていると、先頭を歩いていた頭に鎧の一部のような仮面を付けた青年が言った。

「リーセグリンガー。さつきからちよろちよろとソイツの周りを飛び回るな。女の歩みの邪魔だ」

「あ、あたしは別に……」

「女。お前には言っていない。そしてリーセグリンガーをあまり甘やかすな。いつまでたっても餓鬼のままになる」

別に邪魔というほどでもなかったが、男の言葉に少女は唇を尖らせてそっぽを向いた。

けれど織姫には悪いと思ったのか、子供らしく素直に謝る。

「ごめんなさい。ちよつと邪魔だったよね」

「そういうことって、ないんだけど……。えっと、ニルフィネス、ちゃん？」

「ニルファイでいいよ。ちゃん付けするなら、ニルちゃんがいいなあ。ニルファイちゃんだと語呂が悪いしね」

織姫は曖昧に頷く。まだ最初の邂逅との落差が掴めないのだ。

あの時、織姫はニルファイに殺されそうになった。その下手人になるかもしれない少女が目の前でくるくる回っているのを見るとは思っていなかった。久しぶりだねオリヒメさん。そう言って、ついさつき友達に会うような気軽さで織姫に抱き着いてきた。織姫は小さな体を抱き留めながら、ただ戸惑うことしかできない。

なんとはなしに目が流れる。自分をここへと連れてきた青年の背中に目が留まった。

「あの人だね、ウルキオラさん。私をここに連れて来てくれたのもあの人の。そういえば、いつつも誰かを連れてきてるよね。仕事なの？」

「余計なお世話だ」

ウルキオラは振り返らずに言った。

平坦な柢に嵌まったような声。織姫を連れに来た時も、護衛の死神たちを死の間際に追いやった時も、こんな声だった。

戸魂ソウル・ソサエティ界から断界を通って現世に向かう途中、ウルキオラは現れた。

『…… そうだ女。お前に話がある』

護衛として付いていた死神の左半身を吹き飛ばしながら、事もなげに言った。

続けてもう一人の身体を吹き飛ばし、二人の身体を再生させている最中の織姫を見る。

『俺と来い、女』

続けられた言葉に、織姫は逆らえなかった。

『言葉は「はい」だ。それ以外を喋れば殺す。「お前を」じゃない。――「お前の仲間を」だ』

大人しく織姫が従っているだけだからか、今のところ何もされていない。ただついて来いとだけ言われてやって来た。

けれど、一つの視線が気になる。

少し後方を歩いている中性的な男の破面^{フランカル}。死覇装の所々は凍り付き、あるいは裾が千切れ、包帯すら巻いている。不良風の青年もケガをしているようだが、そちらと違って後ろの男はさつきから澱んだ視線を向けてきていた。

自分だけならまだ分かる。しかし隣をちよこちよこ歩くニルフイにさえ、むしろ強く睨みつけている。

親の仇を見る目が生易しいと思えるほどだ。

しばらく歩いていると、彼との距離が近く、先頭とは離れていく気がする。ニルフイが歩調を変えて、それに織姫が釣られたせいだ。

ニルフイが男に嬉々とした様子で尋ねた。

「ねえねえ、ルピさん。なんでそんなにケガしちゃったの？ ていうか、なんであんなに簡単にやられちゃったの？ キミの言ってた弱い死神さんたちにさ。もし道化を目指してるのなら私も手伝ってあげるよ？」

目を剥いたルピが右手でニルフイの襟首を持ち上げる。身長差からニルフイの足が床から離れてしまった。

見ていればよかった。けれど思わず、織姫が止めに入る。

「——ッ！ 離してあげてくださいっ」

「お前は黙ってる！」

「だからって、こんな小さい子に」

「うるさい！」

血を吐くように叫び、ルピは少女を今にも喉笛を噛み千切らんばかりに睨んだ。

「…… どうしたの、ルピさん？ 喉が苦しいよ。私、自分があつさりやられたからって、八つ当たりはよくないと思う」

「お前がッ。お前なんだろうが！」

「なにがー？」

とぼけた様子のまま、ニルフイは器用に首をかしげて見せる。

声にならない叫びをあげてルピが拳をその顔に振りかぶった。だが、吹き飛んだのはルピのほうだ。ニルフイが空中で体を捻り、ルピの横つ面に杭打機もかくやという勢いで蹴りを叩き込んだ。ルピは

壁に叩き付けられて弾かれる。

「聞いただけなのに、ね。正当防衛だよな？　行こう、オリヒメさん」
「え、でも」

「いいからいいから。死んじやいないし、あとからついてくるよ。現世でも殺されるはずだったのにしぶとく生き残っちゃったし、ゴキブリ並さ。こんなチビ助な私に蹴り飛ばされても、腐っても十刃エスパーダ(笑)なんだからさ？」

強引に織姫の手を取ったニルファイが先を行ってしまった者たちの背を追う。

二人の背後で、獣のような叫び声が届いた。

「ん、ここだね」

時間の間隔が狂ったせいで、どれほど歩いたかわからない。ついに織姫は目的地に着いたようだ。

織姫の横に立つニルファイに、顔の下半分を仮面で覆われた長身の男が耳打ちする。

「……主あるじ。はしゃぐのは分かるが、少し抑えてほしい。流れ弾がそちらの少女に行つては怒られるのはお前だ」

「気を付けてるよ？」

「……人間が我々のように丈夫だと思ふな」

「あ、そういうええそうだったね。クツカプーロみたいなの？」

「……もうそれでいい」

誰も、先程すさまじい威力で蹴り飛ばされたルピを心配する者はいない。それを見て織姫は、ここは死神の世界とはやはり違うのだと実感した。

そうしているうちにルピがやって来た。髪が乱れ、まさに幽鬼のようにニルファイを睨みつけている。もはや眼光だけで殺意が届きそうだったが、当のニルファイは我知らずというようににこにこしている。

二人の確執は織姫には知りえないことだ。

わかったことといえば、ニルファイは幼い見かけに反し、やはり虚ホロウなのだということだろうか。

考えているうちに扉が開き、促されて織姫も中へと入る。

一步、一步と進むうちに、後戻りできないのだなと実感が湧くようだ。薄暗い巨大な部屋の全貌が見え始め、そして高い壁の上に置かれた石造りの椅子に腰かける男が、織姫を見下ろした。

「……ようこそ、我等の城『虚夜宮』へ」

藍染惣右介。あいぜんそうすけ死神でありながら死神を裏切り、この虚夜宮ラス・ノーチエスの主である男。

体が強張ってしまうのを耐え、屈さないように見上げるだけで精いっぱいだ。

「……井上織姫……と言ったね」

「……はい」

重圧が織姫を襲う。空気がチリつくような鋭さがありながら鉛の海に沈められたような感覚が織姫を蝕む。

体中の力が吸い出されるような、感じたこともないものだ。

ただの人間でしかない少女の体はそれだけで砕けそうだった。

「早速で悪いが、織姫。君の能力チカラを見せてくれるかい」

「は、い……」

幸いと言つてどうなのか、織姫は重圧から一瞬で解放された。

観察するような藍染の目はどこことなく愉悦に浸っているように見える。アランカル

ほかの破面たちは立っていないがらさして興味なさそうに状況を眺めていた。けれど唯一、悪意を持っている者に藍染が目を動かす。

「どうやら君を連れてきたことに、納得していない者も居るようだからね。……そうだね？ ルピ」

頬に青あざを作ったルピは、亡者のように低く押し殺された声で返す。

「……当たり前じゃないですか。ボクらの戦いが全部……こんな女、一匹連れ出すための目くらましだったなんて……。そんなの、納得できる訳ない」

「知らなかったのかい？ 任務の詳細はニルフィに教えさせるように言っていたんだが」

「……!?!」

体の節々を震わせながらルピはニルフィを睨む。もはや血の涙さえ流せそうだった。藍染がいなければすぐに襲い掛かっていたらう。

当のニルフィは知らん顔してそっぽ向いている。

それを上から見ていれば何があつたかなど分かるはずだろう。しかし藍染は答えを聞くことなく、ルピに建前だけの、本心は一かけらほども入っていない言葉を投げかけた。ルピの神経を逆なでするところら分かつているだろうに。

「済まない。君が、そんなにやられるとは予想外だね」

「……………！」

歯を噛み締めてルピが屈辱に耐える。

涼しげな顔のまま藍染が続けた。

「さて、そうだな。織姫。君の能力^{チカラ}を端的に示すためにー」

すべては当てつけでしかない。

「グリムジョーの左腕を治してやってくれ」

普通ならば不可能な藍染の提案。ザエルアポロでさえ代用品を用意しなければ possible の言葉を掴むことすらできないそれは、今のルピには最高の鬱憤の晴らすモノとなる。

溢れる言葉を押しとどめることなく、声高く吐き出した。

「バカな！ そりゃ無茶だよ藍染様！ グリムジョー!? あいつの左腕は東仙統括官に灰にされた！ 消えたものをどうやって治すってんだ!! 神じゃあるまいし!!」

「ルピさん。黙って見てなよ」

「ッ！ また、お前だ！ お前が邪魔する！ そのせいでッ」

「お口チャックすらできないの？ 藍染様はオリヒメさんに、やれっと言ったんだよ。その邪魔をしているのは、いまキミだけだ」

目を引きつけて押し黙ったルピを放り、ニルフィが織姫のそばまでやってくる。

小さな少女が見上げる。縫^{すが}るような目を、懇願するような震えた声を、織姫に知らせた。

「お願い。治してあげて」

織姫は頷く。

たとえ他人にどれほど否定されようと、織姫に拒否権はない。だからニルフィに頼まれようと、どれほどの想いを押し付けられようと、織姫はやるしかなかった。

グリムジヨアの傍に織姫が歩み寄る。失われた左腕のある場所に、織姫が両手を添えた。

そうてんきしゆん
双天帰盾

結界がそこを包み、

「私はー拒絶する」

グリムジヨアは訝いぶかしげな顔でその部分を見つめる。常識的に、何の用意もなく再生させることなどできない。それでも黙ったままなのは、僅かな可能性というものを待つからか。

そして織姫はその小さな可能性すら手繰り寄せられる。ルピが叫んだ。

「おい！ 聞いてんのか、女！ 命惜しさのパフォーマンスならやめとけよ！ できなかつたらお前を殺すぞ！ その能力チカラつてのがニセモノなら、お前みたいな奴を生かしく理由なんか……」

声からは次第に力が失われていった。

骨が生まれた。肉が張り付いた。パーツが組みあがっていく。

「ない……ん……」

完全に再生させられた腕が、完成した。

その異常な光景にグリムジヨーさえも目を見開く。己の左腕を握り、そして開き、それを繰り返す。動きにぎこちなさはない。慣れ親しんだように動いている。

これで良かったのか。織姫がそう思いながら下がっている間にも、ルピは困惑やぶつけられない怒りに振り回されているようだ。

「な、なんで……。回復とか、そんなレベルの話じゃないぞ……。一体何をしたんだ、女……!?!」

その様が愉快なのか、藍染は口の端に笑みを刻みながら口を開く。

「解らないのかい。ウルキオラは、これを『時間回帰』、もしくは『空間回帰』と見た。そうだね？」

「はい」

ウルキオラが肯定したことにルピが口を震わせる。

現実を受け入れたくないように、辛うじて声を出す。人間がそんな高度なチカラを持つはずがないと。

しかし藍染は現実を突きつけた。

「これは、『事象の拒絶』だよ」

織姫の能力は対象に起こったあらゆる事象を限定し・拒絶し・否定する。何事も、起こる前の状態に帰すことのできる能力。

それは『時間回歸』や『時空回歸』よりも更に上。神の定めた事象の地平を易々と踏み越える。

「これは――神の領域を侵す能力チカラだよ」

それこそが織姫がこの場所へと連れてこられた理由なのだろう。

ルピはもはや何も言えなかった。たとえどれほどの否定の語彙を並べ立てたところで、目の前にある答えを塗りつぶすことなど不可能であると知らしめられたから。

そこで、織姫は腕の調子を確認していたグリムジョーに声を掛けられた。

「……おい、女。もう一か所、治せ」

示された右わき腹の後ろにも、皮膚どころか肉を削ったような傷の痕がある。織姫はそこも再生させてみると、『6』の数字が現れた。霊圧がグリムジョーの全身を駆け巡る。軋ませるように左拳を握る。

ルピがその姿を見て、押し殺すように言った。

「何のつもりだよ、グリムジョー」

「……あア？」

獲物を狙う、まさしく豹のような眼光となり、牙を見せつけるようにして凄惨な笑みを青年が浮かべた。

一触即発。

そうなるかと思いきや、グリムジョーは霊圧を消し、胸に飛び込んできた小さな少女を受け止める。

「グリムジョー！ よかった。治った！ やつと、治ったんだね！
うれしい、私うれしいよ！」

歓喜に打ち震える声だ。ニルフィは屈託のない満面の笑顔でグリムジョーに抱き着く。グリムジョーは抱きしめ返すことも少女の言葉に同意することもせず、ただニルフィの好きなようにさせているようだった。どう接すればいいのかわからない。グリムジョーの顔にはわずかにそんな困惑があったと思うのは……織姫の気のせいだろうか。

これが絵本の物語のワンシーンなら、あとはめでたしめでたしと終わる場面だ。

けれど何もかもぶち壊すように声が引き裂いた。

「ーふざけんな！　なんでお前が『6』なんだよ！　NO.6は、
NO.6はボクのはずだ！」

その声に反応したのは、グリムジョーでも、藍染でもなく、ニルフィだった。

グリムジョーから飛び降りるとニルフィは不思議そうな顔で藍染に尋ねる。

「ねえ、藍染様。グリムジョーの腕がもう元通りだから、またグリムジョーは十刃になるんだよね？」

「ああ、そうだ」

「もうルピさんは十刃じゃないんですよ？　あとは順当に
十刃落ちになる。それが決まり、だよな？」

ルピの見ている先で、藍染はそちらに目をやることなくたしかに頷いた。織姫は事態の奥深くが見えないが、今はルピの地位の話をして
いるのだろうかとは察せた。

「へえ、そっか。そうなんだ」

子供が納得するように少女は繰り返す。

「ねえ藍染様。お願いが、あるの」

子供らしからぬ、熱に浮かされたような表情で、ニルフィは藍染に『お願い』をした。

続けられた言葉にグリムジョーは悔いるように奥歯を噛み締め、治された手を握って血を滲ませた。

ルピは真正面に立つ少女を見ているだけで、怒りで我を忘れそうになっってしまう。

場所は先ほどの玉座の間からはさほど離れていない部屋だ。いや、部屋というよりも広場か。500メートル四方もある正方形の空間で、家具や石材も無く、ただ頑丈さだけが取り柄の闘技場として存在する場所だった。

口火を切ったのは、ニルファイだ。

「どうしたのルピさん？ また返り咲けるチャンスが転がり込んだんだし、もっと嬉しそうな顔しないの？」

ニルファイが藍染にせがんだお願いは一つ。

元から6番の数合わせのために入れられたのが可哀想だから、自分の7番の数字を掛けさせて戦いたい。

二つ返事で藍染は了承した。

「ホントにどうしたの？ もうヒツガヤさんに無様にやられちゃった傷はオリヒメさんに治してもらったでしょ？ まだ痛むのかな、不名誉の傷は」

「…… てめえが」

「え？」

「てめえが！ あの時！ 邪魔したんだろが!!」

叫び、ルピは獣の手のように曲げた右手でニルファイの顔をえぐるうとする。木の葉のようにふわりと避けたニルファイが困惑した顔で訊いた。

「わ、私？ なにもしてないよ？」

柳眉を不安そうに寄せ、無垢な目に困惑を滲ませる。

その様は冤罪を突き付けられたいたいけな少女のもの。けれどその姿はルピにとって怒りを助長させるものでしかない。

日番谷の千年氷牢を受けた時だ。ルピは触手を回転させて氷柱を薙ぎ払う腹積もりでいた。

だが、いざ間合いに氷柱が迫ろうとした瞬間、

「……破道のー」

ルピにしか聴こえなかったであろう、少女の囁き声ささやきが、
衝つよ

体の各所に霊圧の塊が一瞬のうちに叩き込まれた。すべて急所や関節といった要所ばかり。致命傷にはほど遠いものだったが、ルピの身体のバランスを崩すのには十分すぎた死角からの妨害。そしてルピは氷に成すすべを無くされて飲み込まれた。

それを問うと、

「え〜？ ホントに私の声だったの？ たしかに鬼道は使えるけどさ、私以外にも隠れていた死神がいたんじゃないの？」

「——ッ！——ッ！」

もはや声にならない叫び声をあげてルピが打撃を繰り返す。

ニルフィは苦も無くそれらを避け続けた。

「てめえの声だったんだよ。どういう手品使って隠れてたのか知らねえけどな！」

「口調変わってるよ？ それに確証もなしに犯人扱いは止めてほしいなあ。だから世の中から冤罪がなくならないんだよ」

ルピが斬魄刀を抜き放つ。狙いはニルフィの喉笛。ニルフィは突き出された斬魄刀の腹を撫でるように触れる。軌道のずれた刃が空を切った。

「あああああああああアツ!! 殺す、殺してやる！」

「口動かさないうで手を動かさなよ。そう吠えてると、弱く見えるよ。なんてね、藍染様のマネ〜」

「——ッ！」

とぼけた様子で怒りが破裂するほどに膨れ上がる。

すべてがニルフィのせいだ。もはや十刃エスパーダとしてのプライドや優越感エスパーダは失われたのだから、たとえ因果とかそういうものが間違っていようと、今のルピを確立させているのはそれだけだ。

そもそも、最初に姿を見た時から気に食わなかった。

理由は…… そうだ。思い出す。仲良しこよしをしよう、などと宣言したことがルピの琴線に触れたのだ。それに苛立った。ルピが

なによりも嫌う行為をニルフィは嬉々としてやる。仲間同士の馴れ合いなど、反吐が出るだけだと言うのに。

^{エスパーダ}十刃の称号にある奴らがほだされているのも気に入らなかった。^{エスパーダ}十刃がそういうことをしているのが、ニルフィが先導しているのが、彼の苛立ちをさらに加速させる。さらにワンダーワイズが破面^{アランカル}になった時だ。あの時やって来たニルフィの顔が、壊しつくしてしまいたくなるほどの負の感情を振るい立たせる。

そして何よりもー弱い。

そうとしか思えなかった。強者特有の威圧感がまるでない。幻影は多少操るのだろうがその身にまとう霊圧^{ホロウ}など砂漠にいる虚以下だ。

グリムジョーを見た時の、笑顔。ルピがなによりも嫌悪する表情だった。

「——だから！ てめえは！ この場所に！ いらなんだよ!!」

人体を破壊させるためだけにルピが足を振るう。

「……へえ」

ニルフィが踏み込んだ。目測を誤った蹴りは本来の威力には到底及ばない。ニルフィはルピの足を難なく受け止め、引き離される前にねじる。足払いを掛ける。ルピの身体が空中に浮き、さらに回転させられ、床にうつ伏せで叩き付けられた。左腕をニルフィにねじ上げられて拘束される。

「奇遇だね。私も、ルピさんは虚^{ラス・ノーチエス}夜宮にいない存在だとずっと思ってたんだ」

冷笑したニルフィがルピを拘束したまま右足でルピの頭を踏みつける。ぐりぐりと、プライドごと甚振るように。ホットパンツから伸びる白く繊細な足をゆっくりと動かしながらニルフィは言った。

「この戦いはね、キミの数字取りのチャンスだけど、もちろん私にもメリットがあるんだ。あ、痛めつけることだけじゃないよ？ ルピさんにね、言ってもらいたいことがあるの。今までの私の大切な人たちを侮辱する言葉を取り消す、ってね」

「ぐっ、お……言う、かよ」

「言つてよ。怒ってるんだよ、これでも私はさ。まあ、現世で死んでく
れなかったのは残念無念だけど、このほうがよかつたのかな？ こう
やって公式でキミを痛めつけることができるから、さ。向こうで死ん
でたらキミにこういう屈辱を感じさせられなかつたし」

けらけらと笑つてニルフィは腕の力を強める。ビキリ、と嫌な音が
ルピの肩から響いた。

「ほら、言わないと肩が砕けちゃうよ？」

「馬鹿、かよお前。ボクがお前なんか言うワケ、ないだろ。あんな、
骨の抜けた、クズたちになら……… なのさなら」

「……………」

「ボクは言わないぞ？ お前の、悔しそうな顔、臨むまでさ……………」
無言のまま見下ろすニルフィ。表情と呼べるものが張り付いてな
い空っぽの顔だ。

わずかに拘束の手が緩んだのをルピは見逃さなかつた。肩から骨
の粉碎された音が出ようが、強引にニルフィの腕を振りほどいて距離
を取る。

斬魄刀を抜きながら声を出す。

「緋くびれ『蔦トレバドリーラ嬢』」

刀剣解放の状態となり肩も治つたルピが、触手を揺らめかせながら
歯を食いしばつた。

「それにボクはこんなところで死ぬつもりなんかかない！ また十刃エスパーダ
になつて、ボクの力を他の奴らに知らしめてやる。そのためにーキ
ミが泣き叫ぶまで、甚振つてやるさ!!」

八本の大木の幹のような触手がニルフィに殺到した。

ランサ・テンタクロ
蝕ソニード 槍

響転で回避したニルフィを追うように触手が伸びる。

それを見越していたようにニルフィは最初の一本を身を捻つて躲
し、次の二本の束を風に舞う木の葉のようにいなす。反撃もすること
なく、ニルフィはただ避けることに専念する。

ルピの喉から哄笑が漏れた。

「は、ハハハハッ！ 避けるだけじゃんかよ！ それじゃあボクの

ことは倒せないぞ!？」

鉄の処女^{イェロ・ビルン}

それぞれの触手の先端に鋭い棘が万遍なく生えた。一本が届いたと思えばもう次の一本が放たれ、あるいは数本同時に少女へとおそいかかる。それでもニルフィは避けるだけだ。

避けて、避けて、避けて……それで。

「はは、は……?？」

——いつになったら仕留められるんだ？

ルピの頭にふと、そんな疑問が湧くほどの時間が過ぎた。

触手の攻撃範囲からニルフィは一步も出ていない。響転^{ソニート}も幻影も使わずに、足さばきと軽やかな身のこなしだけで躲し続けていた。それなのに一度も当たっていない。鋼皮^{イェロ}に当たった感触すら伝わらなかった。

異常だ。

ようやくニルフィに対して心の底からの危機感を覚える。それは今までわざと目を逸らし、胸の奥に押し込めていたものだとは気付かなかった。

ルピの背に冷や汗が流れ始める。触手を一旦引かせると、息一つ乱していないニルフィが、さつきまで戦いすらなかったかのように佇んでいる。本当に、さつきまでのことが戦いにすらなっていないとでも言いたげに。

「なん、だよ…… お前。なんで何もしてこないんだよ!？」

「やってるよ。ちゃんと避けてあげてるじゃん。あれで終わりって訳じゃないよね？ アーロニーロさんならもつと嫌らしい策を使って私のことを追い詰めるよ?。」

なんてね、と少女が肩をすくめ、

「ルピさん。これからキミの人格とかプライドとかへし折ってあげる。ホントは東仙さんにやろうと思っただけど、予行演習としてはちようどいいかもね、うん。キミが泣いて床を舐めながら『今までの言葉を取り消します』って宣言するように、私はキミの心を砂よりも細かく砕いてあげるよ」

一步ニルファイが前に踏み出す。無意識に、ルピは一步下がった。見てしまった。少女の目を。金色だというのに、さつきまでルピが抱えていた負の感情すら生ぬるく感じてしまうほど、よじ澱み切ったもの。コレが同じ生き物なのだとはどうしても信じられなかった。

「必要なのは、そうだね。痛みだ。ルピさんにはこれから発狂すら許されないような苦痛を与えてあげる」

「……く、来るな」

「私たち破面アランカルって丈夫だけどさ、それって魂が固いからなんだって、ザエルアポロさんが言ってたの。でもそれを粉々にすれば……あははは、想像できる？ 目覚めたまま脳みそをナイフでめつた刺しされる苦痛って？」

「ー来るなツつってんだろ！」

身を守るように触手を回転させる。唸るような音と共に極太の触手は風を切り、その手前でニルファイが足を止めた。

恐怖が滲み始めたルピの顔。それを見てニルファイが嗤う。

「クフツ、アツハハハハ……アハあ。いま、私のことを怖いって思った？ 思ったんだよね？ 一日前まで見下していた相手を怖がって、さ」

けらけらからからふふふのふ。

無邪気でありながらねじまがった心にすり替わり、少女の姿をした所謂バケモノは高い声で笑い声を響かせる。

ああ、愉快だと。滑稽すぎて笑い死にさせるつもりかと。相手に万言の侮蔑の感情を向けながら、狂ったスピーカーのように身を震わせた。

「だからって、赦したりするつもりなんか無いんだけど……さあさあさあさあ、解体ショーのはじまりはじまり」

酷薄な笑みを張り付けたままニルファイがフードを目深に被った。

剥き出しの小さな八重歯がそこから見える。

カーラ・ナーダ
無貌姫

消えた。少女の姿が、ルピの目の前から消えた。響転ソニードではない。文字通り、姿も霊圧も最初からなかったかのように消え失せた。

ルピは知らない。

それが少女を『何者でも無くす』ことで得られる完全な隠形の極致だということ。

「どこだアッ！」

触手の回転数を上げながらルピが叫ぶ。危険だ。アレを自分に近づけさせたらダメだ。本能が警告を発し、触手の壁で身を守る。

だが、

「あ………？」

右腕に違和感がありそこに目を向けた。

切り刻まれ、血が噴出している。それだけならばまだいい。だが無残な見た目以上に、神経だけをずたずたに斬られたことで苦痛の咆哮を上げる。

どこからともなく声が届いた。

「ザエルアポロさんからは人体の構造について教えてもらったんだ。いっぱいね」

その声の方向に触手を突き出す。空振り。

「特に拷問の方法が勉強になったよ。傷口に作った薬を滲ませるだけで、もう軽い拷問になるんだもん」

あらゆる場所に触手を振り回すが、小さな少女の身体をついぞ捕えることはできなかった。

ピツ、とルピの左足に紅の線が奔る。瞬く間に肉が削がれて神経が引きずり出された。驚くほど綺麗な手際だった。崩れ落ちそうな体をルピはなんとか踏ん張らせる。

「くそ、があ………ッ！」

「言いたくなかった？」

「黙れ、黙れ黙れ黙れエ！ ボクを、コケにしやがつて………ッ」

「——そっか。まだそんなに吠えられるんだ。もつと痛めつけて、壊してあげるよ」

宣言と共に、そして下手人の姿すら現れることなく、ルピの右足が切り刻まれた。
………

.....

しばらくして、削れた部屋の床にゴシヤリと落下したモノがあった。血の水たまりが盛大に跳ねる。

刀剣解放の状態もすでに解けていた。四肢は綿密でありながら好き勝手に破壊され尽くし、胴体にくっついていていただけと表現したほうがよかつただろう。それはさつきまでのこと。立つための足はルピの胴よりも少し離れた場所に転がっていた。

「.....う」

最初は四肢だけを狙った攻撃は次第に胴へと及ぶ。腹からは出ていけないものが溢れ、中性的であったはずの顔はもはや判別がつかない。皮が付いている部分が珍しいほどだった。血が刻一刻と全身から流れ出している。

「あ、あ.....」

それでも、ルピは生きている。生かされている。
ザエルアポロの技術と、グリーゼの剣捌けんさばきと、拙い死神の回道。そして他ならぬニルフィの手によって。

痙攣する肉塊の手前の空間に墨を垂らしたかのようにニルフィが現れた。ウサ耳の余分な生地が付いたフードを下ろし、右足でルピの頭を無造作に踏みつける。満面の笑顔でさつきまで解体していた家畜に声を投げかけた。

「ねえルピさん。言つてよ。今までの発言を撤回します、つてさ」

ルピが震えた。喉と肺だけは声を出すためだけに無事である。だが悪態をつくことはできない。もう殺してほしかった。傷と薬の生み出す常識を逸した痛覚が脳を破裂させそうだ。許しを請え。もう解放させてほしい。砕かれた自尊心から、そんなみじめな声がさつきから響いている。

何が何だかわからなかった。何をしてくるのかわからなかった。何を考えているのかわからなかった。何をされるのかわからなかった。冷たい氷のようにルピの全身を凍えさせていた。

何度も何度もルピは抵抗したのだ。

虚閃^{セロ}を撃った。部屋を破壊しようとした。逃げようとした。自殺しようとした。

そのどれもが阻止されて徒労に帰す。

少女はただ行動してただけだ。あらゆる手を使い、今までの発言を撤回させるために。

なにがそこまで彼女を駆り立てているのかわからない。だがルピはそれを考察することすら放棄し、喉を震わせる。

「わ、かった………」

「なあに？ わかった、だけじゃ私はわからないよ」

「て……… て、つかいする………。あやま、る、から………」

もう楽にさせてくれ。

プライドもなにもかも捨て去った懇願。

それを聞き、ニルフィはにつこりと笑う。

「うん。ちゃんと聞いたよ。ありがどうね、ちゃんと謝ってくれてさ。怪我を少し治すね」

ルピの頭から足がどけられた。ニルフィがその足でルピの胸を引つ掛け、仰向けにさせる。体を温かな光が包み、応急処置程度ではないとはいえ、他とは違い練度の低い回道がルピを癒す。

わずかばかり体の感覚が戻った気がした。

予想では殺されると思っていた。けれどニルフィは雑にだがルピの身体に処置を施していく。

呼吸がだいぶ楽になった。助けられたことに、ルピは困惑の声を出す。

「……… ボクを、殺さ……… ないのかよ」

「え？」

「なんで、こんなコト……… すんだよ……… 見捨てられないとか、かよ………」

ルピの言葉にニルフィは困ったように笑顔となる。

そしてしゃがみこみ、

「えいっ」

細腕を回復させているルピの腹に突き込んだ。

絶叫するルピ。その叫びの合間を縫うように、ニルファイが笑顔のまま言った。

「殺すつもりだよ？ キミにはもつともつと廃人になるくらい痛みを与えてから、ね」

なぜだ、と。ちゃんと言ったはずだと、ショートしそうな頭の隅にそんな言葉が思い浮かんだ。視線にも現れていたのだろうか。ニルファイができの悪い子供に教えつけるように答える。

「べつにさ、誰もキミが言葉を撤回したからってそれで全部水に流すなんて、言つてないよ？」

ずぶずぶと肉に手が埋め込まれていく。臓腑を掻き分け、背骨を掴んでシェイクした。

失神したかと思えば痛みで現実に引き戻され、また失神させられる。その感覚がだんだんと短くなっていき、逆に痛みだけはさらにクリアになる。ルピの喉からは意味のない空気だけが吐き出された。

「東仙さんにやれたらどんなに最高なんだろうね？ …… あれ？

気絶しないだよ」

ニルファイの口の端が吊り上げられた。

「どんなに泣いて赦しを乞うても、私はゼツタイに赦したりなんかしない」

叫び声がすぐに収まることはなかった。

とりあえずやってみた

セスタ・バラシオ

第6宮の最上階にある部屋で背を床に預けていたグリムジョーが目を開ける。

どうやら久しぶりに眠っていたらしい。また自分の物となった宮の天井は、相変わらず何も変わっていないかった。昔もこういうことがたまにあった。それからの癖で、グリムジョーは自分の従属官フラシオンたちがどこにいるのかを探すために無意識に探查回路ベスキスを広げようとし……止める。

下官以外はもう誰もいない。グリムジョーだけだ。認めたくもない女々しさに顔を不機嫌に歪ませながら身を起こした。

首を鳴らしながら部屋を出て、これといったアテもなく廊下を歩く。

足音はひとつだけ。いつもなら宮を歩くときならば誰かしらグリムジョーのあとを追っていた。不機嫌なままの彼を諫める小言のうるさい男は隣にいない。

寂寥を覚えるガラではないはずだ。

新しい従属官フラシオンを指名するつもりがないのも、そういった理由ではない。
い。

「……………」

ふと、気配を感じて、まっすぐ進むはずだった廊下を右に曲がる。

しばらく進むと霊圧も明瞭になっていき、視界に朱色の髪が映る。分厚い扉の横の壁に背をもたれかからせ、形の良さげな胸を強調するように軽く腕組みをしながら、静かに目を閉じていた。このように黙っていれば知的な美貌の女が、グリムジョーの足音を耳にして薄く目を開ける。

「勝手に入ってきてるわよ」

「好き勝手に潜り込んでんじゃねえよ」

「仕方ないじゃない、出迎えもないし、あなただって一番上のほうから降りてこなかったんだから。それに帰れとも言われてませんでしたし? もしかして寝てたんですか?」

「うるせえ。なんの用だ」

アネットは非難するような眼差しをグリムジョーに向ける。けれど口調だけは祝福するように、冷たく言った。

「とりあえず、第6十刃復帰おめでとうございます。現世でもあなたが黒崎一護とかいう、ストロベリーなのにオレンジの髪の毛の死神にやられたって聞いただけです。任務成功も兼ねて、重ね重ね」

「てめえの耳は根も葉もねエことを集めるクセがあったのか？ 俺はアイツにやれたつもりなんぞ、これっぽっちもねえんだがな」

「そういうのはどうでもいいのよ。アタシはあなたのご機嫌うかがいのためにここに来たわけじゃないから」

いっぴになくその口調は刺々しかった。

「……止めなかつたわね？ あの娘がルピのことを殺そうとした時に」

グリムジョーは苦虫をかき集めて鍋で煮込んだものを丸のみしたような顔となる。

あの少女がルピ・アンテノールの処刑をするだろうことは理解できていた。彼女の慈悲は、彼女が大切な人だと認めた相手にしか与えられない。だからこそ、彼女の十刃就任エスパーダの時に難癖を付けてきた輩を、ためらいなく殺すことができた。

しかしアネットが怒りを抱いているのは、そこについてではない。

「まさかあそこまでやるとは思っていなかった、なんて、言い訳するつもりなら。アタシはあなたのことを許さないわよ」

「許されるつもりなんぞねえよ」

キツ、とアネットが鋭い目つきでグリムジョーに詰め寄った。

「許されるつもりはない？ それは、それはわざと見ないフリを続けるつもりだから言ってるんですか？」

「てめえに何が……」

「わかるわよ。だって、アタシはあの娘の保護者だから」

ルピの処刑について、誰が見たとしてもやりすぎであったと思うはずだ。体のパーツは指の第一関節にまで及ぶほど解体させられて綺麗に並べ立てられ、緻密に腑分けされた肉塊は血の水たまりに放置さ

せられていた。検分しに来たザエルアポロでさえ「ここまでやるのかい？」と思わず口走ったほどである。

長い時間を掛け、やっと拷問から解放された時でさえ、ルピは生きていたのだ。もう人としての原型を保たずに、だ。狂った者にさえ正気を疑われる所業だったのは間違いない。

グリムジョーだつて覚えてる。

あの部屋の前でグリーゼと共に長い時間を待ち、ついに扉が開かれた時のことを。

『終わったよグリーゼ。……と、グリムジョー？ あはは、キミも待つてくれたんだっ』

弾んだ声でニルフィは喜んだ。そしてグリムジョーは一瞬とはいえ、言葉を失った。

全身を返り血で汚しながらニルフィは、いつものように笑っていたから。シャウロンたちと一緒にいたときや、お菓子を貰ったとき、そしてグリムジョーの隣で微笑んでいるときと同じ様子で、全身を赤く染めていた。

そして手に持っていた、ずいぶんと体積の小さくなったルピを掲げる。

『これでもう、キミの悪口を言うヒトはいないよ！』

アネットとしても想定外の出来事だっただろう。

「いい？ アタシはね、ニルフィがやりたいようにやらせるつもりだけど、限度つてものがあるわ。このままあなたが曖昧な態度を取つてるとそんなものが無くなつてくる。……そのせいで、きつとこれから、矛盾に悩んで答えを見つけれなくて壊れちゃうのよ。ーアタシみたいに、ね」

目を伏せるアネットに、グリムジョーは押し黙る。

「そんなのはアタシもグリーゼも望んでいませんし。それに、そんなことのためにあの娘に強くなつてもらつたんじゃないの。だから、ちゃんとあの娘のことを見てあげて」

聞き終わり、深く深くため息を吐くグリムジョー。頭を乱暴に搔く様子をアネットは何も言わずに見ていた。

グリムジョーは少し間を置いて、最後に一つ、今まで疑問であったことを尋ねる。

「なあ。なんであいつは、俺にあんな構おうとするんだ？」

少し目を見開いたアネットは、なにを今さらと言いたげに、この場に来てから初めて口の端を吊り上げた。

「この城で、本当の意味で最初に助けてくれたのがあなただったからよ」

「……」

それ以上は言葉を交わさずにグリムジョーがそばの扉に手を掛けた。室内というよりもホールといった内装の場所に出る。この宮で最も広い部屋といえるだろう。

デイ・ロイたちがなにかあればこの部屋で騒いでいた。宴、だとかはしゃいでいたのを覚えている。くだらないと一蹴するグリムジョーを無理やり引つ張ってきて、それでも抵抗すればシャウロンの正論武装で言いくるめられてしまった。もう、一度も入るはずのなかった部屋は、使い手が消えてしまったからかひどく空虚だった。けれど今は違う。

ホールの中央にぽつねんと立つ少女の小さな背が見えた。

扉が開いたことに気づいて振り返る。

「ん、おはようグリムジョー。勝手に入ってきてるよ」

「てめえら、ここが自分の家だとか勘違いしてねえか？」

「家かあ。あはは、そうかもね。もしかしたらホントにもうひとつの家かもしれないって思ってたかも。……家族は随分減っちゃったけど」

「減ったところでお前には十分他の奴らがいるだろ」

「それでも空いた穴は埋められないんだ。ううん、埋めたくなんてない。そんなこととして忘れそうになるのが怖いから。歪ませられたくもないし、そうしようとした人は誰だろうとバツを受けてもらわなきゃね」

数時間前には血みどろになっていた右手を見下ろしながらニルファイが自嘲気味に呟く。口元を引き絞ったのは、悲哀のためか、ある

いは憤怒のためか。

けれどグリムジョーの目を見るとときには天使のような微笑みを湛えて^{たた}いる。人懐っこい子犬のように青年の元まで駆け寄り、無邪気で無防備な姿を晒した。擦り寄りゃばかりの様子である。たとえグリムジョーが拳を振るおうとも、避けようとすらしないだろう。

グリムジョーが言葉を選びかねている間に、突然ニルフィが悲しげな顔となる。

「……どうした？」

「あ、あの、ごめんね。現世で私、死神の一人も、その、殺せなくって帰ってきて。色々あってあいつを殺……ううん、言い訳しちゃダメだね。とりあえず戦線復帰させない程度に痛めつけてきたけど、グリムジョーの望んでた結果にできなかったの……。頑張るって言いながら、それすらできなくて」

怯えるように体を震わせながら、顔色を伺うようにグリムジョーを見上げた。眉を顰めた彼を勘違いしてさらに言い募る。

「あ、あの！ 私はもつと戦えるんだ！ 前みたいに幻影使わないで、響^{ソニック}転と白打だけで完封できるようになったし。ホントなら、もつと、戦えるの……。だからまた、チャンスをくれない、かな？ どんな手を使っても殺すからさ、ルピさんみたいにツ。そ、それまで私のこと、好きに使っていいから。ただの慰み物でも、キミがそばに居てくれるなら……満足だから」

嗚呼。嗚呼。ここまで少女の口から言わせてしまうのか。尊厳さえ捨て去った奴隷のような言葉を使わせたことの原因が自分であることに、かつてないほどの苛立ちが胸の奥で^{くすぶ}燻る。

縫^{すが}るような目をしたニルフィを見ると、それが止まらない。知らずに溜め込んできた今までの鬱憤が全てぶり返してきたようだ。ほんの数瞬、下劣な昏^{くら}い感情に身を任せて、この小さな少女にぶつきたい衝動に駆られる。

だが、それをしてどうなるのか。むしろニルフィは涙を流そうとも何もかも受け入れようとするだろう。多数の者が望む比類ないほど甘く熱いモノで何もかも融かしてしまう。そうなればグリムジョー

も後戻りできない。

「もう、いいんだよ」

「え？」

グリムジョーがニルフィの頭に手を置く。不器用で、少し乱暴な手つきだった。そのままニルフィが本心を探るような目でグリムジョーを見つめる。

「行く前に言っただろ。もうそんなこと言うなってな。俺は、お前に無理やり何かを求めてるわけじゃねえんだ」

「そ、それって、私はいらない、ってこと？ そんなのやだ！」

「最後まで聞け。いちいち相手の言ってることに反応すんな。自分で考えて、自分で行動しやがれ。それぐらいできるだろ」

「してるよ、そのくらい」

「俺から見りやあただのイエスマンだぜ」

不安そうな顔のままニルフィが頭を振る。

「でも！ 何かしないとグリムジョーが、みんなが！ 私から離れていつちやつて……」

グリムジョーが屈んで視線を合わせる。そして初めて気づいた。この少女は、自分が思ったよりもずっと小さな存在だったと。「お前が望むってんなら、俺はどこにも行きやしねえよ。言っただろ。付いてくるなら勝手にしろってな。追い出そうとして帰らなかったのは今更だ。そんな貢ぐマネなんかしなくたって、お前が満足できるまで一緒にいてやる」

償いとか落とし前とか、そういった良い意味も悪い意味も兼ねた言葉で表せる。けれどこれが最善の方法だった。今まで一面しか見れていなかったニルフィに、本当に大切なことを気づけさせるきっかけになるだろうから。

「……嘘だ」

しかしニルフィは一步下がると、疑心にまみれた視線でグリムジョーを穿つように見る。

「嘘……。そんな簡単に、手に入るものじゃないもん」

「手に入るんだよ。てめえは、ただやり方が回りくどかったただけだ」

「ち、ちがう。私の望んだものが、こんな簡単に手に入るはずがない。だつて……だつて！」

少女はなにもかも否定するように髪を振り乱す。

「私が生まれてからずっと！ 気が狂いそうなほど長いあいだ独りぼっちだった時間は何なの!? 信用できると思ったヒトが何度も裏切ったから、何度も食べてきたんだよ!? それでも、一緒にいるにはなんでもしてあげることが一番だつて気づいてから、たとえ嘘でも、どんなことされても私は我慢してきたし……。それなのにつ。キミは見返りなんて求めないで一緒に居て、くれるなんて。ー信じられるわけないじゃん!!」

「……………」

なにもニルファイの一部の歪んだ思考回路は、アランカル破面となつてから生まれられたものではない。

もはや固定概念が虚ホロウの時に確立してしまっていたのだ。それゆえに、代償のない幸福など得られないと考えている。無理矢理にでも犠牲を作つて安寧を得ようとしていた。

ニルファイは誰にも会えなかったのだろう。逆に、グリムジョー、そしてハリベルは運が良かっただけだ。信用に値すると判断した仲間が見つかった。けれどニルファイは、いつも孤独の渦中にいたのだ。

「信じる信じないはてめえで勝手に考えてろ。付いてこようがこまいが、俺は一度も強制したりしねえよ」

今まで勝手に付いてきたフラッシュオン従属官たちがいたのだ。今更、手のかかる妹のような少女が後ろをついてきたところで何が変わるのか。それに他の十刃たちだつてそうだ。心の底からニルファイに何かをしてほしいと望んだりはしない。

それは別に邪険にしているわけではないのだ。ニルファイが等価交換として考える代物が、本当は身近にあつただけで。

けれど一朝一夕で根本的な考えを変えられるはずもなかった。

「……わかんない。わかんないよ。キミが離れて行っちゃわかない確証なんて、無いのに。一緒にいられるのは、すごい嬉しいんだよ？ だけど、繋がりが無くなつたままだと、いつかキミが消えたら」

「消えねえしそんな時は俺が死んだ時ぐらいだ。……今はまだ答えを出さなくていい。その空っぽの頭でよく考えろ」

力なく頷いたニルフィは深く俯く。頭痛を耐えるように顔をしかめ、右手で顔を覆った。

「……………ごめんね。今日はちよつと、すぐに帰るよ」

おぼつかない足取りで扉の方へと歩いていく少女の姿は、とても脆そうだった。

—————

リリネットにとって、ニルフィネス・リーセグリンガーという少女とは、一番の親友である。……親友の、はずだ。前置きで言わせてもらうと悪印象の類などはまったくくない。けれど最近、一緒にいることで困ったことがあるのだ。

以前リリネットはその親友に唇を奪われたことがあった。まあ誰に捧げようとも考えていなかったが、常識人としての意識が自衛として気絶し、起きてからニルフィに謝罪された。気まずさはあれど罰せようとは思わなかった。捨てられる五秒前の子猫のような目で見られれば、根が優しいリリネットでは無碍に扱えるはずもない。

あのキスは過剰なスキンシップとして処理する。きつと現世でだって、人間はよくあんなことをしているはずだと。自己の正当化を謀り、とにかくそのときはニルフィを許し、良き友人のままであろうとしたのだ。

問題はその後だった。それから何度か会うたびに、それが浮き彫りとなっていく。——近い。心理的どころか物理的にもニルフィはグイグイと距離を縮めてきた。許したことでさらに懷かれてしまつたらしい。それでも近すぎやしないだろうかと何度も思った。鼻先が触れ合うことも度々有り、何度も強く抱きしめられた。あの自分よりも体温の高い肌が感じられるたびにリリネットの心臓の高鳴りは収まらない。

自然、リリネットはニルフィの些細な動作ひとつを目で追つてしま

うまでになった。

これは友達としていいのかともんもんと考えながら、リリネットは
プリメーラ・パラシオ
第1 宮の廊下を歩いていった。

スタークのところにはアネットが来ている。大人の話だからと追
い出され、一緒に来ているらしいニルファイを探し回っているのだ。

曲がり角にさしかかろうとしていると、

「にゃーん」

「……猫？」

壁の向こうからひよつこりと顔を覗かせた子猫の破面アランガルがいたこと
で足を止める。

「どっから入ってきたの？ ここだからよかったけど、他の十刃エスパーダのト
コ行つてたら危な……一部からニルファイのところに送られそうだけ
ど、とにかく危ないんだけど」

「んにゃーん」

「つて、言つてもわからないか」

クツカプーロ以外の小動物の破面アランガルは初めて見た。

子猫は人を怖がらないようで、短い足を一生懸命動かしてリリネット
の元へと近寄る。そしてリリネットの脚にすりすりとお柄な体を
こすりつけた。

「ちよつ、くすぐったいって」

「にゃふん」

「……カワイイ」

しゃがんだリリネットは子猫の体を撫でようとした。しかし子猫
はその手をすり抜け、リリネットの胸元に飛びかかった。

「うわあっ!？」

子猫に、子猫に押し倒された。いくら自分が弱いとはいえ小動物に
負けたことが情けないとリリネットは思う。

しかしそんな彼女を知らぬとばかりに子猫は彼女の右耳を舐め始
めた。ざらりとした舌が耳の中を弄び、その感覚で腰を浮かせる。

「ちよつ、やめ……舐めるのはニルファイだけ……あ、やーやめろ猫公
!!」

「ぎにゃふん!？」

リリネットのチョップは見事に子猫の頭を捉えた。目がバツテンになった子猫の姿にノイズが奔り初め……姿が消える。体にかかる重さが少し増えた。そして子猫の代わりに、リリネットの耳に舌を這わせているフードをかぶった黒髪の少女が、愛想笑いでおどけた。

「え、えへへ。解けちゃった……にゃん」

「わあああああああっ!？」

叫んだリリネットがニルファイを押し返す。コロコロ背後に転がっていく十刃の少女に震える指を突きつけた。

「二、二ニニニルファイ!? なに? え? ど、どうして」

「いたたた……。どうして突き飛ばすの。キミを舐めていいのは私だけなんでしょ?」

「そつ、それはあの、そう! ニルファイだけで十分って意味で……」

「私がいないと不足してるって意味でもあるんだよね」

「あ、そうか……って、よくあるか! てゆうか、さっきの猫は!？」

ああそれか、とニルファイはフードを取りながら頷く。

「無貌姫カール・ナーダの応用、かな」

「でもあれって、前に見せてもらったけど消えるだけでしょ」

「だけってひどいなあ。キミの首に甘噛みするまで、キミってば少しも気がつかなかったじゃん。あの時のリリネットの悲鳴ったらかわい……」

「それはもういいから!」

湯気が出そうなほど赤面するリリネットを見て、ニルファイがくすくすと笑う。そしてあっさり和白状した。

「私の無貌姫カール・ナーダって、つまるところ『何者でも無くなる』ことに特化してるの。自分の宮にいるウルキオラさんの前でブレイクダンスしてもまるで気づかれなかった優れもの」

「無視されてたんじゃない?」

「姿見せてる時にやったら、顔掴まれて外に放り出されちゃった」

「あ、そう」

「でね。『何者でも無くなる』ことを拡大誇張して、逆説的に、だから

こそ『何者にでもなれる』ように改良したの。……なんて、偉そうに言ってるけど、自分だけの能力なのにまだ使いこなせないんだ。さっきの子猫の時だってあっさり解けちゃったから」

さして威力のないリリネットのチョップ一発で解けてしまう変身だ。いくら霊圧や体重に至るまでなにもかも変化できても、それは所詮ハリボテでしかない。けれど隠業としては十分すぎるほどだろう。驚きを通り越してもはや呆れる。けれどニルファイはさほど頓着していないようで、笑いながらリリネットの耳元で囁いた。

「でも猫舌で舐められるの、気持ちよかったでしょ」

「ッ、~~~~~!!」

羞恥で顔から火が出そうだ。あの痴態を友人に見られるなど、軽く死ぬる。

だからムキになつて否定した。

「そんなことなかったし。ただ、いきなりで驚いただけだから。気持ちよかったなんて一度たりとも思つてませんよーだ!」

目の前の少女より、ほんの少しだけ高い身長と精神年齢から来るプライド。それが難しく考えることなくリリネットの口から出た。

返答を待つためにニルファイを観察すると、リリネットはあることに気づいた。

「ー疲れてるのかな?」

少し憔悴しやうすいした様子しやうすいのニルファイが、

「へえ?」

冷ややかに目を細める。

「私、嘘をつかれるのは嫌なんだ。ほら、正直に言つてよ。さっきも、この前も、『途中で止められたのが名残惜しかったです』つて、さ」

ずいっとニルファイが顔を寄せてきたことでリリネットは思わず後退した。繰り返せば当然リリネットの背は壁に当たり、これ以上下がれることを認めない。

「そ、そんな恥ずかしい台詞せりふ言えるわけないじゃん! それに、あたしはそんなのじゃないから」

「ホントかな?」

「ホントだって！」

「そんな必死なところも可愛いよ。でも、ね」

こらえきれないように嗜虐的な笑みを浮かべたニルファイが、キスが
できそうな位置まで顔を寄せる。シャンプー。あるいはお菓子の甘
い香りが、危険な花を連想させる。

「言ってなかったけどさ。キミは気づいてなかったただろうけど、あの
キスをしたとき、キミって最後のほうー悦よろこんで啼ないてたんだよ
？」

思考が止まった。

「……え？　ウ、ソ……」

正直言って、あの時の記憶はほとんど覚えていない。ただただ驚愕
が内心を占め、とても記憶できそうな状況ではなかった。それでも、
もしかしたら、などという考えが不埒にも頭の隅をかすめる。

「私はキミに嘘なんてついたことないし、これからもずっとそうだよ。
今だって、ホントは期待してるんだよね？」

「そんな、こと……んあつ!？」

ニルファイの細指が、リリネットの鳩尾みぞおちから下腹部にかけて流れる薄
い筋をツーツとなぞる。

「私はあの時からね、キミがよろこんでくれそうなことをしてきたん
だよ。それなのに本心を隠して私に嘘つくなんて、いただけない
なあ」

そのまま右の指でリリネットの唇にそつと触れた。あのキスの時
から、ニルファイが頑なに触れようとしなかった場所。右手の二本の指
を押し付けてニルファイが冷笑する。

「ーほら、舐めなよ」

「……え？」

「嘘なんてついちゃう悪いリリネットに罰。さつき私は子猫を演じて
たし、キミは子犬みたいによければいいんじゃないかな。私が満足した
ら『気持ちよかったです』なんて、言っても言わなくてもいいから」

リリネットは逃げられなかった。ニルファイが左腕でリリネットの
腰を抱き、互いの体を密着させている。いまにルファイから逃げようと

したら、なにをされるかわかったものではない。押し切られていることを自覚しながら、せめてもの抵抗を示す。

「ま、待って。誰か、通るかもしれないから。下官もけっこう居て……」

「恥ずかしいの？ でもダメ。見られたくないなら早く私を満足させたほうがいいよ？」

短い呼吸を繰り返していたリリネットは、一度強く目をつむり、決意を固めようとする。これはまだセーフだ。ただの、まあ、ただのという枠組みにまだ入るのか疑問だが、人間もよくやっているはずの過剰なスキンシップの一環のはずだ。

それに、

「……………」

焦燥に染められたニルファイの目が、放っておけなかった理由の一つだ。

いざ口を開きかけたとき、まどろっこしくなったのか指が強引に挿れられた。リリネットは目を見開く。反射的に閉じかけた唇を割つて、口腔にねじ込まれる。さしたる抵抗はできなかった。すくんだ舌を指で挟まれ、リリネットはようやくのどの奥からくぐもった悲鳴を漏らす。

「ほら、自分からやってよ」

冷たく言われ、リリネットはおそろおそろ、指に舌を這わせた。歯を当ててしまわないように、そして音を立てないように注意しながら、ゆつくりと舌で舐める。柔肉を、舌尖でつつくたび、包み込むように舐めるたび、ニルファイが肩を震わせる。何かに耐えるように眉をひそめ、潤んだ瞳でニルファイはリリネットを見入っていた。誰かがこの通路を通れば言い訳などできない状態だ。しかし本人の知らぬところで、リリネットは罪悪感と背徳感で、背を痺れさせている。

されるままだったニルファイが突然指を動かし、今度はリリネットの舌をこねくりまわす。時には挟み、時には引っぱり、飲み込むことができなかつたりリリネットの唾液が顎へと伝う。

「あ……………」

ゆつくりと指が引き抜かれた。思わず、切なげな声が喉から溢れるのをリリネットは自覚した。唾液にまみれていやらしく光る指をこれみよがしにニルファイがゆつくりと舐め、得も言えぬ羞恥心でリリネットの顔がこれ以上ないほど赤くなった。

「ね、言ったでしょ？」

否定の言葉が思いつかない。

耳元で囁かれながら、弱々しく頭を横に振るだけだ。

「私、もう満足しちゃったんだ」

「……………」

「あ、もしね。これ以上が欲しかったら、『途中で止められたのが名残惜しかったです』って言いなよ。それなら私ももう少し付き合っただけよ。ーだって、友達だからさ」

「……………す」

「え？ なにかな、聞こえないよ」

「途中で止められたのが、名残、惜しかったです…………」

「あはは、そっかあ」

切羽詰まった、余裕のないニルファイの顔。待って、と言う間もなく、リリネットは乱暴に唇を奪われた。

ニルファイがリリネットを貪る。腰に回されたニルファイの腕はリリネットに怪我をさせないように注意が払われていたが、それでも、リリネットのささやかな抵抗を押さえつける。

「はっ、はあっ、はあっ……………ん、ふ…………っ」

「あ、んっ…………」

混じりあつた吐息とこぼれ出る嬌声が、互いに目を閉じてその感覚に集中する二人の意図しない欲求を駆り立てる。舌を絡ませ、唾液を飲み干し、何度も何度も。

荒い呼吸を繰り返し、わざと音を立ててニルファイはただリリネットの唇を貪った。押さえつけられ、ふるふると震えていた。リリネットの腕から力が抜けていく。どれだけ貪っても、興奮は治まらない。それどころか、さらにエスカレートしていく。もつと、もつと。動物的な欲求が頭の中を埋め尽くしていく。

以前のキスよりも長いあいだやっていた気がする。そしてふいに、ニルファイが顔を離れた。荒い息遣いに艶やかな吐息が混ざる。

「はあっ、あ、んっ……」

酸素を求め、だらしなく開いたりリリネットの口から最早どちらのものかも分からないほど混ざり合った唾液が糸を引いて、こぼれ落ちた。

押し付けるように密着させていた身体を少しだけ離して、ニルファイはリリネットの身体を撫でるように手を滑らせる。くすぐったさで、熱を持った体が身震いした。

「嫌だったかな？」

「……嫌なんかじゃ、なかった、けど」

「私のこと、嫌いになったかな？」

「はあっ、はあっ……。嫌いになんて、なるはず、ないじゃん。それに」
リリネットが力の入らない身体を無理やり動かして、ニルファイに寄りかかる。黒髪の少女は悲しげな顔をしていた。それに聞かせるために、熱くなった喉を震わせる。

「どうしてあんたがこんなことしたか、わかってるから。こんなことしなくても、あたしたちは友達だからさ。……ずっと一緒にいられるんだよ。だから、無理やり心を殺して、こんなこと、しないで」

「……グリムジョーと、同じこと言うんだね」

「言うに決まってんじゃない。あんたが、そんな苦しそうな顔してるならさ」

「そうかな？」

「そうだよ。どんだけ時間あるかわかんないけど。少しずつでいいから、これから、あたしたちのことをー信じて。見返りのない仲間ってやつをさ」

「……………」

ニルファイは唇を尖らせてそっぽを向く。

「調子いいこと言うんだね」

「仲間友達だし」

「……そっか。信じきれてなかったのって、私だったんだね」

優しくリリネットを抱擁する。

「少しぐらい、信じてもいいかな」

まだ完全には言い難いが、それでもやっと、ニルフィは違和感というものを形として捉えられた。それを取り除くかどうかはニルフィ次第だ。見失っていた目的と手段を見つけられるかどうか、彼女次第。

肩の力の抜けたリリネットの頬に軽く口づけをすると同時に呟く。

「私もこういうの、ただの作業としてやってたわけじゃないんだよ」

「ーえ？ それってどういう」

ニルフィはくるりと身を翻し、

「……さて、と。なんかスツキリしたしアネットたちのところに戻ろうっと」

「待つて！ まだあたし力が抜けたままで……」

「それは、もう一度したいってこと？」

「あ、う。~~~~~！ もうからかうな！」

何かが多少変わっても、リリネットはこの黒髪の少女に終始翻弄されることは変化しないらしかった。

リリネットは唇に指を這わせ、まだ感じられる温かさを振り払おうとした。

あなたが好きだから

目が覚めれば見慣れた天蓋がある。ぼーっとした表情のままのニルファイがゆつくりと起き上がり、目をこすりながら可愛らしくあくびをした。小さな口からは八重歯が覗く。

「みゆう……」

頭をふらふらと揺らしながら霧もやのかかった頭で考えた。

最近、ニルファイの睡眠間隔が短くなってきた。そしてよく眠るようにもなった。寝ることを我慢し続ければ電源が切れたロボットのように、突然眠りの世界に突入することだってある。それだけ抗えないものだ。

眠る前にはたしか……リリネットに思いつきり抱きついたところで記憶が途切れていた。そこからアネットに回収させられたか。

「んぐ……いー よく寝すぎたあー」

呂律ろれつの回らない声だ。ニルファイは寝起きというものに弱かった。

「ああ、おフロ入ろっかな」

下官に世話を見てもらえばいいのだろうが、以前そうした時アネットがものすごく不機嫌になったのだ。だから風呂に入るときはアネットと一緒に思っている。

ネグリジエを脱ぎ捨て、適当に死覇装を羽織る。はだけているがどうせあとでまた脱ぐのだと、時間を惜しんで寝室を出た。アネットの霊圧は宮の内部を移動中だ。用事がないときはいつもそこにいるから、彼女の部屋で待つてたほうが早い。

ニルファイはいまだに寝ぼけ眼のままあっちへふらふらこっちへふらふら、非常に危なっかしい足取りでアネットの部屋を目指し、ようやく覚えた道順で迷うこともせずにとどり着く。

まだアネットは来ていない。

一応ノックをしてその扉を開けた。

「……よし、間違つてなかった」

満足そうに頷いた少女は部屋の中へと入る。あまりここへはやって来たことはない。アネットのことは大好きだが、この部屋はあまり

ニルフィにとっては心休まる場所ではなかった。最初に訪れた時から感じていたことだ。

多数の者はアネットの性格から、ダンスいっばいのニルフィ用の可愛らしい服を溜め込んでいるとか、派手な内装を凝らしていると予想するだろう。けれどそれはまったくの間違いである。

ひどく殺風景なのだ。

狭い正方形の部屋には家具は一人用のテーブルと椅子だけしかない。ウルキオラの宮もこんなものだが、あそこは椅子一つだけでも広大な空間があった。むしろ狭いこちらの部屋のほうが空虚に思える。それは使用者の性格からしたギャップも理由だろう。

あとで聞いた話だが、ニルフィがリリネットと初めてキスを交わした部屋が、もともとアネットの部屋だったらしい。第1ブリメーラ・パランオ宮の奥深くにあったあの暗くて物寂しい部屋だ。

「一本？」

けれど今日はテーブルの上に置かれているものがある。物珍しきでニルフィが覗き込んだ。

古い、今にも風化してしまいそうな革表紙の本だった。表紙は擦れて題名は読めない。以前は無かったはずだが、たしかリリネットとキスをした日にアネットがニルフィに付いてきたのは、宮に忘れたものを取りに来たと言っていたのを思い出す。これが、そうなのだろうか。アネットが十刃エスパーダであったところに取り寄せたか。

子供特有の興味心が顔を出す。見かけだけ淑女然としたアネットが彼女自身のために得たであろう本とは、どういったものなのだろう。

ニルフィは表紙に手を掛けてめくってみた。

破かないように細心の注意を払い、ぱらぱらと流し読みをしている。道順以外の記憶力なら自信がある。一秒に一枚をめくっていくペースでも、ニルフィは本の内容を頭で理解できた。

なんのことはない、ただの恋愛小説だ。数百年前の現世でもこういったものが世に流れていたのだろう。

一人の女の主人公が、幼馴染二人に恋心を寄せられる話だ。ただ、

その幼馴染は少年と少女。つまり異性が同性かということ。そこ以外は取り立てて変わった様子もなく、もう少しで主人公がどちらを選ぶかというところになり……。

「ーニルファイ？ なにしてるんですか？」

「わ!？」

いつのまにか扉を開けていたアネットの声で我に返る。

「え、と。その、おフロ入りたくてアネットのこと待ってたんだけど、暇だったから、つい」

「ああ、いいのよ。別に怒ってるわけじゃないから」

「ごめんなさい」

「だからいいって言ってるでしょ。見られて困るものなんて、この部屋に隠せるはずないじゃない。隠し事なんて胸の内にはかやりませんし」

ニルファイのそばに寄るアネットが、閉じられた本の表紙を撫でる。

「もうだいたい前に手に入れたものでね。現世じゃもう出回ってないと思うわ。それくらい、古い本なの。中身も古臭かったでしょ」

「……よく、わかんなかった」

「ふふ、まだ理解できなくてもいいんですよ」

理解できないことといえば、まだニルファイはアネットやグリーゼについて深く知らない。表面を撫でるような情報しか聞いたことがなかった。

いや、原因はわかっている。深く知ろうとしなかったのは怖かったからだ。

なにかを知ったからといってこの関係が脆く壊れるとは思っていない。しかし、直接聞こうとして顔を上げて、小首をかしげるアネットの顔を見ると途端勇気がなくなってしまう。

だから誤魔化すことしかできない。

「早くおフロ入りたい」

「あらら、そういうえばそうでした……。でもこおんな服をはだけさせちゃって、誘ってるの？ どうせお風呂に入るんだし、今からでも濡れてく？」

「濡れ……？　なんで濡れちゃうの？」

「フフツ、それを今からよがり狂うまであなたの体に教え込んであげ……　ちつ、グリーゼがプレツシャー掛けてきたわね。どんな地獄耳なのかしら。ごめんなさいね、今度教えてあげるわ」

優しげな表情でアネットがニルフィを抱き抱える。

疑問が募れば募るほど、アネットのいつもの表情が嘘くさく見えてしまうのは気のせいだろうか。

もやもやした気持ちのままニルフィは風呂場へと抱えて行かれた。

「……………」

身体を洗い終わりアネットと共に湯船に浸かっている。アネットの膝の上に抱えられたまま、ぼーっと湯気のあとを目でおっていた。抱きしめてくれる腕が心地よかった。

そしてついに膨れ上がっていた疑問を我慢できなくなった。

「ねえ、アネット」

「どうしたんですか？」

「……　ラティア・ツーベルグ」

ニルフィがその名を口にしたとき、アネットがスツと目を細める。

「誰から訊いたのかしら。まさかグリーゼってワケじゃないでしょ」

「アールニールから。この前の鬼道の練習の時に、ね。でもアールニールのことを怒らないであげて。ずっと虚夜宮ラス・ノーチエスにいたって理由だけでなにか知ってると思っただから、私がずっとしつこく訊き続けたの。私が十刃エスパーダになってから、ずっと」

「へえ」

しばらく考えるように沈黙していたアネットは冷たい口調のままニルフィの肢体を撫でる。

「ニルフィ？　ヒトって知られたくないことがいっぱいあるのよ？」

そこにわざわざ土足で踏み込むなんて、好奇心は猫をも殺すって言葉を知らないのかしら。それとも本当に猫になりたいの？」

「あ……………」

アネットの右手がニルフィの右膝からだんだんと上に滑っていく。脚の付け根まで来ると際どい部分を焦らすように撫でまわし、よく

わからない感覚にニルフィは吐息を吐くように声を漏らし、身をよじった。

「どこまで訊いたのかしら。場合によってはあの試験管野郎の頭を破裂させるわよ」

「ん…… ラティアさんっていう、アネットの従属官フラシオンがいたこと。それで、その人が、うあ、死んじやった日に、キミが十刃エスパーダを降りたってこと、くらい」

「他には聞かなかったの？」

「あとは本人に訊けて、アールローロさんが」

少し前にとうとう折れたアールローロが条件を出した。すなわち、憶測にしかならないことは話さない。それが彼なりの誠意なのだろう。アネットに対しても、ニルフィに対しても。

少ししか情報を引き出せなかったが、アネットが十刃エスパーダを降りたきっかけはラティアという破面アランカルが関係しているというのはわかる。断言はしなかったが無関係ではないだろう。

愛撫する手を止めたアネットがニルフィの耳元で囁く。

「どうしていまアタシに、そんなことを訊くんですか？ アールローロから教えてもらってからそれなりに時間が経ってるわよ」

「ホントなら、アネットが自分から私に話してくれるまで待つつもりだったよ。きつと話してくれるって疑いもなく信じてた。アールローロから聞いたことも、ずっと胸に締まっておくつもりだったんだ」

「じゃあ、どうして？」

「アールローロが最後に言ったんだ」

『「お前とアイツは似ていたよ」。何気なく付け加えた一言が、ニルフィのなかで大きなしこりとなっていた。』

少女は酸素を求めるような短い呼吸を押しとどめ、か細い声で言う。

「それで、思ったの。キミが私と一緒に居てくれるのは、私とラティアさんを重ねてるだけだからじゃないのかって」

そこまで考えたときの感情はいまだに整理できていない。

自分と他人を重ねているだけでも一緒に居てくれるのならすごく嬉しい。けれどその中に、なぜか空虚な悲しみがあつた。他人に目を向けすぎていた弊害だ。ニルフィは自分のこととなると、途端に頭がうまく回らなくなる。

言葉に表現できないが、アネットの目を自分だけに強引に向けさせるのは、なぜかやってはいけない気がする。

それは大切な人を侮蔑してはいけないのと同じ気がした。

後悔とやるせなさで震えるニルフィ。アネットはため息を吐き、皮肉そうに口の端を吊り上げる。少女に投げかけたのは、肯定でも否定でも侮蔑の言葉でもなく、過去を懐かしむような声だった。

「ラティア、ね。なんだか久しぶりに聞いたわ」

ぽたり、とアネットの朱色の髪の毛の先から水滴が落ち、水面に波紋をつくる。

「すごく、弱い娘だった。とてもじゃないけどNO.1の従属官なんて思えないほどにね。――小さなリスの虚ホロウに吹き飛ばされるくらい弱かったわ」

「リスに!？」

「あ、違いました。――蝶蝶ちようちよと戦って吹き飛ばされたんです」
「蝶蝶!？」

あのふわふわと飛ぶ羽の生えた虫相手にどうやったら吹き飛ばされるのだろうか。吹き飛ばされるまでのシチュエーションすら謎だ。そしてなぜ戦闘になった。

「昔の虚夜宮ラス・ノーチエスって今ほど安定してなかったんですよ。それで用事だとか任務だとかで、十刃エスパーダでも人手が必要だったの。ここにきて番号貰ったばかりのアタシは、適当に従属官フラシオンを選んで、それでラティアがたまたま従属官フラシオンになったのよ」

フツ、とアネットが遠くを見て、

「黒歴史だけど、ウルキオラ並みに昔はスカしてたアタシはいろんなことに無頓着でした。だけど、それでもなお、現世でいえば女子高生くらいの姿をした美少女を手元に置くとは、アタシのフェチズムの片鱗は数百年前からあったみたいね」

色々台無しである。

「どういう人だったの？」

「金髪の小さなポニーテールが可愛くて、人一倍元気な娘だったわ。最初はうるさくて何度殺そうと思ったか。弱いくせにアタシの心配をして指図するの。まるで天真爛漫って言葉がヒトになったみたい。……こんな世界に生まれること自体が間違ってたって思うほどにね」

濡れたニルフィの髪に指を絡めるようにアネットが少女の頭を撫でた。

アネットの目はラティアのことを話すと楽しそうに輝く。それを見上げながら、黙ってニルフィは話の続きを待つ。

「何年経ってからだったかしら。代わり映えのない生活だったけど、ラティアが隣にすることが当たり前になってたわ。あの娘のおかげで気取ってたアタシは居なくなっって、今のアタシがいるわけですけど。それからまた何年も経ってアタシは気づいた。ラティアに惹かれてるってことをね」

甘美な蜜を味わうようにアネットが目を閉じる。

「優しくされたことなんてなかったからかしら。無鉄砲なアタシをいつも心配してくれるあの娘に、いま思ってもチョロイほど傾倒しちゃった。ー妬やいてる？」

「……うん。ちょっと、ううん、すごく羨ましい」

「フフ、素直な娘は好きよ」

「ふん、続きは？」

「そうね。向こうも立場とかを気にしない性格だったし、なあなあで受け入れてくれたわ。外野がどう言おうと、冷やかしてこようと、逆に熱いを通り越して灰にさせてやった。それだけアタシにとって、彼女は好きな相手になった。ニルフィが部屋で読んだ本もその時に手に入れましたっけ」

恋とかそういう感情が欠落しているのはニルフィも経験がある。だから今までの暴走がその原因となった。そうなると必ずアネットが忠言してくれたのは、彼女も同じ道を進んだことがあるからなの

か。

「愛してたの?」

「もちろんよ。友愛も親愛も情愛も恋愛も性愛もすべて、その時に覚えただから」

歪んでる、とはニルファイには言えなかった。どちらかといえばニルファイだって似ている。少女はその対象が多いだけで、女はただ一人にすべてを捧げた。それだけの違いでしかない。

ぎゅつと、アネットがニルファイを包む腕に力を込めた。

「でも、綺麗でありながら爛れた時間ただは続かなかつた」

ニルファイを抱きながらアネットは腕を上げ、湯を掬すくった手を開く。トパトパと湯は水面に落ちていった。

「さつきも言ったみたいに、昔の虚夜宮ラス・ノーチエスは今ほど安定してなかったんですよ。藍染の統治もまだ完璧じゃなかったの。小競り合いなんて日常茶飯事だったけど、禁止されていた十刃エスパーダの私闘がたまたま起こった……間が悪かった。それだけかしらね」

朱色の双眸が光を帯びた。

「たまたまアタシたちが近くにいるときに戦いが始まったの。ラテイアは、弱かったあの娘は、開始早々の余波で死んだわ。ハハハ、いつからだったかしら。あの娘は弱いけど死ぬはずがないって錯覚してたのは。アタシはしばらく呆然としてたわよ。居なくなつたあの娘の腕だけを抱えて、それで名前を呼び続けて」

「……アネットは、それからどうしたの」

「原因になつた十刃エスパーダが目に入った瞬間、マジグレしちゃいました。もう殺すことしか考えられなかった。どっちがラテイアを殺したとか、もうどうでも良かった。その時のNO.3トレスとNO.8オクターバを真正面から焼いて、そいつらの従属官フラシオンも合わせて八人くらいを消したわね……気が晴れることなんて、なかったのに」

そこからは当たり前のようにトントン拍子に進んだ。

「十刃二人とその従属官フラシオン八人殺した罰。それと虚夜宮ラス・ノーチエスの大部分を灰にした罰エスパーダで、アタシは自主的に十刃を降りた」

「アネットは悪くないよ。悪いのはー」

「ありがとう。そう言ってくれるだけで嬉しいわ。でも罰が無かったとしても、ラティアが居なくなったらアタシには十刃エスパーダを続けるつもりなんてなかった」

途中途中におどけた様子で語り続ける。それでも声が、抱きしめてくれる腕が、かすかに震えていることにニルフィは気づく。

大切な者が居なくなってしまうって、どれだけ辛かったのだろう。ニルフィは、シャウロンたちが死んでもまだアネットたちがいた。代わりではなく心の拠り所がまだあったのだ。けれどすべての愛を一人に捧げていたアネットは、すべてを失ったことでどれだけ苦しんだのだろう。

「ああ、そうだ。覚えてる？　あなたが初めてトレス・シフラス3ヶ々の巣にやってきたときのこと。グリーゼに追いかけられてたでしょ」

「あつ、見てたんだね。どうせなら助けて欲しかったよ」

グリーゼとのチェイスを観戦する視線がいくつかあったことに気づいていたが、その中にアネットもいたことには素直に驚く。

「そこで初めて、アタシはあなたのことを知った。似てるって思いましたよ。髪の色も身長も声も肌もなにもかも違うのに、似てると思った。ほかでもないラティアに」

だから、アネットはニルフィの従属官フランオンになったのだろうか。

それだけは改めて訊きたくなかった。今の関係が壊れてしまうのが怖いと本能が叫んでいる。

…… けれどそれはただの思い込みで。

「でもね、ニルフィ。あなたはあなたよ。どれだけラティアに似ていても、あの娘がもうどこにもいないのは理解できてる。アタシはあなたをラティアとして見たことなんて一度も無い。それだけは覚えておいて欲しいの」

弱々しくアネットを見返す。

「…… ホントに？」

「当たり前でしょ…… ラティアの他にも、アタシのことを好きだと言ってくれる相手がいるのに、それを他人に見立てるなんてことはしたくないのよ」

「私を、私として見てくれるの?」

「大切なあなたが望むなら、どれだけ愛してあげてもいいですよ。それがどんな形であれ、ね」

「……………」

ニルファイは体の向きを変え、アネットと鼻のふれあいそうな距離で向き合う。真っ直ぐ見つめ合い、それぞれの金と朱の瞳が熱を帯びる。

「私は大好きだよ、アネットのこと。キミが私を好きでいてくれるのなら、私もずっとキミを愛してあげる」

「ありがとう。それだけで十分よ」

互いに額を触れ合わせた二人は小さく笑いあい、腰に腕をまわして顔を近づけ、そして――

――

それなりの時間のあと風呂から出て、ふらふらと頭を揺らめかせるニルファイを代えたシーツの上に寝かしつける。

疲れてしまったからだろう。ニルファイを疲れさせてしまったアネットにも責任があるが、寝室に戻ってきたニルファイに再び睡魔が襲ってきたようだ。最近の睡眠時間は不安定になっている。寝落ちすることも珍しくなくなり、うとうととしてきたらとりあえず寝室に連れて行くのだ。

「ねたくな〜い……………」

「辛くなるのはニルファイですよ」

布団をかけ直してあげたアネットがニルファイをなだめる。

「ねたくないよお」

「そう言いながら睡魔には勝てないんですから、無理しないでください」

「みゆうう……………」

必死に睡魔と闘っているようだが、少女の目には霽もやがかかっていた。これは落ちるのも時間の問題だ。

「ねたく、ないの」

「どうしてそんなに抵抗してるのよ。ほら、次起きるまでアタシがそばに居てあげるから。安心しなさい」

「……こわいの」

「怖い？」

アネットが聞き返す。

呂律ろれつの怪しい舌でニルファイが言った。

「めがさめたら、また砂漠のまんなかだと思うと、こわいの。これが夢なんじゃ、ないかって。ぜんぶ無くなるのが、こわいの。だから……ねたくないよう」

触り心地の良い黒髪を撫でたアネットは、苦笑気味に嘆息する。

アネットは腕を伸ばして少女の小さな手を握った。

「ほら。これで、アタシはずっと一緒に居るわよ。だから、ね？ いまは寝なさい。あなたが起きてもちやんと隣に居てあげるから」

見えているかも怪しいが、ニルファイはわずかに頷いて瞼まぶたを閉じた。

離すものかというように固く握られた少女の手を包み、虚空を見上げながらアネットが小さく零す。

「怖い、か。アタシも……ああ、怖いなあ」

その眩きは部屋の薄闇に紛れて消えた。

間話 寝物語

グリムジヨールは不機嫌さを隠すことなく自分の宮にやってきた女アランカル破面二人を睨んでいた。昼寝をしようと思っていたら、ニルフィとアネットが門を叩いたのだ。そのまま無視していると主にアネットに何をされるかわからないので入れてやったが、昼寝をしようとしている自分の横にいてほしくなかった。

「なあ」

「どうしたんですか？ なにかご不満でも？ こんな美女美幼女が隣にいてまさか不服なんてことはないでしょうね」

「内面がお淑やかなら完璧だろうな。……んなことより、本くらいてめえらの宮で読んでろよ」

「気分的にここがいいなあ、なんて思ってる」

「ふざけんな」

強引に連れてこられたのだろう。ニルフィが申し訳なさそうに、アネットに抱えられたまま謝る。

「ごめんね、グリムジヨール。あの、静かにしてるから、その……」

「ああ、もういい。うるさくすんなよ。特にその煩惱女」

「はあ？ アタシのことを煩惱呼ばわりなんて、器が小さいわね。アタシはまだ一割も力を出してないというのに」

「力出し切らないうちに野垂れ死ね」

グリムジヨールは寝返りを打って二人から背を背けた。

静かになど期待できない。アネットはニルフィに絵本の読み聞かせをするとかで、彼女のそばにある袋からはいくつもの絵本が入れられていた。そんなものすぐ隣でするなどと言ってもアネットの性格からして聞き入れるはずもない。グリムジヨールだけ場所を帰るのもなんだか負けた気がするので、意地でもやろうとは思わなかった。

ニルフィを抱くようにして座り、さっそくアネットが一冊の本を取り出した。

「えーと、『マッチ売りの少女』ね。これでいいかしら」

「うん、おねがい」

つまらなさそうな話だ。聞き流せば子守唄のように眠ることを促進させるかも知れない。

グリムジヨールは目を閉じ、適当に聞き流そうとした。

「ーあるところに、ブツがさばけず困っている売人がおりました」

「おい待てコラ」

身を起こしたグリムジヨールがツツコミを入れる。

「それちゃんと童話なんだろうな」

「マッチ売りの少女知らないって、あなたもしかしてモグリね？ 当たり前じゃない。現世の子供なんてみんなこれ聞いて育つてますよ」

「……嘘だろ？」

「ホントですよ。文句は最後まで聞いてから言ってくださいな」

舌打ちをしたグリムジヨールは再び背を向けて寝つ転がった。色々言いたいことはあつたが、それはアネットが言ったように最後まで聞いてからだ。

「では続けますよ。ーそこは治安のいい街でした。わざわざみすぼらしい格好をした、しかし着ているのが絶世の美少女という、もう狙ってるのかというほど妖しくも怪しい者の売るモノには、誰も手を付けません。なにも売れずに帰ってしまうとキズモノ（意味深）にされてしまいます。彼女は裏で生きる人間ではなく、ただの養う家族が多い、不幸少女だっただけなのです」

ここまででどれだけツツコミを入れればいい箇所があつただろうか。

背中越しに振り返るが、アネットは真面目な表情で読みすすめていく。原作を知らないグリムジヨールに指摘できるところはなかった。けれどおかしいと思うのは間違いないだろう。

「困り果てた売人少女は一時の気の迷いから商品であるブツに手をつけました。売人少女がブツを燃やすと煙が出て、幻覚をとまなう強烈な多幸福感を得ました。ですが煙は短い間しか生まれません。少女は取りつかれたように次々とブツを燃やしていきます」

「……………」

「そしてついに少女は昇天するような顔で言いました。『神様が、神様

が見えるよお!』と」

「どう考えてもおかしいだろうがツ!! 他のやつをそいつに読ませやがれ!」

子供には教育上まったくよくない童話である。物は言いようだった。

話を妨害されたアネットは不服そうに言った。

「なんですか、わがままですね」

「てめえが自由すぎんのが原因だよ」

「せっかくグリーゼの目がないところでニルフィをいやらしく洗の……ちよつと見識を広げさせようとしただけなのに」

「不穏な言葉を使うなよ」

これは駄目だとグリムジョーは思った。アネットの腕の中のニルフィが、このままではアレな方向に育ってしまう。ただでさえいつも無防備で、エスパーダ十刃たちもそれなりに注意を掛けようと少しだけ話し合ったことがあるほどだ。

ニルフィを気に掛ける、というわけではない。この場にグリムジョーが残るのは意地のためだ。

そう自分で納得し、グリムジョーはゆっくりと目を閉じる。

「あ、これは面白そうね。『人魚姫』ですつて。まあニルフィは人魚にならなくても絶世の可愛さがあるけど」

「どういう話なの?」

アネットが軽やかに微笑む。

「ふふ、じゃあ読みませうか。コホン。ーある日人魚姫は、溺れていた人間の男を助けました。姫はその男に恋をしてしまい、もう一度逢いたくて仕方ありません。そこで海の魔女にお願いしたのです。ロマンチックに『わたしを人間に……いえ、それよりも手っ取り早い方法があるわね。お願いします、地上を海に沈めてください! あの人だけまた助けて、彼のことを好きな女を事故死として失踪させられるわ!』と」

「ロマンチックじゃねえだろ。ただのバイオレンスだろ」

なんだその人魚姫は。ヤンデレにもほどがないだろうか。

「さつきからなんなのよあなた。アタシの語り部にいちやもんばかり」

「まさにブーイングものだからに決まってるだろうが！」

グリムジョーが耐え切れずに叫んだ。無視することもできず、聞き流せる内容ではとても無かった。

新しい本を取り出したアネットが肩をすくめる。

「じゃあ、これね。『超究極絶炎神聖剣ギガスパイダーローリングスラッシュ伝説』」

「却下だ」

「わがままね。ニルファイ、どれがいい？」

「……ん、これ……」

「群像劇ものね。さすがニルファイ、見る目があるわ」

ニルファイの見る目が信用できないグリムジョーは、警戒しながら耳を澄ませた。

「ある農村で、モンスター退治に出かけたAさんとBさんが洞窟に向かうと、Cさんが洞窟の前に立っていたのです。Cさんはなにか怯えた様子で洞窟を見ていました」

意外にも普通だ。初っ端かたぶつ飛ばしていくかと警戒していたグリムジョーは肩透かしの気分を味わう。

そうしているうちにも物語は淡々と進んでいく。

「洞窟を覗いてみると、大きな熊のモンスターがDさんを引きずっているのです。その先には、EさんとFさんがいました。それを見たBさんとCさんはEさんとFさんに走り寄り、AさんはDさんとEさんとFさんをCさんのところに。応援に駆けつけたGさんとHさんとIさんが熊にむけてジェットストリームアタッカー」

「多すぎんだろうがア!! わかるわけねえだろ！」

「……そうして、Vさんは死んでいたのです」

「誰だよ！ 出てなかっただろうが！」

「唯一の目撃者であるアピラマさんは、今でも眠れないそうです」

「なんでそいっただけ名前あんだよ！ ただAでいいだろうが！」

絵本をぱたんと閉じたアネットは抗議の視線をグリムジョーに向

けた。

「いちいちうるさいわね。あなた大雑把な性格なのに細すぎるのよ。洗脳がうまくいかないじゃない」

「隠す気も無くなってるじゃねえかよ」

「いいでしょ、これくらい。もうニルフィは寝ちやっただし」
「あ？」

いやに静かだと思えば、ニルフィはすやすやと寝息をたてている。つまらなかつたというよりも睡魔に勝てなかつたような穏やかな寝顔だ。

それを見てグリムジョーは自然に声のトーンを落とす。

「寝てるじゃねえか」

「見ればわかるでしょ。最近、無理して眠らないようになってきて、それでね。あなたの近くならリラックスできるんじゃないかと思って」
「どういう意味だ」

「知らなくて結構です。これでも妬いてるんだから」

なぜアネットから責めるような眼差しをされるのかわからない。なんだか理不尽だ。抗議する権利ならグリムジョーのほうがあるはずだった。だが抗議しても、アネットは涼やかな顔で流すだろう。

その場にそつとニルフィを寝かせるとアネットもその隣に寝っ転がる。ニルフィを挟み、川の字で三人は横になっていた。アネットが身を寄せたせいか、寝ぼけたニルフィがグリムジョーの背にコアラのようにひしつとくっついた。

「ここで眠んな」

「あらあら、もしかして添い寝がお望みですか？　あなた相手なら考えないこともないわよ」

「いらねえよそんなの。てめえらの宮にある大層なトコで寝やがれ」

「たまにはいいでしょ、たまには。……この子はいつも一人で寝てるから。一人で寝かせたくないの」

「……………」

なんとも面倒くさくなったよグリムジョーは思った。

過保護すぎる保護者になったアネットは昔とは大違いだ。

グリムジョーとアネットが初めて邂逅したのは、彼女が十刃エスパーダになつて間もない頃だつた気がする。バラガンが大帝とするなら、かつてのアネットは、まさしく女帝だつただろう。後に従属官フラシオンであつたラティアのおかげで現在のようになるが、そのときは今とは別人のような性格だつた。

傲岸不遜で他人をゴミとしか見ていない暴君。宮殿において彼女はまさに荒れ狂う台風のようだつた。

そんな危険な女とNo.12アランカル・ドセであつたグリムジョーが戦つたことがある。理由は忘れたが、目があつたとかそれくらいくだらないものだろう。

………結果は、アネットに炎を使わせることもなく、肉弾戦でグリムジョーが敗北した。フルコンボでフルボッコだつた。以前のニルファイが一時的に大人になつた時の制裁の比ではないほど、グリムジョーは徹底的に痛めつけられたのだ。

『クズはクズらしく底辺を彷徨さまよつてろ。ゴミがアタシを見上げるな』
絶対零度の声音でアネットは吐き捨て、去つていった。

その時の屈辱を思い出したように話してみると、

「え？ 言つてましたっけ？ ていうか、誰ですかソレ？」

「てめえだよ」

屈辱をバネにグリムジョーはどうとう十刃エスパーダとなつたが、その時にはもうアネットは丸くなっており、戦いを挑んでも面白半分に流された。そして本気の戦いが実現することもなく、アネットは十刃エスパーダを去つた。

「でも、もう戦えませんかよ、あなたとは」

前よりも戦うことができない理由である二人の間の小さな少女。

ニルファイの頬に掛かつた黒髪を払いつつ、アネットが言った。

「あなたもそうでしょう？」

「……………チッ」

グリムジョーは舌打ちをするだけで答えない。しかしそれこそが、否定ではなく肯定であることを如実に表している。

「こんな茶番な時間が続くと思つてんのか」

「思う、っていうより、願ってるわ。生きていられるならずつとそうなればいいって、ね」

か細い呟きを聞き、そして今度こそグリムジヨールはそれを聞き流し、目を閉じた。それ以上アネットもなにか言うことはない。

変わったのはグリムジヨールも例外ではないかもしれない。

けれどそれを認めるのはなぜか癩しやくであり、アネットの生き様を知っていると、背中越しの少女を受け入れるように思えて躊躇う。

『今』が変わらなければいい。

そう思うのは、『今』が幸せな者に限り、もしかしたらグリムジヨールもそこに入るのかもしれない。

間話 ハロウイン・オブ・マスク

「トリック・オア・トリート！ お菓子をくれなきやイタズラしちゃうぞ！」

「……あ？」

ラス・ノーチエス

虚夜宮を散策していたグリムジョーの前に、随分と可愛い前口上をしながら躍り出る大虚^{メノス}。

正確には大虚^{メノス}の仮装をしていたニルファイだった。

その小さな体を隠すように黒い布を被り、顔にはデフォルメされた長い鼻の仮面をつけている。

「なにしてんだ、ニルファイ」

「ハッピーハロウイン！ 今日私はお菓子を貰いに歩いてまわってるんだ。十刃^{エスパーダ}はキミが初めてだけど、ほら、こんなに！」

ニルファイが担いでいた大袋の口を開ける。

そこにはたしかに、いっぱい詰まったお菓子が見える。

そこでようやくと、グリムジョーはハロウインがどんなものか理解した。

仮装している相手にお菓子をあげるもの。

まあ、そんなところだろう。

廊下を歩いていればお菓子をどうするか話している下官もおり、なにをしていたのかと思えば、この少女のために用意していたとなれば納得だ。

「つうか、なんだその格好」

「ん、ザエルアポロさんが作ってくれたの」

ウイーンガチャン、ウイーンガチャン。

独特な機械音を出しながら大虚^{メノス}の口が開き、そこからポポポッとシャボン玉のような虚閃^{セロ}が飛び出していく。おどろおどろしい叫び声も一緒だ。無駄に凝った装備である。

「どう、似合う？」

「誰が着ても一緒だろうが」

「ひどいなあ。アネットがいたら、もうちよつと気の利いたこと言

えって零してるよ」

「ガキに気い利かすワケねえだろ」

鼻で笑い、ニルフィの隣を通り過ぎようとするグリムジョー。

しかし彼の腕に、少女がぶら下がるようにしがみついた。

「トリック・オア・トリート！ グリムジョー、お菓子ちょうだい！」

「……………」

グリムジョーが無言のままズボンのポケットを探る。

しかし、不良である彼が常日頃からお菓子を常備しているほど、現実には甘くない。

実際には用意するように話が広まっていたものの、ここまでグリムジョーが忘れていただけなのだが。

「…………で、イタズラってのはなにすんだ？」

「えっ？」

ぴよんぴよん飛び跳ねていたニルフィの動きが止まった。

「ん、むむう」

そして唸りながら頭を悩ませる。

どうやらお菓子は必ずもらえるものと考えて、肝心のイタズラのほうは頭になかったらしい。

少しして、ニルフィは両手を上げ、一拍置いてから宣言した。

「グリムジョーの、リーゼントを！ アフロにします！」

「やったらぶっ殺すぞ」

まったくもってロクでもないイタズラだ。

「ええ!? そんな覚悟もなくお菓子を持ってなかったグリムジョーにびっくりだよ！」

「俺はヒトのことを自然にアフロにしようとするお前にびっくりだ」

仮面を脱いで素顔を見せ、ニルフィがブーイングするのもスルーし、最近多くなったため息をグリムジョーが吐き出す。

「大体、俺が菓子なんか持つてるワケねえだろ」

「そんなことないよ」

「なんでだ」

「だって、グリムジョーは優しいもん」

前後とは関係のない答え。しかしその真つ直ぐすぎる金色の瞳に、途端に居心地が悪くなったグリムジョーが顔を逸らす。

こういうのが多くなつたものの、やはり慣れることはない。

「くだらねえ。俺は優しいつもりなんかねえし、そういうのはハリベルとかに言つてやれ。……なんだ、その目」

「グリムジョーってあれだよ。シャウロンたちがピンチになつてれば、なんだかんだ文句言いながら助けてあげる系のヒトだよ」
「うるせえ」

やや強めに、ニルフィの白い額にデコピンを放つ。

痛かつたはずだが、それだけでは彼女の笑顔を吹き飛ばすことはできないようだ。

それどころか、ニルフィはこんなことまで言う。

「私がピンチの時も、なんだかんだ文句言いながら助けてくれるんですよ？」

グリムジョーが舌打ちする。

「そういうのはアネットとかの仕事だろうが」

「うん、そうだね。だけどそれと同じで、私が危なくなつたらキミも助けてくれる。そうでしょ？」

グリムジョーの眉根に皺が寄つた。

「おこがましいかもしれない。傲慢かもしれない。けど、キミは……私を、救ってくれる。救えなくとも、助けようとはしてくれるだろうね」

どこか確信を持った少女の言葉を否定しようとし、それができないことに苛立ちが募る。

グリムジョーは基本的に嘘を嫌う。

だからだろう。

その言葉を、ある程度認めてしまっているのは。

「そうじゃ、ないの？」

ニルフィの素顔に不安がよぎる。

さつきまでの自信はなんだったのか。

そう言いたいほど、どこか寂しげだった。

「……かもしれねえな」

だが、とグリムジョーが釘を刺すように続ける。

「俺が助けてやるのは、てめえに借りがあるからだ。それ以上でもそれ以下でもねえ。わかったな？」

「……あ」

ニルファイは一瞬だけ呆けたように目を見開き、

「……うん！」

なにもかもわかつてる。

そうとでも言うように微笑むニルファイ。

心なしかその笑顔は、いつもよりもずっと嬉しそうなものだった。思ったほど、満更でもない。

グリムジョーの肩から少し力が抜ける。

「じゃあ、私は行くね。まだ貰ってないヒトもいるし」

「菓子はいいのか？」

そう問うと、ニルファイは肩をすくめる。

「うん。キミからは十分、貰えたからね」

はにかんだニルファイが大袋の口を締め、大虚メノスの仮面を右手に持つ。

「……………」

仮面を被る直前、なにを思ったのかそれをせず、笑顔のままグリムジョーの腰に腕を回して抱きついた。

小さく、柔らかく、脆い。

引き剥がすのにも逡巡するほどだ。いつもならば気安く触れさせる手も、少女の背中に当たりそうになると思わず引っ込め、大きな手は中空を彷徨う。

しばらくそうさせていると、満足したのかニルファイが離れた。

「じゃあねー」

今度こそ仮面を被り、悪戯つぽく笑った顔が隠れた。

さながら兎のように跳ねながら、ニルファイが廊下を駆けていく。

「……」

狐につままれたような顔でグリムジョーはそれを見送った。菓子とも違う甘い匂いが、グリムジョーの鼻腔をくすぐる。

少女の姿が廊下の角に消えたあとも、アネットがいればからかうであらう時間はそうしていただろう。

我に返ったグリムジョーは舌打ちし、ニルフィは去った方向とは反対側へと歩いていく。

どうにもニルフィの前では調子が狂う。

だから、それだけだ。さつきも言ったように、それ以上でもそれ以下でもない。

自分で自分を納得させながら、グリムジョーは長いこと歩き続けた。

—————

その後、ニルフィが十刃^{エスパーダ}を訪ね回ったものの、ちゃんと用意できていたのは従属官^{フラシオン}までであった。

ニルフィがハロウインを楽しむにしているという話は広がっていたが、肝心の十刃^{エスパーダ}まで届いていなかったという。

スタークは謝り、バラガンは部下を叱りつけ、ハリベルは申し訳なさそうに、ウルキオラは無言のまま、ノイトラはスルーされ、ザエルアポロは衣装のせいで準備できず、アールローニ口は硬直し、ヤミーは自分で食っていた。

この時から十刃^{エスパーダ}のほとんどは、いついかなる時でもあげられるよう、懐にニルフィ用のお菓子を忍ばせるようになったという。

アレはアレな風に見えて凄いいアレなんですよ

井上織姫は虚夜宮^{ラス・ノーチエス}のどことも知れぬ場所に軟禁させられていた。

扉ほどの大きさの唯一の窓からは三日月が見える。おそらく、外壁の部屋だろうとだけは察せた。

部屋は自宅のアパートよりも広いが、これといって部屋割りをされているわけではなく吹き抜けである。家具もカーペットとベッド代わりになりそうな巨大なソファ。そしていくつかのクッション。これだけだ。殺風景すぎていた。

だが囚われの身としてはかなり優遇されているだろう。拘束をさせられていないだけマシといえた。

ーここで大人しくしてろって言われたけど……。

ーなんにもすることないなあ。

やることがないからこそ、ぼーっと頭を思考の海に沈める。

グリムジョーの腕を治し、そしてニルファイがその後、ルピと戦ったらしい。結果は知らない。その前にウルキオラにお前には関係ないことだと強引にこの部屋に連れてこられたから。けれどなぜか織姫には、おそらくニルファイは負けてないという確信があった。思いが強かったかもしれないが。

最初の邂逅では、得体の知れない相手という印象が強かった。何を考えて行動するのが子供のようなのに予想できないのだ。けれど、グリムジョーの腕が治った時に見せた、泣きそうなほど喜んでいた顔は、やはり彼女が子供だったのだと思わせた。

しかしだ。破面^{アランカル}たちの傷を治すことで戦いの渦が大きくなると思うと、傷ついた仲間の顔が脳裏を掠める。

ーううん、でも。

ー今はどんなことをしても、あたしに利用価値があると思わせなくちゃいけない。

自分にできることは、自分という存在があることで起こるであろうタイムラグ。そして死神たちの準備が整うまでの時間稼ぎだ。

そんなとき、扉がゆっくりと開かれる。

「やつほー、オリヒメさん」

「ニル、ちゃん？」

ひよっこり顔をのぞかせたのは、器用に頭の上に紙製の箱を乗せたニルファイだった。

「お腹空いたでしよ。まだキミのご飯ができるまで時間があるから、差し入れ持ってきたよ」

箱を落とさずにぴよんと部屋の中へと入ってくる。その後ろからワゴンを押してテーブルを背負った長身の男、グリーゼが音もなく続く。

寡黙な男はせわしなく動き、何をするのかと思えば、せっせと茶会の準備を始めた。グリーゼは仮備えのテーブルを置き、その上にきつちり、二人分の菓子やら紅茶やらを出していくのだ。

テーブルを整える間、グリーゼには彼なりの並々ならぬこだわりでもあるのか、カップやら皿やらの配置を不機嫌そうに眺め、何度も微妙に直したりした。一ミリのずれも見逃さず、彼の好みに皿やカップを配置していく。

それでもごく短い時間で支度を終わると、グリーゼは満足そうに大きく頷いた。最後に椅子を引いて少女たちに座るように促す。

「す、すみません」

思わず断りを入れながら織姫はそこに座る。ニルファイも礼を言つて腰掛けた。

それぞれのカップに湯気の立つ紅茶が注がれる。

「こうしてゆっくり話すのは初めてだね。時間的に今まで無理だったけど」

「そうだね」

「あ、毒とかは入ってないよ。ちゃんとザエルアポロさんが一度も触らないように運んできたから」

ザエルアポロという人物がどういうものなのか知らないが、ニルファイは喜々として皿から一枚のクッキーをつまみ、おいしそうに咀嚼した。釣られるように織姫も一枚を口に運び、空腹も手伝ってとても美味に感じる。ついでに紅茶もおいしい。あの偉丈夫が淹れたもの

だとは失礼ながらも思えない。

一息つき、それを見計らったようにニルファイが口を開く。

「私ね、感謝してるんだ。オリヒメさんには、さ」

「感謝？」

「そうだよ。だってキミは、グリムジョーの腕を治してくれた。それが強制であったとか仕方なくとかそういうった事情があったらうけど、治してくれた事実には変わりないんだよ。それを私は感謝してるの」

腕を治したばかりのグリムジョーに抱きついた時の表情は、たしかな本心からだったのだろう。

「だから、ありがとうって伝えに来たの。私じゃあグリムジョーを助けてあげられなかった。それどころか、私があの人を……追い詰めてたんだらうね。実感は湧かないけど、なんとなく気付けるようになったかな」

「でも、よかったの？」

「なにが？」

「腕が治れば、あの子はまた戦おうとするんでしょ。それは、ニルちゃんが見てたことなのかなって」

ニルファイは肩をすくめながら苦笑する。

「ホントは優しいけど、グリムジョーから戦いを取り上げちゃったらダメだからね。まあ、……口でどう言っても、私たちは戦ってしまっもう種族なんだよ」

「それだけだと単なる危険人物じゃない？」

「……オリヒメさんのシュートさ加減は芸術的だと思うよ」

少女に呆れられてしまった。

「でもそうだね。たしかに戦うだけの生物だよ。グリムジョーに限らず、私も、他のみんなも。でも戦わないとここじゃ生きていけないんだ。人間だって、そうでしょ？ 命を掛けないだけで似たようなことを日常茶飯事で繰り返してるんだって聞いたよ」

「……………」

逃げてばかりでは生きられない。織姫はそれをよくわかっている。

だから反論はできなかった。

「でもさ、私は人間の世界に憧れてるんだ」

「え?」

織姫は思わず聞き返す。冗談を言っているような雰囲気もなく、ニルフィは子供が空想を語る時のように晴れ晴れとした顔で今まで思い描いていたであろう夢を紡ぐ。

「遊園地とか水族館とか楽しい場所がいっぱいあってえ。学校だとずっと友達と一緒にいれる。休みの日は一日ずっと好きなように過ごせるんだよね。それでなにより……誰かが死ぬことなんて、身近なことじゃない」

「あなたは、平和に憧れてるのかな」

「ん、そうだね。平和……、そう、平和だ。私の大切な人が誰も傷つかない平和な世界に、私は憧れてるの。おかしい?」

「ううん。おかしくなんて、ないよ。あたしもずっと憧れてるし、それにずっと続けばいいやって思ってたから。だからニルちゃんの言ったことは、おかしくなんてないよ」

「そっか。あははは、キミには否定されなくて最初からわかってて言っただけだね」

でも、とニルフィは金色の双眸で織姫を射抜くように見つめた。

「だから私は、私の仲間のために戦うよ。そのためにキミの大切な仲間を手にかけることがあっても躊躇なんてしない。これが言いたかったの」

恩はある。けれどそれをどういった形で返すかは自分の自由にする。

それがニルフィの答えだ。

たとえ織姫が反抗しようとしても、その時は容赦なくねじ伏せるだろう。

うつむいたままカップの紅茶に映る自分の顔を見ていた織姫だが、ニルフィの発言に少しだけひっかかりを覚えた。

「仲間、っていうのは。誰のことを指してるの?」

ニルフィたちが戦うのは死神たち。織姫は死神側に属するだろう

が、どちらかといえば大切な仲間とは、一護たちを示すものだ。そこをピンポイントで言ったのがなぜか気になる。死神ではなく、一護たちを指したことに。

「紅茶のおかわりをグリーゼに注いでもらったニルファイが言った。」

「もちろん、クロサキさんたちだよ」

「他の、死神の人たちは？」

「そうだね。キミの能力を危惧してここに来ると思う。だけどそうじゃないんだ。クロサキさんたちはー^{ラス・フーチェス}虚夜宮にやって来る。キミが仲間だから。それ以外に、あの人たちはなんの理由もないよ」

その時だった。広大な虚夜宮を空間ごと揺らすような大きな振動があつたのは。

予想していたかのようにグリーゼがテーブルを持ち上げ、揺れによつて茶がこぼれないようにする。わずかに目を閉じたあと、ボソリと呟いた。

「……22号地底路あたりに侵入者がー三人だ」

三人。その数に、織姫は胸の内がちりついた。

「どうして？」

「私もそうするだろうから。こうなるだろうってわかってたさ」

誰にでも向けられたでもない織姫のつぶやきに、ニルファイが微笑みながら答える。

戦いの狼煙はもう上がっているのだ。

—————

その廊下を横切ろうなどという不屈き者はいなかった。至つて変哲もない、この宮殿にならばいくらでもあるであろう代わり映えのない廊下だ。あろうことが怖いもの知らずの破^{アランカル}面たちはそこを畏怖している。廊下自体にはなく、ある部屋を目指していく十人もの集団がいるから。ただ一歩踏み出すだけで空気の重さが倍加する。

そして集められた目的は自ずと察せる。さきほどの宮を揺さぶるような空間の割断^{かつたん}。そのせいだと。

靴音を響かせながら、奇しくも到着は同時のようだ。

彼らは仲良く歩くというより互いを牽制するような雰囲気撒き散らす。

誰が最初というわけでもなく言葉が発せられた。

「侵入者らしいよ」

「侵入者ア!?!」

部屋へと入る。彼らが進む先には長く硬質なテーブルがあった。この会合の主催する者の座る一辺を除き、背もたれの高い椅子がちようど十個。

少女が椅子に飛び乗ると、細長い足をぶらぶらさせる。

「22号地底路が崩壊したんだって……聞いたんだけど、さ。アイスリンガーさんとデモウラさんがやれたみたいだね」

豪胆でありながら衰えを感じさせない老体が腰掛けた。

「22号オ!?! また随分遠くに侵入したもんじゃな!!」

眼鏡を掛けた美青年が関心を薄そうにして同意した。

「全くだね。一気に玉座の間にも侵入してくれたら面白くなっただけだ」

褐色の肌を持つ美女が静かに椅子へと身体をもたれかからせる。

後付けの仮面の奥から水音を響かせながら長身の破面アランカルもそれに続いた。

腰から下げた鎖のようなチェーンを響かせながら眼帯の男が楽しそうに嗤う。

「ピヤツハア! そりゃいい!」

「……ウルセーなあ。こっちは寝みーんだ。高たけえ声出すなよ……」
それに気だるげそうにため息を吐く無精ひげを生やした男。

山のような、という表現を形とするかのような大男の椅子が軋む。

不良風の青年が無遠慮に椅子へと身体を落とした。

無表情を変えない青年が音も無く座すと、すぐに目を閉じる。

椅子に座るという一動作のみで個性の別れる彼らは、各々の席で自分たちの主人一人が訪れるのを待つ。

- セクンダ・エスパーダ
- 第2十刃バラガン・ルイゼンバーン
- トレス・エスパーダ
- 第3十刃ティア・ハリベル
- クアトロ・エスパーダ
- 第4十刃ウルキオラ・シフアー
- クイント・エスパーダ
- 第5十刃ノイトラ・ジルガ
- セスタ・エスパーダ
- 第6十刃グリムジョー・ジャガージャック
- セブンティマ・エスパーダ
- 第7十刃ニルフィネス・リーセグリンガー
- オクターバ・エスパーダ
- 第8十刃ザエルアポロ・グランツ
- ヌベノ・エスパーダ
- 第9十刃アールニール・アルルエリ
- デイエス・エスパーダ
- 第10十刃ヤミー・リヤルゴ

彼らは十刃と呼ばれる、殺傷能力が飛び抜けて優れているといかにも物騒な選考基準を満たしたモノたちだ。それはこの宮で一部の例外を除き、戦闘能力が格段に優れているということ。

最近こそ何人かが揃うことはよくあったが、全員が一堂に会すことはあまりない。しかし、だからどうしたのか。そう言わんばかりの態度で、普段のような軽口を叩く。

ニルフィの左右にはグリムジョーとザエルアポロ。正面にはスタークがいる。スタークはテーブルに両肘を付いて組んだ手に顎を乗せ、もうすぐ会議が始まるのにつらうつらと^{まぶた}瞼が閉じてしまいうだ。これが一番の男。選定基準が実力のみで数字が決められるのを表しているようだ。

しかし唐突に緩んだ空気が消え去る。

彼らの主人が配下の死神二人を率いて姿を現したからだ。

「お早う、^{エスパーダ}十刃諸君。敵襲だ」

いつものような達観したかのような平坦な声が危機感を伝えない。

そして続けられた言葉も防衛の配置やそういったものではなく、

「^ま先ずは紅茶でも、淹れようか」

なのだから無駄に自信有りすぎだと誰だってそう思うはずだ。

だが、たしかにそれだけの自信を保てる力が彼らにはあった。むしろそれだけでも足りないだけの力が。

床からせり上がった椅子に腰掛けた藍染惣右介の少し背後に、二人の死神が待機する。

ゴーグルを被った盲目の死神に、ニルフィは子供がしちやいけないような凄まじい視線を送ったあと、給仕の破面アランカルが置いていった湯気の立つカップに目を向ける。

「ーあれ？」

なぜか紅茶にしては、ドス黒い。そして独特な香ばしい匂い。他の十刃エスパーダたちは全員琥珀色の液体の入ったカップがあるというのに、ニルフィだけ確実に故意のようなものが配られた。

ニルフィにだけ傍には小瓶に入ったガムシロップとミルクがあるが、ブラツクコーヒーが渡された。

「全員に、行き渡ったかな？」

藍染がいけしやあしやあとのたまう。

思わず抗議するような目でニルフィが見るが、藍染はかすかに笑みを濃くするだけだ。思えばこの紅茶だけでも不親切ではないだろうか。ヤミーの巨体からはこのカップだと一滴ぐらいにしかならないし、アールローはそもそも仮面のせいで飲めない。彼は衆目で口のある手袋を外すのを嫌がるので（ニルフィにだけはよく見せてくれるが）ちよつとした嫌がらせだろうに。

鼻を鳴らしてニルフィがカップを手にとった。なにも入れてない、ブラツクを。

子供と思つて見くびるなどおもむろに一口飲み込み、

「……………にがあい」

舌を出しながらうめくハメになってしまった。所詮、お子様である。

そんな身悶えする少女の前にテーブルを滑ってお菓子の入った小袋が七つ集まった。他の十刃エスパーダたちが見かねて放ってくれたようだ。彼らはこの頃、ニルフィ用に懐によくお菓子の小袋を忍ばせるようになっていた。単なる気まぐれだ。しかし予期せぬほぼ全員が同じ行動をしたことで、袋をニルフィにあげた七人は一斉にその他の相手に視線を鋭くする。

それを面白くなさそうに眺めるノイトラ。嬉しそうに礼を言うあんな小娘一人に、なにを骨抜きになっているのかと眉をしかめる。く

だらない。そう結論付け、自分の他にも唯一お菓子をニルフィにあげなかつたヤミーを何気なく見た。

「んん？…ここで渡すのかよ」

他の十刃エスパーダの行動に釣られるように、ヤミーはどこから取り出したのか何かの長い植物の茎をニルフィのほうまで滑らせる。齧かじれとでも言うのだろうか。沖繩産さとうきびだった。

これでヤミーもニルフィに甘いものを与えたことになる。

全員の視線がただ一人なにも出さなかつたノイトラに突き刺さつた。

なぜかわからぬが、空気とはこれほど痛いものなのかとノイトラは思い知らされる。

「……ケツ」

ノイトラがニルフィにくれてやれるのは、どうやら悪態だけのようだ。ようやくテスラがしつこく羊羹ようかんの小袋を渡そうとしてきた理由がわかつた気がした。

見計らつたように藍染が切り出す。

「……さて、飲みながら聞いてくれ。要かなめ、映像を」

「はい」

指示された東仙が壁の取っ手を動かすと、長テーブルの中央の仕掛けからひとつの映像が空中に浮かび上がる。

「侵入者は三名」

一人ひとりの顔が鮮明に拡大された。

「石田雨竜」

優等生然とした眼鏡を掛けた少年。破面アランカルの死覇装と違う白いスーツのような服を着込み、肩掛けの布の色も白い。死神でもなく、ましてや一般人ではないのも自明の理だ。

「茶渡泰虎」

三人は同い年のはずだが、茶渡はふたまわりも年上に見える。長身の体軀に褐色の肌、長袖の黒いシャツは彼の筋肉によって盛り上がっていた。

「あ、やっぱり腕治ってる。」

予想通りというべきか、ヤミーに破壊された茶渡の腕は織姫に修復されたのだろうとニルフィは当たりをつけた。

「黒崎一護」

最後に拡大されたのはオレンジ色の髪を持つ死神の少年だ。姿だけ見れば以前とはまったく変わりない。

けれど織姫のいるであろう虚夜宮ラス・ノーチエスの壁を見据え、砂を吹き飛ばすかのように砂漠の上を一心不乱に駆けていた。

「ーッ!!」

それに最も大きな反応を見せるグリムジョー。彼らの確執は二度にも及ぶものだ。ニルフィもわかつていたので、彼女は映像の上から侵入者三人の体捌きや重心の位置、そういったものを見て戦闘能力を黙って推し量る。

「……こいつが」「敵ナノ?」

「何じやい。敵襲じやなどと言うからどんな奴かと思ったら、まだ餓鬼じやアないか」

「ソソられないなア、全然」

疑問。落胆。砂粒ほどの関心を消す。もともと無反応。

各々の反応を示す、けれど危機感を抱くことはなかった十刃エスパーダを藍染がいさめる。

「侮りは禁物だよ。彼らはかつて『旅禍』と呼ばれ、たった四人でソウル・ソサエティ尸魂界に乗り込み、護廷十三隊に戦いを挑んだ人間たちだ」

「四人? 一人足りないけど、その人は来てないのかな」

「井上織姫だ」

「ああ、なるほど」

ニルフィのふとした疑問にウルキオラが答えた。

それを聞いたノイトラが画面の人間たちに嘲笑を向ける。

「仲間を助けに来たってワケかよ。良いんじゃないのオ、弱そうだけどな」

「聞こえなかったのか? 藍染様は侮るなど仰ったはずだ」

「別に、そういうイミで言ったんじゃないよ。3番のくせしてカリカリすんなよ、ビビってんのか?」

「……………」

釘を刺したハリベルにノイトラが噛み付いた。

そんな会議であっても勝手に発言とかをする十刃たちエスパーダの喧騒を聞きながら、ニルフィは初めて見る石田雨竜のだいたいの戦力も測り終わる。体つきや動きからして中距離から遠距離の攻撃を主体とする異能者。そしてその実力は単体で十刃エスパーダを相手にするには及ばないものだった。

ガムシロップとミルクをいっぱい入れてかき混ぜたコーヒートを啜すすっていると、隣から一瞬だけ視線を感じた。

横目で見ると、グリムジョーは難しい顔をしながら画面の三人……ではなく、おそらく一護だけを睨んでいる。

彼ならば静止を振り切り、すぐにでも会議を抜け出して一護を殺しに行くかと思った。けれどそうはならなくて、椅子から体を起こす予兆も無い。

「行かないの？」

「……ああ」

ニルフィの疑問に少女を見ることなくグリムジョーは淡白な答えを返した。

喧騒を打ち消すように藍染が締めくくろうとする。

「十刃諸君。見ての通り敵は三名だ。侮りは不要だが騒ぎ立てる必要もない。各人、自宮に戻り、平時と同じく行動してくれ」

十刃たちを見直し、

「傲おごらず、逸はやらず、ただ座して敵を待てばいい」

宣言する。

「恐おそれるな。たとえ何が起ころうとも私と共に歩む限り、我らの前に――敵はない」

――

トレス・シフラス

3 ケタの巢の一角において、ドルドーニが侵入者の一人を蹴り飛ばした。

侵入者、黒崎一護は防御を弾き飛ばす勢いの蹴りを防げず、破碎音を響かせながら壁に激突する。着地したドルドーニは呆れた表情のまま鼻から息を吐き出し、やれやれと肩をすくめた。

「反応は鈍い。防御は脆い。足場の変化にすら対応できん」

そしてポージングを決めながら両の指を壁に埋まったままの一護に突きつける。

「やってられんよ！ まるで子供の戦いじゃアないかね！ えエ!？」

以前お嬢さんと戦ってからも進歩してないのなら、吾輩の期待を返してくれたまえ！」

死神からの反応はない。だがドルドーニは言葉を続ける。まだ息はあるだろうし戦えるだろうから。

「ぼ・ん・か・い。し給えよぼうや。悪いことは言わん。今のままのぼうやじゃ何をやっても吾輩には勝てんよ。ここのところ多少パワーアップした吾輩なら、なおさらだ」

起き上がりながら一護は言った。

「……やだね」

「何故？」

「フリバロン・エスパルダ」
「十刃落ち」
「……そうだが」

眉をひそめながらドルドーニが促した。

「こっちは十刃全員倒さなきゃいけないんだ。十刃でもねえ連中にイチイチ卍解なんかー使ってらんねえんだよ!!」

肉薄した一護の斬魄刀とドルドーニの右足がせめぎ合う。鋼皮によつて硬化した脚は完全に刃を受け止め、片足立ちでありながら体重の乗った一護の斬撃を完全に受け止めていた。

その体勢のまま、ふむ、とドルドーニは頷き、

「なるほど。ぼうやの気持ちは良くわかった。それでは吾輩からも一言言わせてもらう。ー舐めるな」

ドルドーニが彼の斬魄刀に手を掛けたことで、警戒した一護が背後へ跳躍する。破面は柄を引いて刀の刃をわずかに覗かせた。

「旋れ『暴風男爵』」

ドルドーニは中心として風が渦巻くと、それはさながら竜巻のように彼を中心として噴き上がる。さきほどまでの戦闘の余波から落ちていた壁の欠片が遙か天井まで舞い上がった。

「何をしている。構えたまえ」

風によつて体勢の崩れた一護にわざわざ忠告しながら、死神の脇腹めがけて鳥の頭を象かたどったモノを蹴りと共に放つ。再び吹き飛ばされた一護を追撃。ドルドーニの脚部を覆う煙突のような装甲から吹き出る嵐が一護を床に叩きつけた。

「我輩たちは君たちを侮るなど言われている。それなのに格下であるぼうやが出し惜しみをすると、無謀に過ぎるよ」

「……それでも、倒してやる」

立ち上がる一護へとさらに一撃。

「吾輩は少し前に一度、負けているのだよ。吾輩だけではない。このトレス・シンプラス3ヶタの住人たちの多くは、あるたった一人に敗北した。想像できるかね。いまぼうやを苦戦させている吾輩のような者を、一度に多数相手取れる者がいるのを」

話の合間にも蹴りを緩めず、回転する風の鳥が一護を襲い続けた。防御のみとなる一護。守りごと破壊するかのような一際強烈な足技が彼の腹部に突き刺さり、最初と同じように壁にめり込まされた。

服についた塵を払いながらドルドーニは語る。

「お嬢さん……ニルフィネス嬢だ。だが、彼女はぼうやと違ったぞ。ぼうやよりも確実に強いだろう彼女は、我輩たち相手に持てる技術すべてを惜しみなく使った。使ってくれたのだ。それだけでどちらが尊とうといのかわかるだろう」

それだけで元十刃エスバレーダたちは救われた。修練とはいえどちらも命懸けだ。もしかしたらニルフィは技術なしでもドルドーニたちを負かすことができたかもしれない。だが、しなかった。

プライドを踏みにじられた、とはあまり思わず、どこかヤケだった者もまた力を求めるようになった。

「力がありながら何故振るわぬ。勝てぬ相手に全力を出さぬなど、ただ無様なだけだ」

くちばし
嘴が一護を突き上げる。ドルドーニは溜めの構えをした。
アベ・メジソス
双鳥脚

無数の蹴りを放ち、そこから生まれた嘴が一護を穿っていく。

「さあー さあさあ!! 卍解したまえぼうや! 死んでしまうぞ?!」
語りながらも脚を止めることなく、

「吾輩相手に霊力をつ、温存しようなどと! そういう考えがチヨコ
ラテのように甘いと……なぜ解らんかね?!」

止めとばかりに蹴り上げ、嘴が腹部に叩き込まれた一護がくの字に
体を折り曲げる。それでもなお一護が卍解を使う素振りを見せな
かった。

「げほっ……げほっ」

「……聞き分けがないな、ぼうや。卍解したまえ。吾輩はぼうやの全
力が見たいのだよ」

そこでようやく一護が斬魄刀を握る右手をあげた。

しかし口から出たのは改号ではなく、

「……月牙、天衝!!」

霊圧を斬撃として飛ばす技はドルドーニの矛である嘴を消し飛ば
した。

「ほう」

その威力に感心するドルドーニは、背後に移動した一護の斬撃を受
け止める。

斬魄刀に一護が霊圧を込める。

「月牙ー」

「舐めるなど、言っただばうや!」

「くそっ」

「聞き分けのない子には、お仕置きだよ」

技を不発にさせた一護へ向けて両手の人差し指、小指を合わせた手
を向けた。

虚閃

防御もできない一護を飲み込もうとした破壊の光線。しかしこれ
は意外な乱入者に止められることとなる。ドルドーニが戦闘力はな

いと判断し、今の今まで放置していた、侵入者とともにやって来た子供アランカールの破面。

戦闘者二人が見ている中で、その体をもって虚閃セロを受け止めていたネルと呼ばれている少女。

彼女はあろうことが虚閃セロを飲み込んだ。

「うう……、うう……ふあっ!!」

そして吐き出す。ドルドーニの霊圧の塊をそのまま持ち主に跳ね返したのだ。

まともに自分の虚閃セロを受けたドルドーニは、額から血を流しながらネルを虚弾バラで弾き飛ばす。今度はネルも飲み込めずにまともに受け一護の後方に吹っ飛んでいった。

それに一護が叫ぶ。

「ネル!」

「フン、お嬢ちゃんベが何者か知らんが、大したものだ。解放状態の吾輩の虚閃セロを弾き返すとは。だが、少々おいたが過ぎるんじゃないかね？」

「――失せたまえ!!」

見逃してやっていたが戦いに横槍を入れるのならば殺されても文句は言えない。

倒れ込んだネルに向けてドルドーニが風の嘴で貫こうと、脚を振った。

そのドルドーニの行為が、ついに彼の目的を果たすこととなる。

黒が現れた。ついに卍解を使った一護がネルを抱き抱えながら、嘴ごと遠くのドルドーニの肩を斬る。それでもドルドーニは自分の口に笑みが浮かぶのを自覚した。

「……そんなに見たけりゃ見せてやるよ。待たせたなオツサン。こいつが俺の卍解だぜ」

「成程なるほど。待ち侘びたよ、ぼうやニーニョ」

一護が腕の中のネルの小さすぎる体を抱き寄せる。

「悪い、ネル。俺がつまんねえ意地張ったせいで、痛い思いさせちまった。十刃エスパーダの連中とやり合うためには、それ以外の奴に卍解するようじゃダメだと、そう、自分で決めて虚圏ワエコムンドへ来たんだ。――くだらね

え」

「そうかね?」

戦いのために自らを律する。それは強さを求める者には必要なことだ。それ自体はドルドーニにも素晴らしいことだと思っている。最初は否定するような物言いをしたが、半分以上は一護に対する煽りであった。

「仲間にケガさせてまで貫くほどじゃねえよ」

「強さが目的ではないということか? 仲間を守ることが目的であり、強さは手段に過ぎぬと? 優しいなぼうや。聖女を思わせるよ」
だが、

「まだ上があるだろう」

風の嘴を再生させながらドルドーニが言った。

「知っているぞ。虚化ホロウと言う。ぼうやたちの現世での戦闘記録はすべてこちらに届いている。ぼうやには虚ホロウに近づいて爆発的に戦力を上げる術があるはずだ」

エル・ウノ・ピコテアル
単鳥嘴脚

蹴りに繋がる嵐が床を削りながら一護に肉薄する。

「それを出し給え!!」

巨大な嘴を黒化した斬魄刀で受け止める一護。返す刀で嘴を切断する。

「成程! 大した霊圧だ! だが、言ったはずだ! 吾輩はぼうやの全力が見たいと!」

嘴を受け止め続ける一護の周囲に風が撒き散らされた。戦闘によつて生まれた砂塵がちょうどいい目くらましとなる。そこに紛れ込んだドルドーニは霊圧を抑えて一護に接近。しかし本人に攻撃をすることは咄嗟に防御されるだろう。

ならば別の弱点。一護の抱える幼子をあえて狙い、手刀を振り下ろした。

だが一護がそれに気づいて大きく飛び退く。手刀はネルの頬を浅く斬るだけに留まる。

「フン。どうした、怒っているのかねぼうや」

「てめえ……!」

「何を怒ることがある? ぼうやの目的が『仲間を守ること』ならば、吾輩の目的は『全力のぼうやを倒すこと』。そのために吾輩が狙うのは、ぼうやではなくそのお嬢ちゃん一人。それだけのことだ」

「恥は、無えのかよあんたは!」

そんなのは決まっている。普通はこのようなことはしないし、今でさえ屈辱を押し殺すのに苦労するほどだ。

だがそんなものは今だからこそ些事に等しい。

「あるとも! 吾輩の恥は! ー本気のぼうやと戦えぬことだ!!」

脚鎧の煙突状の部分から生まれる風の柱から、嘴を得た風の塊が無数に飛び出した。これがドルドーニにできる、次はないことを示すものだ。

普段こそドルドーニは、アレな風に見えて、アレでも十刃エスパーダの在任期間が十刃フリパロン・エスパーダ落ちの中でも最長というアレである（朱色の従属官談）。そしてそれだけの実力と、意義を貫き通す意志があった。

全力で戦われない。武人としてはこれ以上ない屈辱。それならば、他の恥など無きに等しいとドルドーニは思っていた。

「……わかった」

ネルを下ろして退避させた一護が静かにドルドーニを睨む。

「悪いが、見せてやれるのは一瞬だ」

「ほう。ならば吾輩は一瞬とは言わず、さらに長く見せてもらえるようにしようではないか」

「……そうか。それならいい」

一護が刀を持たない左手で顔を覆うようにし、引き裂くように腕を下ろす。

彼の顔を仮面が包んでいた。

瞬間、さきほどの比とするのもおこがましいほどの凄まじい霊圧がドルドーニに襲いかかる。禍々しいまでの黒い霊圧だ。押しつぶされるのではないかと錯覚するほどだ。

それにドルドーニは恐怖を感じるでもなく、ただ歓喜の声を上げる。

「……ふ、ふはははははははははははは!! 素晴らしい。素晴らしい。素晴らしい
霊圧だ! こんな素晴らしい敵と戦えるとは! 感慨無量だよ
ぼうや! さあ! 今こそ吾輩の力のすべてを! 酌^くみ交わそうで
はないか、ぼうや!!」

風を纏いながらドルドーニが叫んだ時だった。

黒が迫っている。もはや眼前だ。そこまで反応が追いつかなかつた。敗北。その言葉が頭を掠める。時間が、ひどくゆっくりと流れているようだ。防御する術をドルドーニは持たなかった。黒い斬撃が今にもドルドーニを斬ろうと霊圧を荒らし、牙を剥く。

だが、

「ーッ、オオオオオオオオオオオッ!!」

ドルドーニは動いた。体を強引に意志だけで動かし、全身の筋肉が悲鳴を上げるのさえ無視し、全力でその黒い線をいなす。黒い斬撃はドルドーニの側面をかじるだけで通り過ぎる。背後の壁全面にヒビが入った音が届く。

避けられるはずのなかったものをドルドーニは躲した。

これよりも速い者を、ドルドーニは知っていたから。

「まだ終わつたらんぞ!!」

一護は避けられるとは思っていなかったようだ。ほんのわずかに、目を見開いているのが仮面の奥であつてもわかつた。

もはや狂嵐と化したドルドーニが懐に飛び込む。一護と視線が衝突する。回し蹴り。同時に黒い刃が体に迫る。だがかまわない。迷うことなく脚に力を込め、かつてないほどと称していい威力を乗せ、振るう。衝撃波が巻き起こり、視界を白く塗りつぶした。一護は眼前にいないことだけはわかる。

どこから来ても迎え撃てる心構えを。そう考えながら、どこから来るか考える。思考は冴え渡っていた。爆発。それが気になる。姿を消すにはいい煙幕だ。だが、霊圧の流れを完全に消すには抑えるだけでは駄目だ。霊圧そのものを消しておかなければならない。それでいてなお、ドルドーニに接近するタイミングを狙える位置とは……?

上。爆発。利用。飛んだ。

思考は単語で奔り、そして動いた。

上。やはりいた。ほぼ自由落下の形。だが、また視線が合う。まさしく虚ホロウのものである仮面が獰猛に歯をむき出しにしている。霊圧が周囲を圧した。黒が刀にまわりついた。ドルドーニは右足にすべてを凝縮する。

決める。ここで決める。一瞬でそう決めた。迷いはない。躊躇もない。体は自然に動き、上空にいる死神に対する構えをさせてくれた。

エル・ウノ・ピコテアル
単鳥嘴脚

振り上げ。振り下ろし。すべては同時。

二人を中心として巨大なホールを揺さぶるような爆発が起きた。それだけ、込められた霊圧が膨大だった。

煙幕の中で、片方が立ち、片方が崩れ落ちる。視界が晴れ、この戦いの結果を端的に示した。

倒れたのは……ドルドーニだった。

左の肩口から腹部に掛けて大きな裂傷が生まれている。彼の無念を表すかのように血が弱々しく伝う。

――負けた、のか。吾輩は。

――あと少し、だったのだが……。

悔恨と相対するような歓喜と満足さが心地よい。

「一瞬、ってはならなかったな。けどやっぱ強かったよ、オツサン」
ドルドーニの攻撃はわずかに届かなかった。しかしその余波だけで一護は額から血を流し、爆発によって吹き飛んだ死覇装の一部から傷ついた肌が覗く。

アランカル
破面。
それでも届かなかったことに変わりない。勝者は死神で、敗者は

たった、それだけ。

軍VS神速

あれからネルという少女のゲ……唾液の回復効果によって介抱され、そしてとある目的のためにわざと斬りかかるふりをし、再び袈裟斬りにされた。甘さを捨てろという助言を檄げきとして飛ばしたことから、あとはなるだけなるようにする。そこまでは、まあいい。全力で戦ってくれた礼として一護をさっさと先に行かせることに成功したのだ。

だが予想通りと言うべきか、ドルドーニの背後の通路に一護たちが姿を消したあと、ドルドーニの目の前にニルフィが姿を現す。右手のさとうきびをはむはむと齧かじり、フードの中にはいくつものお菓子の小袋が入ってあった。

「……ふむ、やはりお嬢ニーさんか」

「気づいてた？」

「いや、まったく気配も感じられなかった。だがしかし、居るとは思っていた。恥ずかしいところを見せてしまったようだ」

「全然。かつこよかったと思うよ」

素直な賞賛を少女がする。なんだか褒められたのはおそろしく久しぶりなので、髭をしごきながら胸を張る。

「う、うむ。そうであろう。あく、お嬢ニーさんがそう思ってくれるのなら、報奨としてその手に持っているさとうきびを頂ければと……」

「ー？ ごめんね、コレ一本だけしか無いの」

「吾輩としてはそれが褒美で……」

「え？ あ、ごめん。もう燃やしちゃったよ。でもゴミの処理を進んで引き受けてくれるなんて、オジさんはやっぱり紳士だね！」

「う、うむ！ そ、そうだ！ 吾輩はなにも不埒な考えなどしておらんぞ！」

ドルドーニは後悔した。一瞬でも浮かんでしまった人として終わった思考が、ニルフィの純粋な賞賛の瞳によってズタボロにされていく。一護につけられた傷がかすり傷に思える程だった。これでは浄化されて死んでしまう。

そんなことを気にせずニルファイが言った。

「止めようかなって思ったんだけど、オジさんがすごく楽しそうだったから」

「気遣い感謝する。おかげで、吾輩は十分満足できた。もう少し戦えればと思いはしたがね」

「でもオジさんはすごく頑張ったと思うよ。私だって最初、クロサキさんの初撃でやられちゃったと思ったんだもん。……けど、私がクロサキさんを追わないのは、私なりのオジさんへの誠意つてところかな」

「それは助かるものだ」

子供が不承不承にも納得するようにニルファイが一護の去つていった通路を見やる。

憎悪にも似た感情を乗せた少女の目は澱んでいたが、ドルドーニが一護を先に進ませたことをわざわざ汚すつもりもなく、この場では手を下さないうつもりだ。ニルファイが本気で一護と戦いに行こうとすればドルドーニに止める手立てはない。だからこそ、感謝もしているのだが。

「でもさ。初対面なのにそこまで義理立てする必要はあるの?」

「彼は本気を見せてくれた。甘さは捨てきれないようだが、理由はそれだけで十分じゃないかね」

「ふうん、私にはちよつと理解できないけど……。でもさつきからコソコソこつちを伺ってるキミたちが無粋なのはわかったよ」

少女の言葉に呼応するかのように、ブン、と響転ソニードによって姿を現す者たちがいた。

一糸乱れぬおよそ二十の足音を率いるのは、人型だが仮面は全く割れておらず、牛のような動物の頭蓋骨をそのまま象った仮面を着用している破面フランカル。背後にはこれもまた破面フランカルとしては異質な、人間の髑髏を模した同じ仮面を持つ、すべてにおいて特徴が一致している者たち。

先頭の牛の頭を持った男が恭しい態度で一礼する。

「お初にお目にかかります、ニルファイネス様。私の名はルドボーン・

チエルートと申します。藍染様より葬討部隊を任されている者です」
「初めて、つてワケでもないと思うよ。私が最初に虚夜宮に来たとき、見たことがあるから」

ルドボーンの背後のしゃれこうべたちは不気味な沈黙を保ったまままだ。意思と呼べるものは希薄で、現れてからは静かに霊圧を発散している。

ドルドーニは己の折れた刀を手に、ニルフィを背に庇うようにして、一步前に出た。

「……ようこそ、葬討部隊諸君。いやー小僧共。いまさらこの場に
なんの用かね」

「負傷した侵入者を追討せよとの命令です」

「誰のかね?」

「申せません」

「ここを通りたいかね?」

「貴方は剣も折れ、刀剣解放もままならぬ状態。だというのに、そのような御体で、我々と戦えるなどと思われるのですか」

仮面に覆われているせいでルドボーンの様子は見えない。しかし言っていることは痛いほどの的を射たものだった。ドルドーニのコンデイションは最悪と言ってもいい。限界以上に酷使した体で、間髪入れずに戦わなければならないのだから。

しかし一護を先に進ませるためには彼らの前に立ち塞がる腹積もりだ。

ドルドーニは歯をむき出しにして獰猛な笑みを浮かべ、欠けた刀を悠然と構える。

「お嬢さん。これは傍から見れば路上の小石ほどの価値もない戦いだ。しかしその小石も我輩にとっては宝石と釣り合うものなのだ。だから心配は無用だ。お嬢さんはここから去ってー」

「ねえねえルドボーンさん。ちよつと聞いてもいいかなあ?」

「はい。なんなりとお申し付けください」

「ちよつと待てーい! いま我輩、イイこと言ったな!? それをぶつた切つてスルーとはあんまりではないかねツ」

かつこいい散り際を麗しい少女に見せて満足の内には玉砕するつもりだった。しかし当の少女に気にかけていないとは、これではあんまりではないか。

しかし、次にニルファイが言った言葉で思考が停止した。

「提案なんだけど、オジさんを私の従属官フランゾンにするから、クロサキさんに敗れたことでの処刑も無しにしてほしいんだ」

片眉を上げたドルドーニを見上げ、ニルファイは苦笑しながら肩をすくめる。苦笑というよりも皮肉げな笑みと表したほうがいいだろうか。何にせよ、とても似つかわしくない表情だった。

「ごめんね。オジさんの言いたいことだつてわかってるし、どうしたらキミのためになるのか理解してる。ここは私が干渉せずにオジさんの好きにさせたほうがいいんだつて。だけどね、それは私が望んでることじゃないんだ」

ここでドルドーニがニルファイの従者となれば、彼は『敗北』という名の罪によって処刑はされなくなるだろう。ルドボーンがどのような目的を持つていようと、正式に第7十刃セブティム・エスパーダの従者となれば手を出せず、この場ではこれ以上の血は流れない。

「私のわがまま、聞いてくれる?」

これはきつと最初に出会った時の恩返しではない。恩を返したいのなら、本当はこんなことをしなかった。

「お嬢さんニヤよ、それは本心かね」

「うん」

「ふむ……」

ドルドーニは目を閉じて深く息を吐いた。

「淑女ダーマのわがままを叶えるのも紳士としての務めかもしれないな」

「ごめんね、わがまままで」

「知っておったさ。その点も含めて君の魅力なのだろう。麗しい姫君にこのような卑しい身を気にかけてもらえるなど、いやはや、光栄でしかない」

この場での足止めを放棄することに繋がるのをニルファイは理解している。もともと関係ないとはいえ、それをドルドーニ本人に求めた

のだ。

だが、こう話している間にも一護は先に進んでいるだろうし、エクセキアス葬討部隊相手ならば遅れをとらないだろうと、ドルドーニは無理やり納得する。先の戦いでなんとか凌げたのはニルファイのおかげでもあるから。

肩の力を抜いたドルドーニに、ニルファイがほっと一息つく。

しかしそこに異議を唱えた者がいた。

「お言葉ですが、それは認められません」

「む、なぜかね。もしや吾輩が羨ましくてちよつとしたひがみを」

「ちがいます」

ルドボーンがおもむろに頭を横に振りながら言う。

「フランオン従属官を正式に認められるのは藍染様ただお一人。エスパーダ十刃であろうともニルファインス様の独断では不可能です。よつて、ドルドーニ様の身分はプリバロン・エスパーダ十刃落ちのみとなります」

ニルファイのドルドーニに対する支配権は無い。

だからといって、はいそうですかとニルファイは見捨てるような真似はしない。

「ねえ、キミは誰の命令でここに来てるの?」

「申せません」

エスパーダ「十刃でも?」

「その通りです。我々は口止めされているゆえ、ニルファインス様のお望みする解答はお教えできません」

普通ならば他のエスパーダ十刃がルドボーンに命令したと考えられるだろう。しかしエスパーダ十刃に序列はあつても、それが階級の強さを表すわけではない。ただ強いというだけで権力的には横並びなのである。

ここでニルファイが関係のない用事を押し付けければルドボーンは了承するだろう。しかし先に命令された事柄に優先権があり、権威だけでは止められない。

ゆつくりと、確かめるようにニルファイが尋ねた。

「ーねえ。なんでクロサキさんを追わないの?」

「……………」

「キミは最初、クロサキさんを追討するつもりで来たんだよね？　でも今のキミはまるで、オジさんを殺すことだけを優先しているように見えるんだけど」

思えば、たしかにそうだ。さっさと侵入者を追うために行動を起こせばいい。ニルファイがいるせいで先行きが見えないドルドーニの処遇をここで決めるよりだったら後に回して、今は一護たちを追ったほうがはるかに効率的だった。

だが実際にルドボーンは、ドルドーニとニルファイのやり取りを律儀に待ち、そして未だに去ることはない。もはや一護たちが眼中にないかのようだ。

「それを確かめてどうなさるおつもりですか」

「抵抗、しようかなって思ってるよ」

「貴方をお連れするようにも言われております。こちらへ来ていただくことは……」

「従属官にできないなら、オジさんの無事が確保されてからね」

「吾輩も守られてばかりでは心苦しい。これでぼうやニニヨを行かせる時間が稼げるのならば、一石二鳥だよ」

「……左様でございますか」

ルドボーンの指が鳴らされる。すると沈黙を保っていたしやれこうべ達が一斉に斬魄刀を抜く。鞘走りの音と共に、二十の刃にはドルドーニとニルファイが映ることとなる。そしてルドボーン自身も刀を手にした。

しかしいくら数が多いからといって、情けないことになるが、手負いのドルドーニは倒せてもニルファイには軽くあしらえてしまうだろう。それでもなお、この戦いは失敗することが分かっているだろうに、ルドボーンは引くつもりはないようだ。

ドルドーニは小さく呟く。

「なにを考えている？」

「ニルファイネス様の乱入は予期されていたことです。そして命令にも、できるのならば彼女の捕縛エウセキアスも含まれていた。我々は葬討部隊です。どのような形であれ、命令を遂行する義務があります」

そこでドルドーニは気づいた。探査回路の範囲を拡大させた時だ。この場にいる、葬討部隊たちが霊圧を垂れ流してホールを覆っていることで、また質という点も含めた二重のカモフラージュにより、発見が遅れた。

「ニルフィネス様は先程からお気づきになられていたようですね」

「正直、予想以上かな」

ニルフィが静かにつぶやいた時だ。

このホールには出入り口となる穴がいくつももある。その全てから、それらは姿を現した。細部に至るまでまったく同じ容姿を持つ髑髏頭の集団。際限なくしゃれこうべが湧き出し、探知できる範囲内でもさらに増加中のようなだった。髑髏の行進による足音が頑丈なはずの床を揺らした。

そこでルドボーンが逆手に持った自身の斬魄刀を突き出す。

「生い上がれ『髑髏樹』」

刀剣解放。それによりルドボーンは、右半身が木の幹のようなもので覆われ、下半身が樹の根のように変化する。刀も尖った枝のようなものに変化し、さらに背中には左右対称に先端に髑髏がついた枝を生やす。

髑髏の実が落ちると、即座に髑髏兵団として葬討部隊の兵士同様、統一の姿となった。

「私の力は、十刃である貴方には及びもしない、塵芥のようなものです。しかし塵といえどもいずれは山と化す。それでもなお、天の存在である貴方にとっては遥か足元のことだ」

だが、とルドボーンは牛の頭蓋のような仮面をドルドーニへと向け、くぼんだ眼窩の奥から静かに見据えた。

「傷を受け、地に堕ちた存在を埋めるには十分だと思いませんか？」

ルドボーンが朗々と語る間にも髑髏兵団は出現し続け、数えるのも馬鹿らしいほど集まる。

これこそが『髑髏樹』の能力だ。枝の先端の髑髏の身から、自身の劣化版を無限に創り出す。

そう、無限にだ。一度に創造できる数には限りがあるけど、それを何

度も繰り返せばいずれは軍となる。

「地に堕ちた者を助けるにはおのずと降りてくることになるでしょう。そうなれば我々の手の届くところともなるはずです」

危険だ、とドルドーニは思った。これはどう見ても、百や二百で済むような数ではないからだ。もはや三ケタを優に超えているように見える。ホールに姿を現さなくとも、鏡像のような彼らは出入り口を塞ぐようにして密集するほどだ。

一人一人は弱者であろうと、その膨大な数ゆえに侮ることができない者たち。

ルドボーンはこの城で唯一、数という凶器で相手を圧殺することが可能な存在だ。

「ニルフィネス様。いくら貴方といえど、手負いの者を守りながら……およそ三千の統制された軍をさばききれるのでしょうか？」

—————

セフティマ・バラシオ

第7 宮の入口で他の主従の到着を待っていたアネットは半眼となった。

引率として行かせていたグリーゼが帰ってきたのはいい。けれどニルフィの姿が彼の近くにはなかったのだ。

「ニルフィはどこ行ったの？」

「……ついさっき出て行った。トレス・シフラス3ケタの巣だ。ドルドーニと侵入者

が交戦したのを観ておきたいと言っていたんでな。先に帰ってお前に教えておけ、とも伝えられたぞ」

「はあ!? 待機とかじゃないの?」

帰ってきてからすぐ出ていくとは、なんともせわしないことだ。

「……藍染は『自宮に戻ってから』、『平時と同じく行動しろ』としか言わなかったようだ。だからこの宮の床を踏んだ瞬間に霊圧を辿って出て行った。平時と同じく興味のあるところに勝手に行くとな。霊圧を辿るのなら迷いはしないだろう」

「あの変態紳士のトコに置いてくるわけですか? それじゃあニル

「ファイが汚されちゃったらどうするのよ！」

「……戦闘うんぬん云々の前に、そのセリフが出てくるお前の頭をどうすればいいんだろうな。それに、あれは単なるヘタレだ。そうでなくとも世界があいつに戦闘以外でイイところを見させないだろう」

冷静に返しながらグリーゼはアネットの横を通り過ぎ、宮の中へと入ろうとした。

それをアネットが呼び止める。

「待ちなさい。迎えとかはいいのかしら」

「……ドルドーニが受けるだろう」

「あれ、ドルドーニが勝ったんですか」

「……すぐにやられなかったようだが、負けたようだ。死にはしなかったはずだろう」

ニルファイが途中で参戦したとは言っていない。であれば、あえて殺されなかったのか。侵入者はとことん甘いようだ。霊圧のざわめきは外壁周辺で未だに起こっており、プリバロン・エスパーダ十刃落ちたちは各自で迎撃しているのだろう。

最も早く決着がついたのがたまたまドルドーニの場所だっただけだ。霊圧を探ればチルツチとガンテンバインが今も戦っている。どことなく懐かしい霊圧も紛れているのはどうしてだろう。

しかしそんなことは今のアネットには些細なことだ。

「なんだか最近エクセキアスすごい数が増えた葬討部隊が、どっかに集まってるみたいなんですけど」

個々としては微弱ながら、水面の波紋が一点に集中するような感覚ベスキスを探查回路が伝えてくる。それは広大な虚夜宮ラス・ノーチエスに散らばっていたものであった。宮殿を網羅するような数が集結していつてるのだろう。

その中央に、なぜかニルファイとドルドーニの霊圧が紛れている。

「予定がだいぶ狂ってるわね」

「………違うない」

「勝手なことしてくれるじゃない」

「………予想の範囲内だ」

主語のないやり取り。それでも二人は問題なく会話し、これからど

うするかを決める。

「あなたが大丈夫だつて放置したのならアタシはなにも言わない。けど、これ以上予定が狂うことがあれば、アタシが行くわよ」

「……助太刀はいらぬのか」

「もちろん。あなたは露払いだけしといて。ずっと前から決めてたことですよ」

「……今なら選択を変えられる。考え直す気はないのか？ 俺ならば案外簡単に……」

「いいませんよ。……ええ、いらぬわ。アタシは、アタシのやることだけをこなす。物語が本当にあるのなら、他の登場人物なんてお呼びじゃありません。そのためにあなたの力が必要だから」

「……そうか」

これ以上の説得は無意味だと感じたのか、グリーゼは頷くだけで言葉が続けなかった。

そのまま背を見せるグリーゼに、最後、アネットが言う。

「アタシは、後悔なんてしないわよ」

一度足を止めただけで、グリーゼは返事を返すこともなく、上の階へと続く階段を登っていった。鞘もなく革ベルトだけで吊っただけの大剣の刃が鈍く光を反射した。

ゆっくりと息を吐いたアネットは、いま現在もつとも大きな渦中があるであろう方向を見やる。

「あとはあのお人好しちゃんがどこまで頑張るか、ですか」

伸びをし、自分も準備をするために宮の奥へと姿を消した。

その様は主人が軍に囲まれていることを脅威として認識していないようである。それは信頼なのか。あるいはどうでもいいのか。すべては二人の従者だけが知るところだ。

—————

ニルフィはゆっくりと周囲を見回した。どこを見ても量産型のような髑髏頭が囲んでおり、抜け道といえはさきほど一護が去っていつ

た場所だけだ。ほかの通路にはこれもまたホールにいる兵士を超える数が待機していた。なにかしらの罠があるのなら行かない方が賢いだろう。

しかし少女は無言。

奇怪な状況の中で、怯えることも警戒することもなく、その場に立っている。

かすかに重心を落としたニルフィをルドボーンが牽制する。

「忠告しておきますが、インフイニート重光軍系統の技はあまりお勧めできません。たしかに我々を一掃できますが、そうすると、同時にこの部屋を余波だけで崩壊に持ち込むでしょう」

部屋が崩壊すれば、ニルフィはともかく手負いのドルドーニは助からない。

そしてこの密集具合を考えて、光や幻影の攪乱かくらんもあまり意味を成さないだろう。彼らは二人を取り囲んでいる。刀を手に、殺意さえ向けているだろう。

その状況からシユミレーション。

一斉に、取り囲んだ状態から襲いかかる。同士打ちを恐れない全方位突貫は、ニルフィが一部を防いでいるうちに、多方向からすべての刃がドルドーニを討つ。下手に攻勢に出ればニルフィの身さえ危ない。

そもそも十刃エスパーダになる者たちは他者を守ることを苦手とする。なるほど。ニルフィの長所のほとんどを潰してくるものだ。

それをドルドーニも悟ったのだろう。このままではニルフィを巻き込むことを彼はよしとしない。だから一步、少女を庇うようにして踏み出した。

「お嬢ニーさんよ、やはりここは吾輩が残るべきだろう。従者の申し出は嬉しかったが、なに、元からここで果てるつもりだったのだ。思ったほど未練はないさ」

「ねえ、オジさん」

「なにかね」

ドルドーニを見上げたニルフィがにつこりと一言。

「早々とあきらめないでよ、ふにやちんヤローが」

「……………。ーッ!? ちよつとまでエー……い！ なにかね、いまの下品な言葉は!?」

「え？ 早々とあきらめるなつてところ？」

「その後だ！ 吾輩は、ふ、ふにやチンなどでは無い！ そして淑女がそんな言葉を使つてはいかんぞ!」

「だって、グリムジョーが教えてくれたんだよ。気弱な相手に使う言葉だつて」

「だからといってそんなもの……」

「それと、オジさんにだけ使えつてさ」

「いつぞやの仕返しか！ 恨むぞ青年!! ホーベン そしてなぜかお嬢さんニヤの意図せぬ罵倒に興奮してしまったではないか!」

なぜドルドーニが拒否するのか分からずニルフィは首をかしげるが、自分たちを囲む兵士たちが踏み出したことで表情を引き締める。

「でもさ。私はもともとから逃げるつもりなんてさらさらないよ」

身軽になるために、フードの中に入っている小袋をドルドーニに押し付けた。

「逃げるために力を使うことはもう終わり。だって、そのためにキミたちと戦つて、修行してたんだから」

数でも戦略的にもすべて後手になっている。鬼道も限界がある。強力な技は余波だけでドルドーニを殺しかねない。普通に考えればこれは詰みだろう。

「ルドボーンさん」

「いかがなさいましたか。我々としても貴方と矛を交えることは控えたい。ゆえに、この場は見なかつたことにしていただけだと思いません」

「あははは、そうだね。これは私も詰みだと思ふよ。幻影も光も範囲攻撃もぜんぶ無駄になつちやうし。キミの能力は創造主なんて自称できるくらいにはすごいよ」

けれど。

「キミは、正確に十刃エスパーダの実力を理解できてるのかな」

「……と、言いますと?」

「天の存在だ。自分では届かない。そう言ってるけど、今の有利にすぎる状況なら、ひよつとしたらくらいには倒せるかも、なんて思ってるんじゃないの?」

ルドボーンは答えない。彼とはほとんど交流がなかったために、ニルフィは彼の内心を知ることができなかった。たとえルドボーンが肯定してしようと否定してしようと、ニルフィにとってはもはや関係ない。

「オジさんはそこを動かないで」

「む、なぜかね」

「間違つて首を跳ね飛ばしたら、笑い話にもならないからさ」

ほがらかでありながら物騒な物言いにドルドーニが押し黙る。

安心させるようにニルフィが柔らかな笑みを浮かべた。

「だいじょうぶだよ。無茶なんてしないし、正当防衛だって言い張ればいいからさ」

この作戦を考えた者は十分な用意をした。

しかし実質のところ、ニルフィのことを甘く見ていたのではないだろうか。忘れていたのか、あるいはこの数の暴力を相手には無意味だとハナから決めつけていたのか。

「じゃあ、いくよっ」

ニルフィが体を揺らめかせた。そしてトンツと軽くその場で跳ぶ。

仮に攻撃に移行するならばそれは隙となる。そうでなくとも圧倒的物量で潰すことに違いはないだろう。

それにいち早く気づいたルドボーンが一斉攻撃の合図をしようとする。その間、実に一秒未満。一対三千のある意味絶望的な戦いの狼煙のろしが上がるとする。

しかし、それは指を鳴らすのか、はたまた号令で始まるのか。

それをニルフィとドルドーニは知ることはなかった。

その時にはすでに、少女が戦いを終わらせていたから。

少女の体がブレた。それも一瞬のこと。同時に、遅れて鈍い音がいくつも重なり合い、空気が破裂したかのような衝撃が部屋に轟く。ゴシヤツ、と。発生源は数多の兵士たちの肉体からだった。

ルドボーンを除いたホールにいた彼らは一人の例外もなくわずかに空中に浮いた。そして一斉に刀を落とし、つられるようにして床に崩れ落ちる。一瞬のあと、ホールを蹂躪するように乱気流が発生し、空虚な亡骸を端にまで積み重ねられた。

それはまるで手品のような出来事だった。

この場で立っているのはニルフィとドルドーニ、そして故意に残したルドボーンだ。

「ーはい、終了」

同じ場所に立つ少女の声。ドルドーニとあえて残されたルドボーンが我に帰った。

「な、なにが……ッ!？」

待機させていた兵士を呼ぶのも忘れてルドボーンが周囲を見回す。彼の忠実な兵士たちは誰ひとりとして立ち上がることはなかった。それもそうだ。ついさつきまで存命していたものが、たったの一瞬で全員が首を含んだ急所を破壊されたのだから。

「まあ、これは完全に力技だけだね。幻惑、鬼道も含めた殲滅技。それとあと一つ、私の強みはあるんだよ」

「……まさか」

ルドボーンは今の今まで失念していたはずだ。

すなわち、エスパーダ十刃最速。

膨大な数との戦闘ではあまり役に立ちそうにない称号。しかしこの場のありえない現象は、その称号ひとつで説明できる。

ニルフィはただ、響転ソニードと対人戦に特化した格闘術を使ったただけだ。それを使って丁寧にひとりひとりの兵士の首を砕いてまわった。

ただそれが、わずか一瞬の間に満たないあいだに終わったことだ。その速度についていけなかった空気が乱気流となって荒れ狂うほど。

カリマ響舞

ソニード基本的な響転は高速移動中に攻撃はできない。一度停止し、それか

ら実際の攻撃に移行する。あまりに速くとも急ブレーキが必要なそれらのデメリットを、死神の歩法も合わせて排除し、そして創り出したニルファイ専用の技だ。

ルドボーンとその背後の命令者は見誤っていた。ニルファイの速度は、常識で説明できるものではなくなっている。数による時間稼ぎは最初から望めなかったのだ。

「これは、凄まじいな……」

こころなしに顔を引きつらせているドルドーニが小さく呟いた。

それを聞くこともなく、ニルファイはルドボーンに尋ねる。

「まだやるつもりかな、キミは？」

このまま戦っても両者のどちらが生き残るかなど、誰の目にも明らかだろう。たとえあと千の兵が使われたところで、先の五百のものと同じ末路を辿る。

長所を本当の意味で潰されたのはルドボーンのほうだったのだ。

予期せぬ身内争いは、少女の勝利で幕を閉じた。

逆鱗は何処にあるか

暗闇の中でもまた、ひとつの戦いが終結していた。

「まあ、油断しなけりゃこんなモンか。いくら強くなったつっても、オレには届いてねえしな」

アール・アルエリ。彼は能力の一つによって姿を変えており、いまはとある死神の青年の姿となっている。

志波海燕しば かいえんという名の死神であるが、とある虚ホロウに肉体を乗っ取られた彼をさらにその経験や記憶ごとアール・アールが捕食し、喰グロトネリア虚の能力によって発現させている。それによって海燕の始解『振花ねじばな』を使うことも可能であった。

今のアール・アールの手にもその三又の槍が握られている。

「悪く思うなよ。こつちにもこつちの事情があるんだよ。具体的には、オレが少しでも怪我しちまうとチビが騒ぐんでな。ああ、愛されてるってのは辛いなあ。だからソツコーで終わらせたことは大目に見てくれ」

アール・アールが語りかけているのは、振花の刃に腹部を貫かれて頭上にぶら下がっている女の死神。強い意志の光が宿っていた目は虚ろな眼差しで、なにも映していない。

彼女については海燕の知識から理解している。

朽木ルキアという死神だ。海燕のことは、上級貴族の養女という身分と、その優遇措置ゆえに周りの疎外感を抱いていたルキアの心の支えになっていたことで慕っていたらしい。そして虚ホロウに体を乗っ取られた海燕をその手で殺した。

ほぼ海燕本人となったアール・アールを前にして動揺したところを仕掛ける。隙も与えずに相手の心の傷を言葉でえぐっていき、そして動きが止まったところをチョイ、だ。なんの面白みもない戦いだっ

けれど油断していれば負けていたかもしれない。それだけこのルキアという死神は、昔よりも成長していた。

しかし変わったのは彼女だけではない。

アーロニーロは慢心や油断で痛いほど痛い目を見ることを、小さな少女から教え込まれていた。たとえ一年にも満たない時間であり、そして地力はさほど変化していなくとも、戦い方を変えるだけで驚くほど楽に戦闘が運ぶ。

「アーアイツには一応、感謝しとくか？」

「ー今度、ほかの奴らよりもデカイ菓子の袋でも与えたほうがいいな。」

頭ではそんなことを考えつつ、槍を横薙ぎに振るう。

ヒトの形をしただけの人形のようにルキアは床を転がっていく。

「特別戦いを楽しみたいってワケでもないしな。前と違って、簡単にケガしてられなくなっただよ」

誰にむけるとも違う、独り言。

影響を受けた大きさに苦笑する。甘くなつたつもりはない。けれど、実際のところ緩んできているとは自覚している。要は認めたくないだけかもしれない。

「で、久しぶりじゃねえかよオイ。先輩に挨拶も無しか？」

「生憎、兄けいのことは存じぬ。他者の姿を騙る醜悪なものけ風情としか」

アーロニーロが振り返ると、そこには、瘦躯で、肩にかかる程度の長さの黒髪をもつ白皙の中性的な容姿の男が立っていた。隊長格を示すように白い袖のない羽織を着ている。

六番隊隊長、朽木白哉。

予想よりも早い到着にアーロニーロが眉を上げた。

「随分と早い到着だな。藍染様は援軍が来るにしても、まとめて何人か向かってくるって予想してたつてのに」

「黒腔ガルガンダの安定にはまだ時間がかかるはずだった。しかし、今の虚ウエコムンド圏の危険性は想定以上。それでは先に向かった者たちの負担が大きくなる。ゆえに、代表して私が先行してやって来たまでのこと」

「おーおー、それで真つ先に、危なくなってる養女のトコに飛んできたつてか。さすがは権力使ってまで危険から遠ざけてただけの溺愛ぶりだな」

海燕と白哉の交流はさほど深くはなかった。養女として迎え入れたルキアをほぼ放任主義で貫き、そのため直接的な対面はほぼないに等しいと記憶してある。

だから死神の真似をするのも効果はない。

海燕の顔のまま素を出し、アールローニークは軽薄に笑った。

「で？ いま虚夜宮ラス・ノーチエスにいる隊長格はお前だけってワケか。なかなか無用心すぎやしないか」

「どういう意味だ」

「お前ら死神が想像してるよりずっと、こっちの戦力は上だぜ？」

たった一人のチビのおかげでな。

そこまでは言うこともなく、そしてわざわざ教えるつもりもなく、

アールローニークは右手の親指で胸を叩く。

「オレは第9十刃ヌベール・エスパレードアールローニーク・アルルエリ。お前は？」

「答えるまでもない。私の正体はただ一つ。ロー兄等けいの敵だ」

「そうかい朽木白哉。つれないトコはぜんぜん変わってねえな」

そんなことはどうでもいいとばかりに、白哉が部屋の端に転がっているルキアに目をやる。

「一つ聞きたい。あれと戦ったのは、兄けいか」

「答えなくてもわかかってんだろ」

「そうか」

白哉が斬魄刀を持ち上げた。

ローこりやあ……。

ロー参ったな。

内心で深く息を吐くアールローニーク。朽木白哉についての情報ならば、海燕の記憶などによって把握している。

アールローニークの一番変わったところは、互いの戦力差を本当に理解することであった。それを元に作戦を立てて攻略していく。パズルのようなそれは存外、アールローニークに合った戦い方でもある。もとは修練時にニルフィになめてかかり、痛い目を見たからこそその反省点。

それゆえに、勝率なども、無意識のなかで計算できる。

「もしかしても怒ってる？」

「兄には関係のないことだ。だが案ずるな。貴様が敗北するのはその傲りのためではない。ただ単純に、格の差だ」

「まさに強者のセリフだな。大きくなって大きく出たもんだ」

今ならまだいい。しかしもつとも厄介なのが白哉の斬魄刀の能力で、それこそが彼を隊長格に押し上げたものであるとわかってしまう。正解『千本桜景厳』。これがキツイ。乾いた笑いが出そうだが、

「それにしてもよ、ー勝てないって誰が決めたんだ？」

最初から負けるつもりで戦うはずもない。

槍を独特な高い構えで持ち直し、片手首を主軸に回転させる。風がそれに巻き込まれた。白い死覇装が、アールローの戦意を表すかのように舞い上がる。

退くという考えは頭がない。以前ならば多少の臆病さは持ち合わせていたが、いまは撤退することなど、それこそ……。

ーああ、クソ。

ーまたアイツのことが頭に浮かびやがる。

雑念を消してアールローが前方を見据えた。

刃の先を白夜に突きつける。

「いくぜ」

踏み出す。それは白哉も同時だった。首を狙ったアールローの槍は、峰に手を添えた白哉の刀に防がれる。

さらにアールローは体を回転させながら風車のごとく刃を奔らせた。

金属のぶつかり合う音が幾重にもこだます。

舞うように槍術を繰り出すアールロー。それをことごとく白哉はいなす。

しかし防戦一方となつているのは白哉だ。リーチも威力も、アールローが勝っている。刀でいなすのにも限界があるだろう。

槍が振るわれ、薙ぎ、突き出される。一度の停滞もなく回避にのみ専念する白哉を追いすがる。変幻自在な技の数々に、槍の相手などさほど経験はないであろう白哉が目を細めた。

遠心力の乗った攻撃を嫌って白哉が上へ飛んだ。それを追う。自分ではなく、刃が。手の中で柄が回転する。即座に方向を変換して白哉に牙を剥く。

それを瞬歩で大きく後方に跳ぶことで白哉が回避した。

「散れ『千本桜』」

能力解放と共に刀身が目に見えないほど無数の刃に分裂する。それにより対象を、いまはアローニーロを刻むのだろう。

だが、知識から予想していた攻撃だ。

アローニーロは即座に槍を振り上げ、振り下ろす。巻き上げられたのは水。これこそが『掬花』の能力だ。水は瞬時に波濤はとうとなり、自分に迫るであろう極小の刃の群れを押し流した。

さらに接近する。斬魄刀をもとの刀に戻した白哉に槍を打ち据える。これも頭上で防がれた。だが、次。再び波濤が生まれ、死神を圧殺・両断する。

「破道の八十一」

断空

鬼道によって生まれた壁に阻まれた結果にー笑う。予想通りだ。どう止めるのか、知識から引き出せるゆえの戦略が組める。

壁に激突して散った波濤を目くらましとして白哉の背後を取る。

そして鮮血が床を汚す。

「チツ、いまのを避けんのかよ」

離れた場所に白哉が立っている。さっきの攻撃で仕留めるつもりだったが、槍がえぐったのは左腕の肉だ。心臓からはほど遠い。そしてアローニーロも、薄く脇腹を切られている。

「で、どうだい。格下相手に傷つけられんのは」

「その姿は紛い物ではないな」

「そりゃそうだ。そうじゃなきや、そこに転がってるソイツを楽に倒せなかったよ」

「……………」

軽口は叩けるが、アローニーロとしては先の一撃で倒すつもりだったのだ。

姿を惑わすだけの相手と思う油断。槍の一撃はそれまで吹き飛ばしてしまった。

アーロソツ、ついてねえな。

アーロニーロの見ている先で、白哉が逆手に持った斬魄刀を離し、地面に向かって落とす。

「アーロ解」

せんほんぎくらかげよし
『千本桜景厳』

刀は地面に吸い込まれるように消え、同時に足元から巨大な千本の刀身が現れる。直後それらが一齐に舞い散り、始解時を遙かに上回る数の刃と化す。暗闇の中で光を反射する様は、まさしく桜のようだった。

桜色の濁流とも捉えられるその無数の刃を縦横無尽に操る事で、攻防一体・死角皆無の完全なる全方位攻撃が可能となる。それこそが『千本桜景厳』の恐ろしいところだった。

ゆつくりとアーロニーロは周囲を見回した。

囲まれ、包まれている。これに耐えられる十刃エスパーダがいかほどいようか。

最初から分の悪い戦いだったのだ。

「姿を騙るだけのものではないようだ。それならば、こちらも相應の力を使わせてもらう」

細長くアーロニーロが息を吐く。肩から力を抜き、槍を下げた。

「ハッ」

そして笑う。絶望や無力感など、それこそ最初から皆無だった。

逃げる？ それは嫌だ。

助けを乞う？ 論外である。

そんな惨めな姿がある一人に見せるくらいならば。

「アーロ喰い尽くせ」

グロトネリア
『喰虚』

アーロニーロの姿が膨れ上がった。下半身が巨大な蛸のような姿と変わる。表面が不気味にうごめき、側面についた巨大にすぎる口から大気を震わせる咆哮が響いた。

今まで喰らった虚^{ホロウ}三万三千六百五十の顕現。それがこの能力である。

「お前の使う刃は数億だったか。けどよ、たった一枚で虚^{ホロウ}が殺せるワケじゃねえんだろ？」

数の上では数字ほどの不利ではない。そうやって自分を奮い立たせ、アローロニーロが叫ぶ。

「あんま凶に乗らないほうがいいぜ、死神？ 慢心つてのは必ず身を滅ぼすんだよ!!」

^{グロトネリア}喰^{セロ}虚^{セロ}のあらゆる表面から虚^{ホロウ}の顔が生まれた。

虚閃

数百を超える極太の光線が包囲してくる刃の花弁を押し戻す。

それは分厚い包囲網が穿ち、外の闇をアローロニーロの目に焼き付ける。

喰らった獲物の能力、霊圧を我がものとするからこそできた。絶え間なく虚閃^{セロ}を放ちながらどこか冷静な思考がある。

ーったく、誰でもいいから頼むぜ。

そしてべつの行動に一瞬だけ頭を割く。この戦いには関係のない布石だ。あとは誰かがやってくれるはずだと、心の中で願った。

掲げられた槍が、突き出される。その先には死神がいる。ならば倒そう。倒さなくてはならない。

自身も凶暴に笑いながら咆吼し、進む。

無謀で絶望的で最悪の戦い。万と億の戦いだ。

それでもなお、前へ、前へと手を伸ばした。ただ一つの与えられた言葉を守るために。

やがて、その姿は花卉の中に埋もれていった。

—————

トレス・シフラス

3 ケタの巢から脱出し、^{セブテイマ・エスパード}第7 宮へと向かっていたニルフィと

ドルドーニ。霊圧を感知しながらの移動であったが、気になっていた戦いのうち二つが終わったことにニルフィは気づいた。

「あ、チルツチさんとガンテンバインさんのほうは逃げられちゃったみたいだね。痛み分けかも」

「ううむ、黒星をあげたのは吾輩だけか。いや、負けて欲しかったというわけではないのだが、釈然とせんな」

「オジさんは相手が悪かったただけだよ。侵入者のなかで一番強かったのがクロサキさんみたいだからね。すごく頑張ったと思うよ」

「……………」

「どうしたのオジさん？」

「…………む、いや、なんでもない。それよりも、回道というもので少しばかり楽になったが、吾輩の傷はさつきと癒しておきたいのでな。休める場所に早く向かおうではないか」

一瞬だけドルドーニが立ち止まったのだ。

取り繕うような言い方にニルフィは首をかしげる。

「なにかね」

「オジさん、嘘ついてる。…………ううん、嘘っていうより、隠し事かな」
目に浮かんだわずかばかりの動揺さえ押し殺し、ドルドーニが安心させるように笑みを浮かべた。

「心配のないことだ」

「ねえ、なにを隠してるの？」

再度、ニルフィが訊く。さつきまでなかったドルドーニの不審な様子。それは足を止めた瞬間なにかに気づいたようであり、実際にそうなのだろう。しかしニルフィはドルドーニよりも探査回路ベスキスが優れていた。だからその時、ドルドーニ自身が動揺するような出来事はなかったと言いつける。

しかし今、アールローニが何者かと戦闘を再開し、そして裏付けもなくニルフィが訊いた。

「…………アールローニの『認識同期』でなにか伝わったの？」

アールローニの能力の一つである『認識同期』なら、情報を同胞の頭に直接報せることができる。

ゆえに、ドルドーニが情報を受け取ったのであろう様子も説明がついた。アールローニが帰レスレクシオン刃を使ったタイミングとも一致していた

から。

「あく、うむ。そんなところだ。しかしさほど重要でもない情報だったのだよ」

「どういうのかな」

「もとの侵入者の一人、朽木ルキアという死神を第9十刃が討ち取ったとな。そして、虚圏ウエコムンドに最初の侵入者以外の者が紛れ込んだらしい。その警戒にあたれという報せだ」

「そっか。嘘はついてないね。じゃあ今度は、言っていないことも教えてよ」

見るからにドルドーニの顔色が悪くなる。この実直な紳士は、よくもわるくも隠し事には向かなかった。

なにより、それだけの情報をなぜアールローニーロがニルファイにも教えなかったのか。

嫌な予感で背筋が凍るようだった。

「……………」

ドルドーニは押し黙ったままだ。

「もういいよ。オジさんは私の宮に向かって。これだけ近くに來たら追っ手がいてもグリーンゼたちが出てくれる。私はアールローニーロのトコに行くよ」

「待ちたまえ、お嬢さんニーニヤ」

「どうして?」

「どうしてもだ」

不安そうにニルファイが眉を下げた。

ドルドーニが進路を阻むようにして動いたからだ。そしてついに隠すことなく、さきほどまで濁っていたことを話す。

「たしかに、第9十刃スベーン・エスパーダが戦っている相手は隊長格の死神だ。そして、劣勢に追い込まれるであろう旨も伝えられた」

「なら、どうして?! 早く助けに行かないとアールローニーロが!」

「もう一つ伝えられていたからだよ」

鋭い目つきのままドルドーニが静かに言った。

「何者も、ニルフィネス・リーセグリンガーを第9宮周辺スベーン・パラシオに近づけ

るな、と」

顔つきを厳しくさせたのはドルドーニだけではない。

「そんなの、おかしいよ。どうして、どうして私だけ……!?」

「わからんかね」

「わかんないよ！　こんなときのために、私は力をつけたのにッ」

大切な仲間が少しでも傷つけられるだけでその相手を殺そうとする少女だ。頭の中は焦燥と悲哀で占められている。目の前にいるのがただの木偶でくであればすぐさま壊してでも先に進もうとしただろう。

それを吹き飛ばすつもりでドルドーニが声を張る。

「お嬢ニヤさんに伝えなかつたのは、仮に教えれば必ず行くだろうからだ。

……それは当たり前のことであつたな。だからこそ、第9十刃ヌベーン・エスパーダはお嬢ニヤさんの身を案じ、そしてそれが自らのためになると判断したのだよ。助けの言葉などただの一つも無かつたというのにだ！」

それだけ危険ということだろうか。いかにニルファイといえども万が一はある。

しかしそれがアールローニーロの拒絶のように感じられて虚しさがこみ上げた。

けれど、

「……そんなことで私が止まる理由なんかにならないッ！」

ニルファイが足を踏み出した。

敵が強い？　来るなど言われた？　たったそれだけの理由で立ち止まる安い覚悟なら、そもそもドルドーニを助けはしなかった。

それは彼にもわかつているはずだ。

「どう言われようと、もう私は行くよ」

「本当に止まるつもりはないのかね？」

「……目の前で大切な相手を守れなかつたヒトを、知ってるから。でもね、同じ後悔をするなら、それから目を逸らしたまま生き続けるなんかよりもマシだよ」

ドルドーニはそれ以上なにも言わなかつた。

少女はすぐさま響ソニード転ソニードを使って姿をかき消し、砂漠の宙を駆ける。

その速度は並みの破面アランカルでは気配にすら捉えられないものだった。

しかしそれでも、ニルファイには限界速度がひどく遅く感じた。
「ーだいたいじょうぶ。」

「ーゼツタイにアールニーロが負けるはずなんかないもん。
ーだから……。」

時間の感覚が曖昧だ。ただ一心不乱にアールニーロの霊圧のある
であろう場所を目指す。

そして、とうとう宮が見えた。巨大な塔の形をした、鬼道の練習な
どのために何度も足を運んだ親しみのある場所だ。

「はやくー！ はやくッ」

あともう少しで到着する。助けられることが可能になる。わずか
に、ニルファイの心が緩んだ。

その時だった。

吭景・千本桜景巖（こうけい せんぼんざくらかげよし）

見る。宮の最上階が内側から破裂したかのように吹き飛んだ。

オオオオオオオオオオオオ………ッ!!

内部が晒される。すさまじく巨大な存在が偽りの青空の下で雄叫
びをあげている。

それはアールニーロの喰（グロトネリア）虚が解放された姿であり、そして巨大で
あるからこそその惨状が余すところなくニルファイの目に飛び込んで
きた。

「あ、ああ………。」

絶望の込められた声にならない音が喉から出た。

喰（グロトネリア）虚の全身が切り裂かれており、血が噴水、あるいは滝のように流
れていた。それは赤い洪水かと思間違えるほどだ。溢れた血が宮の
壁をつたって遥か下に垂れていく。

雄叫びかと思つたものは断末魔だった。天敵ともいえる日光の下
に晒（さら）され、そして戦鬪の続行など到底不可能な傷によるダメージに
よつて、だんだんと細くなつていった。

死神らしい霊圧は健在。勝敗はすでに決したようだ。

「ー……ッ！」

ニルファイがソレに気づいたのは単なるまぐれだ。神というものが

本当にいるのならば、偶然をよそおった必然のはずである。

視界の端を落下していくソレを見た瞬間、少女は飛び出し、腕にあらまるソレを抱き抱えた。

させぬとばかり、死神が追撃を仕掛けてくる気配がある。そちらへ向かって幻セロ・エスベヒスモ光閃を放って十数秒の足止めを仕掛ける。その間にニルフィは砂漠へと降り立ちながら素早く手陣を切った。

「縛道の七十二」

とうざんしょう
倒山晶

四角すいを逆さにした形で、周囲から中が見えない霊圧の結界を出現させる。

そこでようやく、少女が腕に抱えていたモノをゆっくりと結界の床に置いた。

切り裂かれてちぎれたのだろうか。ソレは、上半身だけとなったアーロニーロの変わり果てた姿だった。死覇装はボロ切れと化して触手が無理やりヒト型をとったような姿をさらけ出す。絶え間なく小さな噴水のように血が噴き出していた。

首から上の薄紅色の液体で満たされたカプセルには無数のヒビが無念を表すかのように目を引く。

すぐそばにニルフィがかがみ込んだ。

「……なんで、来やがった……」

「まって、だいじょうぶ、大丈夫だから！」

過呼吸でも起こしそうなほどニルフィの呼吸は薄く早い。手に暖かな光を宿して、回道のチカラで仲間の傷を癒そうとする。だが、小さな手を胸に触れる寸前で止めた。

どこから癒せばいいのかわからないほどアーロニーロの体は破壊し尽くされていた。

抱えてきたためにニルフィの死覇装の前面は隙なく赤くなるほどで、無事な部分を探すほうが難しく、素人目にも致命傷という言葉が頭に浮かぶ。

「う、あ……………」

視界がぐちゃぐちゃになってわけもなく手がガタガタと震える。

そのまま手をあてもなく傷口に添えようとして……、異形の右腕にそつと押さえられた。力なく、ニルフィの手が下ろされる。

「自分ノコトクライ、自分ガヨク分カツテルヨ」

「だ、だいじょうぶだつて！ オリヒメさんならきつと治してくれる！ だからそれまで」

「俺が持たないって、ことくらい……わかつてんだろ？」

ポツリ、とうつぶむいていたニルフィが呟いた。

「苦しくないの？」

「ツ！ 苦シイ。苦シイヨ」

「けどみつともなく泣き叫べるワケねえだろ」

弱々しく持ち上げられたアールローの右手のひとさし指が少女の目尻を軽くはじく。水滴が宙に跳ねた。そこでようやくニルフィは、枯れていたと思っていたのに、自分の大きな眼に厚い涙の層ができていることに気づく。

「泣き虫のお前が、こんな我慢してるつてのによ」

蚊の鳴くような声でニルフィが訊いた。

「なんで……なんで、最初から呼んでくれなかったの」

自分がすぐそばにいればここまで傷つかなかった。

今にも泣き出しそうな少女の声に、アールローがヒビの入ったカプセルの奥から遠くを見る。

「なんで、か……。なんでなんだろうな……。……いや、わかってんだよ、理由^{ワケ}なんてよ」

なあ、とアールローが聞き返す。

「最初に会ったときのこと、覚えてるか？」

「うん、おぼえてる」

「その時、お前は俺に言つて……」

「ダカラ、ダヨ。コンナ、カツコ悪い姿ヲ見ラレタクナカツタ。ツマラナイ、意地^{イヂ}ダツタ」

「私が、縛つてたの？」

最初に二人が出会ったとき、ニルフィはアールローのことを『かっこいい』と評したことがある。それをアールローは一瞬たり

とも忘れたことはなかった。だからだ。彼はニルファイにとって『かっこいい』人物であろうとしてくれた。

逃げも負けもしない、そんなヒトに。

少女に否はないんだと否定する。

「お前が、はじめてだった。オレを見て心の底から笑いかけてくれるヤツは。今だって、こんな、バケモノを前にしてるってのに、悲しんでる、だけ、で……」

声をすぼませていく。

ニルファイが小さく柔らかい両手で異形の右手を包んだ。血で汚れることも厭いとわず、絶対に放すものかと握りしめる。

命の欠片が手の中からこぼれ落ちていくことを感じながらハツキリと言い切る。

「キミは、バケモノなんかじゃないよ」

自尊心を守るためだった、などという建前はニルファイにとって無いものに等しかった。

少女を気遣ってくれたのならばそれは優しさゆえだ。ちゃんと心があったから、ニルファイを大切に扱おうとしてくれた。だからバケモノじゃない。誰が否定しようともニルファイが認める。

「……ッ。お前は、本当にお人好しだなア」

「約束シテヨ」

「生きてくれ。お前は、まだこっちに来んなよ。からだ張ってやった意味、ねえだろうが。なあ……ニルファイ？」

縋すがるようにして、二つの球体状の頭がニルファイを見据えた。

「オレは」

「僕ハ」

「――お前の仲間でくれたか？」

何度もニルファイは頷く。けっして泣くまいと、最後に見せてやれるのが笑顔であるべきだと思いつつながら、今にも崩れそうな微笑みながら頷いた。

アーロニーロも孤独だったのだ。その異形ゆえに忌避され続けていた。

彼が心を開いてくれたのはニルファイが仲間として接して、知らずのうち孤独を癒したから。まったく違う境遇でも、本当のところは似た者同士だったのかもしれない。

「……アールローニーロ？」

蠟燭ろうそくの灯火が消えてしまうように包んでいた手が滑り落ちる。

頭部のカプセルが静かに割れ、流れ落ちた赤い液体のなかに二つの物言わぬ頭が転がった。皮肉交じりの軽口も、それとなく気にかけてくれるうれしい言葉さえ、もうニルファイは聞くことができない。

エスパーダ
十刃、残り九名。

—————

音もなくニルファイが第9ヌベーン・パラシオ宮の最上階に姿を現した。

表情の抜け落ちた顔のまま、ゆっくりと周囲を見回す。まず足もとにはニルファイに与えるつもりであっただろう菓子菓子の袋が破けて中身をぶちまけてた。端のほうにはアールローニーロが仕留めたであろう女の死神が寝かせられている。

そしてその横に、件の隊長格である死神がいた。背には六の数字。おそらく朽木白哉だろう。

言葉では表現できない感情が胸の内であればれるが、不思議とそれを吐き出すことはなく、ただマグマかエンジンのようにぐるぐるとまわっていく。

けれど静かだ。口から出たのも、いつも以上に平坦な声だった。

「キミが、アールローニーロを殺したヒトなのかな？」

「答えずともわかっているだろう」

おもむろに白哉は斬魄刀を引き抜いた。

黒い死覇装の至るところが破け、負傷とも見える傷さえ負っている。どうやらアールローニーロはただでは負けなかったようだ。

「ねえ、訊いてもいいかな。大切な人を傷つけられたときに感じる感情って、なに？」

「……怒りだ」

「へえ、そつか。これが怒りかあ。案外、激情ってほどでもないね」
「私には貴様が怒り狂っているかのように見えるが」

「さあどうだろ。……よくわかんないや。もしかしたら悲しいだけかもしれないし、苦痛が辛いのもかもしれないしね」

ふと、ニルファイがとてもいい名案を思いついたかのように、ほれほれしそうな微笑をたたえて両手を胸の前で組んだ。

「あ、そうだ！ ジャクヤさん。提案なんだけども、これから戦わないで、黙って手足を折られてくれないかな？ 私が飼ってあげる。誰にも殺されないオモチャにしてあげるよ？」

「是と返すつもりないことを理解しているだろう」

「それでもだよ。……これが私にできる最大の譲歩なんだけど、さ」

「解げせぬな」

「なにがー？」

「それは、これから刃を交えた結果、貴様が勝つことを前提としたものだ。十刃エスパーダの実力というものがたかさがさきほどの相手程度ならば、7という貴様もさほど変わるまい」

「……………」

少女が目を細めたとき、フツと白哉の姿が掻き消える。

瞬歩だ。そして背後。白哉の斬魄刀がニルファイの背を切り裂く。しかしそれは残像だった。白哉のさらに背後を取ったニルファイが三人に分裂した。一人、二人と白哉はそれらを斬り捨てる。さらに側面を手刀で狙ってきた少女の顔面を貫いた。が、それも束の間のこと。さらに少女が四人へと増えて死神を取り囲む。

靈子の刃をまとわせた右腕で、白哉の体を穿った。

しかし、

「ッ！」

ニルファイが目を見開く。貫いたのは白い隊長羽織だけだ。

隠密歩法 // 四楓しほつの参さん『空蟬うつせみ』

相手に自身を倒したと思いつまらせるほどの残像を見せる瞬歩を繰り出した白哉。彼はニルファイの背後を再び取ろうとした瞬間移動中に――吹き飛ばされた。いや、かろうじて右腕を防御にまわしたよう

だが、無数の蹴りを一度に受けたことで、その腕は使い物にならないほどスクラップにされている。

「それ以上、仲間を侮辱するような言葉を吐かないでよ。虫睡むしずが走る」
無表情のままニルファイが蹴りを放った脚を下ろす。完全に後手でありながら、響舞カリマを使用し、あろうことが瞬歩によって移動中の白哉に強烈な蹴りを叩き込んでいた。

たしかに白哉の瞬歩は速い。破面アラシカルたちの響転ソニードでも対抗できるものがどれほどいようか。

しかしいくらニルファイは速いという情報があっても、この理不尽な速度は想定していなかっただろう。あるいは自分の瞬歩ならば対処できると思っただか。だからこそその傲慢から生まれた油断。奇しくもアローニークの言い放った言葉が現実味を帯びてきた。

あまりにも単純に、誰であろうと速さでニルファイに敵わないというだけで。

利き腕を破壊された白哉が千本桜を展開する。それを重光虚弾軍バラ・インフイニートの弾幕で迎え撃ちながら白哉に肉薄。極小の刃が二人のあいだで壁となる。しかし瞬歩で距離を稼ごうとした白哉にまた蹴りが襲いかかった。迂回し、差を付けられても、それでは少女を引き剥がせない。まるで機械のように次々と打撃を死神に叩き込む。

ニルファイを前にすれば誰でも勘違いするものだ。
死神は彼女のことを数字の通り七番目に強いと思っただろう。もしかしたら、というよりはたしかに通常時ならばその程度の力しか使わない自制心がある。だが、それはあくまで通常時に限った。

セブティマ・エスパーダ
第7十刃ニルフィネス・リーセグリンガー。
つかさど
司る死の形は『依存』。

彼女にとつて心の拠り所であるモノを破壊した場合にのみ、その凶悪な牙が剥かれる。

破面アラシカル化した時点で第0十刃候補となっていた、所詮は『7』という数字も間に合せのものだ。その理由も当初は、力を十全に出し切ることができるか、また制御ができるかが不安であり、勝率は十割とはいかないと予想されていたから。

しかしいまはその問題点はない。

逆鱗を撫でられたのならば、もはや抑えておく必要がないからだ。

「――正解『千本桜景厳』」

桜の大吹雪に囲まれながら、ニルフィは仲間の血で赤く染まったパーカーの死覇装を脱ぎ捨てる。

彼女の上半身を覆うのは薄皮ほどしかない黒いインナーだ。

両肩及び背の布が付いておらず、白い肌が剥き出しである。ほぼあのままの姿だ。首から鎖骨、それに肩にかけては稀代の芸術家が彫り上げた聖母の像のように美しくしいラインを描き、しなやかな細腕は氷の彫像のようだった。

そして、それら無機質に感じるほどに美しい体の中ほどにある二つの控えめな隆起が妙にイキモノ臭さを漂わせ、生物としての劣情を否応なく煽るほど蠱惑的だ。

右上腕には『7』の数字。左上腕には虚としての証である孔がある。

ゆっくりと息を吐き、目を閉じた。

生きる、と約束した。けれど戦うなどは言われていない。ならば、戦って負けない限りならなにをしてもいいはずだ。

仇の首を死者に捧げるくらいなら、この怒りという感情も収まるかもしれない。

そうしてニルフィは虚無感を胸に仕舞い込みながら、ぎらつく金色の双眸で桜吹雪の奥にいる死神を射抜く。

瞬間

高濃度に圧縮した鬼道を両肩と背に纏い、それを炸裂させることで鬼道を己の手足へと叩き込んで戦う白打の最高術を発動させる。

怪物として本性を十全に発露した少女。

彼女は相変わらず無表情でありながら、たしかに泣きながら嗤った。

霧中殺陣

廊下を歩いていったグリムジョーはふいに立ち止まり、虚空を睨みつける。

アールローが死んだ。それは、二度のうち最初の認識同期から予感があった。なにしろ彼自身が劣勢を予想し、そしてニルフィについても語ってあったからだ。それを聞いたどこかの雑魚である破面アランカルの嘲笑する気配もあった。しかし、以前までなら同じようにしていたグリムジョーは、かすかに眉をしかめること以外をしなかった。

そして二度目の認識同期。これが端的に事実を伝え、朽木白哉という死神のデータと、他にも隊長格の死神が虚夜宮ラス・ノーチエスへとやってくることも含んでいた。

グリムジョーはさほどアールローと交流したことはない。

とはいえ出不精なアールローが最近出歩くせいとか、暇を持て余して散策しているグリムジョーと出くわすことも多かった。そんなときの会話の内容もとある少女についてだし、互いにそれなりの苦勞をしているな、というどちらにしても不本意な終わり方で共感を覚えたのは、まあ、余計だろう。

「……勝手に死んでんじゃねえよ」

聞こえるはずもないつぶやきが誰もいない通路に響いた。

それがどういった意味があるのか、深くグリムジョーは考えない。十刃エスパーダでありながらこんな早くにも脱落したことへの苛立ちか、もしくはただの気まぐれか。

あの悪食の権化も変わったのだろうか。

でなければ、わざわざニルフィに対しての気遣いともいえる行動をした理由にはならない。以前までの彼ならならば少女を単なる食料にしか見れなかったはずだ。

それが良かったのか悪かったのか。すべてはアールローだけが答えを知っている。

だからグリムジョーは口出ししない。

アールローが答えを見つけているのなら、それに反発するつもり

もなかった。

「あのバカが」

そして次の問題だ。

ニルファイが霊圧を撒き散らしているのがここからでも分かる。あの空気のように頼りないはずの霊圧が壁のようにグリムジョーの体を押そうとしているのだ。それがどれだけ高密度かは、言わなくともわかるだろう。デイ・ロイあたりならば気絶しないまでも膝を突くほど。

霊圧に触れたからこそ知った。

これは怒りだ。表面こそ静かだが、深くなればなるほど殺気が凄まじい。

かつてルピにむけていたものがほんのさざ波に思える。

「なにを廊下で突つ立っているんだ」

「……ウルキオラか」

一定間隔で靴音を響かせながらやってくる無表情な男にグリムジョーは気づいていた。

「リーセグリンガーのことか」

「……………」

「おまえが四六時中あいつのことを考えているとは思っていない。今はただ、あいつの癩癩があるのに気づいたからだ」

「てめえ、喧嘩売ってんのか?」

ものすごく不名誉な言われ方をした気がした。

「売ったつもりはない。並べ立てた言葉におまえが勝手に価値を付け、そして勝手に奪い取るも同然で買おうとしただけだ。おまえにしてはよく持った方だと思うぞ」

「てめえ……ッ!」

「変わったな」

「あア?」

「年単位で以前のお前なら、いまの俺の言葉でその拳を振り抜いていた。だが、していない。これは変わったといえるはずだ」

いまだに怒りは収まらない。だが、ウルキオラの言い方が気になっ

た。いつもの淡々とした言葉だけならば流しただろうが、今のウルキオラはなにかに疑問を抱いているように思える。

「それは、リーセグリンガーの影響なのか？」

あたかも自問するかのようにウルキオラが続けた。

「第9十刃ヌベール・エスパレードもそうだ。やつは情報から、他の破面アランカルであろうと食料としか見ていなかったはずだ。それなのになぜだ？ 先の認識同期にも他人であるリーセグリンガーの安否を託した。ならば第9十刃ヌベール・エスパレードですら変わったんだらう。それもリーセグリンガーに出会った境さかいからだ」

言葉が途切れた。それでも頭の中でウルキオラは考えているようだった。

グリムジョーは答えるわけでもなく言う。

「よく、喋るようになったな」

その声に、ウルキオラが初めてグリムジョーの目を見た。

「これは、俺の変化といえるのか？」

「知らねえよ。自分で考えやがれ」

「……お前なら答えを知っていると思った。答えの一番近くにいるのがお前だと考えたからだ。だがこの考えもおかしい。俺はなにを根拠に、お前が答えの一番近くにいると考えたんだ」

相も変わらず淡々とした口調が疑問に彩られた。

だがグリムジョーにわざわざこの大きな赤ん坊の面倒を見る義務など無い。

「知るかよ」

切り捨て、己の失態に舌打ちをする。

ウルキオラが進路上にわざわざ立ちふさがったからだ。いつもならば用事がない限り素通りを許すのに、はじめて私用でウルキオラが足止めをしてきた。

「もしかしてだが」

「……………」

「定期的にリーセグリンガーから与えられた駄菓子を口にしたらいいのか？」

「どうすりやその考えになんだよ」

もはやウルキオラは思考の迷路にはまっている。普段ならば考えられないほど内心では混乱しているのだろうか。

そうしているうちにも、ニルフィの霊圧がさらに高まった。

ふと、ウルキオラがガラス玉のような目を、戦いが起こっているであろう方向へと動かす。

「俺はいま、戦いに介入するべきかと考えた」

「勝手にしてろ」

「だが、なぜだ？ 他の奴らが戦っていてもこうは思わなかった」

虚無を司る十刃^{エスパーダ}。彼は自覚しているかはわからないが、かすかに眉を寄せた。

「これを表す言葉は俺の中にはない。れっきとした形があるわけでもない」

最後に、ひとつ。

「――これが、心というものなのか？」

独白を残してウルキオラはグリムジョーの横を通り過ぎた。

なんとも調子が外される。苛立たしげに頭を掻いたグリムジョー。

――動くな、こりゃあ。

この戦いをきっかけにすべてが動こうとする。善も悪も一緒くたにごちやまぜとなり、重ねた積み木を子供が無邪気に破壊したような、そんな結果になるだろう。

グリムジョーは歩みを再開させる。

一人だけの足音が廊下にこだました。

――

落ちる。落ちる。

朽木白哉は第9^{ヌベール・パラシオ}宮の側面を桜吹雪をともないながら落下していた。砂漠を背に、男にしては長い黒髪が尾を引いた。

戦闘区域を変えるために、まず白哉は塔から飛び降りた。敵しか目に止めていなかったニルフィはそれを追ってくる。それでいい。あ

のまま戦っていればルキアの体は挽き肉も同然になっていただろう。あとは目の前の戦いだった。

壁を黒が伝う。

弾丸を超えた速度で地面と垂直になっている足場を駆け抜ける少女の姿があった。視線が合う。少女が大きく跳んだ。そこへ白哉が刃を幾重にも殺到させる。だがニルフィは何もない空中を蹴り、飛ぶ。幾度も繰り返し、ジグザクな軌道を描く。三次元的な回避行動をとったニルフィを花卉が追いつがった。ニルフィは曲芸じみた動きで桜の中をくぐり抜け、数人に分裂。

銃をかたどった指を突きつける。

ゼロインフライト
重光虚閃軍

量には量で。巨大な柱となった極光が放たれた。

それを白哉が正解を操作し、砕き、散らしていく。余剰の霊子が雪のようにはじけた。

かなりの高さから落ちてきたのに地面がすぐそこだ。体勢を立て直そうと、白哉が攻撃の手を一瞬緩める。

ニルフィの姿は白哉の真上に。

「シッ…」

れっぼく
裂帛の気合の声。

体を捻り、強引に回転したニルフィが手足を振るう。

ウォラール
駆霊剣

四肢から霊子の刃を雨あられのように降らす。それを花卉でなぎ払い、いくつかの霊子でつくった足場を踏んで衝撃を殺す。

上を見上げた。いない。声はうしろから。

「破道の九十一」

せんじゆこうてんたいほう
千手皎天汰炮

ニルフィの背後から長細めの三角形の光の矢が、無数に白哉へ降り注ぐ。

それも圧倒的な量の花卉で防ぎ、足を止めたニルフィに押し寄せさせる。為すすべもなくニルフィを飲み込んだ……が、手応えがない。乾いた拍手がどこからともなく響く。

「やっぱりすごいね。アールローロからデータも貰ってるけど、見るのと体感するのじゃ全然違うよ。ここまで攻防一体の強い卍解だから隊長格になれたんだろうね。もっと優れた使い手がいてくれたらその斬魄刀も報われてただろうけど」

「なにが言いたい」

「え？　だって、そうでしょ。たしかにキミは自力でも優れてるけど、斬魄刀の強さにだけ過信してる。だから私にその腕を壊されちゃったんだよ。卍解がないと、キミはそんなものさ」

「いまだに右腕は動かない。」

そして油断していた、もしくは卍解ならば楽に倒せるだろうと予想していたのも、その一因だろう。なにしろ現世でニルフィは隊長格を一人、そして副隊長格に近いもの二人を秒殺しているといっても一弱そうなのだ。もはや本能的に、コレは懦弱な生物だと認識してしまう。それだけの容姿と霊圧の不安定さがあった。

だがそれを白哉は言い訳にするつもりはない。

ようやくわかった。

コレは危険だと。ここで仕留めなければ、後々の禍根になるだろう、と。

花卉を纏うように周囲に集めたとき、ニルフィが小首をかしげる。

「それに意味はあるのかな。なんで半径80から90センチよりも近くに寄せないの？　もしかしてそれが、キミが自分の卍解に巻き込まれない場所なのかな。だったら私がそこに入っても余裕があるね」

見抜かれるのが早い。

ニルフィの言ったその領域こそが、この卍解の唯一の弱点といつていい。

「貴様が言ったとおりだ。私はそれを無傷圏と呼んでいる」

「無傷圏……？」

「千本桜の刃が絶対に通ることのない領域だ。その意味することは、わかるな？」

「まあ、そうだね。間違つて操作したりとか、ちょっと動いても回避できる安全地帯つてことか。でもそれって、私がそこに侵入したらどう

しようもないよね。なんでわざわざ言ったのさ」

毅然として白哉が返した。

「貴様にこの卍解は破れぬからだ」

傲慢ともとれるその言葉をニルファイが肩をすくめてみせ、くだらないとばかりに言った。

「それはキミの卍解のハナシ。真正面から叩き潰そうだなんて、レスレクション刃を使わなきゃ思っ
てないよ」

「使えばいいはずだ」

「まさか。これを無傷でしのいだら考えてあげる」
来る。その直感
は正しかった。

ニルファイの手足を蜃気楼のようなものが覆う。

背からは白い煙、否、霧がきり大瀑布だいはくふのように吹き出す。

瞬く間に少女の姿を隠し、周囲一帯を覆うような濃度になった。乾燥した砂漠の湿度が上昇する。すぐに、白哉の死覇装は湿り気を帯びるほどだ。

移動は悪手。視界が潰されたまま行動しても、相手の思うツボである。

上に霊圧があつた。そこへ刃を噴き出させる。手応えなし。左、右、ふたたび上と、ニルファイは白哉の防御圏の外を縦横無尽に動き回っていた。いつそのこと全方位攻撃に移ろうかと思つたが、それは守りが薄くなり、隙が生じる。

白哉はめいもく瞑目する。

花卉をドーム状に集めた。

両の手を下げ、変化を待つかのように直立する。

ニルファイが瞬間しゆんこうを発動させてから、その詳細な能力がいまだにわからない。

もう一人の瞬間しゆんこうの使い手、四楓院しほういん夜一よるいち。彼女は、背中と肩にチャージした高濃度圧縮された鬼道を手や足の攻撃の延長線上に打ち出す、あるいは周囲に発散させるものだ。

ならば、ニルファイは？

「む……」

時間として、瞑目していたのはほんのわずかだ。だが、神速で進んでいく状況の中で、それはとてつもなく長く感じられた。

白夜が目を開ける。

「この守りは、突破される。」

そしてすぐさま攻勢に移ろうとした。

しかしそれは、一瞬ばかり遅かった。

実態のつかめないナニカが固く閉ざされた刃の壁をすり抜けてきた。
た。

1
ウーッ

下から突き上げるようなボディブローが白哉の腹を穿つ。背骨が内蔵が背後へ弾けとんだ錯覚がした。

「ぐ……ッー」

再び、壁を突破するいくつもの気配。

2
ドス

無数の打撃が、先のボディブローで軽く浮いた白哉の肉体に襲いかかる。衝撃が骨の芯に届くほどのものだ。かろうじて、頭部を左腕で庇う。

間を置かず上から特大の殺気が降りかかった。

100
シエントス

トドメの一撃が白哉の首の骨を狙っていた。

肉体のダメージを無視して白哉が瞬歩を使い、その攻撃から逃れる。

直後、霧が吹き飛ばされ、視界がわずかにクリアとなった。

そして見た。不可視の打撃がさっきまで白哉の立っていた場所にクレーターを作っている。砂は波打ち、空気が波紋を描く。

「あつ、避けられた」

拍子抜けしたつぶやきが鼓膜を震わせた。

「ガンテンバインさんの高速パンチだったんだけどなあ」

声が追ってくる。

「これはどうかな」

最悪な視界の中で少女が突きを入れる。

槍のような一撃は物理法則を無視したかのように、離れている白哉を捉えた。

左足のどこかの骨と肉がシェイク。

この霧の範囲内から抜け出そうと白哉は連続して瞬歩をしたが、ニルフィが追いつくためか、霧は際限なく死神を追う。さつきまで白哉がニルフィにおこなっていたことの仕返しである。

「……霧か」

ようやく、ニルフィの瞬閃しゆんこうの効果がわかった。

霧が媒介となっていているのだ。伝えるのは拳打や足技の振動。それが霧を伝って白哉へと届かせていた。

骨身へ染みるような感覚や砂漠に波を生んだことから、ほぼ間違いない。

物理的でありながら壁をもつてしても防げない攻撃だった。かなり相性が悪い。いや、だからこそか。

伯爵蹴脚術バロン・フットキック

上段・中断・下段の三種の蹴りが、どこからともなく襲いかかってきた。

あばらが碎かれる。膝はつかない。その膝も、いつ碎かれるかわかったものではなかった。

「ねえ、考えてくれた？」

霧が意図的に晴らされた。

驚くほど近くにニルフィが立っている。

なかば反射的に仕掛けるが、その極小の刃をことごとく虚弾バラで撃ち落としていく。

「ここで大人しく達磨だるまさんになって、生きながらえようよ」

「断る」

「そうかな、べつに悪い条件じゃないと思うよ。ビヤクヤさんが執着してた、あのルキアさんって死神。もう死んじやってるけどオリヒメさんに頼めばひよっとしたらってことも起こるかも」

「……それでもだ」

「返事に間があつたね。これだけはわかるよ、キミの気持ち。すぐに

消えてなくならないからオリヒメさんならもしかしたらって思っ
ちやう」

むしろ穏やかな表情でニルファイが語った。

「大好きなヒトが死んじやったら悲しいもんね。生き返るなら生き
返ってほしいよ?」

霧によって少女の髪は濡れ、幼さに似合わぬ色っぽさがあった。薄
手のインナーもより体に張り付き、へその陰影や控えめな胸の立体感
が増している。ただそこにいるだけでなにもかも狂わせるようだ。

「キミがホントにルキアさんを愛してるかはわからないけど、このま
まプライドを捨てて私に懇願してくれればすぐにも実現するのさ。
……それで、どうかな。キミは頷いてくれる?」

圧倒的な力を見せつけてからの甘い言葉。

誰であろうと、気の迷いで一瞬でもすがりつきたくなるようなもの
だ。

一方的な押しつけでありながら、それを選択させることでまるで自
分の意志のように感じ、そしてニルファイ自身が願っているかのように
思えてしまう。

「……………」

だが、それでもだ。

長い沈黙の末、白哉は口を開いた。

「貴様の誘いという名の悪辣あくらつな考えに乗るつもりはさらさら無い」

ニルファイの目をはつきりと見て理解できる。これはただの悪質な
問答でしかない。たとえば白哉が頷いても、ルキアが生き返るかもし
れないのは本当だろうが、その後の彼女の身の保証などまったくして
いない。アールローニークを殺した白哉を赦すつもりもないからだ。無
様に手足を折られた白哉の前で、生き返ったルキアを拷問にでもかけ
るだろう。

金色でありながら、それだけ少女の目はドス黒かった。

そしてそんな相手に、死神が屈してはならないことだ。

千本桜を操りながら白哉がニルファイを睨む。

「私の誇りにこれ以上手をかけさせるつもりは無い。貴様はここで、

消す」

その答えを予想していたようで、なんら落胆もなくニルファイが笑った。

「どっちも悪役だっことを忘れないでね。キミがいくら正義を掲げようが、虚しくて押し付けがましい自己満足なだけだから、さ」

笑みが姿ごと消える。霧がたちこめた。

一撃は、つながれて、連撃に。威力も相まって、もはや災害と遜色ない暴力の嵐だ。

そのどれにでも隠し様のない殺意がにじみ出していた。

「……………」

ニルファイは駆ける。地であろうと宙であろうと、神速と化して

花卉に捕らえられる蝶ではない。イタチなどの捕食者としてだ。

視線の先にはもはや殺すことを確定している死神がいた。もう满身創痕で、立っているのが不思議である。

それに苛立ちはない。なにしろ、ずっと耐えるのならずつと甚振り続けられるから。

「……………」

けれどニルファイの心が晴れることはないだろう。白哉を殺してもアール・ニーロが戻ってくるわけではない。

アール・ニーロがニルファイにないを望み、なにを託してくれたのか。それがわからないニルファイではなかった。

だが、それでも。子供じみた言い訳が頭を支配する。このまま白哉を殺さないままでは、気が狂うような感情があった。白哉は奪ったのだ。ニルファイがもつとも失いたくないものを。

「……なんで、居なくなっちゃうの？」

「……なんで、奪っていくの？」

ニルファイはただ、みんなと一緒に生きていきたいだけなのに。それを邪魔するのならば、

「……潰してやる」

あらゆる負の感情を込めたつぶやきが戦闘の騒音のなかに消えた。身を捻り、掌底を放つ。当たり前だがそれは白哉に届くようなりーチはなかった。

しかし霧がそれを伝えてくれる。圧倒的な攻撃力こそないものの、相手を瞬殺しにできるといふ点では、これほどらしいものもない。今でさえ、数多の衝撃によって死神の内臓が破裂しようとしていた。

白哉の声が遠くから届く。それに合わせ、ニルフィも言葉を紡いだ。

「破道の四」

「破道の四」

白雷

白雷

白い線が衝突して相殺した。相殺させた。他でもないニルフィが。絶え間なく槍のように突き出される刃の群れ。それをふわりふわりと回避しながら、この戦いにどこか虚しさを感じていた。

アールニールは生き返らない。

もはや大団円などは叶わないのだ。それもシャウロンたちが死んでからわかっていたことだ。隊長格をここまで簡単にあしらえる力があるというのに、大事なときに大切なモノを守ることができなかった。身が震えて歯の根が噛み合わないような、そんな気持ち悪い感覚がある。

ー鬼道の練習に付き合ってくれてるって約束してたっけ。

ー二人で一緒にお菓子食べたりとか。

ーたまに遊びにつきあってくれたし。

ぼつぼつと思考が離れていく。もはや手にすることができない時間が頭に浮かんで消えていった。

ーねえ、アールニール。

ーどうしたら、キミは喜んでくれるの？

仇討ちなど望んではいなかったであろう仲間のことを想い続けているうちに、ニルフィの探査回路に破面ではない霊圧が引つかかっ

た。

白哉とは違う死神のものだ。グリムジョーの独断である現世侵攻を止めに行った時、わずかばかりの覚えがあるものだった。阿散井恋次^{あばらいれんじ}、だったか。容姿は知らないが霊圧だけはグリーゼに斬られた死神のものだとわかった。

この戦いに乱入するつもりだろうか。

たしかに恋次の上司にあたる白哉が卍解を解放したまま、一方的な攻撃で霊圧を大きく揺らしているのだ。援軍としてやって来るのも不思議ではない。

さほど注意を払う相手ではなかった。

しかし邪魔をされるとなれば話は別だ。このまま白哉を逃がすつもりもない。

ニルフィは霧の範囲を広げる。不埒な輩^{ふちちやから}が領域に踏み入れた瞬間、首を破壊してやるつもりだった。あるいは手足や金的などを潰し、ルキアをここに連れてきて『助けるならどっち?』ゲームのようなことをしてみるか。

澱^{よど}んだ空気が殺気となる。

そしてふいに、千本桜の刃に大きな動きがあった。

「……へえ?」

道ができていた。刃の壁に囲まれた、白い砂がレッドカーペットの代わりに敷かれたような道だ。

もちろん遮蔽物もなく、ニルフィの先には白哉が立っている。

「まあ、間違っていない戦い方だと思うよ。このままだとキミはギリ貧で死んじゃうし、なにより、いま近づいてきている部下さんを殺すことを邪魔できるもんね」

白哉の姿は普段と変わりないように思える。

しかしそれは外面だけで、死覇装の下の肉体はひしゃげており、左腕はかろうじて動かせるかというところだ。

短期決戦。これしか、白哉に取れる策はなかったのだろう。

それを表すかのように、壁は白哉の元へと一点に集まっていく。

「……いまこの場に来ようとしている者は、いくら止めようとも介入

してくるだろう。それを望まないのは、貴様も同じはずだ」

「たしかに、そこだけは気が合うね」

道は開けた。そこを狙うほかはない。

エサがぶら下げられた罫だと声高に言っているのと同じことだが、問題はなかった。

——来る方向がわかっていれば、つてところかな？

このまま霧の中で殺すことをしてもいいがそれでは芸もないだろう。

そもそもこの戦いはどちらに転んでもおかしくはなかった。耐久力が十刃でも最弱のニルフィでは、一撃でも食らえば負けるのだ。

殺すのならば、この手で、惨たらしく確実に。

「じゃあ、いくよ」

あえて、誘いに乗る。

そして死神に完全な敗北の二文字を刻もう。

正面から真つ直ぐに、狩る。

ニルフィは前かがみとなり——消えた。

このままでは敗北となることを白哉は理解していた。

慢心は捨てた。傲慢も捨てた。

それでも届かない。想定以上の強さだった、という言い訳はできてもそれで命を守るわけではない。

最後の、最後の一撃にすべてを賭けた。

終景・白帝剣

千本桜景巖の全ての刃を押し固め、一振りの刀となったものを左腕で掴む。

すると霊圧が牙を剥く鳥獣に変化するようだった。

それを見たニルフィが前かがみになるような姿勢を取ると、消える。否、白哉へと凄まじい速さで間合いを詰めた。やはり速い。やはり目で追えない。

それでもいい。

踏み込む。

白帝剣を振り抜き、下から上へと白い斬線を奔らせた。そこから吹き出した閃光が前方すべてを飲み込み、塵へと帰す。炸裂した光が縦横無尽に破壊を撒き散らした。

たとえどれほどの防壁を張ろうが防ぐことなど敵わない威力。それは一瞬の合間に起きたことだった。

そしてその一瞬のうちに、すでにニルファイが白哉の背後を取っている。

避けられた。まともに戦うのではなく、ニルファイはただ白哉を殺すためだけに動いていた。

霊子の刃に覆われた手刀が裏拳のように振るわれる。

「ーなッ!？」

声をあげたのは、ニルファイのほうだった。

白哉は動かないであろう右腕を強引に背後へと振り抜いている。それ自体にニルファイを止める力はない。しかし、その手に握っていた千本桜の刃が少女の喉元に食らいつこうと飛来させたのだ。

完全に意表をついた、白哉にできる最速の一撃。

ニルファイは自分から飛び込んだようなものだ。いくら速かろうと、そして体術に才能を出してあろうと、不安定な体勢からの響転ソニックドは難しい。

ほぼゼロ距離の攻撃から、とつさに身を引こうとする。

「……ッ、あ」

数枚の刃が少女の喉のどを引きちぎった。金色の瞳が大きく揺らぐ。

壊れた水道管のように、ニルファイの細い首から赤い液体が勢いよく噴出した。

血しぶきが降りかかったのは、白哉と当事者の少女……そして、白帝剣はくていけんを放った方向に立っている、もう一人のニルファイだった。

幻像の血で顔を濡らしながらニルファイは「溜め」をつくる。

白哉が目を見開きながらそれに気づいた。

だがもう遅い。完全な、ニルファイの間合いだ。

左足を踏み込む。

浅く。

鋭く。

重く。

そして淀みよどのない流れの中に。瞬間しゅんこうの力をその一点にまで凝縮させる。

力の限り踏みしめる足から、一時的に増した体重を拳に込める。

余すことなく渾身の威力を込めた衝撃が、白哉の鳩尾みぞおちから全身に浸透した。

変化は、劇的に。

赤い液体の詰まった風船を破裂させたかのように、白哉の全身から血が噴き出した。

塔をも崩す破壊力が人体のなかで暴れまわった結果だった。内臓は破裂し、肉はミンチになる。ニルフィの瞬間しゅんこうによる攻撃で無事に済んだのは表面だけだった。

「色々壊しちゃっただろうけど、ヒトの形のまま死ねてよかったね」
血を一身に浴びながらニルフィが言った。

首から血を溢れさせているニルフィが消えていく。本体のニルフィも一瞬前までそこにいたのだ。しかし、白哉がニルフィの動きを予想していたように、ニルフィもまた死神の動きを察していた。

なにしろ大切なモノを傷つけられたのは白哉も同じだから。

破壊された右腕を使ってなにかをするくらい、ニルフィにも考えつく。

そして決めていた。正面から、狩ると。

「仇討ちって……虚しいや」

やっぱりアーロニーロが生き返るわけでもなく、達成感も皆無だ。

ドロドロとした殺気が嘘のように消えて体を崩れ落としてしまい
そんな脱力感がニルフィを襲った。

そしてそれは、

「ーえ？」

紛れもない隙であった。

下ろしかけた右腕を白哉の右手がつかむ。そんなはずはない。な

により、もう白哉の体は表面だけしか人の形をしていないはずなのに。

白哉の手を振り払うよりも先に、彼の視力が残っているかもわからない目を見上げた。

肉体が死を迎えようとしているのに光は死んでいなかった。自身の霊圧で強引に動いているようなものだ。

「……………」

白哉がなにかを言った。

肺を破裂させられてまともに喋れるハズがない。しかしニルフィには、なぜか『ようやく捉えた』と言ったように思えた。

白哉の左手から白帝剣はくていけんが落ちる。ちやうど二人の間に突き刺さった。

ニルフィの失敗は二つ。

明確な失敗は戦いの最中で気を抜いてしまったこと。

そしてもう一つは、白哉の覚悟を侮ってしまったことだ。

白帝剣はくていけんの端がブレる。それはバラけようとしている前兆。白帝剣はくていけんは『千本桜景厳』のすべての刃が集められて造ったものだ。

それが一気に解放された場合、どうなるか？

「ッ!!」

即座に響転ソニードでこの場を離れようとしたニルフィ。

しかし足元が突如として崩れた。

「……………あ」

幻影の喉元を切り裂いた数枚の刃が砂の中を移動したのに気付かなかった。

体が横に落ちようとする。それに耐えるために一瞬だけ体が硬直した。

その一瞬こそが戦いの中で一番の隙となった。

洪水のように溢れかえった刃の海にニルフィは飲み込まれた。

「……………」

「霧が、消えた？」

阿散井恋次^{あばらいれんじ}は急に晴れた視界に戸惑いを隠せない。

白哉の戦っている霊圧を感じてやって来たが、途中から霧のせいで足止めを受けていたのだ。しかしそれが突然消えた。薄れていくのではなく、まるで幻であったかのように急に消え失せた。

「ッ、隊長！」

怪しげな霧が無くなったのなら立ち止まる理由もない。

「ま、待つでヤンス！ ペツシエたちを探すのはどうするでヤンスか!?」

「今は隊長と合流するほうが先だ。あの人がこれからどうするか聞いてからでも遅くねえよ。……いや、お前って破面^{アランカル}だし、ここで待つてろ」

「こんな怖いところに置いていかないでほしいでヤンス！ それに、その隊長がもしかしたらペツシエかもしれないでヤンス！」

「ねえよそんな可能性ッ」

恋次のあとを付いていくのは、虚^{ホロウ}そのものの姿をしており、水玉模様の服を着ている巨大な二頭身の破面^{アランカル}。名はドンドチャツカ・ビルスタン。一護^{ラス・ノーチエス}たちが虚夜宮に侵入する直前に出会い、そのまま崩し的に行動を共にしている。他にも二人の仲間がいるが、それを探して彼もここにいた。

「オラ、さっさと行くぞ」

「ほ、本当に行くでヤンスか……？ 嫌な予感がピンツピンにするでヤンス！」

「なにいまさらビビッてんだよ。付いてこねえならそこらへんで隠れてろ」

「その隊長は知らないでヤンス。けど、けど。戦ってる相手みたいなヤツは……知ってるでヤンス。アレはきつと……って、置いてかないでほしいでヤンス〜！」

「話長いんだよボケ！」

やたらと騒がしい二人組は砂漠の上を駆けていく。

そんななかで、恋次は違和感を感じた。

——隊長の靈圧が、無えだと？

おおよその場所の目星はついている。しかし靈圧が感じられないとなれば、相手を片付けてすぐに移動してしまったのか。だとすれば困る。ただでさえ同行者がこうなのだ。心もとないにもほどがあるだろう。

「こりや、スゲエな。さすが隊長だ」

戦場となった場所は凄惨たる有様だった。まるで巨大な獣が数十頭も暴れまわったかのような削れ方をしている。恋次ではここまで光景を作り出すことはできない。

「恋次！」

「くだらねえ事言ったら蹴り倒すぞ」

「違うでヤンス！ あれを見るでヤンス」

ドンドチャツカの指差す方向を見やる。さして離れてもいない。近づいてみると、仰向けに倒れている少女がいた。全身に切り裂かれたような傷がある。薄手の布もボロボロになっており、血でかろうじて肌に張り付いているようなものだった。

傷ついてなお可愛らしく整った顔立ちを見せる黒髪の少女。

今こそ眠るように倒れているが、頭の両側に付いた角のような仮面の名残から、警戒指定されている破面ブレンカルだということがわかる。隊長格を一人、副隊長級を二人、いとも簡単に倒すことからもう少し怪物じみていると思っていたが、今はただの傷ついた幼女でしかない。

「……………あ」

細指が少し動いた。生きている。弱々しい呼吸音が二人の耳に届いた。

「こいつがニルフィネス、だよな？」

情報通りの容姿からそう推測する。

そして恋次の頭の隅に思い浮かぶのは、殺せるのならば殺せという指令でもあった。死神を死の淵に追いやるほどだからだ。危険性も考慮してついでという現実的ではない命令でもあったが、弱っている少女ではロクな抵抗もできないだろう。

白哉が仕留めそこねたとは思えない。しかし少女は虫の息であれ、

こうして生きている。

「れ、恋次？」

斬魄刀の柄を握り直したのを横から見たドンドチャツカが困惑気味に名を呼んだ。

「……わかつてる」

だが、止まるつもりはない。この少女が日番谷たちを完封できるほどの実力があるのを知っていた。このまま待っても死にそうだが、仮に見逃したところで万が一にも生きながらえれば、大きな脅威となるだろう。

「ーああ、クソ。」

「ー気が進まねえな。」

かといって、恋次が冷血漢なのかといえれば否だろう。

たとえそういつたことを狙ったかのような容姿だとしても、まんま子供を手にかけるのは気が引けるのだ。たとえ仲間が殺されかけようともそれには変わりない。根はいい死神である恋次ならばなおさらだ。

つくづく嫌な仕事だと思う。

脅威を消すと考えても他にやりようがあれば、と。

斬魄刀を始解の状態にして振り上げた。

これ以上苦しませないようにするのだと自分を納得させて、振り下ろす。

「ーあ？」

肉を断つ音は聞こえなかった。始解の『蛇尾丸』ぎびまるが受け止められていたからだ。

少女に、ではない。さっきまで気配すら感じなかった朱色の髪あたまの女性が、恋次と少女の間に入り、片膝を突いた体勢のまま右手の二本の指きつぎで鋒をつまんでいる。

それがおかしい。たかがそんな軽い仕草で受け止められるような柔な斬撃を放たなかった。

「あ、あ、アワワワワ、ワワワワ……ッ!!」

恋次の背後でドンドチャツカが恐怖に支配された声を出して尻餅

をついた。後ずさろうとしても手が虚しく空を切っている。

その理由はわからない。だが、これから知る事になるのは理解できた。

女が俯きがちのまま口を開く。

「……いま、この娘を殺そうとしたわね？」

身を灰にされるような殺気が恋次を襲った。勘に従って大きく飛び退いたのが唯一の幸運だった。

あと一瞬でも遅れていれば手に持った斬魄刀と同じように、体の上半分を消滅させられて、いや、本物の灰にされていただろうから。

炎が一面を支配した。

それも情報通り。この女、アネットのことは知らされている。以前、自分の腕を斬り飛ばしたグリーゼと同じ従属官だフランシオンと。

思わぬ地雷を踏んでしまったことに、そして重力が倍加したかのような圧力に、ドツと全身から汗が噴き出した。

「ー聞いてねえぞ!？」

「ーホントにコイツが従属官フランシオンってレベルなのかよ!？」

少女を優しく抱き上げたアネットが、その傷だらけな矮軀を見やる。切れ長のルビーのような目を細め、己の白い手で少女の顔についた血を拭う。

「そうね。アローニーロが死んでから嫌な予感がしてたんですよ。この娘なら、自分から危険に突っ込んでいっちゃやし、技術は得ても殺すことなんて最近あんまりしてないから勘も鈍ってるかも、って。それに、これはあなたがやったワケじゃないってのは頭では理解できてるのよ」

一歩、女が右足を踏み出す。出した脚の周辺の白砂が灰となって舞い上がり、羽のようにアネットの周囲をまわる。

「まあ、こういう時は『なんでこんなことを?』とか、『仲間を傷つけないで』とか言うのが主流なんでしょうけどね。ああ、ダメ。そうだった気の利いたこと、いまのアタシじゃ言う余裕ありませんね」とぼつちり? 単なる間の悪いさ? :

そんなものなど、女には関係なかった。行き場のない怒りのまま暴

れるだけの力があつたからだ。

女は口にする。

「とりあえずー殺す」

死刑宣告を。

十人十色

「ーと、まあ、怒りのせいで天井知らずのハイパーインフレ状態になったアタシが、スーパーハイな展開で赤カブを灰にして、幼女をめでたく救出しましたとき。めでたしめでたし……ってなれば良かったんだけど」

先ほどまでの周囲の空気が歪むような怒りはどこへやら、やや道化じみた口上で肩をすくめるアネット。

彼女は自分の主をお姫様抱っこしながら炎を消し去った。

その様子に恋次は肩透かしを食らった気分となる。

しかし、そうではないのだろうと刀の柄を握り直した。

この女の実力は訊いている。そして見た。始解の斬魄刀でさえ問答無用に灰へと帰す能力は、非常に脅威だ。それをもってなお飄々とした口調を崩さないのは、彼女が食わせ者だからだろう。

「いいですよ。この場は見逃してあげるわ。こっちは早くこの娘の治療をしないとイケないし、あなたが手を下したワケじゃないものね」
「……見逃す、だど？」

心外だとばかりアネットが大きく肩をすくめさせる。

「あら、信じられないんですか？ これでもアタシは演技に自信があるだけで、素で嘘を吐くのは苦手なんですよねー」

「ツ、お前らが出てくるのは、俺たちの迎撃のためだと思ってたんだがな。違うのかよ」

「さあ、どうかしら。ここで戦い始めたらニルフィにダメージがいつちやうし、アタシはこの娘にまだ生きててもらいたい。それにー」

言葉を切ったアネットが、抱えている少女の首筋を伝う血をこれもまた赤い舌で舐めとった。

艶なまめかしく、見せつけるように。お前に興味など欠片もなくなっていると言っているようだった。

「アタシが手を下さなくても、ここにいるとあなた、ホントに死ぬわよ？」

「……………」

それが忠告などではないことは恋次にも察せる。

なにしろ、アネットの目は内包する怒りに反してひどく冷ややかだったからだ。ここで恋次を見逃すのも、わざわざ自分が手を下すまでもないと考えているからだろう。

刀身が半ばから消え失せた斬魄刀が重くなった気がした。

「それに、アタシが暴れないことに意味があるの」

ニルフィの霊圧が極端に小さくなってしまった今、生死の判定が難しい。しかしここでアネットがキレてしまわなければ生きていますと知らせることにも繋がる。

たとえ彼女がどれほど怒りを内包しようが、かろうじてそれを行動できる理性の糸は残っていた。

「というか、もう仇討ちしてやる部位が残ってるワケじゃなかったんですよねえ。見るに堪えないってまさにああいう姿を指す言葉というか、侵入者の末路を体現してたというか」

「……………なに、言つてやがる」

「ナニも何も、あなたのところの隊長さんですよ。あつちで血だるまになって転がってるわよ。生きてるとは思えないけど」

「なッ……………!?!」

そんなハズはない。言葉にするよりも先に頭に思い浮かんだ否定であった。

あの隊長が負けるような姿など想像できなかった。少なくとも相討ちという事実があつても何の慰めにもならない。

「あの人がやられるハズがねえ。デタラメ言つてんじゃねえぞ」

「信じる信じないは勝手にやってやがれて感じてですね。で、どうしますか？ その折れた刀でアタシに斬りかかってくるの？ グリ―ゼじゃないけど、戦うのなら無駄なく秒殺してやるわよ」

殺気が形となったかのように、アネットの周囲の砂が弾けてさらに粉となっていく。

考える暇もなかった。他方からの助力が期待できない今、自分の力だけが頼りなのだ。

「ーやるか？」

「ーけど、あの炎をどうする？」

「ーそれよりも先に、俺は勝てるのか……？」

後ろ向きな考えに思い至り、奥歯を砕くように噛み締めて振り払う。腹をくぐるしかないか。そう思ったとき、新しく姿を現した破面アランカルがいた。

「なにをしているんだ、アネット」

「あら、ハリベル。奇遇ね」

「とぼけるな。まさかとは思っていたが、今まさにニルフィのことを忘れて戦やりはじめようとしていただろう。その娘のために怒りを覚えても、なにを優先すべきかはわかるはずだ」

「そりやそうですけども」

「お前は思っているほど平静を保っていない。ーここは私が引き受けさせてもらう」

褐色の肌をした女の破面アランカルだ。教えられなくとも、このハリベルという女が十刃エスパーダであることに疑いを持つことはなかった。

そして、ハリベルは周囲を見回す。

「居るな？ ルドボーン」

即座にアネットとハリベルの前に膝をついて現れたのは、牛の頭蓋骨を被ったかのような男だった。

「誰の指示なのかは聞かない。貴様らがここへやって来た本当の理由がニルフィの回収だろうが、な。だが言っておく。この周辺から葬エクセキアス討部隊を引かせる。ーこれ以上ニルフィを付け狙うネズミのような真似は許さん」

「……御意に」

「わざわざそんなことしなくても、近寄ってきたらアタシがどうにかするつもりだったんだけど」

「その時間も惜しいだろう。早くニルフィを連れて行け」

苦笑気味に頭を振ったアネットが響ソニード転でこの場を去ろうとした。

最後に、ハリベルの言葉が残される。

「ー最善が最良だとは限らないぞ」

「……………」

答えることもなく、アネットが少女と一緒に姿を消す。

ルドボーンもいつの間にか居なくなっており、この場には改めて新
手の破面アランカルが残ることとなった。

「貴様が侵入者の一人か？」

「見りやわかんだろ。そういうテメエは十刃エスパーダだよな。これで従属官
だつてんなら、冗談もいいところだぜ」

「アレは特異なだけだ。私は十刃エスパーダなのは本当のことだがな。おかげ
で、この戦いに邪魔が入ることもない」

ハリベルは背に下げられていた斬魄刀を抜き放つ。剣の形であつ
たが、真ん中が空洞になっている巨大な段平のような形状をしてい
た。

戦いの回避という選択肢は元からないらしい。

舌打ちをした恋次は己の霊圧を高めていき、

「卍解『狒狒王蛇尾丸』」

最大の対抗策で打って出た。

巨大な骨のような蛇のとぐろに囲まれながら、恋次がふとした疑問
を口にした。

「破面アランカルつてのは、こうも仲間の危機に現れるようなもんなのか？ 虚ホロウ
の姿からは想像もできねえんだがよ」

「仲間ならば当然のことだ。……しかし本当の意味で仲間という概念
を作ったのは、他ならぬニルフィだったというだけだ。ただ一人のお
かげで変化が生まれた。これだけでは不満か？」

「いいや？ そこだけはなんか共感できるな」

そうか、とハリベルが静かに目を伏せ、そして再び視線が上げられ
ると斬魄刀を構える。

「ならば、深くは語る必要もない。私は同胞の頼みを守つてやること
ができなかった。だから、私はここにいて。せめて犠牲が無駄ではな
かったのだと証明するために」

怒りとはまた違った、剣の筵むしろうを思わせる威圧感が女から放たれた。

「――討たせてもらう」

相手の事情など恋次が知るよしもない。そんな時間が残っているはずもなかった。

砂漠の中心で、霊圧が撒き散らされる。

—————

「お、おい。お前がいけよ」

「不正解。ノ・エス・エサクトここでお前が口にするのは『俺に任せてあとは見ていろ』、だろうか？ 大丈夫だ、骨は拾って……そもそも残ってればいいな」

「てめえ……!」

「シツ。陛下に聞こえてしまうぞ」

「あとで覚えてろよ」

ジオⅡヴェガとフィンドール。

バラガンの従属官フラシオンである彼らは、ホールの上の玉座に腰を据えた自分たちの主人をちらりと見上げた。

とてもとても不機嫌そうだ。左手の指で肘掛を叩き、霊圧が不穏なオーラとなって放出されている。普段ならばここまで感情を露あらわにするバラガンも珍しい。しかしそれをまじまじと見つめるには、かなりの勇気が必要だった。

「……やっぱ、あのチビのことだよな?」

ジオⅡヴェガの言うとおり、この宮まで届くほど荒ぶっていたニルフィの霊圧が急激に弱まった瞬間から、ああなのだ。

「正解。エサクタ陛下は彼女を一定以上は認めているからな。お気に入りお気に入りのモノを傷つけられて怒りを覚えない者は、そもそも気に入っすらいなものだ」

もう一度、二人は玉座を見上げた。

「お爺ちゃんマジ怒おこ」な状態のバラガンにひと睨みされてすぐに視線を逸らす。

やたらとこの空間はピリピリしている。自由にくつろいではいるが、無断でホールを出るのがためらわれるほどだ。ふたりの他にもバ

ラガンの配下たちは多くいた。

そういえばついさつき葬討部隊エクセキアスがなにやら戻ってきて報告し、さらに機嫌が悪くなっていたのだ。なにやらそばにいるポウやニルゲになだめられていた。

「そういや、陛下とあのチビってかなり前からいたんだよな。それで敵対とかしてたっていう」

「たしかにそうだな。最後の方は自然災害のようなものとして割り切ってはいたが、実力自体はたしかに認めていたんだろう。不適切な言葉になるかもしれないが旧友のようなものだ。陛下にとつてかつての知己は、もはや片手の数ほどもいなくなっている」

ジオⅡヴェガたちはバラガンの元々の配下の中では若輩か中堅といったところである。

昔から仕えたまま今も生きている者はほとんどいない。

いくらかの最上級大虚ヴァストローデを配下にしていたが、当時の『剣八』に倒されていたり、藍染たちが虚夜宮ラス・ノーチエスを乗っ取りに来た時に最後まで抵抗したのが彼らで、結果は、今を見ればわかるというものだ。

ザエルアポロだけが生き残っているが、今ではさほど交流もなかった。

二人も含めて主だった従属官フランゾンたちは繰り上がりで選ばれたに過ぎない。

傲岸不遜な大帝も懐かしみを覚えているということか。

「それに陛下ご自身は自覚していないようだが……」

言葉を切り、フィンドールは仮面に覆われて外からは見えない目を細めたように思えた。

「第9十刃の言葉になにか思うところがあつたのかもしれないな」

アールローの認識同期はジオⅡヴェガも受け取った。たしかに心が動いたのも事実だが、それがバラガンも同じだったとはあまり想像できないでいる。

「なら、俺らはこんなトコにいていいのよかよ」

「……言いたいことはわかる。だが」

ちようどハリベルの霊圧が探查回路ペスキスに反応した。

「今から我々が行ったところで残っているかどうかもわかったものではない。それに我々は現世に侵攻するための兵だ」

「だからって、俺らはじっとしてていいのかって訊いてんだよ」

「そう、だな」

口ではどう言おうともフィンドールも含め、ここにいる多くの者はニルファイに情の沸いたものたちだ。

「ははは……。変化というのは、ここまでのものか」

破面が情などは笑い話もいいところだろう。しかしニルファイが与えてくれたのは変化だ。同じ時間を百年単位で繰り返す退屈を忘れさせてくれた。変化とは、久しく味わったことのないものだった。

バラガンでさえ、ラス・ノーチエス虚夜宮の真の主人であった頃も、その退屈のせいで自分の軍を半分に分けて戦わせようとしたのだ。だからだろう。いつも変化を与えてくれる貴重な存在として手厚く世話を焼いたこともあるのは。

「やれやれ、俺も自分で思っているほど感情を支配できていないらしい」

「そりやそうだろうな。あのチビの見せてくれた箱から箱に移動する瞬間移動マジック見てめっちゃ興奮してたもんな」

「いや、俺はそれ自体にもそれなりに興奮していたが、バニーガール風の衣装を着ていた彼女に興奮していたんだ」

「訊かなけりやよかった」

しかし、と肩を落とすフィンドール。

彼はやや力のない動作で首を振った。

「どうすることが正解なのかわかっていないというのに、ままならないものだ」

ちらりと視線をはずしてみる。

奥の壁際にはシャルロットが凄まじい形相で腕組みをして、全身から血管を浮き上がらせている。あまりの禍々しい姿に周囲には誰も近寄らない。教えてもらわなくともブチギレているのだろう。ニルファイとこの宮で一番仲がいいのは彼だった。

さらに視線を移せば、高速で貧乏揺すりをしているアピラマが目

入った。周囲の仲間が諫めなければ、先走って宮を飛び出しそうだと。我々は軽々しく動くことはできない。第3十刃もそれは覚悟の上だ。それでも、それでもだ。彼女らが動いたことを誰が責められると思う?」

その言葉にジオ||ヴェガは何も言わないまま肯定を返す。

「へっ、陛下! その、どちらに?」

「散歩に決まっておろう」

「お言葉ですがたかだか散歩のために滅亡の斧を持ち出されては困ります! どうか、どうかお願いですからお気をたしかに!」

「ハリベルの小娘だけに獲物を取れるのも癪なのでな。ちいっとばかり、道端の虫を踏み潰しに行くだけじゃ」

「後生です! 後生ですからどうかあ!!」

そろそろ自分たちもバラガンを静めに行かなければならないだろう。

二人は顔を見合わせると、いまやるべきことを行動しはじめた。

—————

オクターバ・バラシオ
第8 宮の地下深く。

さらにその最奥で、ザエルアポロは自分が着用するわけではないサイズの装甲や機器の調整をしており、整頓されていながら装備の多さで雑多に見える研究にいた。

ふいに、作業の手を止める。

いま気づいたとばかりにザエルアポロが振り返ると、入口のそばに膝を突いたルドボーンが控えていた。

「その様子だと、捕縛は失敗した、という所かな?」

「ハッ、我々の力及ばず、そして最低限の出来事として処理するには……」

「口上はそれはもういい」

うるさそうに手を払うザエルアポロ。

「君への言及はあとにするとして、事態の詳細を聞こうか」

そしてルドボーンは語りだす。

最初の侵入者以外にも隊長格の死神が現れ、アールニールと交戦をしたこと。そしてその死神と戦ったことでニルフィが相討ちに持ち込まれて倒れたことなどだ。

どさくさにまぎれて回収するようにも命令していたが、ルドボーンたちの愚鈍さのせいで横槍を入れられたとも考えた。まさかハリベルが出張ってくるとは予想していなかったとはいえ、大きなチャンスを逃したことはない。

「元から期待していなかったとはいえ、やはりこの程度か。」

出来の悪い生徒が、やはり出来の悪い結果しか残せなかったことを確認した教師のように、ザエルアポロがため息を吐く。

「まあ、いい。たかが数十人だけの葬討部隊を動かす許可を出しただけで、上手く事が運ぶとは僕も思っていないよ。それに、無闇に対象と交戦をしたワケではないだろうか?」

「……………」

「ともかく情報はわかった。あとはもう下がっていいよ」

深く一礼したルドボーンが去っていくのを見送ることもせず、ザエルアポロがさつきまで手を付けていたいくつもの装備や機器を一瞥する。

「探査回路の範囲を広げてみればざわめきがひどい。」

これがたった一人の少女が倒れたことでおこっているのだから、なかなか滑稽だろう。

「しかし、そうか。もつとも可能性が小さかったが運というのも侮れないな。ヤミーではないが、幸運と叫んでおきたいくらいだ」

形のいい顎に手を添え、思考をめぐらす。

「十刃落ちの回収すらできなかったが、まあいい。奴らの価値は低い。」

「それにしてもこの混乱はうってつけだ。」

「許可を貰っているとはいえ、他の奴らの邪魔が入っては興冷めだからね。」

前々から準備をしていた物がついに日の目を見ることになるだろ

う。

「ーけれどやっぱり、アイツ等はわざわざ蟲蔵に主人を運んでこないか。」

ニルフィの治療にはロカが当たることになるだろう。しかしザエルアポロの指示で不穏な行動を見せてしまえば、即座に灰にされるか首が飛んでいくので、役に立ちそうにない。

手は打っていた。

それでも、壁はかならず一枚は残ってしまう。

話を通していてもスムーズに進む可能性のほうが低かった。

これでは自分から宮を向かなければいけないことになる。ザエルアポロの純粋な戦闘能力は十刃の中でも高くなかった。宮の中の戦闘こそが本領を発揮できるのである。

「ルミーナ、ベローナ」

手を叩き、共にボールのような体型をした二人の男を呼び寄せる。カエルのように跳ねながらやって来たのは改造従属官であることを表すような異形であった。

「ザエル、アポロ様！ ザエル、アポロ様！」

「お呼びです、カ！」

「これから研究材料の回収に行くぞ。すぐの他の奴らも呼んで準備をしろ。あまり時間を欠けるようなら肉壁にして作り直すこともないと思え」

「えエ!?!」

従属官たちが素つ頓狂な声を上げた。

それは最後の消滅宣言ではなく、前半の部分に。拒否を示すかのように冷や汗を流しながら。

「そ、それは……」

「なんだい？ 僕の言ったことが理解できないくらい、君のことを低脳に造ったつもりはないんだけどね。今さら障害にいる奴で怯えたわけでもあるまいし。……ああ、まさかとは思いますが、彼女に情なんてものを覚えてるんじゃないだろうね？」

冷やかな目で睨まれたルミーナは震えながら萎縮した。それが

何よりも答えだというのをわかっていながら、ザエルアポロはさらに言葉を投げかける。

「さあ、答えてくれ。簡単だろう。イエスカノーのどちらかを口にすればいいんだから」

いまだに狼狽うろたえている二人に苛立ちを覚えながら、答え次第では廃棄も考えるザエルアポロ。

それを感じても、ルミーナとベローナはそんな主人に思わずといった様子で尋ねた。

「ほ、ホントに？ ニルファイ、頭いい。殺す、虐めるしなくても、使える！」

「ダカラ、そんなことしなくても、ダイジョウブ」

なおもたどたどしく身振り手振りで必死に言葉を連ねる二人。

「ザ、ザエル、アポロ、様は。それで、イイノ!? ニルファイ、虐める、イイノ!」

「ニルファイ、ザエルアポロ様のコト、信じてる！ ザエルアポロ様、ニルファイのこと、気に、入ってた！ ベローナたちに、ニルファイ、優しくしてくれた！ 怖がら、なかった！」

「……………」

ニルファイは飴玉騒動のあとも、アネットに隠れてちよくちよくオクターバ・パラシオ
第 8 宮に足を運んでいた。彼女いわく知識を得るためらしい。その宣言に違わず、ニルファイはスポンジのごとくいくつもの知識を短期間で取り込んでいった。

思えば、片手間で教えていただけのはずが、ザエルアポロは直々に指導してやっていたものだ。

薬に関するの研究も手伝わせたことがある。

ニルファイの人徳ゆえか、すぐに異形の従属官フランシオンたちとも打ち解けた。ザエルアポロの指示ならば何でもやるような彼らでも、ニルファイが実験の材料になることを見過ごすのは耐えられなくなるほどだった。

「……………たしかにそうかもしれないね」

考え込むかのように眼鏡を押し上げる。

「よくよく思い返してみれば僕も彼女にはそれなりの思い入れがあ

る。必要が無くなるのを分かっているながら、なぜ僕は手づから知識を与えていたんだらう。精神学は専門外なんだが……難しいものだね」

改めてさつきまで調整していた装備を見回し、ザエルアポロは肩から力を抜いた。

さらに困ったかのように笑いながらルミーナたちを見る。初めて見せたような笑みだった。

それを見てホツとしたかのように息をつく異形の二人。

そして、

「ーーだけど、それだけだ」

ザエルアポロはいつの間にか手に持っていた筒のようなボタンを押す。

その瞬間、ルミーナとベローナ、主人にとって必要のないモノとして認識された二人が無残に破裂した。血を撒き散らすこともできずに風船のようにあつけない処分だった。

「……僕を糾弾してもいいし、非難するのも構わないよ」

靴音を響かせながらザエルアポロが扉へと歩き出す。

その途中に散らばっていたルミーナたちの残骸を、なんの感慨もなく踏んでいく。

「たしかに彼女は科学者や研究者として、僕を尊敬してくれていただろう。彼女が僕に向けてくれていた感情は実に心地よかった。出来るならばむしろ、本当に助手にしておきたいくらいだったよ。それは決して嘘ではない」

けれど考えて欲しい。

次の言葉へと続けるなかで、そうザエルアポロが言った。

右手でまた眼鏡を押し上げるようにして顔を隠し、手が下げられたあとには酷薄な笑みが浮かんでいた。

「僕は完全な命を生み出すために、己の体を割くようなマネをする男だよ。兄を蟲箱にするし部下はためらいなく殺すことができる。そんな僕が彼女を切り捨てる算段を整えないとなぜ信じられたんだー？」

多くの者が変わっていく中で、彼は、少なくともザエルアポロは変化を受け入れなかった一人であった。

それを悲しむことができる人物はこの場にはいない。

「……それで、これを聞いてなお僕に直談判したい奴はいるのかな」

扉の前でザエルアポロが振り返った。見えないだけで控えているフラシオン従属官たちの視線が、ルミーナたちの残骸とザエルアポロを行ったり来たりしている。

十秒も待っても出てくる者はいなかった。

「なにをしている。ーさっさと準備をしろ!!」

叫びが恐怖を生む。

それに突き動かされるようにして慌ただしく這い出してきた異形たちに興味を示すことなく、扉に手を掛けた。

—————

変わる者。変わろうとする者。そして変わらぬ者。

その中心にいる少女が倒れたことで、元ある歯車が段々と狂い始めていった。

それがどのような結果を生むのか、まだ誰も知ることはない。

防衛ではなく殲滅ですよ

黒崎一護はたどり着いたその一室で足を止めていた。

さして特徴のない部屋であったが、唯一、高い天井までに届きそうな階段がそびえ立っている。

そこを等間隔の足音を響かせながら降りてくる青年がいた。

「ウルキオラ……！」

「俺の名を憶えているのか。お前に名乗った憶えはないんだがな」

口ではそう言うものの、さして疑問を持っていているように思えない。以前と変わらないように無機質な印象を受ける破面だ。

「まあ良い。朽木ルキアは死んだ」

「……なん……だと……!?!」

彼からもたらされた情報は驚くのに十分だった。

「正確には第9十刃に討ち取られた。全身を切り刻まれ、槍で体を貫かれた。生きてはいまい」

「適当なこと言うなよ。ルキアの霊圧が小さくなってから時間は経っていないぞ。戦つてもいねえてめえがそんな事……」

「認識同期。第9十刃の能力の一つであり、奴の役目の一つでもあった能力だ。奴は自分の戦った敵のあらゆる情報を瞬時に、すべての同胞に伝えることができる。……なにも吉報ばかりではなかったが」

最後の言葉だけ、今までの淡白なものとは色合いが違っていたが、それに一護が気づくことはなかった。

感情が昂ぶる。すぐさま否定の言葉を吐きたい。しかし、それすらも強引に理性で押さえつけて、一護は部屋の脇にある扉へと歩き出す。

「どこへ行く」

「ルキアを助けに行く」

「死んだと言ったはずだ」

「信じねえ」

言い切った一護を、ウルキオラが切り捨てた。

「狷介けんがいだな。朽木ルキアだけではない。お前の他の仲間もロクに勝つこともできないまま次第に死んでいくだろう。十刃エスパーダも腰を上げ、他の破面アラソカルたちも動き出した。……そして、援軍としてやって来た朽木白哉も倒れた」

「なツ……あいつが!?」

「リーセグリンガーと戦闘した霊圧は感じただろう」

たしかに、一護は白哉とニルフィが交戦をした際の霊圧を感じ取っている。それからパツタリと両者の霊圧が消えてから嫌な予感というものがしていた。

白哉は強い。かつて尸魂界ソウル・ソサエティで戦い、ほぼ相討ちに近い形で辛くも一護が勝利できた相手だ。勝敗には運の要素も関わっていただろうし、そんな強者がもう倒されているのが信じられない。

ならばなおさら早く行かなければならなかった。

ふたたび歩き出そうとした一護の背に声が投げかけられる。

「俺を殺しに行かなくてもいいのか?」

「……てめえと戦う理由は無なえ。てめえは敵だが……、てめえ自身はまだ誰も俺の仲間を傷付けてねえからだ!」

「……そうか。虚圏ウエコムンドに井上織姫を連行したのが、俺だと言ってもか」
気づけば、一護は斬魄刀を抜いてウルキオラに斬りかかっていた。それをウルキオラが右腕で受け止めてつばぜり合いとなる。

霧のように見えなくなっていた答えがわかった。

「やっぱり井上は、自分の意志で虚圏ウエコムンドに行つたんじゃないんだな
……!」

ギシギシと歪な音の中でウルキオラが言った。

「意外だな。助けに来た仲間といえど、少しは疑心があったらしい」

「わかつてんのか!? てめえのせいだ! 井上は裏切り者呼ばわりされてんだぞ!」

「だろうな。そうなっていないければ、こちらの計算ミスということになる」

「てめえ……!」

「俺と戦う、理由はできたか?」

ひととき強い衝撃と共に二人が距離を取る。

今まで部屋の隅で丸くなっていた少女、ネルに一護が離れていると忠告した。

「い、一護」

「どうやらこいつは、俺をこのまま通す気はなさそうだ」

その声に反応したのはウルキオラだ。無駄話を嫌いそうな性格だと思っただけにそれは意外だった。そして開かれた口から出た言葉も、予想していた毒舌とは違うものだった。

「こちらも二人倒されている。だから、俺はここまでやって来た。俺は通す気がないんじゃない。――危険因子の一つであるお前を排除するだけだ」

ウルキオラが霊圧を纏う。命令だからではなく、仲間が倒れたから動いた。ウルキオラ自身はそれを自覚しないままだった。

だからといって一護も引くわけにはいかない。

ドルドーニとの戦いのように、全力で倒す。

卍解と一緒に虚の仮面ホロウを引き出して跳躍した。黒い霊圧を引き連れながら斬魄刀をウルキオラに振り下ろす。

黒い爆発からこの戦いが始まった。

――

「持ち運びできる器具だけでは、彼女の治療の処置はこれで精一杯です」

申し訳なさそうに一礼したのは、顔の右半分が髑髏状の仮面で覆われた黒髪の若い女だった。セーターと薄手のワンピースが合わさったような服は雑用として働く破面フランカルの身分を表しており、このロカ・パラムミアも治療係として割り当てられたものであった。

天蓋付きのベッド脇に腰を下ろしていたアネットはそれを手で制す。

「べつにいいわよ。あなたがいないとこの娘は死ぬしかなかったから」

アネットは視線を死んだように眠っているニルファイへと移した。

この大きな寝台と比べればひどく小さな存在だった。身が削られてそれも顕著になる。触れることさえ躊躇われる傷は全身にも及んで包帯が隠していた。ほんのかすかな胸の上下がなければ、死んでしまっていると思うのも仕方ない。

そして何よりも少女を小さく見せている要因があった。

囁くようにアネットが言った。

「また、伸びればいいわね」

黒髪が今では肩よりも少し下からバツサリと無くなっている。幼い見かけにコンプレックスを抱いているニルファイだが、からす鴉の濡れ羽色の長くなびいていた髪だけはよく自慢していた。それが、今ではセミロングがいいところだ。

「……他の持ってこれる器具だけでは峠も越せないということか？」
「本当ならば治療室まで運んで回復まで持っていくことが最善です。応急手当てだけでは、時間の猶予を増やすだけに留まるかと思えます」
「……それができれば苦労はない。だが巨大な器具まで持ってくるにしても限界がある」

今まで黙ったまま治療を見ていたグリーゼが首を振る。

ニルファイのダメージは思ったよりも大きすぎる。ソニック響転の移動にも耐えれず、アネットは近場でもっとも安心できる自分たちの宮に帰ってきた。そこまでの短距離移動だけでもニルファイは傷を広げていたために、比較的近いとはいえ、治療室まで運ぶにしても寿命を縮める。治療道具を持って駆けつけたロカに二人が気づき、ほぼ拉致の手際で時間を短縮させたのは余談だろう。

「このまま時間が過ぎてしまえば、ニルファイネス様の命は刻一刻と減っていくはずですよ」

出来るかぎり事務的にロカが告げた。

「ですが」

言葉を切り、ロカは眠っているニルファイに目を向ける。

それでもニルファイの交流は深い。

ニルファイがある日を境に命のやり取りと変わらない鍛錬を繰り返

したことで、ほぼ毎日負傷、あるいはそれに近い怪我をして治療室にやって来た。それに担当を任されたのはロカだ。人懐っこいニルフィの性格もあり自然と会話も増え、少女がザエルアポロの研究室にまで勉強しに来た時も世話をさせてもらった。

ロカはザエルアポロに創られた破面だ。アランカルその主人はロカを誰かと接触させることをよく思っていないが、なぜかニルフィとのふれあいだけは禁じなかった。

「ー井上織姫様の力ならば、あの方をこの場へ連れて来れたのならば、それがもつともニルフィネス様の負担が小さくなるでしょう」

従者たちは各々の反応を見せる。

「……たしかに、無から左腕を作り出せるのなら大それた器具もなしに可能だろうな」

力の一端を目にしたことがあるグリーゼが頷いた。

「でも天挺空羅てんていくうらとかいう鬼道も無いし、アーロニーロの使った認識同期みたいな便利な通信手段ありませんからね。他の助力があるかもしれないけど、待つてるだけならアタシたちで行動を起こさないといけないわよ」

たしかにアネットの言っていることももつともだ。

それこそが、ロカがザエルアポロから出された指示だった。ロカだけではニルフィをこの場から動かすこともできない。不穏な動きを見せてしまえば、一秒後には顔見知りとはいえ首が切断されるか灰にされてしまう。

そしてそんな二人をザエルアポロはそろって相手にするつもりはない。

アネットかグリーゼのどちらかが宮を離れている間にザエルアポロは動き、他からの横槍が入れられないうちに“回収”を済ませる腹積もりだった。

これは自分によくしてくれた彼らに対する裏切りだろう。

ーそれでも、私は『道具』ですから。

ならば主人の命令には絶対でなければならぬ。

「……………」

以前ニルフィに『道具』であることを疑問に持たれた。

『なんで自分のことを道具だつて言うの?』

『それは……、私が道具として造られたからです』

『道具? だからなんで? ロカさんはロカさんでしょ。道具は自分で考えて動いたりしないし、いまのキミみたいに困惑なんて感情はないと思うよ』

『私には……『目的』や『目標』といったものはありませんから』

自意識が薄いことを理由にしてロカはその問いから逃げかけた。

うつむくロカをしばらくじつと見つめながらリングを食べていたニルフィが、おもむろにフードに入れてあったもうひとつのリングを取り出す。

『コレがナニか知ってる?』

『現世の果物……です』

『味は?』

『知識にあります』

『それがどういうものか知ってるの?』

『……いえ、食べるということをしたことがないので』

『じゃあ食べてみなよおいしいから。そもそもキミってば、おいしいって言葉は知っててもそれを体験したことなんてないんですよ』

目をキラキラさせながらロカがリングを食べるのを待っているニルフィ。

それに根負けしてロカはリングの端にかじりつく。

『どう?』

『……よく、わかりません』

『おいしくなかった?』

『初めて、なので。これが甘さというもので、それでこれが、おいしいということなのでしょうか』

知識にはあっても味わうという行為は新鮮だった。そして赤い果実を食べることは不思議と抵抗もない。

もう一度確かめるようにリングをかじったロカにニルフィが笑いかけた。

『キミは知らないだけなんだよ。与えられた自分の世界しか知らないから、自分の目標とかになることが見えてないから道具だっと思ってしまっんだ。……いまはまだ分からなくてもいいよ。でも私が教えてあげる。ロカさんには助けてもらってばかりだからさ、今度は私がキミをー助けたいんだ』

打算も悪意もない笑顔。それにロカは惹かれた。そしてこれが情というもののだとロカは理解できた。

それこそがザエルアポロが狙っていたことでもあるのだろう、と。選択肢はたったひとつだ。このままではニルファイが危ない。ならば織姫を頼るほかなく、そしてその時間も足りない今となつてはフレーション従属官の枠を飛び出た二人に彼女を連れてきてもらわなくてはならなかつた。命令以上にロカの心がそうさせていた。

「お二人のどちらかに、井上織姫様をお連れしていただきたいのです」「まあどっちにしろそうなるわよね、確実性を増やすためには。それで……あなたが頭を下げる理由って、どんなのですか？」

「仮にそうしたところではばらくすればザエルアポロがこの宮にやつて来ます。それに対抗するための戦力が二分となり、そうするようにも命令されていました。私がやって来たのもそのためです」

顔を上げなくてもこれだけはわかる。

殺気がロカのうなじあたりを舐めていた。

「そりゃあ、あなたがザエルアポロのトコの破アランカル面だつてわかつたし、さっきまでの治療の時も幼女に変なことしないか見張ってましたけど。だからってわざわざ言うことはないんじゃないかしら。殺さないかと思つた？ アタシとか、グリーゼとか、それにあの変態眼鏡に」

ろくに戦闘をしたことがないロカではこの場で抵抗もできずに殺されるだろう。いくら特殊な『能力』があつてもこの二人とまともにぶつかつて勝てるなどとは考えられない。

震える口元を引き締め、ロカが言った。

「身勝手な物言いだと自覚しています。ですが……、ですが、ニルファイネス様が完治されることが、いまの私の願いです」

初めて本心を言葉にした気がする。

しばらくして、声がかかった。

「顔、上げなさい」

わずかに逡巡した口力だが、すぐにアネットの催促に従った。

「言いたいことは理解できたけど、それが本心かどうかなんてアタシたちには判断できないわ。酷な話だけどね。そうやってホイホイ調子のイイ事言われて信じるヤツだったら、そもそもアタシは十刃^{エスパーダ}を降りてないわけだし」

でも、とアネットは続ける。

「ニルフィだったら、あなたのことを信じちゃうんでしようね」

皮肉な笑みがアネットの内心を表していた。グリーンゼも異論はないのか、特になにも言わなかった。

ニルフィの頬をそつと撫でるアネットの表情はひどく冷めている。「アタシたちにもまだやる必要がありますし、こういう些細な邪魔はただ面倒なだけ。時間もあんまり無いわね。そうすると口力が下手に宮に残つてたり、変にこつちの情報を流されると困るから……」

「織姫様の場所まで同行する、ということですか」

「そうなるわね。じゃあ、この宮に残る方だけどー」

三人はこれからの簡潔な予定をまとめ、少女の眠る部屋から姿を消した。

—————

一護の斬撃を右腕で受け止めたウルキオラ。彼は予想以上の衝撃に後方へ飛ばされ、いくつもの柱に叩きつけられると一護には見えた……が。

「なッ!？」

ソニーダ
響転

みずからの超回復にものを言わせ、不自然な体勢からの高速移動を可能にした。転移場所はすぐ頭上。突きつけられたウルキオラの指先に霊圧が収束した。そして放たれる。

虚閃^{セロ}

それに月牙天衝^{げつがてんしょう}を叩き込んで相殺に持ち込んだ。

一護の立つ場所を中心としてドーナツ状に床が削れ、立ち上がった煙幕が視界を隠す。

ほとんど本能によつて右からの手刀を受け止めた。煙の向こうからガラス玉のような目が現れ、再度つばぜり合いとなった。

「……もう少し、マシな攻撃が来ると予想していたが」

「抜かせッ！」

手刀を振りほどき、斬魄刀に黒い霊圧をまとわせた。光を一切反射しない、ただただ黒の塊を集める。それによつて立っているだけでも床が剥がれていく。

——仮面のまま出来る、最後の一発つてトコか。

頭の隅にそんな考えが浮かんだのをねじ伏せる。いまは目の前の敵だ。ドルドーニに避けられたのならば、あの戦いよりもさらなる集中力が必要になった。いや、この場合は威力か。ウルキオラは避けるまでもないというように前方にたたずんでいた。

月牙天衝^{げつがてんしょう}

広間の一角を黒に染め上げる霊圧を放出した。

それをウルキオラは右腕で受け止める。その背後を月牙天衝^{げつがてんしょう}の衝撃波が通過して破壊を撒き散らしていく。だがウルキオラは受け止めており、威圧的な音を上げる黒の塊を押しとどめてなお、表情を変えない。

その拮抗にも変化が訪れた。

ついにウルキオラが今まで使わなかった左腕を持ち上げて斬撃を掴むようにして止める。

一護はそれだけで止まるような霊圧を込めたつもりはない。

だが、

「無駄だ」

ふいにウルキオラが両腕に霊圧を込めた。

虚弾^{バラ}

軽く腕を出す程度でかなりの威力のあるウルキオラの虚弾^{バラ}。それ

がゼロ距離でマシンガンのように連射され、黒の塊を凄まじい勢いで削り取っていく。

ついには腕自体にもさらに力を込め、文字通り斬撃を圧縮して破壊した。

「……………ツ!？」

その光景を、剥がれていく虚ホロウの仮面の奥から驚愕の目で一護が見ていた。

「……………まさか両手を使うことになるとは思ってもいなかった。それだけ、お前はあの時から成長を遂げていたということか。少し驚いた」袖が消えたことでウルキオラの両の前腕が見える。腕は無傷でもなかったが、負傷しているわけでもなく、埃ほこりでも払う動作で両の手を鳴らすと元通りとなっていた。

「それで、今のが全力か？」

答えることができない一護を見て、最初よりも興味をなくした声でウルキオラは納得した。

「どうやらそうらしいな。修練を重ねてきたはずだが、どうやら俺はお前を買いかぶっていたらしい。お前の進化は俺の目論見には届かなかった。——ここまでだ」

声は背後から聞こえた。同時に、そしてそれ以前に、一護の視界からウルキオラは消えている。

攻撃は技とも言えないような腕のひと振り。

たったそれだけ吹き飛ばされた一護は壁を貫通していき外へと吐き出された。

ほんの一瞬だけなにかに気づいたように明後日あさっての方向を見た

—————

ハリベルは斬魄刀を振るって血糊ちのりを払う。

その背後では倒れ伏した死神が斬魄刀を握り締め、さつきまで戦いの渦中にいたことを表すように荒れた砂漠に血を染みさせていく。

明確な勝敗のわかれた戦いの結末は存外に呆気ないもので、

「死神すらも死からは逃れられないということが」

斬魄刀を背に下げた鞆に戻し、戦いの熱を発散させるように呟いた。

これで五人の侵入者のうち二人……、そしてニルフィと戦ったらしい者も含めて三人、討ち取ったということだ。今さら話し合いなど叶わない。最初に手を出したのが虚圏側とはいえ、やはり解決には戦闘、それも勝利という結末で終わらさなくてはいけないようだ。

「私からニルフィにしてやれることは無いからな。」

十刃^{エスパーダ}上位とはいえ自分は所詮剣しか能がない。関係といっても親しいが仲間という枠組みまでだ。ニルフィがこれから進んでいく道を決める資格など、持つてゐるはずもなかった。

そのことが齒がゆい。

止めることは簡単でも運命が見逃してくれるはずもない。

「……あ……！」

声が聞こえた方向を見やる。

「ハリベルさまあー！ 置いてかないでくだ……んだおらア！ 押すんじやねえよミラ・ローズ！」

「それだったら真っ直ぐ走りなアパッチ！ こっちはアンタの巻き上げた砂が服に掛かってんだよ！」

「およしなさいな二人共。言動も服も見苦しいのはいつものことですよ」

「表出ろやスンスンおらア!!」

「これ以上ないほど表でしてよ」

騒がしい従属官^{フレーション}三人がすぐそこまでやって来ている。悩めば悩むほど凝り固まっていく思考をほぐすためにも、肉親ともいえる仲間がいたことで気がほぐれた。

意図していたわけではないだろう。

それはただ相手の幸運だった。

「……ッ！」

ハリベルが目を見開いて死神の死体へと振り向く。死神に変化は

ない。しかし探査回路ペスキスに引つかかった霊圧の持ち主が姿を現したのは――砂の中から。

「ぶはああああ！ 恋次いいいいいい!!」

飛び出してきたのは、巨大な顔面を持つナニカだった。姿はまさしく虚ホロウそのもの。戦いが始まってから敵意無しとして見逃していたはずの相手だ。

そしてその霊圧が、ハリベルの記憶の一端を刺激した。――そこから連想した緑髪の女のことも。

一瞬にも満たないわずかな隙。

その中でソレは顔面だけ砂から突き出し、あろうことが大口を開けて死神を飲み込む。

元から戦うつもりはないらしいソレはハリベルを見ることもせず
に砂の中へと潜っていく。

オーラ・アスール
波蒼砲

斬魄刀の空洞に霊圧を溜め、砂の中へと撃ち放つ。

砂漠を大きく穿った霊圧の塊だがそれによって威力を殺されたのと、悲鳴を上げる巨大な面の怪物が予想以上の速さで深く潜ったことで取り逃がしてしまった。

――いや、問題はない。

――死神は確実に仕留めている。

――回収されたからといって、復活させることもできないはずだ。それでもハリベルは自分が開けた巨大な穴を見下ろした。

――あの霊圧は、たしかに「彼女」が引き連れていたはずの……。

刻み込まれた『3』の数字を意識しつつ、飛ぶようにしてやって来た従属官フランオンに向き直る。

「ハ、ハリベル様!? さっきのあのデカブツは……」

「見逃して問題ない。死神のほうは仕留めている。私の予想が当たっているなら、アレにはどうすることもできないだろう」

冷静なハリベルの様子を見て三人娘たちは落ち着きを取り戻したようだ。

ミラ・ローズがもうひとつの懸念を口にする。

「それで……、あのチビはどうしました？」

「……………」

押し黙ったハリベルを見て、差はあれど従属官たちは不安そうな顔つきとなった。

「……いつのまにか受け入れているみたいだな。」

幼女の挑発に本気で乗ってアオンを解き放った頃の三人を思い出しながら、思考を割いていく。

ニルファイはノイトラの鋼皮イェロを模倣しているワケではなかった。十刃エスパーダの中でもっとも打たれ弱い彼女があのだの密度の攻撃に負傷だけで済んだとは思えない。そしてハリベルが見たところ、あの時点でもかなり危なかった。

「十分な治療が必要だと思う以外は、な。もうしばらくすれば、私たちが手を出すこともできなくなる。信じるしかないさ」

言葉を切り、ハリベルは鋭い目つきで第7宮セフティマ・パラシオがあるであろう場所を見た。

その付近で戦いの予兆を感じ取ったが、それははたして、間違いではなかった。

—————

第7宮セフティマ・パラシオの南側には巨大な塔が森のように乱立している区域がある。

各宮の近くにもある予備の物品がたくわえられた場所で、家具などを「うっかり」壊しても、新しく運び込む距離を短縮させるためにつくられていた。

しかしこの時、そんな場所の中央の砂が大きくへこんでいく。ボコリ、と。へこんだ中心から筒状の物体が現れていき、側面にあった扉が開かれると、わらわらと鎧のように装甲を来た異型の破面アランカルたちが転がりてた。

「ふん、乗り心地の悪さはまだ改良の余地があるね」

最後に出てきたザエルアポロがそうばやくと眼鏡を押し上げる。

第 8 宮からここまで通らせた道を、鉄道よろしく筒状の物体に乗ってやってきたのだ。砂漠を歩いて進行するのがスマートではないと考えたりもしたが、そもそも、この目立つ従属官たち^{フラシオン}を引き連れて他の十刃^{エスパーダ}に絡まれないためだった。

「――あまり時間は掛けてられないか。」

ロカからの通信ではすぐ先ほどグリーゼと一緒に織姫の場所に向かったらしい。

「――これはまあ、予想通りだろうね。」

アネットが重体のニルフィを放って宮を離れるとは考えにくかった。そのための対策はしてある。

従属官たち^{フラシオン}の着込んだ装甲はアネットの獄炎を防ぐ効果があった。バラガンの『老い』の呪いにも劣らない凶悪さを誇る炎を彼らが灰にされながら止めている間に、ザエルアポロが己の能力でアネットを仕留める腹積もりだ。

防ぐとはいえ、装甲は数秒間灰にされないことしか実現できなかった。

こうして数多くの連れてきた従属官たち^{フラシオン}はいわば捨て駒。そうでもないかと、あの女との戦いで勝機を見出すことなどできない。

「――こいつらがいくら死んだところで、あれほどの被検体が手に入るのなら安いものだ。」

「――だからこそ、アネット共々^{いじく}弄り甲斐がある。」

自分を毛嫌いする澄ました女の顔が泣き叫ぶように歪むのを想像して気分がよくなりながら、ザエルアポロは最初の一步を踏み出した。

「……悪いがここは通行止めだ。説得は最初から無駄だと判断するが、ここから退け^{しりぞ}と最終通告をしておく」

「ッ!?!」

オクターバ・エスパーダ

第 8 十刃主従が声のした方向を振り返る。

彼らが出ていきた場所のすぐ背後に、手頃な石材に腰掛けてなにかの雑誌を読んでいるグリーゼがいた。大剣はそばに突き立てて、グリーゼ自身は最初からそこにいたかのように自然体であった。

「どうして君がここにいるんだい」

「……それは俺が残っているための疑問か？ それとも、お前たちがモグラのように出てきた場所にピンポイントでいることにか？」

「ロカの通信では……………」

ロカが虚言をザエルアポロへ伝えたことにすぐに思い当たる。

おそらく織姫のところに行ったのはアネットで、自分たちが出てくる場所を教えたのも含め、なにもかも洗いざらいに吐いたのだろう。いくら痛めつけられたところで本当に忠誠心があったのならロカは話すこともしなかっただろう。

それはあの道具でしかないはずの彼女が、自分の意志で謀反をしたということだ。

「……………」

純粹な疑問。

いまのザエルアポロの顔は、安物の消しゴムを使用したとき、余計に紙が汚れるのを見た子供のようだ。

そして、原因が「道具」にあると解った瞬間、その感情は驚嘆から苛立ちへと変化する。

――僕は、わずかでも歯向かうなと命令したはずだ。

――事前に、解体する、と宣言してやったはずだ。

しかし、この心の荒れ方は。

「予想しなかったワケじゃない。むしろ、ニルフィの影響を考慮した上で交流させていたが……、実際に体験するまで、これほど苛立つものとは思わなかったよ。――道具が、僕に逆らうなんて!!」

ザエルアポロは苛立ちと恍惚を混ぜ合わせた笑みを浮かべ、鬼気に満ちた吐息をゆっくりと吐き漏らす。

危険な空気を察したのか、グリーゼは閉じた雑誌をかたわらに置き、おもむろに立ち上がった。

そして、

「なあんてね」

一瞬後には、普段通りの冷静な科学者の顔つきへと戻っていた。

「君が残っていたことだけは予想外だったけど、ロカが君らを取るだ

ろうことも、残った最後の壁がこの場へやってくることも、全部予定通りなのさッ」

ザエルアポロが指を鳴らす。

するとここら一帯の塔から、事前に埋め込まれていたザエルアポロの造っていた機械から、特殊な霊圧の波が生まれる。その霊圧は満遍なく空気に満ちていった。

それにいち早く気づいたグリーゼが周囲を見渡す。

「……なるほど成程。宮の外で俺たちのどちらかを相手にする自信は、これが原因か」

「察しがいいね。ロカには知らせていない情報さ。あいつは知らないだろうね。自分が、君たちをみすみす死地に送り込んだことなんて」

ロカが最初に意図せぬニルファイとの邂逅をした時から、少なからず少女に影響を受けていた。それはザエルアポロにとつて良いとは思えぬ方向にロカを変えるだろうという予想があった。

ならばまだニルファイへの関心が弱いうちに芽を摘むより、助けたいと思うほど仲を深めておいて潰すほうが面白いと、ザエルアポロはその時考えている。自分のせいで『7』の主従たちが壊れていく様を見せていけば、ロカに生まれた感情も壊して本当の「道具」にできるだろうと。

ザエルアポロは饒舌になっていく。

「元からどちらが残ってようと、ここでは君たちは思うように霊圧を使えない。アネットの炎はもとより、ウオラーレ駆霊剣も、インモルタル甲霊剣も、何より君が僕の数字を受け継ぐに足りえた『能力』もね。手間が掛かったよ」

「……『能力』というほどでもないだろう。死神だろうがアランカル破面だろうが、少なからず持っているチカラだ」

「君の場合は異常に発達しすぎてもはや別次元なんだ。それを自覚したらどうだい？」

レスレクシオン

帰刃状態だったとはいえ、グリーゼはニルファイのセロ虚閃を真正面から受けてほぼ無傷だった。それ自体が異常なのだ。ニルファイがバラガンのフランオン従属官たちとの鍛錬でセロ虚閃を使わなかったのはそれ一撃で戦闘不能どころか殺してしまうため、ザエルアポロでさえまともに受

けてはただで済まない。

「……その労力をべつに向けたらどうだ」

「僕が動くのは研究心を満たすか、保身のためだけさ。しかし幸運だ。君たち主従は三人とも研究材料としての価値は、侵入者なんかよりもずっと価値がある。面倒なほうが残ったとはいえ、ね」

アネットとグリーゼの戦闘スタイルは対極に位置する。

アネットは能力を主軸にしたもので、グリーゼは能力をサブとした肉弾戦を得意とする。サブを使えなくしたところで、まだグリーゼには主軸の肉弾戦ができた。しかしこれは問題ない。グリーゼが『能力』は使えない現在、クローンを作り出す能力や人形テアトロ・デ・ティレ芝居があれば、こういった蛮人じみた輩やからは簡単に倒せると考えている。

しかし、グリーゼは次を促すだけだった。

「……それで？」

「なに？」

「……口上はもういいのかという確認だ。お前も他の十刃エスパーダが来ないうちに決着をつけたいんだろう。ならばこうしている時間さえ、無駄だ」

「君なら僕の帰レスレクシオン刃の能力は理解しているはずだよ。それに……、僕は君たちの手伝いをしたんだ。本当なら敵対するつもりもない」

ザエルアポロは自分の胸に手を当てる。そのさまは純粹に、言葉通りの内心を表すようだった。

「君たちがこれからやろうとすることは理解している。いや、当事者ではないから、しているつもりかな。けれど時間はあまり残っていないだろう。どうせ結果は変わりないんだ。もし彼女に情があるだけなら、僕が代わりに終わらせてあげるよ？」

しかし、不利を悟っているはずのグリーゼはその申し出を、大剣の柄を右手で握ることで拒否した。

「……くだらん上に、無駄と判断する言葉だ」

「それは、なぜだい？」

「……結果は変わらなくとも結末は変わる。いや、変えるしかない。俺たちがそう決めた」

鉄板かと思間違える巨大な剣をグリーゼが軽く横薙ぎに振るう。
すると次に手にしていた長大な青龍せいりゆうえんげつとう偃月刀を構えた。

「……コレが使えるのなら、俺自身がお前になにかしら影響を貰ったわけじゃないな。それなら十分だ。邪魔をするというのなら、お前を排除する」

その言葉に、ザエルアポロが失笑する。

「ーハッ。ヤミーと戦ってわざと負けた奴のセリフとは思えないよ」

「……全力で戦って負けたつもりだが？」

「余力を残してヤミーを僕たちと同じサイズにまで縮めたというのにかい。僕は君の全力というものに興味がある。それをこの戦いで見せてくれるのなら、これが終わってからの実験が楽になるよ」

「……全力を出させない環境でよく言う。だがー」
突如とつじょグリーゼが偃月刀を豪快に振るった。

霊子が使えなくとも、研ぎ澄まされたグリーゼの斬撃は翔とぶ。それを知っているザエルアポロは腕を交差させて防御の構えを取った。

だが、

「ぐっ、おおおおおおお!!」

壁が迫ってきた。

フランシオン

従属官共々、見えない壁に激突したかのようにして、ある者は塔の壁に叩きつけられ、ある者は遙か後方へと吹き飛ばされた。

「……状況から判断して、出し惜しみは無駄なことだと判断した」

ぶち当たった壁から身を起こしたザエルアポロが浮かべる表情は、怒りや屈辱を抑え、喜色に染まっている。

ーこれは……、技でもなんでもない。

ーただの、ただの風圧だけでッ。

再度、構えを見せたグリーゼに予想以上の研究品としての価値を見出した。

「……ここまでとはね。面白いよ。ーできるなら、このまま完品に近い状態で死んでくれ」

ザエルアポロが鞘から斬魄刀を引き抜き、恍惚とした表情のまま

まー手にした刀を自分の口腔に差し込んだ。

「すす噉れ『フォルニカラス邪淫妃』」

第7十刃の従属官

ラス・ノーチエス
虚夜宮の廊下の壁には『廊下で響転はやめましょう』という張り紙が貼られてある。

これは昔の虚夜宮のいかれた広さに響転という移動法が重用され、多くの破面が起こした事故が原因だった。ーとにかくぶつかるのだ。砂漠の上ならともかく廊下となると一定の狭さがあり、曲がり角から出てきた相手とごっつんこというのも珍しくない。

建築のために駆り出された雑務係ならまだいいが、十刃と乙女ゲーのようなシチュエーションで出会ってしまえば、もはやダンブカーに撥ねられるよりも死亡率が上がってしまう。

そんなこともあつて一定間隔で藍染直筆の紙があるのだが、

「ー知るかそんなモンツ!!」

ロカをお姫様抱っこしながら廊下を駆けるアネットには関係ないようだ。

「アレよ、アタシは現世でいう救急車のサイレンと同じ存在なの! だったら信号無視しようが関係ねー!」

「ああつ、また轢かれた人が……!」

縮こまっていたロカは、また一人、接触した瞬間に来た道を（吹き飛ばされながら）逆戻りしていく者を見ていた。

アネットは暴走車両だ。彼女の姿を見たならば道の端に避ける者もいたが、曲がり角に運悪くいたものは容赦なく弾き飛ばす。しかし一度も止まらないおかげで速い。速すぎる。ロカはさらにアネットの腕の中で身を縮こまらせていた。

「そつ、それより本当に良かったんですか?」

「ん? なにがですか」

「グリーゼ様のことです。いえ、お力に疑いはありませんけど、ザエルアポロ様の相手となるのは……」

今更ながらの後悔でロカが顔を曇らせた。

アネットはその様子を見て、対照的に気楽に口を開く。

「アタシたちのどつちかが行ったところで変わりなかったと思うわ

よ。それに、素の状態だとアタシよりグリーゼのほうが強い……いやいや、アタシの調子が悪い時だけそうでしょうけど、とにかくどつちもどつちなもの」

それがいまだに信じきれていないロカの顔は難しいままだ。

「ですが、グリーゼ様は」

「直接攻撃タイプの脳筋、というより武芸一辺倒なヒト。そう言いたいんでしょう？」

「そ、それは……」

「いいんですよ気にしなくて、アイツも自覚してることだしね。主人がいないとなにも出来ない泥人形よ。前の主人に『戦いを楽しんでみる』って言われたからそういうポーズだけ取ってるっていう、ともかく、ゴツイ人形だって思っただければいいわ」

「人形、ですか」

その言葉にロカは反応しかけるが、アネットがたいして気にしていない様子で言った。

「きつと今も、淡々と小手先が通用しない理不尽パワーで暴れてるんじゃないですかね？」

—————

塔の乱立している区域では異様な光景が繰り広げられていた。

こちらにも帰刃^{レスレクシオン}『蟻殻将軍』^{オルミガヘネラル}を発動させて全身甲冑の騎士のような姿となったグリーゼを中心とし、ほとんど同じ姿の偽物たちが彼を囲んでいる。それはザエルアポロが対象のクローンを生み出す能力によるものだった。

この能力によって創り出された偽物の実力は、対象と変わりがなくはないはずであるが。

——やっぱり幾分かグレードダウンしてるね……。

首から下が触手に覆われ、ドレスを着た様な姿になり、背中には四本の細長い羽根が生えた姿のザエルアポロは包囲の外からそう判断した。

本物の霊圧が大きすぎた場合は周囲の霊子から供給が足りなくなり、本物よりも性能が劣化する。しかし下手をすればザエルアポロ本人よりも強い存在ができることから、こうなる場合はひどく珍しく、そしてアー面倒なことになる。

「やれ」

ザエルアポロが指を鳴らした。

すると偽騎士たちが大剣を構え、グリーゼに殺到する。

「……………」

グリーゼが青龍せいりゆうえんげつとう偃月刀を持ち上げた。左からの大剣の腹を長い柄で弾く。そして右の騎士の首を刃で狙い、それが同じように弾かれると見るや、即座に偃月刀の軌道を変えて偽騎士の腰を切断した。その勢いのまま左で振り上げられた大剣を足さばきで避け、カウンターで首を飛ばす。

しかし二体を倒したところでもまだまだ偽物はいた。

ため息を吐くような仕草をしたグリーゼが偃月刀を回転させる。

トド・デル・アルマ
虚栄たる武術

そして次の瞬間手にしていたのは二本の長剣であった。

グリーゼがギリツと全身を引き絞り、攻勢へと入った。

腕が振るわれるたびに偽物の腕や足が飛び交う。しかし全体数として見ればその数は少ない。それは偽物がかろうじて致死の攻撃を耐えた証拠であり、ほとんどの偽物は一撃で急所を貫かれていた。

次々と、淡々と、まるで機械のようにグリーゼが偽物を屠ほぶっていく。

けしてグリーゼも無傷ではないが、偽物の攻撃では鎧の奥の肉体まで剣が通っていないかった。

それらの一方的過ぎる戦いをザエルアポロは苛立ちを隠すことなく見ていた。

アークソツ、これだから脳筋というのは力尽くで小手先を潰しているく！

トド・デル・アルマ
『虚栄たる武術』は斬魄刀の形を変化させ、それを十全に扱うことができる能力だ。だがこれ自体は戦いの戦局を左右する力はない。

すべては、異常な基本ポテンシャルを持つグリーゼの実力だ。

「研究対象としては有用だが……。仕留めるにはもう一つあいつの『能力』を使えるようにするか？　だがクローンも同じ力を使ったとしても、今度はいつまでも終わらなくなるどころか一瞬で片をつけられる、か」

これは計算外とも言おうか。

グリーゼは虚夜宮ラス・ノーチエスにおいて全力で戦った記録がない。

予想はできていたが、予想以上に戦っていた。本来ならクローンだけでザエルアポロは勝てたはずだ。

「……どうした。お前が物知り顔で完封できるのは、能力頼りの相手だけが」

「笑わせないでくれ。力だけの野蛮人を仕留めることならいくらでも手はある」

数十体もの偽物が転がる空間でただ一人立っているグリーゼを睨む。

そうしながらも奥にある第7宮内部の様子をうかがおうとした。そこに地下から送り込んだ他の従属官たちが侵入している。

こうしてグリーゼをここに留めておけるのならば、いまの内にニルフィを運び出せるはずだ。

「……悪いが、別働隊がいても意味がないと思うぞ」「なに？」

意図を勘づいているらしいグリーゼの言葉に、ザエルアポロの眉がわずかにしかめられた。

セブティマ・バラシオ
第7宮内部ー寝室付近の廊下。

改造従属官にして巨大な体を持つメダゼピが頭から床に倒れ込む。巨体にはいくつもの打撃跡が残っており、興奮した猿のように従属官たちが大声を出した。

「メダゼピー！　メダゼピー！」

「メダゼピやられたっ！」

いましてが巨人のような破面アランカルを沈めた相手が一步前に入る。

それを見て後続の異形たちは後ずさった。

「淑女の寝込みを襲うとは十刃も落ちたものだ。そのような狼藉は吾輩が許さんよ」

片足立ちのまま蹴りを放った足を引き絞り、治療を終えたドルドーニが彼らの前に立ちふさがった。

その周囲にはメダゼピのように倒された破面たちが転がっており、さつきまで何人もが飛びかかって同じ数だけ床とキスさせられているようだ。

いくら改造を受けていても十刃落ちには敵わない。

しかし、一撃も攻撃を受けていないはずなのに、キリツとしているドルドーニの顔は見事にボッコボコになっていた。

「吾輩でさえお嬢さんの天使を超えるハズの寝顔を見ることが許されなかったのだ！ それをこんな大勢に見せるだど！？ そして持ち上げて肌に触れるだど！？ ーそんなこと、吾輩を差し置いて何があるうと絶対に許さんぞ！！」

それは魂からの叫びだった。

ニルフィの寝顔を見ようと寝室に忍び込んだところを、出かける直前になって気づいて激怒したアネットにリンチされ叩き出された、哀れな男の私情を多分に挟み込んだ絶叫である。

グリーゼは良かったのになぜ自分はダメなのか？

それは下心の有無だと気づいていない変態紳士が服の襟を正した。「何はともあれ、眠られているお嬢さんに吾輩は助けられた。ならば今度は吾輩が助ける番だろう。しかし……」

トンとドルドーニが両足を床に付ける。

脚全体の筋肉をバネのように縮め、静かな闘志をたぎらせた。裂帛の気合の声と共に、叫ぶ。

「ー淑女を魔の手から救うことに、そもそも理由など要らんだッ！」

かつて十刃であった男が跳躍する。

猛禽類を思わせるようにして、ドルドーニが異形の群れの中へと飛び込んでいった。

そして再び塔のある場所に視点が戻る。

ザエルアポロはグリーゼを模したであろう小さな人形を手に、苦々しい顔つきで手元を見ていた。

マトリョーシカのように割れた腹の中から、カラフルな粒をいくつか取り出す。

そして臓器の名前の書かれたそれらを握力で潰そうとする。

仮に破壊できればグリーゼの同じ部位も潰せるはずなのだが、その粒は金属もかくやというほどに硬くなっており、これらを破壊する力があれば直接グリーゼを攻撃したほうが早い。遠隔破壊できる霊圧をオーバーしている証拠だった。

「――馬鹿な」

仕留められる予定だった能力が意味を成さなかったことに、科学者の口から声がこぼれた。

それを見て不審げに、能力が使われた自覚すらなさそうに、グリーゼがザエルアポロに訊いた。

「……それで、十六分の一スケールの俺に何がしたかったんだ？」

「どうして効かないんだ！ コレなら、今までのお前の霊圧なら、問題なく発動したはずだ……！」

「……そこまでは俺も保証できない。お前にドヤ顔をさせてやれなくて豆ほどの申し訳なさがあるが、こちらにも退けない理由がある。それに俺は主人を守るためなら手心を加えるつもりもないさ」

斧槍ハルバードとなった斬魄刀の鋒きつぎがザエルアポロに向けられる。

なかば反射的にザエルアポロが虚閃セロを撃つ。

それをグリーゼが苦もなく武器で両断した。

「……それで、これで終わりか？」

無感動な言葉を聞いたザエルアポロは奥歯を砕けんばかりに噛み締めた。

怒りと絶望が湧き上がる。

他にも手は打っているのだ。クローンの返り血には劇薬が含んであったし、周囲には無色無臭の毒霧を展開させてある。しかし効いて

いるようには見えない。地雷も仕込んであったがそれも鎧を破壊するには至らなかった。

ザエルアポロが魔法使いでもなく生粋の科学者である以上、「投与しなればなにも起こらない。」

ニルフィは何度も第8宮オクターバ・パランオを訪れた。その際にグリーゼがいなければ蟲の一匹くらい付けられただろうに、どちらの体内にも事前に手を打っていない。そもそも会ってすらいらないアネットにもだ。

だがそれでも、ザエルアポロはこの準備で対応できると考えていた。

しかし結果はどうだ。

ザエルアポロの切り札を小手先にも満たないものとも言うようにして、グリーゼが仁王立ちしている。

「どうしてだ」

「？」

「お前たちはなにが目的なんだ？　こんな、デタラメな力があるのに。戦いの前にも言ったが、結末をどうしようが結果を変えるつもりがないんだろう？」

べつに言葉を並べて時間稼ぎをするつもりではない。

この理不尽を少しでも理解するために、純粋な疑問を提示したに過ぎなかった。

「君は今、いったい何のためにニルフィを守ってるんだい？　それはこれから——意味がなくなるはずだ」

その問いにグリーゼが即答した。

「……意味ならある」

「それは？」

「答える必要性は無いと判断した」

皮肉そうにザエルアポロが吊り上り気味に笑う。

「僕は自分が悪役なんて思っていないよ。いくら悪役ぶったところで、他人をクズにしか見ることができない悪人であることは隠せないからね。だってそれは、いままで今更なことだからだ」

それは独り言に近い。

「ああ……、そうか。僕は汚れ役を買いたいんだ。いくら恨まれようとも、すべては『それがザエルアポロ・グランツだから』って理由だけで片付けられる。コレは僕なりのニルフィに対する誠意のあらわれだよ。結果や結末なんてともかく、こうすることが『君たち』を壊さない結論を出したからだ」

歪んではいたが、これが小さな変化を得たザエルアポロなりの好意だったのかもしれない。

「……お前がどう言おうと、ここで見逃せばこれからも邪魔をする不確定要素だと判断した。――排除する」

それがこれからどういったことが起こるかを続ける前に、グリーゼが斧ハルバードを振り上げた。

「……残念だが、お前はその答えを見ることは無い。これで終わりだ」
「誰が、誰が終わりなんて決めた？」

「――終わらせる者の方だ」

その一撃によって巻き起こった衝撃波が周囲の塔を大きく軋ませた。

――

軽いノックの音が誰も通らない廊下に響く。

しかしそれは語弊があるだろう。歩いていないというだけで、これといって変哲もない壁を前にして二人の女が立っていた。

「開かないわよ？」

「ですが破アランカル面にしか扉の操作はできません。……もしかしたら、もう先に誰かが中に入って鍵をかけているとしか」

「ふうん」

ある意味で対照的な二人だった。

片や扇情的な肢体からドロドロとした肉欲を抱かせる朱色の髪の毛の女。

片や清楚で健康的な色香のある感情の薄い黒髪の女。

アネットとロカだ。彼女らは織姫が監禁されているはずの場所ま

で来ていたが、どういうわけか扉が開かなかった。

想定していなかったことに口力が戸惑う中、アネットが目を閉じる。探査回路ベスキスを使ったのだろうと口力は思った。そしてゆっくりと目を開いたアネットがため息を吐く。

その行為に隣に立つ口力は思わず身を引いた。

ため息の仕方にもいろいろな種類がある。失敗して絶望したときや、呆れて思わずしてしまうもの。

そしてアネットがしたのは、苛立ちを隠しもしない不穏な未来を想像させるものだ。同じことをザエルアポロがすると、大抵いつもよりも残虐な罰が与えられる。

「ちよつと離れてなさい。加減って苦手なのよ」

言うが早いのか、アネットが両手を扉に押し付けた。

「……まったく馬鹿で面倒なことしてるなんて、ねえ。こつちには時間が無いっていうのにさあ」

ひょうひょう 飄々とした様子を消して声にさえ苛立ちを隠すことが無い。

アネットの両手から侵食していくように壁が灰になっていく。ロボ口崩れ落ちたものが山のように重なり、どう見ても扉以上の大穴を瞬く間につくった。

そのままなにも言わずに進んでいってしまうアネットを追った口力が見たのは、室内で二人の破面アランカルから暴行を加えられている織姫の姿だった。暴行をしているのは、たしか自称藍染の側近である、ロリ・アイヴアーンとメノリ・マリアだ。もっとも、主に暴力を振るっていたのはロリのほうらしいが。

「……………あ、アネット……………?!? なんであんたが!?!」

「あく、そういうのいいんで、とりあえずすぐに織姫って娘をよこしてくれないかしら」

アネットの姿を見た二人が顔を険しくする。

「くそ…………ツ」

「な、何よー! あんたこそ何しにこんなところー」

わめ 喚くロリを無視してアネットが拘束されている織姫に近寄り、

「早くこの娘をよこしてくれないかしら。ニルフィが瀕死なのよね。」

だから、早く放してあげなさい」

その言葉に、顔に痛々しい打撲跡を張り付けた織姫がかすかに反応した。

「なによッ。あのチビのことなんてどうだっただっていいでしょ？ 負けたならもう藍染様には必要ない駒じゃん！」

変わらぬことを言うアネットにロリが顔をしかめた。

腕を掴んでいた織姫をメノリに押し付けたロリが、朱色の従属官にフラシオン噛み付いた。自分より格上であるはずの十刃エスバーダに対しても高圧的な態度が目立つロリのことだ。こういった怖いもの知らずの態度も頷ける。

そして、多くの破面アランカルと違いロリはニルフィのことを快く思っていないのをロカは知っていた。こころよ

ニルフィは鬼道の手ほどきを藍染直々に教えてもらっている。そしていつも気軽な態度で接せることから、嫉妬深いロリからひんしゆく顰蹙を買っていた。そして織姫の受け渡しを拒否するのも嫌がらせをかねてだろう。

「……これ以上グダグダ言うつもりは無いわよ。さっさとその人間をローよこせ」

「ッ！ 勝手なこと言わないでくれない!? それにー」

言い募ろうとしたロリが口をつぐんだ。

アネットがまたため息をついていた。頭を搔き、心底面倒臭そうに思っているながら、内心のくすぶりだけで爆弾を思わせた。

「アタシはさ、『よこせ』って言ったんだけど」

かつて十刃エスバーダであった頃のアネットは、ヤミー以上に理不尽な暴力の権化であったらしい。

「あゝ、ったく、もうメンドーすぎ。『貸してください』とか、『よこしなさい』じゃなくって、アタシが『よこせ』って言ったの。ならピーピーさえずってないでさっさとこっちに渡しなさいよ。カスのくせにさあ、態度が生意気なだけど」

「なッ」

ロリがなにか言う前に、アネットはその場から姿を消していた。

ソニード
響転だ。

そう誰もが認識できた瞬間、ただメノリだけは違っただろう。彼女のすぐ目の前にアネットがいた。そしてアネットが無造作に手を横薙ぎにする。そうするだけで途中にあったメノリの首が鋼皮イェロもろとも灰と化し、頭部のパーツだけが宙を舞った。

首のなくなった体から織姫を引き剥がしたアネットがさっさと大穴のほうへと歩いていく。首にも死体にも一度も目を向けることはなかった。

「なっ、メ、メノリ！ あんた……ッ！」

「ああ、そういえば織姫って名前だっけ。自分に能力って使えるかしら。顔治させる時間くらいはあげるから、さっさと治しなさい。それで」

「待て！ 待てってば!!」

「……なに？」

うるさそうにアネットが振り返る。

やはりメノリの死体に目を向けることもなく、ルビーのような双眸にはロリの存在が空気と変わらない価値しかないように写っていた。空気がうるさい音を出している。その程度の認識で、アネットがロリを見ていた。

「よくも……メノリをッ」

「メノ……？ ああ、ソレのことね。で？」

その時にはもうアネットは興味を失くしたとばかりに、ふらつく織姫の背を押して外に出ようとしている。

屈辱と怒りがロリを支配したように見えた。いや、まさしくそうだ。ロリはさっきまでの残忍な表情を失くしてわめきたてる。

「こんなことして、藍染様が黙っちゃいないわよ……！」

それでもアネットの関心を取り戻すことも出来ず、怒りに打ち震えていたロリが斬魄刀を引き抜いた。

「毒せエスコロベンドラ『百刺毒娼』」

斬魄刀解放をしたことでようやくアネットがロリを見やる。

その顔はどこまでも苛立たしげで、放っておいた羽虫が雑音を響か

せる害虫だったと解ったような表情をしていた。

「アネット様……」

「ロカはその娘を連れて下がってて。……いるのよね、自分のカスみたいな実力を理解できないダニって。相手の強さを理解して向かってきた昔のグリムジョーのほうが何倍もマシ」

解放したロリは、胴体や頭にムカデの脚のような装甲が形成され、両腕が無数の刃を持つ巨大なムカデの胴体の様な形状に変わっていた。刃の部分が床を剃ると、その部分が毒によって溶けている。

「殺してやるッ!!」

絶叫したロリがリーチの伸びた両腕を交差するように振り抜くと、アネットの背後にある大穴の両脇を毒のついた腕が叩きつけられる。間にあつたアネットなど体を横三つに分けられているはずだが、

「……………え?」

呆気ない声を出したのはロリのほうだった。

アネットはやはりその場で不動のまま。だということに、死覇装にはどこも溶けた様子もない。

「あ、あ、あ……………ッ!」

逆にロリのムカデのような腕は半ばから無くなっていた。アネットの体に触れた場所から灰にされ、壁にぶち当たったのはそのさらに外側の部分だ。

そこでようやくやく、ロリは恐怖を覚えたように後ずさる。

ラ・ブルーム
炎翼舞

獄炎を高級なコートのように纏ったアネットが一步一步ロリへと近寄る。そのたびに靴の周囲の床がドーナツ状に崩れていき、室内を灰が雪のように舞う。

「アンタみたいなゴミは十刃エスパーダになった瞬間からいくらでも見てきたわ。でもゴミってのはどんな時でも出てくるものね。そういう時はぜんぶ同じように処分してきた」

攻撃されたというのに、アネットはやはり変わらずロリを命あるものとして見ることはなかった。

右手の指をトンとロリの首に当てる。

「ゴミはゴミ箱に。いい言葉ね。でもアタシにとっては無駄な言葉。ーどうせゴミなんて焼却処分するんだし」

突然、ロリの体が燃え上がった。悲鳴一つあげることも許さずにゴミを燃やすよう無慈悲にも一瞬で灰にした。

この部屋にロリ・アイヴァーンという破面アランカルがいた証拠を示すものは、積もった灰色の小山だけだ。

ついでの用事を思い出したように、アネットが右手をさつとメノリの死体に向けた。

ゴミがあつたから燃やす。それくらいの認識の自然な動作だった。「……なんのつもり？」

しかしそれを止めたのは意外にも織姫だった。

無言のままアネットの右腕を抑え、炎が出されないことを確認してから死体の前にしやがみこむ。そして回復の為の結界を張ると、頭と胴体が自然にくつつき、さらに無くなった首までも生み出された。

ロカが目を見張る。それはたしかに、死を遠ざけたことからニルフィを全治させることも可能なように思えた。

そのままロリだったものの場所まで駆けようとした織姫の首をアネットが掴む。

「べつにいいでしょ？ コレとかはあなたを殴った相手なんだけど。なら死んだことに清々すればいい」

「……………ッ！」

「こっちは一秒でも早く治してもらいたい娘がいるの。理解できた？」

首が離されると、しばらくむせていた織姫は、やはり変わらずに口りを復活させた。

強引な手段を織姫にするつもりがないアネットが肩をすくめる。そして黙って事態を静観することしかできなかつたロカに訊いた。

「理解できる？ あの娘の考えていること」

「……………私には、あまり」

「おかしいことじゃないわよ」

アネットは大穴をくぐり抜けて背後に声を投げかける。

「さっさと来ないとアンタの仲間も同じようにするわよ。砂漠の風で灰が散ったら、アンタは無から仲間を創れるワケ？」

それが冗談でもなくアネットにして最大の譲歩だということが、感情に疎い口力にも解った。

舞台開始の五秒前

ラス・ノーチエス
虚夜宮外周部、その近辺。

壁に沿うようにして駆けている二人の人影があつた。

ひとりは破面アランカルの死覇装とは違う白いスーツを身にまとつた少年。

手入れされた眼鏡などから几帳面な性格かどうか見えるのは、石田雨竜いしだうりゆうという滅却師クインシーである。彼も一護と同じく織姫の奪還をしにきた侵入者であつた。

そしてもうひとりはアリもしくはクワガタムシを模した仮面をつけている細身の男。

灰色の身体で各所にプロテクターを着けており、見た目は虚ホロウそのものの姿で、禪を穿いている。名はペツシエ・ガティーシエ。成り行きで雨竜たちと行動をともし、はぐれた仲間の二人を探していた。

言葉を交わさずにしばらく走り続けていた二人だが、ペツシエが重々しく口を開く。

「しかし……一護よ」

「雨竜だ。いきなり大暴投してきたな」

「ムウツ!? では雨竜らしき眼鏡よ。貴様は……本当にその織姫という人間の場所にまでたどり着けると思っているのか?」

色々とツツコミを入れたい衝動を抑えた雨竜が顔を曇らせた。

「目的を達しなければ、どうして虚夜宮こまでやって来たか解らないじゃないか。それに井上さんは自分の意志で相手側に行ったんじゃないと睨んでいる」

それ以上雨竜はなにも言わなかった。オレンジ色の髪の毛の死神代行に思考が毒されていると感じながら、引くに引けない状況なのだ。

「それだったら君のほうこそ危ないんじゃないか?」

「そ、そんなことは解っている! だがダメなのだ! これ以上ネルラス・ノーチエスを虚夜宮こにいさせては」

「どういう意味だい」

「それはネルに興味を持ったという認識で間違いないな? この幼女趣味めツ。やはり眼鏡男は変態と相場が決まっているようだな!」

「どうすればその認識になるんだ！　ただ目が悪い人に謝れ！」

雨竜は走る速度を緩めた。周囲には破面らしき霊圧もあらず、せめて何も無いうちに体力の消耗を和らげようとする。それはペツシエも察したようで特になにも言わずに従った。

そうしなければ全力の戦いなど何度もこなせない。

雨竜の白いスーツは所々切り裂かれており、血の跡だとわかる赤色がよく目立つようになっていた。3ヶタの巣で戦った十刃落ちチルツチ・サンダーウィッチによって与えられた傷だ。倒すには手が掛かると判断し、二人は隙を突いて離脱している。

「あれで、十刃じゃないのか」

チルツチは自分は子供に負けていると語っていたが、十分な強さがあつたように思えた。

「ペツシエ。君は虚夜宮にいた期間があるはずだ。十刃落ちの中で、彼女はどれくらい強かったのかわかるか？」

戦闘していた場所を離れるのに必死で訊いていなかった質問をする。

答えることに迷った様子のペツシエ。しかし情報が無ければ簡単な判断ミスさえすると説き伏せれば、しぶしぶといった様子で、ネルには教えることがないという条件で語りだす。

「あのゴスロリ女だが、私の記憶が正しければ過去の十刃の中では飛び抜けた部分は無かった……ハズだ。いまは死んでいるが過去に生きていた十刃には、もっと厄介な能力の持ち主もいた。死の形が『疫病』であつた女など……うむ、思い出したくもない」

「僕が欲しいのは今の破面たちの情報だ」

「せっかちな奴だな。早漏れは嫌われるぞ、雨竜よ」

破面と戦うよりも、なぜかペツシエとの会話でストレスマツハシているのは気のせいではないだろう。

「しかし言うておくなら十刃はもとより、十刃落ちにも規格外がいる」

ペツシエが記憶を探るように仮面の奥の目を細めた。

「まずグリーゼ・ビステイーという男だ。しかし本人が寡黙すぎて詳

細はよく解らん」

「じゃあどうして規格外だつてわかるんだ」

「辻斬りだ」

「辻斬り？」

「奴は事情から空席になった十刃エスパーダの座に戦わずして据えられた。それをよく思わない者たちを片っ端から殺していき、ついには十刃エスパーダを何人が返り討ちにしたのだ。能力型など抵抗する間もなく葬られている。しまいには『……あれらが十刃エスパーダだと気づいていなかった』とまで言う始末」

現世で対峙したららしい恋次から名は聞いていたが、予想以上に力のある破面アランカルだったようだ。

そして次に聞く名も知っているものだ。

「そしてアネット・クラヴェラ。これはアレだ。とにかくヤバい女とだけ覚えておけばいい」

「ものすごいアバウトになったな」

「他人を殺したところでゴミ掃除と変わらないと本気で思っているイカレた感覚の女、と言えば理解できるはずだ。とりあえずこの二人が危険だ。それも、どちらも第7十刃セブティマ・エスパーダの下に就いているらしいが……」

ところで、と今度はペッシエが雨竜に話題を振る。

「今までかいつまんで貴様達の現世での情報を耳にした。そこで訊いておきたいことがある。――第7十刃セブティマ・エスパーダの幼女はどんな名を名乗っていた？」

君が幼女と口にするると犯罪臭がする。

そう言おうとしたした雨竜だが、ペッシエの真剣具合が違うことに気づき、ロクでもない答えが返ってくる予想しながらも素直に答えた。

「ニルフィネス・リーセグリングアールと名乗ったそうだけど。ああ、そういえばあのチルツチという破面アランカルもその名前を口にしていたね。それがどうした？」

「ウム、そうか……」

仮面越しでも難しい顔をしていると解るペツシエが腕組みをしなから足を止めた。

そんなにも名が重要だったのか？ 雨竜がペツシエの顔を覗き込む。

「もう一回訊くけど、それがどうしたんだ？」

「いや、まさか……。まあいい。話しても困ることではないか。では雨竜よ、あの幼女について語り合おう」

「同志に語りかけるみたいにしなくてくれ」

また歩き出した雨竜はペツシエの話に耳を傾けた。

ペツシエは虚^{ウエコムンド}圈^{ホロウ}の虚たちの生き方は三つあると言った。ひとつは一匹狼として、もうひとつは四、五体くらいのグループとして。それらは基本的にアテもなく放浪して生きていく、と。

最後に、コロニーについて説明があった。

大勢^{ホロウ}の虚たちが寄り集まって住み、他のコロニーと小競り合いをしている場所らしい。力のある中級大虚^{アジュウカス}がトップにいることも珍しくないとも付け加えられた。

虚^{ホロウ}だとしてもそういういったコミュニティが形成されているのだと雨竜は初めて知った。

「虚^{ウエコムンド}圈でも噂などが広がるのはそのためだ。情報を知る者が多くなれば、必然的に拡散する。我々が無限追跡^{ホロウ}ごっこをしている間にも、しているからこそか、いろいろな情報を耳にした」

その中のひとつには、力のある虚^{ホロウ}の情報^{ホロウ}が混ざっていることも少ない。

「多くの場合、コロニーというものは弱者の集団だ。強者の情報に敏感になるのも自然な流れだった。そしてこの世界での強者とは、多くの虚^{ホロウ}を喰らった者を指す。そこまで大規模な行動をしたものの名が広まるのもまた、自然な流れだろう」

「それは同意できるよ。人間も、いまは情報戦が物を言うからね」

「やはり、貴様の眼鏡^{ナニ}は見掛け倒しではないようだな」

「いちいちナニなんて言わないでくれ！ 僕^{変態}が君の仲間に思われそうだ！」

「ち、違う……のか？」

「なんだそのカルチャーショック受けた顔は！ 僕はノーマルだ!!」
疲れを癒すはずなのに余計疲れた気がする。雨竜はずれた眼鏡を押し上げて続きを促した。

「ではそういうことにおこう」

「君は……ッ！ 殴られても文句は言えないぞ!？」

「お、落ち着け。それでだな、ヴァストローデ最上級大虚ともなれば存在が知られてないほうがおかしいのだ。第2セグンダ・エスパーダ十刃であるバラガン様の名はもとより、活発に活動していたアネットの名も、もちろん知られている。だからおかしいのだ」

「どういう意味だ？」

雨竜の問いに、いくらか重くなった声の調子でペッシェが言った。

「ヴァストローデ最上級大虚クラスであるはずなのだがな」

続けられたのは奇妙な言葉で、

「……ニルフィネス・リーセグリンガーの名など、私は聞いたこともない」

ただの聞き間違いじゃないかと雨竜が追求する。

「それこそまさかだ。臆病かもしれないが、我々は危機に対して敏感だ。そこだけは断言できる」

「……………」

雨竜は深く考え込む。

戦ったチルツチはおそらくアジュウカス中級大虚クラスだ。押されはしたが、終始一方的な戦いはされなかった。少なくとも死神の副官クラスを瞬殺したニルフィネスがヴァストローデ最上級大虚であることに疑いはない。

だが、なぜ名が知られていない？

むしろペッシェの話し方は、存在自体があつたのかも怪しいといった様子だった。

—————

ボコリ、と音を立てて壁にめり込んでいた二人は床に降りる。節々の痛みに顔をしかめながら死覇装からほこりを払い、顔を見合わせ、幸せが逃げると言われているため息を吐いた。

片や下顎のない犬の被り物のような仮面をつけた青年。

片や蛇のウロコのような仮面片で額が覆われたダウンナーな雰囲気
の優男。

どちらも、暴走特急アネットの餌食にされた数字持ちの破面である。ぶつかる瞬間に虚弾で弾かれたため女の柔肌を感じる間もなく壁にキスさせられていた。

「ああ、クツツ、誰だよレディファーストなんて言葉作ったヤツ。必要ねえじゃん。むしろ男である俺らのほうが守られるべきじゃねえの？」

「不甲斐ない。オレも含めて、不甲斐ないな」

不満に吠えるような犬頭の抗議を流したいくらか冷静な蛇男が、頭痛をこらえるように頭を振る。

「どうせあの嬢ちゃん絡みだろう。アローニー口の敵討ちしてケガをしたんじゃないかと思うんだが」

「ケツ、それでアレが簡単にくたばるはずねえよ。俺が文句言いてるのはな、そのとばっちりでこつちまで火の粉が飛んでくることだよ。いましてたその火の粉にブツ飛ばされたけどな！」

悪態をつく犬頭にやれやれといった様子で蛇男が肩をすくめた。

特定の十刃の部下になることもなく過ごしている犬頭と蛇男。実力が自称「中の上」である彼らは、実はニルフィと繋がりがあつた。それも昔いたコロニーを虚であったニルフィに壊滅させられているという血みどろなものだったが。

「あれで火の粉なら可愛いもんだよ」

「藍染がシオルダータックルしてきたら火炎放射並つてか。たしかに可愛いもんだな。打撲程度で済んだことで、幸運の女神に乾杯かよいくしょう」

「うまい諭えだな」

「自分で言うのもなんだけど全然うまくねえし。それに気遣いでヨイショしてくれる優しさが痛いぜ」

やはり不満たらたらな様子の犬頭。

口が悪いのは勘違いされやすい彼の気質だと理解している蛇男が、やはり声に隆起を見せることなく淡々と犬頭に言葉を返す。

「なら実際文句言ってくるか？ そうすればアネットかグリーンゼが出てきてオマエは地獄行きだよ。焼却処分か首チョンパって選択肢があるだけマシだと思え」

「バツカ、お前。そういう時は『ここはオレに任せとけ』だろ」

「腐れ縁の身から出た錆でオレは人生を棒に振るつもりはない。仮面が割れてから、つまらない死に方だけはゼツタイにしないと決めてるんだ」

蛇男はどこまで本気なのか解らない言葉を吐くと、最後に袖の汚れを払う。

「所詮オレらは舞台裏の登場人物。つまらない死に方をしない代わりに、パツとした幕切れが臨めればいいほうだよ」

それに対して不服そうに犬頭が言った。

「なんだアレか？ 俺たち二人がたまたまバケモノだったチビから生き残ったからって、自分だけが特別だと思ってるのかよ？」

「自分が特別だと思うのは古い。まして平凡だと思っるのはもつと古いことだ」

まあともかく、と蛇男が曲がりのない光の宿った目で犬頭を見た。

「最初に覚えた漢字が『女湯』の高度な破面アランカルであるオレには関係ないことだがな」

「……ある意味高度すぎるな」

頬が引きつった犬頭がかるうじて言葉を吐いた。

この話題を引きずれば取り返しのつかないことになりそうなので、わざとらしく犬頭は思いついた話題を適当に振る。

「ーで、あのチビか。あいつが倒れてから虚夜宮こよみやも荒れてきてる。空気を吸ってるだけでのどが痛くなりそうだぜ」

「それだけ愛されてるんだろう」

「愛？ 愛だと？ ゾマリの野郎じゃねえんだからさ。だあれもあのチビがどういう奴か知りもしない。虚夜宮ラス・ノーチエスに入れば外からの情報
がまったたく入ってこないからつっても、上辺だけ見てあのチビをみんな評価してやがる」

「気に入らないのか？ お前が昔の禍根を気にするようなタマではないと思っていたが」

「そりゃもちろんコロニーの件はどうでもいいよ。こうしてお前と一緒にいるのもたまたまの流れだしよ」

くだらないくだらないと繰り返しながらも犬頭が口をへの字に曲げた。

仮面の奥の目は寂寥で大きく揺れている。それはバラガンでさえ深くは知らないだろうから。そして十刃エスパーダを含めてニルフイに親愛を抱いている彼らが、以前の自分たちと重なることがどうしようもないまでにやるせなかつた。

アレがどういうモノかネタばらしも禁止されている。

取り返しのつかないことになるのに、そう時間はかからないだろう。

「あのチビも哀れなもんだぜ。自分がどういいう奴か知ってても、記憶が無いから肝心なことが理性じゃ解ってない」

「でもここで生きるくらいならべつにいいいだろ？ 破面オレたちって記憶があっても身分証誰も持ってないぞ」

「頼む、少し黙っててくれお前」

犬頭の切実な願いを吐き、

「ともかくさ、あのチビは面倒事の塊みたいなもんなんだよ。望む望まないに関わらずなにかも巻き込んでいく。俺はそれに引き込まれたくないって言ってんだ」

「たしかに、末端の雑用係もじつとしてないだろうな」

「……あ？ なんて雑用係の奴らが出てくんだよ。役にたたないだろ」

「それでも嬢ちゃんのことがいづらは大好きなのさ。上にも下にも囚われない。大切なのは、昔がどうだろうと今がどうだかだ」

それだけで話が終われば犬頭的にはよかったのだが、懐を探った蛇男が、嫌な予感を当てるかのように何枚かの写真（のようなモノ）を取り出す。

「……なんだコレ」

「見れば解るだろう」

「解らねえから訊いてんだよ馬鹿！ 知らねえぞ、ホントになんだよコレ!？」

キレ気味に犬頭が叫んだ。

写真には同じ人物の日常の何気ない様子が写っていた。ニルフィだ。そのどれにも共通することは、アングルのせいもあるだろうが一枚もカメラ目線ではないこと。それに気づくと写真がやたらと犯罪臭のする物体に見えてきた。

蛇男がわずかに口の端を吊り上げながら言った。

「これといって名前がつかないから適当に『会』とだけ呼ばれてるんだがな。ああ、属しているヤツらは自称だが『会員』と名乗るのが通例だ」

「うっわ、なんだその……、もう、ダメそうな集団だって勘だけで解りそうなの」

蛇男は常識があると自覚している犬頭が、仮面に覆われていない口元をうわあという形に変えながら言った。

しかしそれで止まらないのが蛇男という破アランカル面だ。

まるで演説でもするかのように、無駄のない無駄な動きでジエスチャーを加えながら腕を振り回す。

「馬鹿にしないほうがいいぞ。多さだけで言えば、ラス・ノーチエス虚夜宮の勢力図を塗り替えられる数は在籍している。ーそして随時募集中だ」

「その元気をもっと有意義に使って欲しいな俺は!!」

聞きたくない。けれど構わずに蛇男が語りだす。

「なんだったか、『プサリス・ゾイフィオ』という偽名の誰かが最初に広めたらしい。途中でパツタリと消息がつかめなくなってから『カングレッホ』というものが後を継いで、最初は危なっかしい少女を見守ることから、だんだんとエスカレートしていった結果が……これだ」

「脱線どころか入るレール自体が間違ってるよな」

「それだけヒトを惑わす少女だから仕方ないだろう。それに危惧したオレは試しに潜ったんだが……いつのまにかハマってたんだ」

「いいからもう死んでこいよお前!!」

犬頭の叫び声が廊下に虚しく響いた。

ちなみにプサリスとゾイファイオはギリシヤ語で鋏はさみと蟲。

カングレツホはスペイン語で蟹かにという意味だ。

もはや世も末な状態であった虚夜宮内部であるが、だからこそその中心となっていた少女の行動ひとつで大きく変わるのだろう。ましてやそれが傷ついて倒れたなど、蜂の巣に石ころを投げて挑発するかのようなものだ。

「つっても、いつまでその連中も嬢ちゃんを庇いきれるかね」

気だるげに写真を仕舞い込みながら、蛇男が虚空へ向かって言った。

「……アレはそう夢のある代物ヤツじゃあ無いってのに」

—————

セブティマ・パラシオ 第7 宮 近辺、 オクターバ・パラシオ 第8 宮 方向の石材が乱立する砂漠。

そこを重い足取りで進んでいくザエルアポロが、手近にいたという理由だけで自分の従属官フランゾンを掴んで動けないようにし、大口を開けて貪むさぼった。すると気味の悪い咀嚼音と共に傷だらけの体が癒えていく。肩から腰にかけての裂傷も同じく消えて行き、ぎこちない歩き方も正常に戻っていった。

ちぎれた翼のような触手なども同様に再生していき、血と肉が満ちていく。

「ハア……ッ。ハア……ッ。ハア……ッ。ハア……ッ。……」

そして呼吸を整えたことで、ザエルアポロは冷静になった心が怒り

で打ち震えるのを感じた。

「クソッ!!」

叫び、回復薬として使った従属官フランシオンの成れの果てを踏み潰す。それを見て周囲に残った十数体の異形たちは身をすくませるが、ザエルアポロの視界に入ることはなかった。

結果的に、ザエルアポロは生き延びた。

それもそのはずだ。これは科学の成果とか運の要素とか以前に、グリーゼがザエルアポロのことを殺すつもりがなかったから。主人の言ったことをバカ正直に間に受けるあの男は、おそらくニルファイから仲間を殺さないように頼まれているのだろう。強烈な一撃で塔の区域ギリギリまで撥ねられ、棍棒に変えた斬魄刀によって数キロメートル離れたこの場所まで従属官フランシオンもろともふきとばしただけだった。

ザエルアポロは内心で渦巻く怒りの理由を整理できない。コケにされたことへの屈辱、自分の小手先が一切通用しなかったことへの絶望。そこまでは解るが、あとは言葉が見つからなかった。

「クソがッ。まだだ、まだ準備さえあればいくらでもくつがえせる。失った霊圧も宮に戻ればいい。けど時間は……もうないか」

苛立たしげに石材の間を歩いていく。

ザエルアポロの行動は他の十刃エスパーダにも知られているはずだ。貴重な自由を使い切ってしまった。また、バラガンあたりが出てきては面倒なことになるだろう。藍染は絶対に邪魔してこないのが不幸中の幸いだが、もはや形振りなりふかまっているヒマはない。

あそこまで貴重な研究材料をファイにするつもりなどなかった。

ニルファイはザエルアポロにとつて欲してやまない結果を与えてくれるであろう特性がある。みすみす目の前にある極上の獲物を見逃す性格ではない。

ここまでのリスクを払ったからには、途中で降りることなどもとから出来なかった。

「ああ、そうさ。もう穏便にやらなくてもいいのなら、爆弾だろうが地雷だろうが薬だろうが、こここそ使わなくとも奪掠はできる。多少被検体が傷ついても、それこそあとでどうとでもー」

「生憎だけど、幼女にイタズラしようなんて、藍染^神が許してもアタシを差し置いてなんて許さねーですよ」

「ッ!!」

声のした方向を振り返ると、適当な石材の上に脚を組みながら朱色の女が座っていた。

「アネットか……!」

「そうよ。いいリアクションありがとう。けど男の呆けた顔なんて嬉しくないわね、カワイイ娘がやると見方によってはAh……コホンッ。あれね、なぜかいきなり咳^{せき}が」

いったいどんな単語を口にしようとしたのか。

ふざけたことをのたまいそうになるアネットを、彼女の妖艶な色香を漂わせる白い太ももにさえ目もくれず、ザエルアポロが睨んだ。

「僕としては……君の行動が一番予想外だった」

「さあね、どうしてかしら」

「考える時間も惜しい。だから単刀直入に言わせてもらおうよ。――僕と取引をしないか?」

「……へえ?」

興味を示したアネットが目線だけで促してくる。

「ニルフィを研究しつくしても殺すつもりはない。たったひとつだけ知りたいことがあるんだ。そのあとに君に返すことだって約束するさ。……まあ、今までみたいに感情を表に出すことができなくなってるかもしれないが」

「それにアタシが頷くとでも?」

「ああ、本気で思ってるよ。なにしろそれだけでも君の目的は果たしているだろう。断言するが、君にとって不利になりえる条件は一切無いはずだ」

しばらく足をぶらぶらさせていたアネットだが、
「却下」

短く、そしてこれ以上意思を変えるつもりがないことを示した。

「グリーゼも同じことを言っていたよ」

「それなら珍しく意見が一致したんじゃないでしょうかね」

癩だけでも、とアネットが付け加えた。

「これからあなたは邪魔するだろうし、存在がアタシにとって邪魔になつてるの。グリーゼと違って見逃すつもりなんてさらさらないわ。害虫駆除は、とことんやる性格ですから」

アネットが石材から軽やかに飛び降りる。

レスレクシオン

帰刃状態とはいえ、いまだにザエルアポロの霊圧までは半分も回復しきれていない。そうでなくとも、まともにこの女とやりあつては勝率がゼロから変わることもないだろう。また、仕込みなどはほとんどあの塔の区域にしか集中させていない。

ーだが、これはチャンスでもある。

ーどうせ手元の賭け金をすべて投げた僕がやることはひとつだけ、か。

思念だけで通信できる蟲でザエルアポロは部下たちに命令を下し、続けられる言葉を待つ間もなく起死回生の一手を打った。

「邪魔」

捨て身の特攻を仕掛けてきた異形たちをアネットが灰にしていく。だが装甲によってわずかに存命時間が増したザコたちに涼しい顔をしながら苛立っているのが解った。

さらに周囲の岩にあらかじめ仕込んでいた爆弾を起動させて岩のつぶてを殺到させる。

今のザエルアポロにとってはそれで十分だ。

大ぶりの攻撃を放つアネットの隙を突き、砂の中をミミズのごとく突き進ませていた翼のような触手で、即座に彼女の体を複雑に絡め取る。

その瞬間、触手よりも先にザエルアポロは自分が獄炎の波に飲み込まれながら、賭けに勝ったことを悟って哄笑した。

ガブリエール
受胎告知

それは、ザエルアポロ自身が最も自慢している能力であり、本人曰く『敵に自身を孕ませる能力』。

肉体の大半が損失したとしても、敵の臍へそから体内に侵入して卵を産み付け、体内から相手の全てを吸い尽くして死に至らしめ、自らの肉

体を復活させる。

「？」

よく解っていないという様子のアネットを縛る茎の途中。そこに切れ目が入って細長い歯が整然と並んだ口となった。

こうなつてもまだザエルアポロの意識は消えてない。

灰となった本体のあとを続くように、不気味な口から奇声じみた笑い声が上がった。

「クツハハハハハハハハ!! まさか、まさかこんなにも簡単にいくとは思わなかったよッ」

うるさそうに眉をしかめたアネットが吐き捨てる。

「何ですか、コレ? あいにく触手プレイされる趣味なんてアタシには無い……、あ、ニルファイがされてるところを見るのはアリね。相手はあなた以外限定だけど」

「そう余裕ぶつてられるのも今のうちだ。いかに君がこの受胎告知ガブリエールとは別の『不死』を体現させていようが、霊圧を喰い尽くされては不可能だろう。僕の前に、死という終焉は存在しない。僕は殺されようと完全な死の前に蘇よみがえ……なぜだ?」

そこまで喋ったところで、ザエルアポロは疑問を口にした。

もうすでにアネットに侵入させた卵は孵化していいはずだ。

無様に女の腹は膨れて口から新たな自分が誕生する。そのシナリオがちつとも進まない。

そうしているうちに、ブチブチと、まるで炎さえ必要ないとも言うように、アネットが腕力だけで鋼鉄以上の硬度があるはずの拘束を引き裂いた。

触手であるザエルアポロも半ばからちぎれて砂の上に落ちる。

「茶番に付き合っただけられるほどアタシも暇じゃないんですよ」

たしかにアネットの服の腰あたりは破け、狡猾な猫のように妖しい媚態を感じさせる臍がちらつく。

ならば、

「ま、待て。どうしてだ!? たしかに卵は植え付けたはずだ!」

「……簡単なことよ。アタシがアンタごときに戦闘シーンなんて必要

ないくらい格上だから、つてトコ？ 余分なのよね、アンタみたいな存在って。横から出てきて黒幕気取ろうなんて虫が良すぎ」

女性がゆつくりと歩く。

その真紅の瞳を爛々と輝かせながら。

「アンタの間違いはふたつあるわ。まあ、ひとつは、先に言っておくけどね。アンタ、アタシみたいなイイ女に逆らおうとしてる時点で終わってるのよ。何しろイイ女は、惚れた相手にしか負けないからイイ女なんだから」

本来ならば燃えることのない虚^{ウエコムンド}圏の砂が灰として崩れていく。

「あとひとつは……自分で考えなさい。でもニルフィを襲おうとしてる時点で、アンタには一生答えが見つからないわよクソ科学者」

「やめろ！ こんな、こんな馬鹿な！ 力尽くで僕のチカラを破るだど!? ツ！ それ以上近づくな！」

「大丈夫よ。考える時間はいくらでもあるわ。どうせアンタは地獄行きだろうし、クシヤナーダに殺され続けながら考察してるのがお似合いね」

「まだだ、話を聞いてくれ!! これでも僕は彼女の^{ニルフィ}ことを考えてー」
「ア^アディ^{ディ}オ^オス^ス。さようなら。」

アネットが未練なく吐き捨てた直後、^{ラス・ノーチエス}虚夜宮のどこからでも見える極太の火柱が周囲一帯を包んだ。それによって地下を逃げていた触手の断片ごと焼滅させられることとなる。

^{エスパーダ}十刃、残り八名。

巨大なクレーターから這い出したアネットが、ふと腹をさすった。あろうことが彼女は炎をまとわせた右手を、肌のさらされている部分に躊躇なく突き込む。無造作に探る動作を何度か繰り返すと、やはり突き込んだ時と同様に、再び躊躇なく引き抜いた。

「……………」

大豆ほどの球体がアネットの右手の中でボロリと崩れ落ちた。

そしていじくりまわした腹だが、どういうわけか傷ひとつ付いていない。

「やっべー、やっちまいましたねやだー」

棒読み口調で背後を振り返った彼女は、半径がキロ単位になりそうなポツカリと大口を開けた灰の降り積もるクレーターを前に、逃げるようにして第7宮セフティマ・バラシオの方向へと響転ソニードを繰り返り出した。

アネットが宮に戻った頃にはニルフィの治療は終わっていたようだ。

ベッドの上で眠るニルフィの体は、あれほど痛々しかったのが嘘のように滑らかな真珠色の肌を見せている。しかし意識はまだまだ戻らないようで、少女は泥のように眠っていた。

「……戻ったのか」

「どこかの誰かさんが手加減したせいですけどね。わざわざアタシが簡単にトドメを刺しに行っていましたよ」

椅子に座ってのんびり雑誌を読んでいるグリーゼにアネットが皮肉を飛ばした。

「……その割にはかなり派手にやったように思えたのは俺の気のせいかな。自分の力に自信が持てなくなってくるというのも、なかなか不安が煽られる」

「ぐっ、べつにいいでしょ。アタシの辞書に加減なんて言葉は無いのよ」

「……おまけに家事や料理もな」

「う、うるさいうるさいうるさい!! 大体そういうのは下のに任せとけばいいのよ。ちよつとくらいアタシより家事ができるからって天狗にならないでもらいたいわね、鼻折りますよコノヤロー」

口では勝てない。それを認めることもせず戦略的撤退を選んだアネットが周囲を見回した。

「そんなことより、あの織姫って娘はどこに行っただんですか?」

「……そんなこと?」

「蒸し返さないで頂戴。ともかく、アタシが訊きたいのは人間がどこに行っただかってこと。お礼の一言でも言おうと思って」

「……さっきまで居たグリムジョーがすぐどこかに連れて行ったぞ」
「グリムジョーが？」

またどんな理由で、と訊きかけてアネットは口をつぐむ。もう少しで、なぜあつさり出て行ったのかを知ろうと思ってしまうところだった。どうしてだろう。自分はいま、否定の言葉が欲しかったのか？

「ふん、去り際にどうせ『勝手にやってやがれ』ってカツコつけて言い捨てたんでしょ」

「……俺にはな。お前には『馬鹿』と言い残した。そのあとに一言ではダメだと思つたのか、『救いようのない馬鹿』と称してたぞ」

「あの猫……い！ デカイ顔するようになりやがりましたね」

無然とした表情となつたアネットがベッド脇の椅子を引つ張つて腰を下ろす。

「じゃあ、他の二人は予定通り？」

アネットの問いに、グリーゼが頷くことで肯定を返した。

なんのことはない。ドルドーニが護衛代わりに口力を救護室まで届けたかを確認しただけだ。しかしすぐには帰つてこないのは、響転ソニードをロクに使わない移動だからだ。アネットがしたように口力をお姫様抱っこすることはドルドーニに禁じてある。

そしてこの宮には、下官のひとりさえいなくなった。

いるのはアネットとグリーゼ、そしてニルファイの三人だけだ。

「……ドルドーニは察している様子だったが……、なんにも言わなかった。グリムジョーも同じだ。だが俺は違う。すこし前にも尋ねたがもう一度訊こう。配役を変えるチャンスはこれで最後だ。心変わりはないか？」

アネットはすぐには答えない。眠る少女の肌を手になじませるように肩から首、そして顔を順に撫でていき、そして触り心地のいい髪へと流れていく。すべてが戻っている中で唯一セミロングのままにさせていた黒髪が、わずかなランプの灯りを星のように散らした。

「ア……ネット……ト」

寝言だろうか。ニルファイの口から、恋しそうに女の名で求められた。

くすりと笑ったアネットが言う。

「やつべー、このシチュで名前呼んでくれるってもう『俺の嫁宣言』と受け取ってオツケー？ いやいや、否定する言葉はゼツタイに認めないですし、これはもう二身合体せざるをえねー!!」

ガツ、とニルフィの服に手を掛けたアネットの腕を、ガツ、とグリーゼが万力のようなパワーで掴んだ。

しばらくギリギリと音を立てながら拮抗していた二人だが、アネットが鼻を鳴らして腕を引いたことで落ち着いた。

「あなたさえいなければ、今頃ニルフィはアタシ無しじゃ生きられないカラダになってたんですけどね」

「……ロクでもない未来だと判断する。だが俺が居なかったところで、お前は本当のところ主を汚すつもりなどハナから無かったかのよう^{あるじ}に思うんだが」

「それこそまさか」

おどけたように肩をすくめてみせたアネットが苦笑する。

「忘れられない思い出作り？ そんなトコよ」

「……………」

間違ったことは言っていない。本心が歪むことなど自分に限つてないと自覚している上に、今もこうしてブレた様子を見せないことが何よりの証拠であった。そしてこれから証明される。徹底的に邪魔となるモノを消した独壇場で、なにもかも。

舞台は整った。それならば最後まで成し遂げるつもりだ。

そうでなければ――報酬に釣り合わない。

「それと質問の答えだけど、アタシは変わるつもりなんてないわね」

「……………」

「大丈夫ですよ。しくじることなんて万が一にもありませんし、あなたは予定通り舞台上が上がってこようとするクズを一掃してくださいな。それくらい余裕でしょ？ でしょ？」

「……………」それが、お前の答えなのか」

「最良であっても最善でなくて結構。これはアタシの自己満足の塊で、マジパネエくらい^{あるじ}の覚悟の上よ」

難しい顔をするグリーゼだがそれ以上質問をすることもなく、無造作に雑誌をそばに投げる。

立ち上がった長身の男は背中に大剣を吊り下げるとドアのほうへと歩いていった。

「……無理はするな」

「不器用な気遣いどうもです。そうはできないって理解してるくせにね」

「……お前は」

「なに？」

「………いや、もうなにも言うつもりはない。余計な言葉だ」

「なによ、気になるんだけど」

アネットの耳に、ため息が聞こえた。呆れた、日常ではいつも耳にした、影の苦労人からのため息。

「……仮面は被り続けるものじゃない」

視線をグリーゼの背へと向ける。

しかし男の姿はもはや部屋には無く、アネットの視線だけが宙をさまよった。

「それくらい、言われなくなったらって解ってるわよ」

椅子の上で伸びをしたアネットがそうぼやき、眠る少女の顔を見つめる。

無垢で無邪気で、女のなかでもっとも大切だった従者と面影が重なる寝顔だった。

今しばらく時間はあるだろう。

薄暗闇のなかでアネットは静かに目を閉じた。

紅従者のむかしばなし

「ーむかしむかしのおはなしです。

ラス・フーチエス
虚夜宮というお城に、紅色のヤベエくらいに危険な女がやって来ました。彼女を表すのならば、天上天下唯我独尊、そんな言葉が似合うような孤高の暴君です。力が無いものが目を合わせただけでその命は気まぐれに灰にされること数知れず。仮にそれが強者であろうと変わらぬ末路を辿りました。

それは虚時代ホロウと変わらぬルーチンワーク。たとえ仮面が割れて傾国の美女としての容姿を手に入れようが、弱者は屠りほぶ、強者を潰す。心のどこかでつまらないと思う日常は続いていきます。

ですが、唯一の変化を得たといえるのであれば……、それこそ最初で最後であり、安物の劇場でありがちな話でありながら、暴君にとってはどうやく「幸福」を噛み締められるものでした。

ーむかしむかしのおはなしです。

これは、未来で従者となる暴君と、過去に従者であった少女のはなし。

まるで雛鳥のようにその少女はうしろを付いて回ってきた。

しかし女ーアネットにとって鬱陶しいことこの上なく、しかしピーピー鳴く声は、やはりこの時もしつこいほど自分の名を繰り返す。

「アネット様！ ちよつ、まってくださいアネット様！ 聴こえてますよね、無視とかよくないですよ？ ね？ ヘイツ、聴こえてますかアネットさーぼふあ!？」

「うるさい馬鹿」

この時は腰まである紅の長髪を払いながらアネットが振り返った。

少し離れた場所には、彼女の裏拳でぶつとばされた金髪の少女が涙目で転がっている。少女は小さな金髪をまさしく尻尾のように振りながらガバツと立ち上がった。

「ひ、ひどくないですか!? あなたの血は何味ですか!? アネット様

にしかぶたれたことないのに！」

「ならいいじゃないの。叩けばもつとマシになると常日頃から思ってるけど、もうこの際ぶっ壊れてしまってもかまわないわよ、この粗大ゴミ」

「そんなご無体な。しかも叩けば治るって、やっぱジュネレーションギャップですよーねー」

「どうしてやろうかしらコイツ」

ため息を吐きたい衝動をこらえ、アネットが少女を見据える。

そして己の唯一の従者の名を呼んだ。

「……ラティア」

「はいっ、なんですか」

ラティアは澄み切った笑顔で返事をする。

「アタシ言つたわよね、宮で大人しくしてろって。その空っぽの頭で理解できるよう何度も。なのに、ど・う・し・て、こんなトコまでアタシを追っかけにきたワケ？」

「それはもう、わたしがアネット様の従者だからですよ。それなのにこの生活スタートからの命令が犬にするように“待て”だけなんて……。少しは従者っぽいことしたいんですー！」

「で、本音は何よ」

「テヘツ、宮でぐうたら昼寝だけつても飽きてー！ぼっふう!?!」

蹴りで吹き飛んでいったラティアを心配する素振りすらみせず、アネットは靴音を響かせながら先に進んでいく。

自分が適当に選んだ従者はバカだった。二言で表すならバカでアホだ。

しかもクソ弱い。ために犬のクツカプーロと戦わせてみたが、アネットが一瞬目を離れた隙に敗北を喫しており、うつぶせに倒れてロボロなラティアの頭の上で子犬が勝利の雄叫びを上げる図が出来上がった。むしろ頭でさえ劣ってるのではないかと思った。

だというのに、ラティア本人の性格は歪みがないくらいに非常にポジティブ。

得体の知れない眩しいもののように思えて、ひねくれまくっていた

アネットにとって何よりその性格こそが苦手だったのだ。

「痛たたた……。いきなり蹴るなんてドイヒーですよもう」

「殺すつもりでやったんだけどしぶといわね」

「パワハラ、パワハラですよ。あのおしゃれ隊長見た時から予感してましたけどブラツクすぎますもんね。でもわたしは屈しない！ そんなパワフル・ハラスメントに健気に抗うのが真の従者というものでー」

気が極端に短い部類であるアネットはそのよくまわる舌に案の定キレた。

右手でラティアの首を掴んで強引に引き寄せる。苛立たしさを隠すことなく犬歯をむき出しにして、至近距離から獰猛に威嚇した。

「いい？ アタシがアンタを選んだのはただの気まぐれ。これから殺そうが陵辱しようが、それすらもアタシの気まぐれになるってことを忘れない方がいいわよ。解ったのなら、その足りない頭でよく考えろ」

苦しげに顔を歪ますラティアがギブアップとでもいうように主人の腕をぺちぺち叩いた。解放してやるとその場に崩れ落ちて少女がむせこむ。その姿を見て多少溜飲は下がった。最後に一瞥し、アネットが再び背を向けて歩き始めた。

暴君の歩みを遮る愚者などいないはずだが、

「……なんで付いてくるのよ」

そのうしろにはラティアが当たり前のように追従している。

従者は苦笑いしながら言った。

「いや、そのう、わたしってアネット様の従者ですし。戦いもからつきしで、多少響転ソニードが使えるくらいです。それなら、危なっかしい主人を止められるブレーキ役になればなあって」

「それって侮辱かしら？ アタシのどこが危なっかしいのよ」

「さつきだって、グリムジョーと殴り合ってたとか……。そんなの、危ないですよ」

「あんなカスにやられたりなんかしないわ」

アネットの無然とした物言いに、ラティアが早口でまくしたてる。

「でも、無鉄砲すぎるんです！ わたしはこれでもあなたより前からココに居ました。自分は大丈夫だ。俺強いから。そう言っただけで死に行った仲間のことは多く見えています」

自分はそんな安っぽい奴らとは違う。ハッキリ言っただけでやろうとラティアの顔を見やり、自然と視線を少し下げた。少女の首にはくつきりと締めた跡が残っている。当たり前前だ、息をさせないくらい強くやったから。

それなのに気にした様子もなくラティアはアネットの心配ばかりしてくる。

しかも笑顔で。

そこだけが、理解できなかった。

空白に被せるようにしてラティアが言う。

「前に、仲の良かったヒトが死んでるんです。わたしはそのヒトが死ぬとは思ってませんでした。それくらい強かったのに、でも死んじゃって」

情けなさそうに少女が眉を下げた。しかし声がブレることはない。

「わたしは自分の命なんて惜しくはありません。そりゃあ、痛いのは嫌ですし、怪我はしたくないですけど。それでも盾にされることに文句も言いません。だけどせめて、せめてあなたを『止める』ための選択肢を言う従者として置かせてください。……お願いですから」

ここでラティアを殺すのは容易い。言葉が過ぎると、炎を通路一杯に叩き込めば、いくら運がいいだけの少女でもすぐさま灰となる。

けれどこの純粹という物質だけで創られたような塊のか弱い生物を消した時、アネットは理由も知らぬ敗北感を得ることになるだろう。

そして他の従属官フラシオンを見つけるのが面倒とか、丁度いいサンドバツクが消えるだとか、そんな理由がアネットの頭のなかで渦巻き始めた時点で、自分はこの少女をまだ殺す気になっていないと悟る。

ーったく、醒めたわね。

本心とは違う言葉で毒づきながら、アネットが小さく吐き捨てた。

「……勝手にしろ」

顔を輝かせた少女を直視することなくアネットは歩き始める。

この時からだっただろう。

孤高の暴君の背を、なんの力もないはずの従者が追う姿が見られるようになったのは。

—————

「見てくださいアネット様！ どうです、似合いますか。無断でアネット様の服を拝借して着てみました！ さすがにあなたほどのないすばでいではないのでちよいアレですけど、これでペアルックの仲いい主従に見えませんかね!？」

「脱げ」

目の前に現れたアホの子にアネットが即答した。

「ぬ、脱げだなんて、こんな公共の場所で……」

「顔赤らめるな。だったら宮に戻って着替えて来い。そうでなくても、隣に立って欲しくないってのに」

ペアルックという言葉に天啓でも受けたような眼帯優男がどこかに走り去っていく。それ以外には誰もいないが、こんな場面を他の誰かに見られたら本当にペアルックだと思われるだろう。そうなれば、ソイツを殺すしかない。

しかしラティアは最近、こういったことを繰り返す。

なんとかしてひねくれたアネットとコミュニケーションを取りたいのだろう。それを知っているからこそ、アネットは素っ気ない態度をとり続けている。

仲良しこよしなど必要ない。

主人と道具。それだけの関係が築ければいいとアネットは考えていた。

それなのに、時折この天下の往来を闊歩かっぽするトラブルメーカーが今度は何にをするのかと思うときがある。面倒だと感じながら、この退屈に刺激を与えてくれる存在として見ていた。

だが意地でも認めたくはない。——ラティアが隣にいないときの

退屈はいつもより重いなど。

「ねーねーアネット様、聞いてますか？」

「ん、そうね。たしかアタシがアンタをぶっ飛ばしてもいいって話だったかしら。でも困るわね。頭叩いて今さらアンタの頭が正常になるって」

「いやそんな物騒なヤツじゃないですよ!! ただほら、前にも言いましてけどわたし今日、ネリエル様に誘われて夜ご飯を一緒にするんです。それを先に報告しておこうかなって思ってた」

「……………」

それを聞いて、言葉にすることのできないなぜか面白くない感情が胸に浮かんだ。

アネットが柳眉をひそめる。

「……………行かなくてもいいわよ」

「えー、どうしてですか。だいじょうぶですよ、ネリエル様は人格者ですし別に毒入れられたりなんてされません。それにドンドチャツカをつくる料理はおいしいんですよ」

「主人はアタシでしょ。それにプリメーラ・バラシオ第1宮でだって食べられるし」

「けど、前に行った時は勝手にしろって二つ返事でー」

そこではたと気づいたようにラティアが目を見開いた。それからラティアのくせに訳知り顔でにんまりと笑い、どことなく嬉しそうな顔をして主人の顔を見上げる。

「もしかして、拗すねてるんですか？」

「……………ッ」

アネットは目元がヒクつくのを自覚した。

「……………!」

言葉が喉の奥から飛び出そうとするのに突っかかり、何度か無意味に口を開閉させるだけで終わってしまう。それを繰り返したあとにゆっくりと深呼吸し、やや上ずった声で答えてやった。

「ーそんなんじゃないわよこの自信過剰従者がッ!!」

グズグズと涙する少女がアネットの豊かな胸に飛び込んできた。

「あーもう、泣くな馬鹿。服が汚れるでしようが」

「だって、だってえ」

十刃エスパーダの席を賭けた戦いのあとに残ったのは、大部分が灰になった闘技場と、これもまた火葬されたようなどこかに転がっている相手の骨だけ。

結果を見ればアネットの圧勝だ。終わった時はロクな怪我もない姿で平然としている。だがしかし、傲慢と慢心のせいで手痛い反撃をされたことも事実で、それによってアネットが倒されてしまったと勘違いしたラティアが子供のように泣いてしまった。心配してしつこいくらいに体を触って無事を確かめてくる。

それが歯がゆいような、こそばゆいような、持て余すような感覚。ひねくれ者には毒のように思えてしまう。

いまだにえぐえぐと抱きついてくるラティアを引き剥がすと、アネットはフンと鼻を鳴らした。

「惜しかったわね」

「え？」

「アタシが死んでればアンタは晴れてまた自由の身でしょ。これで暴力振るわれたりゴマ擦らなくてもよくなる生活に逆戻りできたはずだけど……。だから、残念ね」

「……………」

本当は言う必要もなかった。言いたくもなかった。ラティアを突き放すために、無意識のうちに口にした言葉だ。

しばらく無言のまま押し黙ったままのラティアだが、ついに顔を上げると。

感情豊かな彼女には似合わない、初めて見る能面のような無表情だった。

「それ、本気で言ってるんですか？ ブラックジョークとか、ドツキリとかじゃなくて、本ガチ気で？」

「……そ、そりやあそうよ。死んでも死にきれないカラダだけど、アタシは生きていないほうがいい。アンタだって、本心じゃそう思ってるんでしょ」

引くに引けなくなってしまうアネットが返す。

しかしラティアはさつきまでも涙がどこへやら、ひどく冷めた表情をして頷きながら『そうなんですか、そう思ってるんですか、へえ』と繰り返しており、表面こそ無然としながらもアネットは内心であたふたと慌て始めた。

本意の言葉ではなかったと撤回したい。すぐに謝罪の言葉を吐きたかった。

しかし、ひねくれまくった性格と見栄以外の何物でもないプライドが喉の奥で邪魔をして、声らしい声を上げられずにいる。

ウーッと唸ったラティアが額をぶつけてきた。鎖骨にぶち当たったたいして痛くない頭突きをアネットは甘んじて受ける。そしてラティアは軽い体重をもたれかからせてきた。

「そんなこと、言わないでください。自分は死んでもいいとか、不謹慎すぎますよ」

「……皮肉で言ったつもりだったんだけど。アンタを侮辱する言葉も聞こえなかったのかしら？　でもどうせ、アタシが本当に死んだところで喜ぶ奴しかいないわ」

弱々しく駄々をこねるように少女が首を振る。

「わたしは悲しいですよ」

「まさか」

「泣きます。いいですか、天下の往来でいい歳した女の子が人目もはばからず大泣きするんですよ。そんなの見たいと思えますか？」

「嫌ね」

「じゃあ死なないでください」

ラティアは頑なに、主人の死を拒む。

理解できない。

理解したくない。

なぜこうまでしてラティアは自分勝手なアネットに死なないで欲

しいと願えるのだろう。嘘を吐けるほど器用ではない少女は今もまた、放すものかとアネットを抱き続けた。見返りも何もない純粹な好意。それがアネットにとって何よりも苦痛だった。

「……アタシは、アンタを殺すかもしれない」

「しませんよ」

「するわよ」

「じゃあどうして、そんな苦しそうな顔をするんですか？」

言葉に詰まる。一瞬の空白。噛み締めるようにしてラティアが言った。

「わたしはあなたの傍にいても消えませんか。だからー怖がらなくてもいいんですよ」

アネットがわざわざ目に見えるように暴力を振るうのは、他人を自分に近づけないため。

彼女の炎は無差別になにもかも灰塵かいじんに変える。そこに強弱など関係ない。わずかでも好ましいと思っただ相手だろうが、ふとした拍子だけで殺してしまいかねない。だからアネットは他者と触れ合おうとしなかった。少しでも好意を持った相手を自分のチカラで消してしまわないように。

「怖がつてなんか、ないわよ」

「ええ、解つてます」

「……アンタがそんな言葉を言ってくれるのは、前に言つてた仲のよかつた相手にアタシを重ねてるから？」

「前まではそうでした。でも何時からか、なんてことは解りませんが、わたしはアネット様あネットさまをアネット様あネットさまとして見てます。……それくらい、知っていたでしょう？」

弱くなつてしまつたと、アネットは思った。

ーまあ、でも。これでいいか。

ようやく懂れていた弱さを手に入れることができたから。

—————

巨大なソファの上に二人はゆつたりと腰掛けている。アネットは身をラティアにもたれかからせ、無防備に甘えるようにして従者の肩に頭を乗せていた。たまにラティアが主人の髪を手櫛で梳き、それを受け入れて気持ちよさそうにアネットが目を細める。

「ふふ、そんなこともあったわねえ」

「ですねー」

ふと思いついた昔話で談笑しながらのんびりとした時間が過ぎていった。

財宝や美食といったものなんかより、アネットにとってはこういった時間こそが至宝そのものである。それを何かに代えるつもりはない。どれだけのモノが積まれようが、この一秒の「幸福」にさえ釣り合わないだろうから。

密着している側の手を重ねて指を絡ませる。それを相手もかすかに笑みを漏らしながら応え、互いの温かさで手を馴染ませた。

「思い返してみればいい思い出ですよ」

「アタシにとつては忘れたいの間違ひなんだけど。あんな生産的じゃない時間を過ごしてたと思うと、今のほうが断然いいわね」

「わたしと過ごしてた時間も含めて？」

「……まあ、悪くはなかったかも」

満ち足りた表情でアネットは過去を懐かしむ。

このまま腐って腐って爛れていくのもいいかもしれない。いや、もうこの甘さを味わった時点でそれ以外の選択なんてしたくない。この幸せを守るためなら、むかしの自分だろうが殺せる。

いまは温もりがあった。かけがえなの無い存在があった。

自分を受け入れてくれる、少女がいた。

「最後の命令、してもいいかしら」

己が従者として接する最後の会話。そしてこれからは対等に、いつまでも愛し合うために必要な言葉。

「ずっと、ずっと、この時間を終わらせないために………一緒にいてほしい」

ラティアは目を見開き、なにを言われたか理解すると、すぐに満面

の笑みで答えた。

「はい、いつまでもー」

幸せが似合わない者などこの世にはいない。

だから。

コレはなにかの間違いだ。

ただ嫌にリアリティがあるだけの悪意に染め上げられた夢のはずだ。

紅色の女が泣いていた。咽び泣き、絶叫し、親と離れ離れになった子供のように心の拠り所を探す。

「ーラティア!! どう? どこにいるの? 返事、してよ。ねえッ!
ラティア! ラティア!!」

けれど想い人は見つからない。消えた。消えてしまった。女が宝のように抱きかかえた、右の細腕だけを残して。

アネットは狂いそうだった。だが狂えるならばどれだけよかっただろう。なまじ破面アランカルとして強固な精神を得てしまった彼女には、心を壊して逃げるといふ手段すら許されなかった。

だから心の傷を少しでも吐き出そうと叫ぶ。

喉が裂けて血が溢れた。どころか、心の痛みはわずかたりとも収まらない。むしろさらに苦しくなっていく。

これが弱さの代償だった。

あっけなく壊れてしまった幸せのあとに残されたのは、壊れかけの小さな存在。

「あ、……ああ………あ」

よろよろとアネットが顔を上げると見覚えのある他の十刃エスパーダがいる。戦っており、こちらに目も向けていない。だがアネットは悟った。アレらが、壊したのだと。取るにも足らないゴミのくせに、領分さえ自覚できないのだと。

一瞬にして頭が冷めて醒めて覚めた。

百では足りず千にも万にも届く呪詛が己の内側で暴れまわる。

それを舌に乗せ、斬魄刀である鉄扇を砕かんばかりの力を込めて振

るう。

「――穢^{けが}せ」

そこからの記憶は途切れ、気づけば灰だけで彩られた雪国のような世界にアネットはぽつりと立ち尽くしていた。

手の温もりは、いつの間にか消えていた。

――むかしむかしおはなしです。

暴君は初めての涙は、従者のために流されました。けれどその涙はありきたりな大団円のハッピーエンド、あるいは飽食された王道物語のように奇跡を呼ぶことはありません。どれだけ悲しかろうと、暴君にとつて価値のないものでした。

この時暴君は、ようやく弱さなど必要の無かったモノだと悟ります。

「幸福」が消えて悲しいならば、つくらなければいいのだと気づきます。

――むかしむかしのおはなしです。

これは、未来で従者となる暴君と、過去に従者であった少女のはなし。

――

暗闇の中でアネットが目を見開いた。

いまは従者である女が幼い主人を見下ろし、ため息。

手のひらで顔を覆い天井を見上げた。

焦がれるような色合いのせいで燃えているかのような双眸で、指の間からどこか遠くを見つめる。

顔を覆っていた手を宙へと伸ばし、そしてなにかを取ろうと握る動作をして、空を切った。

「ローラテイヤ」

ささやき声が闇に消える。

瓦解する現実

もう何度も繰り返したように、目を開くと見慣れたベッドの天蓋が視界に広がっている。

起き上がったニルフィは不思議そうに手を握ったり開いたりをして体の調子を確かめた。オールグリーン。白哉の捨て身の攻撃であればどままでに傷つけられた身体が、今ではいつも以上に快調である。

「オリヒメさん、かな……？」

ほとんど本能的に探査回路^{ベスキス}を広げ、寝室にいない従者ふたりの霊圧を探る。

しかし、

「……居ない？」

アネットも、グリーゼも、ましてやドルドーニや下官ひとりさえ宮から消えてしまっていた。

不安が心を支配する。

まさかもう戦いが終わったのかと時間を確かめるが、自分が倒れたであろう時からあまり変わっていないことを考えると、あまり現実的ではない。下官がいなのは疑問だがアネットたちは出かけているのだろう。

ベッドから飛び降りたところでニルフィはあることに気づいた。

「あれ、髪が短くなってる」

肩より少し長い程度のセミロング。切り揃えられてはいるが、あの腰まである綺麗な長髪はコンプレックスだらけの自分の容姿で一番気に入っていただけに、惜しい気持ちを隠せない。

それに惜しいというならば。

アールニー口が死んでしまった。

それが何よりも悲しい。胸がきゆうと締め、痛みを抑えるようにして手を添えた。

舌舐めずりしたニルフィは、そばに畳まれてあった自分の死覇装に手を掛けて着替え始める。患者服のような薄い衣類を脱ぎ捨てると体の至るところに包帯が巻かれてあった。それらはずし、着慣れた

パーカーのような死覇装を着込んで服装を整える。

「……………」

感じるのは、少しばかりの違和感。

慣れた長髪が無いとむずむずとする。それを嫌い、部屋を探して見つけた赤いゴムでいっそのことポニーテールにして髪をまとめる。

ほどなくしてニルフィは宮を飛び出した。

大雑把に霊圧を探索すると、やはりまだ多くの破アランカル面たちが健在であることが解った。

お隣さんであるザエルアポロのものは感じ取れないが、それはいつものことだ。宮に籠もっているはずの彼がそうそうやられることはないと知っているニルフィは、ようやく目当ての霊圧を見つけたことに関心を移した。

「……でも、かなり離れてるっていうか……外なのかな？」

なぜか、アネットとグリーゼの霊圧は虚夜宮ラス・ノーチエスの外壁付近から感じ取れた。

行けばわかるだろう。そう思い直したニルフィが、すぐさま神速と化して目的の場所を目指した。

歩けば数日もの距離を飛んでいると、ほどなくして響ソニード転を止める。

もう壁は目の前まで来ており首を巡らしても端は見えなかった。

「こんなトコで何してるの、グリーゼ」

「……それより、その様子だと全快したようだな」

「うん、おかげさまでね。オリヒメさんを連れてきてくれたのってキミたちなんですよ？ あのままじゃ死んでたかもしれないし、ありがとうね」

剣をかたわらに、壁に背を預けていたグリーゼが淡々と言った。

「……それはアネットに言ってやれ。あの人間を連れてきたのはあいつだからな」

「うん！ でも、アネットってどこに居るの？ 宮には下官のみんなも誰も居なかったし、心配したんだよ。オジさんもどっかに出てってるし、霊圧の残滓ざんしだけだけどロカさんとか、それにグリムジョーもいたと思っただけだよ」

「……そうか」

「私が寝てた間になにか大きなコトってあったかな。ほら、その、誰かが死んじゃった、とか」

不安で眉を寄せるニルファイはグリーゼの言葉を待つ。

「……大丈夫だ。侵入者に倒されたと言えるのは、まだアールローニールと主^{あるし}だけだ」

「そっか」

ニルファイはほつととしてため息を吐いた。

もう、仲間が死ぬなんてこりごりだ。表面こそこうして明るく振舞っているニルファイだが、その内面は崩れ落ちてしまいそうなほど脆くなってしまうていた。

今にも倒れ込んでしまいたいほど頭痛がひどい。

仲間が居なくなった。その事実だけで、切り裂かれたことよりもずっと痛みがあった。

「それで、さ。アネットはどこにいるの？」

わがままだと自覚している。しかしすぐにでも宮に戻って休みたかったし、そのためには二人にそばにいてもらわないと心が休まらないだろう。

「……あいつは『外』だ」

グリーゼが壁を叩くと隣に扉が浮き上がって現れた。

首でその奥を促しながら、従者の男は目を伏せる。

「……俺はここでやることがある。すまないが、会いたいというのならひとりで行かせることになるが」

「ううん。なら、すぐにアネットのこと連れてくるね。そうしたら、みんな帰ろう？」

「……………ああ、そうだな」

大きな手がニルファイの頭を不器用にそつと撫でた。

いくらか嬉しそうな顔をしたニルファイは、外へと続く道を駆けていく。

何も考えず、すべてを信じて、ずつとずつと。

主人の消えた第 8 宮オクターバ・バラシオに響くふたつの足音があった。

白い肌に面妖な黒い化粧をした異相。そして白い羽織をなびかせるのは、護廷十三隊十二番隊隊長である涅くろつちマユリである。斜めうしろを歩かせている副官の涅くろつちネムを引き連れ、彼は虚ウエコムンド圏の科学者の城を物色中だった。

ニルファイの眠っている間に残りの死神たちの隊長は侵入している。

あとは自由行動となり、他の隊長格が援軍として活動している中、マユリは自分の科学者としての好奇心に従って動いていた。

「フム、この宮の主人はなんとも不用心だね。防衛機能を自分がいること前提に創ってあるとは。まったく、なんのための自立防衛機能なのやら。こんなのじゃネズミ一匹さえ逃してしまいそうだよ」

右手中指の不自然に長い爪を杖のように振りながらマユリは呆れのため息を吐く。

二度。

最初は見ただこともない宮の主人にであり、次には自分より先行していった隊長格の青年に対してだ。

「まあ、さほど時間を置いてやってきたつもりは無いが……。まさかもう倒されているとは想定外だ。あの眼鏡が戦った女のレベル程度なら大丈夫だと思っていたんだがネ。アレが不甲斐ないのか……。噂の破面アラシカルの童子の仕業か」

淡々と独り言をつぶやきながらマユリは廊下を進んでいく。

まるでメトロームのように響いていた靴音が止まったのはそれから少しばかり時間を置いてからだ。

「ネム、この壁を破壊しろ」

「はい、マユリ様」

なんの変哲もない壁を壊せという命令に疑問を示すことなく、細身の女とは思えない腕力でネムが壁を殴り壊した。この瞬間、今日の虚夜宮ラス・ノーチエスの被害金額に日本円で表すと百数十万円が追加される。

穿たれた大穴を覗き込むマユリは肩を落とした。

「やれやれ、ここもハズレか。とつととそれらしい研究材料のある部屋が出てきてもいいハズだがネ。……ん？」

見たところ、いくつもの資料が積み重なっているだけの部屋にマユリがわずかな関心を示す。

部屋へと足を踏み入れたマユリは手近な一枚の写真を取り上げた。

黒髪の綺麗な少女がローアングルで写っていた。画質も良く、これが現世での先遣隊を追い詰めた破面アランカルなのだとすぐに理解する。なぜかバニーガール風の衣装であつたり、写真のうしろにはプレミアム印があつたりと色々とツツコミどころがあるが、それ以外にもマユリの興味を引くものが残っていた。

「成程。身内にも研究対象として見られていたようだネ」

これら膨大な資料すべてに「ニルフィネス・リーセグリンガー」という少女に関する情報が記されてある。

少しばかりマユリも興味を持っていただけに、こうしてまとめられているのならば後での資料作成が楽になるだろう。そう思い、多少の溜飲は下がった。

「なにをしているんだネ。毛色は違うが、これらは探していたモノに近い紙束だヨ。さっさとめぼしいものがないか探せ！」

「はい、マユリ様」

理不尽極まりない前触れもない要求にも、やはりネムは淑々と従う。

そしてマユリ自身も物色に加わって漁り始めた。

近い部分には趣味程度に集められたらしい写真やら団扇うちわやらしか無かったが、奥へと進んでいくにつれ、専門用語の羅列が綴つづられたものが増えていった。当然マユリの興味もそちらへと向かい、動かす手も自然と早くなる。

「フム？…これは……」

無造作にそのうちのひとつを手取る。

それには、少女の過去を知る破面アランカルたちからの情報がまとめられていた。一枚一枚めくっていくたびに科学者としての笑みがマユリの口をニンマリと吊り上げた。さらに横にあつた、少女の特性について

簡易的にまとめられていたものに目を走らせていく。

少女がただ強いだけの破面アランカルではない。

この時、死神のマッドサイエンティストの認識が変わった瞬間である。

「どうやら藍染はオモシロイものを探し当てたようじゃないかネ」

そうしてマユリはいくつかの資料を選ぶと懐に仕舞い込んだ。

「おい、ネム」

「いかがなさいましたか」

「いかがしたのはお前のほうだヨ！」

紙の山の影から現れたネムは、なぜかカラフルな半被はっぴを羽織りながら手にメガホンを持ち、『幼女LOVE』と描かれた鉢巻はちまきを額に巻いていた。そしてそれに関連してそうな缶バッチなどがキラキラと眩しい。

「いえ、めぼしいものと言われましたので目に付いたモノを選びました。資料などはマユリ様が直々に選ばれると思います……。それと、半被はっぴの裏側に名前を縫う場所があるのですが、恐れながら縫っていただけないでしょうか」

「私は忙しいんだ。まったく、少し時間さえあれば今度こそ『メス豚』とでも縫ってやるものを……。さっさとそれを置いて私の選んだモノを台車に詰め込みたまえ！」

「……………」

「解ったからその小道具も一緒に台車に入れて、さっさと動くことだね！」

欠陥品になってきたのかとぼやくマユリは、そそくさと動き始めたネムから視線をはずしてもう一度資料の束に目を落とす。

「やれやれ、いいように扱われたあとは壊れに壊れ、いまだに現実から逃げられてないとはネ。私でも同情を禁じえないヨ」

そのつぶやきは、誰にも聞かれることなく掻き消えた。

—————

晴天を描く天蓋から抜け出せば、外となる砂漠は常闇の世界を彼方まで広げている。

おぼつかない足取りで白砂を踏みしめたニルフィは、きよろきよろとあてもなく周囲を見回した。その顔は迷子の子供のように不安に染まっている。頭痛のせいで冷や汗は収まることなく、腹がよじれそうな吐き気もあり、今にも泣き出しそうなほど崩れていた。

ラス・ノーチエス 虚夜宮からはかなり離れた場所にまで来ており、地下まで広がっている通路の範囲をも超えそうだった。

「どこにいるの……？ アネット……」

うわ言のように繰り返しながら少女は進む。

ベスキス 探查回路の情報通りなら、こちら辺に必ずいるはずなのだ。

どうしてこんな場所にアネットがいるのかとか、まだ虚夜宮での戦いは終わっていないとか、そんな疑問はニルフィの頭から消えていた。

いまはただアネットに会いたい。自分が望む分だけいくらでも愛してくれる女の肌が恋しい。

そうして彷徨っていると、気配を感じた方向に首を向ける。

「アネット？」

「ほかの誰かに見えたのかしら？ もちろん、アタシよ」

人を食ったような笑みを浮かべている従者の女を見てニルフィが安堵の息を吐いた。

「こんなトコでなにしてたの」

「ちよつと、ね。でもあなたはもう動いて大丈夫なの？ 精神的にも疲れてるんだから、まだ少し宮で休んでたほうがよかったですよ」

「あはは……。ひとりでいると、すごく不安になっちゃってさ。キミに会えたからそんなのは吹き飛んじゃったけどね」

「……そう」

今度は困ったように笑うアネットがニルフィのそばまでやってきた。

アネットは膝をつくとき、右手でニルフィの頬にそっと触れる。夜風で冷たくなった肌が温かくなった気がした。

「髪、まとめたのね」

「うん」

似合ってるかどうかわからない。けれどアネットの表情を見る限り、悪くはないのだろうと思った。

アネットは指を黒髪に絡ませるようにして撫でると、ゆっくり下へと降りて行き、いつもよりも鮮明になったうなじから焦らすように滑らせる。その一動作だけでニルフィの喉の奥から嬌声がこぼれた。さらに白魚のような指は鎖骨へと下り、ねぶるようにしてなぞっていった。

少女の口から熱を孕んだ切なげな吐息が漏れ出す。

「フフツ、一回痛い目を見ても堪え性がないのは変わりないみたいですね」

「あう……」

羞恥で顔を赤くしながらニルフィがアネットに抱きついた。

それを面白がったアネットが再び手を動かそうとしたが、抱きしめた小さな少女が震えていることに気づいたのか、その背をぽんぽんと優しく叩く。

ようやく少女のカラダを縛っていた緊張がほぐれ、押さえつけていた内心を吐露する。

「ー私、怖かったんだ」

嫌に鮮明な夢を見ていた。見たこともない虚^{ホロウ}たちが延々と死んでいく夢だ。それを見ているうちに、ついには今の仲間たちの死体が現れたことでパニックに陥りそうだった。

「また誰かが死んだんじゃないかって、そんな嫌な妄想して。目が覚めたとき私のそばに誰も居なくなってる。それに気づいちちゃったとき、ベッドの上で死にたくなっただよ……？」 寂しくって、寒くて、気が狂っちゃうかと思った」

もう、この温もりを放したくない。

いつまでも、いつまでも、いつまでも、いつまでも。

ニルフィは従者を抱きしめる腕にさらに力を込めた。安心によつてだろう。今まで自分を苛んでいた頭痛などが波のように引いてい

く。

申し訳なさそうにアネットがニルフィの頭を撫でた。

「ごめんなさいね。あなたを一人にするつもりじゃなかったんだけど」

「ちがう、ちがうの。私はキミたちが一緒にいてくれるならそれだけで満足だから。謝ったりなんか、しないでよ。ずっと、ずっとずっと、キミが大好きだから」

顔を上げる。紅玉ルビーのような双眸と目が合った。

アネットの目が和らぎ、ニルフィの熱っぽい視線に気付いたのだろう、顔を寄せてくれる。

そうしてニルフィはカラダのすべてを目の前の女に預けようとし――。

殺気。

本能が世界を動かす。理性が認識できるようになれば、自分はさっきまでいた場所から十メートルも響転ソニックで離れていた。あまりの勢いを殺すために右腕を砂の中に突っ込み、数メートルもの溝みぞを削っていた。

それだけ、なり振り構わない強引な回避行動を無意識に取っている。

「ーッ！ーッ!?!」

知らずのうちに荒くなる息。

それ以上に、疑問なのが。

ニルフィはおそろおそろ指で首元に触れた。

傷のついた細首には本来ならば赤い血が付着しているはずだが、

「あらら、避けられちゃいましたね」

少女の指についていた薄皮だったものの「灰」がボロりと落ちた。

「……どうして?」

少女の視線の先では、冷めた表情をしたアネットが斬魄刀である鉄扇を手に、また自分を見返している光景があった。ポタリ、ポタリ。

鉄扇の隠し刃の先端から赤い血が落ちていた。
砂漠の夜風よりも寒々しい目つきがニルフィの胸をえぐる。

「……………」

「ククククン、こつちだ！ こつちからネルの匂いがするぞ！」

「君が匂いとか言うとな犯罪臭がするよ」

ペッシェがかさかさに変態的な動きで進んでいくのを雨竜が呆れ顔で追っていた、

この虚もどきホロウが仲間であるネルの匂い、もとい霊圧を発見したこと
でだいたいの目的地は見えてきたところだ。こうして彼らは今もな
お壁沿いに移動中である。

「しかし我々は幸運だぞ！ ここまで来てまだ追っ手のひとりさえ見
ていないのだからな」

「幸運、と言えればね」

「湿気た顔とは縁起が悪いぞ」

「いや、いくらなんでも静かすぎる。最後に破アランカル面同士の大きい大きな衝
突があつてから、向こうの動きがまったく感じられないんだ」

嵐の前の静けさ。そういった不穏な言葉が脳裏を掠め、慌てて頭を
振る。

「いまは静かならそれに越したことはない。急いでネルちゃんを回収
して、一護たちと合流しよう。それに僕の予想が正しいなら……」

「なんだ？ 溜めをつくらずに早く話——うおおおおおおお
!?!」

催促しかけたペッシェが突然、空中に突き上げられた。

そしてモアイ像のごとく砂から突き出た巨大な顔を見て雨竜が声
を上げた。

「君は……ドンドチャツカか!?!」

「ぎゃああああ！ 知らない眼鏡がオラの名前を知ってるでヤンス〜
！ ストーカーがいるでヤンス〜!!」

「いや、会ってるだろ!?! 石田雨竜だ!」

「う、うん？ た、たしかに知ってるでヤンス！ 心細かったでヤンスよ〜」

砂から這い上がったドンドチャツカが仮面の目の穴から涙を流しながら雨竜に飛びかかる。

それを慌てて回避した雨竜は、抗議の声を無視しながら、いまだに涙を流すドンドチャツカに訊いた。

「君はだれかと一緒に行動していたんじゃないのか？」

「恋次が、恋次が倒されてしまったでヤンス！ そ、それでアテもなく逃げてたでヤンスが、ペツシエの霊圧を感じる前に別の死神と会ったんでヤンス。あのオバ……ウオツホン、お姉さんの死神に預けたでヤンス」

「死神に会ってよく殺されなかったな」

「その人は血を止めるためにやって来たと言ってたでヤンス。オラのかすり傷も治してくれたんでヤンスよ。……………おっと」

ドンドチャツカが巨大な口を開き、そこから高校生とは思えない巨軀の青年を吐き出した。

「茶渡君！ 君も一緒に行動してたのか？」

「ム、石田か。一緒に行動していたというよりは、卯ノ花隊長に傷を癒してもらっている時に、偶然出会っただけだ」

悔やむように茶渡は頭を力なく振る。

「アランカル破面……ブリバロン・エスパーダ十刃落ちと戦ったが、ギリギリ引き分けに持ち込んだというのが正しい。俺の力不足だ」

「……………いや、僕も同じようなものさ。完全に決着はつけてないよ」

思えば、ウエコムンド虚圏に侵入して最初に交戦したアランカル破面たちとの戦いも予想以上に手間取った。アイスリンガーとデモウラという不完全な人型であった彼らだが、力量不足をもともせず食いついてきた。

ー必要以上に戦うのは避けたほうがよさそうだね。

そう結論付け、騒いでいるペツシエたちをよそに茶渡と情報を交換する。

聞けば、その女の隊長は『四』の番号が刻まれた羽織を着ていたらしい。雨竜の記憶が正しければ、それは護廷十三隊でも回復役の死神

が集う部隊だ。そしてその隊長が来ているとなれば、ほかの隊の隊長格も来ている可能性もある。

ここで最善の行動はその隊長格の誰かと合流することだ。チルツチ以上の破アランカル面が出てくれば今度こそ全滅の危険性もある。ならば、態勢を立て直してから出直したほうがいいだろう。

ーけど、この二人が素直に頷くはずがないか。

雨竜の視線の先では、復活したペツシエがリアクションを取る間もなくふっ飛ばされたことをドンドチャツカに抗議している光景があった。たとえ最善だと説明したところで、目と鼻の先にいるネルを見捨てるはずもないだろう。

それを口にしても、

「当たり前だ！ ネルを、妹を守らずしてなにが兄か!!」

「それでヤンス。オラたちは『熱砂の怪力四兄弟』。いつでもどこでも一連結託でなければいけないでヤンス!」

「な、なにを兄者!? 我々の総称は『グレート・デザート・ブラザーズ＋』に決まったではないかッ」

「それはペツシエが勝手に思ってるだけでヤンスよ」

「なにを、もとはと言えば兄者が……」

「いや、ペツシエが……」

「まさか……」

「イヤイヤ……」

「ーさっさと茶番は終わらせてくれないかい?」

「すみませんでした」

ふたりの間に矢を突き立てた雨竜が強制的に口を閉ざさせる。

「それに、ネルちゃんを追うのは僕も賛成だ。ここまで来ているってことは彼女も独自に移動しているんだろう。ここを離れたら、この広大な城で次にいつ会えるか解ったもんじゃない」

「う、うむ。たしかにその通りだ」

「だからすぐに先に進もう。こうして話しているうちにも距離が開いてしまうかもしれない」

おとなしく頷く虚ホロウもどきたちも異論はない。

「茶渡君も、どうかね」

「異論はない」

目的がようやくまとまったところで、四人は声を掛け合うこともなく動き出そうとする。

だが、

「ん？」

誰が発したのか定かでもない間の抜けた声。しかしそれこそが、全員の内心を代弁していた。

ペツシエが困惑気味に足元を指差す。

「なあ、雨竜よ。さつきまで、ここに線などはなかったはずだ……」

「……ああ、そうだね」

彼らが踏み込もうとした一步先に「異常」がつくられている。

簡単に言えば、線が引かれていた。なにかしらの塗料が塗られているわけではなく、砂が割れてできた物理的な境界だ。線は砂だけに留まらずに壁にも刻まれており、視線を上げててもその終わりが見えないほどだった。

音もなく消えた、否、斬られた物体の成れの果て。

空気の変化を雨竜は感じ取った。

そして次の瞬間には、自分も含めて全員が膝を突いていることに気が付く。空気の重さのせいでは知らずのうちにならなっていた。

声が、上から投げかけられる。

「……ここからは通行止めだ。引き返したほうが賢明な判断だぞ、侵入者」

雨竜たちと境界を挟んだ向こう側に長身の破面アランカルが立っている。大剣を背に下げ、蟲の顎のような仮面をつけた男。

ペツシエがその男の名を呼んだ。

「なっ……！ グ、グリーゼ様!?!」

「……久しいな。ペツシエ・ガティーシエと、ドンドチャツカ・ビルスタンか」

その声は懐かしさを滲にじませているわけでもなく、機械のように確認しているようだった。

さらに淡々とグリーゼは言った。

「……侵入者といえど、俺はお前たちをすぐにどうこうするつもりもない」

「それが、信じられるとでも？」

「……ならばその線を踏み越えないことを願う。そこから先はどれほどの弱者であろうと不確定要素になりえる確率を持っている。悪いが、そうなればお前たちを潰さなければいけないだろう」

体の軋みを見無視するようにしてペッシェが立ち上がった。

「だが、この先に……この先にネルがいるのだ！ それなのにいきなり立ち去れなどー」

「……運が悪かった。それで諦めて欲しい。こちらにもこちらの事情というものがあるんだ、天秤にかけるのならはおのずと結果は見えてる」

「ならばこの先でいったいなにか」

その問いに、しばし目を伏せるグリーゼ。

しかしすぐに大剣の柄に手をかけて抜き放つ。雨竜たちに向けるのは、完全な敵意だ。

「……ここから先で始まるくだらな茶番劇には、もう登場人物が出揃っている。ー俺たちは、入れない」

それ以上グリーゼは何も言わなかった。言外に、線を踏み越えた瞬間からは敵となる。

どれほどグリーゼが強いのか解らないが、おそらくチルツチや茶渡と戦った破面アランカルよりは強いはずだ。

運が悪かった。たしかにそうなのだろう。こんな広大な虚夜宮ラス・ノーチエスの一角だけに、あろうことが戦つてはいけない相手と目的地のひとつが重なっているのだから。

この先でなにが起こっているのか雨竜にはわからない。だが、迂回する暇もない今となつては進むか撤退の選択肢だけしかなかった。

「雨竜よ」

前を見据えたままペツシエが言った。

「ここで別れよう」

「なんだって？」

「貴様はまだ仲間を助けるといふ目的を果たしていないだろう。それを、忘れるんじゃない」

「君たちは……、どうするんだ？」

その言葉に、ペツシエとドンドチャツカは顔を見合わせる。頷くふたりは、言葉を交わさずともすでに決意を固めていた。

「まあ、大丈夫だろう」

ペツシエの足は震えていた。臆病なドンドチャツカも怯えを隠しきれしていない。

しかしどちらにも、この場から後ろへと去るつもりもないであろうと思わせるようにして、つま先を線の向こうへとつけていた。守れずしてなにか兄か。その背は、そう語っているようだった。

雨竜は呆れたように茶渡と目配せした。

そして己の武器である銀嶺弧雀ぎんれいこじやくを顕現させ、

「僕は自分を合理主義者だと思っているが……、旅の道連れを見捨てるほど、冷血ではないはずだよ」

「……そうか」

線を、踏み越えた。

—————

首筋にくつきりと刻まれた傷を感じて背筋がゾツとした。

ニルフィは瞳目どうもくし、喉を震わせる。恐怖によって揺れ動く瞳でアネットを見続けた。

そしてようやく発せた言葉は、

「ごめん、なさい……」

自分が殺されかけたことにはまったく疑問を抱かず、体を縮こまらせながら謝罪しつづけた。

「ごめんなさい、ごめんなさい……！ な、なにか気に障ったかな？」

それなら、ちゃんと直すから。キミの言うとおりにするから。……オ
リヒメさんを連れてくるのが面倒だったなら、代価になるようなこ
と、なんでもするから……!」

この時になつてもニルフィを支配し続ける恐怖は、自分が死ぬこと
よりも誰かが傍から居なくなってしまうことだった。このままでは
自分が見限られてしまう。必死になつて、奴隷のごとく恥も外聞も捨
てた言葉を口にする。

そこには、アネットが自分に暴力といえるものを振るつたことに抱
く疑惑すらない。

ニルフィは捨てられたくなかった。そのためだけに、ビクビクと怯
えながらも下手に出る。

「正直、別にそういうのとかどうでもいいんですよね」

「え……?」

「ん、なんて言いますか。ニルフィ、あなたは……」

あつけからんといった様子で、アネットが言った。

「――用済みつてコトですよ」

意味がわからない。頭が追いつかない。自分が用済み? そんな
はずはない。そんな「要らないモノ」にならないためにニルフィは
今まで生きてきたから。

それが顔に表れていたのだろう。冷めた表情のままアネットが説
明した。

「あなたは強くなりすぎたの。今じゃ油断さえしなければ、ロクに怪
我することもなく死神の隊長格でも殺せるでしょ? そしてこれか
らもまだ強くなれる。あなたを仲間にするときも藍染はそれを危惧
してたのよ。すごいわね、自分に届くかもしれないってアイツに言わ
せたコト」

耳を塞ぎたい。大声を狂つたように上げてアネットの言葉を遮ら
せたかった。

「それにおかしいと思わなかった? ただ強いだけの兵士が必要な
ら、アールニールに今までの十刃^{エスパーダ}全部を喰わせれば簡単に出来上が
る。本当に必要としているのは、藍染自身より弱い破面^{アレンジカル}だけ……。

だからそこに当てはまらなくなってきたあなたは用済みってワケなの」

「私は、謀反なんてしないよ」

「可能性があるだけで藍染は無視できないってだけです」

頭痛がより一層ひどくなってくる。胃がよじれて、少しでも気を緩めれば無様に吐き出しそうだった。

何よりもニルフィにとって辛いのは、語っている間のアネットの表情が変わらないことだ。優しかったハズの女は居なくなってしまうた。

それでも、ニルフィは一縷の望みを抱く。

「でも、あの、私の傷を治すために動いてくれたんだよね……？ さ、最初から殺すつもりなら、そんなことするはずないし……。だから」
「勘違いしてるようだから教えてあげるけど、死にかけを殺したってなんの面白みもないでしょ。要はそれだけ」

「嘘、だよな？」

「虚実を信じたいていうなら勝手にしてほしいですね。……あなたのそういう所だけは嫌いだったわ。ヒトの顔色を伺って、仲間であり続ける幻想を追う姿がね」

種明かしをしましょう、とアネットが鉄扇の刃の血糊を振り払う。

探査回路で巨大な城のなかの霊圧を探るニルフィに、アネットが冷やかな視線を浴びせた。

「そうやって虚夜宮を見ても誰も来ないわよ。まあ仮にやって来ても、グリーゼが徹底的に潰すでしょうけど。それに十刃の連中だつて見て見ぬふりをしてる」

「なんで……？ だって、みんなは！」

「ー仲間だから。そう言いたかったんですか？ じゃあ訊きますけど、あなたを殺すかもしれないってことを、今までそいつらは一言でも口にすることはありますか。それってずっと前から決まっていたことなのに」

記憶を辿ってもそんなことは誰も言わなかった。しかしかすかに感じていた違和感が、パズルの一ピースのようにカチリとはまった感

覚。

そして気づく。誰も、宮から動こうとしていない。もしかしたら迷っている者がいると考えるが、結局のところ、誰もニルフィを助けにやって来ない。

「どうして」

「？」

「どうして、アネットは私を殺そうとするの？ 命令、なんだよね？
それで仕方なくやってるんだよね!？」

「違うわよ」

ひどくあつさりと、心の支えになるはずだった疑問が打ち砕かれた。そしてまとも立っていることすらできず、ニルフィがへたりこむ。痛い痛い痛い。頭に杭が打ち込まれたかのような衝撃のせいで頭が真っ白になる。

そばにまで近づいたアネットがうなだれるニルフィを見下ろした。

「ラティアがね、生き返るかもしれないの」

その声は色濃い感情に染まっているようで。

「まだ虚^{ラス・ノーチエス}夜宮の奥に、あの娘の右腕が保管されてる。それを礎^{いしづえ}にしてどこかに魂魄を引き寄せるのよ。あとは構成をちよちよいと弄れば、肉体を用意してハイ完成。……ま、藍染の協力がないとダメだから、こうして小間使いみたいなことには甘んじてるワケだけど」

「……や、めて……」

「グリムジョーも同じ条件を飲んだんじゃないかしら。デイ・ロイたちはともかく、シャウロンたちの死体もまだ残ってるものね。グリーゼは知らないけどニルフィをどつちが殺すかで揉めたりもしましたし、他の連中も、逆らえば死ぬって解ってるから流してる。彼らにも昔からの目的があるからね、売ることには多少の躊躇はあれど、最後は背を向ける。ちよつと付き合っただけのあなたを命に代えて守るヤツなんてー誰もない」

「やめてッ!!」

耐えられずにニルフィが叫ぶ。

自分を愛してくれたはずの紅色の女に答えを知りたくないと思

ながらも、必死に言葉を投げかけてしまう。

「アネットは……、私のこと、愛してくれたでしょ？ 好きだって、何度も言ってくれたし、ラティアさんとして見なかったって……！」

……ぜんぶ、見せかけだったの？」

——いやだ、嫌だ!!

——訊きたくなんか、知りたくなんかないのに……！

内側の悲鳴も虚しく自分の口は言い切ってしまう。

夜風で少し乱れた髪を掻き上げるたアネットが気怠げに口を開いた。

「別にアタシはラティアと比べてどっちが好きなのか言ったワケじゃないでしょ？」

それに、とニルフィの心を壊すのに十分な言葉を無情にも続ける。

「多少の趣味は入ってたけど甘い言葉を与えてちよつと深い関係になっただけで、あんなにもあつさり骨抜きになってくれるとは思わなかったわね」

胸の奥でなにか大切なものが音を立てて崩れた。

全部、全部ウソだった。今までの生活のすべてが嘘で彩られていたのだ。

脳裏に今までの光景が浮かんでくる。

談笑したり、お菓子を一緒に食べたり、腕試しとして戦ったり、遊びに興じたり。楽しい、思い出だった。綺麗なはずの、思い出だった。すべての記憶には必ずニルフィの隣に誰かが居てくれた。

それが今はどうだ。

捨てられて、ひとりぼっち。

各々の葛藤があらうと、少女を捨てたことに変わりなく結果的にニルフィはひとりだ。

ただただ虚しかった。

涙がポロポロと青白い頬を零れていくのを拭うことすらできず、歪んだ視界で呆然とアネットを見上げる。

「というわけで、なんでもしてくるのならアタシたちのために死んでくれないかしら」

子供が駄々をこねるように、いやだとニルファイが首を振った。

「どうしてかしら？ あなたは死を怖がるような性格じゃないと思っ
てただけだ」

「……し、死んだら、みんなといれないから……。死にたくなんて、な
いよ……！」

アネットが呆れの表情となった。

「けどあなたと一緒にいてくれるヒトなんて、ここには誰もいないは
ずよ？」

「……………あ」

非情な現実を突きつけられたことで逃げることもできなくなった。
意味を成さない声を漏らしながら肩を震わせ、力なくうつむく。

そこで甘い声が少女の耳を打った。

「でもね、ニルファイ。ここで死んでくれるっていうのなら、本当の仲
間っていうのになってあげてもいいわよ」

どれだけ矛盾していようが、心が死にかけている少女にとってはや
はりどこまでも甘い毒である。

「仲間、に……？」

「ええ、そうよ。ホントのところ、あなたに悪感情を抱いてるヒトって
少ないし、それにあなたのおかげで願いが叶うんですもの。これから
ずっと一緒に居てあげてもいいのよ」

「ずっと、一緒なの？」

「ええ、ずっと、ずっと」

もうなにも考えなくなかった。そこでアネットは言うのだ。これ
以上辛くなるどころか、そうすればいまみたいな偽物の日常よりも幸
せでいられると。

よろよろと動いたニルファイは首をのけぞらせ、救いを待つ。

目を閉じたからアネットがどんな顔をしているかは見えなかった。
だが、もはやどうでもいい。このまま短絡的に楽になれば自分は苦し
まずに済むのだ。身を預けることに躊躇いはなかった。

刃が喉元に添えられる。動かないようにとアネットの片手がニル
ファイの頭に当てられた。皮肉にも、その手つきは少女が甘えた時に撫

でてくれるような柔らかさがあつた。

そうして少女は今までのことを思い出し、いき、

「……………」

気が付けば、アネットの手を振り払って距離を取っている。

「……………どういふ風の吹き回しかしら」

訝^{いぶか}しげに目を細めるアネット。

それにニルファイは弱々しく首を振りながら、いまにも泣き出しそうな顔を辛うじて笑みとして形作る。

「わ、私……………、死ねないよ。死んだら、ダメなんだ」

「？」

脳裏に浮かんだのは、異形を隠し続けた皮肉屋な男のうしろ姿。

「約束、したから」

それは死の間際まで少女のために『かつこいい』人物であろうとしてくれた、そして仲間であってくれた、大切なヒト。

「アールローロと、約束したんだ。生きろって、アールローロは言ってくれたんだ！ 自分が消えちやいそうだったのに、生きろって……………私に!!」

折れかけた心が音を立てて戻ろうとする。

よろめきながら、たしかに砂を踏みしめてニルファイが立ち上がった。

約束は守らねばならない。それが本当の仲間であつた者の遺志であるならば、なおさらのこと。

「ぜんぶ、偽物だったかもしれない。打算とか、享樂とか、みんなにとつてはその程度の思い出だったかもしれない。だけど、それでも……………！ 私にとつて、価値のある、本物の思い出だった!!」

まだ胸は裂けそうなほど苦しい。崩れ落ちそうなほど心が腐りかけている。

それでも少女は、弱さをさらけ出しながらも立ち上がった。

「……………そう。まったく」

そのあとになにを続けようとしたのか。

次の言葉を飲み込んだアネットは肩をすくめ、次の瞬間、烈火を纏う。

「結局、アタシのやることは変わらないワケね。……アンタの意志ごと、灰にすればいいってだけだから」

なにが合図だったのかは当人以外には解らない。

まるで示し合わせたように同時に踏み込み、激突により砂漠の表面が抉れ上がった。

あ、リバイヴなんて必要ないから

ニルフィとアネット。彼女たちの最初の激突にはそれぞれ違う思惑があった。

甲^{インモルタル}霊剣の閃光の剣を腕にまとわせたニルフィは、自分が真正面からのパワーでアネットに勝てるとは思っていない。火力だけならばアネットはグリーゼをも凌^{しの}ぐ。だからこそ最初の一撃はフェイントであり、そこから次への攻撃へと移り変えていくつもりだったのだ。

しかし甘すぎる。

アネットを、かつての暴君を正面にしていながら殺す気のない攻撃など、悪手以外の何物でもない。

光刃と鉄扇が衝突した瞬間、それが明白になった。

——流……せない!?

あっさりとニルフィの腕は弾かれる。余波によって小柄な体が大きくぶれた。その姿は嵐に煽られる枯葉のようで、圧倒的な爆発力に成す術などなかった。

炎が眼前に迫ってきたことで強引に身を捻り後方へ跳ぶ。

「……ッー」

服のお腹の部分が灰となりボロボロと砂の上に落ちた。少しでも遅れていればと思うと脚が震える。それを堪えて分身や幻影を生み出していき、砲台となる霊圧の塊をそれらすべての周囲に展開する。

バ^ララ^{イン}フ^ラニ^エイト
重光虚弾軍

アネットを中心として半径三メートルの位置から集中攻撃。幾本もの光の束が炎の壁を削らんと放たれるが、純粋な霊子の雨あられすらも灰となり余波によって散らされる。

虚^{セロ}閃^ロとしては撃たなかった。

まだニルフィは迷っている。

「……………」

覚悟は、できたはずだったのに。さっきとは別の苦しさが胸を締め付けた。

——私は……ッー!

噛み締めた奥歯がギシリと鳴った。このやり場のない感情をどうすればいいか解らなくなる。解らないまま、体だけは本能に従って強者を排除しようと勝手に動くのだ。

通常の技を使うだけでは力不足。

ならば、やることは簡単だ。

フードを目深に被り、さらに膨大な霊圧を練り上げて複数の技を強引に融合させた。

カリマ
響舞

しゅんこう
瞬間

カール・ナーダ
無貌姫

カール・ナーダ
無貌姫

ググツ、と重心を落としたニルファイがその場から掻き消えた。

せいひつ
静謐な超速移動。

そして砂漠を包んだのは広範囲に渡る霧の海。朽木白哉を完封することが可能であった少女特有の空間フイールドであり、さらに存在を消すことで今まで以上の無音殺人が可能となる。

ニルファイは霧の奥から縦横無尽に蹴りや殴打を撒き散らす。その手足に込められた霊圧が空気を破裂させ、その破壊力すべてが霧を伝播してアネットに襲いかかった。それは白哉に対して使ったようなじわじわと甚振るものではなく、たったそれだけでほとんどの戦いに終止符を打てる代物だ。

しかしそれで仕留められるならば、アネットはNO.1プリメーラの称号を得ていなかっただろう。

霧の中央から生まれた間欠泉のごとく空へと届く火柱。どれだけの特異性があるかと霧で炎に勝てるはずもなく、紅色の空白がミルク色の世界にできあがった。

衝撃を伝えるための触媒が消えたことでニルファイの攻撃が無効化される。

そのことに、ニルファイは眉をしかめる。できるならば先の攻撃で決着をつけたかったのだ。

「ハア……。ちよろちよろチョコチョコ、うるせ煩いわね」

「ーッ!?!」

自分を取り囲む霧をイライラと見たアネットがしたことは、震脚ともいえない軽い足踏み。

だが背が粟立ったニルフィは本能的に空中へと跳んだ。その行動が命を救ったと気づいたのはすぐあとだった。そよ風のように足元すれすれを獄炎の薄い波が通り過ぎる。アネットを中心として波は広がっていき、しばらくして消え去ったあとに残ったのは白い砂漠ではなく、滅んだ世界を体現するような灰色の世界と化した光景である。

あれをまともに食らっていれば両脚が消えていた。

しかしニルフィに息つくヒマもない。

アネットの視線がニルフィを捉えている。しかしそれは正確ではないだろう。視線がぶつかるともなく、アネットはニルフィがいるであろう場所に目をやっていただけだ。ニルフィが跳んだ時、とつさのことで砂を削るわずかな音まで消せなかったのだ。

広範囲の空気を焦がす炎の奔流を身を捻ることで回避し、ニルフィは霊子の足場を踏み台にしてアネットの方向へと弾丸のように突き進む。わずか数瞬のこと。アネットは顔を上げたまま、少女を仕留めたかどうか確認できていない。ならばこれこそ好機。霧を引き連れ、無貌^{カラ・ナーダ}姫で姿を消したまま、アネットの背後を取った。

鎧のごとく女を守る炎の間隙を縫うようにし、霊子を込めた蹴りを振り抜いた。

背骨を狙った凶悪な一撃。しかし殺すことはしない、そんな一腑抜けた手段がアネットに通用するはずもなかった。

「くうッ!」

アネットの背に炎が迸^{ほとばし}る。

予想だにできなかった行動にニルフィの回避が遅れ、獄炎によって押し返されてしまう。

辛うじて顔を腕で守った。だが肉体の表面が灰になる苦痛がニルフィを襲った。砂漠の上に転がったニルフィは悲鳴を上げる。

涙で歪む視界の中で、炎の壁から腕が伸びたのが見えた。

ガッ、と無造作に首を掴まれ、はずそうにも万力のような握力で喉

が潰れそうになった。

「カ、ア……ッ」

「もがきかたも道化みたいね……。このままポツキリ逝くつても楽でー！？」

悪あがきのように、指に霊子の針を生み出すとそれらをアネットの腕に突き刺す。その途端、霊子の針が弾け飛び、内側からの破壊によってアネットの片腕が破裂した。

舌打ちと一緒にはずれる拘束。そのまま砂漠に落ちかけたニルフィ。しかし眉をしかめているアネットによって、はるか後方へとボールのように蹴り飛ばされる。途切れかけた意識は、蹴られた箇所
の激痛で皮肉にも繋げられた。

砂の上で乞食こじきのように転がるニルフィのすぐそばにアネットがやって来た。

「甘い。まるで甘いですよ、ニルフィ。アタシの喉を狙うくらいじゃないと。こんな絶体絶命の状況でありながら、まだアタシを殺さずにすべて解決できると思ってるのかしら。そこまでバカだったとは思えないけど」

そう言いながら、アネットは肘から消失した片腕に軽く力を込める。

獄炎がそこから伸びるとあとには元通りの腕が残った。当然ながらアネットは超速再生を使えない。そもそもが、こんなデタラメな光景もまた彼女の能力ゆえである。

“破壊”と“再生”

それこそがアネットの炎のチカラだ。

なにも炎によって燃やされた物体は本物の灰となったわけではない。炎と接触した瞬間に物体を構成する霊子はバラバラに分解されることで、それはコンピュータにたとえるならばデータを破損させるゴミにさせるような行為に等しい。だからこそ灰に見えるものすべては、強制的にデリートされた意味のない情報そのものだ。ヒトであろうと無機物であろうと、そして純粋な霊子であろうと、すべては同一の存在と成り下がってしまう。

「破壊」が分解であれば、「再生」は構成としてもいい。
欠損部分を霊子で即座に組み立てることで、まるで何事も無かったかのように傷が消えていく。

これこそがアネット・クラヴェラの、能力。

「ゲホツ……、ケホツ。……おかしいよ、そんなの」

搾り出すようにニルファイがうめく。

「キミたちにとって邪魔なら、私は虚夜宮から居なくなる、から。ホントはそれでいいんじゃないの？ これから、ずっと、キミたちの邪魔なんてしないって誓うから……！」

「所詮は口約束でしょ。それにあなたが『殺し合いはヤダー』とか言うのは、アタシを殺したくないからって心の裏返しですか？」

「……………」

「それが自惚れだって、自覚はないのかしら？」

ニルファイが得たのは生きることへの渴望であり、他者を、それも特に親しかった仲間を殺すことではない。少女には覚悟が無かった。まだ平和的な解決をすれば、またもとの日常が戻ってくると心のどこかで望んでいるのだ。

ふらふらと立ち上がったニルファイは体に霊圧をまとわせる。

割り切れない彼女の内心を表しているかのように、その霊子は無様に揺らめいていた。

—————

「そろそろドンパチやってる頃か……」

十枚限定で発行され、血で血を洗う奪い合いの末に獲得したプレミア写真を懐に仕舞い込みながら、気の抜けた声で蛇男が呟いた。

おそらくアネットは外で戦っているのだろう。そして、それは間違っていない。

彼女は唯一、十刃でもないのに虚夜宮内での刀剣解放が禁止されているのだ。もし帰刃を使用するのならば、天蓋をぶち破って屋根で戦ったところで被害はさほど変わらない。はるか以前の虚夜宮の

ように屋根のない城となるか、あるいは壁も含めて消えるかの違いしかないからだ。

実際そうなったことがある。怒りを静めることができず少女は消えたあとであり、暴君のチカラはただ理不尽だったと刻みつけられた。

「女同士の戦いなんてローションの上だけでニヤンニヤンやってればいいのになア」

「そりやお前の多大な趣味が入ってるだろ」

ムツツリな腐れ縁に呆れたようにして隣を歩く犬頭が返す。

だが蛇男は肩をすくめるだけだ。

「まア、平和で終われば万々歳って言いたいのにさ。綺麗だとか醜いとか以前に、そもそも起こらなければイイんだよ」

「たしかに一理ある」

「だからな、ローションにまみれた美女と美少女ってイイよなって話に繋がるワケでな」

「ビュー、思わず舌打ちしたくなるほどバカが隣にいるぜ」

一回こいつは死んだほうがいいんじゃないか。いや、俺が殺したほうが世間のためになるんじゃないのか？ と犬頭が考え始めたところで、覚えのない霊圧が急速にこちらへと接近してくることに気づいた。

「おい」

「……ああ」

ふたりは通路の影に身を隠し、その霊圧の主が通り過ぎるのを待った。

爆走と評したほうがいいだろう。犬頭たちに気づいた様子もなく、自分たちを跳ね飛ばしたアネットにも迫る勢いでソイツは去っていった。

「ありや、ジャパニーズマフィアの親玉かよ」

犬頭は悪態をつき、走り去っていく死神の背中を見送った。

グリーゼに対して石田たちが持てる手段は早期決着である。必要以上に長引かせてもデメリットしかなく、それは言われずとも誰でも理解していた。

光の風リヒト・ウインド

立ちふさがる長身の破面アランカルへと銀嶺弧雀による無数の矢を一斉に放った。

グリーゼは巨大な棍こんを手に次々と逸らしていく。迎え撃つのではなく、逸らす。矢の側面を撫でるようにして軌道をずらしているのだ。全弾をいなす技術はもはや狂気の域である。

そこへ茶渡が一気に間合いを詰めた。両腕は異能の発現により変化しており、茶渡は黒い左腕、悪魔ブラッ・イスキエルダ・デル・ディアフロの左腕をきつく握り締める。そして霊子を纏ったソレを振り抜いた。

魔人の一撃ラムエルテ

剣を捨てた右手でその一撃をグリーゼが受け止める。生まれた余波によりグリーゼの背後で舞っていた塵が、口を開けた髑髏のような形になった。その一撃は並の破面アランカルであれば瞬殺も可能なほど。だが、彼らが戦っているのはその並の破面アランカルとはとても言えないバケモノである。

グシヤリ、と茶渡の鎧に包まれた左手が握力だけで握りつぶされた。

反射的に茶渡は右手の巨人ブラッ・デレチャ・デ・ヒガンテの右腕で殴りかかるが、それよりも先に、いつの間にか手甲ガントレットに包まれたグリーゼの拳が茶渡の顔面に叩き込まれる。

水風船が破裂したような音。

さながら大砲の弾のごとく、茶渡の巨体が踏み越えた線の向こう側に吹き飛んだ。

「……脆いな」

彼にとつて、人間の渾身の一撃などその程度しかなかったようだ。

「――あれは、武器が変わったのか!」

雨竜は茶渡が倒されたのを尻目に見ながら冷や汗を流した。最初は大剣から棍こん。次は手甲ガントレット。

そして次は――雨竜への当てつけなのか、グリーゼが構えたのは剛

弓である。

「くっ……！」

弓を引くのは同時。そして弦を放すのも同時だった。

最初と同じように弓の雨で対抗しようとした雨竜。その連射数は最大で1200発の連射が可能である。しかし一瞬にして全弾を撃ち尽くすワケではない。雨竜とは違った一発、しかしグリーゼの放った超高密度の一本の矢を撃ち落とすことはできなかった。

雨竜の肩を巨大な矢が貫通する。

肩を押さええて激痛に歯を食いしばりながら、自分の矢が少しは当たったおかげで相手の矢の軌道がずれたことを幸運だと思った。でなければ、巨大な矢は自分の頭部を違いなく撃ち抜いている。

——当たったのは、向こうも一緒のハズ……！

最初と違い剣で叩き落とすことなどできなかっただろう。ならば、グリーゼにもいくらか矢が刺さったはずだと目で確かめた。だが現実は無情だ。

「クソッ……、最初から避ける必要も無かったのか……！」

弓を構えたままのグリーゼは見るからに無傷である。

「……霊子の矢、か。珍しいな、今の時代に滅却師か」

「だったらどうしたんだ」

「……悪いが、先に殴り飛ばした人間より、どうやろうとお前では俺に勝てないと判断する」

どういう意味かと口を開きかけた雨竜は瞠目する。

グリーゼの左右にペツシエとドンドチャツカが接近していた。彼らはそれぞれ、霊子で構成された剣と鬼の金棒のような武器を手に、双方から攻撃によって派手な爆発を引き起こす。

吹き上がる煙の中、ペツシエがどもり気味に声を張り上げた。

「フ、フツハハハハ！ 我が刀である究極ウルティマによる会心の一撃（不意打ち）!! これで少なくとも——どうわっはあああ!!」

ポーリングを決めかけたペツシエが、脳天を潰しにかかってきた槌つひを辛うじて飛び避ける。

「……少なくとも、なんだ？」

「む、むおうっ、そ、そのっ」

武器で防御したらしく無傷のグリーゼに、ペツシエが顔を青ざめさせた。

「ー不意打ちの無限の滑走!!」

とつさに口から吐いた触れたものをぬるぬるにした液体は、タワーシールド巨大盾となった斬魄刀にいと容易く防がれる。しかし、その隙にゴキブリのごとく脱出したペツシエがドンドチャツカと一緒に雨竜のそばへと退避した。

「カツコつければ倒せると思っていたがそうではないようだな!」

「全然攻撃が通らないでヤンス〜!」

「……………ッ」

予想以上にペツシエたちは戦えるようだが、グリーゼの戦闘能力はそれを軽く超えている。

早くも倒された茶渡のことも心配だ。やはり時間を掛ければ掛けるだけ、どんどんこちらの不利になっていくだろう。これで相手はフラシオン従属官と名乗るのだからまさしくタチの悪い冗談だ。

出し惜しみは悪手。そう確信した雨竜は厳しい表情でペツシエたちに質問する。

「ペツシエ。……………あいつを何秒、足止めできる?」

「ゼロ秒だな」

「そこは嘘でも少しなら可能だと言って欲しかったよ」

彼らの視線の先ではグリーゼが軍剣サーベルを手に佇んでいる。攻撃を仕掛けてこないのは、いま雨竜たちがぎりぎり線の外側にいるからだろう。しかしまた踏み越えれば、今度こそ刃が首を撥はねにくるかもしれない。

「だが、雨竜よ。そう言うならばなにか秘密兵器っぽいモノでもあるのか?」

「それは……………準備に時間が必要なんだ」

「信じてもいいのか?」

「……………」

「そう暗い顔をするな。それこそ、愚問だったな。我々に手を貸して

くれる者を信じないのはまさしく侮辱だ」

普段ネルには見せない真剣な表情で、ペツシエがドンドチャツカに顔を向けた。

「いくぞ兄者ー!」

「いつでもOKでヤンスー!」

次の瞬間、ペツシエがドンドチャツカの肩へと飛び乗りー二人はそれぞれの前面に収束させた霊圧を共鳴させ、周囲の霊子を取り込みながら数倍にまで増幅させる。

「貴様に頼らずとも、コレで決めてくれる!」

そして二人が同時に叫んだ。

セロ・シンクレティコ
融合虚閃

刹那、圧縮された霊力が一気に放出され、通常とは比べ物にならない威力の虚閃^{セロ}が放出される。

グリーゼが軍剣^{サーベル}を閃かせてソレを迎え撃った。

彼の長身は閃光に飲み込まれて視界から一時的に消え去る。

修練の末に生み出したペツシエたちだけが使用できる新たな虚閃^{セロ}。十刃^{エスパーダ}にさえ通用するだろうと自負していた技の行方はー。

「ば、馬鹿な……!?!」

しばらくして、煙幕のなかで未だに立っている影が見えたことでペツシエたちは狼狽えた。最高の切り札を切つてなお、グリーゼを倒すには至らなかつたようだ。

しかし、まだ切り札を持つ者はいる。

「ーいや、十分だ」

時間は稼げた。雨竜はグリーゼより少し離れた前方に現れながら、指に挟んだ銀筒を傾けようとしていた。

それは、魂^{ゼーレ}を切り裂くもの^{シュナイダー}を使って描いた滅^{クインシーツァイヒェン}却^ク印の陣に敵を閉じ込め、銀筒に集めた霊子を魂^{ゼーレ}を切り裂くもの^{シュナイダー}に流し込むことで陣内で爆発を起こす技。

準備に時間が掛かるために普段は使えないが、発動するならば現在雨竜の所持している武器の中で最大の攻撃力を発揮する。

シユブレンガー
破芒陣

ペッシェたちの攻撃で怯んでいるのか煙幕の中から動かないグリーゼを中心とし、暴走に近い形で破壊の光が満たされた。

冗談でもなく、エスパーダ十刃であつても対策なしでは瀕死に追い込まれる威力だった。

だからだろう。

雨竜たち侵入者全員が勝利を疑わなかったのは。

鳥が鳴いたような甲高い音がした。風を切る音だ。そちらへ目を向けるとペッシェたちが胴から血を噴き出して砂漠へと崩れ落ちていく。白い砂が赤く染まった。そこで、その赤には自分の全身に空いた風穴から流れた血も混じっていることに、雨竜は気づいた。

弓を取り落としながら、雨竜が倒れこむ。

「……お前たちの危険性を見誤った。防衛から迎撃に変更する」

死覇装からホコリを払いながら現れる、負傷すら負っていない巨大な細剣レイビテを手にしたグリーゼ。

——無傷、だって……？

現実是非情だ。雨竜たちの決死の攻撃はわずかたりとも届いていない。

それこそありえなかった。いくらグリーゼが強かろうが、あれほどの攻撃を喰らって服も含めて無傷で済むはずがない。なにか、能力でも使わない限り。

——失念していた！

そこで雨竜は己の失策を悟った。

彼はグリーゼのことを直接攻撃タイプの破面アラシカルだと考えていた。だがそれは間違いなのだろう。どんな能力を使ったか解らないが、グリーゼが語ったとおり、雨竜では絶対に勝てないナニカがある。

ここで倒れるわけにはいかない。

だが質量を減らした体では起き上がることもままならなかった。

破面アラシカルが剣を振り上げたことで視界に影が差し、そこで雨竜の意識は途切れた。

グリーゼは嘆息する。無謀に挑んできた地に倒れふした眼鏡に目

をやり、そして、自分の剣を受け止めた刃こぼれの激しい刀を手にした――眼帯の男を見下ろす。

「……その羽織、隊長格と判断する」

剣戟の衝突によって空気が、チリン、と眼帯の男の十一本に束ねられた髪の毛の先端を飾る鈴を揺らした。

「……お前が探している相手はここには居ない。立ち去れ」

「いや、てめえのことも探してたんだよ。恋次を斬った奴がどういうのか知りたかったんだ」

「……男に探される趣味はない。最終警告だ、立ち去れ。必要ならばそこで転がっている人間を連れてな」

「ハッ、なら尚更引けねえな。てめえの剣を受け止めてるから解るぜ。――てめえが強え野郎だつてことをなアッ」

眼帯の男――十一番隊の隊長が喜色に染まった叫びと共にグリーゼの剣を弾き返す。長ドスに変えた斬魄刀でグリーゼが迎え撃ち、鏢迫り合いとなった。

「更木剣八だ」

剣八は歯をむき出しにするようにして笑う。

そして、これでもかというほど明確に、己の目的、欲望、存在意義――そうしたものを全てひつくるめた言葉を口にした。

「てめえを……ぶった斬りに来た」

首をゴキリと鳴らしたグリーゼが簡潔に返す。

「……グリーゼ・ビステイーだ」

剣八と違い、グリーゼには目的というものがなかった。

何かを成し遂げたいという欲求も無ければ、野望すらなかった。さながら機械のごとく、言われたことを言われたままにこなす、そんな表現はやはり従者の鏡ではあった。

だからこそ――。

「……仮に俺を斬り捨てたあとは、どうするつもりだ？」

「あ？ そりゃあ」

剣八が答えようとした時、壁の向こう側から空気を鳴動させるような霊圧が伝わる。足元の砂が逃げるようにして煽られていた。

凄まじいという言葉ではとても足りないような暴君の覇気が、肌を痛いほど突き刺していく。

それに死神も気付いたのだろう。

獣そのものを体現するかのような歯をむき出しにする笑みを浮かべ、首をそちらへとしゃくる。

「向こうにも強そうな奴がいるじゃねえか。てめえを斬ったあとも、まだ楽しめそうだ」

「……そうか」

さらに斬魄刀を変化させたグリーンゼが手にしていたのは、穂先がメートル以上もありそうな猛々しいまでの豪槍。構え、戦闘狂に突きつける。

「……俺の倒れる理由は、どうやら無くなったようだ」

脅威となる存在をこの先に進ませない。

たとえ誰であろうが物語の筋書きを乱すのなら、あるいは邪魔しようなどと無粋な真似をするならば、機械的に破壊するのみ。

「――排除する」

規格外と規格外の対戦カード。

広大な城の一角で、戦いの火ぶたが切られた。

――

そこから少し時間が戻り、再び視点は虚夜宮の外へ。

ニルフィの死覇装はところどころ消失している。肌が露出している部分も多くあった。常時霊圧を放出することで炎を一瞬だけ防ぎ、紙一重で回避しながら立ち回っているのが戦いに均衡をもたらしている。それもいつまで続くのだろうか。

だが、自分は生きなければならぬのだ。

炎の間隙を縫うようにしてアネットに接近する。

霊圧で炎をふき飛ばし、神速にものを言わせて間合いに入り、右手の甲霊剣の刃を獄炎の隙間に突き込んだ。

アネットの喉を切り裂こうと彼女の顔を見て、

「ツ~~~~!!」

好きだと言ってくれたとき。優しく抱きとめてくれたとき。より深く愛してくれたとき。

今までの思い出が頭にちらつき、朱色の髪を掠^{かす}るだけに終わってしま^まう。

逃げるようにしてニルファイは炎の壁から離脱した。

右腕が腰のうしろに引っ掛けた斬魄刀の柄に当たった。悪魔が耳元で囁く。使えばいい、と。出し惜しみしてアネットを無力化しようなど最初から無理だったのだ。

しかし聞くだけで恐ろしい言葉に従いたくなかった。たとえ解放をしたところで、アネットを倒せるか解らないと思^し考の逃げに徹した。

「逃げてるだけじゃ、本当に逃げることに繋^かがらないわよ」

思考を読んだようにアネットが言った。

「それともアタシを確実に殺せることを考えてるってワケ？」

「……そんなこと!」

「じゃあさつきと死んでくださいよ」

また頭痛がする。苦しくて悲しかった。暑さ以外の原因もあつて気持ち悪い冷や汗が止まらない。

今のニルファイは辛うじてアローニーロとの約束を守るために立ち上がっている状態だ。それはあまりにも細い糸であり、本来ならば心が壊れていてもおかしくなかった。

少女は迷い続けたまま炎を避け続けた。

しかし唐突にアネットを守っていた炎が蠢^{うごめ}き、白哉がやったようにニルファイとの道をつくる。

アネットが軽い動作で手を広げた。

「ほら」

「なに、してるの」

「裏切ったアタシのことが憎いんでしょ? だから、好きに壊しても構^{かま}わないわよ。そのあとあなたは他の十刃^{エスパーダ}が来る前に自由に逃げられる。凄^{すご}いわね、一石二鳥でしょ」

「……嫌だ。嫌だよ、そんなこと、したくないよ」

「そういう可愛いセリフは刀に手をかけないで言つてほしいですね」
おそるおそる、ニルフィは自分の右手を見下ろす。強く柄を握っている腕は今にも刀を抜きそうで、ニルフィは短い悲鳴をあげて慌てて放した。自分のカラダが自分のモノでないような恐怖がある。心の底で渦巻く殺意がはつきりと意識できてしまった。

「なんで」

表面では殺したくないと言いつつも、ニルフィは本能からもアネットに殺意をぶつけていたようだ。

これ以上アネットの言葉に耳を貸してはいけない。

それでも内なる殺意は今にも爆発したさそうに、強制的に見たくもない現実を突きつけてくる。

「ま、そういうことよ。裏切つてるアタシを薄情に思つてるだろうけど、こうして泣きながら牙を剥いてるあなたも薄情つてコト。少しのきっかけさえあればアタシを殺せるから、なんて思うと怖いですねー。こんな娘と今まで一緒にいたなんて」

「……………」

「別にアタシを殺すことに心を痛めなくてもいいんですよ？ こっちは最初からあなたに心を開いたことなんて、ただの一度も無かった」
限界だった。ニルフィは歯をむき出しにして噛み締める。憎悪で歪んでいるのか大義名分を得たから晒わらっているのか、自分でもよく解らなかった。

一時的に視界が暗転する。

けれど聴覚だけは生々しい音を伝えてくる。

それからゆっくりと視界は色を取り戻していき、

「……………」

血に汚れた自分の手を見下ろした。

アネットを押し倒し、腹の上に馬乗りになっていた。ニルフィの右手はアネットの心臓に突き刺さり、左手はもうしゃべらせないようにするために無意識にやったのか、少し前に躊躇した喉を切り裂いていた。

噴水のように吹き出した血がニルフィの顔を盛大に汚す。

殺した。殺してしまった。自分はいとも簡単に好きだった相手の命を奪ったのだ。

段々とアネットの目から光が失われていく。

「ひっ」

紅色の目がひどく恐ろしいもののように見えて、言葉を知らない子供のように悲鳴が喉の奥から出る。今更ながらの自己満足な後悔が押し寄せてきた。

そのままもがくようにして一步でも死体から離れようとし、

「ーはい残念」

突然頭を掴まれて砂に押し付けられた。

「ッ!?!」

そのままニルフィは頭から砂漠に何度も叩きつけられてゴミのように投げられる。朦朧もうろうとしてきた意識の中で、なんとか空中で身を捻って態勢を整えた。幸運にも叩きつけられたのが砂でダメージは多くなかったようだ。

しかし今はそれどころではない。

喉が裂かれ、穴の空いた心臓を空気に晒している女が、まるで何事も無かったかのように立っていた。

「どうして……」

「どうして?.. 殺そうとしておいてその言い草はないでしょ」

切り裂いた喉が炎に包まれると完治した。さらに心臓のあった場所も同じように炎が揺らめくと、死覇装までも数分前と同じ状態に戻っている。

ーまさか、そこまで……。

なぜアネットがわざとらしい隙を作っていたのがようやく解った。簡単なことだ。心臓を潰そうが、おそらく脳を破壊しようが、アネットはそれさえも再生してしまうのだ。それをわざわざ見せるためにニルフィに一度殺されたのだろう。

これこそが、ザエルアポロの語った“不死”の正体である。死という概念がなければ、最初から死なないのだから。

「ただの余興ですよ。アタシを殺す殺せないで葛藤してるトコ悪いんですけど、そもそもあなた程度がアタシの命を普通に奪えるワケがない。でも殺しにかかってきたのは素直に評価してあげるわ」

憂いを帯びた瞳で暴君が見下した。

「でも、仲良しごっこなんて、もう終わりにしましょう」

広げられた鉄扇を交差し、過去を再現するようにあらゆる感情に塗りつぶされた声で、紡ぐ。

「――穢せ（けが）『崩翼（ベルデイスイオン）火帝』」

万雷の喝采がなくとも幕は上がる

今までの激動が嘘のように思えるほど、炎の領域が空中へと拡大していく。

拡大。

拡大。

拡大。

滅びの炎は大気中にその版図ほんどを広げ、世界を紅色に染め上げていく。煌々と燃え盛る輝きが暗闇を払いのけ、虚圏ウエコムンドの砂漠に太陽を生み出した。

ふと、空からゆらゆら降ってきた雪のようななにかのひとつが、ニルフィの頬に柔らかな綿のようなものがくつつく。

反射的にぬぐい取ると、ソレの正体は灰であることが解った。あの炎はまさしく、大気の霊子ごと侵食して灰に変えていつてるのだから。

これだけ近くに太陽があるのに熱さは感じない。

ただ、死の形がたまたま炎のように見えるだけだ。

そうしているうちに、虚夜宮ラス・ノーチエスよりも体積がありそうな炎が一瞬にして縮小する。

中央に立っているのはやはりアネットだった。

体を浮き上がらせるような締めつけのある白いドレスを纏い、少女であるニルフィにさえ劣情を抱かせそうな艶やかさがにじみ出ている。所々に紅の羽を模した装飾が散らされ、腰辺りからは赤い翼がレースのように伸びている。

そして質量を増大させた炎は、両腕を覆うロンググローブにとして形作っていた。

「ふう〜……、この姿も久しぶりね」

たしかに、アネットが最後に『崩翼火帝』ベルディスイオンを解放したのは、ラティアが殺された日だったはずだ。

「あ、まだ逃げてはいなかったみたいですね」

「……逃げそうなんて、思っていないくせに」

「まあ、そうですね」

アネットは手を握ったり開いたりして感触を確かめている。

「アタシは」

「……？」

「こーいう能力のせいで相手がすぐに死んじやうから、あまりこの姿で戦ったことがないのよ。そもそも威力とかパワーとか関係ないし？ 燃費も悪すぎるけど、バラガンにも負けない自信があるわよ。たとえば……効果範囲、とか」

ニルファイとは非常に相性が悪いものだ。

範囲攻撃というのは、制限の受けるフィールドにおいて効果を発揮する。紙装甲のニルファイが一撃でも喰らえば即アウトだ。いや、相性が悪いのはグリーゼが相手だった場合もだろう。それを考えると、やはり彼らは自分を殺すために近くに据えられたのだと納得してしまう。

裏切られた。

悲しい。

裏切られた。

苦しい。

裏切られた。

泣きたい。

それらを抱くのはすべてが終わってからだ。

そこで思考が停止する。終わるとはいつのことだろう。どうすれば終わることができるのだろうか。

生きるという覚悟だけでは解決することのできないものが、目の前でそびえている。

「あ、あ、ああ……」

金色の瞳が大きく揺れ動いた。

この戦いは、自分が死ぬことだけでしか終局を迎えないのではないのだろうか。

そう考える時間もアネットは与えてくれない。

アネットは細長い腕を天に振り上げ、ニルファイに向けて薙ぐ。

とつきの判断でニルファイが横に転がった。それが正しいと解ったのは、背後を見たときのこと。

砂漠どころか空間を漂っていた霊子に至るまで一気に灰になっている。ほんの数センチの幅でしかないが、空高くそびえる壁が作られてすぐに崩壊した。あのまま立っていたらニルファイは左右に半分になっただろう。

「じゃあ、王様みたく狩ハンティングりに洒落込みますか。せいぜい、逃げて逃げて逃げて、アタシにその醜態を見せなさい」

この時もやはり、アネットの両の瞳は冷め切っていた。

—————

その場所に織姫を抱えてやってきたグリムジョーは舌打ちをする。「やっぱりそうかよ」

砂漠の真ん中で、喉の下あたりに穴を開け、全身くまなく傷を負った一護が息絶えていた。

ウルキオラがやったのは明らかだ。彼は、意識しているかどうかは別として、気に入った獲物には自分と同じ部位に穴を開ける癖がある。

瞠目する織姫に治せとだけ言って投げ下ろす。

何度も繰り返して言う暇がないのは、自分にはまだこれからやることがあるからだ。

その場から離れた場所にグリムジョーが移動すると声が届く。

「……なにをしている？ グリムジョー」

響ソニード転を使ってウルキオラがグリムジョーの背後に現れた。

ここにグリムジョーが来ることを見越していたのだろう。

「どうした、訊いているんだ。俺の倒した敵の傷をわざわざ治してなんのつもりだ」

グリムジョーは睨みながら沈黙を続ける。

「答えないのか。……まあいい。ともかくあの女は、俺が藍染様から

預けていただいたものだ。渡せ」

「断るぜ」

「……。なんだと?」

「てめえが最初からそのつもりなら、どうしてアネットが連れて行くのを黙って見てたんだよ。俺が気づいたくらいだ。最初から解つてたんだろ?」

口をつぐんだのはウルキオラだった。

そんなことはどうでもいいとばかりにグリムジョーが歯をむき出しにする。

「それと、このことも解ってるハズだ。ヒトの獲物に手エ出すことが、
どういう報いを受けるのかもな」

霊圧を迸らせて骨を鳴らしながら手を開くと、いつでも戦闘ができるように筋肉をしならせていき、ウルキオラのほうも表面の変化こそないがグリムジョーと同じようなものだろう。

しかしウルキオラは据わった目をして相手を見返した。

「お前が本当にやるべきことは、この場所ではできないはずだが」

「そりゃあ誰が決めた」

「お前自身が決めると、俺は予想していた」

ウルキオラがアネットの霊圧を感じる方向に顔を向ける。

「俺が、あの二人の戦いを止めに行くと言ったら……、お前は どうする?」

「勝手にしやがれ。どうせ、テメエは藍染から命令されて止められてんだろ。それくらいは解るぜ」

「解るなら話は早い。あくまでこれは仮定の話だ。その上でもう一度訊かせてもらうが、お前は どうする?」

犬歯を見せ、グリムジョーが苛立ちの片鱗を覗かせた。

「答えは変えねえぞ。勝手にやらせときゃ、すべて終わってんだろ」

「ニルファイが悲しむことになってもか?」

「……ああ」

「そうか」

淡々と確認を済ませたウルキオラが頷く。

普段は手持ち無沙汰にしている両腕をだらりと下げ、わずかに低くなつた声で言った。

「ー期待はずれもいいところだ」

言つてから、ウルキオラは目を見開いた。彼も意図して口にしたわけではないのだろう。グリムジョーでもそこまで察せるほど、大きな変化だった。

「テメエが俺に何を期待しようがどうでもいい。ちようど、目の前にやることが出来ちまつた」

「奇遇だな。俺もそう思つていた所だ」

どうせ、話し合いなど最初から無理だったのだ。

いや、ウルキオラに『止めに行くつもりだ』と言つていれば、こうはならなかつたのではないか？　そしてウルキオラも渋々ながら協力をしてくれたのではないか？

その思考自体、もはや意味のないものだ。

初手を狙つたのは同時。

ここでもまたひとつ、新しい戦いが幕を開けた。

――――

剣を一合交えるごとに、砂漠に破壊がぶち撒けられた。

並みの強者が割つて入つても、即座にミンチにされてしまうことが想像に難くない、圧倒的な力のぶつかり合い。

死神にもここまで戦える相手はそういないだろうと剣八は思う。

かつて戦つた虚ホロウや死神などの中でも最上の実力をグリーゼは持つているのだろう。

しかし、剣八の顔色は優れない。劣勢というわけでもなく、むしろそうならば彼は嬉々として戦つているだろう。

不機嫌そうなのは単に、すかしが多いためだ。

もう一度言うが、グリーゼは強い。

今でさえ、剣八の大上段からの斬撃を豪槍で、さながら闘牛士がマントを操るごとくいなし続けている。

しかし最初の数合、そして剣八に二本の斬撃の傷をつけてから、ふりふりと避けるか、鉄壁の防御だけでいなしていた。

傍目はためには、攻撃を仕掛け続けている剣八が圧倒的に優勢に見えるが、実際にグリーゼを斬れてはいなかった。

それが不満だ。まどろっこしい。

ついにこらえきれず、

「オイ、ちゃんと真面目に斬ってこいよ。最初の啖呵たんかはどうした!？」

しかしグリーゼの返答はそっけない。

「……何故だ?」

「俺あ、こんなチャンバラをしに来たわけじゃねえ。つまんねエんだよ」

「……戦えるならそれだけで楽しいのではないか? これも、戦いだ。ならば楽しんでいられるということにならないのか?」

「十一番隊おれらなら、こんなのを戦いなんざ言わねエよ」

こうして会話している間でも戦闘は続く。

片方が攻撃を仕掛けているのに対し、片方は亀の甲羅に籠ったような守備をする。

「……難しいものだな」

グリーゼが剣八の刀を弾き、自分から距離を取った。

「……三度だ」

「なに?」

「……三度、お前を斬った」

「なに寝ぼけたこと言ってやがんだ。どう見ても多いだろ」

槍によって斬られたことで、剣八の死覇装には切断面がある。肉体にも裂傷があった。それも二回分だけで、本人の自覚も少ないがもう塞がりかけている。

そう思つて、すぐに考え直した。

二回目のグリーゼの斬撃は剣八に届いただけで、傷にはならなかったことを。

「……お前は、黒崎一護が現れるまで敗北を喫したことがないらしい」「よく知ってんな」

「……俺にはそれが不思議で仕方がない。情報に疑いは無いが、正解も習得していなかった黒崎一護よりも強い存在と戦ったこともあるはずだ」

「んなこと言われても知らねエよ」

負けたから、それだけだ。剣八の中ではそう自己完結している。

ソウル・ソサエティ

尸魂界に旅禍としてやって来た一護と戦って、たしかに自分は敗北した。次も戦えればいいと思うくらいには、面白い戦いだっただ。

とはいえ、いい加減面倒になってきた。

頭がよくはないと自覚している剣八も、グリーゼが自分をここに縫いとめていることは察している。

眼帯を取るか？

それでも、まだグリーゼの実力が測りかねていない。

刀を持っていない手を下ろし、剣八はまだ本気での戦いをしないことに決めた。

相手の実力を把握していない剣八と異なり、グリーゼは剣八の本来の実力を見破っていた。

ラス・ノーチエス

この虚夜宮でニルフィの実力を初見で見抜いたのは、藍染と、グリーゼだけである。

だから疑問もない。

目の前にいるこの死神が、比喻でもなく藍染に匹敵する霊圧を所持していることに。

ーなるほど、見えてきたな。

グリーゼは破^{アランカル}面の脳筋に多い、ただの力自慢ではない。卓越した

「戦闘技術」と、冷静沈着な「頭脳」も併せ持つ、トータルファイター三本柱だ。

ゆえに考える。

相手が格下であるはずの黒崎一護に敗北した原因と、そこから導き出す鬼退治の方法を。

まともに戦っても負けるつもりもないが、自分には他にもやるべきことがアネットに押し付けられていた。

できるならば瞬殺が望ましい。

ー三度、たしかに三度斬った。

初撃はそれなりの斬撃。剣八は反応が遅れて深い傷を負う。

しかし二撃目、同じレベルの斬撃をギリギリの霊圧硬度で剣八は防いだのだ。しかも反応ができています。まさしく、ギリギリのレベルで。

そして三撃目、今までよりも少しばかり霊圧を乗せた斬撃。

斬れた。それもまた乗せたぶんだけの薄い傷であつたし、もう塞がっている。そしてそれだけ、剣八の纏う霊圧が濃くなったのも見えていた。

霊圧を無尽蔵に喰らう眼帯による手加減の他にも、剣八は本能で相手に合わせているようだ。

剣八の霊圧察知能力はかぎりなく低い。

だから斬られることで、肉体で実際に相手の強さを測ることで、自分の力もその段階にまで押し上げる。

これこそが一護が剣八に勝てた理由だろう。

一護が勝てたのは、瞬間的な成長による実力が剣八の本能が導き出した答えを上回っていたからだ。

「……皮肉なものだな」

最初から全力ならば剣八は一護に勝っていた。

負けたのはひとえに、戦いを楽しむために手加減をしていたから。

だが、藍染と同レベルの霊圧を持つだけに危険なのは変わりがない。

——ここで潰す。

アネットがいる場所まで通すつもりなど、グリーゼにはさらさら無かった。

破面アラソカルの変化に剣八は気づいた。

槍から変化させて大剣を構え、見るからに攻勢に出るような姿勢を取ったからだ。

「ハッ、いいじゃねえか」

やる気になってくれたのなら、剣八はこれ以上相手にどうこう言うつもりがなかった。本来の斬り合いが楽しめる。そう思い、刃こぼれの激しい己の斬魄刀を持ち上げる。

「……………」

グリーゼが無言のまま先に間合いを詰めた。
予備動作のない、無拍子。

この時点で剣八はワントテンポ遅れた。

アランカル
破面の右脚が踏み込みのために砂漠を貫く。

それはもはや踏み込みの領域を飛び越え、衝撃は指向性をもって、
剣八の足元だけを見事に崩して足を潰す。

体勢が崩された剣八は満足に刀を振るうことも出来なくなり、反撃
の手段までもかき消されていた。

さらに正体不明の脱力感が剣八を襲う。

まるで、沼に全身を浸かったような違和感。

指一つを動かすことすらこれで不可能になった。

そして、次。グリーゼが瞬間的な霊圧の出力を異常なレベルまで跳
ね上げる。

剣八は、霊子に包まれて極限までに斬れ味のみを追求した大剣を、
片方の目で見る事となる。

インモルタル
甲霊剣

並みの者では到底不可能な、鉄板のような大剣を居合腰で抜き放と
うと、グリーゼが全身を軋きませた。

抜刀術の利点は、間合いの読みにくさはもちろんのこと、受身の能
動性を使用したものである。

神速の抜刀術とはよく言ったものだが、居合い切りとは、実際には
振り下ろしたほうが速いのだ。

それでも。

グリーゼのその一撃は。

他者では及びも付かない神速と化した。

「……ッ!!」

大量の血が剣八から噴き出る。想定以上の威力であつた斬撃に、肉
体は耐えられなかった。

はるか後方まで弾き飛ばされる剣八。

だが、舌打ちをしたのはグリーゼである。

「……仕留め損なうとは、俺も実力が足りなかったか」

「いいや、初めてだぜ。……腕が吹っ飛ばされるつてのはよオ」

そう言った直後、剣八のそばに彼の刀が突き刺さった。それには異物がくっついていて、剣八にあるはずのものがなかった。

刀を持つていた腕だ。それはそばにある刀を握り締めたままで、その執念は見る者に畏怖さえ覚えさせる。

剣八は強引に体を動かして致命傷を避けていた。

その代償は、肩と腕、それから脇腹にかけての大きな裂傷。

今まで何度も傷を受けたことがあるが、まさか切断にまで及ぶものを持つとは予想だにしていけない。

だが剣八は笑った。

「……俺としてはもうこれで戦いを終えたい。死神ならば他にやることがあるだろう。この場から去るのなら、命の保証などできないぞ」

「ハハハハハハハッ!! そりゃあー本望だよ!!」

刀を握ったままの利き腕を強引にはずす。残った方の腕で柄を握り、眼帯をえぐるようにはずした。

まだ一本の腕がある。なくなれば、口で挟んで振るえばいい。剣八の頭には自分の命など勘定に入れていなかった。

霊圧が自分の肉体に満ちる中、剣八は笑い続ける。

この相手ならば、心置きなく戦える。それが最初から解っていたならばどれだけ良かっただろう。腕が斬り飛ばされたのが残念でならない。

血はいまだに流れている。

それがどうした。

横っ腹からいまにも内蔵が飛び出しそうだ。

それがどうした。

相手は強すぎる。

ならばいいじゃないか。

「ああ、いいぜ、いいぜー！ 楽しめそうじゃねえかよ!!」

そんな剣八を見て、グリーゼは目の前に自分の斬魄刀を突き立てる。

目は呆れたようでいて、別のなにかを見ているようだった。

「……そこまで戦いを楽しめるお前が羨ましいことだ」

紡ぐ。

「踏み躪れ（にじ）『蟻殻將軍』（オルミガ・ヘネラル）」

全身甲冑の騎士の姿となったグリーゼが、さらに巨大化した大剣を引き抜いた。

有無を言わせぬ圧力がその全身から噴き出す。

「……時間があまり無いんだ。余計な手間を掛けさせるなよ、死神」

—————

右腕の肘から先が灰色になって散っていく。

傷による痛みとはまた別種の凄まじい苦しさに、ニルフィは悲鳴を上げることできなかった。

「ア、ネット……」

「……………」

「アネット！」

「うるさいっ」

必死に、名を呼ぶ。迷子の子供が親を求めるように。

しかしアネットは聴きたくもなさそうにして炎でニルフィを追い払った。

「ッ、あー！」

アネットが『崩翼火帝（ベルデイスイオン）』を解放してから手足が欠損するのは、これが初めてではない。

半分になった右腕に力を込めた。

超速再生

ウルキオラのものを模倣したチカラで元に戻す。

「痛っ……………」

それでも代償がある。

そもそもニルフィが通常の状態でノーリスクに技を模倣できるのは、最終的には誰でも扱えるものに限られていた。

超速再生は魂魄レベルでの適性が必要で、それを強引に捻じ曲げて行使しているに過ぎない。回復するたびに、頭の中が真っ白になる痛みで、精神にかなり負担が掛かった。

もうこのまま寝てしまいたい。

夢だったのだと、思いたかった。

起きたら今まで通りの日常が広がっているのだ。

グリーゼがご飯を作ってくれて、アーロニーロが遊びに付き合ってくれて、グリムジョーが不器用に頭を撫でてくれる。――そしてアネットが優しく抱いてくれるのだ。

最高ではないか。

現実逃避をして泣きそうになった。

ニルフィは子供でありながら十刃^{エスパーダ}上位の実力がある。しかし裏を返せば、まだ子供なのだ。心がそれについてこない。

――最初は、こんなハズじゃなかったのに。

「しごとすぎるわね」

辟易したようにアネットがぼやく。

彼女が大ぶりの攻撃しかしてこないため、辛うじてニルフィは直撃を受けていない。ただし死覇装は用をなしておらず、ボロ切れを纏っているだけのような姿だ。

「……ねえ、アネ、ツト。やめようよ、こんなの、やめようよ！　もう、嫌なんだ!!」

「うるさいって――言ってるでしょー!」

「……ッ!」

アネットの怒りに呼応するように、地面から火柱がいくつも噴出した。

「やめて、どうなるのよ」

炎から影になっていているせいでアネットの浮かべてるであろう表情が、ニルフィには解らなかった。

「何も変わることなんてない。そんなのがアタシは許せないから、ただやってるだけなのよ」

どんな顔をニルフィはしていただろう。泣き崩れそうで、ひどく情

けないことだけは自分でもよく解った。

当たり前になつていた日常を求めるのが間違っているのか？

自分は、なにをするのが正解なのか？

ふつふつと湧き出る疑問に、当然ながら正しい答えなどあるはずもない。

アネットの答えはすべてを否定するもので、ニルフィは肯定をするだけ。すべてが平行線で交わらないように見えた。

いまだに踏ん切りがつかないニルフィを蔑むさげすように見たアネットが言った。

「それじゃあ、アタシがこの後、あなたを殺すことに反対してたりリネットを殺しに行く。なんて言えばやる気は出るかしら？」

「……え？」

呆けた声が喉から零れた。

「あらら、反応したわね。まあ、それでどうする？」

「なに、言ってるの？」

「言つたとおりよ。リリネットは終始反対してたみたいだつてこと。他にも何人かそういうのがいるみたいだし、これってニルフィを殺したら反乱分子になりそうでしょう？ 殺したって藍染は咎めたりしてこないわよ」

自分を信じてくれるヒトがいる。

それは最後の希望であり、絶望の片道切符だった。

「そんなこと、アネットはしないよね？ キミは、そんなヒトじゃないよね？」

「勝手にヒトのことを決め付けないで欲しいわね。アタシが何人殺してきたか解ってるの？ ああ、解ってないから訊いてきたのよね」

「……やめてよ。リリネットは、関係ないから、さ」

「関係ないってひどいわね。あなたの大切な友人でしょ。だからアタシは、仲間はずれは良くないって思ったのよ」

アネットはせせら笑う。

しかしニルフィの脳裏には、あの大切な少女の姿が浮かんだ。

「壊れるまで弄ぶのも面白そうね。あなたのモノだった娘を陵辱し尽

くすのつて、どんなに楽しいのかしら。それに、そうね。泣き叫ぶときの言葉は今からでも想像できるわ。あなたの名前――」

炎に焼かれるのも関係なしに、ニルファイが霊子の刃を両手に顕現させてアネットに肉薄していた。

それを容易くアネットが握りつぶす。幻影の偽物。フエイク

本物は背後を取っており、しかし、今までとは様子が違っていた。

ニルファイが吼える。

グラン・レイ・ゼロ
王虚の閃光

少女の血が混じった霊圧が巨大化し、無数の砲門を造り上げた。十刃のみが使える最強の虚閃、セロそれを複数起動させたのだ。

閃光が至近距離でアネットを飲み込んだ。それでも光線は勢いを止めず、はるか遠方まで届くと、月を壊すかのような爆発を引き起こした。

だが、駄目だ。それでもアネットを殺せない。

致命傷レベルのダメージを受けたはずなのに、煙幕から歩いて出てきたアネットには傷ひとつ残っていないかった。

アネットがかすかに笑う。

「なんだ、やればできるじゃない」

それを聞いて、憤怒と悲哀で顔を歪ませるニルファイ。

殺したくない。でも殺さなければ、自分の大切な相手がなぶ嬲られる。

ニルファイはその矛盾によって苦しむしかなかった。

「愛し合った相手を奪われるのが我慢ならなかったのかしら。あら、アタシも嫉妬しちやいますね」

「やめて。やめて！ リリネットだけは、なにもしないで！ 私ならすぐに死ぬから！ だから、リリネットだけは助けてよ！」

「さあ、どうしましょ。死んだらあの娘は守れませんよー？」

もはや、子供の心では気持ちを抑えられない。

いままで我慢していた感情を押し流すように、ポロポロ、ニルファイの頬を涙が転げ落ちていく。

「もうっ、やめてよ……！ こんな、間違ってる。だから、アネット――」

「……前言撤回するわ。まだ甘いこと言うつもりなら、今度こそ消す」

吐き捨てるように言ったアネットが膨大な霊圧を振り撒いて、圧縮し、凝縮し、濃縮させていた炎を解放した。

役者を包むように生まれるは摩天楼。

舞い散るは不死鳥の翼。

これこそ暴君が最強であることの代名詞となる、主君以外、何者をも存在できない楽園。

レ・シエロ・ブルガトリオ
聖域・灼熱天獄

ふと、ニルフィは己の肌に触れる。

「なんで……」

灰になっている。炎が触れたわけでもないのに、全身が徐々に灰と化して崩れてきている。

「それじゃあ、茶番劇の閉幕の拍手を喝采でお願いしようかしら」

おどけるように、孤高たる暴君が宣言した。

真実の愛ってなに？

グリーゼは足元の砂の感触が変わったことに気づいた。砂よりもさらに細かく、脆い物質。灰だ。

どうやらアネットが大詰めに入ったらしい。能力によって遠方に、しかも建物内にあるモノまでも侵食していつている。過去の十刃にエスパーダ抵抗らしい抵抗もさせずに消滅させた、そのチカラが解放されたのだろう。

「……そろそろか」

アネットたちの戦いの気配に気を取られすぎ、剣八の刃が鎧に到達、即破壊される。最初よりも格段に威力が上がっていた。脇腹あたりの部分に穴があいてしまったようだ。

この鎧には特殊効果などない。そしてグリーゼには、他の二人のように再生能力など無かった。

しかしすぐに高密度の霊子が密集して穴を塞いでしまう。

斬っても斬っても、中身に到達できなければ終わりが見えない。しかし剣八は何度も狂ったように刀を振るいながら哄笑する。

「おいおい、どんな手品使ってるんだよそりゃあ!？」

「単なるリサイクルだ」

冗談とも取れる答えを返しながら、グリーゼは次の決め手の瞬間を探っていた。

鎧の損傷はすぐに無くなるから無視してもいい。ここまでの連戦で、自分が消費した霊圧はほぼゼロに等しい。

アネットからこの場を預かり、たとえ百年後までだろうと全力戦闘がグリーゼには可能だった。

破面が踏み込む。死神が距離感を誤り、わずかに鋒をブレさせた。グリーゼが手に持っているのは、現世のものを模倣した短機関銃。剣八が斬魄刀を振り抜くよりも先に、銃爪ひきがねを引く。

秒間二十発も放たれる霊子の弾丸は、剣八を知る者ならば首をかしげるほど容易く彼に風穴を開けた。

そのたびに片腕を失いながらも剣八の霊圧は上がっていき、その傍

から消失も並行して現れていた。

エテルノ・アエテルヌム
永久機関・飢蟲軍勢

これこそがグリーゼの強さの根本を担う能力である。

正体は彼の能力で生み出した、ここから周囲一帯を覆う極小の兵士である。蟲が、周囲の霊圧を変換することでグリーゼに蓄積させるというもの。周囲の霊子のみならず、戦闘で発生した余剰霊子、さらには物質や虚閃セロなどに至るまで貪り喰らう代物だ。

剣八を斬った瞬間も、これで彼の纏う霊圧を一瞬だけ消失させて防御力を無くさせ、逆にグリーゼは威力を増幅させていた。

死神と破面アランカルの戦いは、すなわち霊圧の戦いだ。

それをまともになさせられなければ、どのような強者も多少腕力のあ
る人間と変わらない。

長期戦向きだからこそ、グリーゼもこの場を守ることに異存はな
かった。

アネットにはそもそもこういうことは不向きどころの話ではな
いのだから。

逆に言えば、自分が向こうでニルフィの相手をして意味がないだ
ろう。それはグリーゼにもわかっている。

しかしそれでも配置の変更を促すと、

『それでもアタシにやらせてくださいよ。達成感とか、そういうの欲
しいし？ アタシがやることに意味があるのなら、やらない手はない
でしょ』

いつもの調子でさらりと告げた。

結果的にニルフィがどうなろうと、グリーゼはその結果次第で淡々
と動くだけ。……そのはずだ。

しかし他にもっと手段があったのではないか？

そう考えずにはいられない。

もしこの場に他の破面アランカル、それも十刃エスパーダがやって来たのなら、この茶番
が台無しになっても構わないから素通りさせるのもいいのではない
か？

目先の安寧に目がくらむ。

これは最初から正しい答えなどない問題だった。

――まあ、仮にやって来たところで。

――俺が叩き潰して舞台から蹴落とすことに変わりはない、か。

複数の銃身が束ねられ、分間二千発、両手合わせて四千発が撃てる機関砲を構えながら、グリーゼは本人の意志も理解できぬまま、指に力を込める。

――皆で宮に戻ろう、か。

最後に会った時のニルフィの言葉を思い出した。

いままでグリーゼはニルフィの命令という名のお願いを叶えてきた。

お菓子が食べたいと言うならば、ケーキやクッキーを焼いたりして与えた。

ホラー映画を見て寝れなくなったから一緒にいて欲しい。彼女が寝付くまで、そばにいてあげた。

なんのことはない、日常。もはや取り返しのつかないものだ。

これは命令でも指示でもない。

この先にこそ、自分が望むものがあるはずなのだ。

たとえそれがニルフィは望んでおらず、なにも知らないまま悲哀を抱くとしても。

もはや最後のお願いは、グリーゼに叶えてやることはできなくとも。

――

愛とはなにかと答えられる者はいるだろうか。

別にフェミニスト気取りを吊し上げようとか、単なる冷やかかしをしたいわけではない。

果たして千差万別の意味合いがある言葉を、聞かれた相手はどう答えるのかを知りたいだけだ。

友人としてのものもある。家族愛や恋愛といったもの。他にも屈折したものならば、独占したいとか傷つけたいといったものまである

だろう。

すべて個人的なものばかり。

それが悪いわけではない。むしろ、折り合いをつけたものに、例えば友愛に恋愛を重ねるとか、親愛に傷つきたい欲求をブチ込むのは間違っているだろうから。

ニルフィネス・リーセグリンガーにとって、愛とは身近にあるものだ、というのが自論である。

(二部は往生際が悪く認めないだろうが) エスパーダ 十刃たちにさえ大切にされているという自覚はあった。まあ、孫に接するものだったり、妹や娘のような立ち位置であろうと、彼らから向けられる感情は温かいものだ。

そんな彼らにも、ニルフィは愛情を持っていた。

どういった種類のものかは、ニルフィには整理がつかない。

ただ、親愛やそれに類するものだろうというのは、おぼろげながら思っている。今までが好きか嫌い、または無関心だけで分別してきた少女には難しいことだった。

しかしそれ以上。親愛や家族愛よりも深いものを感じられる時が時折ある。

全体というわけではなく、一個人にそういった焦がれる気持ちを持つことになった。

お互いがお互いを好きだと、そう思っていた。

—————

ほんの少し昔のこと。

なんの取りとめもなく、些細で、当たり前だった日常の一部。

巨大なソファに二人の主従が座っていた。贅沢に間を開けることもせず、主人である少女は従者である女に甘えるようにしてもたれかかり、女のほうも満更ではない様子だった。

ニルフィとアネットは談笑に華を咲かせ、彼女らにとってこの味わう時間とは、至福のひとつでもあるのだろう。

「それでね、それでねっ。ギンが卍解を見せてくれたんだけど、伸びた刃が藍染様のひと房ふさだけ垂らしてた前髪を刈り取っちゃったんだ!」
「ああ、だから最近藍染が自室に引きこもって出てこないのね」
もっぱら話題を出すのはニルファイだった。

身振り手振りで一生懸命話すのを、いつもアネットが聞いてくれる。たまに黒髪を手櫛すで梳すいてくれるのを黙すって受け入れ、少女は気持ちよさそうに目を細めるのだ。

優しく微笑んで隣にいてくれるアネットが大好きだった。

しかしこの時は話のネタも尽き、足をぶらぶらさせながらニルファイは頭を捻る。

会話によくできる話の間だ。

そこでふと、ニルファイはアネットの顔を見上げた。

「ー?」

小首を傾げながらもアネットはニルファイの髪を柔らかく梳すく。どこかこそばゆく、くすぐったくて、気持ちよい。

目をまどろませるようにしてニルファイが身をゆだねた。

「ねえ、アネット。アネットは、私のこと……好き?」

うつすらと潤んだ金色の目が上目遣いにされたアネットは、
「ええ、それはもう好きよ。お持ち帰りして帰したくないくらい」

真顔のまま余計なことも含めて正直に答える。少なくとも、嘘ではない答えだろう。

「いつから?」

「いつ、というと……。ん、出会った瞬間かしらね」

「どんな風?」

「まあ、そうね」

しばらく頭を悩ませていたアネットはポンと手を叩く。

そしてなにかを宣伝するかのようになり強い口調で言った。

「ーまれ稀に見る美幼女ローリータモンスターとのエンカウト……。これぞまさにG級との遭遇! 今こそ狩猟解禁の時! 狩人よ、立ち上がれ! つーか狩れ!! ……っていう啓示が頭にピコーンって浮かんだのよ。電波的にビビーツと」

あ、ちなみにRH^{ロリハン}でのハンターランクは最高レベルですよ。そう続けて本能に従うだけの女従者は満ち足りた顔をした。

そういえば、グリーゼが守ってくれなければエンカウント数秒で狩られてただろうな、と腰周りをやたらいやらしく撫で回されているニルフィは思った。

出会いは運命と言うらしい。しかし自分たちにはロマンチックの欠片もないだろう。

もちろん額面通りに受け取ったつもりはない。

アネットは基本的に嘘はつかない性格だ。本心をあえて言わないか、数ある虚言のなかに交えて話すだけ。そして自分は本当に大切にされていることをニルフィは知っている。

だから嫌いになれない。なれるはずもない。

アネットは、ニルフィをニルフィとして愛してくれているのだから。

「ま、そーい感じで好きになったというかなんというか」

「そっか」

「あー、別にあれよ。アタシって惚れやすい性格だけど、一目惚れだけであなたに惹かれたワケじゃないっていうか……」

「ううん。わかってる。ちゃんと、わかってるんだ。……だから、ありがとう」

バツが悪そうに離れたアネットの片手に自分の手を重ね、指を絡ませる。アネットはわずかに驚いたように眉を上げ、仕方がないとでもいうように苦笑した。

猫がじゃれつくように、ニルフィがアネットの肩に頭をもたれかからせる。

合わせた手を確かめるように握ったり開いたりし、最後に手のひらを強く重ね合わせると、互いの体温が感じられる。

言葉を交えずともこうしてるだけでニルフィは幸せだった。頼りになる相手がいるから安心できる、などというのとはちよつと違う。包まれてる。

それ以外にはうまく言葉にできない。しかしニルフィはそれに身

を預けるのが好きだった。

自分を受け入れてくれる相手が居るのはなんと心地いいことか。

「続けて言うのもあれだけど、アタシがあなたを好きになったのは決して一目惚れだけが理由じゃないわ」

アネットが軽くニルフィを抱え上げ、自分と向き合わせるようにちよこんと膝の上に乗せた。目を瞬かせるニルフィ。らしくもない笑みを、アネットが見せた。

「一目惚れっていうのは、相手の中身を見ないで好きになったことを言うの。ただの夢見がちな行動ね。でも、あなたのことは最初から好きだったし、それから一緒に過ごすたびにすごく愛いとしくなった。何度だって、惚れ直したわ」

ああ、とニルフィが納得した。

いつも傲岸不遜な態度のアネット。その彼女が、こんな口説き文句のような言葉を口にするために、いまは少し照れている。目の前にニルフィがいればなおさらのことだろうし、頬のかすかな朱を隠せてない。

それがまたニルフィにもたまらなく愛しい。

互いの吐息が熱を帯びた気がした。

「キミみたいないいヒトに好きでいてもらえるなんて、私、嬉しい。だから私も、またキミのことを好きになってもいいのかな?」

「……言ったそばから惚れさせないでよ」

アネットは唇を尖らせ、すぐにかすかな苦笑を浮かべる。

悪戯いたずらっぽくはにかんだニルフィが、ひとしきりアネットにじやれついた。

そして視線を交わし、どちらともなく顔を近づけ、唇を触れ合わせる。

やさしくて穏やかで、そして何処に行くあてもない口づけだった。

「ん……」

びくりと細い肩を跳ねさせ、ニルフィが上目遣いで相手を凝視する。

言葉にならない言葉を探すように、アネットの舌が少女の口内を執

拗に探る。ニルフィの舌も無意識のうちにその動きに伝えていた。

部屋中に二人の舌が絡み合う艶かしい水音が響き渡り、二人はその音に誘われる様に更に激しく、濃厚に互いの唇と舌を絡ませ合った。

少女の喉の奥から、悲鳴とも嬌声とも取れる短い鳴き声が漏れる。

アネットがニルフィの頭を包むように抱いているのだから逃げられない。いや、それが無いとしても、ニルフィが細かく痙攣する自分の手足をアネットの首や腰に絡めてるのだから、逃げるつもりもないのだろう。

貪られながら悦楽を味わい、快楽に傾倒していく。

ニルフィがひととき強く鳴いた。そこでようやく、それぞれの顔が離れた。

口元を細い銀の糸が繋ぎ、涙目になっているニルフィの姿はひどく倒錯的で、今度はこちらが悪戯っぽく笑うアネットの表情は妖艶である。

「アネット、ト……アネット」

「どうしたんですか？」

「ずっと、こんな時間が続けばいい。だから、だからね。……ずうつと、一緒にいてほしいんだ」

アネットが見せた、素の驚きの表情。

その理由をニルフィは知らない。いまは従者でむかしは主人であつた女の過去を、ニルフィはすべて知っているわけではないのだ。

まさか自分が聞くことになるとは思ってもみなかった。

牙の抜けた暴君は、後にそう語ったという。

それもまたニルフィの知らないことだ。

このひと時だけ。

アネットは寂しげに笑い、

「ええ……。いつまでも」

幸せは言葉通り、永遠に続くと思っていた。

—————

もう何度目になるかもわからない、灰の上を転がる感触。

喉に灰が張り付いて咳せきが出た。血の混じった咳だった。

大笑いしている自分の膝を無理やり動かして、炎の追撃からなんとか逃げる。片足がもう片方に突つかかる。また、ニルフィは灰の上を転がった。

カラダが崩壊していくのを絶えず超速再生で修復しているせいで、脳が暴走するような苦痛に呻き続ける。

聖域・灼熱天獄。

それは自分と対象を炎の監獄に閉じ込めるような技で、内部のものすべてを灰にしてしまうものらしい。

頭がそれ以上うまく働かない。

足も動かず、倒れないように地面の上で座り込むようにするだけが精一杯だった。

「チツ、またはずしちやいましたね」

灰を踏みしめながらアネットがやってくる。

「ほら、立ち上がらないと逃げられないわよ。まあ、聖域ここからは本当に逃げられないから、短い寿命を数秒長らえるだけなんですけど」

「……ッ、ハッ………ハアッ………」

「立ちなさいよ」

「……ッ」

触発されたわけではないが、軋む関節を無理やり動かしてニルフィは体を持ち上げた。

そして一瞬後に、座り込むようにして倒れてしまう。

「脆いわね」

髪をうしろに払いながらアネットが肩をすくめる。

「今更アタシを殺せないとか言っても、それは単なる偽善でしかないわよ？ あなたは昔、仲間だった相手を何人喰ってるのかしら。だから今更、ひとり増えたところでもなにも変わり無いでしょ」

「……ッ」

「……？」

「うる、や」

ままならぬ体を震わせながらニルファイがアネットを睨む。それも言葉通りのものでもなく、ひどく弱々しかったが。

「わたしは……、望んで、みんなを殺したワケじゃ、ない……。殺したくなんて、ひとりになるなんて、嫌なのに……！」

ひとり増える。たかがひとりといえども、ニルファイに消えない傷が残るのは明白だった。

虚夜宮で過ぐすうちに、消えかかっているはずの記憶が鮮明にフラッシュバックすることが増えてきた。見覚えのないはずの虚たちの姿。それなりに楽しかった時間。そして彼らの死体の中央に、いつも自分が立っている。

ニルファイが最上級大虚として虚夜宮に訪れる直前にあつた血の海がある。自分が自分として目覚めた時に見た、最初の光景。

予想はしていたが、やはりそれもニルファイがやったことだ。

その時知らなかったのは、死体の彼らが以前までの仲間であつたこと。

「でもひとりだったから虚夜宮にたどり着いた。それは違うの？」

「……………」

「まあ、それでアタシたちが出会ったワケだけど」

たしかに、そうだ。いつだって、そうだ。

利用されるだけ利用されて、それで最後には「要らないモノ」として捨てられてきて、それで今みたいににみじめに泣いてる。ぼやけた記憶の中からそんな既視感を覚えた。

捨てられないためになんだってしてきたのだ。犯されて翻られて壊されて使われて扱われて。

辛いと思つたことはない。そうしていれば、みんなが自分と一緒にいてくれるから。

自分は何者でもない。それでも、みんなの輪の中にいることが自分であるという確証にもなる。

それでも捨てられるのだ。無情に、卑劣に、強引に。そのたびに殺してきた。愛する相手を何度も何度も殺す感覚がわかるのか。裏切られた絶望が、それでもまだ信じようとする辛さがわかるのか。

そう思うと、ああ、やっぱり自分はひとりなんだと考える。
プリバロン・エスパーダ
十刃落ちのヒトたちは揃って面倒見がよく、温かい気持ちになれた。
エスパーダ

十刃たちは我が強かったが、それでも自分のことを考えてくれる安心があつた。

従者であり、特に大切な相手であつたアネットのことはー大好きだ。

ニルフィは自嘲する。こんなときでも、好きだった、なんて過去形で言うことができない。なんという道化、なんという阿呆だろうか。

それでも。

ニルフィはアネットのことを愛していた。

持ち上がったニルフィの顔に、どんな表情があつたのか彼女自身でもわからない。

しかしそれを見たアネットは目を細め、一瞬だけ伏せ、前を向く。まっすぐ、紅色の瞳がニルフィを射抜いた。

レ・マン・スカラティノ
緋ノ御手

アネットの右腕が赤く染まる。

振り抜かれた延長からずれるように本能的にニルフィが体を傾けた。へたりこんだまま、とてもそれだけで躲せるとは思わなかったが、ギリギリ直撃を免れたようだ。

アネットが全身のバネを捻り、右腕をやや後方に引く。

「これで、最後よ」

眼前のモノすべてが炸裂した。

アネットが響転ソニックも使わずに踏み出した地面は、彼女の背後に放射状の衝撃を残した。

速い。炎を百鬼夜行のように引き連れたアネットは姿が霞むようだ。

本当の脅威は、その右腕。

防ぐのは鬼道も鋼皮イエロでも不可能。避けるのは体が追いつかない。

アレは自分を貫く。

そんな予感とともに、その様がゆつくりと見えていた。とうの昔に心が折れていたニルフィは、あれに殺されるのもいいかと頭の一部分で思っている。

こんなことは生まれて初めてだ。たとえ好きな相手であろうと、自分を殺しに来たのなら虚^{ホロウ}であつたときには躊躇わずに反撃していた。それでもなお、殺しあいたくない。

アネットは自分を利用しないでくれた、利害関係などではない、美化してしまいたいほどに綺麗な相手で。

そこでようやくニルフィは、本当のことに気づいた。

「ーやっぱり私は、キミのことが……、一番、大好きだったんだね。アネットの姿を目に焼き付けながら、ニルフィは受け入れるようにして目を閉じた。

そして貫手^{ぬぎて}は今までの膠着を無視するかののように、あっさりと胸を抉^{えぐ}りー貫通する。

飛び散つたのは、紅い華のような鮮血だった。

背中を突き破つた腕は赤く妖しげに濡れている。

「ーどう、して？」

何度目になるかもわからない、少女の疑問の声。

違うのは、その弱々しい問いに答えなど欲しくないということのみ。

それでも現実はいつだって真実だけを伝えるものだ。

この時は、そう。

ニルフィの右腕。戦闘本能だけで動き、されど炎の槍の前ではとても結果を残せるはずもなかった細腕が、アネットの胸の中央を貫いていた。

そしてアネットの右腕はわざと大きくはずされており、解放されたチカラがニルフィのはるか後方を消し飛ばすだけで、少女に新たな傷を創ることはなかった。

そのまま数拍。

アネットの口から血がごぼりと溢れる。

「ひっ……い」

それがなにか恐ろしいものに見えて、ニルフィは反射的に右腕を引く。しかし体だけは言うことをきかないでその場に留まった。

アネットはニルフィの肌に縋りつき、自分の胸に埋めるようにして抱きしめ、崩れ落ちる。

傷としての穴が再生することもなかった。それどころか周囲を囲っていた炎が消えていき、アネットの帰^{レスレクシオン}刃までもが解除されていく。

それも必然のことだ。

あらゆるものを破壊し、あらゆる傷を再生させる。完全という言葉を体現するような能力にも欠点がある。どれにも、通常の何倍もする霊圧が消費されることだ。あれほど派手に大技や再生を連発すれば、生命維持にも支障をきたすレベルで消耗するのは当たり前前だった。

しかしアネットはそれも解っていたはずだ。

いつだってニルフィを殺せる場面があったのに、ことごとく見逃している。殴ったり蹴ったりするときも、炎を纏わせていたら小さな体は容易く両断されていただろう。

最後の攻撃だってそうだ。アネットは、自分の腕を不自然なまでに大きく逸らし、当たるはずもなかったニルフィの貫手^{ぬぎて}に飛び込んで。生き残ったのは少女で、命の灯火が消えかかっているのは従者の女で。

「……あ、あ……あーあ、あああああああああああ!!」

この結果は本来ならばありえない。

しかしそれを改変するには、たったひとつの誤算があるだけでいい。

これを起こしたのがすべて、アネットの意志であれば。

自分は、なにをした？ なにをしてしまった？

少女の慟哭^{どうく}が灰の世界に虚しく響く。

いつものように、泣き虫なニルフィをなだめるように抱きしめたア

ネットは、少女の耳元で震える声で呟いた。

「…………ごめんね。約束、守れそうにないみたい」

彼女が浮かべていた笑みは、約束を交わしたときのものと一緒にだった。

ブレイク・ハート

覚えのある霊圧が忽然として消えた。

グリムジョーはそのことに目を見開き、一瞬であれど動きを止める。

その隙をウルキオラならば逃さないはずだが、彼は指先に込めていた虚閃セロの収束を中断し、斬魄刀を振るって鞘に収める。

仮に攻撃されていようと、どうとでもなる自信があつたグリムジョーはその行為に睨みを効かせた。

「……どういふつもりだ、てめえ」

「いや、思惑などこれといつてない。ただ……そうだな。お前がなんの反応も見せていなければ、このまま殺すつもりだったと言っておくか」

「殺せるとでも思つてんのか？」

「さあな。だがお前が少なからず動揺を見せたことだけは事実だ」

「ーッ！」

そこまで大きな反応をウルキオラに見せたつもりはない。

しかし、グリムジョーはこの茶番がどうなるのか結果を知っていた。知っていたからこそ、それでもなお感情が揺さぶられた自分に意味のわからない苛立ちを覚えていた。

アネットがどういった選択を取ろうと、それは彼女の勝手。

この動揺はそのことについてではない。

ただハッキリすることといえば、もどかしさとも呼べる感情が生まれてしまったのは、彼女が命を投げ出したという結果に対してだろう。

自分にとってはいけ好かない女というだけの存在のはず。それが、何故。

「待てよ、逃げるのか？」

「この戦いの勝敗など俺にとってはどうでもいい。やることができた。お前の相手をするのはこれで終わりだ」

背を向けたウルキオラが響ソニード転で姿を消す。

あとに残ったのは晴天の下でいくつもの破壊痕を残した砂漠と、
破面^{アラシカル}の青年だけ。

グリムジョーは苛立たしげに頭を掻き毟る。

体には所々傷があれど深手ではない。そんなものを無視しながら、
はるか遠くにある壁に目をやった。

考えるのは嫌いだ。もともと頭を働かせるのは苦手だし、それを請
け負っていたのは従属官^{フラシオン}でもシャウロンだけだ。しかし的確にグリ
ムジョー本人が見えていなかった痛いところを突く男は、この場にい
ることもない。

グリムジョーの内心を占めるのは、九割の焦燥に似た苛立ち。そし
て一割の安堵。

それは虚夜宮^{ラス・フォーチエス}において、第7十刃主従^{セブティマ・エスパダー}の戦いの決着に勘づいた
者たちの心情と同じものだ。

なにもかもそれがわからない。

だからグリムジョーは直感を信じ、なぜ自分がこんなにもくだらな
いことで頭を悩ませているのかを最後に考える。

アネットとグリムジョーの違い。

それだけ見ればあとは簡単だ。

「……割り切れてねえのは俺のほうだったのかよ」

——あの女を甘く見てたな。

アネットの我の強さを身をもって知っていたはずなのに、それを自
分はいつから忘れていたのだろうか。

—————

なにか言わなければならぬ。

自分を抱きしめてくれている女の従者に、なにかを言わなければな
らないのだ。

けれどニルフィの喉に声があつかかって、中途半端に開いた口が息
をこぼし、舌の上で転がっていた言葉を出すことができない。

最初から自分は置いてけぼりだ。

真実なんて目の前にあるように見えて、その実真偽は不明のままである。それに右往左往させられていたと思えば、今度は失楽させるかのような出来事が目の前にあった。

それでも疑問は当たり前前のように持つ。
「いましがた自分がつくったアネットの傷には弱々しい炎が瞬いている。」

しかし、それだけだ。傷を治すだけの霊圧がアネットには残されていなかった。そして、時間も。

「うそ、だったの……う！」

ようやく口にできたものは、それと同じくらい儂くて。

胸元に抱きしめられているニルファイには、アネットがどんな表情を浮かべてか細かい息を吐いたのか見えなかった。

「ぜんぶ、ホントのことよ。……ホントのことで、だからこそ、アタシは……、あなたを殺せなかった」

いままでバラバラだったピースが当てはまってくる。

ニルファイにも理解できるようになってきた。

一番の大きなきっかけは、東仙がグリムジョーの左腕を切り落とした時だろう。その際にニルファイは初めて順従な態度を止めて、死神たちに殺意を向けてしまった。自分の危険性を知らしめてしまった。

状況次第で誰であろうと逆らう意志があることを、藍染に教えてしまったのだ。

その時だろう、藍染がアネットとグリーゼに取引をもちかけたのは。ニルファイはその大事なことを気にすることはなかったのである。次の日、スタークと初めて出会ってからアネットが迎えに来てくれた。

あの時彼女が浮かべていた迷いや躊躇の表情。それが消えたのはいつだ？ 思い出せない。それだけずっと前から、アネットは決断していたのだろうか。

それだけならまだしも、ニルファイは力を求めるようになった。

もはや無視できるような戦力ではない。

少女は強くなりすぎた。

仲間を守りたいと思うがゆえに、失う領域まで進ませてしまうほどに。

けれど、ニルファイはアネットから愛情がそそがれているのは当たり前のことだと思っていた。それが裏切られたと勝手に思っていただけで、本当はやっぱり当たり前のことで。

それでもだ。

ニルファイが求めていたのは、けしてこんな結末ではない。

「わたしを、殺してくれればよかったのに」

痛い。痛い。痛い。

いままでの底冷えするものとは違った痛みがニルファイを苛む^{さいな}。

こんなものから逃げたかっただけの言葉が辛くて、アネットが怒るわけでもなく、またほんのすこし抱きしめる力を強くしたことでもつと痛くなる。

「ラティアは、こんなことで生き返っても、ぜつたいに……喜ばない。それにぜつたいに……、もうアタシに笑いかけてくれなくなる。それでーアタシは、大切なヒトを……ふたりも失う」

アネットが血の混じった咳をした。それだけ命を吐き出しているようにニルファイは思える。

力もなく震える腕でアネットが少女の頭をかき抱いた。

言い聞かせるようにして、血を飲み下しながら囁く。

「いつも、仮面で顔を隠してたから。そのツケを払ったって、ところかしら……。こうでもしないと……、アタシの言葉は、あなたのこころにー届かない」

やたらと大仰だったアネットの態度。本心と嘘が混ざり合った言葉の数々。

それは出会って最初からニルファイと距離をとっていたからだ。

アネットは自分の領域に誰も入らせなかった。なぜならそこは、自分と、もうひとりの想い人との世界だから。独りになっても気が遠くなる年月が過ぎても、他者に見向きすることはなかった。

また、それが崩れ始めたのもいつからだろうか。

なんとなく。本当になんとなくでしかないが、自分が認められたの

はアネットが覚悟を決めた日である気がした。

それを無意識にニルファイも察していたのだろう。

破アランカル面たちとの交流において大切にしていたのが距離感であり、アネットに認められるまでは近いようで遠い関係だった。

でもいまは違う。

自分を抱きしめてくれるアネットには、仮面もなければ遠かったはずの距離もない。

普通の、愛情をそそぐ者と受け入れる者の関係があるだけだ。

仲間として、心から信用できる相手として。

「ごめんね。……ごめんね。……アタシに、あなたをまも護れるチカラが無くて。でも、あなたはアタシと、ちがうから。ずっと……、ずっと独りなんかじゃ、ないから。となりには、必ずだれかがいてくれる。いっしょに歩いてくれるヒトが……いてくれる、から」

途切れ途切れにつぶやき続けられる合間に、アネットの喉からは笛の鳴るような息が聴こえる。次第に弱くなって消えていきそうな細さだった。

それをアネットは強引に押さえつけている。

ニルファイはもう止めて欲しかった。これ以上、自分の大好きなヒトが苦しむ必要なんてないのだから。

しかし心が死ぬ寸前であろうと、ニルファイは聞くしかない。

それが自分のすべきことだと少女は理解している。

「痛かったでしょ、辛かったでしょ、苦しかったでしょ」

ニルファイの頭に浮かぶのはおぼろげな過去の記憶だ。

使つては捨てられ、使つては捨てられ、それでも仲間が欲しくて白い砂漠をさまよい続けた自分のうしろ姿。

「何度も、何度も……これからも、こんなことが続くかもしれないけど……」

これは証明だ。

アネットは自分の命で、ニルファイに正当な理由を与えようとしている。

少女は殺されかけようとも相手の命を奪いたくないと考えている。

しかし虚時代^{ホロウ}ではその呪縛のような矛盾に苦しんだ。それでは、この先も長くないだろう。

だがいまは違う。

昔のように周囲の仲間がすべて敵になるとは限らないのだ。それで全員を殺して孤独の身となる必要もない。

ニルファイには見えていなかっただけで、心の拠り所ともいえる仲間はずちやんと残っている。苦しんだら頼ればいい。辛かったら願えばいい。もうニルファイは、与えるだけの存在ではない。

自分の意思で自分の身を守るといふ、そんな当然のことをアネットが教える。

「あなたは、独りにならないから。だからー生きて」

アネットが少女と顔を合わせる。

水気を含み、溢れそうな瞳で。

頬に雫を流すまいとするのは、単なる大人の意地。アールロー口のように、たとえ最後だろうとかつこつきたいから。

子供であるニルファイは涙を流すことに我慢する必要はなかった。

短くなつた黒髪が撫でられる。

「せめて、この髪が伸びるまで、ね」

「自分勝手だよ……。私の、ことなんか、考えてなくて……。それで、ずるい」

「……そうね、ずるいわ。アタシは、まだ許してもらおうとしても」
の

迫る伶俐な美貌を避けることは、ニルファイにはできなかった。

重なる唇は、熱くて柔らかくて、血の味がした。

「だからね、ニルファイー」

耳元で囁かれるのは、少女を負の輪廻から救う言葉だ。

もはやアネットの命の火は消えかかる寸前。

幸せなようでも誰よりも傷ついているニルファイが、苦しんで思い悩むことのない人生を進むことができる。

なんの禍根も残さず、ただの少女として生きていけることになる言葉は。

「ヒヤッ、ハア」

この光景をなにもかも侮蔑するような嘲笑によって塗りつぶされる。

そこからはずかな時間の出来事だった。

「oooooooooo」

なにが起こったのかニルフィには一片たりとも理解できなかった。

朱色の女は奥歯を砕かんばかりに噛み締めた。覆いかぶさるようにしてアネットがニルフィを抱きしめた。

アネット越しに、凄まじい衝撃を受ける。

悲しくありながら綺麗に終わる。そんな予感がしていたのに、これはまったく現実味のない出来事だ。

自分はあと少しで、アネットに救われるのではなかったのだろうか。

「ノイ、トラ……ッ！」

「よオ、テメエらなにつまんねエ終わり方しようとしてんだよ」

霊圧はなぜか感じなかった。

しかし黒衣のマントを剥ぎ取るようにして姿を現したノイトラが肩に乗せているのは、真新しい血でてらてらと濡れている巨大な斬魄刀だった。

アネットの背にまわした手には、惨たらしい裂傷の痕とドロリとした血の感触が残る。荒い息で激しく上下する感触。そして、ロクに動くことができないであろう消えかかった鼓動の音。

そうしているうちに、ノイトラが巨大な斬魄刀を振り上げた気配。そこからは、ニルファイにとつてまるで映像越しに見ているような光景だった。

一瞬だけアネットと視線が交わる。滲んだ感情が色濃くて、それがどんなものだったのか少女にはわからなかった。

ただ、子供のよう泣きそうに思えたアネットの目が記憶に焼き付く。

そんな彼女に自分は、安心させることができたのか。

なにかが、できたか？

アネットが少女の小柄な肢体を突き飛ばす。

刹那。

巨大な獣に撥ね飛ばされたように、アネットの体がニルファイの眼前から消え失せた。

「……アネット?」

思ったよりも近くにアネットはうつぶせで倒れていた。朱色の髪が顔に掛かっているせいで表情が見えない。

「アネット?」

素直にならない体を這わせてニルファイが近寄る。

「アネット」

呼びかけても返事はない。

軽く揺さぶってみても、反応らしいものはなかった。

ただ、アネットの背に触れた手にはべつとりとした血が付着している。ふたつの、体が半ばまで断たれていそうな深いもの。

自分たちだけしかいなかったはずの砂漠に哄笑が響き渡った。

「オイオイおいおい、まさかの元NO.1が呆気ねえモンじゃねエかよ、なア?」

ニルファイにはなぜここにノイトラがいるのか理解できない。

弱りきった精神に依存する頭は、この状況についていかなかった。

だから行動の優先順位も滅茶苦茶で、ノイトラのことを横目で見ても、すぐアネットを軽く揺すって起こそうとする。

「起きて。起きてよ。アネット。ねえ、なんて言ってくれるハズだったの？ ねえー」

ノイトラの靴の先が脇腹に突き刺さる。そう思った時には、少女の小さな体がサッカーボールのように蹴飛ばされたときであった。

痛くてこれ以上体が動かない気がした。

だがニルフィは再び這うようにしてアネットのそばへと近づこうとする。

「……アネ、ツト」

「ウゼエんだよ、テメエは」

また蹴り飛ばされた。

その方向はアネットが倒れている場所であり、ニルフィは蹴られたことに頓着することもなく、光の消えかかった瞳のまま揺すって起こそうとした。

でも目を覚ましてくれない。回道を使っても傷が塞がる気配はなかった。

背がかすかに上下もしていなければ、口元の髪が揺れる様子も見えない。

ニルフィの手のの中から暖かさがこぼれ落ちていく。

「まったく、テメエはとつとと死んどきや良かったのによ。確認程度で来てみりゃあ、そのクソ女が勝手なマネしてるじゃねエか。命令なんざどうでもいいが、気に入らねエ女をふたりも消せるつてのがオイシいなア、おい」

ノイトラがなにか言っている。

それを聞きたくなくて、ニルフィは必死にアネットを起こそうと手を動かす。言葉がどういふものか理解した瞬間、自分は壊れてしまうだろうから。

「……………」

面白くなさそうに見下ろしていたノイトラが少女の頭を鷲掴みにし、その握りつぶさんばかりの握力にニルフィからか細い悲鳴が上がる。

る。

「おい、チビ。もつと他にもあるだろうがよ？ キャンキャン犬みたいに吠えまくったり、オレになんか言いたいこととかねエのかよ、なア？」

「やめ、て……。アネットが、まだ起きて、ないから」

「起こすってか？ 面白れエセリフだ。テメエもわかってんだろ、あア？ コイツはもう駄目だつてな。お前が殺しかけて、次にオレが殺してやった」

「……ちがう」

この現実ニルフィは耐えられない。

理不尽が暴力となって心を折ってくる。

あともう少して自分はアネットに救われるはずだったのに、なぜこんな展開になっているのか。視界に映るものすべてが灰色になっていく。

「前からテメエのことが気に入らなかつたんだ。仲良しこよしで、ほかの十刃エスパーダの奴らの牙を随分抜いちまつてよ。あいつらにそんな趣味でもあつたのか？ まあ、いまはそんなことどうでもいいな。殺すんなら甚振る許可ももらつてるしよ」

ノイトラが力の抜けたアネットの体を容赦なく蹴り上げた。

「や、めて……ッ」

「……それがウゼえつってんだよ！」

脚にまとわりつくようにしてきたニルフィをすくい上げるように蹴り飛ばす。

ボトリ、と落ちたニルフィはまた這うようにして、女を守るように小さな体で覆いかぶさる。

彼にとつてはニルフィもアネットのことも、ある女の破面アランカルと同じで目の敵にしていたのだ。十刃エスパーダで『1』の数字が与えられた時のアネットは、ノイトラのことを常に格下としか見ていなかった。

だから藍染の申し出はノイトラの望みを叶えるものである。

圧倒的有利な状況のなかで、ノイトラの行動は傲慢そのものだ。

ゆえに、躊躇もない。

頭を掴んだままニルフィの首の向きを強引に変え、嫌がる少女を無視して仰向けに倒れたアネットの顔に無理やり近づける。

「よおく見とけよ。これが、テメエの招いたクソツタレな結果だつてことをな」

ニルフィは揺れ動く視界のなかで倒れ伏す女の顔を見て、そして――。

――

この戦いが始まってから一番の手応えに剣八が笑うことはない。むしろ怒りさえ覚えているとでも言いたげな様子で、目の前のグリーゼを睨みつける。

「てめえ、なんのつもりだ！」

「……………」

グリーゼの甲冑は真ん中から少し横にずれて、縦に大きく切り裂かれていた。その隙間から噴水のように血が溢れ出る。鎧はすぐさま修復するが、中身の肉体を治すわけでもなかった。

剣八の刀を防ぐはずの大剣は横の壁に振るわれており、翺とばされた斬撃が真一文に貫通している。さらに、壘子を貪る蟲をすべて壁の劣化にまわしていたため、強力な剣八の攻撃を弱らせることなくまともに喰らうことになった。

使い物にならなくなった右目をヘルムの奥で強引に開く。

「……………この戦いは俺の負けだ」

「ああ!？」

まなじりを吊り上げて再度斬りかかってくる剣八。

それを無視して破面アランカルは響転ソニードで外に向かう。

現在、考えうる限りでもっとも面倒なことになった。妨害がないと思っていたわけではない。むしろ必ずあるだろう。しかしどういった形で成されるかは当事者にしかわからないことだった。

アネットがあえて大ぶりの攻撃をしていたのも、隠れ潜んでいる虫を駆除するためのもの。それをどういった形で防ごうともグリーゼ

の探知能力に引つかかる。

万全だとは思っていない。

しかしそれらすべての答えを知っているのは、

「……どういふつもりだ、藍染」

「それはこちらの言葉だ。君たちは、私との約定を忘れたわけではないだろう」

月明かりの下、夜空を見上げていた藍染の視線がグリーゼに向けられる。

その手には抜き身の斬魄刀が下げられていた。遠方にいるノイトラの首を刎ねるはずだったウォラレ驅霊剣を撃墜したのも、その刀なのだろう。

「……約定だと？ 忘れるはずもない。だが、それを守るかどうかは俺たちが決めることだ」

「それは残念だ」

「……お前が、このことを予期していなかったはずがない」

「たしかに、君たちはこの件において最高の駒であると同時に、最大の障壁ともなりうることは最初から知っていたよ」

藍染は薄く笑いながら答える。

「だから私がここにやって来た。手負いとはいえ、君の相手はギンやかなめ要では荷が重すぎるからね」

大剣から細剣レイピアに変えた斬魄刀で、グリーゼが死神の頭部を穿つ。

点の攻撃を藍染は刀の腹で受けきった。

「……お前の霊圧はいまだに玉座の間にあるんだがな」

「聡い君ならばもう感づいているだろう。いつからか、自分が『藍染惣右介の行方』に違和感を持ち、それに危惧を覚えてわざわざ更木剣八を早期に下そうとした君ならば気づいたはずだ。——それは錯覚だと」

グリーゼが手を閃かせる。

手に持っているのは小ぶりなナイフ。拮抗が無くなったことで藍染の刀を持つ手がわずかにブレた。グリーゼが踏み込む。その時にはもう、大剣で斜め下から死神を斬り上げる。

半身になって躲す藍染。

一拍の呼吸の間。

そして次の瞬間、無数の剣戟の音が砂漠に響き渡る。

「……ザエルアポロをけしかけたのもお前か」

「いや。私はただ、彼を少しばかり導いてあげただけさ」

「……………」

それだけでグリーゼには十分だった。

なぜ第^{セブティマ・バラシオ}七^{エクスキアス}宮を密かに襲撃しようとしたザエルアポロが、三千も

の葬討部隊を動かしたのか。

簡単なことで、それはもともとから科学者の命令ではなかったのだ。霊

圧による違和感も、藍染の能力らしき幻でいくらでももみ消せる。

そしてザエルアポロは知りすぎていたのだろう。

ニルフィの過去やその特性を割り出していたはずであり、それが間違っ
て言いふらされるのは藍染にとって都合の悪いことだった。

しかし藍染はザエルアポロがニルフィに特別な感情を持っている
ことを知っており、それを利用して単独でグリーゼにぶつからせた。

ザエルアポロが少なからず信用していたのは、あくまでもニルフィ
だけ。

裏切るかも知れない（と思っている）他者を使うことなく、勝ち目
の薄い戦いをさせられたのだ。

グリーゼも、どうやらそのつゆ払いに利用されたようだった。

「彼も死後、自分の技術がニルフィを追い詰める一翼を担ったとは考
えなかっただろう」

そしておそらくノイトラは、地下から移動したはずだ。ザエルアポ
ロが従属官^{フラシオン}たちと乗っていたものを使ったのか。

アネットとバラガンの能力の違いはいくつかあるが、そのひとつに
侵食能力の有無がある。

地下深くに潜っていた相手は狙わなければ殺せない。

罅迫り合いをする大剣を軋ませながら、グリーゼが藍染を睨みつけ
る。

「…………まさかお前がここまであの少女に執着するとは思ひもしなかつ

た」

「たしかに私は彼女のことを目にかけていた。君たちと騒ぎ、時折笑えないことを引き起こそうと、退屈はしない日々だった」

「……………」

「だが、それとこれとは別のことだ。私はこのために虚ホロウであつた彼女を破アランカル面として迎え入れたのだから。むしろ彼女は感謝してると思っているよ」

「…………お前が語るべきことではない」

「少なくとも、私は君たちよりも彼女のことを知っているつもりだが」その言葉に、グリーゼは目を細める。これ以上語ったところで時間の無駄だと悟つた。

大剣の鋒きつせきを藍染に突きつける。

格蘭・レイ・ゼロ
王虚の閃光

エスパーダ

十刃から降りたとはいえ、これを扱えるだけの技量は残っていた。しかしそれを藍染が破道の八十八ひりゅうげきぞくしんてんらいほう“飛竜撃賊震天雷砲”で相殺し、着弾地点から衝撃波が巻き起こる。

砂煙の中からグリーゼが飛び出した。

それを待ち構えていた藍染が素早く手を結ぶ。

「滲にじみ出す混濁こんだくの紋章 不遜ふそんなる狂気の器 湧きあがり・否定し 痺れ・瞬き 眠りを妨げる 爬行はこうする鉄の王女 絶えず自壊する泥の人形 結合せよ 反発せよ 地に満ち己の無力を知れ。——破道の九
十」

黒棺くろくわん

藍染による、完全詠唱の九十番代鬼道。

手甲に覆われた手が死神に届く直前、黒い直方体状の重力の奔流でグリーゼを囲い、さながら巨大な獣の顎のように飲み込んだ。

天高く伸びる黒は空を覆い隠し、壁自体が耐え切れなかつたことで噴き出した余波が藍染の裾をはためかせる。

詠唱破棄として本来の威力の3分の1以下であろうと、死神の隊長格を戦闘不能にさせるチカラ。

それがたつたひとりに完全な形で叩きつけられた。

その結果は事実として視界に映ることになる。

——漆黒の塔が、縦から真つ二つに割れた。

ひび割れた壁から破面アランカルの両手が現れ、鬼道を強引に引き裂く。崩壊していく黒棺くろひつばがさらにバラバラになると、蟲たちが奇声を上げながら貪り喰い、その構成していたすべての霊子を甲冑の騎士に献上した。

グリーゼが咆哮する。

鎧がさらに強固になり、蟲じみた刺々しい形へと変質していった。そのことに、藍染はかすかに驚嘆したような表情をしている。

「そこまでか。どうやら、君のことを侮っていたらしい」

砂漠を鳴動させるような霊圧を放出するグリーゼが大剣を構えた。

「……お前が舞台上に上がる資格などありはしない。そこを退け——死神」

「面白いことを言うものだ。君たちが彼女を救う選択肢のなかでもっとも最短だったことは、この私を殺すことだった。しかしそれをしなかったのは、君たちふたりでは私を殺し得ないことを察したからだろう。それがひとりで私に届くと思っただのか——破面アランカル」

そしてここにきて、初めて藍染が酷薄に笑った。

「君たちが評した茶番はすでに終わっている。もうすでに、新しい幕は上がっているのさ」

—————

蟻地獄のように飛び出した巨大な容器の中から、ヤミーがその巨体を窮屈そうに出した。

灰色だらけの砂漠に目当ての相手を見つけるものの、頭をボリボリと搔き、見るからに気乗りしない様子でしばらくその場にいた。

それもそのはず、彼は藍染に命令されてなければこんな場所には来なかっただろう。

いや、来ること自体は問題ない。しかしその命令の内容が、同じく受け取ったノイトラとは逆に、ヤミーにとってはあまり気持ちのいい

ものではなかったからだ。

完全に直感で行動するヤミーにとって、最初に関心が持てなければよほどのことがない限り関心のないまま。そしてやりたくもないことであれば、最後までやろうとは思わない。

遅れてやって来ることは前もって決められていたが、それよりもさらに遅くにヤミーはやって来た。

起こりうる出来事を見なくても済むように。

しかしヤミーに気づいたノイトラがジェスチャーでこっちに来ていと言ってきた。そのことに苛立ちを感じつつ、巨体を揺らしながらそちらへ歩いていく。

「遅エじやねエかよ。このままとんずらくのかと思ってたぜ」

「ウルセえよ」

ひどく、面倒だ。

ノイトラのすぐ前まで近づいたヤミーは、さつきから聴こえていた異音の正体を目にする。

「……あ、ははは……、はは、……あは………は、は………ははは………あ……はは、は」

砂の上に座り込み、動かなくなった女の体をそっと抱きしめて、壊れたスピーカーのように乾ききって色のない笑い声を漏らし続ける少女。光の消えた金色の双眸から絶えず涙が流れ、空虚さを一層引き立てていた。

これまで見てきた天真爛漫な姿などそこにはない。

あるのはただ、弱りきった心を徹底的に^{なぶ}剥られ、廃人のようになっていたモノだけだった。

「まあ、何かするまでもなかったぜ。無理やり真実つてのを見せてやったら、すぐにぶっ壊れちまった」

それなりに満足したのか、ノイトラの声にはどこことなく飽きがある。

しかしヤミーは鼻を鳴らすと、すぐに少女から背を向ける。

「あとはオマエがやとけ。……くだらねえし、俺は帰る」

「オイオイ、オレがこのチビをこのままにしてた理由はちゃんとある

んだぜ、ヤミー。テメエもそれなりにコイツにご執心だっただろ？
だからあとは好きに使っていいんだぜ、後始末をしてくれるってんならなア」

「……………」

「そう怒るんじゃねエよ。オレあ、まだコイツにや何もしてねエぜ？」
「いい加減にしろよ」

ノイトラもかなりの長身であるが、それを軽く超える体躯のヤミーが怒りをあらわに眼帯の男を見下ろした。

「今頃キレんのかよ」

「ノイトラ、勘違いすんじゃねエぞ。十刃^{エスパーダ}で最強なのはテメーじゃなくてこの俺だ。これ以上俺をおちよくるつもりなら、ぶっ殺す」

「ハッ、ならやってみるか？」

下卑た笑みを好戦的なものにするノイトラ。それに盛大に眉をしかめ、ヤミーはこの場でこの男を殺そうかと考える。

だが視線をずらし、魂が抜け切ったかのようなニルフィを見て、途端に怒りが別の感情に塗りつぶされた。

喪失感などというものは、大男にとって初めて抱いた感情だ。

「好きにやってみろ」

気のせいかわずかに力のない声で返し、ヤミーはぶつけどころのない感情を砂漠に叩きつけた。

砂の噴水を見上げながらノイトラは腑抜けたものだと考える。

それもこれもすべて、うしろで廃人になってしまった少女のせいだ。彼女の姿があるとある女の十刃^{エスパーダ}のものと重なっていたように見えて、いつだつて感情がささくれ立つ。

巨大な斬魄刀の刃をニルフィの首に添える。

少女は焦点の合わない瞳で、刃に映る自分の顔を見ていた。

「恨むんなら理不尽つてのを恨んどけ。テメエは、ここで終わりだ」
「……………」

「まア、先に死んでった奴らが待ってるだろうぜ。オレは目の前から目障りなガキが消えりゃあそれでー」

「ー死んでないよ」

自分は何か、この少女について思い違いをしていたのではないか？
それこそほかの十刃たちですら気付かなかった、その本質を。
パキン……、と儂い音が耳を打つ。

それはまるで、仮面が割れたかのような霊圧の断末魔で。

「私、みんなのこと、大好きなんだ。ホントのホントのホントのホントのホントのホントに!! だあいすきなんだ。もちろん、アネットのことも……でもキミはダメだ。なんで、アネットにこんなことしちゃったの？ 殺しちゃったら、ダメだよ。こんな、こんな!!」

ぐるん、と音がつきそうな動作でニルファイが首をノイトラにめぐらせる。

歪な少女の笑顔。怒りを笑みに無理やり変えたかのような、そんな代物。

しかしそれは、眼帯の男が思っていたような種類のものではなくて。

「私がー喰べるハズだったのに!!」

気づいたときには、小さな手がノイトラの顔面を掴んでいた。

アガラール・セロ
掴み虚閃

グリムジョーが使うような、相手の体の一部を鷲掴みにした状態で、零距离で虚閃を放つという荒業。ニルファイが使えばただでさえ強力な技が、なにかの枷がはずれたかのように威力が数段上がったという。

首から上が消えた錯覚。

鋼皮を全開にしたおかげでそれはまぬがれたが、はるか後方に吹き飛ばされて顔が滅茶苦茶にされた。眼帯がちぎれ飛び、左目にある虚の孔が晒される。

「……ッ、チイツ！ そういうことかよ！」

すべて理解したわけではない。

だがハッキリすることは、これさえも藍染の予定通りなのだろうということだ。

そのことにノイトラの額に青筋が浮かぶ。

怒りを主軸として、感情が破裂した。

「祈れ『サンタテレサ聖哭螳螂』」

膨大な霊圧が吹き荒れると、砂塵のなかに巨大な三日月のシルエツトが浮かび上がる。

頭に左右非対称の三日月のような角が生え、腕が節足動物のような装甲で覆われ四本に増え、その四本の腕に大鎌を持つ姿に変わり、腹部を囲む様に角のようなものがいくつも形成される。

射殺さんばかりに、ニルフィを睨みつけた。

眼前の少女は、狂ったように笑いながら絶えず涙を流し続けている。腕を掻きむしり、白い細腕から幾筋もの血が流れ、肉がむき出しになる。

「アハハ、そうだよね！ みんなが死ぬはずなんかないもん！ クヒヒツ、アハハツ、そうだよ、死んでなんかないんだ！ やだなあ、私ったら嫌な夢を見ちゃった。そんなはずなのにね！ みんな、ここにいるもん！ キハ、キハハハツ」

ニルフィの豹変ぶりにノイトラは目を細めた。

狂った少女の姿が、どうしてもニルフィネス・リーセグリンガーとは重ならなかったのである。

そして、相変わらず焦点の合わない目と視線がぶつかった。すぐに、ニルフィの表情が抜け落ちる。

「でも、だめだ。キミのせいで悪い夢のままだ。ああ、そうだね。ぜんぶ、消さないと。いままでみたいにな、消さないと……私は、独りだ」最後の言葉だけは、ひどく寂しげだった。少女が肩越しに振り返る。そこには、倒れたままの朱色の女がいた。

ニルフィの手が斬魄刀に添えられる。

涼やかな鞘走りの音が鳴り、逆手に持ったそれを優しく抱いた。

「壊せー！ 『イルシオン無貌幻魔』」

終わる者、立ち上がる者

ヤミーの乗ってきた乗り物から、コロんと転がり出る毛玉がひとつ。

クツカプーロだ。ヤミーに気づかれずにくつついてきたのだろう。なぜそうしたのはクツカプーロにしかわからない。そこにどんな感情があるのかも、クツカプーロの胸のなかに仕舞われる。

短い足を懸命に動かして蟻地獄のような坂を登りきり、クツカプーロは見た。

光を反射することのない黒い球体を。

—————

「壊せ『無貌幻魔』」

少女が唱えた直後、その矮躯を黒い帯が包み込んだ。静かだった。

ノイトラや他の十刃エスパーダの時のような圧倒的な霊圧が放出されることもなく、そよ風ひとつ起こらない。むしろ、元から空気のようなものが、さらに希薄になつてしまつたと言つてもいい。

球体となつた帯の頂点にヒビが走る。そしてまるで孵化するように、その球体は砕け散つた。

破片と一緒に、少女が音もなく砂漠に降り立つ。

「ーなんだ、ありやあ？」

構えていたノイトラはその異様な姿に内心首を傾げた。

刀剣解放をしたニルフィの姿は、普段の死覇装ではなく、拘束具レザインナー革下着のような肢体を浮き立たせて締め上げるような背徳的な服装となつている。

首にはチョーカーとも思えぬ無骨な首輪。

仮面の名残であつた角が消え、彼女自身の変化といえればそれくらいのものだ。

問題は、その惜しげもなく晒された背中。

そこに寄生するかのようになり、また腰あたりから体を分たれたように、上半身だけの怪物がへばりついていった。

見てくれは骨と皮だけでも言おうか。ちょうどその頭部をニルフィの頭上に被さるように伸ばし、節くれた腕は地面について余るほど長く、また手も巨大な盾のように広がっている。

さながら二人羽織のようにして、ニルフィを守るようにその奇獣は覆い被さっていた。

奇獣の頭部からは巨大な角が後方に伸び、象徴は山羊か、羊か、はたまたー悪魔か。

その奇獣にも無骨な首輪が付いており、鎖がニルフィの首輪と繋がっている。

ー飾り、つてワケでもねエよな。

その奇獣は自らの意思があるかのように、首をカクカクとせわしなく動かしている。対して、ニルフィは先の狂乱が嘘のように、魂が抜け落ちたかのような表情で微動だにしない。

このような帰刃^{レスレクシオン}は過去になかった。

多くはノイトラのように自分の体を変化させるもので、そこは人型も獣型も千差万別だった。また、アールロニーロのように己の肉体を別生物に変えるようなものがあったても、あれらはあくまで本体が本人であるとハッキリしていた。

だがこれはどうだ。

奇獣のほうが、少女の肉体を操っているかのようにではないか。

しかし、少女が足を踏み出したことでノイトラの思考は中断した。少なくとも足だけはニルフィのものだ。彼女が動けることに不思議ではない。

視線を上げる。視線が、底なし沼のような少女の瞳と交わった。

そこでノイトラの本能が『次の瞬間に自分は死ぬ』という警鐘を響かせ、それが現実になるような光景が広がった。

ニルフィの周囲に数十の霊子の砲門が現れ、そのすべてから破壊の奔流が溢れ出る。

王虚の閃光^{グラン・レイ・ゼロ}

その攻撃は虚^{ウエコムンド}圏の空を駆け、それに合わせて空間がひしやげていった。

辛うじて響^{ソニード}転で回避したノイトラだが、それだけで攻撃が止む気配がない。どころかノイトラを追尾してマシンガンのように連射され、ついには、十を超える王虚^{グラン・レイ・ゼロ}の閃光の直撃を受けてしまう。

「ガ、ア……ッ！」

ーーンだよ！ 聞いてねエぞこんなの！！

防御にまわした四本の腕は根元から消滅しており、帰^{レスレクシオン}刃をしたばかりだというのに、ノイトラはすでに満身創痍だった。

彼の掲げる歴代最硬の鋼皮^{イエロ}というのは、自称であつても詐称ではない。限りなく事実だ。

それが意味を成していないのが最大の誤算である。

超速再生で腕を生やすヒマもなくニルファイが眼前に現れた。

それに蹴りで対処しようとするノイトラ。

しかし長い脚を振り上げることでもできずにノイトラは盛大に吐血した。

彼の腹には、いくつもの螺旋状の痕がある。もうすでに瞬^{しゅんこう}関による攻撃を受けたあとだと気づいたのは、脳に浸透する衝撃を顔面に受けてからだだった。

「こ、のーガキイイイイイイイ！！」

背中から倒れそうになるのをプライドだけで防ぎ、瞬間的に再生させた四本の腕の貫手をニルファイの急所に叩き込んだ。

それを甘んじて受けるようにする少女。

消えないのなら幻影でもない。

仕留めたと確信したノイトラは、その手応えに眦^{まなじり}をわななかせる。

わずかに後退させども、貫手がニルファイを傷つけることはなかった。

なにしろその手応えは、彼女の鋼皮^{イエロ}は以前までのような紙装甲ではなく、十刃^{エスパーダ}最硬であるノイトラの模倣されたものということ伝えてきたからだ。

コイツは遊んでいる。

そのようにノイトラは感じた。

いまこの瞬間まで、ニルフィは何度ノイトラを殺せる機会があったのか。

それをあえて少女は見逃している。いつぞやのルピのように、いたぶり尽くし、徹底的にノイトラを潰すために。

大きく飛びすぎり、男が怨嗟の声を上げる。

「ツ、クソ、クソ、クソツツ、クソがアツ!!」

侮蔑、軽蔑、差別。それらがノイトラの頭の中から消えていき、最後に残ったのは三白眼に宿る明確な敵意だけだった。

自分が、負ける？　今まで卑下してきたメス相手に？

奥の手でもあった残り二本の腕を生やし、計六本の腕に大鎌を握って振り回す。

迫り来る刃をそよ風に揺れる木の葉のようにニルフィが躲している。まるでノイトラの攻撃を、受ける価値すらないとも言おうように。

逆に彼女の放つ霊子の刃は、さながらバターに差し込んだナイフのようにノイトラの鋼皮^{イエロ}を切り裂いた。同時にノイトラの誇りやプライドもズタズタに引き裂くおまけ付きだ。

六本の鎌を一齐に投げる。相手も霊子の刃を飛ばし、迎撃。

ノイトラ、舌を突き出し虚閃^{セロ}を撃つ。当たらない。ニルフィはノイトラのすぐ下にいた。気づくよりも先に少女の掌底がノイトラの顎を打ち、舌を噛み切らせる。

男がすべての腕で掴みかかった。それを奇獣が受け止め、逆にノイトラのことをねじ伏せる。パワーが桁違いだった。腕をもがれ、息をつまらせた瞬間、ノイトラは巨大な両手に無造作に掴まれて砂漠に頭から叩きつけられた。

起き上がろうとするノイトラを虫の標本のように霊子の刃が地面に縫い付ける。

奇獣の細さに釣り合わぬ豪腕によって顔面が潰された。ニルフィの手が迫り、鼻をパーツのように顔からむしり取られた。最初に股間を踏み潰され、次第に上へと上がっていき、最後には顔面を奴隷のよ

うに蹴られる。

こんなモノは戦いではない。

自分は戦いのなかで死にたいのに、いや、それが相手も分かっているからこそこんなことをしているのか。

そこで脳裏に浮かび上がったのは過去の光景。

かつて敵視していた女の十刃エスパーダをザエルアポロとの闇討で葬った、そのあとのことだ。

他の十刃エスパーダたちは何があったのかを勘づいていたのだろう。それはブリメーラ・エスパーダエスパーダの第一十刃であったアネットも同じであった。葬った女とないかしの交流があったのだと漠然に覚えている。

その時、従属官フラシオンであった少女を連れられた彼女とすれ違いざまに目が合った。

どんな取り乱し方をするのか。怒りか？ 悲しみか？ 内心ほくそ笑みながら考えていたノイトラの思考は、次の瞬間停止する。

『ーやっぱりアンタって、雑魚ね』

そこにあつたのは無関心だった。

もはや格下どころか存在を認めることもない目をしていた。

そんな目が、ノイトラ自身、見ようとしてもしなかった事実を見ているようで、訳もわからぬ激情に支配されたノイトラはアネットを殺しにかかった。

実際に、殺されかけたのはノイトラの方だ。

死ななかつたのはただ、アネットがノイトラに殺す価値を見出すことがなかつただけのこと。半殺しにしてそれで終わり。

ボロ布のようになってしまった死覇装の奥に隠れていた体には、今でもその時の醜い傷跡が残っていた。

まだ自分は道半ばなのである。それを強制的に終わらせられるのか？ こんな、今まで卑下してきた子供に？

そんなこと、許せるはずもない。

自分は戦いのなかで死ぬのだ。こんな少女の玩具になって、子供のよう無邪気さで破壊されるためにいるのではない。

ノイトラの奇声じみた咆哮が喉からほとばしる。

突貫。それしかない。いまのノイトラにとって、それだけが生き残る術だと疑いもなく信じられた。

腹に突き刺さった刃を引き抜き、爆笑するかのように震えまくる脚を叱咤する。

すべての腕の鎌を構え、さながら重戦車の装甲のごとき姿となりー駆け出す。

そして無様に顔から砂漠に突っ込んだ。

突貫するための両足が膝の下から消え、少しばかり後方に転がっていた。生まれた激痛に歯を食いしぼる。その歯も、蹴りを入れられたことで残っていたものも砕けた。

「ブツ……、ハアツ、ハアツ……」

歯の破片の混じった血を口から吐き出す。

ここでようやく、内蔵欠損のダメージがやって来た。最初の咳をきっかけに、おびただしい量の血がポンプのように口から流れ出す。ニルファイがノイトラの腹を無造作に蹴り上げる。辛うじて腹に原型を留めていた残りの内蔵が破裂し、死に際の蟲のようにノイトラもがいた。

ここまで、ニルファイは能力らしい能力を使ってすらいない。単純なチカラを見せつけることでの圧倒的な立場であることを印象づけているのだろう。

見下ろす金色の目は、潰れた羽虫を映している。

「……の、や……ろ……」

ノイトラの右目が破裂する。激痛にのたうち回りながら、ノイトラは暗闇しか見ることができなくなった。

自分は最初から勘違いをしていたのではないのだろうか。

この少女はたしかに強い。それとまともに当たるのが面倒だからと心を壊してから潰す算段であった。しかしそれがどの程度まで強いのかを測りかねていたのだ。

異常だ。

素のチカラでここまでだということ、はたして、他の十刃は把握エスパーダしているのか？

右腕のひとつに握られた彼の頭部に浮かぶ表情は、おそらくこの世のすべてを憎むようなものだったのだろうが、生憎にもニルフィの解体を受け続けたせいで、もはや誰のものだったのかもわからなくなっていた。

それを無表情のまま見下ろすニルフィ。

背の奇獣が腕を伸ばし、ノイトラの遺骸を無造作に掴む。まず首を手にとると奇獣が口に放り込み、数度ほど咀嚼したあとは、体のほうも一気に飲み込む。

節くれた体が膨れることもなく、ノイトラがいたであろう痕跡は彼が撒き散らした血だけであった。

ヤミーは戦いの一部始終を見ていた。

なぜノイトラが自殺まがいのことをしたのか。そんなことは彼にとつてどうでもよく、そしてこれからの行動を決めるために、たたず佇む少女に声を掛ける。

「おい、ニルフィ」

そしてすぐに、少女が意識を取り戻すなりしていた場合のことを考えていなかったことに気づく。

ヤミーはニルフィを殺すように藍染から命令されていた。

ノイトラが死んだからといって、それは変わらない。ならばなぜ名を呼んでしまったのか。答えは、見つからない。

「なあ……。それが、オメエの答えかよ？」

逆にニルフィは答えを出しているようで、ヤミーは声を重くする。

ヤミーの右肩の切断面から勢いよく血が噴出した。少女の放った霊子の刃がこの結果を生み出したのだ。

いまだにニルフィの金色の双眸は焦点が合っておらず、どこを見ているのかすらわからない。少なくとも、ヤミーの姿が目に入っていないことだけはたしかだ。

彼女の意思があるとか関係ない。

すでに少女は壊れきっているようだった。

ーああ、ああ、苛いらつかせてくれるぜ。

自分を傷つけたことも含め、なによりもニルフィがここまで狂って

しまった現状に、ハラワタが煮えくり返るような怒りがふつつつと大男のなかで沸き出てくる。

他の保護者面していた十刃エスパーダや破面ブレイクはなにをしているのだろう。

そんな八つ当たりじみた激情が浮かぶと同時に、思う。

——俺も、何も出来てねえじゃねえかよ。

難しく考えることは苦手だ。

だからヤミーは、余計な命令とか要因を頭のなかから消して、彼らしく、己の直感に従うだけの行動に移る。

どれだけ矛盾があろうと、理に適っていなかろうと、力尽くで、強引に、彼らしい選択で。

「仕方ねえ。仕方ねえからよ。せつかく寝まくって喰いまくって溜めに溜めた霊圧でよオ……。——オメエのことを無理やり正気に戻してやろうじゃねえかよ!!」

ボコン、とヤミーの肉体が隆起した。筋肉が風船のように膨らんで上半身の死覇装を弾けさせる。

頭あたまになった左腕の上腕部には『10』の数字。

彼はそのまま右腕で斬魄刀を一気に引き抜いた。

「ブチ切れる『憤獣』」

刀身が爆発を起こして爆風を噴き上げる。

その爆風は『10』の数字の一部を徐々に削ぎ落としていき、ついには『0』へと変わった。

第10十刃デイエス・エスパーダから、第0十刃ゼロ・エスパーダへと。

それはあまりにも巨大にして強大だった。

肉体も変化して、腰には赤い前垂れが出現し、下半身が計十六本の足を持つサソリの様な姿になり、尻尾の部分がハンマーの様な形状となっている。さらに頭部の角らしき隆起がより強く顕在化し、背骨に沿って柱に似た角が生え、下顎にあった仮面の名残が完全に定着していた。

なによりもその大きさだ。

もともと小山のようであったものが、本物の山へと変わったようである。

大顎の隙間から蒸気する息を吐き出し、対比すれば豆粒ほどしかない少女を見下ろす。

「ぶっ叩きやあ直るだろう、なア？」

そう言うときヤミーは巨塔のような右腕を振り下ろした。

—————

「おーいおいおい。もうヤミーと戦^やりあってるぜ、あの嬢ちゃん」

ラス・ノーチエス

虚夜宮の屋上の一角を陣取って、蛇男が額に手をかざしながら砂漠の奥を見ていた。

かなりの距離があるというのにヤミーの巨体だけはハッキリと見えており、霊圧も咆哮もこちらまで届いている有様だった。伊達にエスパーダ十刃最強の『0』の数字の持ち主をやつてない。

「そりや別にいいけどよ。俺ら、ここで油売つてもいいのかよ」

ニルフィとヤミーの戦いを見る価値もないとでもいうように、犬男のほうは早々と背を向けている。

「たしかに油は売るほどないんだ、オレだつてすぐに行くさ」

「なら急げばいいだろ。下じゃあ、グリーゼと藍染が戦つてンじゃねえかよ。邪魔されないのも今のうちだろ」

「まあ、そうだな。グリーゼもそれがわかつて藍染を止めてるだろうし。けど、めぼしいヤツらには声を掛けてやったんだ。あと数人が増えようが増えまいが、さして変わりもしないと思うけどな」

「どこことなく焦りを帯びる犬頭に対し、蛇男のほうは能天気そうな声で返す。

「それにさ、あの嬢ちゃんはノイトラを遊び半分で殺せるつっイカレた強さを持つてんだよ。昔のザエルアポロ並か、それ以上だろうな」

かつてのザエルアポロはヴァストローデ最上級大虚であり、初代にしてゼロ・エスパーダ元第0十刃グラン・レイ・ゼロでもあった。数十発の王虚の閃光を撃てるのは当たり前であり、主人

としていたバラガンでさえ止めるのが非常に難しい存在でもある。

ハツキリ言つて、レスレクシオン 帰刃状態のヤミーを凌駕しているだろう。

それと同等のニルファイが戦った場合、たとえヤミーであろうと勝機は薄くなる。

「ならなんで見てんだよ。結果のわかりきった戦いほどこくだらねエもんはねエだろ。……それにオレらがやってることだって、本当は無意味なんだろう?」

「まあ、そうだな。ヤミーで止められないなら詰み確定だ。いや、もうすでに詰んでる状態だよ」

「ならなんで……」

「変わったって、思わないか?」

「はあ?」

犬頭が胡散臭そうな顔で腐れ縁の破面アランカルを見やる。

しかし蛇男は苦笑とも呆れともつかない表情を浮かべているだけだった。

「ノイトラは変わらなかつた。他の奴らは変わった。ヤミーはちよつとばかり変わった。……だから俺は、この戦いを最後まで見るのさ。たったそれだけの要素で、あの嬢ちゃんと同じ舞台上がれるかどうかを見極めるためにな」

—————

豪腕が砂漠に叩きつけられると同時に、ウエコムンド 虚圏が震撼する。

そのパワーは自然災害の地震に通じるものがある。衝撃波によって砂の噴水が空へと昇り、霊圧によって内側からはじけ飛ぶ。

「チィ、どこ行きやがった」

巨体ゆえに細かい動作ができないヤミーが首を巡らせる。

そしてすぐに、自分の周囲が霧に包まれていることに気づいた。

しゅんこう
瞬間

打撃の嵐。

それらがヤミーの体に満遍なく襲い掛かり、次々と肉を打つてい

く。白哉とノイトラを容易く追い詰めた技によって倒れるかと思いきや、彼の分厚い筋肉と脂肪によって打撃の振動が通らずに無効化されていった。

「ぺちぺちぺちウゼえんだよオ!!」

ヤミーが咆哮する。

霧が吹き飛び、その中からニルフィの姿が現れた。

そこへ技術もなく、しかし力強さという点において十刃^{エスパーダ}最高の威力を実現させる虚弾^{バラ}を出す。拳とともに出現する高速の霊子の攻撃は、戦艦の一斉掃射のように連発された。

攻撃がニルフィに当たった。

しかし虚弾^{バラ}を一発受けるとすぐに消え、次々と現れてはもぐらたたきのようにヤミーが潰していく。

「コマけえな、オイッ!」

埒^{らち}があかない。

そう思ったヤミーは、尻尾の鎚で放つ虚弾^{バラ}を砂漠に打ち込んだ。すると天地が逆転するかのようになり、周囲一帯の砂が空へと昇る。

数十体いた幻影はかき消され、本物らしい一体をヤミーが視界に捉えた。

虚閃^{セロ}

すかさずヤミーが口から閃光を放つ。巨砲ゆえに範囲も広く、空中を落下するニルフィを捉えた。

だが、奇獣が首を前方に伸ばしてガパリと口を開く。

重奏虚閃^{セロ・ドール}

ヤミーの虚閃^{セロ}がすべて奇獣の口に吸い込まれた。

「なにイ!」

ニルフィの姿が掻き消えると、驚愕に目を剥くヤミーの眼前に現れ、奇獣の口から先ほどの虚閃^{セロ}に自分の霊圧を上乗せしたものを吐き出させる。

その攻撃を受け、ぐらりとヤミーの巨体が傾くかに思われた。

しかしすぐに両目を見開き、両腕からの虚弾^{バラ}でニルフィを追い払う。

「痛エ……。痛たいぜえ、効いたぜえーなア!!」

叫び、次々と拳を振るうヤミー。ニルフィは幻影と分身を使って躲
していき、彼の苛立ちを煽っていく。

しかしその戦闘被害はノイトラ戦との比ではなく、並みの破面が
足を踏み入れたが最後、文字通り消滅させられる。

ヤミーが大口を開け、ニルフィが手をかざした。

虚閃

二人の十刃の放つ光線が激突する。

ヤミーのものにも劣らぬ大きさのニルフィの虚閃だが、ぶつかつた
瞬間にすぐさま優劣が分かれた。

「俺が、押されてんのか!？」

少女の閃光は巨大な獣の顎のようにヤミーの虚閃を食い破つてく
る。

さらに奇獣が腕を横に伸ばし、開いた二つの手に、黒い球体状の砲
台を生み出す。

黒虚閃

すべてを飲み込む漆黒の光が放たれた。

ヤミーは舌打ちすることさえ惜しみ、両腕に溢れ出る霊圧を凝縮さ
せ、二つの黒い虚閃を迎え撃とうとする。

ぶつかればタダでは済まない。余波だけで、地形が変わる攻撃。

そんなことはヤミーにもわかつた。

だからこそ。

この激戦のなかで生まれる轟音において、その鳴き声が聴こえるは
ずがなかった。

だが聴こえたのだ。

それは鳴き声の主とよく遊んでいた目の前の少女も同じはず。

だというのに、少女は攻撃を止めない。むしろさらに砲台を数十に
増やし、なにもかも消し飛ばそうとする。

「……………」

喉の奥にまでヤミーは言葉が出かかっていた。

それを奥歯で噛み殺し、迎撃に使おうとした両腕を防御にまわし

て、自らの背後に衝撃を一片たりとも逃さぬ構えを取る。

「ーッ、ラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」
来た。

自分の肉体の前面が消滅したのではないか。そんな風に思わせる衝撃はいつたいどれほどぶりか……ヤミーは一瞬だけ意識が切れたのに気づいた。

霊圧が軋きしむ。全身が震える。衝撃が全身と意識を貫いていく。
ヤミーは雄叫びを上げながらそれに耐えた。

だが、退くわけにはいかない。

彼のプライドと、これ以上少女が壊れぬようにするという無意識の意志が、ヤミーをその場に押しとどめた。

「……グッ、ガッ……！　ア……！」

集中砲火を凌しのぎ切ったヤミーは、崩れ落ちるのを腕で支えることで辛うじて防ぐ。

「キャン！　キャン！　キャン！」

「……なんでついて来てんだよ……、バカ犬が……」

背後で心配そうに鳴き続ける子犬のクツカプーロ。

ヤミーはうめきながら吐き捨て、荒れ果てた砂漠に降り立った少女を睨みつける。

「……おい、オメエ。なに、してんだよ」

「……」

「この、バカ犬が……。死ぬトコだったぜ」

「……」

「……ッ、ただ、死ぬのならどうでもいいけどよ。……てめえ、この俺様をよオ、この戦えねえ犬ごと……殺そうとしたよな？」

「……」

「ニルフィ。……オメエのことは、ちよつとは、認めてたんだぜ？　けどな、けどな？」

溜めに溜めた怒りが、ついに解放された。

「俺が認めたのはよオ、ーいまのオメエみたいなヤツじゃねえんだよ!!」

過剰であった筋肉が損傷部分まで回復させながら、余剰と言えるまでに膨れ上がる。

それは留まることを知らず、ついには当初の帰刃レスレクシオンの二倍にまで体積を増やした。

背中に巨大な二本の角が生え、再び二本足になり、四本角の鬼のような顔となった。

怒りにより、際限なく強くなる。

それこそが『憤獣』のチカラだ。

「これ以上、俺をムカつかせんじゃねえよ」

ヤミーらしからぬ静かな口調であったが、それが彼の腹のなかにあるマグマのような怒りを際立たせる。

「……………」

少女が口を動かした……気がした。

声が小さすぎたのか、なにを言ったのかまでヤミーには聞こえなかった。ただ、ニルフィの顔は、何度か見た泣きそうな弱々しいものをしていたと思う。

ニルフィが体を捻りながらヤミーの腹部に蹴りを放つ。

そこまではいままで見せた体術と一緒に。

違うのは、少女の脚に風がまとわりついたことだ。

『暴風男爵』ヒラルダ 単鳥エル・ウノ・ビコテアル 嘴脚

狂風の嘴くちばしが、ヤミーの巨体を穿うがった。

—————

立ち上がらなければならぬ。

視界の端で砂嵐が空へと巻き起こったのを見ながら、グリーゼは脚に力を込める。

目の前の死神を倒すには剣が必要だったが、そばに落ちているそれをいくら右手で探そうが手に取ることができない。それは右手首から先が切り落とされているからだ。気づいたのは、すぐあとのことだ。

鎧の隙間から血が流れ続け、意識に霞が掛かる。

「もう、止めにしらないか？」

片手に斬魄刀を下げる藍染が言った。

「たとえここで君が私を倒したとしても、その体の君ではニルフィを止めることはできないだろう。もとより、更木剣八から深手を負わされていたんだ。たとえ話が現実になるより先に君は果てる。君ほどの人材を失うのもまた、私には惜しいんだ」

「……………」

「諦める、という選択肢は悪いものではない。その上で聞こう。私と一緒に来る気はないか？」

「…………断る」

グリーゼの答えを予期していたかのように、藍染は表情を変えない。

「これは勧誘ではない。命令だ。それでもかい？」

「…………そうだからこそだ。命令は、主たる者がすることだ。…………俺は、お前のことを一度も主人と思つたことはない」

「さあ、どうだろう。私は上に立つ者であると自覚しているが」

「…………ただの独りよがりだ。誰も、お前を見ていない。誰もな。東仙もゾマリも、見ていたのはお前の偶像に過ぎなかった」

吐き捨て、グリーゼが左足を支えとして立ち上がる。甲冑に包まれていて外からは見えないが、少し前にその部位も切り落とされているせいで中身は空洞だった。

「…………お前が下と思つている相手は誰も、お前のことを主人とは認めないだろうな。配下を軽んじる主人ほどくだらぬものはないからだ」

「それは君の持論だろう」

「…………ならばなぜ、十刃たちがお前よりもニルフィに入れ込んだか分かるか？」

「……………」

「…………それがお前とあの少女の違いだ」

しばらく押し黙っていた藍染は薄く笑っていた口を引き締め、グリーゼに尋ねた。

「なぜだ？ 君は虚^{ホロウ}だった時、ニルファイに会っているだろう。その時の主人とコロニーを彼女のせいで失っているはずだ。彼女が最初にトレス・シフラス3ヶタの巢に現れたときに剣を振ったのも、てっきり仇討ちのためかと思っていたけどね。それだというのになぜ、立ち上がるんだ？」

たしかにそうだ。

幼い少女の纏っていた霊圧は、覚えのあるものだった。その時の彼女が覚えていなかろうと、グリーゼが忘れるはずもないものだ。

仇討ちはいつでもできた。

しかし最初に刀剣解放した時も、全力を出せば戦いの術を知らぬ少女を屠ることなど赤子の手を捻るよりも容易いことだ。その時だけじゃない。ニルファイの十刃^{エスパーダ}就任の際に、藍染から従属官^{フランオン}になるように指示を出されており、さらにいつでも殺して構わないという許可まで貰っていた。

だが出来なかった。

その時の主人から仇討ちは無駄なことだ、と言われたからでもあったが、野心も欲求もないグリーゼには、殺意を抱くこともできないこともできずに手を下すことができなかった。

それゆえに最初の邂逅の時点でわざと見逃してしている。

しかし、それからはどうだ。

少女が死のうが死なまいがどうでもよかったはずだというのに、こうしてグリーゼはあがこうとしている。

命令されなければ動くこともない自分が、なぜ？

そうやって自問し続けて、茶番を引き起こすアネットの言葉で、答えがわかった。

「……約束、してしまっただ」

いつだって、少女はグリーゼに命令したことはなかった。

すべて、可愛らしいお願いや、約束の範疇だけで。

「……みんなで帰ると、……約束したんだ。だから俺は、帰るべき場所を守らなくてはならない。それが叶わぬ夢だろうとー絶対」

脳裏に映る、三人で過ごした何気ない日常。

もう、取り返しのつかないところまで来ているのかもしれない。
ひよつとしたらこの行動もすべて無意味なのかもしれない。

だが、それでも。

これ以上ニルフィが傷つき、壊れていいという理由にはならないではないか。

グリーゼが右手の甲冑の中に霊子の義手を作り、ひび割れた大剣の柄を強く握る。

くだらないと言いたげに藍染が目を細める。

「叶わないなら諦めるのが賢明なはずだ。そして、妥協する必要がある」

「……諦める、か。それがいままで軽い気持ちでできたのが懐かしいな」

グリーゼが雄叫びを上げながら前へ突き進む。

周囲の物質すべて霊子に還元しながら、愚直なまでに、この先には掴むべき未来があるのだと信じるように。

愚者の従者は剣を手に

虚^{ウエコムンド}圏の辺境にある、さほど規模は大きくないコロニーだった。
いまを生きられればいい。

それがコロニーにいる者たちの総意であり、自分たちからは他のコロニーを襲うこともせず、時折やって来る周辺の中規模コロニーの攻撃を撃退するくらいしか戦いはしない。

そんな場所にも統べる者は当然存在する。

昆虫じみたデザインの鎧を着込んだかのような姿のグリーゼも、『彼女』の前で膝を突いていた。

コロニーの奥にある一室に作られた壁と同化している横に長い椅子に座つてくつろぐ、女の虚^{ホロウ}がそれだった。

姿は人間そのものだろう。顔は目の部分だけ鋭く切り抜いたようなのっぺらぼうの仮面に覆われており、額から伸びる二本の刃のような角が鬼を連想させた。体つきは均整の取れたスレンダーなもので、仮面の奥の顔も、怜^{れいり}惻なものと思うのに難くない。

彼女の名は、クシヤナ。

グリーゼの最初の主人の名だった。

クシヤナは切れ長の瞳を物憂げに伏せ、しばらくそうしていると、横の壁にくり抜かれた穴から見える満月を眺め始める。それもまたしばらく時間を置くと止め、色香のある所作でため息をつく。

仮面さえなければ、絶世の、と枕^{まくら}詞^{うたば}のつく若い娘の絵画としてなかなか映えただろう。

そしてクシヤナは、ボソリと零した。

「ーつまらん」

その言葉にグリーゼが反応するよりも先に、ここにありはしない何かに当り散らすようにクシヤナが叫ぶ。

「つまらんつまらんつまらん!! ー退屈! 妾^{わらわ}は退屈じゃ! もう我慢できぬ!」

ジタバタと子供のように椅子の上で手足を暴れさせる主人に、グリーゼは趣旨をハッキリさせようと尋ねた。

「……退屈、というのは？」

「五年？ くらい前に、妾たちにねちねち小蠅のように攻めてきたコロニーがあったじゃろ。覚えとるかや？」

「……俺と主の二人だけの単身突入で壊滅させた場所だな。主がおちおち昼寝もできないとブチギレて、俺を引っ張って出陣したはずだ」

「そう、おぬしと潰した場所じゃ。いや、いまはどうでもいい。それか
らな、ぱったりと他のコロニーの攻撃が無くなっておる」

はて、とグリーンゼは内心首を傾げた。

「……それで良かったのではないのか？ 主はそれから、自墮落に怠惰を貪る生活ができて満足だったと思うが」

「妾のことを情性の権化のように言うな」

ムスツとしながらクシャナがグリーンゼを軽く睨む。

正直に言うならば、怖さとは無縁だ。戦闘力こそこちらの虚では敵わない実力を持っているものの、小柄で痩せ型な体躯のせいで、大きさはグリーンゼの半分もない。

そしてクシャナとは中級大虚時代から生きてきたが、グリーンゼがあれやこれやと世話をして甘やかしまくってしまい、少しばかり我が儘で子供っぽい部分が残ってしまった。

まあ、それが周囲のコロニーに舐められる原因でいままで攻められて来たのだが。

「たまにはな、攻めて来てもいいと言っておる」

「……なぜ？」

「いや、たしかに妾はあ奴らが邪魔じゃと言ったが、来るなどは一言も言っておらんぞ？ いつも同じ料理のなかに、別の一品が混じる。するとどうじゃ、その一品がいかに美味となるじゃろ」

「……そう言うのなら、そうなんだろう」

「でじゃ。昼寝続きの日々もいずれば飽きが来る。それを打破するために、小競り合いでもよいからと血がうずいてくるでありんす。だからどこでもいいから、妾たちのコロニーを襲撃して、そして返り討ちにしてやりたい」

ここで合点がいった。どうやらこの小さな主人は、五年前に鬱陶し
がっていた戦いがご所望らしい。

しかしグリーゼにはその欲求を満たしてやることができない。

「……それは、あと数十年は不可能だろう」

「む？ それはなぜじゃ」

「……その五年前に俺が、少し前にここら一帯のコロニーを潰したか
らだ」

「ーは？」

「……主は、他のコロニーが昼寝の邪魔だと言ったんだ。攻めてくる
コロニーは俺たちで潰したものの他にもいくつかある。だから俺は、
それらも一掃しておいた」

グリーゼの言葉を聞き終えると、クシヤナはワナワナと肩を震わせ
始める。

『た、た、た……』と唇のわななきのせいで言葉にならぬ声を喉から
響かせていたが、一分ほどしてついに、椅子から立ち上がると同時に
爆発する。

「たわけッ！ な、なにをしとるんじやおぬしは!?!」

「……だから、周囲の敵になる相手を一掃したと」

「今時の正義の味方でさえ悪はキャッチ・アンド・リリースじゃぞ!?!」

それを、よりによって潰した？ しよ、正気かや、おぬし」

「……必要だと思ひ、つい」

「つい、じゃないわ阿呆！ 驚きすぎて開いた口が塞がらぬ！」

しばらくガミガミとグリーゼを叱り続けるクシヤナ。

沈まぬとはいえ動き続ける虚^{ウエコムンド}圏の月がだいぶ位置を変えた頃
になって、ようやく彼女の怒りはひとまず静まったらしい。

呆れ果てたようにため息を吐くと、クシヤナは椅子に疲れたように
座り込む。

「それで、どうだったかや？」

「……………？」

「どういう気持ちでそやつらを掃除したと訊いておる。妾のために
怒って？ それとも、褒められたくてでもやったのかや？」

グリーゼはすぐにクシヤナが何を言いたいのか理解し、頷くと答える。

「……何も。ただ必要だと思ったから潰したまでだ」

膝を突くグリーゼの頭上から深いため息が降ってくる。

しばらくクシヤナが喋らなかつたのは、呆れて声も出ないということとを体現していたからなのか。

月が動いたかと思う頃になって、ようやく女主人が口を開く。

「せめてな。せめて、戦いを楽しむくらいのはしてみよ」

顔を上げると、どこことなく寂しげな瞳と視線が交わった。

「おぬしはいつもそうじゃ。なにも欲さぬし、行動を起こしたところで目的はすべて妾絡みのことだけ。それなのに主人として持ち上げられている妾はこのカラダ以外なにも与えられぬが、それでもおぬしは欲さぬじゃろう？」

「……命令であればどのようなことでもするが」

「たわけ。そこは嘘でも頷くかするものじゃろう」

「……俺は、嘘をついたようだ」

「……ああ、そうじゃな。おぬしはそういう奴じゃ」

見えもしないクシヤナの表情は、どこか悲しげだった。

—————

「げっ」

ガルガンダ

黒腔から出てきたところをグリーゼに待ち構えられていたクシヤナは、乙女らしからぬ声を上げて首根っこを掴まれた。

「……また、現世に行っていたのか」

「い、いや。妾は、これが初めてで」

「……俺どころかこのコロニーの全員が知っているぞ。もう何度も現世とこちらを行き来しているだろう。それを真似て下の者が死神に殺されないとは限らないんだ、止めはしないが控えて欲しい」

クシヤナがツンとそっぽを向く。顔が仮面で隠れているというのに唇を尖らせていることまでわかるとは、ここまで来るといつそ清々

しい。

ここ最近のクシヤナはお忍びで現世に行くことが多い。

周辺のコロニーが消えたことで自分が残って守る必要性も無くなり、さらには娯楽のベクトルも方向性を迷わせていた頃、彼女の興味は現世へと向いた。

いくらお忍びとはいえ、毎回毎回死神に気づかれてもいるだろう。彼女ならばおいそれとやられはしないだろうが、それはグリーゼが楽観できる要素になりはしない。

「こんな辺鄙へんびな場所より面白いからの。ーああ、そうじゃ！ 海！今日は海を見てきたんじゃ！ 青くて、綺麗な、地平線まで続く海原をな。そこを貴様の体ほどもある小舟に乗って、人間が網を手に、何匹もの魚をー」

隠す気はもはやないのだろう。

いままで溜めいていた言葉が吹っ切れたことと共に溢れ出し、クシヤナは身振り手振り目にしてきたことをグリーゼに語る。

そんなに嬉しそうな顔をされてはグリーゼに止めることも出来るはずがない。

仕方なく彼女を床に下ろした。

ここまで明るく笑うクシヤナは久しぶりだった。最近ウエコムンドは虚圏の王であるバラガンが死神に下されたとかで、やたらと空気がピリついていたのだ。

ようやく一段落ついてすっきりした頃になってクシヤナは目を白黒させ、グリーゼになにか言いたいことがあったんじゃないのかと尋ねる。

「……最近入ってきた新入りのことだ」

「ああ、久しぶりに仲間になったあ奴か。犬のと蛇のとに世話を任せておいたが、なにかやらかしたりでもしたのかや？」

「……いや、そういう訳じゃない。むしろこの場所に馴染んでいくらいだ」

「では、なんじゃ？」

言おうか言わまいか迷いつつ、結局、グリーゼは言うことに決めた。

「……厄介な芽にならない内に、刈り取ったほうが無難だと判断する」
機嫌が良さそうだったクシヤナが鼻白む。

「して、なぜそう思った」

「……以前から虚^{ウエコムンド}圏ではいくつかのコロニーが内部で壊滅していることが噂になっていた。それらに共通するのは、ある虚^{ホロウ}を迎え入れてからだということも」

「まあ、妾も知っておる。バラガン翁と戦ったこともあるのかなんとか、話題になっていたからの」

「……これは言わなかったことだが、以前潰したいくつかのコロニーのうちひとつは、俺がたどり着いた頃にはすでに崩壊していた」

そのコロニーでは全員が捕食されていた。血と臓物が散乱し、時折戦う中で覚えた顔もいくつかあった。

それからグリーゼは周辺を探索していたが、下手人の姿は見つからなかった。

情報を集めるものの、その虚^{ホロウ}らしき存在の情報はあやふやなものばかりで、名前どころか姿かたちさえ安定しない。

そして唐突に現れたこのコロニーの新入り。

関連付けるなどというほうが無理だ。

「つまり、なんじゃ。妾の下に庇護を求めてきたそやつを、殺すべきだど？」

「……そこまでは言わない。だがこの場で戦えるのは、俺や主^{あるじ}を含めた数名だけだ。もしアレが牙を剥くことになれば、戦えない仲間たちは瞬く間に屠られるだろう。だから――」

「そこまでじゃ」

クシヤナが有無を言わせぬ口調で遮った。

「この小さな領域は、誰のものか分かるかや？」

砂に水を含ませるような口調で尋ねるクシヤナに、ほどなくしてグリーゼが答える。

「……主^{あるじ}だ」

「そう、妾こそが頂点。あらゆる意味で弱いおぬしらが勝手に祭り上げ、いつのまにか城の主にまでなっていた、それが妾。異論は無かる

う?」

「……ああ」

「これは責めているわけではありません。妾もそれはわかっておったし、バラガン翁のように野心もなくアネットとかいう火の鳥ほど暴れたがりではない、そこらにいる者と同じ寂しがりな妾は、好きでおぬしたちのような戦いを忌避する者を受け入れた。グリーゼ、おぬしも含めてな」

切れ長の双眸を細めさせることで、クシヤナはさながらカミソリのような眼光を湛える。

「妾が自分に課した義務は、曲がりなりにも自分の意志で引き込んだ仲間を途中で放り投げないこと、ただそれだけじゃ。……妾は長く生きすぎた。足元にはいつも、力を手に入れるために喰らった奴らの死骸が積まれておる。寂しさを紛らわせたい、そのためだけに巻き込んだ力のない仲間にできるせめてもの贖罪じゃからの」

そのことはグリーゼも知っていた。それでなお止めろと言ったグリーゼにクシヤナは怒っているのだと思った。

甘んじてそれを受け入れようとしたグリーゼを、クシヤナが仮面からさらにキツと睨む。

「たわけ。妾がなぜこうして怒ったのか、分からんじやろ?」

「……俺が主の行動概念に口出しをしたからだと判断する」

「……俺が主の行動概念に口出しをしたからだと判断する」

「……俺が主の行動概念に口出しをしたからだと判断する」

「妾がなによりも許せないのは……! おぬしは、妾のことしか案じておらん! 戦えない仲間たちは瞬く間に屠られるだろう? こんな、こんな時だけ有象無象にしか思っていないかった者たちを『仲間』として、妾を守るためだけの理由として扱うな!」

「……ならば。……ならば、俺が全員を守りきって見せる」

「のう、グリーゼ。妾は、自意識過剰ではないと自負しておる。じゃがな、その口にした言葉の理由も、妾が悲しむから言ったに過ぎないんじゃない?」

沈黙こそが答えになったようだ。

クシヤナは泣きそうだった。

どうすれば泣き止むのか過去の経験を記憶から引つ張り出し、道化のような滑稽な演技をする、体を動かさせて気分転換させる、仲間たちを集めて騒ぎ立てるといったものが思い浮かんでくる。

そこに正解があるとなかろうと、グリーゼは自分自身の考えで答えを出せない。

グリーゼの行動原理に彼自身が介在することはない。

常に上の者にとってプラスになるような仕事しかせず、マイナスになるものを排除するだけのプログラムのようなものだ。

だからわからない。自分の行動の何がクシヤナにとってマイナスになったのか。

「……主あるしが必要ないと判断するならば、俺はそれに従うだけだ」

答えに瀕した従者がやっと絞り出せたのは、彼自身、本当に知りたかった解答ではなかった。

「……………」

俯いたままのクシヤナが額をグリーゼの腹にぶつける。

思えば、ここまで身長差がついたのはいつからだだったか。

「のう、グリーゼ。もういいじやろ。妾に、おぬしのことを見せてく
りやれ？」

初めて、主人の命令をこなすことができなかった。

—————

主人とややぎこちない関係となつてから、それから幾ばくかして、
虚ホロウになつてから初めてグリーゼが現世へと姿を現した。

彼女の心を少しでも理解できればいい。それくらいの考えで、暇いとま
を貰つて虚ウエコムンダ圏を離れた。

クシヤナの言っていた通り、晴天の下の海にはいくつもの小さな船
が魚を取るために網を動かしている。

白い砂漠に慣れた身としては、新鮮で綺麗だと素直に思えた。

だが、それだけ。

クシヤナの語っていたように心が軽くなるわけでもない。

存在に勘づいたらしい死神が近づいてきた頃になり、グリーゼは落胆しながら虚^{ウエコムンド}圏へと戻った。

どうにかしてクシヤナと以前までの関係を取り戻したい。

そのことに頭を悩ませながらコロニーの前に降り立ったとき、なにかの手違いで別の場所に来てしまったのかと思った。

蟻塚のような形の家は半ばから倒壊し、グリーゼが他のコロニーを壊滅させたときのようによくつも死骸が散らばっている。動く存在の気配もなく不気味な雰囲気であったが、この場所がグリーゼたちの家であることはすぐに気づいた。

急かされるようにグリーゼは駆ける。

中央にある吹き抜けの空間。

そこが最も破壊痕のひどい場所であり、疑いもなくそこにクシヤナがいるであろうと確信していた。

「む？ おお、遅かったの、グリーゼ」

巨大な瓦礫の影に背を預けて、グリーゼに左半身を向けるようにクシヤナは座り込んでいた。

この惨状に似合わぬほど軽い口調。

それに安堵しながらグリーゼが歩調を緩めた時、月がわずかに動いたのか、影になっていいる部分が明るみに出た。

「……主^{あるじ}？」

「ああ……。こんな姿、見せたくはなかった。おぬしの忠告を、いつもの我が儘で聞かなかったせいじゃな」

自嘲するように笑うたびに、クシヤナの右肩から下にかけて喰いちぎられた断面から血が溢れ出す。

「……止血を……ッ」

「いや、……もう、いい。こっちに来てくりやれ」

命令だ。

あくまで機械的にグリーゼは従い、クシヤナのそばに膝を突くと、彼女の思ったよりも小さな手がグリーゼの顔あたりを触れる。

霞の掛かった目がグリーゼの顔より少しずれた場所を捉えた。主人は、目が見えなくなっていた。

「……なにがあつた？」

「さあ、の。……わからぬ。あの新入りが突然暴れだして、妾が止めに入った時には、戦えぬ者はすでにー」

駆けてきた廊下に転がっていたいくつもの死骸がグリーゼの脳裏に浮かぶ。

「なんとか、犬のと蛇のとだけは……逃がせた。おぬしならもつと上手くできたはずなんじゃがな。……妾には、それが精一杯じゃつた」

「……なぜ、アレを殺さなかつた？ 主あるしになら可能だつたはずだ」

クシヤナの自嘲が深くなる。

「さて、な。……あ奴と妾は、どこか似てた。たとえ同胞を殺そうとも、それは変わらぬと思つておつた。……心のどこかで、妾のように、仲間としての言葉で止まると思つてた」

妾がたわけ者じゃつたな。

そう続けて無理に明るく笑うクシヤナに、グリーゼはなにも返すことができない。

「……まだ、時間は経っていないはずだ。アレを追いかければ、俺が」

「？」

「妾のことだけを見ていたながら、内側までは目を向けてくれなかつた」

泣き出しそうなクシヤナは最後の我が儘として、仇討ちのような真似をするなど言つた。仲間であつた者たちが進んで殺し合いをするのが見たくないとも。

グリーゼはなにか胸のつつかえが生まれたのを感じる。

それを形として表すには、その方法を男が知らなかつただけのこと。

「ああ。……寂しい。おぬしとは、もつと話をしたかつた」

片腕でグリーゼの手を握るクシヤナ。

「おぬしは、妾が消えることを悲しんでくれるかや？」

「……俺は」

同じだ。現世に行つて綺麗な風景を見たときのようになにも揺れ動かない。

たえこんな場面でも「感じること」のできない苦しみだけしか、残らない。

だがクシヤナは、彼を安心させるように穏やかに目を細めた。

「ーおぬしはちゃんと悲しんでおる。なにしろ、泣いておるからの。それが妾には、この生の中でもっとも嬉しいことじや」

最初の主人は、最後にそう言い残した。

ーーーーーーーーーー

「グリーゼつて、ずっと前に私と会つたことあるっけ？」

ある日ふと、ニルフィにそんなことを訊かれた。

ちようと彼女のおやつの間だった。手作りのチーズケーキを切り分けて紅茶も淹れたあと、ニルフィがフォークを握る前に言つたことだ。

グリーゼは少女の顔を見る。

穢れのない、何色にも染まっていな無垢な表情。

「……いや、無い」

「そっか」

表情を動かすこともなく答えると、ニルフィが素直に頷いてケーキを崩しにかかる。

「……記憶が戻つたのか？」

「ううん、ただ、ひよつとしたらつて。キミは辺境の出だってこの前言つてたでしょ。だからよく辺境を移動してた私と接点があると思つたんだ。……グリーゼ？」

「……いや、なんでもない」

グリーゼがはぐらかすとそれだけでニルフィは納得したのか、あとはおいしそうにチーズケーキを食べ始めた。

しかし従者は主人に嘘をついた。

本当ならば、過去にニルフィと出会ってる。名前も姿もなにもかも、いまのニルフィと共通点は皆無であるのだが、たしかにグリーゼは彼女のことを知っているのだ。

「……知りたくはないのか？」

「なにがかな？」

「……たしかに俺は辺境で生きてきた。些細な情報でも、自分に繋がることは知りたくはないのか？」

グリーゼの問いに、ニルフィは紅茶を飲み干してから答える。

カップが下げられると、困ったような、いつだかに見た笑みが刻まれている。

「私はさ、自分がどういう存在か少しは自覚してるつもりだよ。それでわかるんだ、私にはこの場所しか無いって。私、寂しいのは嫌いだからね。後悔もあるけど、ちゃんと満足もあるんだ」

その顔にクシヤナのものが重なる。

あの最初の主人も同じで、長い時間のなかでの孤独に耐えられずに周囲を巻き込み後悔と充実を手に入れた。

彼女たちの似た歩みをグリーゼは最初から目にしている。

それに追い詰められる苦悩も。

「もう少し、もう少しなんだ。仲間がいるってことのホントの意味を、あとちよつとで理解できる気がする。そうすればさ、私は、誰も傷つけなくなれるんだ。私のせいで泣く人も、いなくなると思うんだ」

いまにも崩れてしまいそうなほど不安定な笑顔のままニルフィが言った。

長い月日を経て、ようやく少女は答えを出せそうなのだ。かつてのクシヤナでは及ばなかった形の無い正解を掴み取れる可能性が顔を出した。

ならば守るしかない。

この少女だけが、クシヤナの残した遺産のようなものだから。

ニルフィに彼女の面影を求めていることも否定できないが、なによりもこれ以上ニルフィが壊れてしまえば一生答えにたどり着けない気がする。

答えが知りたかった。
なぜあの時クシヤナが怒ったのか、それを理解したかった。

――――

皮肉にもグリーゼは、やっと答えを見つけられたのだろう。
アネットが身を挺した。ヤミーが止めるために力を振るう。そして、クシヤナが怒った理由。

全部が全部、ちゃんと答えを見せていたではないか。

――仲間だから。

たったそれだけで十分な理由だった。

集団の心理。突発的な心の波。利害関係の一致。

いままでグリーゼは仲間というものを論理的にか捉えていなかった。

仲間だから守る。仲間だから体を張れる。仲間だから、それだけ大切なのである。

ニルファイたちと過ごすうちに抱えていた不快ではない不可思議な感覚は、すべてこれに起因していた。

ただそれだけで覚悟が生まれる。

これ以上、壊させまいと死に物狂いであがくことができる。

すでにそれをニルファイでさえ理解していた。

だから。

こんな悲劇など、誰も望んでいないのならば――。

――――

斬り伏せて崩れ落ちたグリーゼを見下ろし、藍染が斬魄刀の血糊を払う。

結果のわかっていた戦いだった。

更木剣八との戦いでグリーゼはすでに重傷を負っており、藍染との戦いでさらに傷は増え、もはや動けるほどの血も残っていなかったの

だから。元からそうなるように仕向けたのも藍染であり、全快であればグリーゼは勝利の道をたぐり寄せることができた。

それだけに残念だ。

アネットもグリーゼも十分なチカラを有していながら、自らの意志に従って藍染に歯向かう。

「ー意志、か。」

ラス・ノーチエス

虚夜宮に来た頃は表面上だけといえど、藍染には順従であったグリーゼ。それが剣を手に反旗を翻した。それはつまり、彼もニルフィの影響を受けたことを表している。

反逆者として処断した男に背を向け、ヤミーと戦っているであろうニルフィを見据えた。

藍染は、彼女が策謀などで十刃エスパーダの心を開いたのではないことを知っている。

だから思う。

グリーゼの指摘したニルフィと藍染の違いが、嫌に目に付く。だからかもしれない。

藍染が意識を思考に持っていたのは、彼が戦いの終結が訪れたと判断したから。

それが、彼らしからぬどうしようもないほどの隙だった。

「ーなに!？」

藍染の背後でグリーゼが立ち上がった。

ありえない。もう彼は動けないはずだ。強制的な死を与えたはずだ。

振り返る藍染の斬魄刀を握らぬ左腕が万力のような力で掴まれ、指先の鋭い爪が突き立てられた。

視線が交錯する。

甲冑の奥のグリーゼの目は光を失っていない。

それと同じだけ強く光る霊子が大剣に纏い、空を突くように掲げられた刃が藍染へと振り下ろされる。

衝撃。

核爆弾でも落とされたような破壊の波が虚夜宮ラス・ノーチエスの壁を剥がした。

「……………」

砂煙が晴れると、わずかに息を乱した藍染が立っていた。大剣の刃を右手の斬魄刀で防ぎ、袖あたりの布地が消し飛んでいる。

少し離れた場所には自らの攻撃の余波で弾き飛ばされた従者の姿。砕けた大剣の破片が散らばり、鎧の隙間から止めどなく滝のように血が流れている。

もう、騎士は動かない。

あれが本当の最後の一撃。そして唯一、藍染に届いた一撃だった。斬魄刀を鞘に戻した。

藍染が自分の左腕を見る。回道で治癒できるものだが、たしかに穴が開けられていた。

藍染が自分の右腕を見る。至近距離の爆発によって火傷を含めたいくつかの傷がある。

動揺を押し殺し、藍染はあらゆる方向に声を掛けた。

「ギン、なぜグリーゼを止めなかった?」

「いやあ、隊長だけで対処できそうやったから。実際、どうにかなりましたやろ」

内部からの霊圧を遮断して存在を消す黒い外套を剥ぎ取り、最初からこの場にいたギンが肩をすくめる。

「止める気はなかったと?」

「せやけど、藍染隊長。隊長も、最後のあの剣、避けようと思えば避けられたんちやいます?」

「……………」

自らの体に傷を作った相手を藍染が一瞥し、

「油断は、していなかったはずなんだがね」

今度はギンが沈黙する番だった。

彼の内面を伺うような視線を無視して、服の襟を正した藍染が宣言する。

「予定通り、これから現世への侵攻を開始する。我々は空座町を滅し去り、王鍵を創生し、尸魂界を攻め落とす」

藍染にとつてはめぐるましく移り変わる舞台すらも、すべては予定調和にしか過ぎない。

十番の主従

砂漠の岩陰に寝かせた一護を包む結界を散らし、織姫は汗の浮いた額を拭う。

「やつと……治せた」

一護の致命傷を完全に癒すことができ、あと少しすれば彼も目覚めることだろう。

それを見計らったかのように少女の肩に手が置かれた。

振り返ると、気だるげな雰囲気の方が織姫を見下ろしている。

「悪いね。ホントはこういう面倒なの、好きじゃねえんだけど……あんたにやニルフィを治してもらった礼もあるし、その少年を治すまで待ってたが、もういいだろ」

異変を察したのだろうか。

しばらく目を覚ますことはないと思っていた一護が飛び起きざまに斬魄刀を握り、突然現れた破面^{アラソカル}へと振りかぶる。

「待ーッ」

「借りてくぜ」

一護との視線が一瞬だけ交わるのを最後に、織姫の視界が唐突に切り替わる。

「おかえり、織姫」

暗い空間に階段がひとつ。織姫は下に、死神を裏切った死神が上に。

こういったことは慣れたつもりであったが、頭が追いつかずに織姫は階上の藍染を見上げることしかできない。

「どうした、随分と辛そうな顔をしているね。ーっ笑いなさい」

いつのまにか目の前にいた藍染が織姫の顎を持ち上げる。

「太陽が陰ると皆が悲しむだろう。君は笑って、少しの間ここで待っているだけでいい。ただ、ー我々が空座町^{からくちちやう}を滅^けして来るまで」

言葉は理解できた。

しかし虚^{ウエコムンド}圏側が侵攻を開始するのはもう少し後になるはずだ。

その予定が崩れ、今すぐにでも彼らが矛を手に取るならば。

「君の最後の仕事だ。私の腕を、もとの状態に戻すんだ」

そこで織姫は藍染の両腕の様子に気づく。

右腕はともかく、左腕には五つの穴が空いており、紫色に変色している。

「……………」

「どうした?」

静かで、されど厳かな口調で藍染が促す。

ここで織姫は自分の能力を使うべきではないかと思った。すなわち、藍染が持つているであろう崩玉を無に帰すために、事象を拒絶する能力を使用するのだと。

「忘れてはいけないのが、君は一人ではないということだ」

「……………」

脳裏に浮かんだのは命を散らされた一護の姿。そして次々と消えていく仲間たちの気配。

それらが藍染の采配一つで現実になるのだと理解できてしまった。織姫は能力を使う。藍染の腕を治療するために。彼の左腕に違和感を覚えつつも、傷を癒して消した。

—————

「う、うわ、うわあああああああ!?!」

情けない悲鳴を上げながら砂漠を駆けるのは、四番隊の第八席、山田花太郎。

到着と同時に姿を消した白哉を追いきれずに見失い、戦う術がない彼は、自分を追ってくる人型ですらない下級の破面アランカルに尻をつつかれて逃げ惑っていた。

そんな死が形となったような恐怖の対象が自分の頭を喰いちぎろうと大口を開け、そのまま停止したところで悲鳴を上げたのだ。

「大丈夫ですか?」

「う、卯ノ花隊長! ありがとうございます!」

四番隊隊長にして花太郎の上司である卯ノ花烈うのはなれつが彼を助け起こし

た。そして破面アランカルを見てみれば、縛道の鎖で雁字搦めにされていたようだ。

「私はてつきり、朽木隊長と同行していたと思いましたが」

「いや、その、はぐれてしましまして……。僕は瞬歩が使えないんで慌てて追いかけたんですけど、突然霧が立ち込めて方向もわからなくなつて……。それで、それで、朽木隊長がこの周辺で消息を絶つた情報だけを頼りに、逃げながら探してたん、でゆえすっ!」

ちよつと回道に優れてるだけのただの平隊員である花太郎にとって、この虚夜宮ラス・ノーチエスの侵入はハードすぎた。

ダムが決壊したように目から溢れる涙を卯ノ花に同行していた副隊長の虎徹勇音がハンカチで拭い、花太郎に目線を合わせて尋ねた。

「それじゃあ、あと探してない場所を見てまわれば……」

「で、でも、朽木隊長が倒されるなんて思つてなくて」

このまま探す時間があるのか。

そう続けようとした花太郎の頭に、突然声が響く。幻聴でもないのは上司である二人も同じように気づいた様子を見せたことで明白だ。

「……天挺空羅てんていくうらです」

勇音の言葉に、卯の花が静かに頷く。

天挺空羅てんていくうらは死神の鬼道であり、霊圧を通じて情報を伝えるというもののだ。

『聞こえるかい？ 侵入者諸君。これより我々は、現世へと侵攻を開始する』

「ええ!?!」

思わず花太郎が声を上げた。

たしか情報では、井上織姫の能力で崩玉を覚醒させるまで侵攻はないと聞いていた。

『井上織姫は第五の塔に置いておく。助けなければ奪い返しに来るがいい。彼女は最早、用済みだ』

藍染の声だけが淡々と続く。

『彼女の能力は素晴らしい。事象の拒絶ソウル・ソサエティは人間に許された能力の領域を遥かに凌駕するチカラだ。尸魂界上層部はその能力の重要

性を理解していた。だからこそ、彼女の拉致は尸魂界ソウル・ソサエティに危機感を抱かせ、現世ではなく尸魂界ソウル・ソサエティの守りを堅めさせる手段たり得た』

そして藍染は織姫が、死神代行の黒崎一護を含む旅禍を虚圏ウエコムンドにおびき寄せる餌となり、更にはそれに加勢した四人もの隊長を虚圏ウエコムンドに幽閉することにも成功したと語る。

最後の意味がわからなかった花太郎だが、空間を探查した勇音の言葉に嫌でも理解しなければならぬ。

「……！ 我々の通つて来た四本の黒腔ガルガンダが、すべて、閉鎖されました！」

「こ、こつちからは開けないんですか!?」
「不可能です」

花太郎の言葉に卯ノ花が答える。

「現在、黒腔ガルガンダの構造を解析できたのは浦原喜助ただ一人。こちらから彼に通信する手段がないかぎり、再び開くことはできないでしょう」

「その、通信手段というのは……?」
「ありません」

信頼できる隊長だからこそ、その返答は無慈悲なものだった。

『そして現段階において、私の声が聞こえている者はどれほどいるか。半減しているのは、尸魂界ソウル・ソサエティの戦力だけではない。足掻くといい。

『彼女』の牙は、君たちをも容易く喰い破る』

それを最後に、藍染からの声は途絶えた。

花太郎は慌てる。慌てふためくことしかできない。

「たっ、大変ですよ隊長！ どうするんですか!?!」

「現世に関しては、すでに準備を終えている頃でしょう」

「準備……?」

「あなたは知らなくていいことです。言ったところで、理解はできないでしょうから」

「そうですか! ……あれ?」

さりげなく卯ノ花の毒舌を貰った気がするが、すでに彼女は花太郎から背を向けていた。

「花太郎、まだ探し終えていない場所というのは?」

「え、えっと、あとはあつちの方角です」

「すぐに朽木隊長と合流しましょう。先の話に出ていた“彼女”という言葉にも懸念がありますし、これ以上戦力を分散させて各個撃破されては損害は大きなものとなります。私たちにできることは、限られた行動のなかで最善のものを選ぶことです」

「はいー」

勇音と共に返事をした花太郎は、二人の女性を先導してまだ探していない方向へと駆け出す。

そして最後に一度だけ、この巨大な建物が揺れる地震の原因があるであろう場所を見た。

この原因であるあの壁の向こうでなにがあるのか、花太郎の想像では及びもつかない。

—————

それは本来ならば使えるはずがない技であった。

ニルファイが模倣できるのは、あくまで極めた場合にのみ使用できるものだけ。白打、鬼道、歩法といった死神の技術も例外ではなく、少女はありとあらゆる技術をモノにした。

だがしかし、努力の有無に関わらず再現できないものはニルファイにもある。

それこそが他者固有の能力であり、技術次第ではどうにもならないチカラだった。

『暴風男爵』ヒラルダ 双鳥脚アペ・メジーソス

その中には、破面たちの帰刃アランカルまで含まれているハズーだった。

「チイツ!!」

ヤミーは無数に叩き込まれる巨大な嘴くちばしを交差させた腕で防ぎつつ、最初の一撃の単鳥嘴脚エル・ウノ・ピコテアルによって穿たれた腹から流れる血を筋肉を凝縮させることで止血する。

ーどういうコトだ、こりゃあ!?

さほど記憶力に自信のないヤミーといえど、ニルファイが“103”

の数字を持つ男の風を操る能力までも使うことはできないことを知っている。

さらに言えば、ヤミーの鋼皮イエロ エスパードは十刃でも指折りの硬さを誇り、だからこそ疑問が尽きない。

瞬く間に嘴くちばしがヤミーの腕を啄ついばむ威力であることが、すでにおかしいのだ。

『暴風男爵』の持ち主であるドルドーニならばここまでヤミーに傷を付けられない。

これはすでに、オリジナルを超えている。

ヤミーが裂帛の声を上げ、盾にしていた両腕を一気に左右に振った。

荒れる暴風。巻き上がる砂。視界を覆うそれらが消えると、ニルフィの姿も地上から消えていた。

『車輪鉄燕』断翼 “散”

『空戦鷲』餓翼連砲

上空から、無数の羽が雨あられのごとくヤミーへと殺到する。

今度は舌打ちする間も惜しみ、腕で顔を防御してその隙間から月を背後に佇むニルフィを見つけた。

奇獣の腕が鳥類の翼に変化しており、そこから羽を矢のように一斉に放っている。

“105”の数字を持つ十刃落ちの女と、バラガンの従属官である男の刀剣解放の能力が合わさっているようで、鋼のように重い刃が振動しながらヤミーの肉をぐっそりと削り取る。

「ン、のヤロオオオオオオオオオオオ!!」

巨体に似合わぬ速さで虚弾を拳とともに放つ。放つ。放つ。羽とぶつかりあったヤミーの攻撃は徐々に押し上げていき、ついには彼を見下ろしていた少女をふき飛ばす。

直後、ヤミーを囲うようにして桜の花びらのような刃が視界を掠めた。

『千本桜景厳』吭景・千本桜景厳

十数億枚の刃がヤミーの巨体を球体上に包み、斬碎する。

「ーッ！」

全身から血を噴き出しながらもヤミーは膝をつくのを堪えた。

「……効かねえ、効かねえぜえ。……そんなしよぼい攻撃じゃあよお、なあ、ニルファイ！」

虚弾^{バラ}でふき飛ばしたのは幻だったのは、いまだに無傷のまま立っている少女を見れば一目瞭然だ。

ヤミーは口でこそ強がっているものの、実際には重体で、彼の体から溢れ出る血が赤い湖を作ろうとしているほどだった。

しかし彼は守りきった。

自分の身を犠牲にしてまで、クツカプーロを守ったのだ。

「キャンー！ キャンー！」

「チツ。……ウルセえぞクソ犬。ちよつと待ってろ、すぐにこのチビを大人しくさせてやつからよオ！」

他の者であれば、ニルファイの使う能力について動揺したりでもするだろう。

しかし彼女と戦っているのはヤミーだ。たとえどれほど奇妙なチカラを少女が持つていようが、彼にとつてやるべきことは考えることではなく拳を振るうことだった。

戦意を失うどころかヤミーはさらに猛^{たけ}り、声を張る。

「どうしたよ、俺はまだ倒れてねえぞ！　いまのオメエを見てると怒りが湧いて湧いて仕方ねえ！　加減できるうちに早いとこ終わらせねえとなあ、ああ!？」

両腕を固めてハンマーのようにするとヤミーがそれを思いっきり振り下ろす。

直撃。

込められていたエネルギーが解放され、砂が放射状に波打った。

しかし腕が徐々に持ち上げられていく。下にいる奇獣がニルファイを守るようにヤミーの巨塔のような腕を防御し、さらには臂力の勝負に勝って押し上げていた。

そこでヤミーが両腕についたピストンのような器官を作動させる。拳を打ち付けたまま更なる追撃を生み、空気の爆発する音を響かせ

た。結果はそれだけ。同威力の虚弾パトラを使ってニルフィが相殺したよ
うだ。

『憤獣』
イーラ

奇獣の体が一瞬だけ膨れ上がると元に戻り、盛大な蒸気が立ち昇
る。

そして節くれた腕に力を込めると、ヤミーの巨体が浮き上がり、
ニルフィの背後に頭から叩きつけられた。

起き上がりざまに黒い閃光がヤミーを飲み込む。

「が、あ……ッ。アアアアアアアアアアアア!!」

ヤミーが愚直に拳を振るう。

受け止められて虚閃セロで顔を焼かれる。

ヤミーが愚直に拳を振るう。

霊子の刃で腕がなます切りにされた。

ヤミーが愚直に拳を振るう。

腹にできた巨大な穴から向こう側が見えるようになった。

彼自身、何度拳を振り抜いたか数えることもできない。

そのたびにヤミーの肉体がニルフィによつて破壊されていき、血と
肉で砂漠が赤く染まっていく。

だがヤミーは倒れることだけは絶対にしなかった。

「……なんだよ、終わるかよ……ああ!」

攻撃の手を止めたニルフィにヤミーが血を吐き出しながら声を荒
げた。

「俺はまだ、目も耳も手も足もちやんとくつついてんだぜ！ クソ犬
も殺させねえ。オメエを黙らすまで倒れねえ。ーおら、来いよ！

いまの俺は手ごわいぜ!!」

ヤミーはなぜ自分がここまでやっているのか、自分のことなのに理
解できなかった。

暴れるだけならばクツカプーロを見捨てればいいだけだ。いつも、
いままでもそうしてきた。

ハツキリとした理由まではわからない。怒りのままに行動してい
ると、いつのまにか破壊だけしかない結果以外を求めていた。

気に入らなかった。

いつもいつも五月蠅いくらいに光を宿していた少女の瞳が、あそこまで人形然としていることに。そして大切だと公言して止まなかった仲間であるクツカプー口を、躊躇いなくこの戦いに巻き込むことにも。

そしてニルファイは強い。ここまで本気のチカラを出しても、苛立たしいまでに届かない。

『憤獣』の能力に任せて怒りを覚えて回復と強化を繰り返していきながらも、ただの一度も拳が届かない。

ーなにが自分は弱えだよ。

出会った最初の頃から猫を被り、ずっとヤミーのことを下に見ていたのだろうか。

ーそりやあ、違いか。

ニルファイは悪意を持たなければロクに嘘をつかなければ、仲間の言葉ならばなにもかも信じてしまう。

だから戦うこの時までには、ニルファイにとって十刃でもつとも強いのは公言しているヤミーにはかならなかった。

ならば自分のほうが強いのだと証明せねばならない。

そうしなければ、十刃最強であり続けることができないから。

少女のために最強の称号を持ち続けなければいけないのだ。

そして信じていた。

たった一度だけでも届けば、こんなくだらない劇が終わるのだろうと。

壊れ切った少女がもとに戻るのだろうと、なんの根拠もなく信じていた。

「だから俺がーオメエを止めなきやならねえんだよオ!!」

右腕に込めるのは渾身の霊圧。

無意識に放出されていく霊子が大気に風を生み、腕に台風の力そのものを凝縮させたような轟音を響かせる。

振り抜かれる拳には予備動作とも呼べる間も存在せず、ヤミーの必殺の一撃は音速を突破した。

ー届く。

誰が見てもそう予感させる拳撃は、

『アロガンテ 骸骨大帝』 セネスセンシア 衰滅空間

あらゆる事象や物体の劣化を促進させてそれらが接近する動きをスロー化させる、第2十刃バラガン・ルイゼンバーンの『セクンダー・エスパーダ 老い』の能力によって止められた。

『アロガンテ 骸骨大帝』 レスピラ 死の息吹

奇獣の口から吐き出された触れたものを急速に朽ちさせる息が、ヤミーの右腕を一気に骨だけにする。咄嗟に動かした左腕も同様の末路を辿った。

ヤミーの矛となり得る武器が、消えた。

ー俺は、俺、は……。

まだ終わってない。まだ倒れるわけにはいかない。まだーあの少女を助けられてないではないか。

「ク、ソ……」

ヤミーが最後に見たのは、自分の眼前で紅蓮を身にまとったニルファイの姿だった。

—————

地響きを立ててヤミーの巨体が崩れ落ちた。

すぐそばの荒れた地面に降り立ったニルファイは首を真上にするほど見上げ、しばらくじつとそれを見つめていた。

『グロトネリア 喰虚』

それから視線をはずすと奇獣が全身の体積を膨らませ、巨大な肉塊じみた顎のようになる、ヤミーの遺骸を飲み込んでいく。茫洋ぼうようとした表情のまま喰い始めようとするニルファイを止めるように、小さな小さな弱者の鳴き声がこだまする。

「キャンッ、キャンッ。キャウン！」

ニルファイの近くまで駆け寄ってきたクツカプーロが威嚇するように吠える。

やめろ、と。やめてくれ、と。

ヤミーが最後の最後まで守ってくれたからだろう。あの激戦のなか、子犬のカラダには傷らしいものはひとつもついていなかった。

「……………」

一瞬だけクツカプーロに視線を向けたニルファイだが、それを無視して奇獣に捕食をさせようとする。

「キャンツ、アウンツ！ ……キャンツ」

ガブリ、とクツカプーロがニルファイの脚に噛み付いた。

「……………」

「フーツ……、フーツ……」

鋼皮を貫通するほどの力はなかった。それでも子供な無謀な行動を起こして大人に立ち向かうように、文字通り命を張って止めようとしていたのは確かだ。

無表情のままニルファイが腕を掲げる。霊子が集まって刃を作り、あとは振り下ろすだけで子犬の首など容易く地面に転がるだろう。

「……………」

「フーツ……、フーツ……」

明確な死の匂いを感じながらもクツカプーロが牙を引く気配はない。

ヒトががむしやらに腕を振り回して最後の抵抗をするように、何度も顎に力を入れて、掴み取れるはずもない未来を手に入れようとしていた。

振るおうか、振るまいか。

ニルファイの腕は行くあてがなさそうに揺れ動き、

「……………」

途端に刃を消失させて細腕をただ下ろした。

奇獣が元の姿に戻っていく。遺骸に新しい傷をつけることなく、クツカプーロを不思議そうに眺め回す。

ニルファイが腰を曲げてぎこちない手つきでクツカプーロの頭を撫でると、口を離れた子犬はさつきまでの威勢を消し、切なさそうに喉を鳴らし続ける。

それを見たニルフィはよろめくように後ずさった。

さらに頭痛を堪えるように頭の側面を抑えると、視界に映った異色のそれを触る。髪だ。髪がひと房だけ、濡れ羽色から色素が抜け落ちたかのように白くなっていることに気づいた。

「――」

最後に一度だけクツカプーロを見下ろす。

子犬はニルフィの目をじっと見据えていた。

ニルフィは逃げるようにして、その場から姿を消す。

エスパーダ
十刃、残り六名。

狂嵐の前の静けさ

いまでも覚えている、死神との戦いが始まるよりも以前の記憶。リリネットはニルフィに膝枕しながら久しぶりに目にする、星ひとつない夜空を見上げていた。

ラス・ノーチエス
虚夜宮の屋上、その物陰に彼女たちはいたのだ。

というのも、最近ではニルフィの追っかけがなぜか多く、気が落ち着かないという理由でニルフィがここまでリリネットを連れてきた。追っかけの破面^{アランカル}たちは今頃、ニルフィの生み出した高速で動き回る偽物を息も絶え絶えに駆け回っていることだろう。

誰も屋上にはやって来ない。

それもそのはずで、ラス・ノーチエス虚夜宮にいる期間よりも砂漠の下で過ごすことが多かった破面^{アランカル}たちだ。室内よりも外の光景に見飽きた彼らが、わざわざこんな場所に姿を現すはずもなかった。

まあ、黒髪の少女は遊び続けているうちに睡魔に負けてしまい、ここ一時間ほどずっと寝こけていたのだが。

リリネットがニルフィの白い頬を突つくと、上質な絹で作られた布でさえボロに思えるほど肌触りがよく、やみつきになりそうなほどぷにぷに柔らかかなそれに心を奪われそうになる。

髪だつてそうだ。自慢してるだけに手入れも凝っていて、なにやら甘い香りのする一本一本がさらさらと手の中からこぼれ落ちる。

リリネットなんかよりもよっぽど女の子らしいだろう。

それはいい、それはいいのだが、さつきからずっと頭に浮かんでくる邪な想いがニルフィに対してひどく後ろめたかった。

「ん……」

「あ、起きた？」

目をこすりながら唸るニルフィに言葉を掛けると、すぐに彼女は二度寝しようとして頭を落とす。

「ほら、また寝るなって。そろそろあたし、足が痺れてきたんだけど」
「むう」

「むうじゃなくなつて」

「ふぎゆう……」

不機嫌そうに唇を尖らせたニルファイがふらりと起き上がる。

そのまま立つてくれると嬉しいのだが、ニルファイは滑るような身のこなしでリリネットの背に回り込むと柔らかくしな垂れかかり、相手の体を抱きしめ、リリネットの右肩に顎を乗せる。

膝枕じゃなければいいのだろう。

そう言いたげにするニルファイを引き剥がせない時点で、リリネットは負けてしまっている。

ニルファイがリリネットの髪に顔をうずめてひとしきりじやれつくのも、くすぐったいのを我慢して好きにさせてるのが良い証拠だ。

しばらく無言の時間が過ぎた。

ニルファイがリリネットの手に上から重ね、指をそれぞれ絡めてから動きを止めてしまった。果たして寝てしまったのかと思うものの、まあそれもいいかと内心でため息をつく。

夜風以外には少女たちのかすかな呼吸の音が入るくらいで、密室とはまた別の静けさのなかに身を任せる。

いつまでも続けばいい。そう思わせるくらいには気持ちの良い場所だった。

「私って、どれくらい寝てたのかな？」

「一時間くらい。いつもより短いじゃん」

「まあ、長くてもその間はずっとリリネットが膝枕してくれてたんだろうけど。ああ、起きないでキミの膝枕で寝てればよかったなあ」

無造作に、ニルファイの白魚のような指がリリネットの腿ももを撫でた。

こんなことはニルファイにとってただのスキンシップだ。

しかしリリネットは思わず横目で相手の顔に視線を向け、ニルファイが純粹に不思議そうな顔をしているのを見ると、恥じ入るようにすぐに目を背けた。

速く鼓動を刻む自分の心臓に気づかれはしないかと、頬に差す朱を見られたくなかったから。

「けど、私もあんまり寝てられないんだよね。……死神さんたちとの戦争が、近いから」

「不安？」

「リリネットは？」

「まあ、あたしは……ちよつと、不安だけど」

「うーん、そうだね。でも大丈夫。私がみんなのことをゼツタイに守るから、ね」

「……十刃エスパーダの他のやつらなら、大人しくニルフィに守られるとは思えないんだけど」

むしろ、『お前は下がって見てろ』とでも言われるだろう。ものぐさなスタークでさえも仕方なく動きそうだ。

そう考えながら気を紛らわそうとして、

「あはは、そうかもね。でもキミのことはちゃんと私が守ってあげる。だってキミは仲間で、それで大切なー友達なんだもん」

きつと、棘の付いた鉄球が胸に打ち込まれればこんな痛みと衝撃を受けるのだろうかと思った。

ー友達……ね。

その関係だけで以前までは満足できていたはずなのに、いつからか？ いつから自分は、親愛を寄せてくれるこの黒髪の少女に抱いてはいけない感情を持ってしまった？

それから少しだけおかしくなりそうだった。

弱いリリネットではニルフィの隣に立つことはできず、逆に隣に立てるであろうアネットにはどうしようもない僻ひがみを覚えてしまう。

それが活発な少女のなかに一欠片の卑屈さが生まれてしまった。

だが、

「けどさ……ニルフィ。もし、もしも、あたしがニルフィのそばに居られなくなったらーんう!？」

「はあ……。まったく、さ。たとえ話でもそんなこと言わないでよ」

頬を膨らますニルフィが二本の指をリリネットの小さな口に突っ込んで無理やり口止めする。赤い舌を焦らすようにこねくりまわしながら、ニルフィがリリネットの耳元で囁いた。

「スタークさんだっているし、そうでなくても私がいる。キミが弱くても、ちゃんと守ってくれるヒトがいるんだよ。だから、ね？」

「ふあ、ふあふあひへっへ！ ふあひやつははら！」

「んー？ なに言ってるのかわかんないなー」
わかってんだろ
「—————」

側頭部をニルファイにぶつけて慌てて拘束を逃れる。背後を振り返りながらキツと睨みつけても、ニルファイは可愛らしく笑うだけだ。

子供らしいだけのいつも浮かべる表情とは違う、リリネットだけに見せてくれる大人びたものだった。

それを見るとリリネットは余計に辛くなってしまう。

ニルファイはさっきの行為さえなんとも思っていないのに、リリネットだけは変な方向に意識してしまうのだから。

自分の感情なんか知らずに揺るがすその笑顔が、今日はいつもとより憎たらしかった。

「あはは、つまり、キミは居なくなっていくことだね」

「なんかいい話で終わらそうとすんなって」

「うん。うん。そうだね。でもホントのことさ。キミに怪我をさせるヒトはゼツタイに許さないんだ。殺させるなんてもつてのほかだよ？ 頑張る。頑張るからさ。キミは私を受け入れてくれたんだもん。ゼツタイに……他のヤツになんか渡すもんか」

うつむきがちに口にした最後の部分は掠れていて、なにを言ったのかリリネットには気付けなかった。

しかしそれでも、ニルファイが他者に抱く感情は親愛だけなのは間違いない。けしてリリネットの抱くものと交錯することがないのが確かめられるたびに、心を押し殺すことも同じだけあった。

理不尽にも、与えることしかししないニルファイから、本当に欲しいものを貰うことができないことに行くあてのない怒りを感じたこともある。

なによりも、自分から欲しがろうとしないニルファイは見ていて痛々しかった。

「……ニルファイってさ、いつも他のヤツのためにしか動かないじゃん」

「あはは、まあね。それが一番、私のためでもあるからさ」

「本当に？ ほら、なんかもつと欲しいものとかってないの？」

「ううん、ないよ」

「……本当に?」

重ねて訊くと空気が変わる。

真顔になったニルファイがリリネットの伸ばしていた脚をまたぐようにして前に出ると、鼻先が掠るような距離から湿り気を帯びた声で言った。

「……キミのことがね、全部欲しいかな」

「……………」

数秒の沈黙のあと、ニルファイがちろりと舌を出して苦笑する。

「……あはは、なんてね。冗談だよ、冗談。うん、欲を出して言うならさ、おいしいお菓子を食べたいとか、寝る時間がいっぱい欲しいとかでー」

「い、いいよ」

「……え?」

「あたしでいいなら、いいって言ってるの」

目を逸らしながら搾り出すようにそう言うと、ニルファイが苦笑を深めた。

「あはは、だから冗談だつてば」

「冗談つて顔、してなかったじゃん」

「……」

今度こそニルファイは口を閉じた。

リリネットは知っている、この少女が本当は支配欲や独占欲の塊だということ。一緒に過ごす時間が増えるうちに気づいてしまった。ニルファイは普段からそれらを押し殺しながら他人と接していることに。

彼女が仲間たちの関心以外には求めることがないことも、それがいつも暴走の引き金となっている。

「リリネットは、それ、仲間だから言ってるの?」

「ちがう、と思う。あたしは、あたしとして……その、言ったんだけど」

辛そうで、焦がれるような色を持った金色の瞳が視界いっぱい広がった。

「あ、あはは。……困るなあ、そういうの。私だつて我慢、してるんだよ？ それに、ほら、キミに必要以上に求めちゃうとキミが傷つくかもしれないし、ね。それは私が望むことじゃないんだ」

「それで、ニルファイが楽になるなら……」

「……ホントに、いいの？ キミは傷ついたりしない？ こういうのってホントはすごく大切なことで、後悔なんてされたら私、どうしたらいいかわかんなくなっちゃうから、ね」

小さく、たしかにリリネットが頷いた。

口約束の同意。

それがニルファイの意識の首輪を外す。

「そっか……。そうなんだ」

この時間がどれほど長く続くかわからない焦燥が、二人の少女の胸で燃えている。

「全部、ちょうだい？」

ニルファイがそのままリリネットの頭を掻き抱き、返事を待つこともせずに唇を奪う。

「ッ、あ……むん」

奥に隠していた舌を恐る恐るニルファイに近づけると、すぐに絡め取られてしまった。

散々弄ばれて敏感になっていたらしく、舌が溶かされてしまうような感覚とともに、リリネットが呼吸を整える暇も与えられずに蹂躪される。

いままでは多少なりともリリネットへの優しさが混じっていたが、いまはただ、暴力的に彼女を求めてくる。

リリネットは自分が押し倒されていたことにすぐには気付かなかった。

それを知ったのは腰を浮かせようにも黒髪の少女にのしかかれ、脚もいつぞやのように絡められてるせいで、発散できない快樂が重く腹に残り始めた頃だ。

背中のでくぞくとした震えがさつきから止まらない。

「ふあ、……あ、あう……っ、や、あ……っ」

ニルファイを押し返そうとした腕も逆に押さえつけられ、力を失ったまま痙攣を続けるだけだ。

その貪る、といった表現が似合うようなニルファイの責め立てに、理性の枷が無残に破壊されていく。

リリネットの体のラインをなぞるように蠢く細指。互いのむき出しのお腹が触れ合い、異なる体温が感じられるだけで高まる興奮。弄ばれる舌のみならず、それらのせいどころを刺激されて甘い悲鳴を上げてるのかさえわからない。

「は、う……ッ。あ、ああ……！」

「はあっ、はあっ……。ん！……つく、はあっ、あ、んむ……！」

リリネットの口の端からはどちらのとも知れぬ唾液が絶え間なく溢れ出し、ニルファイの舌がそれをぐちやぐちやにリリネットの口腔をかき回す。

リリネットが拙く舌を動かすと、嬉しそうに目を細めるニルファイが優しくそれに応える。抑えることを忘れてしまったように少女たちの甘い声が暗闇に反響した。

さらに幼い体に強引に女としての快楽を叩き込まれたことで、リリネットの視界が一瞬にして白く染まった。

ようやく解放された時には、荒い息で激しく胸を上下させていた。

「あはっ」

ニルファイが子供らしからぬ妖艶な笑みを浮かべたのが、薄く涙の滲んだ視界からでもわかった。

二人は強く抱き合ったまま、お互いの熱い吐息を味わうようにして見つめ合いながら動こうとしなかった。

しかしすぐに、衝動のままにもう一度、薄桃色の唇を交える。淫らかな水音が静寂に響く。

この時間が終わってしまうのが嫌だった。ここで終わってしまう、また不安が顔を出してしまう。

だから二人は怖さと情欲に突き動かされて獣のようにまぐわった。交錯することのない想いだと、もやの掛かった思考のなかでリリネットが考える。

そして自分はずるいと思った。

仮初の愛情が欲しかったために、あくまで対等な立場からニルフィの心と体を求めている。それはニルフィも同じなのだと言いつつ、勝手な言い訳が自己嫌悪を加速させる。

こんなことをし続けても自分たちの関係は友達のまま。

それだけがどうしようもなく悲しくて、ニルフィとの関係を繋ぐ鎖であることを考えると、何にも変えることのできないものなのだと知ってしまう。

キスだけで満足できなくなったらしいニルフィが銀色の糸を口に引きながら、抱き起こしたりリリネットの首元に軽くー噛み付く。

「に、ニルフィ……？ 待つーひいー！」

上ずった声でリリネットが悲鳴を上げる。

ニルフィは答えず、荒い息だけを繰り返して、噛み付いたりリリネットの首筋に舌を這わせた。

「あ、あつ……、ま、待つて……つ。ニルフィ……！」

歯を立て、舌を動かし、わざと痕が残るように吸って、リリネットが自分のモノであることを刻み付けるようにする。

濡れた唾液が胸元に落ちる頃には、リリネットは静止の言葉の代わりに熱い吐息を繰り返していた。

ぞわぞわとした快樂が這い上がり、視界は中空を彷徨う。

だらしのなくなった自分の表情さえ取り繕う余力も残されていない。

「あつ、あ、あつ！ はあつ、ああつ、あ……ッ！」

「んっ……リリネット……」

ふいに、ニルフィが拘束を解いた。掴んでいた手が背に回って抱きしめられ、リリネットも無意識に彼女に抱きつく。

包まれる安心感を得て、リリネットは快樂へ抵抗する術を放棄した。

耳元にかかる吐息とともに聞こえる、愛してしまった少女の声。

息を荒げてこそのもの、いまこの状況とは不釣り合いなほどその声は落ち着いていて。

「ずっと一緒だよ。リリネット」

「……うん」

ニルファイが満足そうに微笑むと、撫でるように手をリリネットの服の中に滑り込ませた。

それ以上、言葉は必要なかった。

—————

「どうした、リリネット」

スタークが振り返ると、いましがた閉じた黒腔ガルガンダのあつた空間を見つめる少女の背中が見えた。

現世へと向かうために黒腔内ガルガンダを通ることになり、二人はそのなかで霊子の足場を作つて立っている。

「スターク、あのさ。これで本当によかったのかな？ あたし、あたしは……ッ」

男を見上げる少女の目は、いまにも泣き出しそうなほど弱々しくて。

「……さあな。わかんねえよ」

スタークにはそれを止めてやることができず、彼自身も困つたように眉を寄せる。

アネットとグリーゼが斃たおれ、ヤミーも沈められた直後、スタークを含めた上位十刃エスパーダたちが黒腔ガルガンダのなかへと踏み込んだ。

あの時点でどうすれば良かったのか。

元凶であろう少し先を進む藍染を横目で見るものの、スターク自身、恩と感情の間で揺れ動く。

自分たち全員が動いても藍染がなにかしらの策で止めていただろう。そして藍染がスタークたちに語つたことがきっかけで、仕方なく手のひらの上で踊らされるしかない。

ーバラガンはこのままじゃ終わらねえだろうけどな。

横目で大帝の後ろ姿を確認し、そしてこんな状況でも他力本願な自分が情けない。

『そんなのは私が嫌だ。だったらもつと力をつけて、頭もよくなつて、解決できるようになんだつてする。見てるだけなんて、耐えられない』

最初にニルフィと出会ったときの言葉が頭を掠める。

スタークは羨ましく思った。

自分もこんなことを恥ずかしげもなく言えるようになりたいという、子供がヒーローを将来の夢にあげるような、そんな青臭い理想を抱くには十分な理由だった。

「ーいや、違うか。」

羨ましがるのではなく、自分がそのヒーローのようにならなければならぬのか。

仮に運命と名付けるのならば、それに抵抗せずに流されるままに今までならば生きてきた。それにリリネットも巻き込んでいたが、彼女もそれに異論はないと思っていたからだ。

しかしいま、リリネットが抗おうという意思を見せている。

自分の半身でさえ、それを抱くことができていたのだ。

わずかに口の端が吊り上がっていることを自覚した。

それは自分を自嘲でもするためなのか、それとも仕方ないという呆れなのか。

「……………」

少しだけ乱暴にリリネットの頭に手を乗せて、ぐりぐりと動かし

た。

「な、なにすんだよ!?!」

「…………いや、ちよつとな。俺も、お前らみたいになりてえなんて、らしくもないこと考えてみたいだ」

髪を掻き揚げるふりをして顔を隠し、邪魔くさい感情をため息とともに吐き出す。

「ー征くか、ぼちぼちな」

「……………」

ハリベルは自分のうしろをついてくる、いつになく静かな従属官フラシオンたちの心情を痛いほど理解していた。

「お前たち。そんな心持ちでは勝てる戦いにも勝てないぞ」

「そつ、そりやそうですけど!」

我慢できなくなったようにアパッチが食い下がる。

「ハリベル様はいいんですか!?! あのチビがどうなってるか、ハリベル様が一番よくわかってるはずだつてのに……」

「やめな、アパッチ」

「ミラ・ローズ! お前のことは気に食わねえけど、お前もいまのあたしと同じなんだろ。これでいいなんて、お前はゼッターそう思ってるえ!」

「アパッチ!」

「ーいや、いいんだ」

ハリベルが静かに二人を制した。

「私も、よくわかってる。その上で私はここに来たということだ」
「……………」

バツが悪そうに俯くアパッチをハリベルは内心で羨ましく思う。

良くも悪くも実直な彼女のように動くことができたなら、ハリベルとしてもきつと楽だっただろう。しかしハリベルは三人の従属官フラシオンを抱える主人であり、短絡的な行動はできなかった。

むしろ死神との戦いで重体となったニルフィの元に駆けつけることも、かなりのグレーな行いだつた。

あれ以上、下手に動けば逆にニルフィの身の危険を増やすことになりかねない。

藍染は語つた。

ニルフィはきつと、現世に向かうことになるだろうと。

少女の刀剣解放がかなり不安定な状態だということに気づいていたエスパーダ十刃たち。

もしニルファイがそのまま死神たちの総力にぶつかれば、どうなるのかがわからない。

ヤミーまでも倒されたいま、殺すならともかく虚^{ウエコムン}圏でニルファイを止めることのほうが難しいと判断し、露払いのように駆り出されたわけだ。

ーそれにしても、変わったな。

部下の三人娘は当初こそニルファイのことを認めていなかったが、力を認め合うにつれて同性の破面^{アラソカル}ということですから打ち解けた。

むしろ心の底からニルファイの身を案じるほどに。

身内以外に好感情を持つことがなかった彼女たちがだ。

かつて藍染に助けられたからといって、アパッチたちはハリベルに付いてきたようなもので、忠誠心も藍染にはさほど向いていない。

かといって、ハリベルが恩だけで現世侵攻に手を貸しているということもなく、ニルファイが餌に使われていることを快く思っていないかった。

だからといって言い訳にしなければならないことは、ハリベルが誰よりも理解していた。

本当の正解ならば、すべてを投げ出して少女を助けに行くことだろう。

口元を隠したまま黙っていたスンスンが、一歩前に踏み出た。

「ですが、このまま流されるままに、というわけではないのでしょうか？」

「ああ」

場合によっては、剣を向ける相手を変える必要がある。

ハリベルは鋭い眼差しを藍染に向けた。

「……私にできること、か」

^{エスパーダ}十刃のなかでニルファイと手合わせした数は一番多い。

それだけの間一緒にいるとニルファイが雛鳥のようにハリベルのあとを付いてきて、アネットがヤキモチを焼いていたことに苦笑していた記憶がある。

妹分のような少女との、取り戻せなくなりつつある日常。

悪意のせいで壊れてしまった少女の心。

だからといって、何度もニルファイが傷ついていい理由にはならないではないか。

自分の身を犠牲にする覚悟を胸に秘め、ハリベルが前を見据える。

「――征くぞ、彼女のためにも」

――

バラガンは配下の作った霊子の道を歩きながら、手の中の紙細工とも呼べぬそれを見続けていた。

銀色の折り紙を使った平べったい花だ。特別な手法も必要なく、子供でさえ手順を踏めば誰だって作れる、一見大帝には似つかわしくない代物だった。

花はニルファイが折ったものだ。

かつてバラガンが戯れにやらせたことのひとつで、自分の目に適うものを持って来いということ少女に言い渡していたはずだ。

再び彼女がやって来るまで、なにを献上されるのか考えたものだ。

きらびやかな宝石か。精緻な細工の金属器か。たとえ持ってこれなくとも、少女の優れた容姿だけで十分だと言うつもりであった。

そして少女が手に握ってきたのが、この銅貨一枚にもなりそうもない折り紙だった。

なぜ花なのかと問えば、綺麗だからとすぐに答えが返ってきた。宝石などよりも彼女の目には、現世ではそこらでいくらでも咲いている一輪の花だけでも美しいものに見えたらしい。

『花、か』

『うん。ホントはアイスの花なんて作りたかったんだけど、アイスの実からだど育たなかったんだ……。けどね、どうしても花を渡したかったから、すぐに枯れたりしないそれを持ってきたんだ！』

『……たとえ儂が力を使わなくとも、いずれ紙でできた花さえも朽ちて消える。そうなれば、どうするつもりだ?』

意地の悪い質問だった。

たとえ金属のものであろうとも、千年もすれば朽ちて風化する。それは紙ならばもとよりのことだ。

しかし。いや、だからこそか。

次の言葉で、少女はそれを知っていて銀色の花をバラガンに渡したのかもしれないと思った。

『ーじゃあ、また作ってあげる!』

『なんじゃと?』

『また作ってあげるんだ、キミの手の中の花が消えちゃったら。何度でも、何度でもまた私が作ってあげる。そうすればずっと、花が無くなることはないから、ね』

それを思い出し、バラガンはフ……と笑う。

『陛下、いかがなさいましたか?』

『ああ。ちと、小娘のことをな』

控えていたフィンドールにそう返し、自分を囲むようにして歩くフランシオン従属官たちのことを考える。

何度も従者たちの世代が変わってきた。

ここにいる者たちは最も若く、出会ったばかりの頃などひよっ子もいいところだった。

殉職して去る者は弱いからだ結論づけながら、気づけば虚ウエコムンド圈を統一する以前のメンバーなど周囲から居なくなっていて、いつも最後に残るのはバラガンだけだ。

そしてフィンドールたちも、バラガンより先に死を迎えるのではないかと思うときがある。

いままでは、そうだった。

けれどそれは、いまは違うということだ。

彼らもまた、色は違えどそれぞれ折り紙の花が渡されているから。それが無くなればまた、何度でも少女が花を作ってくれると約束したそれを。

折り紙の花を皺しわにならないようにそつと懐に仕舞い、配下たちに喝を入れる。

「なんじゃ、貴様ら。その腑抜けた顔は」

少女と戦わせて少しは面構えがマシになったかと思つたが、そうでもないらしい。

仕方ないという思いを押し込めるのは、あくまで傲慢な主人として振舞うためだ。

「――言え！ 貴様らは誰の部下だ！」

「ハッ！ 我々は『大帝』バラガン・ルイゼンバーン陛下のフランシオン従属官！

あらゆる敵を討ち滅ぼし、必ず陛下の歩む道を敵の血で染めてみせます！」

「フン、命令するまでもないことじゃな」

一糸乱れぬ従者たちの宣言に頷きつつも、今度は落ち着いた声音で言い聞かせる。

「ならば、我が名のもとに命じる。――この戦いが終われば、必ず儂のもとに帰つてこい」

従者たちの目を見開く気配。

それを努めて無視して、あえて傲慢に吐き捨てる。

「よもや貴様ら、小娘のお守りを儂にさせるつもりではあるまいな？」
膝について彼らが声を張り上げて返事をする姿に、ようやくバラガンは満足そうに頷いた。

そして死神の背を睥睨し、言った。

「――征ゆくぞ、終わらせに」

――

エスパーダ十刃上位三名、及びそのフランシオン従属官十名――出陣。

無貌姫

ラス・ノーチエス
虚夜宮内の塔のひとつの屋上に、その女はいた。

ロカ・パラミア。

彼女の周囲には目に見えぬほど細い糸が漂っており、それらは虚夜宮のどことも知れぬ場所へと伸びているようだった。

この糸は反膜ネガシオンを変化させたものであり、『あらゆる物質と繋がり、霊力や情報を共有する』特性を持つ。

どう考えても雑用係の破面アランカルとしては破格の能力であるが、それはロカの生い立ちも関係していた。

元々ロカは無数の魂魄を人為的に寄り合わせ、人工的に大虚メソスを造り上げるザエルアポロの実験台として生み出され、崩玉によって破面アランカル化する前は、純白の蜘蛛状の中級大虚アジュールカスだった。

その糸もまた、ザエルアポロの完全なる命の研究の副産物であり、糸の霊子供給を止める事で姿を消す事を始め、様々な特殊能力を発動することが出来た。

もちろん、霊力や情報を共有するという方法での情報収集もだ。

そしてロカが調べていたのは、ニルフィの帰刃レスレクシオン 『無貌幻魔』についてだった。

ザエルアポロの集めた資料があれば最初からそんなことをしなくても良かったのだが、集められた資料室は何者かに荒らされており、ニルフィの根本に関するものが抜き取られていたのだ。

悔やんだところで仕方がない。

突き動かされるように、ロカは情報を構築させていく。

もし主人であったザエルアポロがいれば、調べたからといってどうなるとも言っただろう。しかしロカは糸の操作を止めない。自分になが出来るわけでもないが、情報が少しでもあれば、暴走状態のニルフィを止める手段が見つかるかもしれないからだ。

ーおかし。

ロカは形の良い眉を寄せる。

彼女は『無貌幻魔』の異質性に、誰よりも早く気が付いていた。

たしかにあの刀剣解放の能力は、ニルファイが無解放状態では使えなかった他者の帰^{レスレクシオン}刃の再現まで可能にしてみせた。

そこまではいい。

やろうと思えば、破面^{アランカル}という括りではロカだけに限定されるが、同じようなことが出来る。

いまだに手探りな状態ではあるが、反膜^{ネガシオン}の糸の能力の一つに、共有した情報をコピーし再現するというものがある。本家には劣るとはいえ、コピー元の戦闘経験まで再現可能という代物だ。

まあ、ニルファイにねだられて糸で色々なことをしているうちに、偶然発見したものである。

使いようによっては非常に強力であるものの、使えるというだけで、ロカ自身に戦闘経験は無く、藍染さえも知らないために埋もれた価値ではあるのだが。

ともかくロカは、ニルファイと同じように他者固有の能力を使うことができるのだ。

しかし再現率はよくて八割まで。

威力となれば低くなり、数となれば少なくなる。

これは技術などの問題ではなく、死神や虚^{ホロウ}の本質が関係している。

いかにニルファイといえども、ただの観察眼でそれ以上の数値を叩き出すことはできないのである。

しかし現実が違う。

ヤミーとの戦いでは彼の『憤獣^{イーラ}』をコピーし、力比べでも勝利している。

ドルドーニの『暴風男爵^{ヒラルダ}』や朽木白哉の『千本桜景厳』も、オリジナルのものより強力であった。

たとえ藍染でも同じようなことは無理だろう。

ゆえに、普通ではない。

だからこそ、まっとうな方法で使っているのではないことが明白だ。

そして『無貌幻魔^{イルンオン}』のデータのダウンロードがほぼ完了する。

感情の薄いはずの彼女は顔に驚愕を貼り付け、体を震わせる。

「これは、まさか……」

すぐにニルフィを止めなければならない。

前例があるだけに、あの刀剣解放は毒でもあった。

にんしきどうき
認識同期

アールニールとは違い全破面アランカルに伝達することはできないが、ニルフィとの繋がりの深そうな人物たちに限定することで能力の詳細を送った。

そこまでの権限はロカには無い。

しかし気づけば体が動いていた。そんな状態だった。

――私は、私は……。

これで良かったのか？ そう自問する。あくまで情報を渡しただけで、具体的な作戦など何も無い。

ニルフィを止めるもつとも簡単な方法は時間切れであるが、それは手遅れなのだ。

ただロカは、自分に向けてくれる屈託のない少女の笑顔をもう一度見ることが夢見たのである。

「これで良かったのか？ そう悩んでいるように見受けられるが」

ロカが振り返る。

ここまで運んできてくれた男が、整えた髭を携えた口元に優しげな笑みを浮かべていた。

「吾輩は良かったと思っ

ているぞ。二の足を踏んでいた者にも、これで発破を掛けたことだろう。……無論、そこには吾輩も含まれるがね」

冗談めかした口調。

それが目の前の女性を安心させるためだとは、すぐにわかった。

「……ですが、私が送った情報には、誰かを無責任に死なせてしまう可能性があります。いえ、確実にあるのです。それを、なにも出来ない私が……」

「それは違う」

やんわりとロカの言葉が否定される。

ラス・ノーチエス
「虚夜宮には、どうも贖目に見ようと、結局は己のためにしか動けぬ

者しかおらんのだ。たとえロカ嬢が情報を伝えぬとも、動く者は動く。彼らにとつて己の身を心配されるということは、それこそ耐えられることなのだよ」

さて、と男が、ドルドーニがロカに背を向ける。行くのだろう。

本当ならば、最初から駆け出したかったはずだ。

それでもこうしてロカが役目を終えるまで、彼は待つてくれていた。ロカが同胞たちに情報を伝えるまで。

「物語の幕が閉じる頃には、涙を流す女性が一人も居ないのが吾輩の好みなのだ。そのためならば、吾輩は喜んで観客席から舞台上がり、希望だろうとなんだだろうと伝えてみせよう！」

ドルドーニが屋上を駆け、巨塔から飛び降りた。

—————

砂漠の番人であるルヌガンガという破面アランカルには、虚夜宮周辺ラス・ノーチエスにおける警備の他に、もうひとつの仕事を藍染から任せられていた。

このルヌガンガの特徴を挙げるなら、全身が砂で出来ており、基本的に水以外の攻撃に無敵というものがある。

その特性を生かし、とある十刃ブリパロン・エスパーダ落着を虚夜宮の一角に監禁していたのだ。

しかしそのルヌガンガも、現在は一護たち死神がやって来たことによつて倒されてしまい、いままさに監禁対象が解き放たれようとしていた。

破面NO. 102、ピカロ。

百人以上の子供の破面アランカルから成る、類を見ない「群にして個」の集団である。

彼らは大半が10歳前後の少年少女だが、なかには人型でない者や第9十刃ヌベリノ・エスパーダアローニーロのような頭部をした者、動物型の者も存在しており、その姿に統一性は無い。個体ごとに個別の意識を持ち意識の共有もしているが、全体の頭の中身は子供と変わらなかった。

それゆえに団体行動のしづらさという点で十刃エスパーから落とされお
り、こうして地下深くの密室に閉じ込められているのだが。

「暇だねー、地震も無くなっちゃったし」「わたしは静かでこっちの
ほうがいいなあ」

「お腹減ったよ」「お菓子は?」「もう無くなっちゃつ
た……」

「Q r r r r r ……」 「お姉、ちゃん、こない」 「それよ
りなにして遊ぶ?」

「鬼ごっこ」「それもう飽きたよ」「つままないな」
ピカロ以外にはなにもない空間だ。

いや、実際にはいくらかの遊具があったはずなのだが、彼ら子供特
有の遠慮のない残虐さで破壊されてしまったというべきか。普
通の破面アランカルでさえ彼らのオモチャになれば、壊れて動かなくなるまで
遊び倒してしまう。

しかしそんな時、ヘッドフォンをしている少年のピカロが急に顔を
上げた。

「そういえば、ルヌガンガがどっか行っちゃったね」
その言葉にすぐに反応するピカロたち。

探査回路ベスキスを発動させると、周囲を常に流動しているはずの砂の動き
が止まっていた。

「えっ、それって外に出られるの!?!」「でも藍染さまは出ちやいけ
ないって」「べつにいいじゃん」

「そうそう、ここに居るの飽きた」「でたいっ、でたいっ」「Q
r r r r r !」

「やだよ、砂まみれになっちゃう」「僕は行く」「わたしも!」
「デタ、いデタ、い」

しばらく好き勝手に言い合うピカロたちであったが、次第に外に出
るという意見でまとまり始めていた。

そんな時だった。

砂の硬化した壁から湧き水が溢れるように、砂の塊がドボリと吐き
出されたのは。

「……?」

それに全員が気づき、同じタイミングでそれを注視する。

視線を集めながらスライムのように砂は形を変え、さらに人型を取り、数秒もすれば色もついて少女の姿を取った。

「ニルファイのお姉ちゃんだ!」

すでにそこにあつたのは泥人形ではなく、瑞々しい肌の少女となっていた。

途端に、ワツとピカロたちが駆け寄る。

彼らにとつてニルファイという少女は、お菓子を与えてくれる、ほんのちよつとだけ年上のお姉さんだった。つまり“いいヒト”である。ピカロにとつて“いいヒト”とそれが以外で世界が分かれており、その括りとなればニルファイは懐くの十分な相手だった。

「すごい、すごい!」 「さっきのどうやったの!」 「ルヌガングみたいだった!」

「お姉ちゃん、私、いい子にしてたっ」 「オカシ、オカシ」 「ねえ、すぐに遊ぼう!」

「髪白いね」 「かつこいい!」 「またホロウ波を撃とうよ!」 「とにかく遊ぼう!」

服装もいつものものと違う。表情が抜け落ちている。

さらにはニルファイの異様な現れ方にもさほど頓着せず、飼い主が現れたような子犬のようにピカロが黒髪の少女に群がった。

いつもなら、お姉ちゃんと呼ばれたニルファイは得意げな顔で無い胸を反らし、大人たちから見れば微笑ましいレベルでお姉さんぶるのが普通だったのだ。

しかし、この時は違ったというだけで。

「……あれ?」

ピカロの一人が、ポルターガイスト現象に遭ったように宙に持ち上がる。

ニルファイの背後の空間にノイズが奔り、ピカロを掴んだ瘦躯の奇獣の姿があらわになった。

「あつ」

誰が漏らしたのか。

呆けた声が響いた時には、掴まれていた一人が無造作に奇獣の巨大化した口に放り込まれていた。

すぐに飲み込まれて消えてしまうピカロの一人。

なかば呆然としていたピカロが我に返り、顔に浮かべたのは――笑顔。

「そっか、そういう遊びかあ！」

仲間の一人が喰われたことに対する怒りは一欠片もない。

そして疑問も。

もともと、ピカロはこのような破面^{アランカル}であった。鬼ごっこも、隠れんぼも、おママゴトも、そして戦いさえもピカロにとっては遊びだった。「うん、お姉ちゃんとはいつも鬼ごっこことかしかやらないもんね！ わかった！ いっぱい、いっぱい、――遊んでよ！」

事情も知らない。

しかし目を輝かせる彼らにとって、自分の致命傷までも面白いものでしかない。

ピカロたちは斬魄刀を抜き、己の纏う空気をわずかに塗り替えた。「お姉ちゃん相手だと、全力じゃなきゃ、ね？」

命のやり取りを遊びとして捉え、出し惜しみをすることもなくピカロたちが帰^{レスレクシオン}刃の解号を口にする。

「遊べ……」 「遊べ」 「遊べ！」 「あそ……べ……」

「アソベ」 「遊べ」 「遊ベッ」 「遊べ」

「あつそべーッ！」 「遊べ」 「あ、あそ、べ？」

「遊べ」 「遊べー！」 「遊べ……」 「A a s s o
b b e e……」

複数の子供たちが、一斉に口を開く。調子こそ違うものの、誰もが同じく「遊べ」という単語を口にしていった。

だが、その後に紡がれた単語は、口調もタイミングも完璧に一致し

ており、まるで周囲の空間そのものが声を上げたかのようなようだった。

「「「「「「「「「「ランゴスタ・ミグラトリア『戯擬軍翅』!!」「」「」」」」」」

周囲に、冷たい風が吹き荒ぶ。

それはニルフィの肩ほどまでの髪をバタつかせ、散らばった遊具の破片を巻き込みながら、風が密室に充満する。

風切り音を響かせて、一斉にピカロたちの外見がわずかずつ変化する。背中から、バツタやコオロギ、トンボを連想させる半透明の翅が生えた。

外見そのものが別人に見えるというほどの変化ではないが、一人一人の霊圧が、先刻とは比べ物にならないほど上昇している。

そして、巻き起こる風に乗って、奇獣が次々とピカロたちを喰らっていくなかで、子供型破面アランカルは部屋の各所に飛び広がった。

さらに間を置かず、いくつもの虚閃セロや虚弾バラをニルフィへと撃ち放つ。

だが、ニルフィがノーモーションで霊子の砲台を作り出すのも同時だった。

セロインフイニート
重光虚閃軍

圧倒的な閃光が周囲を薙ぎ払った。

余波によって部屋が崩壊してき、穴という穴から砂が溢れ出してくる。

それを嫌い、ニルフィが部屋の中央に降り立った時だ。

「「「「「」」」」」

ピツ、と彼女の周囲の地面に切れ込みが入る。

それは絶え間なく数を増やし、さながらカマイタチが踊り狂うようだった。

「お姉ちゃん、まーだだよー!」

ニルフィの虚閃セロを受け、片腕を消滅させたピカロの一人が笑う。

いや、一人だけではない。喰われた者を除き、たとえ致命傷を受けていようとピカロたちが笑い続ける。そこに恐怖が無いのは、彼らに

とって戦いとはどこまでも遊びでしかないからだ。

ピカロたちの翅から生まれる特殊な音波。

それが攻撃に変換され、さらに最大威力を発揮できる位置関係が偶然にも果たされる。

威力に換算するならば、それは朽木白哉の卍解『千本桜景厳』と同等であった。

もはや視認できる風の刃がニルフィの矮躯を包み、圧倒的な破壊力をもたらす。

「……あれっ?」

しばらくして、ピカロたちが首を傾げた。

いつまで経ってもニルフィを破壊できた手応えがないからだ。

示し合わせたように音波攻撃を弱めていき、破壊の繭の内部がどうなっているのかと確認しようとする。

フオルニカラス
テロン・パロン
『邪淫妃』 球体幕

そこにあつたのは、触手のような羽が球体になったようにできた物体だった。

羽が解けると、奇獣の腕が変化したそのなかからニルフィが傷一つない姿で現れる。

ここでピカロたちは疑問に思った。

それは自分たちの最大の攻撃が防がれたとか、そういった即物的なことではなく、子供らしく純粋な、遊んでいれば誰もが思うものだった。

「なんで、お姉ちゃんはそんなにつまらなそうなの?」

「……」

ニルフィは答えない。

ただ、仮面のような表情のまま、俯きがちに立っているだけだ。なぜだろう。ピカロたちは考える。

いつも遊び相手になってくれる黒髪の少女は、常に笑顔で接してくれた。それがいまは無い。遊んでくれているはずなのに、どこまでも遊びには無関心そうだ。

外で彼女にながあつたのか、ピカロには知りえないことだった。

そこで、すぐに名案が思いついたと笑顔になる。

「うん、うん。じゃあ、もつと遊ぼうよ！ お姉ちゃんには一杯笑顔をもらったからさ。今度は僕らが笑顔にしてあげる！ いっぱい遊べば、お姉ちゃんも笑顔になるよね！」

再び翅を振動させるピカロたち。

少しでも考えれば、ニルファイには敵わないことがわかったはずだ。しかしそれをしないからこそ、ピカロは愚直にニルファイに突貫し、笑顔にするために遊び続ける。

『サンタテレサ聖哭螳螂』

『ねじばな振花』

奇獣の腕が六本に増え、本来ならば大鎌が出るはずの手首から三又の槍がそれぞれ飛び出した。

一瞬にして部屋に溢れる怒濤の大波。

笑いながら突き進む子供たち。

それから間もなくして、ピカロたちを幽閉するための部屋が完全に崩落し、砂漠のなかに埋もれて消えた。

—————

「彼女は仲間を狂氣的に欲していた。すべての行動の根本には、それだけしか無かったんだ」

「はあ……」

ガルガンダ黒腔内部を歩くギンは、藍染のその言葉に生返事を返した。

会話に参加していない東仙が睨んだような気がしたが、それも仕方のないことだ。

この時までニルファイの過去についてはぐらかされていたギンは、この時になって、ようやくその断片でありそうな彼女の能力について藍染に訊いてみたのだ。しかし意外にもあつさりと返された答えがそれに関係の無さそうなものとなれば、ギンの呆けた声も頷ける。

「なに、君が知りたかったのは彼女の過去そのものだと思っていたんだ。違ったかい？」

「……ちやいますよ。質問の答え、あまりにも的外れ思うたんで、仕方ないことですわ」

それとなくニルフィの過去を詮索するなど言ったのは、他でもない藍染だ。

いけしやあしやあと語るその口になにも思わないでもないが、調べた結末がザエルアポロの末路となれば、さすがにギンも藪蛇のような真似はしない。

それに、こんなやり取りは日常茶飯事だ。いまさらどちらも改めるようにするつもりが無かった。

「時間も少しはある。そう急ぐことでもないだろうと思っただが」

ギンは自分たちの進む先を見やる。

暗闇の奥底から歩き続けければ、現世と繋がる白い光の入口が視界に映るのだ。ギンはそれを確認し、あとしばらくは歩き続けねばならないと推測した。

「さよですか。それで藍染隊長、話の続きお願いできますか？」

「ああ、いいだろう。とはいえ、どこから語るべきか」

藍染が前を向き、記憶を掘り起こすように光の奥を見つめた。

「彼女が仲間を欲すようになった切っ掛けは、私でもわからない。見つけた時にはすでにそうだった。だが、^{ホロウ}虚であった彼女を観察するうちに、それはかつて、彼女があまりにも完璧な仲間と出会っていたからかもしれないと考えている」

あくまで推測だが、と藍染が釘を刺す。

「そもそも私が彼女に目を付けたのは、彼女がもつ『魂魄の変質』という二つのうち一つの特性を持つていたからだ」

「変質？」

「そうだ。彼女は最初からあそこまでコミュニケーション能力が上等だった訳ではない。己の自己を確立させるために同胞を喰らうはずの^{ホロウ}虚が、仲間を受け入れてもらうために自己というものを投げ捨てたんだ。そうやって彼女は、少しずつ仲間との距離感を掴み始めた」

たしかにとギンが納得する。

それとなく聞いた噂では、おそらく初期にバラガンと出会った頃の

ニルフィは獸同然だったらしい。そこからどうやって、あそこまでヤミーやグリムジョーという気難しい面々と親しい交流が出来るようになるのか、長いあいだの謎だったのだ。

「だが、それはあくまでも結果でしかない。彼女がニルフィネス・リーセグリンガーとなるまでの過程こそ、君が知りたかったことだろう」
悠然とした笑みを貼りつけながら藍染がギンに振り返る。

それに同じく胡散臭そうな笑みを返しながら、ギンが飄々と肩をすくめた。

「まあ、否定しまへんけど」

目で続きを促すと、藍染が語りだす。

「私が観察し始めた頃は、まだ友好的な関係を築く方法を彼女は知らなかった。しかし仲間がどうしても欲しい。そう考えた彼女は、手っ取り早く、自分そのものを相手に差し出した。武力だろうと体だろうと、もともとから集団としてしか存在し得ない虚^{ホロウ}たちに拒否する理由は無かったんだ」

それを聞いてもギンは眉をしかめることはなかった。
予想はしていた。

ニルフィは常々相手に自分を即物的に求めさせたし、それを改めさせる出来事があっても、心に深く根付いたそれは簡単には変わらな
い。ニルフィは仲間のためにどのような奉仕さえ疑問も挟まず、ただ一心に受け入れる。

数百年の地獄という名の天国を味わって、たったの一年にも満たぬ時間のなかでどれほど改変できるのか。

「とはいえ、彼女は誰にでも優しい。優しすぎた。そしてあくまで利害関係として結びついた糸がちぎれるのに、それほど時間が掛かることもない」

その虚^{ホロウ}たちはニルフィに“依存”し過ぎたのだろう。

所有権の争いや、次第に消えてく遠慮という言葉。利害関係には一番持ち出してはいけない“欲”が生み出されたのだと、藍染は続けて語った。

「醜いものだ、あれは。真っ白な子供に、彼女が愛する相手を互いに殺

せと命令するのだから。心の弱い彼女にそれが耐えられるはずもないというのに。――そこで私の注目したもうひとつの特性が表に現れた」

記憶の保存。

そう、藍染が言った。

「保存？……あの子、記憶喪失ちゃいましたっけ？」

「ああ、たしかに間違っただけじゃない。しかし、保存の方法も色々あるということだ。記録として残す。思い出として残す。あるいは、美しいそれを美しいままに終わらせる、といった具合にだ」

「なるほど。それがニルちゃんやと」

「そうだ。しかし彼女はまだ仲間と一緒に居たい。だが、それをして自分が辛くなるだけだ。だから、喰べた。そうすれば血肉という仲間はいつまでも自分と一緒になのだから」

「……………」

ギンがポリポリと頭を搔く。

おそらくそれは、生きたまま喰べるといふことだと思いついた。

アネットを傷つけたノイトラに言い放った『喰べるハズだったのに』という言葉が、そういう意味だったのかと気づいたので。あの時点で、ニルフィの美しい思い出は完全に壊されていた。そうなるのも自明の理といふことか。

ニルフィの暴走はそれに起因しているのだろう。

そしてそれを知りながら藍染はニルフィに悲劇を押し付けたのか。

「けど藍染隊長。ニルちゃんが少しづつ変わってしまった言うけど、それでも腰の落ち着ける場所は見つからんかったんやろか？」

いまでは個人意識の高いはずの十刃エスパーダと仲がいいほどなのだ。

現在ほどでは無くとも、群れなくては生きていけない虚ホロウたちが揃いも揃って地雷を踏み抜くような真似をするだろうか。ニルフィが出会った虚ホロウのなかには、ハリベルやバラガンのような人格者や指導者だっただけははずだ。

そこではたとギンが気づく。

最初から言っていたではないか。藍染自身が、彼女を観察していた

と。

「どこにでも不幸な行き違いはある。たとえ素晴らしい仲間が出来たとしても、不慮の事故の可能性はゼロにはならなければ、彼女が身も心も蹂躪されて狂うことになる環境に置かれるのも自然だろう」

その言葉の裏でどれだけの虚ホロウの被害があつたのか。しかも一番悲惨なのは、どこまでも仲間と思つていた存在に壊されてきたニルフィだろう。

ギンは何も言うことなく、藍染の話の続きを待つていた。

「仲間を喰べた時点で彼女の保存は完了していた。記憶さえ、もはや要らないものだったんだろう。だから彼女は魂魄を変質させることで、あとはそのときの『自分』を構成するすべてを白紙に戻したんだ」

「それが、記憶喪失の正体やと。自分が居た証拠をすべて喰べて、悪い夢やつたと記憶に蓋をする……」

「そうだ。彼女はその時点から不完全だった。完全になるには、それこそザエルアポロが作った薬によるハリボテでしか出来ないほどにね」

だんだんとピースが埋まってきた。

そこでギンが首を傾げる。

「せやけど、ニルちゃんの使つておつた他の破面アランカルや死神の能力はどういうことですか?」

「それが『魂魄の変質』から派生した『無貌幻魔』……、いや、『無貌姫』の本来の使い方だ」

何者でもないことを定義として、何者にでも成ることが出来る能力。

例えば、あれも解放前は不完全なものだった。

「あれは魂魄の一部を分離させ、他人の魂魄そのものにするんだ。自分には使えずとも、魂魄が同等ならば使えぬ道理もない。さらにはその魂魄を燃やすことでオリジナルを越えたチカラを生み出す」

「ひゃあ、山本総隊長の斬魄刀ホロウがパクられたら思うと、もう恐ろしいですわ。せやけど、それで虚ホロウだったニルちゃんに東仙サンの卍解が効か

なかつたんちゆうワケや」

声を出さずに笑いながらギンが東仙を横目で見る。

盲目の死神は平然としているように見えるが、ギンの目にはその額に青筋が浮かぶほどの激情があるように思えた。シャウロンたちを東仙が手にかけてから、彼とニルフィの仲はそれはもう出会えば無差別に殺気を放つほど険悪であり、だからこそこの会話にも先程から入ろうとしていない。

東仙の卍解である『清虫終式・閻魔蟋蟀』すずむしついでしき えんまこおろぎは、能力解放と共に、斬魄刀『清虫』本体を握っている者以外の視覚、聴覚、嗅覚と霊圧感知能力の四つを封じる楕円形のドーム状の空間を形作るといふものだ。しかしニルフィの能力が藍染の言った通りなら、彼女もまた東仙の魂魄をコピーすることで斬魄刀の魂もろとも同化し、自ら対象外になることが可能だったのだろう。

「……………」

ギンは一拍置いてから、再度藍染に尋ねた。

「それで、ニルちゃんがそれを繰り返すと？」

「君もわかつているだろう。言葉にすれば強力そのものだが、それも限定的で、そもそも戦いを目的とした能力ではない。あくまで、自らが存在した証拠を喰べるためだけに特化した、シンデレラの魔法のようなものだ」

藍染の笑みが深くなった。

そして最初からニルフィの名を呼ばず、あくまで「彼女」としか称さなかつた藍染が、彼女の名を口にする。

「あの能力を使い続けた場合、結果的に彼女が生き残るとしても、ニルフィネス・リーセグリンガーという人格は――消滅する」

—————

フルール・ブレイクバレット。

ヴァアヴァロ・ヴァアヴァロ。

レレ・ララ。

プルチネルモ・フレスビー。
フォネット・ベイ。

その他いくつかの名の書かれた紙に目を通し、くろつち 涅 マユリは感嘆の息を吐く。

これらすべてには、バラバラな外見的特徴や、性格、話し方に至るまで、やや空欄が目立つながらも事細かに書き込まれていた。

書かれているのは、名前の数だけの虚ホロウではない。

すべて一体の虚ホロウについてだ。

「数が多くて困ってしまうヨ。……しかし、フム、たしかいまの名は——ニルフィネス・リーセグリンガーといったかね。これなら拘束用寝台に書き込む名に困らなくて済むヨ」

自称『女性に優しい』ということとで有名なマユリの対象は幼い少女すらも適応するらしいが、どうやら少女を瓶詰めではなく実験体として厚遇するつもりらしい。もともと、厚遇した結果が拘束用寝台であるのだが。

「しかし、そうか。現世での残留霊子から予想はしていたが、いまからでも気分が高揚してしまうネ」

ネムの引く荷車に腰掛けながら、マユリがファイルを立ち所にめくっていく。

ニルフィネスという少女が他者固有の能力まで使えるのは、その無色透明な何色にも染まる特殊な魂魄であるためだ。絶えず変質するそれは、例えるなら水か。

しかし注目すべきはそこではない。

魂魄とはもともと、自己を確立するにあたって最もたるアイデンティティとなる。

それを切り離し続けるとどうなるか。

自己という存在が維持できず、消えてしまうだろう。

しかし少女の仲間の血肉と同化するという願望が可能にした。

砕けたブロックを同じように組み立てなければ、まったくの別物が生まれるのと同じことである。

ニルフィネスという少女は、喰らった他の虚ホロウの魂魄で強引に代用

し、それらを寄り集めることで新しい人格を生み出すという生熊を持っていたのだ。

かつての記憶が思い出されるのも、残りカスが影響していたか。しかも自己防衛として、あえて残った記憶を都合のいいように改変されているとも記述されている。

フルール・ブレイクバレットからヴァヴァロ・ヴァヴァロに。

そこからレレ・ララ、プルチネルモ・フレスビーに続き、フォネツト・ベイに。

さらに何度も人格を記憶と一緒に破棄しながら、ニルフィネス・リーセグリンガーへと生まれ変わった。

「変質する霊圧に興味はあるが……。ヤレヤレ、時間切れになったところでニルフィネスという人格には興味が無いから、私にはどうなろうと関係ないんだがネ。しかしその他大勢の価値の分からぬ者は、すでに動いている様子だ」

主力たりえる破面^{アランカル}たちが移動を開始している。

少女を止めるなら、それでいい。

だが、下手に傷を付けられると面倒だという思いがマユリにはあり、しかも自分で相手をするのも面倒である。

「流石に藍染クラスを相手に一人でやるのは遠慮したいネ。これは戦力を纏めたほうが無難かネ」

マユリの視線の先、遙か前方に巨大な砂の間欠泉ともいうべきものがふき上がるのを見ながら、彼はそう呟いた。常備している霊圧計測器に出た数値に目を落とし、これからを決める判断が間違っていないことがわかったことにマユリが頷く。

いまでさえどれほどの魂魄を燃やしているのか。

藍染に匹敵する霊圧が、すぐに肌でも感じられた。

—————

砂漠の中心に少女が佇む。

その背に纏わりついている奇獣が咆哮を上げ、動き出した破面^{アランカル}た

ちに宣戦布告するように牙を見せた。

少女は全身を血で汚しながらも、艶やかな黒髪に混じる数房の白い髪だけは綺麗なままだった。

超弩級自然災害少女

なにが起こっている？

そう考えるのは当たり前であり、ヒールを響かせながら早足で廊下を進む彼女も、その例に漏れることはなかった。

破面NO・105、チルツチ・サンダーウィッチ。

ゴスロリを思わせる妙な服を着ている女で、左頭部に小型の飾りのような形をした仮面の名残がある十刃落ちだ。

チルツチは思考する。

立て続けに侵入者たちはもとより、^{エスパーダ}十刃たちの霊圧が消えて行き、つい先刻ではノイトラとヤミーのものが間を置かずに感じられなくなった。

ニルファイが関係しているであろうことはわかる。

その情報も、ロカという名も知らぬ破面^{アランカル}がもたらしたものだ。

信用するしないに関わらず、するしかないように思える。

しかし確認をするために、他の破面^{アランカル}をこうして探し回っているのだ。

そしてちょうど、前方から誰かがやってきた。

さては逃げたメガネの滅却師^{クインシー}かと警戒するが、その特徴的なシルエツトからすぐに肩の力を抜いた。

「なんだ、ガンテンバインじゃないの。それより、その肩に乗せてるのってなによ」

「……いや、さつき気絶してるのを見つけてな。ここじゃ見ないし、新参かと思っただが」

“107”の数字を持つ十刃^{プリバロン・エスパーダ}落ち、ガンテンバイン・モスケーダ。

オレンジ色のアフロヘアで、額を覆った仮面の名残に星のマークをつけている男だ。

そんな彼が肩に担いでいるのは、黄緑色の髪で眉間から鼻筋にかけて傷痕があり前歯がない、気絶している破面^{アランカル}の少女だった。

これがドルドーニであればなじっているチルツチだったが、破面^{アランカル}でも屈指の常識人であるガンテンバインならば万が一のこともない

と、興味を示すだけに留めた。

「それより、なにが起こってるのかあんたは知ってる?」

「俺もそれを知ろうとしてな。ニルフィの刀剣解放の情報、それから八番以下の十刃エスパーダが死んだとか、たしか、治療係のヤツが認識同期で知らせてくれたぜ」

「ならあたしと同じね」

「他の十刃プリバロン・エスパーダ落ちの姿も消えちまつてるから、ここには誰も居ないと思ってたところだ」

「一番騒ぐはずのドルドーニも居ないものね。まったく、なにが起こってんだか」

苛立ちを隠そうともせず、チルツチが親指の爪を噛む。

「お気に入りの服は汚れるし、せつかくの獲物は逃げていくし」

「お前も侵入者と戦ったのか」

「そう言うならあんたも? ていうか、その顔だと同じみたいね」

メガネの滅却師クインシーと戦ったチルツチだったが、せつかく帰レスレクション刃を使つたにも関わらず、戦略的撤退をさせられてしまったのだ。

ガンテンバインも同じらしく、互いに不完全燃焼らしい。

「まあ、やろうとしてることも一緒ってトコか」

「あんたと一番に会えてよかったわ。他の連中だと、もつとややこしいったら……」

「ん、むあ……?」

そこで破アランカル面の少女が目覚めたようだ。

身じろぎをして、ガンテンバインのアフロに顔を埋め、そして叫ぶ。

「う、うわあああああ!?! い、い、一護の髪が爆発してるっス!」

「おい、あまり暴れると……」

「――痛い!」

もがいた拍子に少女は床に落ち、強打した尻を抑えながら涙目で二人を見上げた。

「一護じゃないっ? だ、だれっスかあんたたつは!」

「五月蠅いガキね、誰だっがいいじゃない! そういうあんたは見たことないけど、名前なんてあるの?」

「ネルはネルっス！　そういうオバさんは誰っスか！」

「お、オバ……ッ」

「落ち着けチルツチ！　子供の言葉なんだぞ」

ガンテンバインになだめられ、たしかにそうだと思い直したチルツチは、大きく深呼吸する。

自分は大人。相手は子供。段々と、心に平静を取り戻していく。

これならば、たとえどんな馬鹿にされるようなことを言われたところで、ブチギレることはないだろうと思った。

「あたしはチルツチ・サンダーウィッチ。こっちはガンテンバイン・モスケーダ。元十刃^{エスパーダ}よ、クソチビ」

「ええ〜？」

「……なにさ、その疑わしそうな目は」

「そっちのアフロのおっちゃんはそうかもしれないっス。けど、あんたは……」

そう言つて、ネルは視線を落とし、そこに向けて指を差した。

正確には、チルツチのその控えめな胸部装甲にだ。

「ボインボインじゃないっス。十刃^{エスパーダ}の女のヒトたつは、もっとボインボインのズガンズガンのハズじゃないんスか？」

「ーコンのクソガキイ!!　ニルファイと同じこと言いやがってエ、クソガツ!!」

「悪気は無い、コイツに悪気は無いハズなんだよ！」

ガンテンバインに抑えられていなければ、チルツチは独特な斬魄刀を使うこともなく、この無礼すぎる少女を蹴り殺していただろう。

初対面の時のニルファイの煽り文句そのままだった。

もし現十刃^{エスパーダ}であるそのニルファイを引き合いに出したところで、幼い少女に勝ったとしても、試合に勝って勝負に負けた、そんな屈辱的な結果になってしまうだろう。

「そ、それよりだ。ネル、お前はなんでこんな虚夜宮^{ラス・ノーチエス}の端っこで転がってたんだ？」

慌てたガンテンバインが咄嗟に話題を転換する。

「ああつ、そうっス！　ネルはさつきまで一護と一緒だったんス。け

ど、どこかに吹き飛ばされて……。それで気づいたら、アフロのなかで……」

「一護って、黒崎一護か？　なら、侵入者じゃねえか」

「あんたが手引きして連れてきたってこと？」

「うっ、そ、それはその……」

縮こまるネルにはやむを得ない事情がありそうだった。

しかしすぐに顔を上げ、気丈にも大きく声を張り上げる。

「でも、ネルは一護のところに行かなきゃいけないんすー」

チルツチは滅却師クインシーとの戦闘時、ペツシエとかいう蟻頭を見ている。

ネルもきつとその仲間なのだろう。

「なあ、チルツチ。コイツはどうすりやいいんだ？」

「あたしに聞かないでよ」

しかし侵入者の殲滅が指示に出されているとはいえ、チルツチもガンテンバインも無抵抗な子供を殺すことを進んでやるような性格ではない。

そもそも、藍染が虚圏ウエコムンドから去った現在、任務さえあやふやなものになった。

ニルフィとはそれなりに交流を持った二人だ。

あの少女の顔がちらついて、それに拍車を掛けていた。

「ドルドーニが居れば、なんにも言わずに助けたんだろうけど……」

肝心な時に居ない紳士に悪態をつく。

「それにさつきからなんなのよ。そこかしこから同じような霊圧だっ
て感じるし」

この異常事態が起こった虚夜宮ラス・ノーチエスに安全な場所などあるはずがない。

さて、ネルの処遇をどうするべきか。

そう二人が考えたとき、床の振動が足から伝わった。

地震はさつきまで何度もあったが、しかし、今回は震源が足元に
あるような。

「ーッー！」

すぐに二人はその場を飛び退いた。ガンテンバインはネルを抱え、

地面が破裂したような衝撃から守り切る。

目を細めながら爆発の中心を確認しようとしたチルツチは、すぐにその中央に佇む少女の正体に気づく。

「……ニル、ファイ？」

チルツチの声に反応したように、生気のない動作でニルファイが首を女に向けた。

いまだに気に入らない部分があるとはいえ、ニルファイとはそれなりに仲がいいと思っっている。

だからこそチルツチは、自分でもなにを言いたいのかよく分からな
いまま、ニルファイへと一歩踏み出した。

「待てー！」

わざわざ響転ソニードまで使ったのか、ガンテンバインがチルツチを押し
ける。

打撃音。

正気に戻ったチルツチは、壁にめり込まされたガンテンバインを見
て息を呑む。

そしてすぐに、ニルファイの姿もまた異様なものと気づかされた。

血に染まった服。背に被さる奇獣。チルツチに向けて振り下ろさ
れる長腕。

リュヒル・デル・ドラゴン
龍 哮 拳

龍頭状の霊圧の塊が横合いから襲いかかってきたことで、ニルファイ
と一体化する奇獣は腕を下げ、即座に回避してみせた。

すぐに壁から抜け出したガンテンバインが刀剣解放をしており、両
腕と背中に丸いアルマジロのような鎧が形成されるレスレクシオン 刃 『龍拳』ドラグラを
発動させている。

ネルはどこに置いたのかと探せば、後方で驚いた顔を晒していた。
「呆けてる暇はねえぞ！ とにかく戦えるようにしろ！」

「……ッ！」

本能的にチルツチが動き、斬魄刀を構えながら解号を口にする。

「搔つ斬れ『車輪鉄燕』」
ゴロンドリーナ

チルツチの両腕が鳥の前脚のように長大化し、頭には羽根飾りのよ

うなものが、背中には刃を数枚重ねたような翼、長い尻尾が形成された。

レスレクシオン
帰 刃を最初から使ってしまったが、もしニルファイと戦うならばもうでもしないと勝ち目がない。

しかもそれはニルファイが未解放の状態でもだ。

おそらく同じく刀剣解放をしているニルファイ相手に、どこまで通用するものか。

「ニルファイ！ あんた、なんか言いなさいよ！」

「……」

返答はない。

ただし言葉としてであり、奇獣が巨大な手を構えて攻撃態勢を見せた。

アラ・コルタドール
断 翼

高速振動する翼の刃でチルツチが先手を取る。それを難なく避けられるのは想定内。その隙を埋めるためにガンテンバインが両手を組んでおり、間を置かずに次なる技を放つ。

デイオス・ルエゴ・ノス・ペルドリーネ
主よ我等を許し給え

龍の頭のように見える両拳から解放された破壊の閃光が、ニルファイと奇獣を飲み込む。

アラ・コルタドール
断 翼 // ディイスベルシオン
散 //

さらに追い打ちを掛けるようにチルツチが翼から刃を放った。そのあとを追うようにガンテンバインが地を滑るように駆け、無数の拳をニルファイに叩き込む。

彼ら、というよりも、ブリバロン・エスパーダ 十刃落ちたちは一対複数の集団戦でニルファイと戦うことが多かった。それこそ、即席のコンビネーションが可能なくらいには。

しかしそれも二人では限界がある。

「ぐ、お、オオオオオオッ！」

ガンテンバインの動きが止まった。いや、違う。強制的に止められた。両腕を奇獣に掴まれ、どれだけ腕を引こうとしてもビクともしない。

そこにニルファイ自身の拳がガンテンバインの腹部に添えられ、捻られる。

なにが起こったのか、正確にはチルツチには見えなかった。

しかし口から血を零して膝をつくガンテンバインが無事であるはずがない。

「ニルファイ！」

チルツチが叫ぶ。

そこにどんな意味があるのか、彼女自身でもわからなかった。

「なんで、なんでよー！」

無数の虚弾バラに貫かれながら、チルツチが叫ぶ。

ここで仲間割れしている場合ではないのは、優しいはずのニルファイが誰よりもわかっていいるはずだ。

外でなにがあったのか、やはりチルツチにはわからない。

やはり情報通りだとしても、信じたくなかった。

あのニルファイが仲間を仲間とも思わぬ破壊の権化になるなど。今度こそ、立つてられぬほど通路が揺れた。

歪み、たわみ、外側から圧縮されたように粉碎される。

砂だ。

大量の砂が意志を得たようにのたうちまわり、チルツチとガンテンバインを飲み込もうと迫る。

「ルヌガンガの……ッ」

どうする？

ガンテンバインを回収するか？

しかしその隙は？

それとも一人だけ離脱？

考えるうちに砂の波が迫った刹那、

「打ち伏せろ『牙ベル士ガ』」

チルツチの背後から飛び出した巨大な影が、霊圧を放出しながらニルファイに向けて突進する。

砂のなかを強引に押し進むそれを奇獣が受け止めた。

猪のような巨人の姿のその人物は、ノイトラの従属官フラシオンテスラ・リン

ドクルツである。

「いまのうちに彼を！」

テスラの横槍によって砂の包囲が崩れた。

どのみちこの場にいる面子ではニルファイの相手などできない。

出会うのが早すぎたのだ。

刀剣解放をすぐさま解除したチルツチがガンテンバインを抱え起こし、ついでに隅に転がっていたネルも回収する。

「あんたはー」

「どうか、東にツ」

「……そう」

右腕を奇獣に破壊されながらテスラが言い残し、その言葉に込められた言外の決意を悟ったチルツチは、これ以上なにも言わずに背を向けた。

「ま、待つつス！ あのヒトは……」

「うっさい！ あたしだって、あたしだってわかってるわよ！」

三人がこの場を去っていく気配。

それでいい、とテスラは思う。

「……ニルファイネス様」

捻れた右腕を庇いながらテスラが語りかけようとする。

しかし言葉が見つからない。

こうなる原因をつくったのは、テスラの主人であるノイトラだ。そしてそのノイトラを殺したのもまた、ニルファイなのである。

テスラは複雑な心中をまだ整理などできていない。

探すため走り回っていたというのに、いざ見つけると声が掛けられなかった。

だから、ニルファイの前に立ちふさがり、感情を乗せぬままに言った。

「ここを通すことは、できません」

ついさつき逃がしたチルツチたち。

あの二人ならば、もっと少女のためだけに言葉を掛けてやることができるはずだから。

屈強な左腕に拳をつくり、前に進むために蹄で床を踏み砕く。

口の隙間から蒸気のように熱い息を吐き、圧倒的な差をもたせずに殴りかかった。

—————

「止めろ！　なんとしてでも止めろ！　ここから先へ進ませるな！」

ルドボーンは葬討部隊^{エクスティアス}を叱咤し、悪夢のような光景に仮面の奥から冷や汗を流した。

彼の姿は『髑髏樹』^{アルボラ}を解放して枯れ木のようなのである。

しかし絶望的な状況に、内心が形となって表れたかのようだ。

そもそも彼は、ニルフィに挑発を掛けるという藍染の案には反対だったのだ。

辛いことの多い中間管理職にも優しく気遣ってくれる少女。ルドボーンはそんなニルフィを悪く思っておらず、^{トレス・シフラス}3ヶタの巢において、内心ではすべて藍染が悪いのだと謝罪するくらいには、好ましい相手だと考えている。

しかしどの道、ルドボーンはしがない中間管理職。

断ることもできず、嫌々ながらに従っていた。

だがどうだ、この窮地は。

もしこうなると知っていたら、たとえ死のうとも反対していたに決まってる。

^{ラス・ノーチエス}虚夜宮本宮の外。

そこに葬討部隊二千体を配置していたルドボーンは、砂埃とともに地平を駆けてくる集団を目撃していた。

ロカという破面^{アランカル}から、ニルフィの帰^{レスレクシオン}刃の情報も貰っている。

だからこそ、ルドボーンは誰よりもこの凶悪さが理解できていた。

最前方の陣形のしやれこうべたちが無造作に空に打ち上げられる。それがほぼ同時に、次々と起こっていき、暴虐の竜巻のように陣形を食い破っていく。

いくらルドボーンが兵隊を補充しようが、もはや焼け石に水の行為

だった。

死神、ではない。

これは軍と軍の戦いなのだから。

ニルファイだ。

いや、正確に言うならば。

『アルボラ 罽_{アルボラ}樹』 カラベラス 罽_{カラベラス}兵団

ルドボーン固有であるはずの能力が模倣され、ニルファイの劣化版ともいべき存在の群れが虚夜宮のあちこちに散っているのだ。

どれだけいるのか検討もつかない。

この短時間にここまで増やせたのは、魂魄を使ったことによる強力な強化ゆえか。

暴走してるかのように好き勝手に暴れまわる少女の姿をした骸骨兵は、飢饉の原因である蝗_{いなご}の群れのようだ。

アラシカル 破面も死神も問わず、捕食されようとしている。

「ーッ！ ぐ、お……ー！」

ルドボーンのもとまで到達した小柄な影。

ソレの振るった長い腕を辛うじて刀で防御した。

敵兵は異様な姿だった。

本来ならば分離しているはずの奇獣が、少女の小さな肉体とほぼ一体化している。

下顎のなくなった奇獣の頭蓋で顔の上半分を隠し、長い腕は手甲のようにほっそりとした少女と混じり合っていた。

それが無数に攻めてきている。

しかも、だ。

『アルボラ 罽_{アルボラ}樹』の能力というのが、自身の劣化版を無制限に生み出すというもの。

もはや地力ではルドボーンと比べるべくもないニルファイが使用したことで、一体一体が数字_{ヌメロス}持ちを凌駕する実力を持っていた。

ーあるいは、フリバロン・エスパーダ 十刃_{フリバロン・エスパーダ}落ち級か!?

刀越しの手応えに、ルドボーンはあながち間違いでもないかもしれなと思う。

なんとか偽ニルフィの爪を弾き返す。
それを踏み越えるようにもう一体が飛び出し、また一体と増えていく敵兵に切り裂かれた。

気付けばもう、ルドボーン以外立っていないかった。

周囲に居るのは、三ヶタを超える怪物だけ。

誰も想像できたはずがない。

まさかルドボーンが数と質量の戦いに敗れるなどと。

「……馬鹿な」

なにが悪かったのか。

呆然とつぶやきを残した男は、白い荒波に吞まれて消えた。

—————

「縛道の六十二」

さじょうさばく
鎖条鎖縛

卯ノ花の縛道によつて身動きのできなくなった小さな骸骨兵。

視線さえ向けるのが煩わしいように次々と縛道を使い、少女の姿をした骸骨兵たちを絡め取っていく。

しかし手が足りない。

右腕である勇音はすでに戦闘不能にさせられ、もともとから戦力外の花太郎はその治療に追われている。

回収した朽木白哉も織姫がいなければ使い物にならず、ここ数分、彼らを入れた結界を卯ノ花が防衛しているという光景が続いていた。

卯ノ花の顔に焦りが帯びる。

困んでいる骸骨兵たちは総数四十。

ここまで無力化したものも合わせれば五十を下らない。

そのすべてが死神に例えれば副隊長以上の強さを持ち、突如現れたそれらによつて、身動きができないまま泥仕合を見せている。

よくよく見れば、卯ノ花の隊長羽織にいくつもの裂傷が入っていた。

牙によるものだ。

どうやら骸骨兵たちは、なにがなんでも卯ノ花たちを捕食したいらしい。

刀を抜くか？

そう卯ノ花は考えるものの、攻め手にまわれれば結界は手薄になり、たちまち部下たちが貪られる。

全力で一気に殲滅しようにも、今度は結界のほうが耐えられず巻き込んでしまう。

そこまで考えたとき、骸骨兵たちの包囲網の一角が吹き飛ばされた。

卯ノ花は見た。

爆音兵器のように霊圧を放出し続けるその男が、刃こぼれをしている斬魄刀を振り下ろしているのが。

「あ？ 虫みてえにコイツらが集まってると思ったら、てめえかよ」

卯ノ花の姿を見つけた剣八が口をへの字に曲げる。

「……助太刀、感謝します」

「チツ、たまたまだ。こんな中途半端に強エ奴らに、なに手間取ってやがんだ！」

向かってくる骸骨兵たちを次々と屠っていく剣八。

片腕だけで刀を振るってるといふのに、グリーゼとの戦闘でたが籓のはずれた霊圧によって、生きた竜巻のようだった。

ほどなくして、撤退した数人を除けば骸骨兵を倒し終わった剣八が卯ノ花の前に立つ。

「……おい、治せ」

「それは構いませんが……。あなたがここまで深手を負うとは。そこまで強い相手だったのですか？」

不機嫌そうに鼻を鳴らした剣八は、腰帯に突っ込んでいた斬られた片腕を卯ノ花に押し付ける。

「つまんねえ戦いだっただぜ」

そう言って、力尽きたように座り込んだ。

珍しいことだが、剣八がここまで消耗しているのは卯ノ花も初めて見る。

「私ができるのは止血までです。失った血もすべて戻すことはできません。そして確実に腕をつけたいのなら、まず織姫さんを探すのが先決ですね」

「一護の野郎はなにしてんだ」

「他の方々との音沙汰はなしです。この襲撃の前に『天挺空羅』てんていくわらを使い
ましたが、何人かに繋がらず、それ以外の方々との応答はありません」

ラス・ノーチエス
虚夜宮の危険性は予想以上だ。

アランカル
いや、見誤ったのは、これまで警戒していたニルフィネスという
破面のことか。

藍染が去り際に残した「彼女」がニルフィネスを指すのは明白
だった。

彼女がなにを思っただ同族さえも襲っているのかわからない。

ただ、部外者の卯ノ花が理解できたのは。

「……ここからすぐに離れましょう。信用できる戦力との合流が必要
です」

ラス・ノーチエス
虚夜宮はもはや終わりだということ。

剣八も大人しく従い、遠くの光景から視線をはがす。

さきほどの襲撃とは比較にならない、万に届きそうな小さな骸骨兵
たちが蠢いていたから。

もはや本体であるニルフィを止めない限り、この災害は終わらない
だろう。

—————

「さて、さて。どうするべきか」

「逃げようぜ、な？ 逃げたほうが身のためだろ？ さつきチルツチ
のヤツだつて言ってたじゃねえか、ここから離れろつてよ」

通路の中央で仁王立ちする蛇男に、しきりに犬頭の破面アランカルが撤退を
提案する。

しかし蛇男は頭を横に振った。

「オレが考えてるのは、どうすればあの幼女を倒せるかだ」

「……いや、無理だろ。その煩惱が詰め込まれる頭で考えてみる。こいつらならともかく、^{エスパーダ}十刃もねえ数字持ちの俺らが、あんな、あんな化物なんかには敵うワケねエじゃんか」

「ああ、そういえば、それもそうだな」

蛇男がたしかにと頷く。

彼らの周囲にはニルフィを模したような骸骨兵たちが転がっていた。

ある者は顔面を潰され、ある者は痙攣している。

その数は十。

うまく立ち回ればここまでできる二人も、本体であるニルフィに敵うとは思っていない。

犬頭はホツとした様子で、もう一度逃げるように提案した。

「なら、いいだろう？ 逃げようぜ、な？」

「ああ、そうだな。お前は逃げていいぞ」

「そうと決まれば……ってオイ。なんでだよ。てめえは逃げねえのかよ」

本格的に頭がイカレたのか？

犬頭はすぐにそう思った。

たとえ真面目な表情をしていようと、平然と阿呆なことをするのがこの腐れ縁なのだ。

「なんといっても、オレの座右の銘は『退かぬ媚びぬ省みぬ』だからな。あつ、あの嬢ちゃんが貸してくれた漫画から取ったんだがな、これがもう『お前はもう死んでいる』とどっちにするか迷って……」

「……なあ、オイ」

「……………そうだなア、オレだって逃げてえよ」

犬頭の切実な声に、今度こそ蛇男が折れた。

「グリーゼも死んじまつたし、その前にヤクシヤナのお嬢だ。どっちも、あの嬢ちゃんのために、やられちゃった」

「だろ？ 俺らが残ったところで……」

「楽しそうだったよな、あの嬢ちゃん」

「あア？」

「虚時代で仲間だったときも、アランカル破面としても、ついこの間までよ。ずっと、こうなるまでは笑ってたのによ」

犬頭だってニルフィの暴走に会ったのが一度だけではない。

ずっと昔、ホロウ虚のときに目撃していた。

いや、ニルフィが覚えていないだけで、かなり仲が良かった部類に入る。犬頭も、蛇男も。

「だからよ、理屈抜きに思うんだ。泣かせたくねえって」

「……馬鹿だぜ。てめえも、あいつらも」

「助けたいって言えば馬鹿になるなら、オレは喜んで馬鹿になってやるよ」

斬魄刀の柄に手を掛けた蛇男が前を見据える。

廊下の光源がふつふつと途切れていき、偶然なのか、ちょうど二人の目の前まで薄暗い空間が迫った。

ズルリ、ズルリ。

なにかが這うような音が耳に届く。

「できることはもうやった。あとはオレらの自由だ」

ロカの認識同期が送られる前、ラス・ノーチエス藍染が虚夜宮を去ってから、彼らは

二人でニルフィに関しての警告を広げていた。

テスラの動きが早かったのも、そのためだ。

ラス・ノーチエス虚夜宮の残存戦力は少ない。

ニルフィを止める可能性を掴み取るまで集めるためには時間がなかった。

だから一秒でも長く、足止めせねばならないのだ。

一抹の後悔はある。

暗闇の奥からやってきたニルフィが引きずる赤いそれが、あの好青年の姿だと気づいたから。

「もうさ、逃げたくねえんだよ。仲間が死んで、悲しんで、そんな光景に背を向けてよ」

しかし、そう。自由なのだ。

自我の強い破面たちは、アランカル自分の手で道を掴む。

たとえそれが破滅への片道切符だとしても、後悔はないのだ。

蛇男が口の端を裂くようにして笑う。

「退くなら退け！ それくらい的时间なら稼いでやる。そのためなら、少しはカツコイイとこ、見せてやるぜ？」

ひどく喉が渴いたように犬頭は口を開閉させる。

そして乱暴に頭を掻き、悪態を吐きながら、蛇男の隣に立つのはすぐあとのことだ。

「ああ、クソが！ クソ！ てめえは救いようがねエ、その他大勢と同じでとんだお人好し野郎だよ！ チクショウが！ けどよ、俺がホントにムカついてんのはなアー！ そんなお前を助けてやる、俺もお人好しだってことだよ!!」

ニルファイとの距離は近い。

彼女が投げ捨てたテスラの生死は不明だが、その有様を見て、笑えるほどに足がすくむ。

蛇男が肩をすくめて提案した。

「とにかくお前が突っ込め！ いつもオレたちが先輩だぜ、後輩にデカイ面させんじゃねえ！」

「まず俺かよ!？」

「当たり前だ。お前は下僕、前座、序の口、イーとか叫ぶ戦闘員だ。安心しろ、もしお前がやられてもオレが出て、なあにこの犬畜生などは我々のなかでもっとも下の者、とか言ってる」

冗談だ。

わかりやすく、状況が状況なため笑えないそれも、一周回って爆笑ものだ。

二人は笑い、ちょうど同じタイミングで顔を引き締める。

ニルファイが明と暗の境界を踏み越えたのである。

それぞれの刀剣解放をし、本能的に下がりそうになる足を前に動かすと、己を鼓舞するように吼えた。

自他が認める、語るほどもない、結果の見え透いた戦いがまた幕を開けた。

少女救出戦線

ニルファイが目を開けると、そこはなにもない空間だった。どこまでも白く、終わりの見えない道だけが続いている。

そしてなにもないというのも語弊があるのだろう。空間はゆつくりとボロボロに崩れていき、本当になにもない深淵のような黒い外側が覗くようになっていた。

なにもないはずの空間が失われてきていたのだ。

「……」

なぜここにいるかもわからない。

記憶はなぜか虫食い状態で、頭に浮かぶどの場面にもだれかが一緒にいたのに、その顔はモヤがかかったように黒く塗りつぶされていた。

思い出せるとすれば、

「……血？」

この赤く染まった両手くらいのものだ。これが関わるシーンは鮮明に思い出せる。

そしてなぜか血まみれの手からは自分のものではない血が溢れ出し、ボタボタと路上に落ちて赤い池を生んだ。血は止まらない。むしろ血が出れば出るほど自我がハッキリとしてくる。

どうしてか、泣きたくなった。

助けを求める声を上げようとしても、だれを呼ぼうとしているのかでんで頭に名前が浮かんでこない。

ニルファイはついに諦め、道の先へと顔を向けた。

背後の道は崩れるのが早くて進むことはできない。いずれはニルファイの立っている場所も崩れ、どことも知れぬ場所に墮ちるだろうことが察せた。

なら、進むしかない。

どこまで続いているのかわからないが、あの白い壁のように自分も落ちてはいけない気がした。

少女は一步、前に踏み出した。

終わりのない旅が――始まる。

――

何ヶ月前の出来事だったか。

ドルドーニ、ガンテンバイン、チルツチの三人は3ヶタの巢トレス・シフラスの床に疲労困憊になりながら伏し、唯一ピンピンとしているニルファイだけがしゃがみながら大人たちを指先で突っついていた。

「ねえ、もう終わりなの？」

「……ぐ、うつ。まだ、まだ……！……体力が回復しない」

起き上がりかけたドルドーニが再び床に突っ伏した。

もう限界の限界まで霊圧を絞りまくり、その最後の攻撃さえいなされたのだ。息を吸うのも億劫なほどで、なぜあれほど動きまくっていたニルファイが汗一つかいてないのか不思議である。

「……おい、ニルファイ。なんで俺たちよりも響ソニード転使ってるのに平気なんだ」

「ガンテンバインさんたちより軽いからじゃないかな」

「お、覚えてなさいよ。それ女に重いって言ってるのと同じ、なんだから……！」

残りの二人もなんとか口を動かせるくらいだ。

いつもならば他にもメンバーがいるのだが都合がつかなかったりサボタージュされたりと、今日はこの三人しか集まらずにニルファイとの模擬戦をしたのである。

結果はご覧のとおり。

いつもより人数が多くてできないことは、やはり数が少なくてもできるはずもない。

「チルツチさんは前に出すぎだったね。それを気にしてるせいでガンテンバインさんの機動力が落ちてたし、私が接近してくると、焦ってすぐに近距離攻撃と遠距離攻撃を変えちゃうからわかりやすかった。ガンテンバインさんももつと自分を前に出していいんだよ？」

『……うーん』

毎度のニルフィの総評に二人は力なく返事をした。

「それでオジさんだけど」

「う、うむ」

「いつもより全体的によかったと思うよ。二人の攻撃の合間をちゃんと見極めてたし、隙を縫ったときの一撃は当たりそうになったから。私じゃなかったら決まってたね」

「そうか！ それはなによりー」

「でもね、それで調子に乗っちゃったのかな。どうして間合いに入つた私のことを掴もうと手を伸ばしたんだろ。あそこは足技を使えばよかつたし、狙うならせめて胸じゃなくて頭を狙ってほしかったな」
仲間の二人が汚らわしいものを見るような目になり、慌ててドルドーニが弁解する。

「ち、違うのだよ！ 蹴りをお嬢さんニーニヤに当てることに躊躇してしまい、そして顔を傷つけるのにも躊躇ってしまった結果なのだ！ 本当だぞ!? なんだその目は！」

「日頃のおこないの結果でしょ」

にべもなくチルツチが切り落とした。

ニルフィは苦笑しながらうなづく。

「それは嬉しいけど、私もちゃんと避けられるからさ、心配しないでよ」

「ううむ、すまない。吾輩の独りよがりだったか」

「でもいいんだ。そこがオジさんらしいしね。それに本当の戦いだつたら躊躇しないでしょ？」

「……ああ、それは、うむ」

ドルドーニはこれでも切り替えはできるタイプだ。

考えたくもないが、もしそのような事態になつても、年長として他の二人よりも躊躇することはなくなるだろうと自覚している。

「じゃあ、今日はこれで終わりにしようか。明後日あたりにでもまた来るね」

立ち上がるニルフィの姿を見て、ガンテンバインが悔しげに呟いた。

「……まるで勝てやしなかったぜ。神でさえもう少し公平なはずだ。自分が強いと思っただけではないが、それでも、無力なのは嫌なものだなあ」

「ガンテンバインさん」

「いや、いや、いや。僻^{ひが}みじゃねえさ。むしろ清々しい。それもこれも、お前さんの人柄のおかげだろうよ。最近じゃマンネリしていた修練にも身が入るってもんだ」

気怠げに体を起こしたガンテンバインが軽く笑った。

「ーっだけだよ、もう俺たちから学べるもんはなくなってるだろ。なあ、ニルファイ」

天井を見上げていたドルドーニも、ふてくされるように寝転がっていたチルツチも。あえて口には出さなかっただけで同じ気持ちであつた。

「それは……」

「すべてじゃねえが、いまの俺たちは出し切った状態だ。なんでも記憶できるお前には目新しいことはなくなってるだろう」

技の類はおおよそニルファイに見せてしまつていた。すでにニルファイは攻略法を導き出し、今回の模擬戦ではすべてを察したかのように避けることに専念していた。最初の頃は隙をつくるために攻撃を交えていたというのだ。

そしてすでにニルファイはドルドーニたちの技も扱える。

覚えるべきところは覚え、そして、模擬戦の経験もドルドーニたちが相手では微々たるものだろう。

ここで3ヶ^{トレス・シフラス}タの巣を去れば彼らを傷つけるのではないだろうか。

そんな懸念を抱いているのにも、大人である彼らは気づいていた。

「あー、もう！ あたしたちの心配なんかいらないわよ。子供に心配されるほうがよっぽど惨めだわ」

「……チルツチさん」

「あんたがいなくなつてこっちはこっちで頑張るから。見てなさいよ、今度会ったときは一矢報いてやるから」

チルツチが拗ねたように言った。ニルファイに挑発されてこの模擬

戦に参加するようになった彼女だが、なんだかんだで二人の仲は悪くなかった。

ドルドーニも身を起こして少女に向き直る。

「まあ、心配せずともよい。これが一生の別れになるわけでもないのだからな。他のメンバーにはちやんと言伝しておこう」

「そっか。ありがとね、オジさん」

「礼ならば吾輩を抱きしめてくれるだけでも……あ、いや、うむ、なんでもない。最近は何れかよく葬討部隊エクスティアスが吾輩に睨みを効かせておるし手をつないだことがあると自慢したらその隊長が『夜道だけに気をつければいいと思わないことだ』とか言ってくるし捕まりたくない」後半のつぶやきはほとんど聞こえなかったが、ニルファイは力が抜けたように微笑んだ。

やはり気を使わせてしまっていたのだろう。この少女は優しい。優しすぎるくらいに、自分を犠牲にしてしまう。

「あのさ」

出口へと歩いていたニルファイが振り返る。

「ー私はみんなのこと、大好きだよ」

「知ってる」

三人のだれかが答えたかもしれないし、もしかしたら全員だったかもしれない。

ニルファイが去ったあと、修繕が必要なほど崩れたホールに転がるプリバロン・エスパーダ
十刃 落ち 三人は、無言の時間をしばし過ごした。

「……自らの弱さをこれほど悔いたことはないな」

ドルドーニの言葉は虚しく反響したようであり、けして二人に否定されたわけではない。

誰からともなく立ち上がり、軽く挨拶を交わしたあとは、落ちた者たちの住処へとどこともなく去っていく。修練に身を費やすか、疲れた身体を癒すか、それもまた各人の自由だった。

最後まで残っていたドルドーニは斬魄刀の柄を撫でた。

「心から楽しいと思える、時間だったな」

ニルファイの偽りのない言葉。

それだけがやけに耳に残った。

「探したぜ、オッサン。なにしてんだよ」

「だからオッサンではないと……まあお兄さんという歳ではないこともたしかだが」

砂漠で仁王立ちをしていたドルドーニが肩を落とし、隣に現れたグリムジョーを恨めしげに睨む。

しかしこうしてグリムジョーが十刃落ちの男を見つけられたのも、挑発するようにドルドーニが霊圧を発散していたからだ。

ニルフィを釣るためなのだろう。グリムジョーがここまで来る道中、骸骨兵どもに対する防衛線を張っていた十刃落ちや有力な数字持ちの姿を見てきた。彼らは外野を片付け次第集まってくるはずらしい。

ここは最後の砦だ。

あとはこの場で決着を付けるだけで済む。

「あー、しかしすまないな。吾輩たちでは力が足らん。それに技や動きはすべて見切られる。青年、あるいは第4十刃くらいしか要がないのだ」

うむうむ、と納得するようになぞくドルドーニ。

その仕草はすべて自然体で気負ったところは見られない。

だからグリムジョーは言った。

「……オッサン、もう一度言うぞ。ここぞなにしてんだ」

ドルドーニの体が震えた。理性と葛藤がせめぎあい、弱さを見せまいと心の奥に押し込むように。

そして深く息を吸い、なにかの感情をにじませながら言い切った。「彼女を止める。それだけでは、いけないのかね」

暴走している哀れな少女のため。

実にドルドーニらしい理由で、それでありながら可能という言葉が見えぬほどの難しい仕事であった。

「死ぬぞ?」

十刃^{エスパーダ}が二人すでに殺されている。

多少強くなったとはいえないまだにそのどちらにも敵わないドルドーニが出たとしても、そう結果が変わると思えない。心の壊れた少女が手加減してくれるなど、ドルドーニ自身も思ってるわけではないはずだ。

「……それでも。それでもだ」

乾いた風が吹いた。

言葉に詰まったのは喉の水分が消えたからだ、そういう理由などではないのだろう。

「戦えるのか?」

「ーわからない。いや、わかっているが、わかりたくないというべきか」

「……………」

「それでも、やるのだ」

「できるのかよ?」

そこでドルドーニがグリムジョーの顔を初めて見た。

「違う。ーやるのだ。青年^{ホーベン}は運がいい。まだ若いというのに知ることができる。この世はかなり恐ろしい出来で、逃げようとしようが微妙な希望がついて回って地獄に誘おうとしてるのだと」

「…………? なんだそりゃ」

「悪い女と同じだ。駄目だと思いつつ、いけるかと思ってしまうのさ、この世は」

らしくもない笑みだ。十刃^{エスパーダ}である青年はそう思っただろうから。

そして今日は、そのらしくもない笑みを浮かべる奴らが多い。

「あいつの止め方はわかってんのかよ」

「さて、な。殺さずに戦闘不能にさせることくらいか」

『無貌^{イルシオン}幻魔』の解析が終われば口力から認識同期で情報が入るはずだが、いまだに音沙汰はない。ドルドーニはそう締めくくり、これ以上の有効な手立てがないことを明かした。

「お嬢^{ニーニャ}さんは兵隊の向かっていない霊圧の持ち主を狙っているらしく

てな。こうしてればいずれ、いや、もうすぐにでも現れるはずだ」

エサという言葉の意味は比喻でもなかった。

そしてエサは獲物の口に入り、最終的には食いちぎられる。やはりそこまでドルドーニが理解していないはずもないのだが、彼はそんなことをおくびにも出さなかった。

「青年はまだ、お嬢さんの戦いを見たことがないだろう。そして青年自身の戦い方もまた、お嬢さんは見たことがないはずだ」

ドルドーニの確認にグリムジョーがうなづく。

そういえばあの少女とは一緒にいる期間が長かったが、ついぞそんな機会に恵まれることはなかった。まあ、語りはしないが勝てるビジョンも浮かんだことはなかったが。

「ならばいい。生憎にも吾輩のスタイルはお嬢さんに把握されているのでな。決定打などは必ず避けられてしまう。その点、青年ならばこの虚夜宮でも数少ない、お嬢さんを止めることができる一人になるだろう」

まるで美談にでも仕立て上げるかのようだ。

ドルドーニに苛立ちを隠さずにグリムジョーが吐き捨てる。

「だったらあと俺に任せりゃいいだろ。こんなもん一人で十分だ」

「彼女は強いぞ、強すぎるくらいに強い」

「俺も強いに決まってるだろ。むしろてめえが邪魔なんだよ」

「ほう？ では訊くが、そこまでしてなぜ青年は彼女を助けようとする？」

助ける。まあ、そうなのだろう。危険を承知の上でグリムジョーはここにいるし、ただ戦うためにいるのではないのだから、案外的を射た質問だ。

しかしグリムジョーは舌打ちをして、言い訳する子供のようになつぽを向いた。

「あいつにはまだ借りがあるんだよ。それ以上でもそれ以下でもねえ」

十月の末頃か。いつぞやと同じセリフだった。

ここにアネットでもいれば爆笑でもしてるだろうし、現にドルドー

ニも笑っていた。

「フツ、実に青年らしい答えだ」

「ほっとけ」

「よいのだ、そう恥ずかしくならずとも。すべて変わった。だれもがあの少女と出会い、そのほとんどが変わったのだ」

嗚呼、と皮肉げにドルドーニがこぼす。

ともすれば泣き出しそうな声音だった。

「かくいう吾輩も善人ぶろうとしていながら、これまで他人のために戦ったことなどない。それが誰かを救うため。それも、大切な者のために力を使うなど……いままで、そんなこと、したこともなかった」
最後あたりは言葉も詰まり、震えてしまっていた。

ようやく誰かのために戦える。それだけ嬉しく思い、自分の偽善者ぶりに悲哀が湧いてくる。

しかし偽善で結構だとドルドーニは割り切った。この世の中、正義を振りかざしていながら救えないことがなんと多いことか。あの少女を助けられるなら、偽善だろうが使ってみせる。

珍しいものを見たようにグリムジョーが肩をすくめた。

「かなり入れ込んでんだな、あいつに」

「さて、な。言わせるな恥ずかしい」

ニルファイは自分たちを見てくれた。強さでもない、破面アランカルという個人を。たとえそれがどんな理由であったとしても誰もが嬉しかったから、こうして彼女を救うために動いている。

虚夜宮ラス・ノーチエスでは強さだけがすべてだ。

裏を返せばそれ以外のなにかが必要になることもなく、個を確立するために大虚メノスから進化したはずが、強者の人格も心も見られることはない。

それがどれだけ虚しいことか。

しかしニルファイだけは違った。

あの幼い少女だけは他人の本質に触れ、だれも鑑かんみることのなかった心に接することができた。

アールニーロしかり、アネットしかり、自分の心の領域テリトリーを閉ざして

いたはずの者が受け入れるほど、それはなによりも嬉しいことだった。少女はとても輝いて見えたことだろう。その光を、自分の身を犠牲にしても守りたいと思うほどに。

優れた容姿。好ましい性格。それらでさえ、ドルドーニが助ける理由の一端でしかない。

空気を変えるためにか、先輩とも言える紳士がおどけた調子で青年に尋ねる。

「ところで青年はお嬢さんニーニヤのことをどう思っているのかね。よく一緒にいて、貸し借りだけの関係ではないだろう?」

「……どうもこうもねえよ」

「吾輩は好きか嫌いかで聞いているのだ! ふぎけるなよ貴様!!」

「はア!? テメツ、俺にキレる権利ねえだろ!？」

盛大に舌打ちするグリムジョーの表情から固さが消えた。

知らないうちに強張っていた心をほぐされたことに気づき、やはりこの紳士は苦手だとグリムジョーは内心で毒づいた。

「ーあいつとの時間は悪いもんじゃなかった」

ドルドーニは驚いたように青年の横顔を確かめ、最後には苦笑する。

「なんだよ、文句あんのか」

「あるはずもないさ」

もう少しグリムジョーと会話もしたい様子だったが、探査回路ベスキスの反応からそうもいかないようだ。

「あまり、人数は集まらなかったな」

骸骨兵の掃討など、土台無理な話だった。あれらを駆逐するにはそれこそ十刃エスパーダでなければ不可能で、この虚夜宮ラス・ノーチエスに残っているのはたったの二名なのだから。

「まあ贅沢は言うまい。吾輩がお嬢さんニーニヤの足を止めをし、必ず隙をつくる。ーーなんとしてでもだ。そして青年ホーベンが決める」

「相手ニルフィだろ。オッサンが頑張ってどれくらい足止めできんだよ」

「そうだな……」

文字通りの全力を尽くすとすれば、

「まあ、多く見積もって六秒だな」

「嘘つくんじゃないやねえよ。右足、脛すねが折れてんだろ？」

「では五秒」

「あばら数本ヒビ入ってるのはどうだ？」

「……では、四秒だ」

「ニルフィの従属官フレーションにしてもらうんじゃないやねえのか」

「そこは祝いたまえ」

まあ、と数歩前に出たドルドーニが続ける。

「正直、一三秒。三秒だ。三秒ならば、お嬢ニヤさんを足止めして、隙をつくることができるのではないかね」

腰に下げた斬魄刀の柄に手を添える。

「凄いだらう？ まさか吾輩などが、三秒であの少女を救う道をつくれるのだから」

予定通りというべきか、二人の前に血まみれのニルフィが響ソニド転で姿を現した。

グリムジョーもドルドーニに止めろと言うことはできなかった。

ならば、もう。

「征ゆくぞ、助けるために」

言った瞬間だ。ドルドーニの左右に、ふたりが並んだ。

アフロヘアーとゴスロリファッションの、特徴的な男女。どちらもくたびれ傷ついた死覇装姿だ。

「なぜ……」

「俺はー、二秒弱がー、限界だー」

「ならあたしは四秒ってトコ？ これでなんとか九秒弱ね。すごくない!? 修練しててこんなに持ったときないわよ」

ドルドーニはあえてこのふたりを呼んでなかった。

自分よりも霊圧を消費してるだろうし、とりわけニルフィとも仲が良かったメンバーだ。殺されてもいい。彼らには、そう思っただけじゃなかった。

しかしそれこそ、彼らにとってはいい迷惑である。

「……頼むぜ、グリムジヨー・ジャガー・ジャック。こっちは子供を保護者に届けたあとなんだ。……疲労困憊でロクに動けやしないぞ」

「不本意だけど手伝うわよ。あんたじゃなくて、あのチビのためにね」
「————」

グリムジヨーは珍しく呆気にとられたような表情をして彼らを見やる。

自分より弱いくせに、自分よりも真っ直ぐに前を見ているではないか。

ここに来るまであれほど内心で燻っていた苛立ちは不思議と消えていた。それもそうだ。うじうじ悩むより、こうして暴れてすべてを解決するために動くほうが性にあっている。

「——ハッ」

やっと、自分らしく笑えた気がした。

「仕方ねえから手伝わせてやる。足引っ張んじゃねえぞ」

「そちらこそへマをするなよ青年」
ホーベン

「……あー、俺たちやこう、やっぱ暴力でしか解決できねえのか」

「殴って止める。それしか方法がないならおあつらえ向きでしょ」

チルツチの言葉に皆が笑った。

そして全員は、ふいに笑いを止め、もはや姿も明確になった奇獣を背負う少女に向き直る。

「——『暴風男爵』」
ヒラルダ

「——『車輪鉄燕』」
ゴロンドリーナ

「——『龍拳』」
ドラグラ

かつて十刃であった三人は虚としての本来とも呼べる姿へ変わる。

グリムジヨーもまた少女の空虚な眼窩に、獰猛に笑いながら真正面

から見返した。

「——まだ寝ぼけてるつもりなら叩き起してやるぜ、ニルファイ！」

叫び、指先に霊圧を溜めて刀の刃を引っ掻く。

「——軋れ『豹王』」
パンテラ

それが開戦の合図だった。

奇しくも九秒で、この戦いの決着は付くこととなる。

――――

一秒。

時計の秒針がそれだけの時間を刻むより先に、傷ついた身体に鞭打ってガンテンバインが動く。響ソニード転エスパーダ。十刃に比べてけして速いわけではないが、巧い。ガンテンバインに反応した奇獣が致死レベルの拳を放つのを紙一重で回避する軌道を描き、ニルフィに肉薄。両手に込められた龍の霊圧をそのままに連打。かつてないほどのキレだ。冴えすぎて痛いほどの視界のなかで、ガンテンバインは自分の攻撃がニルフィに到達するのが見えた。

響舞カリマ

しかし届かない。到達したのに、届いていない。眉間、人中、心臓、鳩尾、肝臓、臍臓、その他いくつかの急所。まるで幻覚を見せられたかのように逆にガンテンバインは二十の打撃を返され、喉から滝のような血が溢れて両眼がグルンと裏返る。

二秒。

途切れかけた意識を拳士が無理やりつなぎ止めたのはその時だ。

「ぐっ、オオオオオオオオオオッ!!」

「――――」

興味を失ったかのように目を逸らしたニルフィが気づく。眼前には龍のアギト。それがなにがなんでも喰らいつかんとばかりに大口を開けていた。

『大紅蓮氷輪丸』だいくれんひょうりんまる 竜霰架りゅうせんか

竜牙が空を切った。ニルフィの姿はガンテンバインの背後に。手刀がそのたくましい背中を浅く食い破り、刹那、そこを中心としてガンテンバインが十字架型の氷塊に閉じ込められた。

しかしわずかでも動きを止めたニルフィに複数の羽刃が襲いかかったのは、その時だった。

三秒。

わかっただけでいかなかったわけではない。これは殺し合いだ。何度もやったことがある。しかし想像できるはずもなかった。まさか自分のような存在を大好きだと真っ直ぐに言ってくれた相手が殺しかかってくるなど。

だが、覚悟があるのとないのとは違う。

眼帯の優男がつくつてくれたこのチャンスを、チルツチは逃すつもりはなかった。

チルツチは見ていた。倒されるガンテンバインではなく、ずっと、ニルフィの姿を。それでも見えてしまった。ガンテンバインの目が、覚悟が、自分に託されたことに。一瞬一瞬のシーンが刻まれながら視界に映り、ガンテンバインが身を挺してつくった隙に合わせて翼を振るう。

アラ・コルタドーラ デイスベルシオン
断 翼 “散”

これだけでニルフィに効くとは夢にも思っていない。だから――捨てる。刀剣解放の性質上、羽を排除すればもう二度と扱うことはできない。しかしそれがどうした。これがニルフィを助けることに繋がるならば、いくらでも身を削ろうではないか。

アラ・コルタドーラ グラディエートル
断 人 “剣士”

翼を代償としたことによって得た、尾の部分から生み出す霊子の刃。

チルツチの覚悟を体現した剣が振るわれた。

四秒。

刃羽をしのいだニルフィがわずかに動きを止める。それを意識の端で察したチルツチはまず第一の賭けに勝ったことを理解する。二

ルフィはその優れた記憶力のせいで、未知のものを観察してしまうクセがあった。チルツチがこれまで見せたことがない技。それを観察するために無意識に足を止めたのだ。

――激突。

五秒。

奇獣が腕を交差して受け止めている。無機質な金と赤の双眸がチルツチを見つめ返していた。

「ああああああアツ!!」

ただでさえ燃費の悪い^{レスレクシオン} 刃だというのに、その上、^{エスパーダ} 十刃最硬の鋼皮^{イエロ}を突き破るつもりで霊子の剣を強化しているのだ。わずか数秒の出来事だというのにチルツチは顔から滝のような汗を流し、すでに己の限界へと達している。

それでもチルツチの剣は止まらない。大気を攪拌させ、打ち砕き、蛇がのたくるようにニルフィをその場に止めようと剣筋を残す。

己を叱咤して、前へ前へと突き進んだ。

「――」

最初は剣を生んでいた尻尾だった。それから右翼、右前足、左翼と、破裂したかのように次々とふき飛ばされる。

^{トレバドール} 『^{ランサ・テンタクロ} 蔦嬢』 蝕 槍

奇獣の背中に八本もの触手が生えた円盤がいつのまにかできていた。先端に氷の槍をくつつけたような触手が伸び、いとも容易くチルツチのパーツをなぎ払う。

そしてそのうちの一本がチルツチの腹を突き破った。

六秒。

無駄なあがきだとしても、ほんのわずか。ほんのわずかでもいいから時間を稼ぐためにチルツチは腹に力を込めて触手を抜けさせまいとした。

自分はここで終わりだ。しかし無力感は不思議と湧かなかつた。
なぜなら次に繋がったと確信したからだ。

「……ドルドーニ!!」

「ー応!!」

チルツチの叫びに男が応えた。

七秒。

ドルドーニは自分が飛び出すと同時に、背後でより巨大な霊圧の波と圧力を感じた。自分たち十刃^{テニバロン・エスパーダ}落ち三人を簡単に凌駕する威圧感。それは、どう考えてもグリムジョーのものとしか思えない。ガンテンバインがやられ、チルツチが伏し、それを歯が砕けんばかりに睨むように見ていた彼の心情だった。

すでに賭けは成立している。

あとはドルドーニがニルファイの瞬足での回避を防ぐだけ。

そしてグリムジョーに繋げるのがドルドーニの役目であり義務だ。それを果たすためにドルドーニが爆発させた霊圧は暴風へと変化し、体重の軽いニルファイを空へ舞い上げた。

八秒。

ニルファイはわずかに迷った。ここで大規模破壊攻撃ー^{セロ・インフイニート}重光虚閃軍や黒^{セロ・オスキュラス}虚閃ー^{イェロ}を使えば間違いなくドルドーニを圧殺できる。だが喰らうために動いているニルファイにとって、相手を消し飛ばすようなことはできるだけ避けたかった。

そしてさらに後方にいる膨大な霊圧をまとったグリムジョー。これが無視できない。グリムジョーならばノイトラのを模した^{イェロ}鋼皮を食い破るはずだろうし、隙を突かれて一撃必殺の攻撃を受けた場合、あくまで防御力だけが向上しただけの貧弱なニルファイの体力では耐えられない可能性が高い。

そして『無貌幻魔^{イルシオン}』の無貌姫^{カール・ナレダ}の本来のチカラである能力完全模倣。

これが制約として最大二つまでしか同時に発現できないのだ。

現在は『大紅蓮氷輪丸』と『トレバドローラ蔦嬢』で杵を使つてしまつていた。変えるためにはわずかな隙が生まれ、さらにガンテンバインとチルツチ、ドルドーニの波状攻撃によつて変える暇がなく、この場では効率的な能力が選択できなかった。

それと同時に機動力も殺されており、この戦いではじめて危機感を抱く。

彼らはここまで計算していたのだろうか。

このためだけに命を犠牲にしたのだろうか。

「はあああああああああッ!!」

アベ・メジウス
双鳥脚

体勢の崩れたニルファイに嵐と化した嘴が無数に放たれた。予想より、鋭く、重い。防御にまわした奇獣の腕が傷ついた。この異常な威力の増加。おそらくニルファイと同じで命ともいえる魂魄を強引に燃やしている。そこまでしてこの男は自分をここに留めたいのかと、わずかな苛立ちがこれまで無表情だったニルファイの顔に浮かんだ。

もう取り返しのつかないところまで来ている。たとえ終わらせるところで、ニルファイの手は血に染まり、いるはずだった仲間が消えた世界しか残らない。

ならばもう、壊すしかないじゃないか。壊して、ゼロに戻して、それで終わればいいじゃないか。

瞬間

内部破壊の拳がドルドーニの心臓に突き刺さった。

九秒。

「グリムジョー!!」

ドルドーニが最後の叫びを上げた。

はじめて、青年の名を呼んだ。

その彼の両手はたしかにニルファイの突き出した腕を掴んでいる。

「—————」

ニルファイが目を見開いた。後方にいるかと思っていたグリムジョーがドルドーニの背後の影から現れたのだ。

『豹王』バンテラを発動させたグリムジョーの姿は右頬から仮面が消え、額に仮面が形成されている。顔つきも鋭い牙、猛獣の鬣を思わせる長髪、獣の様に尖った耳など、獣人の様に変化していた。

ここまで飛び上がるために使ったであろう脚も豹のそれを思わせる形状に変わり、関節部には刃を、鞭のようにしなやかな尻尾も含め、まさに戦うためだけの身体となっていた。

幻光閃セロ・エスベヒスモによる目潰し。――間に合わない。虚閃セロの使用。――間に合わない。触手による盾。――防御不能。氷による盾。――防御不能。響転ソニドによる回避。――不可能。

それだけグリムジョーの刀剣解放の俊敏性は高かった。

しかしニルファイもわかっていたのだ。茫然自失になっ
ていながら戦闘センスの冴えは変わらず、だからこそ最初から本命であろうグリムジョーを警戒していた。それが時には躊躇いとなり、少女の動きに精彩を欠かせた。意識を逸らしたことなどない。だがしかし、こうして彼らの分の悪いはずだった賭けに負け、そのツケが目の前にある。

この瞬間。この瞬間のためだけに、すでにグリムジョーは最大最高の技を繰り出していたのだから。

豹王デスガロンの爪

両の爪から創られた、空中に浮かんだ霊圧による十本の青い巨大な刃。

それが巨大な獣のアギトのようになり、夢から醒めぬ少女の左右から襲いかかった。

事ここに至ろうと、我々の辞書に諦めの文字はない

ウエコムンド
虚圏にもはや無事な場所など無いのではないのか。そう思わせるような事態になっているのは少女の姿をした骸骨兵が原因だろう。

それはこの第五の塔も例外ではなかった。

「き、来てる！　そこまで来てるってロリ！」

「わかってるってば！　ていうかメノリ、とつととソイツ捨てなさいよッ」

「そうだけどさあ……！」

織姫は情けない声を上げるメノリに担がれ、骸骨兵たちに占拠された塔を脱出している最中だった。ツインテールの破面アラシカルーロリは帰刃レスクシオンを発動しており、中距離からなぎ払う攻撃で、なんとか骸骨兵を近づけさせないようにするのに精一杯だ。それを織姫が一瞬しか持たない盾で援護し、メノリが虚閃セロで怯ませる。危うい均衡だったが、なんとか三人は入口付近まで降りてこられた。

しかし、なぜ破面アラシカルの少女二人と織姫が協力する流れになったのか、当事者の彼女たちにもわからない。

ロリたちが第五の塔にやって来たのは、藍染が織姫を用済みと宣言したことを機に、懲りることなく織姫に再び暴行しようと思ったためだ。

しかし織姫のいる階層に辿りついたはいいものの、どこからか現れる骸骨兵たち。

骸骨兵はルドボーンのそれよりも強かった。むしろ戦闘が得意ではないロリたちでは一体だけでも太刀打ちできないほどに。

ロリたちは骸骨兵に倒され、喰われかけていたときに織姫に助けられたのだ。

そして忌々しいことに、また傷を癒されたりもした。

もはや織姫をどうこうする以前に、借りを作りたくなかったのと獲物を骸骨兵に奪われたくなかった、そしてここから生きて逃げるためには織姫のチカラが必要だったという理由もあり、彼女を担いで不本意な逃避行をすることになる。

幸運だったのは骸骨兵たちの目的が喰らうためであつたことだろう。

いかにロリたちが数字持ちの端くれといえど、プリバロン・エスパーダ十刃落ち級の虚閃セロを連発されていたらすでに消し炭になっている。それをしないのはやはり、できるだけ喰える状態で殺したいためだ。

さらにはニルフィの普段は隠している嗜虐趣味までコピーされているのか、文字通りいたぶる程度の攻撃しかしてこないのが幸いしている。まあそれが彼女たちにとって幸せかどうかとしてだが。

「見えた、出口！」

「メノリ交代！」

前方を走っていたロリが振り返りながら立ち止まり、その脇を織姫を抱えたメノリが駆け抜けていく。

デイリテイリオ・ベネ
奇酸瀑布

ロリは霧状となった物質を溶かす毒を散布した。

あくまでこれは足止めのためだ。それを突き破ってくるであろう前に逃げようとするが、突如として足を止めた骸骨兵たちの挙動に違和感を覚える。

「……なによう？」

今更この程度の技で尻込みするような敵ではないと知っている。

だからこそ、すぐになにか別の要因があるのではないかと警戒してしまう。

『』

まるでエサに興味を失ったように、クルリと踵を返して去っていく骸骨兵たち。もしや本体ニルフィと同じで虚を突きたいやらしい攻撃を仕掛けてくるのか。そう思っ構えるものの、本当にロリたちを見逃したようだった。

「……あ」

ドツと疲れが襲いかかってきたことで、刀剣解放を解除したロリは荒い息で肩を上下させる。

もしこのまま障害物のない外に出れば。そしてそこで四方を囲まれていれば。……おそらく自分たちは成すすべなく喰われていたと、

心のどこかで理解していたためだ。

「——ロリ、大丈夫なの!?!」

「大丈夫じゃ……ない」

心配して一人で戻ってきたメモリにぞんざいに返す。

今日は厄日だ。

アネットに文字通り灰にされて、そして生き返ったかと思えば今度は喰い殺される直前だった。

それもこれもあの崩^{プリンセス}姫と幼女に関わったのがすべての原因である。

「それよりアンタ、あの女は?」

「出口のそばに置いといたけど……」

「もうあんなのいいから逃げるわよ! アレに関わったら今度こそまた殺されて……それでまた生き返らされて、また殺される気がするもん! それでまた生き返らされて……ああ! いやよ、そんなの!」

「……そう、だね」

ヒステリックに叫ぶロリにメモリも同意する。

自分たちが織姫の近くで死ねば、必ず彼女はロリたちを再生させることだろう。

死ぬというのはかなり精神にクるもので、一度ならともかく、一日に何度も生き返ることになると発狂する。そういつた予感が一度生き返った少女たちにはあったのだ。

いまだに恨みはあれど恐怖が打ち勝ち、やはりまともな命が惜しいと思わせた。

話がまとまりかけたとき、二人は揃ってとある霊圧を感じとる。

「グリムジョー? それにドルドーニのも……かなり近いけど。そうだメモリ! あいつらの近くにいれば死ぬ確率が少なくなるわよ!」

「ど、どうだろ。ドルドーニならともかく、グリムジョーだと出会い頭に虚閃^{セロ}で上半身吹き飛ばされたり、ロリは脚折られそうな気がするんだけど……」

「なにワケ分かんないこと言ってるの。藍染さまが帰ってくるまで、どんなこととしてでも生き残んなきゃ……」

「……うん」

自己主張の弱いメモリはとつとと前に行くロリを追いかけるしかない。

「……あれ？」

ようやく出口を潜ると、近くに置いていた織姫の姿がなかった。

「……………」

行き場のない不安から来る胸騒ぎがしたため、走りにくい砂上を織姫が必死に駆けている。

ほかの誰でもなく、偶然屋外にいて近くにいただけの彼女だからこそ、その戦いの一部始終を見て感じる事ができた。

「——待って！」

織姫の悲痛な色に染まった叫びは、たしかに届いた。

荒れたクレーターの中央。そこに悠然と立っている白い髪が何房も混じった髪になったいるニルフィのそばに、四人の破面アランカルが倒れふしていた。

そのうちの一人である見覚えのある青年、グリムジョーの肉体の損傷は特にひどく、まるで無防備なままに機関銃の掃射でも食らったかのようだった。

ニルフィはそんな彼の肩口に顔を近づけ、肉を食はもうとしている。

「……ッー」

織姫は虚夜宮ラス・ノーチエスに連れてこられた初日、ニルフィとグリムジョーの関係はおおよそながら察している。

あれほどグリムジョーの腕が治ったことに歓喜した少女が、いまだは彼を傷つけているのだ。

グリムジョーだけではない。ほかの三人の破面アランカルもまた、ニルフィとはなんらかの好ましい関係であったはずなのに。

奇獣が赤い両目をグルリと動かして織姫を見つけると、ニルフィもまた身体を織姫へと向ける。

上げかけた悲鳴を抑えた自分を褒めたかった。

ニルフィの瞳からは滂沱の涙が溢れている。それが口元に塗れている血を流し、首筋を伝って胸元を汚していた。それはまだいいくらいだ。グリムジョーの血を丁寧に舐め取ろうとすれば普通はこうなる。

しかしなぜ立てるのかと思うような、不釣り合いなほど大きな裂傷がニルフィの小さな体に刻まれており、それが臓腑まで見えそうな深さまで達している。痛々しいという言葉でさえ不足なほどに。

そこで自分の傷に気づいたかのようにニルフィが能力を行使する。

「……あ」

超速再生。
決死の覚悟、命の代償、そうして刻まれた傷が拍子抜けするほど跡形もなく消えてしまった。

「……あ」
彼らのことはなにも知らないはずなのに、織姫は胸が締め付けられたようにビキリと痛む。

「ニル……ちゃん」

「……あ」
織姫にさして興味を示すことなく、またニルフィはグリムジョーに顔を寄せる。

それを防いだのは半透明な逆三角形の盾だった。

さんてんけっしゅん
三天結盾

ニルフィが盾に弾かれて尻餅をつく。

そしてゆっくり、邪魔をした織姫に殺気混じりの視線が送られた。首が飛ぶビジョン。身体が破裂するビジョン。閃光で焼き殺されるビジョン。それらが幻覚となって織姫を襲うが、喉がカラカラになつて喘ぐような息しかできなくなつても、ニルフィから目をそらすことだけはしなかった。

「……駄目、だよ。駄目だよ、そんな……そんな、辛いこと、したら」
大切なものを捨てるということを理解しているからこそその懇願だ。

織姫は虚夜宮へ来るために、数多くのものを捨ててきている。友人も仲間も恋もなにもかも、だ。

その辛さを彼女はよくわかっていた。

それは身を引き裂かれるような痛みという表現さえ生易しい。

果たして、織姫の部屋を訪れて仲間が傷つかない世界を無邪気に夢見たニルフィにそれが耐えられるだろうか？

人形のような表情のまま涙を流している少女の痛ましい姿を見て見ぬ振りなど、織姫にはできるはずもない。

盾が邪魔とばかりに奇獣が腕を振り上げる。

ダメだ、あれ以上仲間思いの少女に冒瀆的な行為をさせてはいけない。ただそう思った。

「——やめて!!」

気付けば織姫は咄嗟にグリムジョーとニルフィの間に身体をすべり込ませ、両手を広げて青髪青年を守るように立ちふさがった。

落とされる拳。

再び発現した盾など木っ端のように砕け、織姫ごとグリムジョーは叩き潰されてしまう、それだけ力のある攻撃。

盾が割れた音を聴く瞬間、情けなくも織姫はギョツと目をつむってしまった。

即死にあるかどうかもわからぬ痛み^{さんてんけつしゆん}に備えて身体を硬直させると、一秒、二秒。

しかし金属じみた音のあとに想像していた衝撃が襲ってくることはなかった。

おそろおそろ目を開けると、白い腕で逆手に掴んだ斬魄刀の刃が見えた。まるで彼女を守るかのように三天結盾^{さんてんけつしゆん}に代わる盾となって奇獣の拳を受け止めている。

しかし互いのあいだから拮抗するような軋む音はなかった。

「……俺が止めてやるまでもなかったか。その寸止めが、おまえのこの女に対する借りを返すということなのか」

ガラス玉のような眼窩がニルフィを貫く。

「——そうだな、リーセグリンガー？」

その男を認識した瞬間、ニルフィはクレーターの外へと弧を描くように宙返りする。

そして奇獣が大口を開け、ウエコムンド虚圏の端まで響き渡るような咆哮を上げた。

「仲間を呼んだつもりなら無駄だ。最後の一体はさつき始末してきたばかりだ」

このような状況でさえ声音を変えず、色白の青年がクレーターを上がっていく。

倒れたものたちを一瞥し、わずかに動きを止める挙動をみると、それが幻覚だったかのように機械的に足を動かして彼らに背を向ける。代わりに懐から取り出した小袋を織姫に投げ渡した。

「……女、それを持ってろ。渡さなければうるさい奴がいるんだ」

クツキーの入った小袋を抱えた織姫が見守るなか、青年は砂坂を上りきり、威嚇する奇獣を背負ったニルファイと相対した。

きっかけはわからない。

ただ両者の姿が掻き消えると、幾重にも重なる衝突音の発生源がさまざまな速さで空を横した天蓋をそのまま突き破っていく。

月明かりだけが頼りの空の下、絡み合うように接近していた二人は同極の磁石のように距離を取り、軽やかな身のこなしで屋上に着地した。

青年の任務は虚夜宮ラス・ノーチエスの防衛だ。

すでに死神たちの交戦意欲は低く、あちらはほぼ無視しても構わない。そして目下の問題であったがん細胞のような骸骨兵たちを処分すれば、次の対応優先順位となるのは——ニルファイだ。

すでに虚夜宮ラス・ノーチエスにはいくつもの、少女を「止める」ために刻まれた傷跡が生々しく残っている。駆け回っていた青年は自然と目にすることも多くなり、そのたびになぜかグリムジョーなどの破面アランカルの顔が頭に浮かんだものだ。

遠くにあるヤミーの戦鬨痕を横目に、青年が口を開いた。

「本来ならばおまえが最初に戦うはずだったのは、ゾマリ・ルルーではなくあいつだ。その場合、あの男は気兼ねなくおまえを殺そうとしただろう。……だが初めて他人のために力を使った、あの馬鹿で間抜けで阿呆で、そしてどうしようもなく直情的にしか行動できなかつ

「たあいつは……どうだった？」

「……無駄な問いかけだったな。その能力でどれだけ記憶を残せているんだか」

「迷いを振り払うように首を振り、改めて青年が尋ねる。」

「止めるつもりはないんだな、リーセグリンガー？」

「答えは意志として。」

『豹王』

ニルフィと奇獣の姿がより獣じみたものに変貌したことで、そうか、と青年が目を瞑った。

「——鎖せ『黒翼大魔』」

黒い液体が舞い上がり、雨のように降り注ぐ。

天蓋内では禁じられている特定番号以上の帰刃。

それにより、天蓋をそのまま崩落させそうな霊圧の重さが虚夜宮を襲った。

「策でも数でもおまえを止めるのが不可能だったならば、あとはこうするしかないだろう」

第4十刃ウルキオラ・シフアー。

彼の背中に巨大な漆黒の翼が形成され、仮面の名残が四本の角のついた兜のようになり、服もロングコート状のものに変わる。

目元より大きくなった仮面紋のせいで、そこから覗く彼の黒目は深淵のようだった。

「——単純な実力でケリをつける、ただそれだけだ」

煌々と輝いている三日月を背後に控えさせ、ウルキオラがそう言った。

この時まで胸に渦巻くナニカを知るために、彼もまた少女を止めようと霊子の槍を握る。

現世、空座町。

正確に言うならば、その町の座標につくられたレプリカの空座町上空。

四方に突き刺さった「転界結柱」により住人たちは眠らされたまま尸魂界ソウル・ソサエティに送られており、浦原喜助や護廷十三隊のおかげで彼らに被害の出ない戦闘空間が作り出され、その上空に浮かぶ者たちを見るものはいない。

しかし移動させられたのは住民のみであり、空座町に跋扈する虚や地縛霊などはそのままだ。

町のあちこちで彼らが自壊や破裂するなどの怪現象が起こっている理由もまた、上空に浮かぶものたちが原因でもある。

それもそのはず、一同に会しているのは護廷十三隊の副隊長以上のクラス、あるいは破面アランカルでも指折りの十刃エスパーダを含めた藍染惣右介たちなのだから。

木っ端の靈魂など彼らの出している霊圧だけで押しつぶされるのだ。

「皆、下がっておれ」

最初に一手を投じたのは一番隊長、また護廷十三隊総長である山本元柳斎重國やまもとげんりゅうさいしげくに。

彼は現存する斬魄刀でも最強と称される刀を、普段隠している鞘代わりの杖から抜き出した。

すると元柳斎の背後に塔のごとき火柱が上がる。

「万象一切灰燼と為せ『流刃若火』」

炎を纏わせた刀身を一闪すると、龍のように流れた陽炎が再び炎へと戻り、藍染ら虚ウエコムンド 圏側の死神たちを壁となつて取り囲んだ。

城郭炎上じょうかくえんじょう

これにより、藍染はしばらく身動きの取れない状態になる。

「うおっ、あちっ」

すぐそばに生まれた炎の壁からスタークが慌てて身を引いた。

逆にいえば残った破面^{アランカル}たちの反応はそれくらいのもので、バラガンもハリベルも、トップが隔離されたというのに動揺はない。

——ああ、藍染は自分たちに任せるのか。

当初の予定がほんの少しだけ変わったくらいに認識であった。

「……さアて、どうしたモンかのオ。敵は山ほど、ボスはあるザマだ」
無然とするバラガンのハリベルが苦言を呈した。

「藍染様に口が過ぎるぞ、バラガン」

「お前は儂に口が過ぎるぞ、ハリベル。なんじゃ、前々から思ってたが、ニルフイがお前のところより儂のもとに来るのが気に入らんのか」

「貴様は菓子で釣っているだけだろう。しかし残念だろうな。その老体ではあの子と外で遊んでやることもままならないはずだ」

「失敬じゃな、儂は生涯現役だ。この前などあの小娘を肩車してやったわい」

バラガンが指を鳴らすと、配下たちが空中に即席の玉座を作った。

ドカッと座る主人の背後で、従属官^{フランオン}たちが口を真一文字に引き結んでいたのは、『あのあとちよつと腰痛めてませんか?』という命知らずなことを言いそうになったから……かもしれない。

「……ともかくだ。ボスが身動き取れん以上、儂が指令を出させてもらう。文句は言わせんぞ」

「いいんじゃないの——あ痛！ なにすんだよりリネツ——痛い！」

内野がやかましいのをバラガンは無視する。

スタークは頼りなく、ハリベルも戦っている方が性に合っている。

どちらにせよ、彼を除いた二人の十刃^{エスパーダ}に指揮など向いていないのだ。

「ふむ」

たしか視線の先にいる破面^{アランカル}の出方を伺っている死神たちとの会話において、足元の重霊地は偽物とのことだった。尸魂界^{ソウル・ソサエティ}で作成されたレプリカと入れ換えた。

藍染は尸魂界^{ソウル・ソサエティ}まで侵攻して重霊地を手に入れば良いと言っていたが、果たして、そんな面倒なことをする必要があるのだろうか。

こちらにも時間がないというのに。

ならば入れ替えたという話の理屈として、四方にある柱を壊した場合はもとに戻るということ。

腰を据えてからわずか数秒。

バラガンの決断は早かった。

「ポウ、クールホーン、アビラマ、フィンドル！ 東西南北、すべての柱を潰せ」

『ハッ、陛下の仰せのままに!!』

重要な拠点にだれも配備していないのは考えずらく、凡百の兵隊を無駄死にさせるより従属官フラシオンたちに対処させたほうがいい。

それにバラガンの配下たちとニルフィは関わりすぎた。

できるかぎり、仲間の死は少なくしたかった。

—————

「はいはいはいはア~~~~~い!! ちゆうも~~~~~」

リズミカルに手拍子してからポーズを決め、南の塔へとやってきたエキゾチックなオカマが視界ダメージ必須なバチコーンという擬音のするウインクを飛ばす。

「バラガン陛下の第一の従属官フラシオン、シャルロツテ・クールホーンちゃんが来ましたよ~~~~~」

「な、なんだコイツ……」

九番隊副隊長の檜佐木修兵ひさぎしゆうへいはドン引きしていた。

命懸けの戦いを予想していたのに、やってきたのはどう見てもイロモノ粋なオカマなのだ。

そんなある意味正しい檜佐木のリアクションにシャルロツテは憤慨する。

「なによちよつと貴方！ せめて美しいくらいの感想言いなさいよ！」

「その感想はべつの相手に言いてえな」

「アラやだつ、貴方よく見たら地味だけどイケメンじゃないつ。……でもダメね、なんかむつつり臭いわ。もしかしたら小さい女の子に性的な視線送ったりでも——」

「するわけねえだろー!」

なぜ敵とこんなことを語らねばならぬのか。

うんざりしながら檜佐木が斬魄刀の始解『風死』を顕現させる。

しかし小さな女の子という言葉に反応したわけではないが、日番谷先遣隊を壊滅させたという警戒令の出されていた、件の少女らしい姿も戦場になくにも気づいた。

「……あのニルフィネスって奴はどうした?」

シャルロットは一瞬だけ顔を暗くする。

しかしそれが幻だったかのように、いまにも歌いだしそうなほど陽気な表情をつくってみせた。

「ニルちゃんはあたしのマブダチよ。残念だけど、死んでなんかいないわよ!」

自分に言い聞かせるように、強く、強く、アランカル破面が拳を握った。

「あたしたちが今日ここで刀を抜くのも、あの子のためなのよ。あたしたちは変わったわ。いつまでも終わらぬ夜の世界から、まるで闇の天幕が失せて朝になるように! あの子はね、あたしたちをいつも照らしてくれる……そう、太陽なのよ! たとえなにがあらうと曇らせてはいけない、美しい輝きの!」

大振りな斬魄刀を片手にシャルロットがポーズングを決める。

「そしてあたしは月! あの子のおかげでもっともつと輝ける存在なの! ……そこをどきなさい。あなたごときにかかずらってる場合じゃないのよ!」

「いいだろう……なんて言うかと思ったか?」

「そう、罪深いわね。——月が直接お仕置きよ!!」

シャルロット・クールホーンVS檜佐木修兵、開戦。

西の柱。

そこに着地したチーノン・ポウの巨体に、十一番隊第五席である綾瀬川弓親は眉をひそめた。

「これはまた随分と……美しくない敵だね」

ポウの肉体は主立った従属官よりも巨体の持ち主であり、両腕は異様に長く大きく、虚ろな顔立ちが不気味さを増長させている。

当のポウといえさほど反応することなく、自らも思ったことを口にした。

「その割には貴様の顔も随分と醜いものだな」

「……この借りは返す心づもりだったんだけどね。どうにも、この決戦に来てないみたいで拍子抜けだよ」

弓親はいまだに腫れの引かぬ顔を包帯で隠していた。死覇装に隠れているが、カラダのほうも先日までは見れるものではなかった。

日番谷先遣隊にいた彼はニルフィによって一度スクラップにされており、あとの引かぬその怪我を承知の上で防衛陣に加わらせてもらったのだ。

すべてはここまで自分を醜くさせた少女を倒すために。

残念に思っている彼の頭上からため息。

なぜかポウがやれやれと首を振っていた。

「貴様のことは知っている。拍子抜けしたのはこちらのほうだ」

「どういう意味かな?」

「彼女に殴られたり蹴られたりされてからまずすること、それすなわち怒るでも悲しむでもない。——悦ばねばならぬのだ!!」

「……………は?」

呆ける弓親を置いて、ポウが腕を振り回しながら力説する。

「あの時すごカタ! 殴られル、痛いけど気持チイ! ワタシ、目覚めた、あの柔らかくてしなやかな手や御御足おみあしでしばかれるコト。すべて快感にナル! アレ、運命の日ダタ!!」

いつもは隠している虚圏ウエコムンドの辺境出身ゆえの方言がダダ漏れである。

しかしポウがここまで熱狂するのも理由があった。

かつてニルファイが初めて虚夜宮^{ラス・ノーチエス}にやってきた日、実は彼女が最初に攻撃した相手は他ならぬこのポウなのである。

特殊な性癖に目覚めさせられ、また最初にやられたという誇りを持ち、間違ったベクトルでニルファイのファンとなるのにそれほど時間は掛からなかった。

しかもなまじニルファイにサディストの適正があるのがいけない。模擬戦ではタフなポウの倒れぬギリギリのラインの打撃でしばきまわすなど、二人の相性は教育に悪すぎる方面でピッタリだったのである。

「……とりあえず、君はここで殺しとかなないといけない存在なのはわかったよ」

「ゴホン。バラガン様の従属官^{フランオン}である限り、私に真の敗北はない」

ポウはすべてを弓親に語ったつもりはない。

この秘すべき考えは従属官^{フランオン}——バラガンも含めた第2十刃^{セグンダ・エスパーダ}主従に共通するもので、言わずとも互いに理解していることだから。ニルファイは笑っているべきだ。

泣かせてしまうのはなによりも避けねばならぬ事柄だ。

退屈だと思わなくなったあの日常を、笑顔の絶えぬあの日々を。

一抹の寂しさを背負っていた主人が求めていた、あの時間を。

「……我々は、陛下に捧げねばならぬだ」

ポウのつぶやきは拳と刀の風きり音によってかき消された。

チーノン・ポウVS綾瀬川弓親、開戦。

—————

「うおおおおおおお!! 殴^やってやる蹴^やってやる!! 殺^やってやるぜえくくく……ってオイ! なんでオメーも一緒にやらねーんだよ! ノリ悪いヤツだな!」

「前ブリなしにそういうことされて乗つかれるワケねえだろ」

北の塔を守る十一番隊第三席、班目一角のもとへとやってきたのはアビラマ・レッダーだ。

アビラマは戦鬪前に自分の士気を鼓舞するため、相手を倒すという気持ちを含めて互いに絶叫しあうというのを仕来りとしている。

しかしそれに乗ったのは過去にも現在にも、ニルファイただ一人であるのが悲しい現状である。

「けどツイてるぜ、破面^{アランカル}。どうにも俺たちや似たもの同士らしい」

「似てる？ そりゃ冗談だろパチンコ玉。同じ方向のベクトルってだけで、進む先はまったく違うぜ」

アビラマは腕組みをしながら空中で一角を見下ろし、先ほどとは打って変わって静かな口調で名乗った。

「バラガン陛下の従属官^{フランゾン}、アビラマ・レッダーだ。名はなんだ死神」

「おう、十一番隊第三席、班目一角だ」

「ああ、ああ、知ってるぜ。てめえ、エドラド殺してニルファイにボコられたんだろ。それでその怪我ってワケか」

「心配しなくてもオレは問題なく戦えるぜ。オメエだけじゃねえ。ほかの破面^{アランカル}相手だろうとな」

一角もまた弓親と同じように全身に治療のあとがあった。

リベンジも兼ねることで強引に決戦に参加し、そしていまに至るというわけだ。

それを察せぬアビラマではない。

これまで辛酸を舐めさせられたのは彼も同じなのだから。

「そーいや、あのガキはどうした？ もしかして向こうで隊長が斬っちゃまったのか？」

「オイオイオイ、そりゃアイツに対する侮辱かよ。強エぞ、アイツは。たしかに泣き虫で弱虫で豆腐メンタルで寂しがり屋でチビでうつかりで方向音痴で能天気で楽天家で怖がりで腹ペコでサドで鬼畜で変態かもしれねえが……強エぞ、アイツは。俺の友達^{ダチ}は。俺たちで止められるかもわかんねえくらい、ずつとな」

だから死んでいるはずがない。

まだ終わったワケでもない。

噛み締めるようにして言い切つて、一拍。

「だがなあ、ホント……ここにニルファイいなくて良かったなあお前。あ

いつと会ってたらロクな死に方してねえぞ?」

ニルファイがいまだにどれだけ覚えているかわからない。

もしかしたら自分の顔さえ忘れているかもしれないと思うと、想像しただけで苦痛だった。

しかしあの執念じみた仲間を害した相手に対する復讐心など、たとえ記憶がなくなるとも消えることはないだろう。

「ロクな死に方だど? そりやおかしいな。オメエだったらロクでもなくない死に方させてくれるって聞こえたんだが」

「いや、間違つてねえよ。とつととお前を倒して終わらせる。俺が、俺たちが、ホントに戦うべき相手はお前じゃない」

「ああ? そりやどいう——」

言葉を待つことなく、アランカル破面の戦士が斬魄刀を引き抜いた。

「もう一度言うぜ、死神。悪いな。俺はとつととお前を殺させてもらう。楽しむ間もなく、だ」

「——ツ!」

唱える。

「頂いただきを削れ『空戦驚』」

すぐさま一角はそれまで肩に乗せていた始解の『鬼灯丸』ほおずきまるの切っ先をアビラマへと向けた。

アビラマが解号を口にすると、たちまちガルーダ鳥神を思わせる姿へと変身したのだ。

「おいおいおい、随分とまア、せっかちすぎるんじゃないのか?」

「そりやあ俺も戦いは好きだぜ。けどな、俺にとってこの世にもっと大切なことは三つある。一つはバラガン陛下に御身を捧げること! 一つは戦いの儀式をすること! そしてもう一つは——仲間のため、友達ダチのために剣を抜くことだよ!!」

アビラマが風を巻き上げながら上空へ飛翔した。

「せいぜい吠えろよ班目一角。せめて俺の勝利に色をつけるためになアツ!!」

「ハッ、笑わせんな! この戦い、存分に楽しませてもらうぜ!」

アビラマ・レッダーVS班目一角、開戦。

—————

東へと向かったフィンドールは塔を守る死神にまずはこう尋ねた。

「最初に聞いておきたい。君は何席だ？」

「吉良イツル。三番隊副隊長」

左目を髪で隠している吉良の言葉に、そうかとフィンドールが鷹揚にうなづく。

「たしか三番隊といえはこちらの市丸ギンが所属していた部隊か。その上で訊きたいのだが——」

金属音。吉良が振り抜いた刀を、フィンドールは予想していたとも言いたげにいと也容易く防いでみせる。

静かながら怒気を含んだ声音で吉良が言った。

「その名を、僕の前で軽々しく口にしないことだ。死ぬにしても傷浅いままのほうがいいだろう？」

「これは失礼。君だけに名乗らせていたことも怒らせた原因かな？」

ならば名乗っておくが、バラガン陛下のフラシオン従属官兼「会」の実行部隊隊長を任される、フィンドール・キャリアスだ」

「……その「会」というのは知らないけどね」

「崇高なる素晴らしい組織さ」

三度ほど斬り結ぶと相応の火花が散る。

この数秒のうちにフィンドールの顔色は変わることなく、吉良は困惑を目に混じらせた。

フィンドールが強引に距離を取らせ、警戒の色を強める。

「……従属官とはいえ、思ったよりも弱すぎるね。だいたい死神の五席くらいの実力しかないように思うけど」

「エサクタ正解。そう、これでも俺は頭脳労働専門でね。本来の戦い方はこういうのさ」

シルビード呼虚笛

両手に付いた刃をフィンドールが吹くと、空中に開いたガルガンダ黒腔から大型の虚たちが次々と現れた。

数が多いというのはそれだけで厄介でもある。

慎重ゆえに迂闊に攻められなくなった吉良を前に、再びフィンドールが質問した。

「名を口にははいけないのなら……まあ、仮にI氏と言おうか。長年一緒に仕事をし、信頼を置いていた相手。そのI氏と戦うことになった君の心境を聞かせて欲しい」

「……なぜそんなことを？ まさか虚ホロウの延長にいる君たちに、まともな仲間意識があるのか？」

「正解エサクタ！ 我々には通じる心がある。我々には交わす言葉がある。そこは死神となんら変わらないと思っっているよ」

その上で訊きたいんだ、とフィンドールが続けた。

「君はかつての仲間と刃を交えることになったこの時を、いつたいどう思っっているんだ？」

「どう、とは？」

「なんらかの感情の昂ぶりがあるのか、あるいは心の揺らぎさえないのか。なんでもいい。教えてくれ」

純粹な疑問なのだろう。

意外にも真摯なフィンドールにため息をつき、すでに答えを出している吉良は真っ直ぐに答えた。

「やらなければならぬ、だから、やるんだ。過去を悔やんだところで時間は戻らない。だったら現実を見て、解決のために努力するようにしているよ」

「なるほど、そうか……」

フィンドールは己のなかで反芻すると、子供がはしゃいだ時のように笑みを浮かべた。

「どうやら俺は正解を選べていたようだな。生きるとは困難な問題の連続だ！ 少しでも多く正解を選択したものが生き残る！ そして正しい道を選べていたのだと知った時こそ、嬉しいことなどないっ」

ホロウ 虚たちが咆哮する。フィンドールの激情に触れたかのように。

吉良はこれまでの小手調べとは違う本物の命のやり取りをする気

配を感じ、始解の『侘助』を出しながら空中に立つ破面を見上げる。

「悪いけど、君たちの事情なんて僕にはわからない。知るつもりもない。そう勇んだところで死が辛くなるだけだよ」

「さきほどまでの正解はどうした！ まさか、まさかだ！」

ありえないとばかりにフィンドールが哄笑した。

ノン・エス・エサクト

「不正解！ 俺は君になんか殺されやしないさ。やらなければならぬ、だからこそやる。いい言葉だ。ならばその時まで俺の命は陛下のもの！ 矢尽き刀折れようとも、君に敗北する理由などこの世にはない!!」

フィンドールは吹っ切れたように吉良に斬魄刀を突きつける。

彼のこれまでの迷いは消えていた。

思い起こせば答えはすでに近くにあったのだ。

覚悟として、意地として、愛情として。

たとえ牙を交えようとも、救いたい、ただそれだけのために命さえ賭けられる。

自分たちがやろうとしていることはソレなのだ。

まずはこの牙で邪魔者を排除せねばならない。

フィンドールは宙を駆け、斬魄刀を振るう。

フィンドール・キャリアスVS吉良イヅル、開戦。

開戦

「——必殺！・ビューティフル・シャルロット・クールホーン， s・ミラクル・スウィート・ウルトラ・ファンキー・ファンタステイック・ドラマティック・ロマンティック・サディステイック・エロティック・エキゾチック・アスレチック・ギロチン・アタックウ!!」
「ぐ、お……!?!」

高空から落下するシャルロット。躲しきれないと檜佐木は判断すると、風死を盾にすることで敵の回転斬りを受け止める。しかし重すぎる一撃は容易に檜佐木の足場たる霊圧をガラスのように粉碎し、眼下の森へと流星のごとく落とされた。

「——シヤア!!」

「あぶねえッ」

衝撃にうめくのも束の間、弧を描きながら迫る豪脚。それをいなしたと思えば、刀、拳、当身と、手を変え品を変えたシャルロットの猛攻が続いてゆく。辛くも距離をとった檜佐木がすぐさま風死を振るうおうと、のたくる蛇のような変則的な動きを見切ったシャルロットには当たらない。

「甘い、甘いわ！ ニルちゃんの理不尽な動きに比べればなんのその！ この新生シャルロット・クールホーンには当たらない!! フンッ」

最後にはとうとう、縦に回転する風死の側面を蹴ることでしりぞける始末だ。

檜佐木は次の一投をいつでも放てるように鎌を回転させながら、呆れ半分畏れ半分といった様子でシャルロットに言った。

「正直、色物かと思って舐めてたぜ。従属官フラシオンつてのは皆オマエみたいなやつなのか？」

「あら言ったじゃない。新生……ノイヴァ新星、つまりは生まれ変わったと。あなたみたいな地味面が相手だったら、昔のあたしは慢心でやられたかもしれないわね……まあ一パーセントの確立でしょうけど」

エキゾチックな紫の髪（地毛）をたなびかせながら自慢げに語る

シャルロット。

だが立ち振る舞いに隙はない。本人が言った通り、この戦いで慢心している様子がまったくなかった。

「……オマエら、余裕がないんだな」

アランカル
破面が眉を上げて反応する前に、檜佐木が鬼道を唱えるのが早かった。

「縛道の六十二」

ひやっぼらんかん
百歩欄干

いくつもの光の棒がシャルロットの肉体をビルに食い止める。シャルロットが己の筋力を言わせてビルの壁を破壊して拘束を脱すると、これだけかと挑発的な笑みをつくった。その眼前に、檜佐木が巻いていた腕輪を放ると、爆竹のようにはじけ飛ぶ。

「目くらましなんて小癩なッ」

不埒な輩を掴もうとシャルロットが腕を伸ばした。

「……ッ」

そして唸るように喉を鳴らしたのもシャルロットだった。引き戻した腕には、無数の裂傷が生まれている。

「この調子なら、新星つてのも前とはあんま変わんねえんじゃないのか」

「……フツ、口が減らないのね。だからモテなさそうな顔してるのも納得しちゃう」

「悪いな、オマエに惚れられたくない一心だよ」

軽口のたたき合いに、怒りに染まった顔も一瞬で、すぐにシャルロットが余裕のある笑みで負傷した腕を揺らした。

「いいわ、わかった。つまりこうね。醜き者にはあたしの美しさは理解することすら困難……。そういうことね。オーケイ、わかったわ。それなら許すわ」

太い指を檜佐木に突きつけて、

「美に対する感覚が鈍いことは罪ではないわ。むしろ——哀れみにさえ値する」

「なに?」

「つまり、こういうことなの。低劣な感性とともに生きることが苦痛でしかないわ。ならば、あなたのその生命くつうを終わらせることこそが、姿あるなかでなかでニルちゃんに並ぶ美しさの……」

「……最後のそれはどうなんだよ」

「いいから聞きなさいよドサンピン！ ……つ・ま・り、醜いものを処刑する、それがあたしの使命なの」

好き勝手言ってくれる。檜佐木の目はそう語っており、言葉として聞かずともシャルロットが答えた。

「言つたでしょう、あたしは月だと。月光つていうのは醜さを暴き立てるものなのよ」

「いままでもずっとそう言つて、相手を殺してきたのか」

「その新しい一人に、あなたがカウントされるつてワケだけど」

シャルロットは他のメンバーの進展を探索回路ペスキスで感じ取り、そろそろ決着をつけようと斬魄刀を掲げる。敬愛すべき陛下に、これから勝利を捧げるかのように。

「煌めけ『宮廷薔薇園ノ美女王』」



地に這いつくばるように倒れた虚ホロウを見たフィンドールが感嘆の息を吐いた。

「やはり斬つた対象の部位を重くする能力……か」

吉良イヅルの斬魄刀『侘助』。それはフィンドールが言つたように、斬つた対象の重さを倍にすることができ、凶悪な能力だ。一度斬れば二倍、もう一度斬れば四倍と、そうしているうちに相手は身動きできぬまま独特な形状の刃に首を刈られるのである。

だがしかし、あまりにも強力な能力ゆえか、刀身が伸びるわけでも飛ばせるギミックがあるわけではない。敵を斬りたければ本人の力量で振るわねばならないのがネックだった。

特に、このような状況では。

東の塔は遠目から見ると、全体が脈動しているように見えるだろ

う。しかしそれは間違いだと近づいてみればわかる。その表面で蠢いているのは硬い石質などではなく、無数の虚ホロウの群れなのだから。

たとえば一体、二体と吉良がまとめて屠っても、次の攻撃へ繋げさせまいと上空にいるフィンドールが虚閃セロを放つ。

「縛道の三十九」

円閘扇えんこうせん

繰り出した円形の盾により事なきを得たが、この場にいる相手はフィンドールのみではない。こうしている内にもフィンドールの呼びだした虚ホロウたちがかじるなり殴るなりして、どんどん塔が落とされていく。

「——よし、いいぞお前たち！ このまま塔を破壊しろ！ 報酬は俺の秘蔵コレクションだ！」

『オオーツ!!』

頭の痛くなる指示だが虚ホロウの士気は高い。このまま倒しても倒しても、恐れずに柱を破壊していくだろう。

「……大本を倒さないと駄目か」

一般隊士たちは拠点の防衛のため、この結界内にはいない。より正確に言うならば、この戦いには耐えられないとして一部の例外を除いて連れてきていないのだ。そのため柱を傷つけずに虚ホロウだけを仕留めるのはなかなかの骨だろう。

目立った動きはないものの、虚ホロウを次から次へと呼び出しているのはフィンドールだ。手下をけしかけて佯助の特性を知るや否や、己のチカラだけで解決しようとする愚は犯さず、すぐさま物量作戦に切り替えている。

言葉を介す虚ホロウはいずれも自分の力に過信しがちなため予想外だったが、この状況ならば吉良にとつて有効なのは間違いない。

塔を一瞥してから、フィンドールと同じ高さまで吉良が上がる。

「ほう、守るのは取りやめかな？」

「ここで君を倒したほうが早いことに気づいてね。下の虚ホロウはあとでゆつくりと始末していくさ」

フィンドールが笑みを深めた。

「対人戦ならば俺を倒せるように聞こえるが」

「君の言い方を真似るなら、それが一番の正解だろう」

そう言つて、吉良が侘助を構える。

チツチツチ。舌を打ちながら、まるで嫌味な教師のようにフィンドールが指を振つた。

「不正解。なにやら誤解しているようだな。たしかに正解への道のりが短くなるとはいえ……俺を倒すということが、果たしなく長い道のであることを理解してないようだな」

フィンドールが斬魄刀を指揮棒のように動かしながら叫んだ。

「水面に刻め『蟄刀流断』」

解放すると右半身が装甲で覆われ、両腕にはシオマネキを思わせる左右非対称のハサミが形成される。

「それが破面の帰刃か」

「正解。よくご存知だ」

フィンドールがハサミの先端から虚閃を連発する。吉良は高速移動で回避しながら、近づける機会をうかがつた。

「正解不正解とそればかりだな」

「生きることとは困難な問題の連続だ！ 少しでも多く、正解を選択した者だけが生き残れる。ならば誰もが少しでも多くの正解を手にしたいと思うはずだ。違うか!？」

「だから君がその正解を与えてやってるのか？ —— 大層なご弁舌だな」

「むッ!？」

開いていた間合いを吉良が瞬歩で詰める。いかに帰刃という切り札を使つたとはいえ、死神に換算すればもとは第五席程度の霊圧しか感じないほどなのだ。隙を見てこうするのも吉良には容易いことだった。

海王 鋏

ハサミから縦横無尽に高圧水流が襲い掛かる。吉良はそれさえも一刀で切り伏せた。初動の早い虚弾での牽制も、すでに意味を成さない。

「あまり悪あがきをするものじゃない」

二歩も進めば互いがぶつかる。それだけの距離になり、身を縮めるように屈んだ吉良が、抜き身の抜刀術で破面アランカルの首を狙った。

たとえ防がれても侘助ならば大きな隙を作れる。

ならばあとは、どうとでも出来るといふものだ。

「獲った——とでも思ったか？」

「——ッ!!」

その直前、フィンドールは仮面をみずから割っていた。

アフィナル
彫面

仮面を割ることで、みずからの戦闘能力を上昇させるフィンドールの能力だ。

霊圧だけならば副隊長格をしのぎ、隊長格にも達するだろう。以前まではそれに振り回されて十分な実力が発揮できないでいたが、ニルフィのしごきに耐えた結果、短時間ならばその欠点を補えるようになっていた。

まともに戦えば侘助には勝てない。能力が判明してからフィンドールはすぐさま理解した。

だからこそ、この時このタイミングで意表を突ける本当の切り札。

油断をした敵を仕留める絶好の機会を掴むことができた。

巨大なハサミが、牙をむく。



もつとも早く決着がついたのは西の柱でのポウと弓親の戦闘だった。

「このナルシスト、なんかまだチカラを隠してるポイかったガ……。死んでしまつてハ仕方ナイコト」

「だれが、死んだつて……? 勝手なことを——」

うめきながら弓親が起き上がろうとする。それをポウが大きな足で踏みつぶした。

「隠してるチカラ、見てみたい。だけど時間ナイ。もう付き合えない」

ポウは巨大な拳で崩れていく柱を眺めながら、動かなくなった弓親を蹴つ飛ばす。抵抗する力も残っていない。あまりにも淡々と進んだ戦いは、刀剣解放もせず当然のようにポウの勝利で終わった。

「転送された町が戻り始めたカ……」

塔周辺のめくりあがったコンクリートが真新しい路上へと変わっていく。これは『転送回帰』という現象で、塔を中心として本物の空座町が戻り始めているのだ。

しかし――。

「……ナニ!？」

ある一部分で変化が止まった。ポウの見ている先でも塔には肉芽のような物体が生まれて、ある種の生物のように再生していくではないか。



「おいおいおい、こりやどういうことだ!？」

ポウとほぼ同じタイミングで北塔を破壊したアビラマが狼狽える。

アビラマは考えるのが得意ではない。そのためフィンドールからは前もって塔の破壊のみに専念するように言い含められ、その後には束通り一角と戦うつもりでいたのだ。

結果は成功。一角の斬魄刀『鬼灯丸』では雨あられのようなデボラル・フルマ餓翼連砲を防ぐことができず、いとも簡単に柱は崩落する。その際に一角もろとも倒してしまい、思わず悪態をついていた時だ。ポウのいる西と同じように、柱が復活する兆しを見せて、レプリカの解除がほぼされずに終わった。

「思うようにいかなかったのが、そんなに不思議かい?」

「その羽織り……隊長格か!」

上空に浮かんだアビラマと視線が合わせるように、長い白髪の優男が立っていた。

アビラマは忘れていたが、前もって与えられた情報のなかにもこの男の情報があり、名は浮竹十四郎うきたけじゅうしゅう。護廷十三隊における十三番隊の長

である。

「随分とせせこましい真似をしやがるじゃねえか」

「ハハ、そう言われても仕方ないな」

朗らかに笑う浮竹の態度は、敵を前にしているものには思えない。「といつても、この結界を作成したのは護廷十三隊じゃなくてね。すでに君たち破面アラシカルと交戦して、その危険性を改めたらしいんだ。つまりは、予防策さ。ここら一带は『転送回帰』を留めるための緊急性の棒が地面に埋まってて、塔にも再生能力を施してあるんだ」

「あ、ン？ ならなんだ、ソイツはお前らが負けることも見越してたつてワケかよ」

「そうなるだろうね。先生は不機嫌だったけど、この結果を見ると正解だったわけだ」

フンと鼻を鳴らしたアビラマが眼光を鋭くする。

浮竹の言い方どおりならば、柱だけでなくここら一带の地面に至るまで、もろともに破壊し尽くさなければならぬということだ。

「……小細工しやがって、面倒な野郎どもだな」

面倒だが、やることに変わりは無い。破壊すべき対象がここらの土地も増えたというだけだ。レプリカから本物の空座町に戻すこと。バラガンがアビアマに与えた命令はつまるところそれなのだから。

「だったらどいてろ。オレの邪魔、すんじゃねえよ」

「悪いが、それはできない」

浮竹が腰に差した斬魄刀をスラリと抜いた。

「俺たちにも守るべきものがあるんだ。なにをそこまで急いでいるのか知らないが、知ったところで、それをさせないのが俺たちのすべき仕事だ」

そして手首を捻り、

「波なみ悉く我が盾となれ、雷いかづち悉く我が刃となれ『双魚理』」

一刀であったはずの斬魄刀は、刀身が逆十手状へと変わると、柄どうしが縄で繋がれた二刀一対の刀に変化する。縄には五枚の札が下げられ、上空の気流に気ままに揺らされていた。

「なんだ、二刀流か」

「ん？ ああ、二つになる斬魄刀は珍しいみたいだが、破面側そつちでもそうなのか？」

「さあな。二刀流つてのは珍しいが、こつちにや扇子とか斧があつたからなア」

「なるほど興味深いな。始解じゃなくても刀じゃない形状もあるのか」

久方ぶりに会った友人のような穏やかな会話だ。

それが維持されたまま、言葉が交わされる。

「オレにはやることがあるんでな。特別に見逃してやる。ここから去るってんなら、追いかけておいてやるよ」

「すまない……それは出来ないんだ。逆に、君がここから立ち退いてくれないか？ そうすれば戦わずに済む。余計な血が流れることは、俺としても本意じゃない」

「馬鹿言うんじゃないよ。そんなの、かつこ悪いじゃねえか」

「……かつこ悪い、か」

「ああ。尻尾巻いて逃げる姿なんざ、怖くてアイツには見せられねえ。……とんだバケモノでもよ、それが嫌だったからカツコちまったみたいでな。それを知っちゃったらオレが逃げられるかってんだ」

「戦士のように勇ましいな、君は」

「戦士だからよ。まア、ここで逃げたら陛下に殺されちまうのが怖いってのもあるがな」

「ハハ、そうなのか」

「そうなんだよ」

「……………」

「……………」

「最後だ、ここから去ってくれ」

「——断る!!」

吼えたアビラマが胸に親指を刺すと、描かれた仮面紋フェイスティグマをなぞるように抉っていく。

デボラル・エルゲンオン
噴血 餓相

変化は顕著だった。大翼が二枚増えて四枚になり、また、装着して

いる仮面がよりシャープな形状になり、模様も変わる。これがアピラマの、大空を舞う戦士としての姿だった。

浮竹は目を細めながら、太陽を背にして飛翔するアピラマに言った。

「戦う術を持たない子供ならともかく、戦士として相手をするなら相応の結果を与えてしまうことになる。だけど、君には、待ってる誰かがいるんじゃないか？」

動揺は一瞬。アピラマは鳥人らしくというべきか、けたたましい甲高い声で笑い飛ばした。

「おいおいおい、うぬぼれすぎだぜ死神イ！ どうしてまだ戦つてもねえのにオレが負ける話になつてんだよ!? こちとら格上と戦^ヤるのは慣れてんだ、んなこと言つてる暇があるなら手前の心配でもしてやがれ！」

そもそも目的を達さねば、また会えるのかすら判らないのだ。

もはやアピラマの取る選択肢は目の前にある一つしかなかった。

「ああ、ああ、ああ。殴^ヤつてやる、蹴^ヤつてやる、殺^ヤつてやるぜ。友^ダ達の^チためなら、いくらでもよオ……!!」

腰帯にある折り紙の造花を爪先でなぞると、立ちふさがる巨大な壁へと突貫した。



弾かれたようにバラガンが空を見上げた。快晴とは言えぬために視界にはたくさんの雲が映り、その上にある世界をけして見せることはない。

「……アピラマ。あの、たわけが」

それ以上の言葉は喉奥でつぶれてしまい、声になることはなかった。

「陛下」

「よい」

気遣うように声をかけてきた部下を制し、底冷えした王の意識を浮上させる。

四柱での戦闘は破面アランカルに天秤が傾き、護衛を任された不甲斐ない盾たちのために死神の主力も動き出した。次に動くのは——自分たちだ。

「スターク、ハリベル」

玉座に座したまま、同じ最上級大虚ヴァストローデの仲間を呼ぶ。

同僚たちは不満を言うことなくそれに応えた。

「……あいよ」

「そろそろだと思っていた頃だ」

控えていた従属官フラシオンが一人もたたらを踏まなかったことが奇跡だ。大海のような彼らの霊圧が静かに重く鳴動し、腹のなかを緩やかに揺らしていく。

「つまらん小細工に、取るに足らん死神ども。貴様らがそんな有象無象に労力をかけるとは思つたらん。——潰せ。一匹の蟻も逃がすな」
肩を落としたのはスタークだ。

「やっぱそうなっちゃうか。……で、俺の相手はあんたらってところかい？」

彼の気怠そうな目線の先には、少年と美女のコンビが立ちふさがっている。少年の羽織の背には『十』の数字。十番隊の隊長と副隊長、日番谷冬獅郎と松本乱菊だ。

「なら、私はこちらか」

ハリベルの前に現れたのは小柄な女だった。羽織に描かれた数字は『二』。彼女の名は、碎蜂ソイフオン。二番隊隊長にして隠密機動総司令官、隠密機動第一分隊「刑軍」総括軍団長と様々な肩書きがその小さな背に乗っている。

「……陛下」

「お前たちは他の従属官フラシオンの援護に行け。儂は……あそこの羽虫を落としておく」

『八』の数字を女物の着物で隠した、派手な格好の男がいた。京楽春水キョウラクハルスイ。一見して飄々とした性格のにじみ出た容姿だが、実力と気性ともに隊長を任せられるに足る死神だ。

「——ようやく、本番だ」

戦いはまだ、スタートを切ったばかりだ。